

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第163集

二之宮宮下東遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

二之宮宮下東遺跡正誤表

頁	行	誤	正
305	第301図キャプション	A s - B 下溝群	A s - B 下水田下溝群
306	第302図キャプション	A s - B 下溝群	A s - B 下水田下溝群
308	第303図キャプション	A s - B 下溝群	A s - B 下水田下溝群
309	第304図キャプション	A s - B 下溝群	A s - B 下水田下溝群
310	第305図キャプション	A s - B 下溝群	A s - B 下水田下溝群
412	図 1	210図 104	210図 104
		287図 27	289図 27
		173図 3	169図 3
		173図 6	169図 6
		169図 13	170図 13
		169図 8	170図 8
414	24	210図 104	201図 104
415	41	173図 3	169図 3
	59	173図 6	169図 6

文化財
 目保管
 No. 0693 平成10年 5月11日

01-330
 29
 (5)

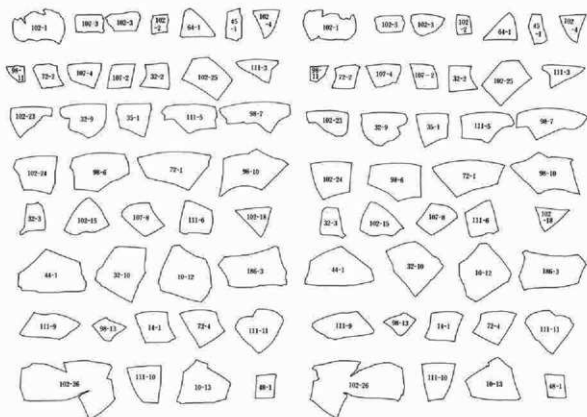
財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第163集

に の み や み や し た ひ が し
二之宮宮下東遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

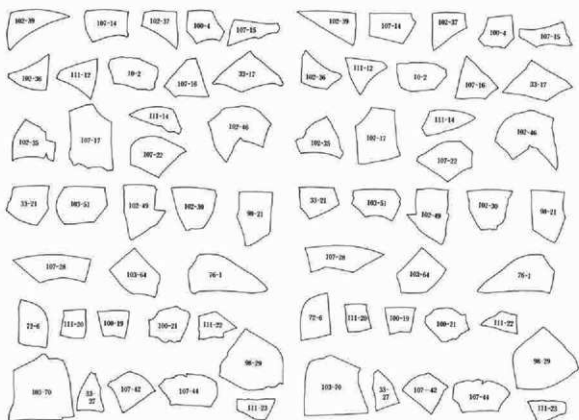
1994

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財群馬県埋蔵文化財調査事業団



中国磁器（白磁類）外面

同左内面



中国磁器（青磁類）外面

同左内面



中国磁器(白磁類)外面



中国磁器(白磁類)内面



中国磁器(青磁類)外面



中国磁器(青磁類)内面



渥美窯壺(第104図83)



知多窯山茶碗(第15図10)



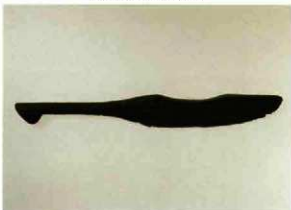
則天文字墨書土器(第199図49、第212図317)



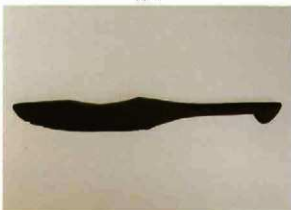
木製鞍橋(第244図1)



同左



不明木製品(第245図7)



同左



図1の1 第224図469 内面 2.5×

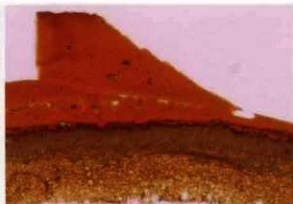


図1の2 第224図469 漆層断面 125×

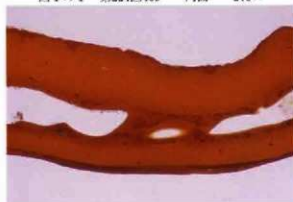


図1の3 第224図469 漆層断面 63×

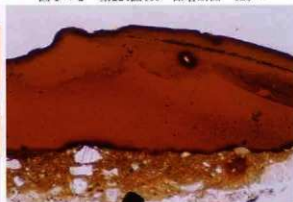


図1の4 第224図465 漆層断面 125×



図1の5 第224図463 内面 2.5×



図1の6 第224図463 漆層断面 125×

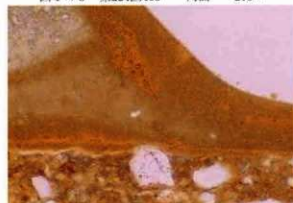


図1の7 第224図463 漆層断面 250×



図1の8 第224図463 漆層断面 625×



図2の1 第223図462 内面 2.5×



図2の2 第223図462 塗層断面 250×

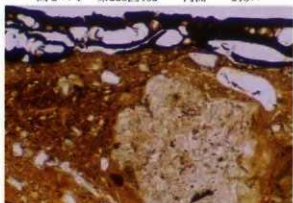


図2の3 第223図462 塗層断面 250×



図2の4 第223図462 内面 2.5×



図2の5 不掲載 459 外面 2.5×

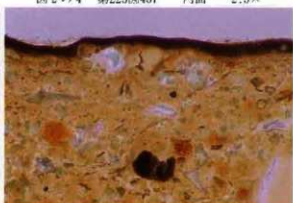


図2の6 不掲載 459 層断面 625×

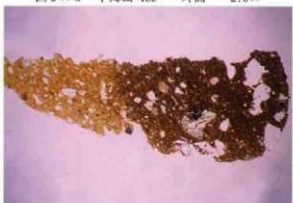


図2の7 第224図468 胎土断面 30×

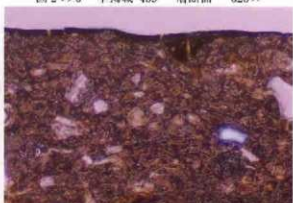


図2の8 第224図468 層断面 250×

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団によりおこなわれています。

本書は、昭和62年9月より昭和63年3月にかけて発掘調査をしました前橋市二之宮町所在の縄文時代から中世にかけての複合遺跡である二之宮宮下東遺跡の報告書です。本書には東西の台地にはさまれた谷地から出土した古墳時代の鞍・下駄・丸木弓等2,000点をこす木製品と8世紀後半の多量の則天文字の墨書土器等貴重な資料が報告されています。特に中世の館から大量に出土した12世紀後半から13世紀前半にかけての中世遺物は、今までこの時期の遺物がまとまって出土した例がなく、この時期の遺物を研究する上で極めて貴重な資料との評価があります。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序といたします。

平成6年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、一般国道17号線（上武道路）建設工事に伴い事前調査された二之宮宮下東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は前橋市二之宮町字宮下東に所在する。
3. 発掘調査と整理事業は、建設省関東地方建設局から群馬県教育委員会が受託した事業であり、更にこれを財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受けて実施したものである。
4. 発掘調査と整理事業の実施期間と体制は以下のとおりである。

発掘調査 昭和62年9月1日～昭和63年3月31日

常務理事：白石保三郎

事務局長：井上唯雄

調査研究部長：上原啓巳

管理部長：田口紀雄

調査研究部第2課長：桜場一寿

庶務課長：定方隆史

調査担当：藤巻幸男、大西雅広、樋口伸男

事務担当：園定均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、
今井もと子、松井美智子、大澤美佐保、大島敬子

整理事業 平成3年7月1日～平成5年3月31日

常務理事：邊見長雄

事務局長：松本浩一（平成3年度）、近藤功（平成4年度）

調査研究部長：神保佑史

管理部長：佐藤勉

調査研究部第2課長：能登健

庶務課長：斎藤俊一

事務担当：園定均、笠原秀樹、須田朋子、柳岡良宏、船津茂、高橋定義、
松下登、吉田恵子、角田みずほ、松井美智代、塩浦ひろみ

整理担当：大西雅広

坂庭常磐、皆川正枝、串瀬すみ江、小淵トモコ、岡田美知江、
小久保ヒロミ、小林幸枝、高橋早苗

木製品実測など：高橋真樹子、五十嵐由美子、鈴木加津枝、小池縁

遺物機械実測：長沼久美子、佐子昭子、尾田正子、千代谷和子、戸神晴美

遺物写真：佐藤元彦

保存処理：関邦一、小村浩一、

5. 本書の編集は大西が行い、執筆分担は以下のとおりである。

藤巻幸男：縄文・弥生土器、縄文・弥生時代石器

高島英之：二之宮宮下東遺跡出土の墨書土器について

大西雅広：上記以外

6. ウリ科植物遺体の鑑定については、元大阪府立大学農学部教授藤下典之氏に、漆附着土器については国立歴史民俗博物館助教授永嶋正春氏に、人・獣骨は群馬県立大間々高等学校教諭宮崎重男氏にお願いし、それぞれ玉稿を賜った。
7. 中国磁器については専修大学教授亀井明德氏に、木製品全般と整理の留意点については山田昌久氏にご教示いただいた。また、木製鞍橋については山田良三氏、中世焼締陶器については足立順二氏、飯村均氏、中野晴久氏、荒川正夫氏のご教示をいただいた。なお、編集者の力不足によりご教示をいただきながらも十分活かされなかつた点をご容赦願います。
8. 石材の同定は飯島静男氏に依頼した。
9. 調査中及び整理中に行った委託は以下のとおりである。
 - 花粉分析：株式会社バリノ・サーベイ
 - 遺構測量、住居跡及び全体図トレース：株式会社調研
 - 井戸掘削：原沢ボーリング株式会社
 - プラント・オパール分析：有限会社古環境研究所
 - 樹種同定、種実遺体：株式会社パレオ・ラボ
 - 遺跡空中写真撮影：青高館
 - 鉄滓分析：第四期地質研究所
10. 調査記録、出土遺物などの資料は、群馬県埋蔵文化財センターに保管し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理している。
11. 遺物一覧表に記した番号は、当事業団が使用している遺物管理台帳番号と一致する。なお、資料管理番号は、本書で使用した登録番号に、土器類はA 1-10、石器類はA 1-20、木製品はA 1-30、金属製品はA 1-40を冠して使用している。

凡 例

1. 遺構名称及び遺構番号は原則として発掘調査時に付したものを使用したが、整理時に変更したものがあ
る。なお、この際には、() 内に旧名称・旧番号を記載した。遺構番号は遺跡全体の通し番号となっ
ているが、欠番が存在する。

2. 遺構、遺物の縮尺は原則として以下のとおりとし、スケールで示した。また、遺物については、混乱の
生じやすい部分についてスケール下に遺物番号を記載した。

遺構 竪穴住居：1/80、土坑：1/60、墓：1/10

遺物 土器・陶磁器：1/3、大型土器・石製品：1/4、大型石製品：1/6、縄文時代石器：1/3

3. 遺物写真の縮尺は実測図に近づけた。

4. 遺構実測図内の方位記号は座標北を示し、遺構主軸方位も座標北を基準として計測した。

5. 遺物実測図の番号と遺物写真番号は一致させた。

6. 遺物観察表の登録番号と樹種同定用プレパレート番号は、本事業団における資料管理のための登録番号
である。

7. 本報告書内で使用したテプラの略称は以下のとおりである。

浅間B軽石：As-B、標名二ツ岳火山灰：Hr-FA、浅間C軽石：As-C

8. 本文中で使用した中国磁器の分類名は、以下の文献によった。

白磁：山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年—太宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究No.8』1988

白磁：森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982

青磁：森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

9. 本文中で使用した焼締陶器製作地のうち「瀬美窯」については、編集者の力不足により「瀬美湖西」に
代表される静岡県内の製品との区別は不十分である。

10. 本文や遺物一覧表で使用した中世在地製品の胎土は、以下のとおりである。

内耳鉢・焙烙 1：最も個体数が多い胎土である。すり鉢の胎土4と同様である。

2：すり鉢の胎土2と同様である。比重は軽い。

3：すり鉢の胎土5と同様である。比重は軽い。

4：胎土はやや緻密であるが、白色鉱物を多く含む。ベンガラ様の赤色土粒を少量含む。

5：胎土はやや緻密であるが、白色鉱物を含む。鉱物の粒径は4に比して小さい。

6：胎土はやや粗く、白色鉱物と光沢のある黒色鉱物を少量含む。ベンガラ様赤色土
粒を含む。焼成の点でも断面中央に黒灰色部分が生じるという共通点がある。

7：カワラケの胎土1に近似的。数量は1点のみである。

8：胎土は緻密であるが、粒径のやや大きい白色・黒色鉱物を多く含む。ベンガラ様赤
色土粒を微量含む。7同様1個体のみである。

す り 鉢 1：胎土は緻密で雲母片岩状の光沢を有する微小鉱物を多量に含む。また、個体によ
っては片岩礫を含む。いわゆる白色針状鉱物を微量含む、白色・黒色鉱物の含有は少
ない。

2：1に比してわずかに粗い感を受ける。片岩に由来すると思われる光沢を有する微小

鉱物を含まず、白色鉱物がやや目立つ。ベンガラ様赤色土粒の小粒を少量含む。

- 3：白色鉱物粒を多く含み、ベンガラ様赤色土粒を多く含む。2に比して胎土はやや粗く、不明瞭であるが、いわゆる白色針状鉱物を微量含む。
- 4：1に比してやや粗い。他は1と同様である。
- 5：胎土は最も粗く、白色鉱物粒、ベンガラ様赤色土粒も多く含む。白色鉱物の含有量は最も多い。
- 6：胎土は緻密であるが、白色・黒色鉱物を含む。ベンガラ様赤色土粒は、部分的に縞状をなす。胎土中で褐色を呈する部分内に灰白色部分が縞状に認められる。
- 7：胎土はやや粗く、白色・黒色鉱物を含む。クリーム色の粘土粒を少量含む。

カワラケ

- 1：胎土はやや粗く、断面に気孔と鉱物粒が目立つ。また、胎土中に直径1mmから4mmのシルト状の粒を含むが、この量や直径は個体差が多い。器表も全体にざらついた感じを有し、他との区別は容易である。
- 2：胎土は最も緻密で、色調も最も肌色に近い。色調の関係からか、白色鉱物は目立たず、黒色鉱物が多い。また、赤褐色土粒も含む。
- 3：土そのものは粗くないが、鉱物を多く含有する。これらのうち黒色鉱物は、きらきら光る角閃石状のものが多い。
- 4：2に比して鉱物を多く含有するが、角閃石状の鉱物を含まない点が3と異なる。2との区別がつきにくい個体も存在する。
- 5：胎土はやや粗く3に近いが、鉱物粒が直径1mmから3mmと大粒のものを多く含む。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	
報告書抄録	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2節 調査成果の概要	5
第3章 検出された遺構と遺物	8
第1節 As-B降下以降の遺構と遺物	8
1. 中世居館を区画する堀	8
2. 堀区画内の溝	24
3. 堀区画外南側の溝	31
4. 堀区画外東側の溝	32
5. 竪穴状遺構	39
6. 土坑	45
7. 墓	75
8. 井戸	79
9. 3区谷地の遺構と遺物	106
10. 遺構外出土遺物	122
第2節 As-B降下以前の遺構と遺物	133
1. 竪穴住居	133
2. 墓	178
3. 井戸	179
4. 3区As-B下水田	185
5. 3区平安時代の遺物包含層(13・14層)	188
6. 3区奈良・平安時代の遺構と遺物(15層)	189
7. 3区古墳時代後期の遺構と遺物(16層)	221
8. 3区Hr-F A下の遺構と遺物	223

9. 3区As-C下の遺構と遺物	223
10. 3区As-C下砂層下の遺構と遺物	223
11. 3区出土木製品	242
12. 遺構出土遺物追補	291
13. 2～4区遺構外出土遺物	292
14. 5区基本土層	300
15. 5区第1氾濫層下水田	300
16. 5区As-B下水田	302
17. 5区As-B下水田下溝群	306
18. 5区旧河道	307
19. 5区第2氾濫層下出土遺物	312
20. 5区第3氾濫層下水田	312
21. 5区第4氾濫層下水田	315
22. 5区第6氾濫層下水田	317
23. 5区遺構外出土遺物	317
第3節 弥生・縄文時代の遺物	318
第4章 自然科学分析	324
1. 二之宮宮下東遺跡より出土したウリ科植物の遺体	324
2. 歯と骨について	327
3. プラントオパール分析	331
4. 花粉分析	340
5. 材の樹種同定、大型植物遺体同定、昆虫同定	350
6. 鉱石の化学分析	404
7. 鉄滓のX線回折	406
第5章 考察	408
1. 漆関係資料について	408
2. 二之宮宮下東遺跡出土の墨書土器—則天文字を中心として—	411
まとめ	424

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	第 57 図	土坑出土遺物 (4)
第 2 図	調査区設定図	第 58 図	1・4号基実洞図・出土遺物 (1)
第 3 図	グリッド設定図	第 59 図	1・4号基出土遺物 (2)
第 4 図	周辺の遺跡	第 60 図	2号基実洞図・出土遺物
第 5 図	周辺の遺跡	第 61 図	3号基実洞図・出土遺物
第 6 図	2区で検出された主な遺構	第 62 図	5号基実洞図・出土遺物
第 7 図	1・8・9・79・82～85号溝平面図	第 63 図	1・2号井戸実洞図
第 8 図	1・8・9号溝断面図	第 64 図	2号井戸出土遺物
第 9 図	8・9・89・90号溝実洞図	第 65 図	3号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 10 図	1号溝出土遺物 (1)	第 66 図	3号井戸出土遺物 (2)
第 11 図	1号溝出土遺物 (2)	第 67 図	4・42号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 12 図	1号溝出土遺物 (3)	第 68 図	4号井戸出土遺物 (2)
第 13 図	79号溝出土遺物	第 69 図	4号井戸出土遺物 (3)
第 14 図	8号溝出土遺物 (1)	第 70 図	5・6号井戸実洞図・出土遺物
第 15 図	8号溝出土遺物 (2)	第 71 図	7・14・46号井戸実洞図
第 16 図	8号溝出土遺物 (3)	第 72 図	9号井戸実洞図・出土遺物
第 17 図	89号溝出土遺物 (1)	第 73 図	8・13・15・41号井戸実洞図・出土遺物
第 18 図	89号溝出土遺物 (2)	第 74 図	15・41号井戸断面図・出土遺物
第 19 図	90号溝出土遺物 (1)	第 75 図	16・17号井戸実洞図
第 20 図	90号溝出土遺物 (2)	第 76 図	19・20・26号井戸実洞図・出土遺物
第 21 図	90号溝出土遺物 (3)	第 77 図	21・36号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 22 図	83・84号溝出土遺物	第 78 図	21号井戸出土遺物 (2)
第 23 図	2・3・4・6・7号溝実洞図	第 79 図	21号井戸出土遺物 (3)
第 24 図	5号溝実洞図	第 80 図	21号井戸出土遺物 (4)
第 25 図	2・3・4・6号溝出土遺物	第 81 図	21号井戸出土遺物 (5)
第 26 図	5号溝出土遺物 (1)	第 82 図	21号井戸出土遺物 (6)
第 27 図	5号溝出土遺物 (2)	第 83 図	22・23号井戸実洞図
第 28 図	5号溝出土遺物 (3)	第 84 図	23号井戸出土遺物
第 29 図	76・77・87・88号溝実洞図	第 85 図	24号井戸実洞図
第 30 図	77・87号溝出土遺物	第 86 図	25号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 31 図	25～32・34・73号溝実洞図	第 87 図	25号井戸出土遺物 (2)
第 32 図	27・30・32・34号溝出土遺物 (1)	第 88 図	27・28・29・35号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 33 図	27・30～32・34号溝出土遺物 (2)	第 89 図	27・28・29号井戸出土遺物 (2)
第 34 図	27・31・32号溝出土遺物 (3)	第 90 図	30・31号井戸実洞図・出土遺物
第 35 図	64・67～71・74号溝実洞図・出土遺物	第 91 図	32・43号井戸実洞図・出土遺物 (1)
第 36 図	16号土坑実洞図・出土遺物	第 92 図	32・43号井戸出土遺物 (2)
第 37 図	74号土坑実洞図・出土遺物	第 93 図	33・34号井戸実洞図
第 38 図	81号土坑実洞図・出土遺物	第 94 図	37～39・44・46・47号井戸実洞図・出土遺物
第 39 図	133号土坑実洞図・出土遺物	第 95 図	51・52号井戸出土遺物
第 40 図	145号土坑実洞図・出土遺物	第 96 図	3区中世基実洞図
第 41 図	146号土坑実洞図	第 97 図	3区中世第1水田実洞図
第 42 図	153・154号土坑実洞図・出土遺物	第 98 図	3区中世第1水田出土遺物
第 43 図	159号土坑実洞図	第 99 図	3区中世第2水田実洞図
第 44 図	160・161・235号土坑実洞図・出土遺物	第100 図	3区中世第2水田出土遺物
第 45 図	206号土坑実洞図・出土遺物	第101 図	3区As-B上遺物包含層実洞図
第 46 図	1・21・30号土坑実洞図・出土遺物	第102 図	3区As-B上遺物包含層出土遺物 (1)
第 47 図	64・92・104・108・109号土坑実洞図・出土遺物	第103 図	3区As-B上遺物包含層出土遺物 (2)
第 48 図	120・121・122・123・124・125・126・127・134号土坑実洞図・出土遺物	第104 図	3区As-B上遺物包含層出土遺物 (3)
第 49 図	138・144・156・176・180号土坑実洞図・出土遺物	第105 図	3区As-B上遺物包含層出土遺物 (4)
第 50 図	211・212・215号土坑実洞図・出土遺物	第106 図	1区遺構外出土遺物
第 51 図	213・214・222～224号土坑実洞図・出土遺物	第107 図	2区遺構外出土遺物 (1)
第 52 図	222・223・209・240・241・243・261・275・276号土坑実洞図・出土遺物	第108 図	2区遺構外出土遺物 (2)
第 53 図	288・289号土坑実洞図・出土遺物	第109 図	2区遺構外出土遺物 (3)
第 54 図	6・11・12・26・67・73・84・123・132・147・309・345号土坑実洞図・出土遺物 (1)	第110 図	2区遺構外出土遺物 (4)
第 55 図	土坑出土遺物 (2)	第111 図	3区表土出土遺物
第 56 図	土坑出土遺物 (3)	第112 図	4区遺構外出土遺物
		第113 図	5区表土出土遺物
		第114 図	1号住居断面実洞図
		第115 図	2号住居断面実洞図・出土遺物 (1)

第116回	2号住居出土遺物 (2)	第178回	51号住居実例図
第117回	3号住居実例図・出土遺物	第179回	52号住居実例図・出土遺物 (1)
第118回	4・5号住居実例図	第180回	52号住居出土遺物 (2)
第119回	6号住居実例図・出土遺物	第181回	53号住居実例図・出土遺物 (1)
第120回	7号住居実例図・出土遺物	第182回	53号住居出土遺物 (2)
第121回	8号住居出土遺物	第183回	6号墓実例図・出土遺物
第122回	8・9号住居実例図	第184回	10・11号井戸実例図
第123回	10号住居実例図・出土遺物	第185回	10号井戸出土遺物
第124回	11号住居実例図・出土遺物 (1)	第186回	12号井戸実例図・出土遺物 (1)
第125回	11号住居出土遺物 (2)	第187回	12号井戸出土遺物 (2)
第126回	12号住居実例図・出土遺物	第188回	12号井戸出土遺物 (3)
第127回	13号住居実例図・出土遺物 (1)	第189回	12号井戸出土遺物 (4)
第128回	13号住居出土遺物 (2)	第190回	40号井戸実例図
第129回	14号住居出土遺物 (1)	第191回	40号井戸出土遺物
第130回	14号住居実例図・出土遺物 (2)	第192回	3区谷地基本土層
第131回	15号住居実例図・出土遺物	第193回	3区As-B下水面
第132回	16号住居実例図・出土遺物	第194回	13・14層出土遺物 (1)
第133回	17号住居実例図・出土遺物	第195回	14層出土遺物 (2)
第134回	18号住居実例図・出土遺物	第196回	14層出土遺物 (3)
第135回	19号住居実例図・出土遺物	第197回	3区奈良・平安時代包舎新断面
第136回	20号住居実例図・出土遺物	第198回	3区15層出土遺物 (1)
第137回	21号住居実例図	第199回	3区15層出土遺物 (2)
第138回	22号住居実例図・出土遺物	第200回	3区15層出土遺物 (3)
第139回	23号住居実例図・出土遺物 (1)	第201回	3区15層出土遺物 (4)
第140回	23号住居出土遺物 (2)	第202回	3区15層出土遺物 (5)
第141回	24号住居実例図・出土遺物	第203回	3区15層出土遺物 (6)
第142回	25・32号住居実例図・出土遺物 (1)	第204回	3区15層出土遺物 (7)
第143回	25・32号住居実例図・出土遺物 (2)	第205回	3区15層出土遺物 (8)
第144回	25・32号住居出土遺物 (3)	第206回	3区15層出土遺物 (9)
第145回	25・32号住居出土遺物 (4)	第207回	3区15層出土遺物 (0)
第146回	26号住居実例図・出土遺物 (1)	第208回	3区15層出土遺物 00
第147回	26号住居実例図・出土遺物 (2)	第209回	3区15層出土遺物 01
第148回	27号住居実例図	第210回	3区15層出土遺物 02
第149回	28号住居実例図・出土遺物	第211回	3区15層出土遺物 03
第150回	29号住居実例図・出土遺物	第212回	3区15層出土遺物 04
第151回	30号住居出土遺物	第213回	3区15層出土遺物 05
第152回	30号住居実例図	第214回	3区15層出土遺物 06
第153回	31号住居実例図・出土遺物	第215回	3区15層出土遺物 07
第154回	49号住居実例図・出土遺物 (1)	第216回	3区15層出土遺物 08
第155回	31・49号住居掘形実例図・49号住居出土遺物 (2)	第217回	3区15層出土遺物 09
第156回	33・34号住居実例図・出土遺物	第218回	3区15層出土遺物 00
第157回	35号住居実例図・出土遺物	第219回	3区15層出土遺物 01
第158回	36号住居出土遺物	第220回	3区15層出土遺物 02
第159回	36号住居実例図	第221回	3区15層出土遺物 03
第160回	37号住居出土遺物 (1)	第222回	3区15層出土遺物 04
第161回	37号住居実例図・出土遺物 (2)	第223回	3区15層出土層付普土層 (1)
第162回	37号住居掘形実例図	第224回	3区15層出土層付普土層 (2)
第163回	38号住居出土遺物 (1)	第225回	3区古墳時代包舎層 (16層) セクション
第164回	38・50号住居実例図・出土遺物 (2)	第226回	3区16層出土遺物 (1)
第165回	39号住居実例図・出土遺物 (1)	第227回	3区16層出土遺物 (2)
第166回	39号住居出土遺物 (2)	第228回	3区16層出土遺物 (3)
第167回	40号住居実例図・出土遺物	第229回	3区16層出土遺物 (4)
第168回	41号住居実例図・出土遺物	第230回	3区16層出土遺物 (5)
第169回	42・45号住居実例図・出土遺物 (1)	第231回	3区16層出土遺物 (6)
第170回	42・45号住居出土遺物 (2)	第232回	3区16層出土遺物 (7)
第171回	43号住居実例図・出土遺物	第233回	3区16層出土遺物 (8)
第172回	44号住居実例図	第234回	3区16層出土遺物 (9)
第173回	44号住居出土遺物	第235回	3区16層出土遺物 00
第174回	46号住居実例図・出土遺物 (1)	第236回	3区16層出土遺物 01
第175回	46号住居出土遺物 (2)	第237回	3区16層出土遺物 02
第176回	47号住居実例図	第238回	3区16層出土遺物 03
第177回	51号住居出土遺物	第239回	3区16層出土遺物 04

第240回	3区16層出土遺物 09	第278回	3区出土木製品 00
第241回	3区Hr-FA下出土遺物 (1)	第279回	3区出土木製品 00
第242回	3区Hr-FA下出土遺物 (2)	第280回	3区出土木製品 00
第243回	3区Hr-FA下出土遺物 (3)	第281回	3区出土木製品 00
第244回	3区出土木製品 (1)	第282回	3区出土木製品 00
第245回	3区出土木製品 (2)	第283回	3区出土木製品 00
第246回	3区出土木製品 (3)	第284回	3区出土木製品 00
第247回	3区出土木製品 (4)	第285回	3区出土木製品 00
第248回	3区出土木製品 (5)	第286回	遺構出土遺物追補 (1)
第249回	3区出土木製品 (6)	第287回	遺構出土遺物追補 (2)
第250回	3区出土木製品 (7)	第288回	2区遺構外出土遺物 (1)
第251回	3区出土木製品 (8)	第289回	2区遺構外出土遺物 (2)
第252回	3区出土木製品 (9)	第290回	2区遺構外出土遺物 (3)
第253回	3区出土木製品 00	第291回	2区遺構外出土遺物 (4)
第254回	3区出土木製品 00	第292回	3区遺構外出土遺物 (1)
第255回	3区出土木製品 00	第293回	3区遺構外出土遺物 (2)
第256回	3区出土木製品 00	第294回	3区遺構外出土遺物 (3)
第257回	3区出土木製品 04	第295回	4区遺構外出土遺物
第258回	3区出土木製品 09	第296回	5区基本土層
第259回	3区出土木製品 06	第297回	5区第1祀墓層下水田、水口突頭区
第260回	3区出土木製品 07	第298回	5区第1祀墓層下水田出土遺物
第261回	3区出土木製品 08	第299回	5区As-B下水田エレベーション、水口突頭区
第262回	3区出土木製品 09	第300回	5区As-B下水田下湧群断面区 (1)
第263回	3区出土木製品 06	第301回	5区As-B下水田下湧群断面区 (2)
第264回	3区出土木製品 09	第302回	5区As-B下水田出土遺物
第265回	3区出土木製品 09	第303回	5区As-B下水田下湧群出土遺物 (1)
第266回	3区出土木製品 09	第304回	5区As-B下水田下湧群出土遺物 (2)
第267回	3区出土木製品 04	第305回	5区As-B下水田下湧群出土遺物 (3)
第268回	3区出土木製品 09	第306回	5区旧河道出土遺物 (1)
第269回	3区出土木製品 00	第307回	5区旧河道出土遺物 (2)
第270回	3区出土木製品 07	第308回	5区第2祀墓層下水田突頭区
第271回	3区出土木製品 00	第309回	5区第3祀墓層下水田突頭区
第272回	3区出土木製品 00	第310回	5区第3祀墓層下水田出土遺物
第273回	3区出土木製品 00	第311回	5区第4祀墓層下水田突頭区
第274回	3区出土木製品 00	第312回	5区第4祀墓層下水田出土遺物
第275回	3区出土木製品 00	第313回	5区第6祀墓層下水田突頭区
第276回	3区出土木製品 00	第314回	5区第6祀墓層下水田出土遺物
第277回	3区出土木製品 00	第315回	5区遺構外出土遺物
		第316回	遺構外出土弥生時代土器
		第317回	遺構外出土縄文時代土器
		第318回	遺構外出土縄文時代石器 (1)
		第319回	遺構外出土縄文時代石器 (2)
		第320回	遺構外出土縄文時代石器 (3)
付図 1	二之宮宮下東遺跡 中世遺構全体図		
付図 2	二之宮宮下東遺跡 住居位置図		
付図 3	二之宮宮下東遺跡 3区15層全体図		
付図 4	二之宮宮下東遺跡 3区16層遺物出土状態 (1回目)		
付図 5	二之宮宮下東遺跡 3区16層遺物出土状態 (2回目)		
付図 6	二之宮宮下東遺跡 3区Hr-FA下遺物出土状態		
付図 7	二之宮宮下東遺跡 3区As-C下遺物出土状態		
付図 8	二之宮宮下東遺跡 3区As-C下砂層下遺物出土状態		
付図 9	二之宮宮下東遺跡 5区As-B下水田		
付図 10	二之宮宮下東遺跡 5区As-B下水田下湧群		

図版目次

- PL-1
2区中世遺構全景(西より)
2区全景中世遺構(東より)
- PL-2
4区全景(南より)
4区全景(南東より)
- PL-3
2区1・2号溝(東より)
2区1・2号溝断面B-B'部分(南より)
2区1・2号溝断面C-C'部分(南より)
2区1号溝南段部分(東より)
2区1号溝南段部分(北より)
- PL-4
2区8・9号溝(南より)
2区8・9号溝断面B-B'部分(南より)
2区8・9号溝在地製すり鉢出土状態(南より)
- PL-5
2区79号溝(西より)
2区79号溝西部分近接(西より)
2区89・90号溝(南東より)
2区89・90号溝近接(中央の黒い丸は新しい井戸)
2区2〜5号溝(南より)
- PL-6
2区5号溝遺物出土状態(南より)
2区5号溝断面C-C'部分(南より)
2区東側台地縁辺2面目(南西より)
2区東側台地縁辺2面目近接(南より)
2区東側台地縁辺67〜71号溝(南西より)
- PL-7
2区70号溝(南西より)
2区71号溝(南西より)
2区16号土坑(東より)
2区16号土坑柱穴
2区16号土坑柱穴
2区74号土坑(南東より)
2区74号土坑遺物出土状態
2区81号土坑(南東より)
- PL-8
2区145号土坑(南東より)
2区200号土坑(南西より)
2区154号土坑(南西より)
2区153号土坑(南西より)
2区211・212号土坑(南西より)
2区222号土坑(南西より)
2区1号土坑(東より)
2区30号土坑(南より)
- PL-9
2区37・135号土坑(北西より)
2区42・50・51・52・53号土坑(南東より)
2区62・63・64号土坑(南東より)
2区180号土坑(南より)
2区123号土坑(南東より)
2区123号土坑炭化米出土状態
2区215号土坑(西より)
2区215号土坑遺物出土状態
- PL-10
2区223号土坑(南より)
2区245号土坑(南西より)
2区288・289・290号土坑(南西より)
- 2区288・289・290号土坑遺物出土状態
2区1号土坑墓(19号土坑、南西より)
2区1号土坑墓遺物出土状態
2区2号土坑墓(27号土坑、南西より)
2区2号土坑墓遺物出土状態
- PL-11
2区3号土坑墓(72号土坑、南より)
2区3号土坑墓遺物出土状態
2区4号土坑墓(178号土坑、南より)
2区4号土坑墓遺物出土状態
2区5号土坑墓(217号土坑、南西より)
2区5号土坑墓遺物出土状態
4区1号井戸
2区2号井戸
- PL-12
2区4号井戸
2区4号井戸遺物出土状態
2区4号井戸遺物出土状態
2区4号井戸遺物出土状態
2区5号井戸
2区6号井戸
2区7号井戸
2区8号井戸
- PL-13
2区13号井戸
2区20号井戸
2区21号井戸
2区22号井戸
2区23号井戸
2区25号井戸遺物出土状態
2区25号井戸遺物出土状態近接
2区25・45号井戸
- PL-14
2区26号井戸
2区27・28号井戸
2区29号井戸
2区30号井戸
2区35号井戸
2区36号井戸
2区37号井戸
2区38号井戸
- PL-15
2区39号井戸
2区42号井戸
3区中世溝(南より)
3区中世溝1水田(南より)
3区中世溝2水田(南より)
3区As-B上包合層(既鉄層、南より)
3区As-B上包合層(既鉄層下、南より)
3区As-B上包合層(既鉄層下、南西より)
- PL-16
4区1号住居礎形
4区2号住居礎形
4区3号住居
4区3号住居礎形
4区4号住居柱穴
4区5号住居柱穴
2区6号住居
2区7号住居

PL-17

- 2区8・9号住居
- 2区8・9号住居堀形
- 2区10号住居
- 2区11号住居
- 2区11号住居遺物出土状態
- 2区12号住居
- 2区12号住居堀形
- 2区13号住居堀形

PL-18

- 2区14号住居
- 2区14号住居遺物出土状態
- 2区14号住居遺物出土状態
- 2区14号住居堀形
- 2区15号住居
- 2区15号住居遺物出土状態
- 2区15号住居堀形
- 2区16号住居

PL-19

- 2区16号住居堀形
- 2区17号住居
- 2区18号住居
- 2区18号住居床面残存部分
- 2区18号住居貯蔵穴
- 2区19号住居
- 2区20号住居
- 2区20号住居遺物出土状態

PL-20

- 2区21号住居
- 2区21号住居床面硬化部分
- 2区22号住居
- 2区23号住居
- 2区23号住居遺物出土状態
- 2区23号住居堀形
- 2区24号住居
- 2区25・32号住居

PL-21

- 2区25・32号住居堀形
- 2区26号住居
- 2区26号住居堀形
- 2区27号住居
- 2区28号住居
- 2区28号住居遺物出土状態
- 2区29号住居
- 2区29号住居堀形

PL-22

- 2区30号住居
- 2区30号住居カマド埋道
- 2区30号住居堀形
- 2区31号住居
- 2区31号住居カマド付近遺物出土状態
- 2区49号住居
- 2区49号住居遺物出土状態
- 2区31・49号住居堀形

PL-23

- 2区33号住居
- 2区33・34号住居
- 2区33・34号住居堀形
- 2区35号住居
- 2区35号住居遺物出土状態
- 2区35号住居貯蔵穴？と周境状施設
- 2区37号住居

2区37号住居貯蔵穴付近遺物出土状態

PL-24

- 2区37号住居堀形
- 2区38号住居
- 2区39号住居
- 2区39号住居カマド付近遺物出土状態
- 2区40号住居
- 2区41号住居
- 2区41号住居遺物出土状態
- 2区42号住居

PL-25

- 2区43号住居（カマドのみ遺存）
- 2区44号住居
- 2区44号住居遺物出土状態
- 2区44号住居堀形
- 2区45号住居
- 2区46号住居
- 2区53号住居
- 2区53号住居遺物出土状態

PL-26

- 2区6号墓（181号土坑）
- 2区6号墓遺物出土状態
- 2区9号井戸
- 2区12号井戸
- 2区12号井戸底部（石敷）
- 2区12号井戸流出部
- 12号井戸の流出溝（81号溝）
- 2区40号井戸

PL-27

- 3区Aa-B下水田全景（南西より）
- 3区Aa-B下水田全景（南より）

PL-28

- 3区15号全景（東より）
- 3区15号全景（南西より）

PL-29

- 3区54～62号溝（南西より）
- 3区54～62号溝（南西より）
- 3区54～56号溝近接（南西より）
- 3区54～56号溝（南西より）
- 3区54号溝北部分近接（南西より）
- 3区54号溝北部分近接（南西より）
- 3区54・55号溝近接（南西より）
- 3区54・55号溝近接（南西より）

PL-30

- 3区57～59号溝（南より）
- 3区60～62号溝（南より）
- 3区15号遺物出土状態
- 3区15号遺物出土状態
- 3区16号南半遺物出土状態（南西より）

PL-31

- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層掘削出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態

PL-32

- 3区16層掘削出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態
- 3区16層F・G地点遺物出土状態

- 3区16層着明跡出土状態
3区16層A・B地点遺物出土状態
3区16層A・B遺物出土状態
3区16層A・B遺物出土状態
3区16層B地点杭出土状態
- PL-33
3区16層B地点杭出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点下駄、縄状製品出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
- PL-34
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点遺物出土状態
3区16層C地点下駄出土状態
3区16層D地点横輪出土状態
3区16層D地点遺物出土状態
3区16層D地点部片出土状態
3区16層D地点遺物出土状態
3区16層E地点遺物出土状態
- PL-35
3区16層G地点構築部材出土状態
3区16層J地点杭群出土状態
3区北平Hr-F A下遺物出土状態
3区F地点Hr-F A下遺物出土状態
3区Hr-F A下遺物出土状態
- PL-36
3区Hr-F A F F F地点遺物出土状態
3区Hr-F A F F地点遺物出土状態
3区Hr-F A F C・D地点遺物出土状態
3区Hr-F A F C地点遺物出土状態
3区Hr-F A F D地点遺物出土状態
- PL-37
3区Hr-F A F C地点木製輪出土状態
3区Hr-F A F C地点遺物出土状態
3区Hr-F A F D地点横輪出土状態
3区Hr-F A F E地点遺物出土状態
3区As-C上面C地点(南西より)
3区As-C上面C地点(南東より)
3区As-C上面D地点(南西より)
3区As-C上面D地点(東より)
- PL-38
3区北平As-C下(南西より)
3区As-C F A・F地点(南西より)
3区As-C F A・F地点近接(南西より)
3区As-C F A・F地点近接(北東より)
3区As-C F A地点近接(南より)
- PL-39
3区北平26層下(南西より)
3区26層下F地点遺物出土状態
3区26層下F地点遺物出土状態近接
3区26層下B地点遺物出土状態
3区26層下B地点遺物出土状態
- PL-40
5区第1区遺層下水田(東より)
5区As-B下水田(東より)
5区As-B下水田(西より)
5区As-B下水田西側近接(南より)
- PL-41
5区18~20号溝(南西より)
5区21号溝(南西より)
5区22号溝(南西より)
5区23号溝(南西より)
5区東端As-B下水田耕作土下溝群(南西より)
- PL-42
5区東端As-B下水田耕作土下溝群(南西より)
5区44号溝
5区44号溝沢内輪出土状態
5区47号溝(南東より)
5区47・49号溝合流部(北西より)
- PL-43
5区47・49号溝合流部(北西より)
5区48号溝(南東より)
5区48号溝近接
5区49号溝(南西より)
5区49号溝(南西より)
5区50号溝(東より)
5区51号溝(南西より)
5区52号溝(南より)
- PL-44
5区53号溝(南西より)
5区1号河道(南西より)
5区1号河道枕列(南西より)
5区1号河道枕列近接(南より)
5区第3区遺層下水田(南より)
5区第3区遺層下水田半足跡輪出土状態
5区第4区遺層下水田(東より)
- PL-45
5区第4区遺層下水田(西より)
5区第4区遺層下水田(西より)
5区第4区遺層下水田半足跡輪出土状態
5区第4区遺層下水田半足跡近接
5区第5区遺層下水田半足跡輪出土状態
5区第6区遺層下水田(東より)
5区第6区遺層下水田(西より)
5区第7区遺層下水田(東より)
- PL-46
4区縄文土器出土状態(南より)
4区縄文土器出土状態(南東より)
4区縄文1号土坑(南西より)
4区縄文1号土坑底部断面
4区縄文1号土坑底部断面
4区縄文2号土坑(南より)
- PL-47
1溝15 1溝37 1溝41 1溝38 1溝40 8溝12
8溝11 8溝27 8溝18 8溝22 8溝29 8溝24
- PL-48
8溝26 90溝10 90溝11 90溝17 90溝19 90溝2
90溝18 5溝22 5溝23 5溝24 5溝27 5溝26
5溝28
- PL-49
5溝31 27溝31 27溝29 34溝35 34溝39 32溝41
31溝44 16坑5 74坑6 153坑2 3基3
4基13~18近接 4基25 176坑1 180坑1 215坑2
- PL-50
92坑1 213坑1 222坑7 223坑8 289坑5 289坑3
288坑2
- PL-51
240坑1 354坑44 304坑77 338坑56 348坑76
313坑73 78・79坑72 278坑74 185坑75

3井3 3井7 4井15 4井2
P L -52

4井1 4井4 4井14 4井18 4井17 4井16
9井8

P L -53
16井1 21井7 21井8 21井9 21井10 21井16
21井22

P L -54
21井19 21井24 21井23 21井25 21井26 21井28
21井29

P L -55
21井30 21井31 21井35 21井32 21井34 23井4
23井5

P L -56
23井2 25井3 25井4 25井6 25井7

P L -57
25井5 25井8 25井9 25井10 25井2 25井11
28井4

P L -58
43井2 32井4 32井3 中1水36 中1水38
中2水23 中2水27 中2水25 As-B上81
As-B上74 As-B上76 As-B上75

P L -59
As-B上82 As-B上86 As-B上87 As-B上96
As-B上88 As-B上89 As-B上90 As-B上91
As-B上93 As-B上95 As-B上97 As-B上98
1表2 2表48 2表99 2表89
2表100 2表101 2表103 2表104 3表37 2表109
2表110 2表112 2表111 3表38

P L -60
3住7 10住2 10住1 11住2 11住1 11住3
11住4 11住5 13住7 13住8 13住9 14住3
14住4 14住5

P L -61
15住1 15住4 18住1 16住1 15住6 18住2
15住3 20住1 20住3 22住2 23住3 23住1
23住2 25住19 25住3 25住1 25住18

P L -62
32住28 32住29 26住2 28住1 30住1 30住2
49住13 49住11 39住6 39住11

P L -63
39住12 41住2 41住1 41住4 41住6 42住14
42住18 42住9 42住8 42住19 42住20

P L -64
43住1 44住6 44住10 44住11 52住10 52住15
53住1 50住9 50住10 46住6 50住14伊底倒脚
50住14伊底倒脚断面近接

P L -65
50住14 53住2 53住6 53住7 6基2 6基3
6基4 12井5 15井7 12井36 12井36近接

P L -66
12井33 13井3 14井61 14井58 14井57 14井62
15井15 15井20 15井23 15井35 15井46 14井47
15井8 15井11 15井49 15井50

P L -67
15井51 15井85 15井87 15井105 15井112 15井109
15井117 15井113 15井116 15井178 15井180
15井185 15井190 15井195 15井198

P L -68
15井192 15井196 15井197 15井200 15井203
15井211 15井226 15井227 15井237 15井277
15井284 15井290 15井280 15井302 15井310

15井315 15井316 15井317 15井318 15井319
15井321 15井322 15井323 15井327 15井328

P L -69
15井324 15井342 15井325 15井337 15井331
15井346 15井350 15井351 15井353 15井355
15井356

P L -70
15井364 15井370 15井397 15井398 15井373
15井379 15井400 15井401 15井402 15井376
15井377 15井399 15井403 15井404 15井405
15井407 15井380 15井387

P L -71
15井406 15井408 15井409 15井410 15井411
15井412 15井422 15井415 15井416 15井417
15井418 15井419 15井441 15井423 15井440
16井1 16井4 16井24 16井14 16井7 16井8
16井31 16井32 16井17 16井18 16井96 16井37

P L -72
16井47 16井55 16井57 16井66 16井58 16井73
16井77 16井79 16井81 16井83 16井86 16井88
16井98 16井90 16井92 16井96 16井111 16井128

P L -73
16井145 16井146 16井154 16井148 16井170
16井157 16井160 16井172 16井171 16井174

P L -74
16井175 16井178 16井207 16井208 16井189
16井190 16井210 16井211 16井212 16井196
16井199 16井213 16井214 16井205 16井225
16井221 16井217

P L -75
16井198 16井202 16井229 16井230 16井231
16井232 16井233 16井234 16井235 16井236
16井327 16井239 16井240 16井241 16井238
16井246 16井242 16井243 16井244 16井247
16井248 16井245 16井249 16井250 16井261

P L -76
16井254 16井253 16井255 16井260 16井256
Hr-F A F31 Hr-F A F13 Hr-F A F28
Hr-F A F32 Hr-F A F33 As-C F12

P L -77
3区1近接 3区3 3区4 3区5 3区6 3区9
3区10 3区11 3区13 3区7近接

P L -78
3区12 3区12紧脚底 3区14 3区15 3区17
3区17近接 3区17紧脚底

P L -79
3区16 3区18 3区19 3区22近接 3区22 3区21
3区21近接 3区24 3区23 3区23近接

P L -80
3区25 3区25近接 3区28 3区28近接 3区30
3区31 3区31近接 3区32 3区33 3区35 3区36
3区36近接 3区34

P L -81
3区38近接 3区38 3区29 3区36近接 3区37近接
3区37 3区37近接 3区40 3区40近接 3区45

P L -82
3区43 3区43近接 3区41 3区44 3区46
3区42 3区42近接

P L -83
3区47 3区48 3区48近接 3区49 3区53 3区52
3区51 3区51近接 3区57 3区57近接 3区50
3区56 3区54 3区55 3区62 3区60 3区60近接

3区61 3区63 3区63近接
P.L.-84
3区58 3区66 3区59 3区76 3区76近接 3区64
3区72 3区73近接 3区71 3区73 3区69 3区74
3区68 3区70 3区70近接

P.L.-85
3区65 3区67 3区78 3区78近接 3区77 3区81
3区75 3区82 3区80 3区79 3区85

P.L.-86
3区87 3区84 3区83 3区83近接 3区86 3区91
3区91近接

P.L.-87
3区90近接 3区90 3区93 3区89 3区88 3区94
3区96近接 3区96

P.L.-88
3区95 3区97 3区97近接 3区98 3区98近接
3区99近接 3区99

P.L.-89
3区100 3区100近接 3区101 3区102 3区104近接
3区104 3区103 3区103近接

P.L.-90
3区105 3区105近接 3区107 3区106近接 3区106
3区107近接

P.L.-91
3区108 3区108近接 3区109 3区109近接 3区110
3区110近接 3区111 3区111近接 3区116 3区113
3区112 3区112近接 3区118

P.L.-92
3区117 3区119 3区120 3区121 3区123
3区122 3区127 3区127近接

P.L.-93
3区124 3区125 3区128 3区130 3区129
3区132 3区136 3区133

P.L.-94
3区134 3区136 3区140 3区137 3区138
3区139 3区142 3区141 3区143

P.L.-95
3区145 3区152 3区146 3区149 3区147
3区151 3区153

P.L.-96
3区154 3区155 3区150 3区156 3区150近接
3区157 3区158 3区159

P.L.-97
3区160 3区169 3区168 3区174 3区163
3区170 3区166 3区173 3区164 3区161
3区171 3区165 3区178 3区175 3区162
3区176 3区167 3区177 3区184 3区181
3区179 3区186

P.L.-98
3区180 3区226 3区187 3区192 3区188
3区185 3区185近接 3区193 3区183 3区190
3区196 3区191 3区194 3区196 3区197
3区198 3区189

P.L.-99
3区200 3区206 3区201 3区202 3区204
3区205 3区209 3区210 3区212 3区211
3区213 3区207 3区208

P.L.-100
3区214 3区216 3区217 3区215 3区218
3区220 3区223 3区221 3区225 3区219
3区226 3区228 3区232 3区229 3区227

P.L.-101
3区230 3区236 3区235 3区234 3区238
3区237 3区240 3区242 3区247 3区246
3区246近接 3区245 3区245近接 3区239
3区248 3区243 3区243近接 3区244 3区244近接
3区233 3区233近接 3区231

P.L.-102
3区250 3区250近接 3区259 3区260 3区267
3区258 3区263 3区262 3区256 3区255

P.L.-102
3区253 3区253近接 3区254 3区254近接 3区266
3区266近接 3区249 3区249近接

P.L.-103
3区257 3区271 3区273 3区274 3区265
3区261 3区276 3区279 3区289 3区275
3区272 3区268 3区278

P.L.-104
3区280 3区280近接 3区277 3区282 3区282近接
3区285 3区285近接 3区284 3区287 3区286
3区270 3区283 3区281

P.L.-105
3区300 3区296 3区289 3区288 3区297
3区293 3区291 3区294 3区295 3区305
3区302 3区300 3区306 3区307 3区298

P.L.-106
3区292 3区317 3区315 3区310 3区311
3区290 3区308 3区312 3区309

P.L.-107
3区319 3区321 3区320 3区318 3区322
3区316 3区322近接 3区304

P.L.-108
3区325 3区324 3区308 3区308 3区308近接
3区306近接 3区306 3区327 3区330 3区323
3区331 3区329 3区332

P.L.-109
3区333 3区334 3区92近接 3区92 3区75近接
3区339 3区20 3区20近接 3区252近接 3区252

P.L.-110
37溝17 37溝36 2区遺構外13 2区遺構外12 44溝46
44溝47 49溝43 旧河道17 49溝42 49溝38 50溝37
50溝40 49溝39 49溝44 2区遺構5 3区遺構外49
旧河道15

P.L.-111
2区遺構外47 2区遺構外61 3区遺構外44
3区遺構外45 5区遺構外1 5区遺構外1近接
37溝41 4井4 2区遺構外60 3区遺構外50 4井2
3区遺構外47 21井9 2井1 3区遺構外48 馬面

P.L.-112
15層58明天文字「天」 15層253明天文字「天」
15層258明天文字「天」 15層252明天文字「天」
15層262明天文字「天」 15層260明天文字「天」
15層256明天文字「天」 15層57明天文字「天」
15層104明天文字「天」 15層105明天文字「天」
15層105瓦書 θ 12井21瓦書 θ 明天文字「天」
15層102瓦書 θ 明天文字「天」 15層218明天文字「天」
15層307明天文字「天」 15層116明天文字「天」
15層116「得方」

P.L.-113
15層87明天文字「天」 15層118明天文字「天」
15層46「神」 15層47「神」 15層113「正合」
15層51「正合」

PL-114

15層20「正合」 15層89「正合」 15層 5「正合」
 15層209「正合」 14層39「正合」 15層97「正合」
 12井18「正合」 15層117「得万」 15層101「得万」
 14層55「成」 5区遺構外1「成」 14層98「成」
 2区遺構外23「成」 2区遺構外23「成」

PL-115

12井22「矢」 15層107「大」 15層108「口」
 15層55「真玉」カ 5区遺構外27「口」 2区遺構外27
 「堀」

PL-116

17住1「人」 14住1「内」 旧河道6「乙」
 旧河道9「乙」 旧河道9「乙」 1祀水1「口」

報 告 書 抄 録

フリガナ	ニノミヤミヤシタヒガシイセキ
書名	二之宮宮下東遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第163集
編著者名	大西雅広 藤巻幸男 高島英之 永島正春 藤下典之 宮崎重男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	1994年3月26日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ニノミヤ 宮下東	群馬県 前橋市 ニノミヤ町 宮下東ほか	10-201		36°21'40"	139°11'28"	19870901 } 19880331	11,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二之宮 宮下東遺跡	集落 生産 など	古墳時代	包含層、竪穴住居 溝、など	木製品、土師器、須恵器	古墳時代の木製 鞍轡、下駄 則天文字「天」 の墨書
		奈良・ 平安時代	竪穴住居 水田、溝 溜井 包含層	土師器、須恵器、灰釉陶器 鉄製品、鉄銚、墨書土器 瓦	
	居館 など	中世	堀、竪穴状 遺構、井戸 土坑、墓 包含層	中国製磁器、山茶碗、渥美窯 製焼締陶器、知多窯製焼締陶 器、在地製軟質陶器、石塔、 石臼、貨幣、鉄製品、瓦	県下初の12～13 世紀のまとまっ た資料。 居館は14・15世 紀

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和46年建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、上武道路（国道17号バイパス）の建設計画を発表した。計画路線は、埼玉県熊谷市で国道17号と分岐し、利根川を渡河して群馬県に入り、新田郡尾島町・新田町、佐波郡境町・東村・赤堀町、伊勢崎市、前橋市、勢多郡富士見村を経て、前橋市田口町で再び国道17号に接続するものであった。この計画に伴い、国道が開通する地域の埋蔵文化財所在地を明らかにして、文化財保護と開発諸事業との調整をはかる資料を作成することを目的に、昭和45年度に分布調査¹⁾が実施された。分布調査は、上武道路建設希望路線を中心に幅2kmを調査対象として実施され、総数472件の埋蔵文化財が対象となった。昭和46年11月には正式路線の発表がなされ、昭和47年度には開通が急がれている尾島町から前橋市二之宮町の国道50号間の遺跡について協議が行われ、昭和48年4月1日付けで「一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」²⁾が締結された。これに基づき、昭和49年から1班で発掘調査が実施された。

昭和53年には、増大する埋蔵文化財の調査・活用などに対するため、県教育委員会は財団法人群馬県埋蔵文化調査事業団を設立し、以降上武道路に伴う調査も本事業団が実施してきた。その間、工事の進捗に対応して昭和59年度からは3班、昭和60年度からは4班集体とし、昭和63年度には国道50号線までの調査を終了した。

二之宮宮下東遺跡は、昭和45年度の分布調査では確認されなかったが、昭和59年度事業として行った試掘調査の結果、沖積地ではAs-B下に水田跡が確認され、Hr-F A及びAs-Cは漏水のため確認できなかったが本調査時に確認の必要があること。台地では古墳時代から平安時代の住居跡、溝などが確認された。この結果、十二天橋の架かる小河川の西から二之宮赤城神社から南に延びる市道二之宮1号線の間、11,000㎡が本調査対象地域とされた。遺跡名称は、調査区内の字名である「宮下東」に町名の「二之宮」を冠して「二之宮宮下東」遺跡とした。

注

1. 群馬県教育委員会 「上武道路地域埋蔵文化財分布調査報告書」 1971
2. 大江正行ほか 「歌舞伎遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 に記載がある。

第2節 調査の方法と経過

遺跡の存在する前橋市二之宮町は、前橋市街地の南東約8km、高崎市街地の東北東約15kmの赤城山山麓に位置している（第1図）。

遺跡は、二之宮赤城神社付近を谷地頭とする谷地と東の二之宮宮下東遺跡との間を流れる小河川によって形成された沖積地及びその間の二つの洪積台地と狭い谷地からなる。調査では、西側の台地を2区、中央の狭い谷地を3区、東側の台地を4区、東側の低地を5区とし、更に調査以前に西側の二之宮宮下西遺跡から続くと想定された谷地を1区とし、五つの調査区を設けた（第2図）。また、グリッドは4m方眼とし、1区

の北西（国土座標系第IX系：X＝+40,332.0m、Y＝-59,508.0m）を基準とし、国土座標に沿って設定した（第3図）。グリッドの呼称は、調査区が東西に長いことから、北西を起点として南北方向をアルファベットで、東西をアラビア数字で表記した。なお、グリッド呼称番号は、調査区に関係なく通して付した。

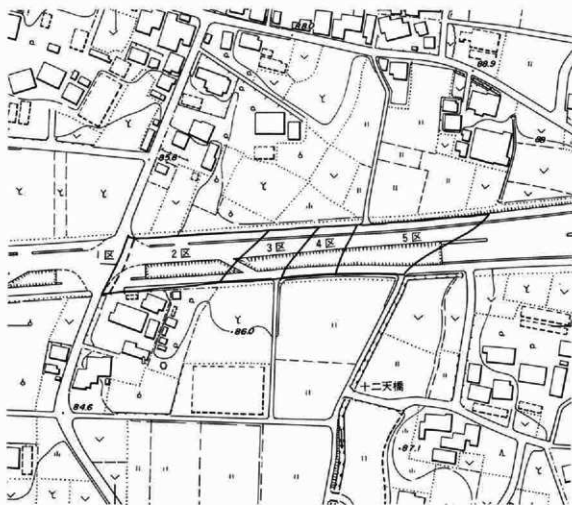
発掘調査は、2区と称した台地から開始し、遺構の残存状態や分布状態を把握することとした。その結果、中世を中心とする土坑、ピットが多数存在することが判明した。したがって、バックホーによる表土剥ぎは約10cmほどに止めた。2区の遺構分布状態がほぼ確認できた後、3区谷地の表土剥ぎに着手した。試掘では、As-B下水田が確認されていたが、台地全面に中世遺構が展開していることから谷地でも中世遺構（水田など）の確認から開始した。その後、2、3区の遺構平面図作成時には4区、5区の調査を行うというように文化層毎に区を移して調査を行った。台地部の旧石器試掘は、2×4mグリッドを4m間隔に設けて行った。また、工事工程との関係から5区東側のみ先行調査を行った。

遺構平面図は、住居、井戸、墓のみ個別図面を製作し、溝、土坑などは重複関係を把握したうえで1/20の割り付け図面を製作した。また、水田平面図は1/40の割り付けにより作成した。

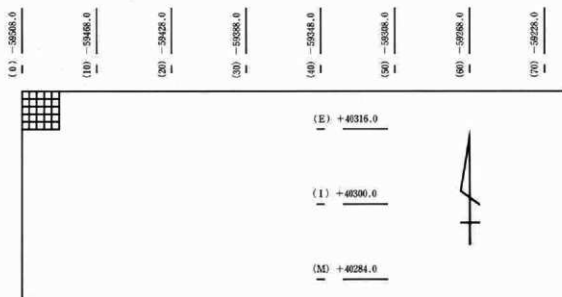
遺構写真撮影は、調査担当がこれを行い、モノクロ（35mm、6×9判）とカラーリバーサル（35mm）を使用した。なお、撮影にあたっては、35mmを常用し6×9判は全景写真にのみ使用した。



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行20万分の1地勢図「うつのみや」使用）



第2図 調査区設定図



第3図 グリッド設定図

第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

二之宮宮下東遺跡は、群馬県前橋市二之宮町宮下東に所在する。遺跡の所在する二之宮町は、県庁のある前橋市街地の東8km、伊勢崎市街地の北西6kmの位置(第1図)にあたる。この地区は広大な裾野地形を有する複合成層火山赤城山の南麓裾にあたり、付近一帯は赤城山の裾野と平野部との接線に近い(第4図)。裾野の末端は、遺跡の約1300m程南の旧利根川崖線により区切られている。したがって、周辺には傾斜の緩い低台地が広がり、この台地を小河川が樹枝状に開析している。基盤層は赤城山起源の泥流層で、地表面はいわゆるローム層を原形面とする台地と、いわゆるローム層の二次堆積である砂壤土の微高地の他は沖積地となっている。微高地は、土砂が河川沿いに流出し、流速の衰える山麓末端に堆積したもので、台地に接している場合が多い。また、裾野末端部は、赤城山に浸透した地下水が湧出する場所でもあり、湧水地を伴う小枝谷も付近に存在する。本遺跡は、赤城山裾野のいわゆるローム台地(2・4区)と小河川によって形成された低地(5区)、湧水地を伴うと推定される小枝谷(3区)に立地している。

この地域における弥生時代の遺跡は少なく、荒砥島原遺跡¹⁾などで後期の集落が確認されている程度である。この傾向は、古墳時代前期においても大きな変化はない。しかし、二之宮千足遺跡²⁾ではAs-C下に水田が営まれていた。後期になると集落は拡大し、荒砥島原遺跡、二之宮谷地遺跡³⁾、二之宮宮下西遺跡⁴⁾、荒砥天之宮遺跡⁵⁾などで確認されている。

奈良・平安時代では、荒砥洗橋遺跡⁶⁾、宮川遺跡⁷⁾、二之宮千足遺跡、荒砥島原遺跡、荒砥天之宮遺跡において水田が検出され、周辺の低地部が水田化されていたことを物語る。遺物では、本遺跡の約700m西に位置する二之宮洗橋遺跡⁶⁾の旧河道から「芳郷」の黒書土器、洗橋遺跡の約100m北に位置する荒砥洗橋遺跡からは、掘立柱建物が検出されると共に焼印が出土しており注目される。第5図には掲載していないが、先の二之宮洗橋遺跡の西に接して二之宮谷地遺跡が存在し、漆付着土器が少量出土している。後述するが、本遺跡においても同様な土器が出土しており、先の遺物を含め、この地域に存在する遺跡の特殊性を示すものとして重要であろう。集落に関しては更に拡大し、ほとんどの遺跡で確認されるようになっている。

本遺跡調査区の北約300mには、町名と深い関わりを有すると考えられる二之宮赤城神社が鎮座する。二之宮赤城神社の境内は、土塁と堀に囲まれており、遺存の良好な中世居館を思わせる。また、赤城神社の東400mの無量寿寺⁸⁾も地表観察から居館と推定されている。発掘調査によって確認された中世居館としては、本遺跡の東に接する二之宮宮東遺跡⁹⁾、西に接する二之宮宮下西遺跡があり、狭い範囲内に居館が集中している。また、これらの居館群の北側には、中世の幹線道路であるあずま道が東西に横断している。

注

1. 「荒砥島原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
2. 「二之宮千足遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
3. 「二之宮谷地遺跡」『年報』6・7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987・1988
4. 「二之宮宮下西遺跡」『年報』6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
5. 「荒砥天之宮遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
6. 「荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
7. 「宮川遺跡」群馬県教育委員会 1980
8. 「二之宮洗橋遺跡」『年報』6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
9. 「群馬県の中世城郭」群馬県教育委員会 1988
10. 「二之宮宮東遺跡」『年報』6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

第2節 調査成果の概要

1. 旧石器時代

2区と4区において、2×4mのグリッドを4m間隔で設定することを原則とし、試掘を行ったが石器は検出されなかった。

2. 縄文時代

遺構は、4区で陥穴と焼石土坑と考えられる土坑が各1基検出されたのみである。遺物の散布も少なく前期後半と中期後半の小破片が台地を中心に出土している。石器は、打製石斧、石鏃、剥片などが土器同様散在している。

3. 弥生時代

2区台地中央の中世土坑埋土中から、中期後半の土器が数点出土した。これらは、同一個体と考えられ、周辺での遺構の存在を推測させたが小破片が散在したのみであった。

4. 古墳時代

前期の集落はなく、3区の谷地(As-C下)から木製品と土器が少量出土したのみである。後期になると、竪穴住居が検出され、台地は集落域となる。3区では、Hr-FA上(16層)を中心に木製品が多量に出土している。木製品の中には、下駄、鞍橋、刀状木製品、竪杵、着柄鋤鎌をはじめとした農具が含まれている。その他には、石製模造品、手づくね土器、白玉が出土している。

5. 奈良・平安時代

古墳時代同様、台地は居住域であり竪穴住居が検出されている。3区では、谷地内に遺物包含層(15層)が確認され、多量の遺物が出土した。これらの中には、則天文字の「天」を記した墨書土器が含まれていた。遺構としては、2区東台地縁辺には濠井が地形に沿って並ぶと共に、東側では流水の痕跡が顕著に認められる溝群が検出され、下流域で水田経営が行われていたことを示している。15層の上層では、3区の谷地はかなり埋没し、As-B下では良好な水田が検出された。

5区では、Hr-FA上の洪水堆積層下から4面の水田が確認され、このうち3面から跡跡が検出された。これらの水田は、いずれも出土遺物がほとんどなく明確な時期決定はできない。また、5区東側台地縁辺には、溝群があり鬼瓦を含む古代瓦や灰釉浄瓶もしくは多口瓶の小口縁部分が出土している。

6. 中世

中世の遺構は、館部分(2区)に集中している。台地の東には、2条の平行する堀(1、8、9号溝)が地形に沿って延び、内側の堀は調査区南で内郭と外郭を分けると考えられる堀(79号溝)と直交する。また、2区南西では外郭を画すると考えられる堀(90号溝)の一部が確認され、内郭部分を中心に竪穴遺構、土坑が密集し、外郭部分を中心に井戸が分布する。また、東側台地縁辺の小さい溝群と3区谷地のAs-B上包含層からは、県内では類例のない12世紀後半から13世紀前半の中国製磁器と焼締陶器がまとめて出土した。更に、この包含層の上層では2面の水田と1面の畠を確認している。



第4図 調査区位置図 (国土地理院発行2.5万分の1地形図「大胡」を使用)



第5図 周辺の遺跡

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 台地上のAs-B降下以降の遺構と遺物

1. 中世居館を区画する堀

遺構 (第6図)

中世の堀は、台地の東を地形に沿って画する1・8・9号溝と1号溝から直角に折れ途中で終わる79号溝、調査区南西隅で一部検出された90号溝からなる。第6図には堀と井戸、竪穴と思われる土坑の分布を示した。この図から、79号溝(おそらく対になる溝が北東調査区外に存在するであろう。)で区画された北東部分には竪穴が多く存在し、南西部分には井戸が多く分布することがわかる。これは、79号溝が内郭と外郭を区画する堀であることを示している。

1号溝 (第7・8図、PL-3)

1号溝は、2区東側の傾斜変換線付近に開削され、後述する8・9号溝の内側に位置する。溝は地形に沿って幅2.7~3.5m、深さ1~1.2mを測り、79号溝付近で32cmの段差を有し(PL-3)、深さは約20cmと浅くなる。溝底の標高では段差部分を除いて南西が40cm低くなっている。しかし、溝中や底に、砂の堆積が認められないこと、南の段差部分で浅くなることから流水はなかったであろうと考えられる。加えて、溝底の堆積土は、粘質であるものの泥状ではなく常に滞水していたとも考えられない。断面形状は、北側が逆台形状を呈し、次第に逆三角形形状に変化し、本溝から分岐する79号溝の断面形状と同様になる。

本溝は、南側で浅い溝(82・83・84・85号溝)と重複もしくは近接する。重複関係は、1号溝より古く、埋土に砂を含むことや走行方向から後述する堀東側の溝群の続きと考えられる。

79号溝 (第7・9図、PL-5)

79号溝は、1号溝が浅くなる調査区南側に直角に接する。1号接点からの全長8m、幅1.9~2.8m、深さ75cm~93cmを測る。標高では中央部が10cm以上低い。断面形状は、1号溝南側同様逆三角形形状を呈する。埋土に砂、泥共になく流水も滞水もないと解される。

8・9号溝 (第7~9図、PL-4)

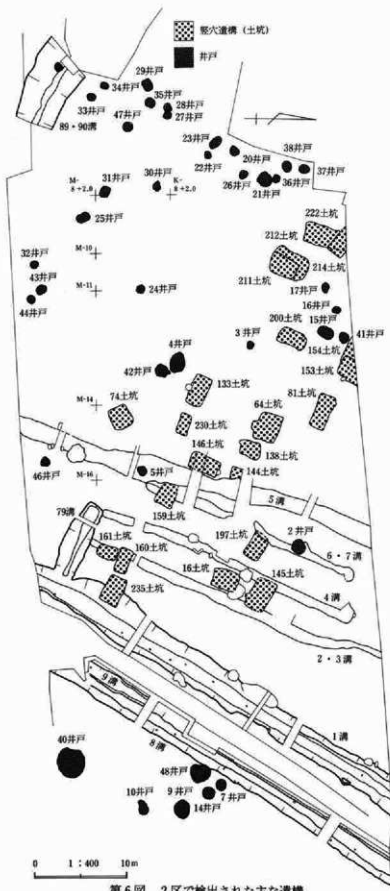
8・9号溝は、1号溝の東に平行する重複した堀である。西側は、調査当時使用していた水路保持のため検出し得なかったが全長39mにわたって確認された。8号溝は、9号溝が埋没した後に再掘削されたもので底部中央で1m程8号溝より西に偏している。いずれも、埋土が砂質であることから流水の影響を受けているものと考えられるが、東から流入している砂も認められることから洪水による埋土も存在する。そのため、東側に位置する9号溝のみ再掘削されているものと解される。9号溝の南は段をなして深さを増し、更に南に延び、湧水も若干認められた。

89・90号溝 (第9図、PL-5)

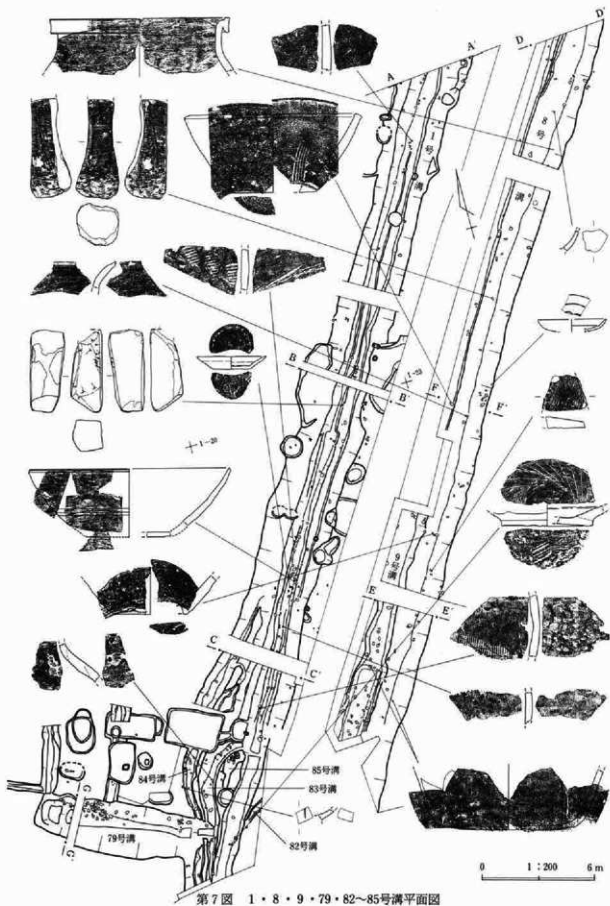
89・90号溝は、調査区南西隅において8mにわたって確認した。西側は宅地移転時の整理穴によって攪乱を受け検出できず、東側は宅地崩落防止のため調査区境界手前で検出を中止した。89号溝は、埋土最下層から明治から昭和初期頃の陶磁器が出土しており中世の堀ではない。しかし、堀である90号溝内に位置し、走行が一致しているためにここで説明する。89号溝の幅は1mと狭いが、深さは1.1mと深い。本溝の南に居住する方の話しでは、「昔宅地の回りに堀が巡っていた」そうであり、89号溝がこの堀に相当すると考え

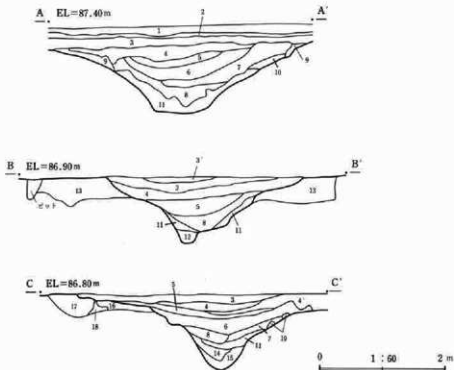
られる。

90号溝は、最大幅5.3m、深さ1.3mと最も規模が大きい。平面形状は、やや湾曲しているようであるが、調査範囲が狭く詳細は不明である。底部の幅20~30cmの小溝状を呈する部分の埋土には砂が認められ、少量の流水があったことが伺える。調査時には水中ポンプを使用しないと底部の調査ができないほどの湧水があり、当時も湧水が流れていたと考えられよう。底部小溝部分の標高は、西側に段差があるため断面計測地点において西側が20cm程低い、平坦部分では標高差は殆ど認められない。



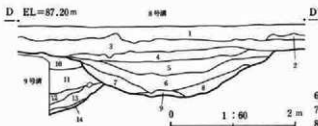
第6図 2区で検出された主な遺構





1号溝土層注記

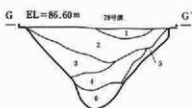
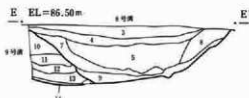
- 1.耕作土層
- 2.耕作土層下の斑鉄層
- 3.灰褐色土と暗褐色砂礫土の混土層 下部にローム粒「極小〜大」少量含む。斑鉄により色調が暗褐色を帯びる。
- 3.3層に比して斑鉄少ない。
- 4.暗褐色砂礫土層 灰褐色砂礫土粒「極大」均質に20%程含む。ローム粒「極小」少量含む。
- 4.4層に比して斑鉄多く含む。
- 5.暗灰褐色土層 不明軽石粒を含む。
- 6.淡褐色砂礫土層 斑鉄を含む。ローム粒「極小〜大」少量含む。
- 7.淡褐色砂礫土層 斑鉄を含む。ローム粒「極小〜大」10%程含む。6層に比して色調はやや暗い。
- 8.淡灰色砂礫土層 ローム粒「極小〜中」20%程含む。斑鉄不均質に10%程含む。
- 9.ロームを主体とし、少量8層を含む。
- 10.9層と同様であるが、ローム粒「極小〜大」20%程含む。
- 11.ローム粒「小」〜小塊と8層の混土層
- 12.11層と同様であるが、粘性が高い。
- 13.暗褐色土層 ローム粒「小〜極大」不均質に10%程含む。堅穴遺構埋土。
- 14.淡灰色土層 ローム粒「極小〜中」20%程含む。機土、炭化物不均質に含む。
- 15.淡灰色粘質土層 ローム粒「極小」10%程含む。
- 16.灰黄褐色土層 斑鉄20%程含む。ローム粒「極小〜中」20%程含む。
- 17.暗褐色土層 ローム粒「極小」〜小塊10%程不均質に含む。
- 18.ロームを主体とし、少量不均質に17層を含む。
- 19.ロームブロック



8・9号溝土層注記

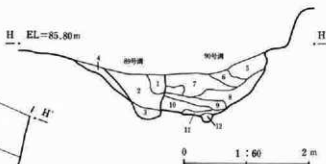
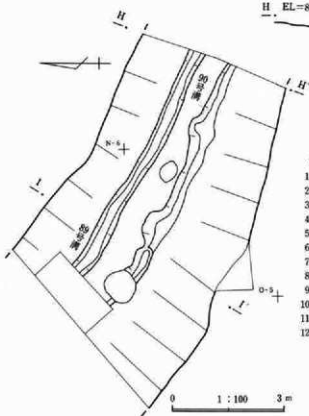
- 1.現代水田の耕作土下斑鉄層
- 2.灰褐色土層 斑鉄を少量含む。軟らかい。
- 3.1層と2層の混土層
- 4.灰褐色土層 砂を多く含む。(8号溝)
- 5.6層中に黄褐色粗砂層を3層挟む。この粗砂層は東より流入。(8号溝)
- 6.淡灰色シルト層 やや粘性ある。(8号溝)
- 7.ローム粒、6層、砂の混土層 (8号溝)
- 8.暗褐色壤質砂土層 ローム粒「極小〜大」20%程含む。機土粒「中」10%程含む。(8号溝)
- 9.ロームを主体とし、少量7、8層を含む。(8号溝)
- 10.灰褐色壤質砂土層 斑鉄を含む。(9号溝)
- 11.灰褐色壤質砂土層 斑鉄多く含む。ローム粒「大〜極大」20%程含む。(9号溝)
- 12.灰白色シルト層 砂を含む。(9号溝)
- 13.暗褐色壤質砂土層 ローム粒「極小〜大」30%程含む。(9号溝)
- 14.ロームを主体とし、少量13層を含む。(9号溝)

第8図 1・8・9号溝断面図



79号溝土層注記

1. 灰褐色土層 ローム粒「中」少量含む。
2. 灰褐色土層 ローム粒「小〜中」10%程含む。
3. 灰褐色土層 ローム粒「中〜極大」10%程含む。褐色土少量含む。
4. 灰褐色土層 ローム粒「中」少量含む。1〜3層に比して灰色味が強い。
5. 4層とロームの混土層
6. 淡灰色壤質砂土層 ローム粒「極小〜極大」20%程含む。



89・90号溝土層注記

1. 黒褐色粘質土層 擾乱。現代磁器、ガラス出土。(89号溝)
2. 灰褐色粘質土層 現代ガラス敷出土。(89号溝)
3. 2層に比して灰色味が強い。明治〜大正プリント出土。(89号溝)
4. 淡褐色土層 ローム粒「極小」とローム小塊10%程含む。(90号溝)
5. 暗褐色砂壤土層 ローム粒「極小」少量含む。(90号溝)
6. ロームと粘土の混土層 (90号溝)
7. 暗褐色砂壤土層 ローム粒「極小〜極大」少量含む。(90号溝)
8. 淡褐色砂壤土層 ローム粒「極小」〜小塊不均質を含む。(90号溝)
9. 灰褐色砂壤土層 ローム粒「極小」〜小塊10%程含む。(90号溝)
10. 灰褐色砂壤土層 ローム小塊10%程含む。(90号溝)
11. 灰褐色砂壤土とロームの混土層 (90号溝)
12. 灰褐色壤質砂土と砂の混土層 90号溝の遺物はほとんど本層出土。(90号溝)



第9図 8・9・89・90号溝実測図

遺物

1号溝 (第10～12図、PL-47)

1号溝からは、埋土中層を中心に磔、中国製磁器、焼締陶器などが出土している。円碌、角碌は多数出土したが、加工痕の認められないものが主体であった。また、他の遺物も量的には少ない。埋土最上層からは、江戸時代の陶磁器細片が数点出土し、江戸時代にはほとんど埋まっていたようである。以下、種別毎に説明する。

中国製磁器 (第10図1～13)

中国製磁器は、総数で16点出土し、図示可能な13点を掲載した。1は、白磁皿の体部で13世紀。2・3が同安窯系青磁碗、4～6が同安窯系青磁皿である。3の碗は、外面に片彫りを有し、焼成不良により胎土、釉共にクリーム色を帯びる。7～11は、龍泉窯系青磁で、7・8が内面に文様を有するもので、9・10が外面に片彫りの蓮弁を施す。8は、焼成不良により釉が白濁し、9は釉が灰色味を帯びている。11は、外面に錆のない簡略化した蓮弁を彫る。12は、内底の釉を輪状に削り、高台脇以下に釉を施さない白磁碗である。焼成不良で、胎土は十分磁化せず、釉も濁り貫入が認められる。時期は14世紀か。13は、県内でも普遍的に出土する14世紀後半から15世紀前半の白磁皿で、高台を4カ所抉り込み、内底に同数の重ね焼き痕を有する。外面中位以下無釉。焼成不良により陶器のような焼き上がりである。

焼締陶器 (第10・11図14～22)

焼締陶器はすべて国産である。焼締陶器の中で特筆すべきものに14の山茶碗がある。胎土は粗く、東海地方南部系の胎土である。口縁部は玉縁状を呈する。知多窯製か。片口鉢は1点のみ(15)で知多窯製の可能性がある。口縁端部は厚く、中央が浅くくぼむ。口縁部外面と内面は轆轤調整、外面は成型痕を残す。16は、知多窯製の壺と思われ、接合しないが4号溝出土の(第25図5)と同一個体であろう。17～21は、知多窯製の壺である。22は、渥美窯製の壺底部である。

瓦 (第11図23～25)

小片3点が出土し、いずれも後述する4号井戸出土の平瓦(第67図1)と同じ胎土、同じ調整である。4号井戸出土遺物から室町時代の瓦と考えられる。

カワラケ (第11図26～28)

カワラケの胎土は2種あり、26が「カワラケ1」、27・28が「カワラケ2」である。26は、底部回転糸切無調整で回転方向不明。28は、右回転糸切無調整である。27は、切離し技法不明で外底に圧痕がある。

軟質陶器 (第11図29)

胎土精良な酸化炭焼成の火鉢脚部である。外側は丁寧に磨かれ、内側はヘラ削りされる。

その他の土製品 (第11図30～33)

30は、軟質陶器(内耳鍋か)底部を円盤状に整形したものである。31は、不明土製品。32・33は、胎土から古代の可能性が高い土鉢である。

金属製品等 (第11図34～38)

34・36は、不明鉄製品で、34は鉤状を呈する。35は、釘と思われる、頭部には叩打による潰れが認められる。37は、椀状で底部には還元状態の炉底土が付着する。38は鉄滓である。

石製品 (第12図39～43)

39は、硯小片と思われる。40は、くぼみ石でありくぼみ内には叩打痕がある。41は磁石。42・43は石鉢で、42が口縁部片、43が底部片である。いずれも底部内面と口縁部下内面は使用により平滑となる。

貨幣 (第12図44)

「元□□寶」破片が1点出土している。

79号溝 (第13図)

カワラケ (第13図1)

底部が完存、口縁部が一部遺存する。胎土は「2」である。底部外面は、左回転糸切無調整で圧痕はない。また、底部内面には撫でもない。内面は、油であろうか黒色物質が付着している。

石製品 (第13図2)

石鉢口縁部破片。内面は外面に比して調整が丁寧である。

8号溝 (第14～16図、PL-47)

中国製磁器 (第14図1～7)

1は白磁皿。2は、同安窯系青磁碗胴部下位小片で外面下位は無釉。3・4は、龍泉窯系青磁碗小片であるが、3は龍泉窯ではない。5は、外面に片彫りの鎮蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗である。6・7は、内外面無文の龍泉窯系青磁碗で、7は発色が悪い。

施釉陶器 (第14図8)

平茶碗の口縁部片と思われる。焼成不良のため灰釉は、ほとんど白濁している。外面下位以下回転削り。美濃窯製であろう。15世紀後半。

焼締陶器 (第14・15図9～16)

9は、均質で緻密な胎土の皿で、いわゆる山皿であろう。胎土から美濃窯製と考えられる。10は、本遺跡出土山茶碗の中で最も遺存が良い。口縁部は大きく開き、高台は低い。内面には、底部を除いて薄く灰釉が掛かる。胎土は、夾雑物が多いが知多窯製であろう。12世紀後半。11は、渥美窯製の壺口縁部破片で、端部は尖る。12～16は、知多窯製の壺である。12は口縁部を「N」字状に折り返す。13～16は、体部破片である。14は、図示していないが、30号溝出土の壺体部下位片と同一個体の可能性が高い。

瓦 (第15図17)

平瓦小片と思われ、凸面の糸切り痕を明瞭に残す。4号井戸出土瓦や胎土から中世の所産と考えられる。

軟質陶器 (第15図18～19)

18・19は、すり鉢で共に胎土は「1」、還元焼成で底部外面には砂圧痕が残る。18の内面には5本1単位のすり目を引く。18は、底部と体部の境を除き体部下位が使用により摩滅する。19は、内面全面摩滅するが使用頻度が高く、体部と底部の境が最も擦り減っている。

20は、内耳鍋である。底部外面は、砂圧痕が全面に認められ、丸底を呈する。体部外面には煤が付着するが、底部外面には付着しない。胎土「4」。

金属製品等 (第17図21～23)

21は、籠の羽口先端部分の小片である。外面の一部は還元し、やや珪化する。22・23は、基部から欠損する釘で、22は折釘、23は切釘であろうか。

石製品 (第17図24～29)

24は、加工されていない中央がくぼんだ玉鬚門礫。25～28は、砥石である。26・28共に石質は粗い。29は、門礫両面に叩打によるくぼみが認められる。

89号溝 (第17・18図1～6)

陶磁器 (第17図1、2)

1は、鉄絵具による型紙摺の陶器である。灰釉を内面に施し、瀬戸・美濃窯製である。2は、銅版転写による瀬戸・美濃窯製磁器で大正～昭和の製品である。

瓦 (第17・18図1～3)

3・4は、平行な条線を有する燻し瓦である。真空土練機やトンネル窯を用いていないと考えられるが、近代以降の製品であろう。5は、やや胎土や焼成が異なり江戸時代の製品であろうか。

軟質陶器 (第18図6)

江戸時代から明治時代と考えられる手焙である。底部には3カ所低い脚を張り付け、外面には回転施文具によると見られる文様を帯状に巡らす。

90号溝 (第19～21図1～20、P.L-48)

中国磁器 (第19図1)

龍泉窯系青磁碗の底部。高台端部まで施釉し、高台内部から底部外面は無釉である。底部内面には、不明瞭であるがスタンプ文を施しているようである。内面には、粗い貫入があるうえに、焼成前の異物混入により傷がつくなど決して質の良い製品ではない。14～15世紀前半。

施釉陶器 (第19図2)

灰釉盤小片で、内外面共に体部下位以下は無釉である。釉は、部分的に白濁し発色は良くない。外面の轆轤目は顕著で、下位は回転削りである。口縁端部は、図で示すよりくぼむ。美濃窯製か。おそらく三つの小さい脚が付くであろう。15世紀後半。

焼締陶器 (第19図3、4)

3・4共に知多窯製である。3は耳部、4は体部破片であり、4の外面には自然釉が掛かる。

カワラケ (第19図5～11)

5、6は、小型のカワラケである。5は、胎土は「4」で轆轤左回転、底部は回転糸切りである。6は、胎土「1」で底部は回転糸切りか？7～11は、一般的な大きさであるが、8は口縁部が他と異なり胎土「1」。7は、胎土「2」で、底部は回転糸切り。9は、底部左回転糸切りで浅い圧痕が認められる。胎土「2」で一部発泡寸前の状態である。10は、底部左回転糸切りで、胎土は「2か4」に近似するが金費母を含んでいる。11は、底部左回転糸切りで、内底に撫で、外底には浅い圧痕がある。胎土は「2」。

軟質陶器 (第20図12～16)

12はすり鉢、13～16は内耳鍋である。12は、底部小片である。内面周縁は、使用により溝状に摩滅する。外面は、小片であるため回転か否かは不明であるが糸切りを行っている。胎土「6」。13は、口縁部から体部にかけての内耳鍋破片である。耳部は、1カ所残存するが張り付け部より欠損する。外面には煤が少量付着する。胎土は「1」。14～16は、口縁部破片であり、15のみ外面に煤僅かに付着。胎土は、14が「1?」、15が「2」、16が「1」である。

石製品 (第20、21図17～20)

17は、くぼみ石でくぼみ内は叩打痕である。18は、碗状の製品を砥石に転用したもの。19・20は上臼である。19は、側面中央に叩打痕のあるくぼみがあり転用される。しかし、割口の再加工は施されない。20も供給口と異なる小さいくぼみがあり、転用された可能性がある。

83、84号溝 (第22図1～6)

中国製磁器 (1・2)

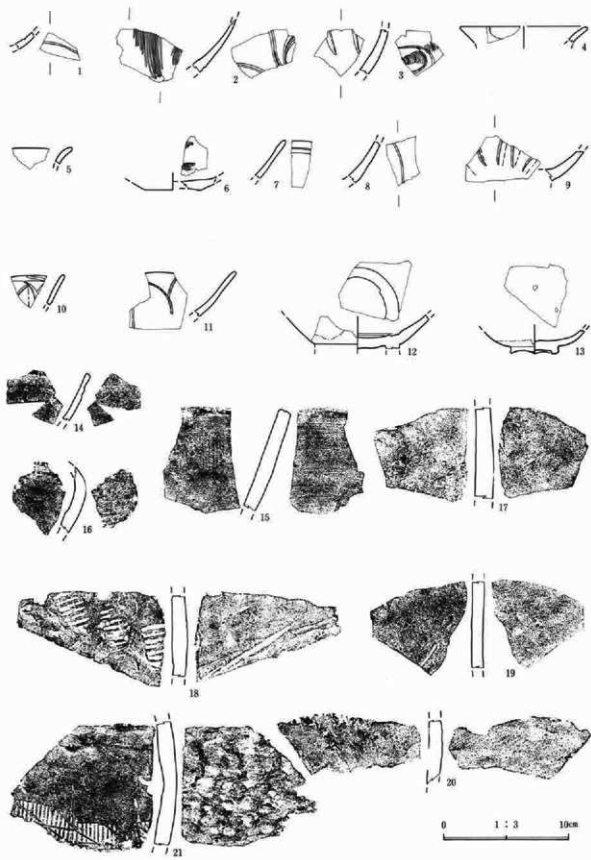
1・2共に84号溝出土。1は、胎土から中国製の青磁と考えられるが、時期、器種共に不詳。釉には細かい貫入が入る。2は、龍泉窯系青磁碗体部下位片である。外面には、片彫りの縦線が1条認められ、外面に蓮弁文を施すものであろう。残存部に溝は認められない。

焼結陶器 (3～5)

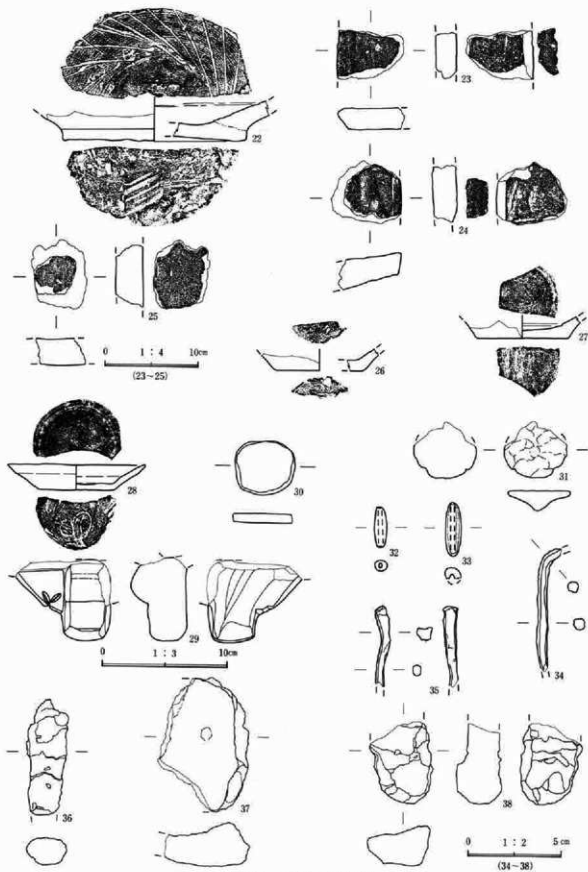
3は、山茶碗の底部と考えられる小片である。胎土は、やや細かいが均質ではなく知多窯製であろうか。5は、瀬美窯製の壺頸部片である。外面には自然釉が掛かる。4は、外面に自然釉が掛かる知多窯製の肩部破片である。図示していないが、90号溝からも同一個体と考えられる破片が出土している。34号溝出土の第33図32も同一個体であろう。14世紀。

軟質陶器 (6)

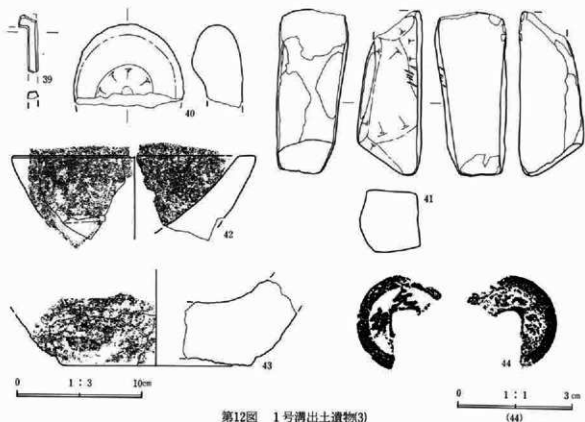
すり鉢口縁部破片で、端部は玉縁状を呈して立ち上がる。東播系。13世紀。第111図31と同一個体であろう。



第10图 1号清出土遗物(1)

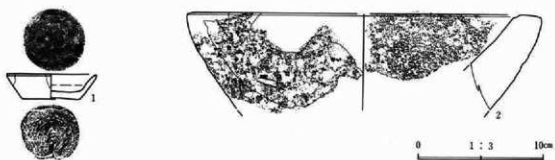


第11图 1号洞出土遗物(2)

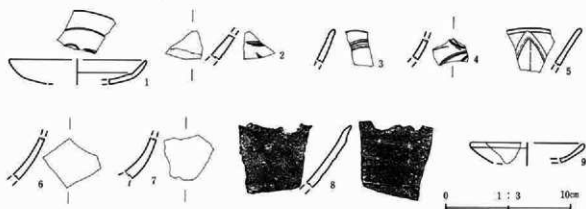


第12图 1号满出土遗物(3)

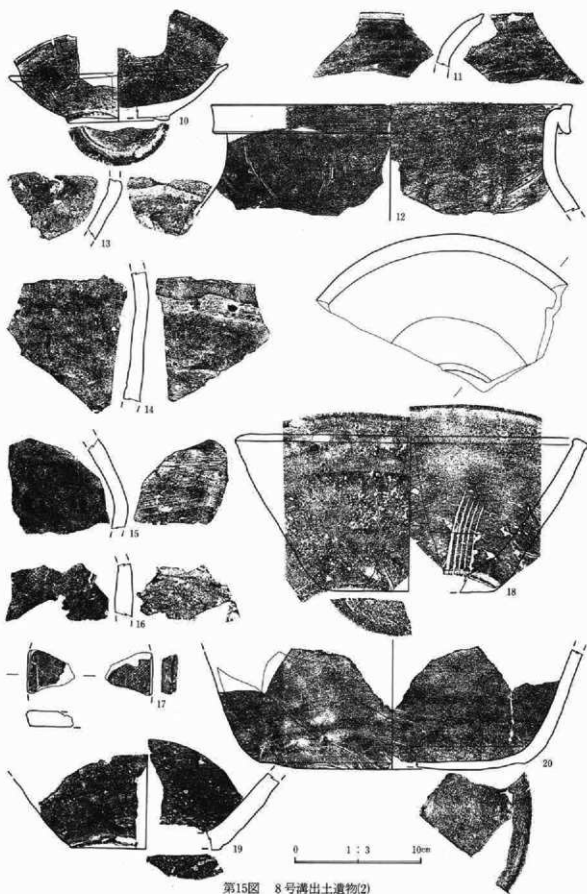
(44)



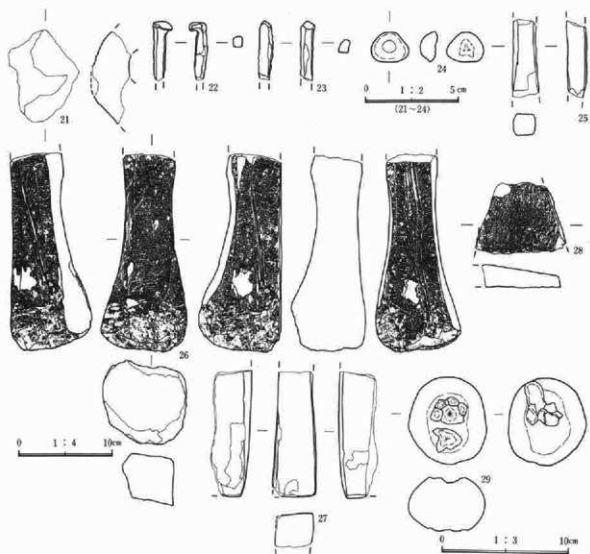
第13图 79号满出土遗物



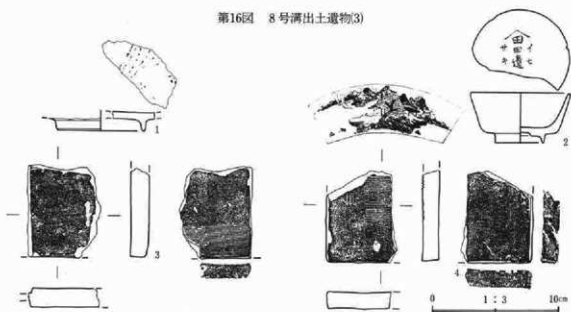
第14图 8号满出土遗物(1)



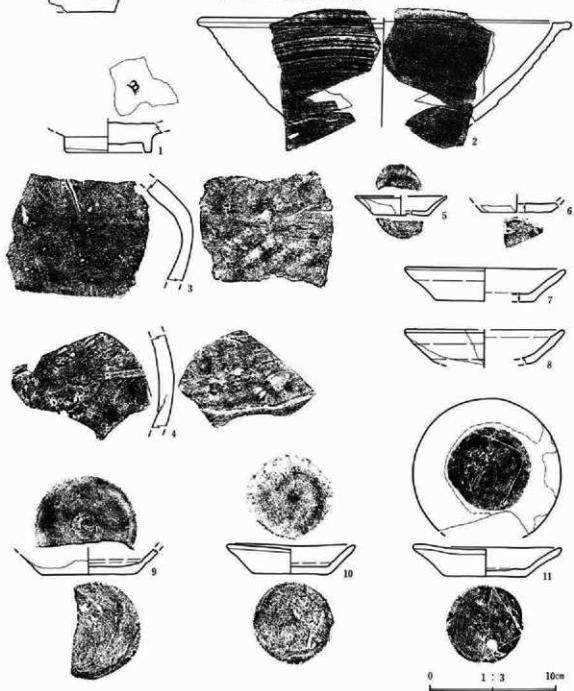
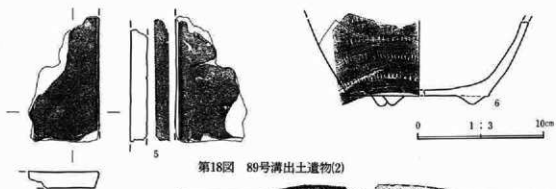
第15图 8号溝出土遺物(2)

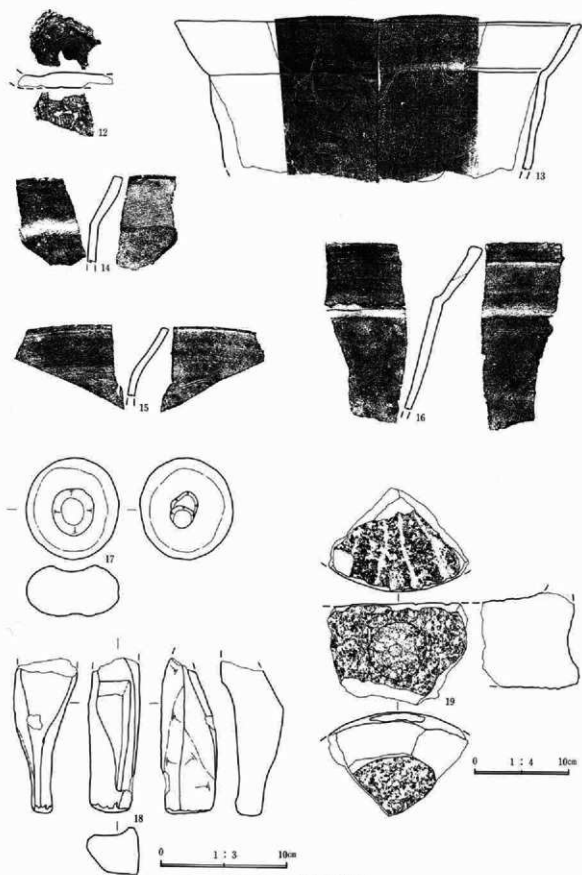


第16图 8号清出土遺物(3)

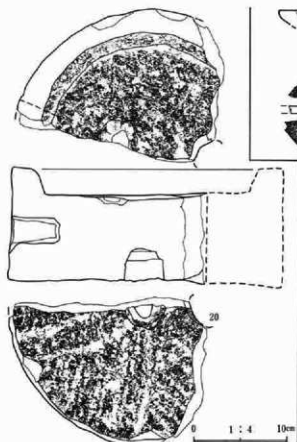


第17图 89号清出土遺物(1)

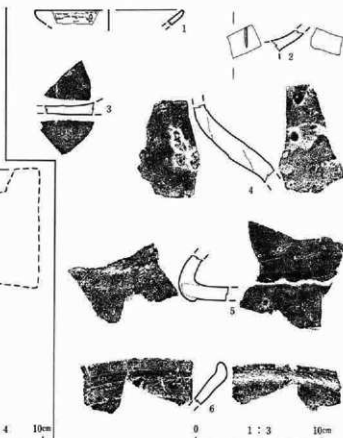




第20图 90号溝出土遺物(2)



第21図 90号溝出土遺物(3)



第22図 83・84号溝出土遺物

2. 堀区画内の溝 (第23~28図、P L-5・6、48)

遺構

先に記述した堀区画内からは、2~7号溝の6条が検出された。

2・3号溝は、調査区外北東から南西の79号溝まで34mにわたって確認され、北東部分は蛇行している。2号溝と3号溝は底部中央で約10cmずれ、1号溝が新しい。深さは、2号溝が約30cm、3号溝が約40cmで、堆積土に流水の痕跡は認められない。堅穴状遺構(145・160号土坑)との重複は、いずれも溝が新しい。また、79号溝との重複も同様である。

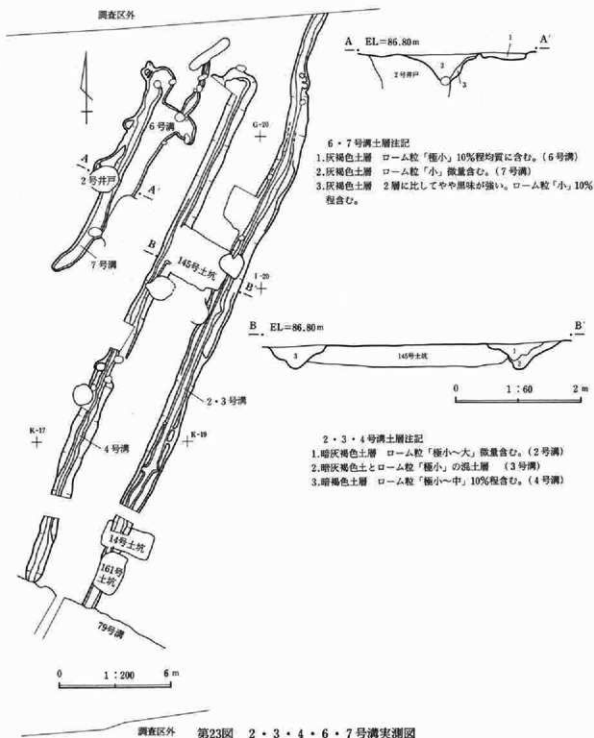
4号溝は、2・3号溝の西2~2.7mの間隔でほぼ平行に走行する。検出長29m、幅30~40cm、深さ35cmを測り、堆積土に流水の痕跡は認められない。溝北東は、調査区外に伸びず、丸く終わっている。南西は79号溝と重複するが、直前で幅が狭くなっているようであり、重複部分で溝が終了していたと推定される。本溝も145号土坑より新しい。

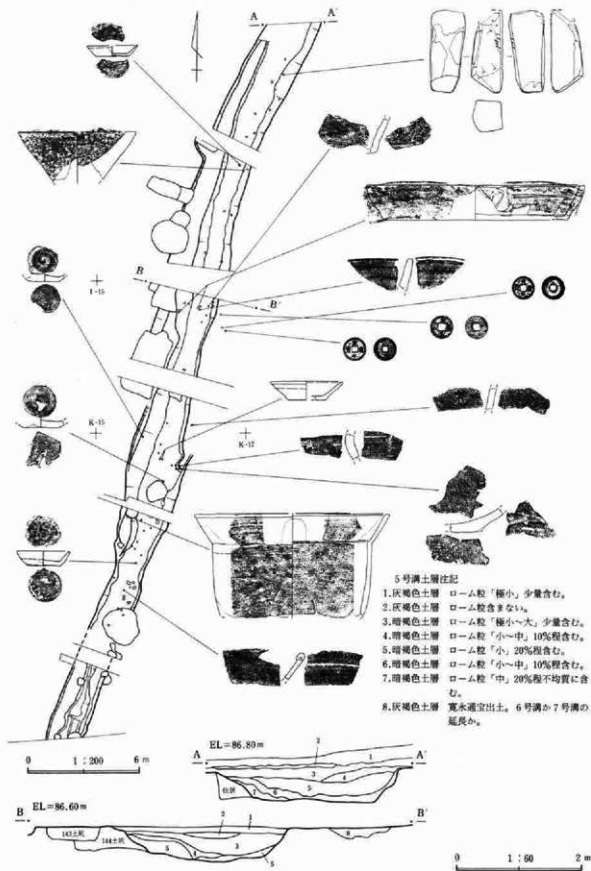
6号溝は、4号溝北東部分の西に位置し、幅10~20cmの狭い部分と幅40cm程の広い部分とからなる。両者は本来別な遺構であった可能性が高いが、重複が確認できず、同一遺構とした。深さは10cm程度である。

7号溝は、6号溝の幅広部分の西に接して、長さ12mにわたって検出された。幅20cm、深さ40cmを測り、南は西に湾曲して終了する。2号井戸より新しい。6号溝との重複は、重複部分が非常に少なく確認し得なかった。

5号溝は、2区台地のほぼ中央を北東から南西に貫く。検出全長は40m、幅は1.7~2.7m、深さは約50cm

を測り、断面形状は幅広の逆台形を呈する。重複する遺構（54・148・149・144・146号土坑、5・6号井戸）との関係は、いずれも本溝が新しい。





第24図 5号溝実測図

遺物

2～4・6・7号溝

中国製磁器 (第24図1～3)

1は、同安窯系青磁碗体部下位の破片である。外面には櫛目、内面底部周縁には深い圈線が巡る。6号溝出土。2は、龍泉窯系青磁碗体部下位破片である。内面には片彫りによる文様が一部認められる。胎土は、いわゆるセビア色を呈し、釉は貫入が多い。4号溝出土。3は、白磁皿で外面体部下半は回転篋削り、体部下位は無軸である。内面底部周縁には浅い圈線を巡らす。14世紀後半～15世紀前半。3号溝出土。

焼締陶器 (第24図4～8)

4は、底部内面の調整が粗く、壺もしくは甕の底部と考えられる。底部外面に切り難し痕はない。渥美窯製である。5は、知多窯製の壺体部破片。6は、知多窯か地方窯製の甕小片。7・8は知多窯か渥美窯の甕小片である。すべて4号溝出土。

カワラケ (第24図9～11)

9・10は、小型で胎土は「3」、「1」。10は、底部回転糸切り無調整で、口縁端部には油煙が付着する。両者とも軸轆回転方向は不明。11は、推定底径10cmと大型である。底部は、回転糸切り無調整で回転方向は不明。底部外面には浅い圧痕、内面には弱い撫でを施す。9が4号溝、10が2号溝、11が2号溝もしくは3号溝出土。

軟質陶器 (第24図12)

12は、4号溝から出土した胎土、器形共に他とは異なる内耳鍋である。色調は、酸化炭のため鈍橙を呈するが、胎土、焼成共に14世紀代のすり鉢に近い。胎土「1?」。内耳鍋出現段階、14世紀後半の所産であろう。

5号溝 (第25～27図1～38)

焼締陶器 (第25図1、2)

渥美窯製の甕(1)は、頸部小片である。2は、知多窯製の甕小片である。

カワラケ (第25、26図3～11)

3は、底部回転糸切りで胎土「4」。口縁部は歪む。口縁部内面から体部外面は、油煙のせいかわらくなる。4は、底部左回転糸切りで圧痕がある。胎土は「4?」。5は、底部左回転糸切り後でない?胎土は「2」。7は、左回転糸切りで胎土は「1」。8は、胎土「1」で底部左回転糸切り。内面から口縁部外面油煙付着。6は、胎土「1」で底部左回転糸切り。底部外面には幅広い圧痕がある。9は、軸轆左回転糸切り無調整で胎土「1」。10は、底部の器壁が厚く、体部は開く。胎土は「2」で底部は回転糸切りか?11は、底径の割りに器壁が薄く、胎土は「1か4」。底部は左回転糸切り無調整。

軟質陶器 (第26図12～20)

12・13は、香炉である。12は、高い三つの張り付け脚を有すると考えられ、底部外面は回転糸切り痕を残す。左回転の軸轆調整を施す。15世紀代に属するであろう。13は、外面にスタンプ文を有するもので、体部下端は接合部分で欠損している。胎土や文様から中世の所産と推定される。15は、内耳焙烙の耳部分破片である。耳の断面は、丸く細い。14は、口縁端部に沈線有し、器壁が厚い。残存部下端は、調整痕から底部に近い部分と考えられ、内耳焙烙の可能性が高い。17は、口縁端部を内面に折り返す特異な形態である。胎土「8」。器種は不詳。器表は、左回転の軸轆調整である。16は、底部外面砂底で内面に撫でを施す大型品

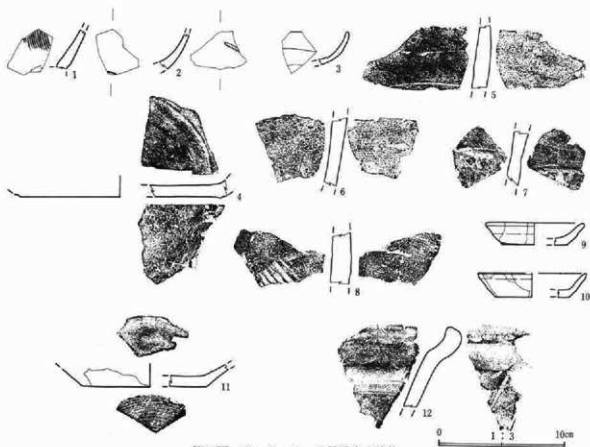
である。盤型にしては体部が大きく開き、器種は不詳である。胎土・焼成から、少なくとも幕末・明治の製品ではない。18は、本遺跡中最も遺存のよい内耳焙烙である。口縁端部を平坦に造り、内面は下方に若干折れ曲がる。体部内面には段差を有する。耳の断面は、やや偏平となっている。口縁部から体部内外表面は黒変するが、底部内外面は黒変していない。時代的には、形態や17世紀の施釉陶器が本遺跡から出土していないことから16世紀代であろう。19、20は、内耳鍋であり、前者は器壁が厚く口縁部下のくびれが弱い。後者は、器壁が薄く口縁部下のくびれが強い。時代的には、19が15世紀前半代、20が15世紀後半から16世紀であろう。

石製品 (第26・27図21~31)

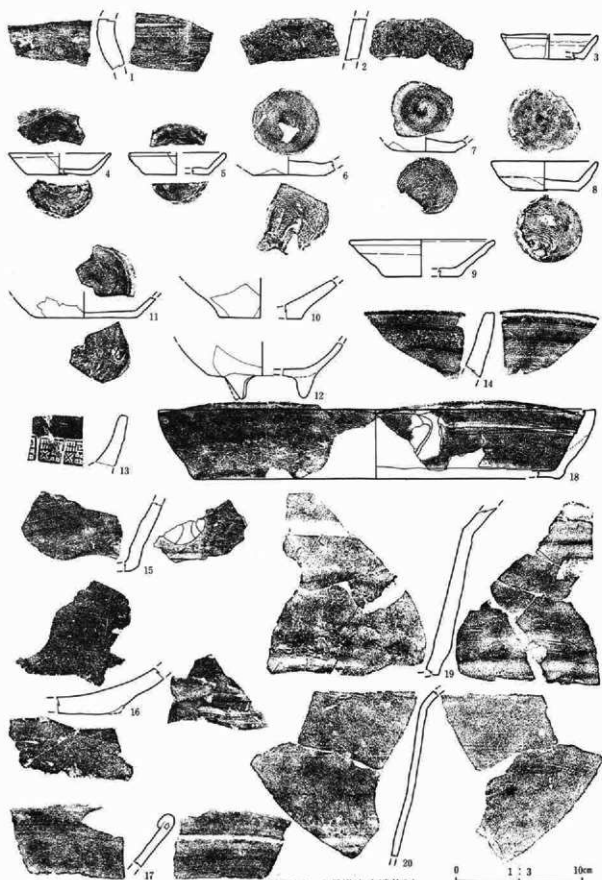
21・22は、滑石製品の未製品もしくは、製作時の破損品である。時期は不詳(古墳時代後期であろうか)。23・24はチャート製の火打石である。石の質はあまり良くなく、節理も入る。2点とも周縁をかなり使用している。25~30は砥石である。27は、側面に丸盤状工具の調整痕が残る。29は、河原石のややくぼんだ面を使用したと考えられ、磨石とすべきかもしれない。石鉢(31)の、内面下位は使用によりやや摩滅する。

金属製品ほか (第27図32~38)

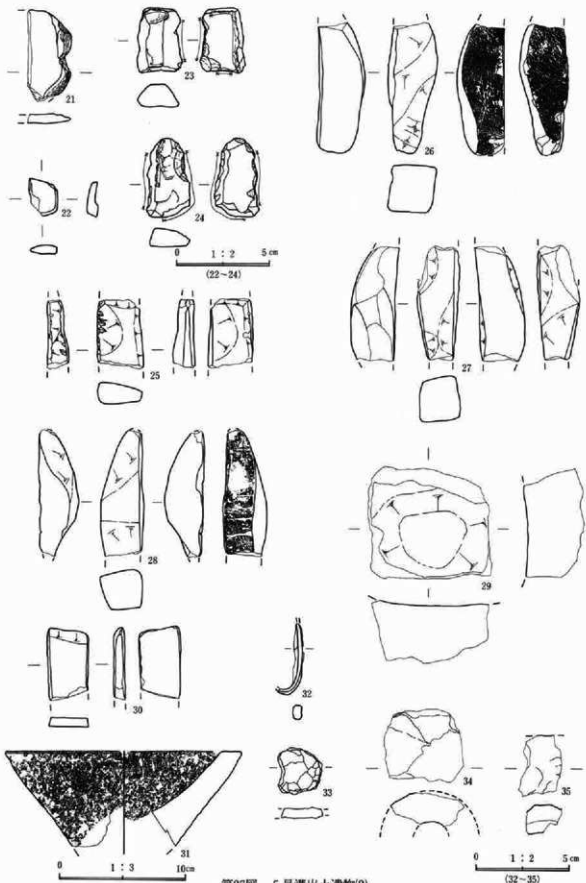
32は、不明鉄製品。33は、厚さ4mmの鋳鉄製品小片である。34・35は、鑄の羽口である。34は先端表面、35は表面が珪化する。36~38は、銅銭で36が「皇宋通寶」、37が「寛永通寶」、38が北宋銭の「天聖元寶」である。いずれも、5号溝ではなく6・7号溝の延長部分からの出土といえる。



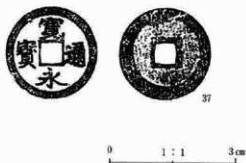
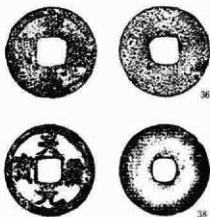
第25図 2・3・4・6号溝出土遺物



第26图 5号溝出土遺物(1)

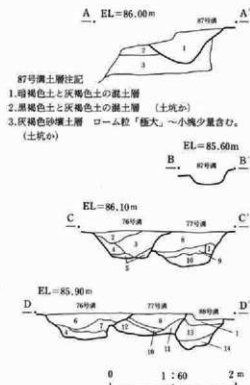
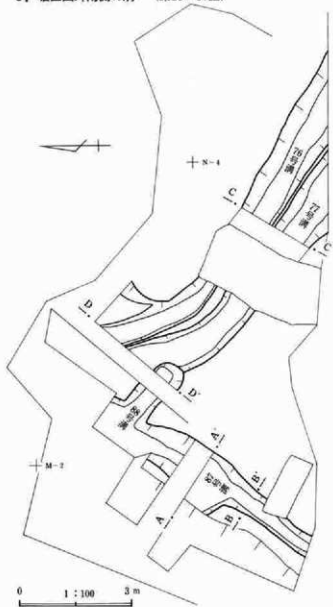


第27图 5号洞出土遺物(2)



第28図 5号溝出土遺物(3)

3. 堀区画外南側の溝 (第29・30図)



- 76・77・88号溝土層注記
1. 瘦土
 2. 黒褐色砂壤土層 不明軽石粒多く含む。
 3. 黒褐色砂壤土層 不明軽石粒多く含む。ローム粒「中〜大」少量含む。
 4. 黒褐色壤質砂土層 不明軽石粒多く含む。ローム粒「中〜大」少量含む。
 5. 3層とローム小塊の混土層
 6. 黒褐色土と暗灰褐色土小塊の混土層
 7. 黒灰色土層 暗灰褐色土小塊を20%程含む。
 8. 暗灰褐色砂壤土層 ローム粒「小〜大」10%程含む。
 9. 暗褐色砂壤土層 ローム粒「極小〜極大」10%程含む。
 10. 9層と砂の混土層 ローム粒「極小〜極大」20%程含む。
 11. 黒褐色土とローム粒「極小〜極大」の混土層
 12. 黒褐色土と灰褐色土、ローム小塊の混土層
 13. 黒褐色土層 ローム粒「極大」少量含む。
 14. 灰褐色壤質砂土層

第29図 76・77・87・88号溝実測図

遺構

90号溝南の狭い範囲で検出された4条の溝で、走行は非直線的である。地形や前述した8・9号溝から、90号溝南も区画内であった可能性が非常に高い。しかし、ここでは90号溝によって南を区画された郭の外という意味で使用する。

76・77・87・88号溝 (第29図)

76・77号溝は、調査区南西隅で検出された。90号溝西側と76・77号溝北側は、擾乱のため検出不可能であった。したがって、本溝が調査範囲西隅で北に向かって延びるように曲がるが、その先は不明である。溝は、湾曲部を除けば90号溝とほぼ平行して延びる。調査区や擾乱の関係で17m程しか検出できないが、90号溝と平行して存在することや北に向かって湾曲することから、堀である90号溝も恐らくこの付近で屈曲していると推定される。76号溝と77号溝は、ほぼ同じ規模で接するように平行するが76号溝が新しい。また、4mしか確認できなかった88号溝は、76号溝より古く、断面D地点の土層にも現れていないことから77号溝よりも古いと考えられる。87号溝は、先の76・77号溝の更に外側に位置し、76・77号溝とほぼ直交方向に延びる。途中溝より古い土坑と思われる遺構との重複があるが、擾乱のため詳細は不明。88号溝との重複は確認できず、枝分かれの可能性がある。いずれも、埋土に砂や泥土は認められず、流水や潜水の痕跡は認められない。

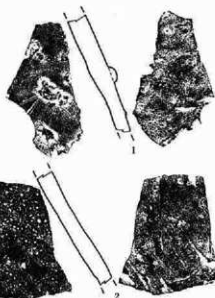
遺物

焼締陶器 (1・2)

2点ともに、87号溝出土の知多窯製甕腹部破片である。両者ともに、外面には灰釉が全体に厚く掛かる。

石製品 (3)

中央部と端部を欠損した砥石。石質は、細かく軟質である。砥面には、刃物痕が顕著に認められる。77号溝出土。

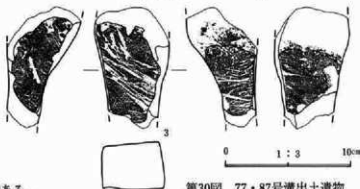


4. 堀区画外東側の溝 (第31～34図、P L-6、49)

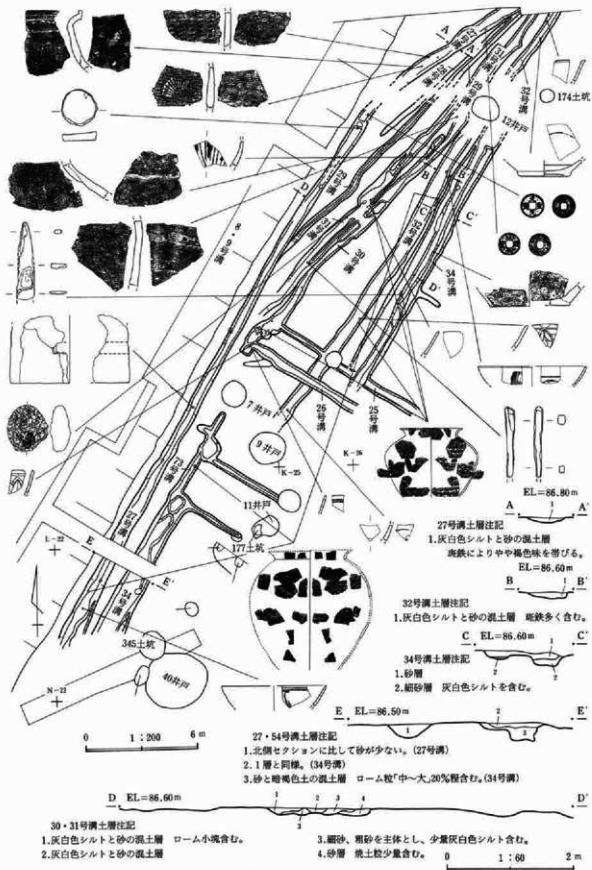
遺構

25～34号溝 (第30図、P L-6)

館の東を区画する堀、8・9号溝東の台地縁辺に沿って存在する溝群と等高線に直交する溝群である。後者の堆積土には砂は認められない。しかし、前者はいづれも砂で埋まり、流水があったことを物語っている。走向は、小さく湾曲・蛇行し、底部には小さい凹凸も認められる。断面形はほとんど蒲鉾形で深さも10～20cmと浅い。27号溝と29号溝は重複し、27号溝が新しい。12号井戸部分で31・32、34号溝が確認できなかったが、これは溝群形成後の12号井戸埋土陥没によって、溝に堆積した砂層も陥没したためである。



第30図 77・87号溝出土遺物



第31図 25～32・34・73号溝実測図

遺物

遺物は、台地縁辺を等高線に沿って走向する溝の砂に混じって出土した。遺物以外にも円礫は多数出土している。

27・30～32・34号溝 (第32～34図)

中国製磁器 (第32・33図1～27)

27号溝出土遺物は、12・14・21・22・26・27の6点。30号溝出土遺物は、3・4・19・23・25の5点。30・31号溝出土遺物は、16・18の2点。32号溝出土遺物は、1・5・8・10・13・20の6点。34号溝出土遺物は、2・6・7・9・11・15・17・28の8点である。

1～10は白磁碗、11・12は白磁皿である。1・2は、口縁端部を外反させる碗。3・4は、内面に櫛目文を施す碗の体部破片である。5・6は、外面体部下位以下無軸の碗体部破片、5は内面に浅い圈線を巡らす。なお、5は焼成不良で胎土はクリーム色を帯び、貫入も多い。7も焼成不良で、胎土はクリーム色を帯び、軸是同安窯系青磁に近い発色となる。外面は無軸、底部内面は深く軸を削ぎ取っている。8・9は、大きな玉縁口縁を有する碗の口縁部、10は底部で外面無軸である。11・12は、白磁の皿である。11は、焼成不良で胎土が陶器質、軸が白濁する。この皿は、個体でみれば11世紀後半～12世紀前半に位置付けられ、本遺跡中最も古いタイプである。同一個体ではないが、同様な皿は、2区表土(第107図11)から1点、3区As-B上包含層から2点(第102図21・22)、9号井戸から1点(第72図3)の計5点出土している。12は、底部内面に片彫りによる文様を施す。底部外面は、施軸後軸を掻き取るように寛削りを行う。13・14・16・17は、同安窯系青磁碗である。13・14は、口縁部破片。16・17は体部破片である。いずれも、焼成は良く軸の光沢は強い。15は、軸の光沢が強く外面に櫛目があるなど同安窯系の特徴があるが、外面中央に縦位の溝があるようにも見える。そうなれば、軸の発色とともに龍泉窯系の特徴となる。小片のため、詳細は不詳であるが、どちらにしても個体でみる年代観に違いは生じない。18は、同安窯系青磁皿の口縁部で、口縁部下の深い圈線部分から欠損した小片である。19～22は、内面に劃花文や雲文などを施す龍泉窯系青磁碗である。23も、龍泉窯系青磁碗であるが、外面を2回の片彫りで断面「コ」の字状に縦に削り、さらに削り残した部分に6条の櫛目を入れている。時期的には、前述した碗同様12世紀後半代である。24は、内外面無文の碗口縁部であり、焼成不良により軸が白濁する部分がある。25は、外面に錦蓮弁文を持つ龍泉窯系青磁碗で軸の発色は悪い。26は、若干焼成不良の龍泉窯系青磁碗の底部である。底部外面は無軸。軸の発色は悪く、貫入も多い。底部外面が、平坦な厚さ1cm程あり14世紀を下るものではないであろう。27は、軸がやや明るい緑色を呈した龍泉窯系青磁皿である。底部内面には櫛状工具により施文され、底部外面の軸は掻き取っている。底部内面の軸は、使用により擦れている。28は、器種不詳の龍泉窯系青磁の小片である。軸の発色は、青磁軸というより灰軸に近く、貫入もある。口縁端部は、断面三角形を呈するように2回にわたって軸を削り取っている。外面は、櫛状工具と寛で施文し、文様から12世紀と推定される。口縁端部の尖った部分に摩滅が認められ、蓋物の可能性が考えられる。

焼締陶器 (第33図29～36)

焼締陶器は、すべて知多窯製と考えられる。29～31・34が27号溝出土。他は34号溝出土である。29は、胎土から知多窯の影響を受けた地方窯の製品と判断される。胎土は、礫をほとんど含まず緻密である。また、色調は、黒灰色を呈する。焼成は良く、焼き締まっている。外面の自然軸は剥落する。頸部からの口縁部引き出しが短い。口縁部が受け口であることから13世紀前半であろう。31は15世紀。32・33は、胎土や色調から同一個体と推定される甕の肩部破片である。32の外面には、自然軸が厚く掛かり下に垂れ、断面には大き

な火彫れが生じている。33は、32より下の部分であろうか、自然釉が筋状に流れている。また、両者は、前述した83号溝出土の壺（第24図4）とも接合しないものの同一個体の可能性が高い。14世紀であろう。34は、外面に扇状のスタンプ文があり、その特徴から14世紀頃と考えられる。35は、34号溝出土の壺底部であり、3区表土、32号溝出土破片と接合している。39は、34号溝出土の壺底部で、底部外面は砂底。内面には自然釉が掛かっている。31は、外面の自然釉に白色のちじれがあり、15世紀の焼成である。

須恵器転用品（第33図37）

27号溝からは、1点須恵器を転用した円盤が出土している。時代的には古代であるが、転用品であることからここで説明しておく。

金属製品（第33・34図38～43）

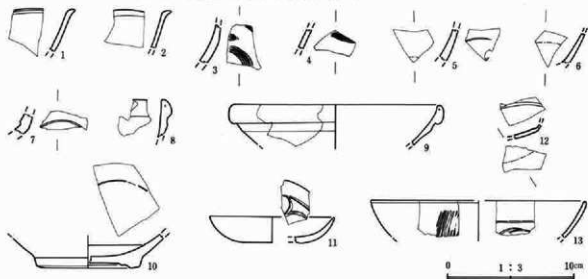
38は、1/2程欠損しているが、道具柄の黄金具であろう。39は、錆びがひどく詳細不明である。40は、角釘であろうか。41は、平面形が「T」字状を呈した不明鉄製品。38・39が34号溝出土、40は31号溝出土、41は32号溝出土。42は、「天聖元寶」、43は「政和通寶」。2点ともに北宋銭で27号溝出土。

石製品（第34図44～46）

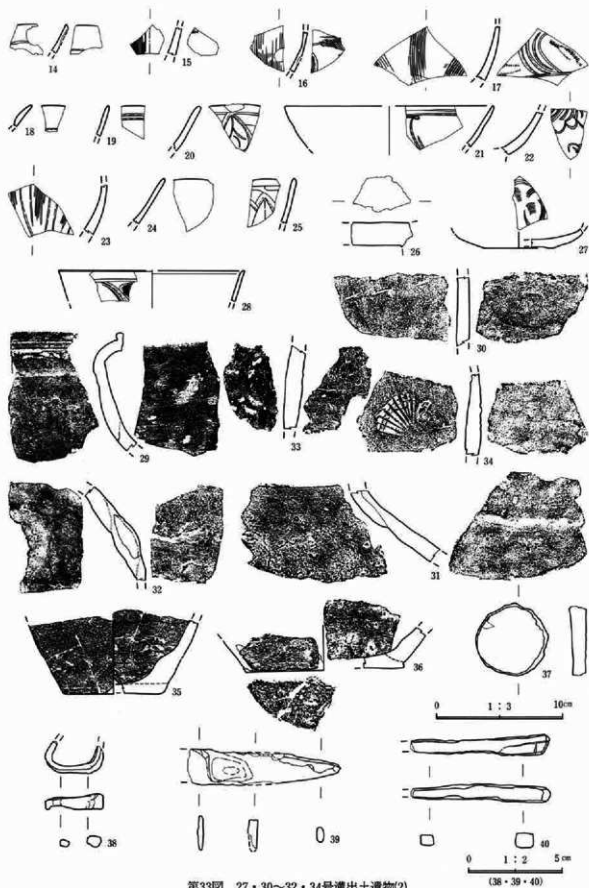
44は、二ツ岳軽石の一部が擦られている。45は、茶臼の上臼破片。46は、球状に成形された粗粒安山岩である。46は、中央部から欠損した砥石であるが、一方に敲打痕を有するくぼみがある。おそらく、砥石を転用して叩打部分から欠損したのであろう。45・47が27号溝、44・46が31号溝出土である。

所見

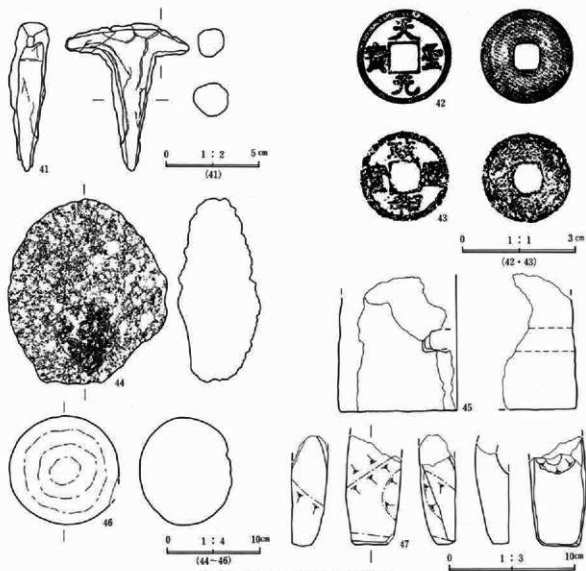
台地東縁辺で検出された溝群は、すべて同一時期に形成されたとは考えられないが、出土遺物から時期差を読み取ることはできない。中国製磁器は、25・26を除けば12世紀後半、2者を考慮しても13世紀初頭～前半と考えられる。しかし、焼締陶器には14世紀（32～34など）に属する物が多い。中には、知多窯製壺（31）のように、釉に白色の縮れがあることから15世紀と考えられる個体も存在する。以上から、本溝群の埋没時期は8・9号溝と同じ14・15世紀と考えられよう。次に、12世紀後半に属する中国製品の存在理由であるが、本遺跡では、14・15世紀の中国製磁器の絶対量が少ないこと、後述する3区の中世水田とAs-B上包含層から同時期の中国製品が多量に出土していることから、近接した調査区北側から砂とともに流下したり、縁辺にかつて12世紀後半の包含層が存在した可能性が高い。



第32図 27・30・32・34号溝出土遺物(1)



第33图 27・30～32・34号清出土遺物(2)



第34図 27・31・32号溝出土遺物(3)

64・67～74号溝 (第35図、P.L-6・7)

遺構

館の東を区画する堀(8・9号溝)の東に沿って存在する溝群、25～34号溝の下面で検出された。埋土はいずれも砂であり、67・68号溝には円礫が多量に出土している。規模・埋土・走行・断面形ともに前述の溝群と同じである。1号溝の南西で検出された82～85号溝は、67・68・71号溝の延長であろうか。

遺物

67・68号溝 (第35図1～6)

中国製磁器 (1～4)

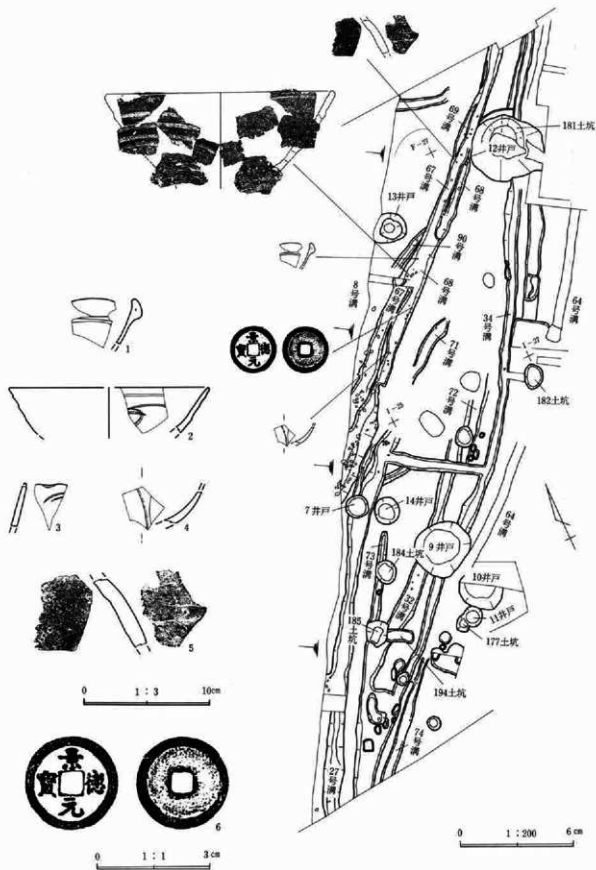
1は、大きな玉縁口縁を有する白磁である。2～4は、龍泉窯系青磁碗である。2・3は、内面に文様を有するもので3には輪花がある。4は、外面に鎮蓮弁文を有する。1が67号溝出土、2～4が68号溝出土。

焼締陶器 (5)

知多窯製甕の体部破片である。67号溝出土。

金属製品 (6)

北宋の景德2年(1005年)初鋳の「景德元寶」である。67号溝出土。



第35图 64・67-71・74号溝夹湖園・出土遺物

5. 竪穴状遺構

16号土坑 (第36図、PL-7)

遺構

本遺跡の竪穴状遺構中、唯一柱穴を有する。平面形は、短軸1.90m、長軸2.23mの隅丸長方形を呈する。長軸方位は、N-25°-Eを示す。東と南壁には、深さ10cmの浅い部分がテラス状に巡る。この部分は、浅いこともあって断面では重複を確認できなかった。柱穴は、短軸のほぼ中央に位置し、南は内傾している。深さは、南が40cm、北が50cmを測る。底面は、平坦であるが硬化部分は認められない。

遺物

焼締陶器 (1)

知多窯製壺体部下位小片である。

カワラケ (2~4)

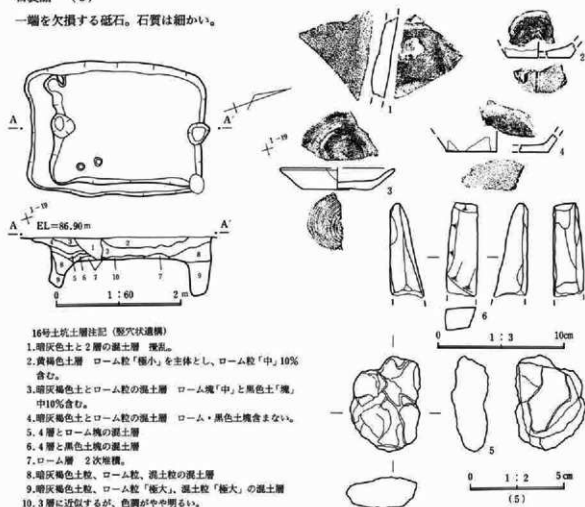
2は、底部回転糸切り。内底に強いので、外底に明瞭な圧痕が認められる。3は、底部左回転糸切り、4は、底部回転糸切りでともに圧痕や痕ではない。

鉄製品など (5)

当初、鉄鉱石とも思われたが、分析などにより鉄滓と判明した。

石製品 (6)

一端を欠損する磁石。石質は細かい。



16号土坑土層注記 (竪穴状遺構)

1. 暗灰色土と2層の混土層 探乱。
2. 黄褐色土層 ローム粒「極小」を主体とし、ローム粒「中」10%含む。
3. 暗灰褐色土とローム粒の混土層 ローム粒「中」と黒色土「塊」中10%含む。
4. 暗灰褐色土とローム粒の混土層 ローム・黒色土塊含まない。
5. 4層とローム塊の混土層
6. 4層と黒色土塊の混土層
7. ローム層 2次堆積。
8. 暗灰褐色土粒、ローム粒、混土粒の混土層
9. 暗灰褐色土粒、ローム粒「極大」、混土粒「極大」の混土層
10. 3層に近似するが、色調がやや明るい。

第36図 16号土坑実測図・出土遺物

74号土坑 (第37図、P L-7)

遺構

平面形は、長軸2.25m、短軸2.23mの隅丸方形を呈し、深さは73cmと深い。埋土上面は、溝状の擾乱により一部削られる。底面には凹凸がある。西壁には、円形を呈していたと思われる深さ25cmの土坑と重複する。当初、不整形の土坑と考えていたため断面などでの重複は確認不可能であった。遺物は、浅い土坑底面とほぼ同じレベルから出土している。このため、5・6は浅い土坑の遺物であろう。他の平面図に記した遺物は、古墳時代後期の土師器杯、奈良・平安時代の土師器壺・杯などであった。キセル火皿(7)の出土位置は不明である。本土坑からは、時期を推定しうる遺物の出土はないが、埋土から中世と考えられる。

遺物

カワラケ (1~6)

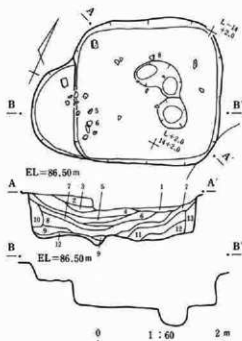
すべて胎土は「3」。2が軸樋の回転方向不明なほか、他は右回転である。5の底部外面には、幅広い圧痕がある。

金属製品 (7)

銅製のキセル火皿で、鍍金が施されている。火皿は大振りで、古い特徴を有している。火皿体部には小孔がある。

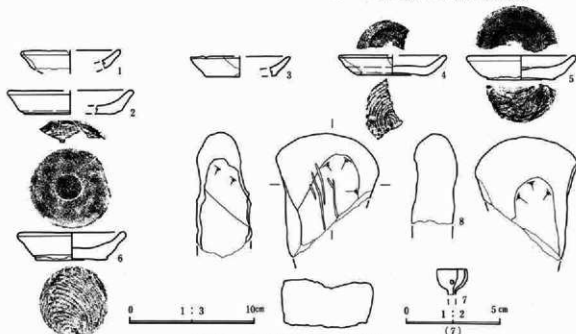
石製品 (8)

粗粒安山岩製の砥石。約1/2は欠損。1面に刃物傷がある。



74号土坑土層注記

1. 灰褐色土層 ローム粒「極小〜中」5%含む。
2. 暗灰褐色土層 ローム粒「小」5%含む。
3. 暗灰褐色土層 ローム粒「極大〜小」20%含む。
4. 暗灰褐色土層 2層に灰と黒色土塊「小」少量含む。
5. 4層とローム小塊の混土層
6. 暗灰褐色土層 4層似るが焼土粒「小」5%含む。
7. 暗灰褐色土層 6層に黒色土塊「中」25%含む。
8. 暗灰褐色土層 6層似るがローム粒「極小」少量含む。
9. 暗灰褐色土層 8層に黒色土塊「中」25%含む。
10. ロームを主体とし、8層40%含む。
11. ロームと暗灰褐色土の混土層 黒色土塊「中」25%含む。
12. ローム、黒色土、暗灰褐色土の混土層
13. ローム2次増積層に少量の黒褐色土粒を含む。



第37図 74号土坑実測図・出土遺物

81号土坑 (第38図、PL-7)

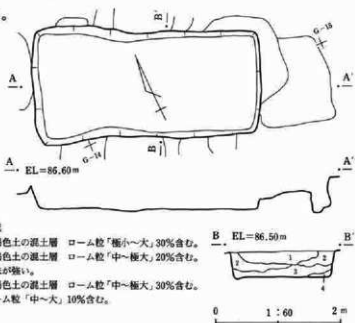
遺構

長軸3.67m、短軸1.62mのやや歪んだ長方形を呈する。長軸方位はN-67°-Wである。深さは52cmで底面はほぼ平坦である。周辺土坑との重複は、古い順から158号土坑→157号土坑→152号土坑→81号土坑である。また、80号土坑との重複は不明である。

遺物

カワラケ (1)

轆轤成形で左回転糸切りである。胎土は「1」。



第38図 81号土坑実測図・出土遺物

133号土坑 (第39図)

遺構

平面形は、長軸3.20m、短軸1.80mの長方形を呈する。長軸方位は、N-65°-Wを示す。深さは、70cmと深く、底面は僅かに緩やかな凹凸がある。

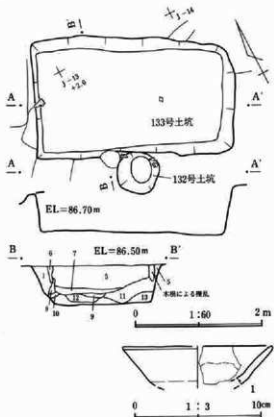
遺物

カワラケ (1)

図示し得るのは、皿1点のみであった。轆轤は左回転で、胎土は「1」である。内面には、油煙又は油が付着している。

133号土坑土層注記

- 1.灰褐色土層 ローム粒「極小」5%含む。
- 5.暗褐色土層 ローム粒「極小〜極大」40%、黒色土粒「中」5%含む。
- 6.ロームを主体とし、5層を少量含む。
- 7.ローム粒「中〜極大」を主体とし、暗褐色土と黒褐色土10%含む。
- 8.暗褐色土とロームの混土层 共に粒状の「極小」で均質。
- 9.黒褐色土層 ローム粒「極小」25%含む。
- 10.黒褐色土層 ローム粒「極小」30%含む。
- 11.暗褐色土とローム粒「極小〜極大」の混土层
- 12.11層に比してローム粒がやや多い。
- 13.暗黄褐色土層 ローム粒「極小〜大」20%、焼土粒「中」微量含む。



第39図 133号土坑実測図・出土遺物

145号土坑 (第40図、PL-8)

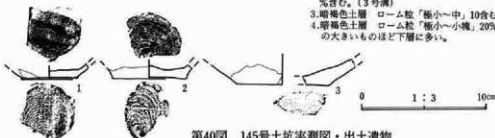
遺構

短辺を2・3号溝と4号溝で破壊され、長軸は不明であるが2カ所のコーナーから3.7m前後と考えられる。短軸は2.25m、深さは39cmである。南壁には別な浅い土坑があるが、土層断面に認められないことから145号土坑より古いであろう。図示した遺物は埋土出土である。

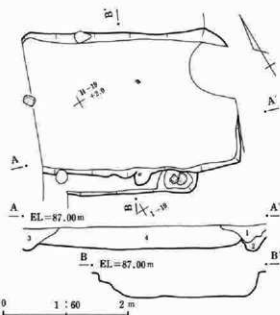
遺物

カワラケ (1~3)

1・2は、底部右回転糸切りである。1は、幅広い圧痕を有し、内底には強い圧痕を施す。2には1条の細い圧痕があるが、内底の撫では施さない。3は、回転糸切りであるが方向が不明。胎土は、1が「2」、2が「3」、3が「2?」である。



第40図 145号土坑実測図・出土遺物



145号土坑土層注記

- 1.暗灰褐色土層 ローム粒「極小~大」微量含む。(2号溝)
- 2.暗灰褐色土とローム粒「極小」の混土層 ローム粒「大」を10%含む。(3号溝)
- 3.暗褐色土層 ローム粒「極小~中」10含む。(4号溝)
- 4.暗褐色土層 ローム粒「極小~小塊」20%含む。ロームは粒径の大きいものほど下層に多い。

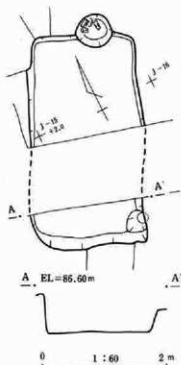
146号土坑 (第41図)

遺構

平面形は、長軸3.39m、短軸1.34mのややいびつな長方形である。深さは33cmで、底面は平坦である。5号溝と69号土坑との重複は、いずれも本土坑が古い。北壁と南隅にピットが存在するが、位置的に柱穴ではないと考えられる。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。



第41図 146号土坑実測図

153・154号土坑 (第42図、P L-8)

遺構

153号土坑と154号土坑の新旧関係は、前者が新しい。153号土坑は、長方形と推定され、短軸2.30m、深さ57cmで底面は平坦。154号土坑の平面形は不明。深さは50cmと先の153号土坑に比して5cm程浅い。

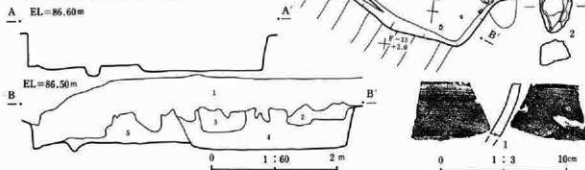
遺物

軟質陶器 (1)

胎土「1」の内耳鍋で153号土坑出土。

鉄製品など (2)

2は、153号土坑の鉄滓である。



153、154号土坑土層注記

- 1.耕作土層
- 2.暗灰褐色土層 ローム粒「小～中」10%程含む。(153号土坑)
- 3.暗灰褐色土層 ローム粒「極小～中」10%程含む。(153号土坑)
- 4.ローム粒「極小～極大」と暗褐色土の混土層 (153号土坑)
- 5.ローム粒「極小」と暗褐色土の混土層 4層に比して黒味が強い。(154号土坑)

第42図 153・154号土坑実測図・出土遺物

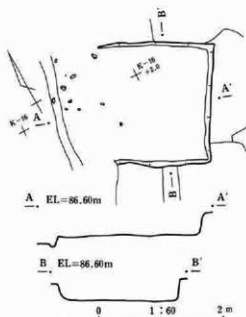
159号土坑 (第43図)

遺構

5号溝に西側を破壊され、平面形や長軸方位は不明であるが、短軸1.90mの長方形を呈するものと推定される。深さは35cmで底面は平坦である。5号溝より古い。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。



第43図 159号土坑実測図

160号土坑 (第44図)

遺構

長軸2.70m、短軸1.27mの長方形を呈する。長軸方

位はN-68°-Wを示し、深さは62cmと深い。底面は平坦である。14号土坑、2・3号溝と重複するが、いずれも本土坑が古い。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。

161号土坑 (第44図)

遺構

160号土坑に約20cmと近接し、長軸方位は約90°異なっている。160号土坑との重複がないうえ、160号土坑同様、2・3号溝より古いことから両者の前後関係は不明である。底面には、貼り床状のやや硬化した人為堆積土が認められた。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。

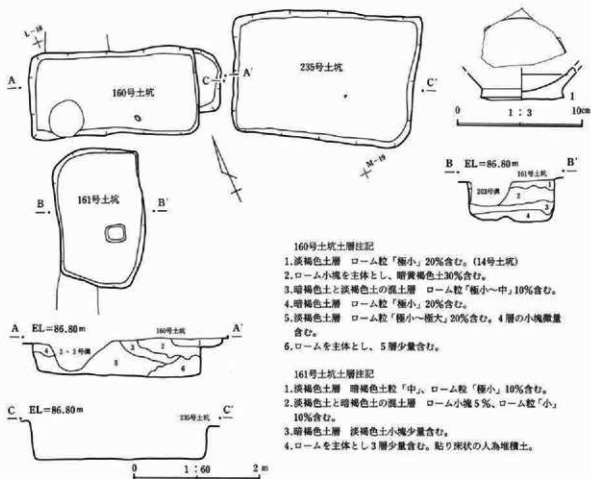
235号土坑 (第44図)

遺構

14号土坑の東40cmに位置し、85号溝と重複する。平面形はややゆがんだ長方形を呈し、規模は長軸2.90m、短軸2.02m、深さ60cmである。長軸方位は、N-63°-Wを示し160号土坑と軸をほぼ同じくする。

遺物

図示し得たのは中国製白磁碗の底部(1)のみである。1は、高台が低く外面無軸であること、高台より外側の内面に細い沈線があることから、口縁部に大きい玉縁を持つタイプであると考えられる。なお、この碗は、埋土最上層からの出土である。



160号土坑土層注記

1. 淡褐色土層 ローム粒「極小」20%含む。(14号土坑)
2. ローム小塊を主体とし、暗褐色土30%含む。
3. 暗褐色土と淡褐色土の混土層 ローム粒「極小~中」10%含む。
4. 暗褐色土層 ローム粒「極小」20%含む。
5. 淡褐色土層 ローム粒「極小~極大」20%含む。4層の小塊少量含む。
6. ロームを主体とし、5層少量含む。

161号土坑土層注記

1. 淡褐色土層 暗褐色土粒「中」、ローム粒「極小」10%含む。
2. 淡褐色土と暗褐色土の混土層 ローム小塊5%、ローム粒「小」10%含む。
3. 暗褐色土層 淡褐色土小塊少量含む。
4. ロームを主体とし3層少量含む。貼り床状の人為堆積土。

第44図 160・161・235号土坑実測図・出土遺物

200号土坑 (第45図、P.L-8)

遺構

平面形は、一部に欠き込みのある長方形を呈する。規模は、長軸3.08m、短軸1.68m、深さ45cm、長軸方位はN-25°-Wである。重複は、古い順から200号土坑→104号土坑→103号土坑であり、105号土坑との重複関係は不明である。底面は平坦である。二つのピットは、本土坑には伴わないと考えられる。

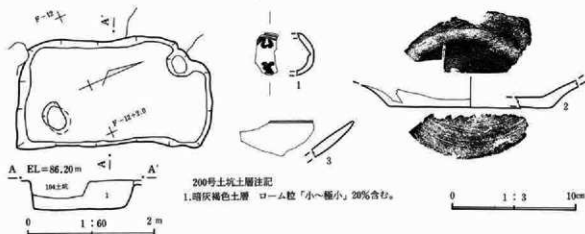
遺物

中国製磁器 (1)

1は、器種不詳の龍泉窯系青磁である。型作りで、小壺の体部のようなものである。外面には唐草状の文様を雕刻する。内外面に施軸するが、内面の上半分は軸が薄い。13~14世紀の製品であろう。接合しないが、胎土色調から同一個体と考えられる小片 (図示していない) が5号溝から出土している。

カワラケ (2)

2は、大型のカワラケであり、内面には煤が厚く付着している。胎土は「2」。底部は、回転糸切りで回転方向は不明。底部内面は撫で、底部外面には浅い圧痕が認められる。



第45図 200号土坑実測図・出土遺物

6. 土坑 (第46~57図、P.L-8~10)

土坑は、遺跡全体で約360基 (墓、竪穴状遺構を含む) 検出された。各土坑の遺構図面については、本文中ではごく一部を掲載したにすぎず、他の土坑については付図を参照されたい。また、個別の遺構説明も行わず、土坑一覧表という体裁で行った。

したがって、本文では土坑個々の説明ではなく、全体の概要と出土遺物の概要を述べることにしたい。土坑は、2区と4区の双方の台地上から検出されているが、分布密度は圧倒的に2区が高い。中でも、79号溝以北、1号溝からやや離れた西側にほとんどが集中している。これらの土坑は、当然のことながら一時期に構築されたわけではなく、233・272・276・277・280・322・328・335・341号土坑などのように江戸時代の陶磁器や現代のガラスが出土するものも存在する。しかし、その多くは年代が判然としないものが多いが、中世に構築されていると推測される。

1号土坑は、調査区北側で検出され、1/3程が調査不可能であった。出土遺物は、底面に接して判読不可能な銭貨が1枚出土している。墓と確認できた土坑とは形態が異なるうえに、骨や歯も検出されなかったことから土坑として扱った。30号土坑は、隅丸方形に近い形態の土坑であり、同位置から「永楽通寶」、「政和通寶」、「熙寧元寶」各1枚、計3枚の銭貨が出土した。これらのうち、第46図の2と3は付着して出土した。

1号土坑同様、形態的に墓と異なるうえ、骨や歯が検出されなかったことから土坑として扱った。64号土坑は、堅穴状遺構のように見えるが、3基の土坑(62・63・64号土坑)が重複した結果であり、個々の形態では堅穴とは考えにくい。92号土坑は、土坑とするより溝としたほうが良いかもしれないが、この部分でのみ確認可能であったことから土坑とした。ほぼ中央の底部に接して、第47図1の石製片口鉢が出土している。104号土坑は、不整形長方形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土内からは、カワラケ(第47図1)が1点出土している。109号土坑の埋土内からは、中国製の白磁が3点(第47図1～3)出土している。白磁は、少量ながら県内各地で認められる高台に挟りを有する皿である。焼成は悪く、陶器のような焼き上がりである。森田分類による白磁D類である。それぞれは、接合しないが同一個体の可能性がある。124号土坑は、楕円形を呈し、埋土内からカワラケ(第48図1)が出土している。123号土坑は、4号井戸と重複し、4号井戸より新しい。土坑の西よりからは、炭化米が多量に出土している。本土坑の時期は、1層中から肥前陶器の青緑釉土小片が出土しているが、両側の浅い土坑の遺物である可能性があり、詳細は不明である。121、125から127号土坑出土遺物は、1から5の5点を図示した。1は、127号土坑出土の中国明代の青花皿である。4は、同じく127号土坑出土の真岩製磁石?である。2・3は、121号土坑出土のカワラケである。5の「天聖元寶」は、125号土坑から127号土坑のいずれか判然としなかった。なお、天聖元寶の書体は篆書である。第48図1の小さい底部から体部が開くカワラケは、134号土坑埋土出土である。ややびつな長方形を呈した138号土坑出土遺物としては、3点のカワラケ(第49図1～3)を図示した。5号溝より古い144号土坑からは、第49図1・2のカワラケ2点が出土した。長方形を呈した小型の土坑である156号土坑からは、灯明に使用されたカワラケ(第49図1)と内耳鍋小片(同図2)が出土している。なお、このカワラケは、口縁端部が欠損した後も灯明皿として使用されていたようで、欠損部にまで油煙が付着していた。また、ピット状の176号土坑と浅い皿状を呈した180号土坑からは、カワラケが出土している。211・212号土坑は、共に隅丸長方形を呈し、底面はやや凹凸が認められる。重複関係は、211号土坑が古い。第50図1・3の幕末以降の煙管(3)と万古風の急須(1)は、どちらの出土か判然としない位置からの出土であった。しかし、中世のカワラケ(2)が212号土坑から出土していることから、先の煙管と急須は211号土坑の時期を示すものと考えられる。215号土坑は、不整形円形を呈し、断面形はやや深い皿状を呈する。遺物は、知多窯の焼締陶器片(第50図1)、カワラケ(2)、内耳鍋体部下位片(3)、粗粒安山岩製の窪み石(4)が出土している。213・214・221から224号土坑は、近接もしくは重複している。213号土坑は、平面形はややびつな長方形を呈し、底面も凹凸が認められる。出土遺物は美濃須衛窯窯底(第51図1)、カワラケ底部片(4)、内耳鍋の口縁部と考えられる破片(5)、中世の内耳鍋(6)である。1の壺は、他の遺物より古く混入と考えられる。214号土坑は、222号土坑より新しいが、掘り込みが浅いために図面上に重複部分は表現されていない。本土坑からは、第51図2・3のカワラケが出土している。222号土坑は、南北に長い長方形を呈すると考えられ、底面は平坦である。本土坑からは、粗粒安山岩製の磁石が出土している。223号土坑は、浅く不整形な土坑であるが、第52図8の上白が二つに割れた状態で出土した。

白は片減りが著しいうえにかなり使用されており、挽き手穴をより上位に作り直している。第52図1の軟質陶器香炉は、240号土坑出土である。また、第52図下に掲載したカワラケは、276号土坑出土である。288・289号土坑は、浅く不整形であるが、223号土坑同様石製品がままとって出土している。288号土坑からは、第53図2の磁沢石製磁石と4の粗粒安山岩製上白が出土している。4の上白は、片減りが認められると共に、中央の異常な磨滅により「ふくみ」が大きくなっている。289号土坑からは、磁沢石製磁石(第53図1)、粗粒安山岩製磁石(第53図3)、同下白(第53図5)が出土している。下白は、片減りしており、分面

線も完全にすり減っている。309号土坑からは江戸時代の内耳焙烙（第54図1）が出土している。

他の土坑出土遺物

中国製磁器（第54図1～4）

白磁は、189号土坑から出土した1点（第54図1）のみである。1は口縁端部を外側に屈曲させている。端部内面は稜をなし、先端は尖っている。白磁碗V類であろう。2・3は、内面に片彫りによる分画線を描いている。2は、口縁部下の沈線と分画線は3条と通常より1条多い。いずれも焼成はやや不良であり、2は釉も薄く白磁的な色調を呈している。龍泉窯系青磁碗I4類である。4は、龍泉窯系青磁の小片である。内面には沈線がわずかに認められる。2が7号土坑、3が157号土坑、4が203号土坑出土である。

施釉陶器（第54図5）

313号土坑から出土している。瀬戸美濃窯の陶器碗で、高台脇以下を除いて釉を掛け、口縁部に薬灰釉を流すいわゆる尾呂茶碗である。18世紀前半であろう。

焼締陶器（第54図6～12）

6・7は共に45号土坑出土の渥美窯製口縁部であり、接合しなかり同一個体の可能性が高い。79号土坑出土の8と185号土坑出土の9も渥美窯の製品である。8は、体部の小片で外面に自然釉が斑状に付着している。9は、底部から体部にかけての破片で、内面には自然釉が付着している。301号土坑出土の10、2号土坑出土の11、12号土坑出土の12は、知多窯の甕片である。10は、器壁が薄く外面には自然釉がかかっている。器壁の厚さから12世紀代と考えられる。12は器壁が厚く、外面には自然釉がかかる。

土製品（第54図13・14、第55図15・16、第56図56・57、第57図78）

13から16は、軟質陶器内耳鍋もしくは焙烙の破片を加工したものである。13・14は、丸くなるように、15は方形になるように周囲を磨いている。16はやや大型であり、周囲は細かく打ち欠いて整形している。56・57は、土師質の土鍾である。267号土坑出土の78は、フイゴの羽口である。

カワラケ（第55図17～46）

17から26は口縁部や体部の破片であるが、その形態にはかなりの差異が認められる。27は、大型の体部片である。17が11号土坑、18が123号土坑、19が73号土坑、20・46が132号土坑、21・38が216号土坑、22が179号土坑、23から25が202号土坑出土である。28から46は、底部の残る個体であり、44を除いて底部は回転糸切りである。底部外面の圧痕は30・31・34・36・46に認められ、内面の撫では29・30・34・36・37・46に認められた。28が、248号土坑、29が160号土坑、30が147号土坑、31が132号土坑、32が6号土坑、34が26号土坑、35が84号土坑、37が179号土坑、38が216号土坑、40が67号土坑、41が12号土坑、42が317号土坑、44が354号土坑、45が350号土坑、46が132号土坑出土である。

軟質陶器（第55図47～第56図48～55）

47・49・51は内耳鍋の口縁部片で、47が胎土「1」、49が胎土「1」、51が胎土「3」である。48・50・53は内耳鍋の体部片である。胎土は、48が「1」、50が「1」、53が「6」である。52は、近代以降の鉢形網と考えられ、131・132号土坑出土である。54は、胎土・焼成から江戸時代以降の製品と推定されるが器種は不詳である。75・76号土坑出土。55は、すり鉢の体部下位片であり、内面は使用により磨滅している。21号井戸出土片（第78図5）と同一個体の可能性がある。47が18号土坑、48が26号土坑、49が331号土坑、50が273号土坑、51が210号土坑、53が33号土坑、55が278号土坑出土である。

瓦（第56図58）

328号土坑出土の十能瓦である。群馬県邑楽郡大泉町周辺で大正～昭和に生産された独特な瓦であり、現

在では十能瓦を葺いている家屋は非常に少ない。

石製品 (第56図59~66、第60図67)

22号土坑出土の59は、石英の小円礫であり、製品ではない可能性がたかいか、本遺跡の堆積土中には認められない鉱物であるため取り上げた。154号土坑出土のチャート片は、周囲に剥離が認められる。火打ち石としての使用痕は認められない。85号土坑出土の61は、粗粒安山岩製の球状礫である。100号土坑出土の62は細粒安山岩製の錘であろう。235号土坑出土の63は頁岩製の砥石片である。84号土坑出土の64と243号土坑出土の65は砥沢石製の砥石である。同じく243号土坑出土の66は、頁岩製の砥石である。25号土坑出土の67は粗粒安山岩製の窪み石である。窪みは浅く、中には叩打痕が認められる。

金属製品 (第57図68~77・79)

69~73は、鍛鉄製品で釘と考えられる。69が24号土坑、70が234号土坑、71が160号土坑、72が78・79号土坑、73が313号土坑出土である。278号土坑出土の74は、銅製であること以外は不詳である。185号土坑出土の75はたがね状鍛鉄製品である。先端は欠損し、頭部に叩打痕は認められない。348号土坑出土の76はへら状鍛鉄製品である。304号土坑出土の77は、鑄鉄製品の一部である。341号土坑の79は、近代以降の包丁の一部であろう。

貨幣 (第57図80~85)

25号土坑出土の80は、998年初鋳の北宋銭「咸平元寶」である。3区174号土坑出土の81は、明銭の「永楽通寶」である。199号土坑出土の82は、1086年初鋳の北宋銭「元祐通寶」で、書体は篆書である。261号土坑からは、83と84の2枚が出土している。83は、82同様「元祐通寶」である。84は、1068年初鋳の北宋銭「熙寧元寶」である。85は、1078年初鋳の北宋銭「元豐通寶」で、書体は行書である。

土坑一覧表 1 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	押印番号
1	不明	不明	— × — × 0.65	7住居→1土坑	第46図1	第46図
2	円形?	不明	(0.8) × (0.8) × —		第54図11	
3	なし					
4	不明	不明	— × — × —			
5	長方形	N-60°-W	1.30 × 0.89 × 0.24			
6	長方形	N-6°-W	1.08 × 0.84 × 0.33		第55図32	
7	円形	不明	1.02 × 0.95 × 0.21		第54図2	
8	円形	不明	1.16 × 1.14 × 0.35	8土坑→1溝		
9	長方形	N-61°-W	0.67 × 0.51 × 0.17			
10	長方形	N-69°-W	1.59 × 0.67 × 0.14			
11	方形	N-10°-E	1.15 × 0.98 × 0.14		第55図17	
12	方形	不明	1.84 × 1.82 × 0.50		第54図12・41	
13	不整形	不明	— × — × 0.17			

土坑一覧表 2 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	押図番号
14	不明	不明	— × — × 0.12	166土坑→14土坑	内耳	
15	不明	不明	— × — × —	15土坑→2溝	第57図67	
16	長方形 長方形	N-25'-E N-25'-E	2.23 × 1.90 × 0.36 2.70 × 2.08 × 0.10			
17	長方形	N-19'-E	1.28 × 0.88 × 0.33		カワラケ	
18	不明	不明	— × — × —	18土坑→4溝	第55図47	
19	長方形	N-28.5'-E	1.45 × 0.80 × 0.48			
20	不明	不明	— × — × —			
21	方形?	N-23'-E	2.54 × 2.07 × 0.48	22土坑→21土坑→6溝	第46図1、内耳	第46図
22	不明	不明	— × — × 0.14	22土坑→21土坑→6溝	第56図59	
23	楕円形	N-35'-E	1.59 × 1.37 × 0.19	4溝→23土坑	第56図53	
24	円形	不明	1.54 × 1.45 × 0.46		第57図69	
25	円形	不明	1.10×1.08×0.16~0.52	4溝→25土坑	第57図80、カワラケ	
26	長方形	N-35'-E	1.84 × 0.9 × 0.21		第55図34、第56図48	
27	長方形	N-23'-E	1.46 × 0.93 × 0.36			
28	不明	不明	— × — × 0.20			
29	楕円形	N-25'-E	(1.17) × (0.60) × 0.27			
30	円形	不明	1.05 × 1.01 × 0.43	30土坑→5溝	第46図1~3	第46図
31	円形	不明	1.06 × 0.95 × —			
32						
33	長方形	N-41'-E	1.67 × 0.55 × —			
34	楕円形	N-50'-W	1.35 × 0.89 × 0.27			
35						
36	不明	不明	— × — × 0.55			
37	長方形	N-56'-W	1.54 × 0.50 × 0.26	135土坑→37土坑	内耳	
38	不明?	N-67'-W	1.90 × — × 0.36	39土坑→38土坑		
39	不明?	N-67'-W	1.55 × — × 0.35	39土坑→38土坑		
40	不明	不明	— × — × —	5溝→40土坑-42土坑	内耳	
41						

土坑一覧表3 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	挿図番号
42	長方形?	N-60°-W	1.63 × 0.8 × 0.13	40土坑→42土坑 45土坑→44土坑 →43土坑→42土坑		
43	長方形	N-60°-W	1.47 × 0.68 × 0.22	51土坑→43土坑 45土坑→44土坑→43土坑 →42土坑		
44	長方形	N-23°-E	2.03 × 1.04 × 0.38	45土坑→44土坑→43土坑 →42土坑、44土坑→150土坑 →57土坑		
45				45土坑→44号土坑 →43土坑→42土坑	第54図6・7	
46	不明	不 明	— × — × 0.32	46土坑→47土坑		
47	不明	不 明	— × — × 0.26	46土坑→47土坑 48土坑→47土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →47土坑	カワラケ	
48	長方形	N-22°-E	2.45 × 1.14 × 0.23	48土坑→47土坑		
49						
50	長方形	N-63°-W	1.28 × 0.77 × 0.40	52・53土坑→50土坑		
51	長方形	N-63°-W	1.57 × 0.73 × 0.42	51土坑→50土坑 51土坑→43土坑		
52	長方形?	N-63°-W	1.39? × 0.57 × 0.16	52・53土坑→50土坑		
53	不明	N-63°-W	— × — × —	52・53土坑→50土坑		
54	不明	N-63°-W	— × 0.76 × 0.48	56土坑→55土坑→54土坑 56土坑→5溝→54土坑		
55	長方形	N-63°-W	1.80 × 0.82 × 0.55	56土坑→55土坑→54土坑		
56	長方形?	N-63°-E	— × 0.68 × 0.41	56土坑→55土坑→54土坑 56土坑→5溝→54土坑		
57	長方形	N-25°-E	1.66 × 0.65 × 0.42		瀬戸尖澳陶器(灰胎陶 肥前陶器青緑釉皿)	
58	やや方形	N-23°-E	1.56 × 1.27 × 0.55			
59	長方形	N-17°-E	1.84 × 1.13 × 0.32		内耳	
60	不明	不 明	— × — × 0.31			
61	不明	不 明	— × 0.70 × —	64土坑→63土坑→62土坑 →61土坑	カワラケ	

土坑一覧表4 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	跡図番号
62	不明	不 明	— × — × 0.29	66土坑→62土坑 64土坑→63土坑→62土坑 →61土坑 155土坑→156土坑→62土坑 →69土坑		
63	不明	不 明	— × — × 0.44	64土坑→63土坑→62土坑 →61土坑		
64	不明	不 明	— × — × 0.44	64土坑→63土坑→62土坑 →61土坑、64土坑→151土坑		第47図
65	不明?	不 明	— × — × 0.25	68土坑→67土坑→66土坑 →65土坑		
66	不明	不 明	— × — × 0.48	68土坑→67土坑→66土坑 →65土坑 66土坑→62土坑		
67	長方形	N-24'-E	1.83 × 1.15 × 0.67	68土坑→67土坑→66土坑 →65土坑	第55図40	
68	不明	不 明	— × — × 0.27	68土坑→67土坑→66土坑 →65土坑		
69	長方形	N-76'-W	1.45 × 1.02 × 0.39	146土坑→69土坑 155土坑→156土坑→62土坑 →69土坑		
70	42図の中					
71	楕円形	N-40'-E	1.06 × 0.75 × 0.26		土師	
72	長方形	N-20'-E	1.60 × 1.28 × 0.75		土師、須恵	
73	不整形	N-24'-E	3.58 × 1.45 × 0.22			第55図19
74	隅丸方形	N-61'-E	2.25 × 2.23 × 0.73		カワラケ	
75	不明	不 明	— × 0.33 × 0.41	75土坑→76土坑	第57図68	
76	長方形	N-59'-W	1.30 × 0.60 × 0.46	75土坑→76土坑	土師、須恵	
77	方形	N-62'-W	1.11 × 1.00 × 0.31		カワラケ	
78	長方形	N-58'-W	1.30 × 0.93 × 0.34	78土坑→79土坑	内耳	
79	長方形	N-64'-W	2.64 × 1.10 × 0.31	78土坑→79土坑		
80	長方形?	不 明	— × 0.7 × 0.37	80土坑→81土坑 87土坑→86・83・80土坑	土師	
81	長方形	N-67'-W	3.67 × 1.62 × 0.52	80土坑→81土坑、152土坑 →81土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →81土坑	土師、須恵	

土坑一覽表 5 (單位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	探 査 番 号
82	不整形	N-24'-E	0.48 × 0.45 × —			
83	長方形?	N-25'-E	3.65? × 0.89 × 0.35	87土坑→86・83・80土坑 84土坑→83土坑 83土坑→86土坑	中世内耳	
84	不整形	N-71'-W	0.72 × 0.45 × —	84土坑→83土坑	第568235、第568264	
85	長方形	N-18'-E	1.91 × 0.55 × 0.28	139土坑→85土坑	第568261	
86	不明	不 明	— × 0.45 × 0.25	87土坑→86・83・80号土坑 83土坑→86号土坑		
87	円形	不 明	0.55 × 0.55 × 0.60	87土坑→86・83・80土坑		
88	長方形	N-53'-W	1.00 × 0.65 × 0.28			
89	方形	N-32'-E	0.80 × 0.62 × 0.38	91土坑→90・89土坑		
90	不整形	不 明	— × — × —	91土坑→90・89土坑		
91	不整形	不 明	— × — × —	91土坑→90・89土坑		
92	長方形	N-12'-E	1.36 × 0.34 × 0.37	93土坑→92土坑	第4781	第478
93	長方形	N-66'-W	2.10 × 0.76 × 0.17	93土坑→92土坑 93土坑→94土坑		
94				93土坑→94土坑 95土坑→94土坑		
95	長方形	N-48'-E	2.04 × 1.30 × 0.23	95土坑→94土坑		
96	長方形	N-29'-E	2.05 × 1.05 × 0.29	111・97土坑→96土坑 97土坑→96土坑		
97	長方形	N-26.5'-E	1.40 × 0.70 × 0.16	111・97土坑→96土坑 97土坑→97土坑		
98	長方形?	N-37'-W	1.30? × 0.64 × 0.45	98土坑→99土坑 —100土坑		
99	長方形	N-58'-W	1.25 × 0.74 × 0.29	98土坑→99土坑 —100土坑		
100	不整形	不 明	— × — × 0.38	98土坑→99土坑 —100土坑 102土坑→100・101土坑	第568262	
101	長方形	N-26.5'-E	— × — × 0.18	102土坑→100・101土坑		
102				102土坑→100・101土坑		
103	長方形	N-24'-W	1.06 × 0.61 × 0.27	104土坑→103土坑		
104	長方形	N-14'-E	1.83 × 0.70 × 0.39	104土坑→103土坑	第4781	第478

土坑一覽表6 (單位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	探 査 番 号
105	方形	不 明	0.93 × 0.85 × —			
106	不明	不 明	— × — × —			
107	長方形?	N-21'-E	0.90 × 0.68 × 0.33			
108	長方形	N-58'-W	1.24 × 0.80 × 0.18	109土坑→108土坑		
109	長方形	N-32'-E	2.90 × 1.60 × 0.21	108土坑→108土坑	第47図1~3	第47図
110	不明	不 明	— × — × —			
111	長方形	N-61'-W	1.73 × 0.68 × —	111・97土坑→96土坑		
112	不明	不 明	— × — × —			
113	不明	不 明	— × — × —			
114						
115	不明	不 明	— × — × —			
116	不明	不 明	— × — × —			
117						
118	不明	不 明	— × — × —			
119	長方形	N-24'-E	1.54 × 0.76 × 0.27	119土坑→220土坑		
120	長方形	N-61'-W	1.55 × 0.96 × 0.36	122土坑→120土坑		第48図
121	不整形	不 明	— × — × 0.21	4井戸→121土坑	第48図2・3	第48図
122	不整形	不 明	— × — × 0.21	122土坑→120土坑 122土坑→121土坑		第48図
123	長方形	N-58'-W	1.64 × 1.25 × 0.53		第55図18	第48図
124	長方形	N-24'-W	1.48 × 0.78 × 0.21		第48図1	第48図
125	不明	不 明	— × 0.90 × 0.24			第48図
126	不明	不 明	— × — × —			第48図
127	不明	不 明	— × — × 0.29		第48図1	第48図
128	不明	不 明	— × — × —			
129	不明	不 明	— × 0.64 × 0.42			
130	不明	不 明	— × — × —			
131	不明	不 明	— × — × —		土師、須恵	

土坑一覽表7 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	押込番号
132	円形	不 明	0.70 × 0.70 × 0.34	132土坑→133土坑	第55図20・31・46	
133	長方形	N-65°-W	3.20 × 1.80 × 0.70	132土坑→133土坑	中世内耳	
134	不明	不 明	— × 1.06 × 0.29		第48図1	第48図
135	楕円形?	N-56°-W	1.83 × — × 0.23			
136	円形	不 明	1.31 × 1.20 × 0.35		土師、須恵	
137				5区(1H水田面より新しい。)		
138	長方形	N-21°-E	2.28 × 1.64 × 0.31		第49図1~3	第49図
139				139土坑→85土坑		
140	長方形?	N-20°-E	0.65 × 0.17 × —			
141	長方形	N-20°-E	2.27 × 0.70 × 0.33			
142	ナシ					
143	不明	不 明	— × — × —	144土坑→143土坑		
144	不明	不 明	— × — × —	144土坑→143土坑 144土坑→5溝	第49図1・2	第49図
145	不明	不 明	— × 2.25 × 0.39	145土坑→4溝, 145土坑→2溝	カワラケ	
146	長方形	N-26°-E	3.39 × 1.34 × 0.26	146土坑→5溝 146土坑→69土坑		
147	長方形?	N-76°-W	1.61 × 1.21 × 0.42		第55図30	
148	不明	不 明	— × 0.92 × 0.25	149土坑→148土坑→5溝	土師	
149	楕円形	N-59°-W	2.05 × 1.66 × 0.55	149土坑→148土坑→5溝	土師、須恵	
150	長方形	N-26°-E	2.03 × 0.96 × 0.18		土師、須恵	
151					内耳	
152	不明	不 明	— × — × —	152土坑→47土坑 152土坑→81土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →47土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →81土坑		
153	不明	不 明	— × 2.30 × 0.57		須恵	
154	不明	不 明	— × — × 0.63		第56図60 近世・近代火鉢	

土坑一覧表 8 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	採回番号
155	不明	不明	— × 0.88 × —	155土坑→156土坑→62土坑 →69土坑	土師、須恵	
156	方形?	N-30°-E	1.41? × 1.02 × —	155土坑→156土坑→62土坑 →69土坑	第49図1・2	第49図
157	不明	不明	— × — × 0.23	158土坑→157土坑→152土坑 →47土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →81土坑	第54図3	
158	不明	不明	— × — × 0.35	158土坑→157土坑→152土坑 →47土坑 158土坑→157土坑→152土坑 →81土坑	須恵	
159	不明	不明	— × 1.90 × 0.35	159土坑→5溝	土師、弥生	
160	長方形	N-68°-W	2.70 × 1.27 × 0.62	160土坑→3溝→2溝 160土坑→14土坑	第55図29、第57図71	
161	長方形	N-26°-W	2.18 × 1.40 × 0.69		土師	
162	円形	不明	1.43 × 1.33 × 0.43?	162土坑→4溝	カワラケ	
163	なし					
164					土師、縄文	
165					土師、須恵	
166					土師	
167	4区				第55図27	
168						
169						
170		4区1住付近				
171		4区1住付近			土師	
172	楕円形	N-29°-E	0.39 × 0.26 × 0.16		土師	
173	長方形	N-26°-E	0.71 × 0.37 × 0.34		土師	
174	円形	不明	0.72 × 0.72 × 0.18		第54図13、第57図81	
175	円形	不明	0.28 × 0.28 × 0.20		土師	
176	楕円形	N-35°-W	0.75 × 0.66 × 0.32		第49図1	第49図
177	不整形	不明	— × — × 0.57			
178	長方形	N-15°-E	1.44 × 0.80 × 0.53			

土坑一覧表9 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	押込番号
179			2区溝内底部		第55図22・37	
180	方形	N-43°-E	0.80 × 0.70 × —		第49図1	第49図
181		12号井戸内				
182	楕円形	N-18°-E	1.21 × 0.97 × 0.22			
183	円形	不 明	0.84 × 0.82 × —		中世内耳	
184	2区東側					
185	楕円形?	N-24°-E	1.41 × 1.12 × 0.21		第54図9、第57図75	
186	円形	不 明	0.63 × 0.63 × —			
187	不明	不 明	— × 0.55 × —			
188	楕円形	N-26°-W	0.70 × 0.28 × —			第47図
189	不整形	不 明	— × — × —		第54図1	
190	長方形	N-24°-E	0.62 × 0.50 × —			
191	不明	不 明	— × — × 0.66			
192	不明	不 明	— × — × 0.53			
193	楕円形	N-63°-W	0.56 × 0.33 × —			
194	長方形	N-56°-W	1.50 × 0.68 × 0.16			
195	2区中央					
196						
197	長方形	N-53°-W	2.65 × 1.85 × 0.18			
198	不整形	不 明	— × — × 0.43			
199	不整形	不 明	— × — × 0.30		第57図82	
200	長方形	N-25°-E	3.08 × 1.68 × 0.45			
201						
202	不明	不 明	— × — × —		第55図23~25	
203	不明	不 明	— × — × 0.39		第54図4	
204						
205	不整形	不 明	— × — × —			
206						

土坑一覧表10 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	採掘番号
207	不整形	不明	— × — × 0.41			
208	不明	不明	— × 1.25 × 0.05			
209	不整形	N-16°-E	1.63 × 0.86 × 0.17			第52図
210	2区西側		209の西に近接		第55図33・36・43 近世京焼陶器	
211	長方形	N-23.5°-E	2.09 × 1.95 × 0.37		第50図1・3	第50図
212	長方形	N-23.5°-E	4.08 × 2.80 × 0.47		第50図2	第50図
213	長方形	不明	— × 0.65 × 0.18		第51図1・4~6	第51図
214	不明	不明	— × — × 0.40	222土坑→214土坑	第51図2・3	第51図
215	楕円形	N-50°-E	1.41 × 1.00 × 0.26		第50図1~4	第50図
216	不整形	N-48°-W	1.92 × 1.32 × 0.43		第55図21・38	
217	不整形	不明	1.24 × — × 0.32		土師、須恵	
218	不明	不明	— × — × 0.20?			
219	不明	不明	— × 1.38 × 0.23?			
220				119土坑→220土坑	土師、須恵、内耳	
221	方形	不明	1.37 × 1.35 × 0.31	222土坑→221土坑	土師	
222	長方形	N-20°-E	— × 2.15 × 0.46	222土坑→214土坑 222土坑→221土坑	第51図7 土師、中世内耳	第51図
223	長方形	N-15°-W	0.34 × 0.28 × —		第52図8 土師、内耳	第51図
224	不整形	不明	— × 0.86 × 0.24			第51図
225	円形	不明	9.10 × 8.50 × 0.53		土師、須恵	
226	不整形	N-29°-E	1.96 × 1.51 × —		大正~昭和染付	
227	方形	不明	0.28 × 0.27 × —		土師、須恵	
228					須恵	
229						
230	長方形	N-66°-W	2.20 × 1.20 × 0.63		土師	
231	方形	N-90°-W	1.48 × 1.44 × 0.28		土師	
232	長方形	N-55°-W	1.40 × 0.88 × 0.33		土師、須恵	
233	長方形?	N-70°-W	2.64 × 0.88 × 0.45		キセル	

土坑一覧表11 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	押図番号
234	円形	不 明	1.25 × 1.25 × 0.56	32住→234土坑	土師、須恵	
235		2区1調査			第568963、土師、須恵	
236		同 上				
237	長方形	N-64'-W	2.14 × 0.70 × 0.32	238土坑→237土坑	カワラケ	
238	不明	不 明	— × — × 0.13	238土坑→237土坑		
239	不整形	N-29'-E	1.25 × 0.94 × 0.14			
240	長方形	N-30'-E	1.22 × 0.83 × 0.36	240土坑→241土坑	第52図1	第52図
241	不明	不 明	— × — × 0.32	240土坑→241土坑		第52図
242	長方形	N-70'-W	2.97 × 0.64 × —	235土坑→254土坑→253土坑 →242土坑 252土坑→242土坑	第55図26	
243	長方形	N-58'-W	2.06 × 0.98 × 0.33		第568図65・66、カワラケ	第52図
244	不明	不 明	— × 0.98 × 0.14			
245	長方形	N-70'-W	2.43 × 0.66 × 0.68	248土坑→249土坑→245土坑 250土坑→245土坑		
246	方形	N-18'-E	1.26 × 1.24 × 0.66			
247	長方形	N-63'-W	1.80 × 0.65 × —	248土坑→247土坑	中世内耳	
248	不明	不 明	— × — × 0.30	248土坑→247土坑 248土坑→249土坑→245土坑	第55図28	
249	不明	不 明	— × — × —	248土坑→249土坑→245土坑		
250				250土坑→245土坑		
251	不明	不 明	— × — × —			
252	不明	不 明	— × 0.77 × —	255土坑→254土坑→253土坑 →242土坑 252土坑→242土坑→242土坑		
253	長方形	N-19'-E	1.83 × 1.02 × 0.23	255土坑→254土坑→253土坑 →242土坑		
256	楕円形	N-71'-W	1.45 × 1.14 × 0.51		カワラケ	
257						
258	長方形	N-31'-E	3.15 × 0.47 × —			
259						
260	方形	N-33'-E	1.27 × 1.22 × 0.12			

土坑一覧表12 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重 複 関 係	出 土 遺 物	挿入番号
261	長方形	N-32'-E	1.60 × 1.17 × 0.17		第57図83・84	第52図
254	不明	N-15'-E	— × 1.42 × 0.25	255土坑→254土坑→233土坑 →242土坑		
255	不明	不 明	— × — × —	255土坑→254土坑→233土坑 →242土坑		
262	長方形	N-26'-E	1.74 × 0.65 × 0.20	263土坑→262土坑		
263	長方形	N-26'-E	1.95 × 1.06 × 0.34	263土坑→262土坑		
264	長方形	N-27'-E	0.98 × 0.68 × 0.10	265土坑→264土坑		
265	長方形	N-27'-E	1.54 × 0.45 × 0.19	265土坑→264土坑		
266	長方形	N-31'-E	1.40 × 0.48 × 0.10			
267	不明	不 明	— × — × 0.19		第57図78、カワラケ	
268	長方形	N-32'-E	1.10 × 0.50 × 0.05			
269	楕円形	N-33'-E	1.07 × 0.56 × 0.08			
270	不明	不 明	— × 0.83 × 0.21			
271	長方形	N-46'-W	2.07 × 0.57 × 0.10			
272	長方形	N-57'-W	1.85 × 1.18 × 0.13		ガラス瓶	
273					第56図50	
274	方形	不 明	0.68 × 0.68 × —			
275	不整形	N-29'-E	— × 1.62 × 0.29	1井戸→276土坑→275土坑	第57図85	第52図
276	長方形	N-26'-E	3.05 × 2.05 × 0.55	1井戸→276土坑→275土坑	第52図1 近世、近代灯明皿	第52図
277	長方形	N-27.5'-E	3.04 × — × 0.25		銅板染付湯飲み	
278	不整形	不 明	2.12 × — × 0.24		第56図55、第57図74	
279	不整形	不 明	— × 0.66 × 0.11			
280	長方形	N-31'-E	2.40 × 0.65 × 0.27		近世染付碗	
281	長方形	N-66'-W	1.49 × 1.03 × 0.23			
282	不明	不 明	— × 0.49 × 0.14	285土坑→284土坑→282土坑		
283	長方形	N-28'-E	1.00 × 0.38 × 0.20	285土坑→284土坑→283土坑		
284	不明	不 明	— × — × —	285土坑→284土坑→282土坑 285土坑→284土坑→283土坑		

土坑一覽表13 (單位はm、重複は旧→新)

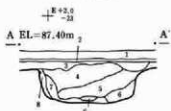
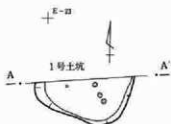
土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	押図番号
285	不明	不明	— × 0.32 × 0.07	285土坑→284土坑→282土坑 285土坑→284土坑→283土坑		
286	長方形	N-26°-E	2.23 × 0.52 × 0.18	287土坑→286土坑		
287	長方形	N-29°-E	1.76 × 0.48 × 0.26	287土坑→286土坑		
288	方形	N-28°-E	0.87 × 0.80 × 0.28	290土坑→289土坑→288土坑	第53図2・4 第55図16	第53図
289	不整形	N-45°-E	— × 0.90 × 0.16	290土坑→289土坑→288土坑	第53図1・3・5	第53図
290	不整形	不明	— × — × —	290土坑→289土坑→288土坑		
291	方形	N-60°-W	0.57 × 0.50 × 0.13			
292	方形	不明	0.85 × 0.78 × 0.11	294土坑→293土坑→292土坑		
293	円形	不明	0.71 × 0.71 × 0.54	294土坑→293土坑→292土坑		
294	長方形	N-30°-E	1.65 × 0.80 × —	294土坑→298土坑→292土坑		
295	長方形?	N-72°-W?	1.47 × 1.16 × 0.31	295土坑→296土坑		
296	楕円形?	不明	0.84 × — × 0.11	295土坑→296土坑		
297	円形	不明	0.87 × 0.76 × 0.65			
298	長方形	N-30°-W	3.33 × 0.77 × 0.30			
299	楕円形	N-35°-E	1.56 × 1.13 × 0.09			
300	長方形	N-43°-E	1.00 × 0.55 × 0.20			
301	長方形	N-66°-W	1.94 × 0.70 × 0.16		第54図10、内耳	
302	長方形	N-26°-E	1.00 × 0.67 × 0.07	303土坑→302土坑		
303	不明	不明	— × — × 0.05	303土坑→302土坑		
304				306土坑→304土坑	第57図77	
305					第55図15	
306	不明	不明	— × — × 0.19	306土坑→304土坑		
307						
308	不整形	不明	— × 1.07 × 0.28			
309	楕円形	N-25°-E	1.20 × 0.80 × 0.48		第54図1	第54図
310	長方形	N-62°-W	1.70 × 0.74 × 0.19	312土坑→311土坑→310土坑	第57図70	
311	方形	N-19°-E	1.97 × 1.80 × 0.19	312土坑→311土坑→310土坑		

土坑一覧表14 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	検出番号
312	不明	不明	— × — × —	312土坑→311土坑→310土坑		
313	長方形	N-20°-E	1.57 × 0.47 × 0.07		第54図5、第57図73	
314					カワラケ	
315	長方形	N-76°-W	1.30 × 0.88 × 0.21	316土坑→315土坑	内耳	
316	不明	不明	— × — × 0.18	316土坑→315土坑		
317	長方形	N-65°-W	1.42 × 0.73 × 0.19		第55図42	
318	円形	不明	— × 0.66 × —			
319	方形	N-70°-W	1.15 × 1.02 × 0.18		内耳	
320	長方形	N-70°-W	— × 1.29 × 0.18			
321	長方形	N-71°-W	1.78 × 1.10 × 0.08		近世、近代焼埴	
322	長方形?	N-64°-W	2.24 × 1.07 × 0.08	322土坑→325土坑	近世、近代焼埴 鉄胎陶器埴利	
323					古墳時代土師	
324	長方形	N-65°-W	1.00 × 0.81 × 0.35		土師	
325	長方形	N-34°-E	1.10 × 0.84 × 0.17	322土坑→325土坑		
326	長方形?	不明	— × 0.78 × 0.13		中世内耳	
327	不整形	不明	— × — × 0.07			
328	長方形	N-22°-E	1.43 × 0.92 × 0.24		第54図14 近世鉄胎陶 カワラケ	
329	不整形	不明	— × — × 0.38		近世軟質香伊 近世、近代陶器埴利	
330	円形	不明	1.11 × 1.08 × 0.29			
331	長方形	N-62°-W	1.62 × 1.11 × 0.22		第56図49	
332	長方形	N-12°-W	1.49 × 0.95 × 0.14			
333	円形	不明	0.94 × 0.94 × 0.14		土師	
334	長方形	N-19°-E	0.84 × 0.58 × 0.23		カワラケ	
335	長方形	N-20°-E	1.29 × 0.58 × 0.10		近世陶器埴	
336	不明	不明	— × — × 0.18			
337	長方形?	N-31°-E	0.78 × 0.54 × 0.32			

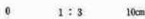
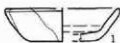
土坑一覧表15 (単位はm、重複は旧→新)

土坑番号	平面形	長軸方位	規 模 (長軸 × 短軸 × 深さ)	重複関係	出土遺物	採回番号
338	横円形?	N-20°-E	1.70? × 0.82? × 1.00		第568256	
339						
340	横円形	N-82°-W	1.49 × 1.08 × 0.37			
341	方形	不 明	1.82 × 1.59 × 0.18		第578279 ガラス瓶、藤筒碗	
342	円形	不 明	0.9 × 0.9 × 0.9		土師、須恵	
343	方形	不 明	0.93 × 0.92 × —			
344						
345	円形	不 明	1.40 × 1.50 × 0.94		第290857	第54図
346	不整形	不 明	1.87 × 0.76 × 0.18		中国白磁?	
347	不整形	不 明	— × 0.61 × 0.17			
348	不明	不 明	— × — × —		第578276	
349	横円形	N-48°-E	1.15 × 0.90 × 0.27			
350	不明	不 明	— × — × —		第558239・45	
351	横円形	N-16°-W	1.93 × 1.96 × 0.25		須恵	
352	不明	不 明	— × — × —			
353	長方形	N-4°-W	0.74 × 0.51 × 0.20			
354	方形	N-25°-E	0.67 × 0.60 × 0.22		第568244	
355	不明	不 明	— × — × —			
356	円形	不 明	(1.13) × (1.13) × —			
357	横円形	N-49°-E	0.57 × 0.44 × —			
358	不明	不 明	— × 0.76 × —		土師	
359	不明	不 明	— × 1.06 × 0.35			
360	不明	不 明	— × — × 0.29			
361	横円形	N-16°-E	1.76 × 1.00 × —			



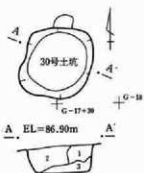
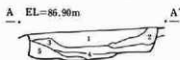
1号土坑土層注記

- 1.耕作土層
- 2.鉄分凝集層
- 3.淡褐色土層 4層に似るが斑鉄が認められる。
- 4.暗褐色土層 ローム粒「極小～中」10%含む。
- 5.暗褐色土層 ローム粒「極小～極大」10%含む。
- 6.暗褐色土層 5層に黒褐色土を少量含む。
- 7.暗褐色土層 ローム粒「極小～小」20%含む。
- 8.ローム小塊と7層の混土層



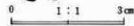
21号土坑土層注記

- 1.暗褐色土とローム粒の混土層 ロームを黒色土小塊を5～10%含む。
- 2.暗褐色土層 ローム粒「小～極大」10%程含む。
- 3.暗褐色土とローム小塊の混土層 黒色土小塊を10%程含む。
- 4.ローム粒を主体とし、3層を含む。
- 5.暗褐色土と黒色土の混土層。ローム粒「小」を5～10%含む。

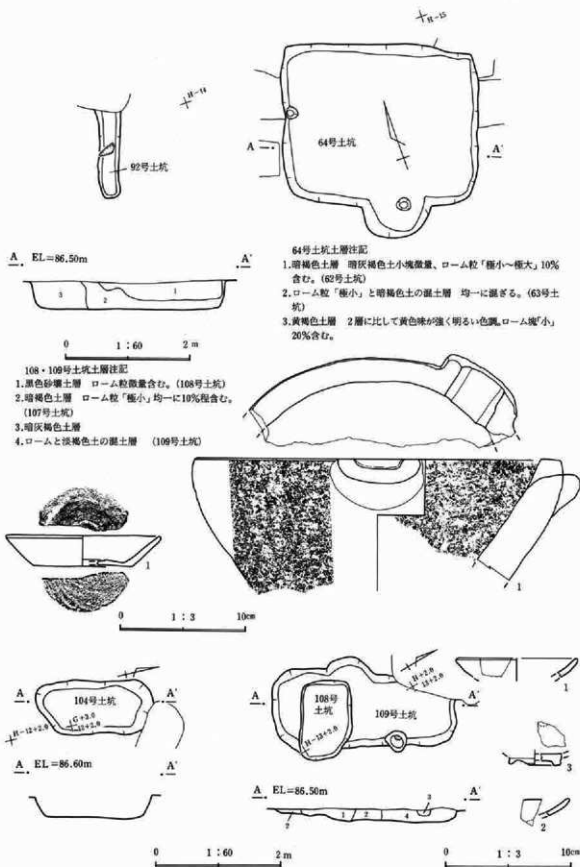


30号土坑土層注記

- 1.ロームを主体とし、灰褐色土を20%程含む。
- 2.灰褐色土層 ローム粒「極小～小塊」10%程含む。
- 3.灰褐色土層 ローム粒「極小～小塊」少量含む。



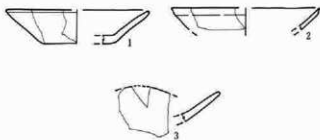
第46図 1・21・30号土坑実測図・出土遺物



第47図 64・92・104・108・109号土坑実測図・出土遺物

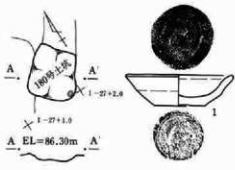
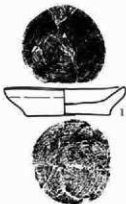
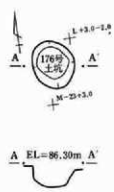
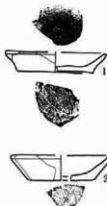
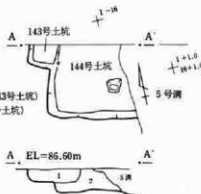


第48図 120・121・122・123・124・125・126・127・134号土坑実測図・出土遺物



143・144号土坑土層注記

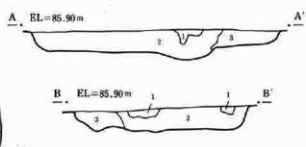
- 1.暗褐色土層 ローム粒「小〜極大」少量含む。(143号土坑)
 2.暗褐色土とローム粒「小〜大」の混土層 (144号土坑)



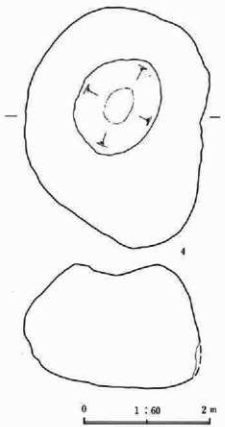
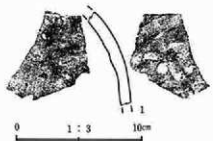
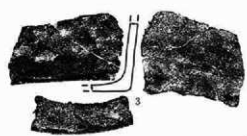
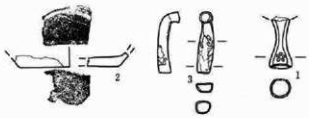
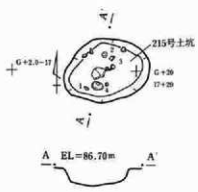
0 1 : 60 2 m

0 1 : 3 10 cm

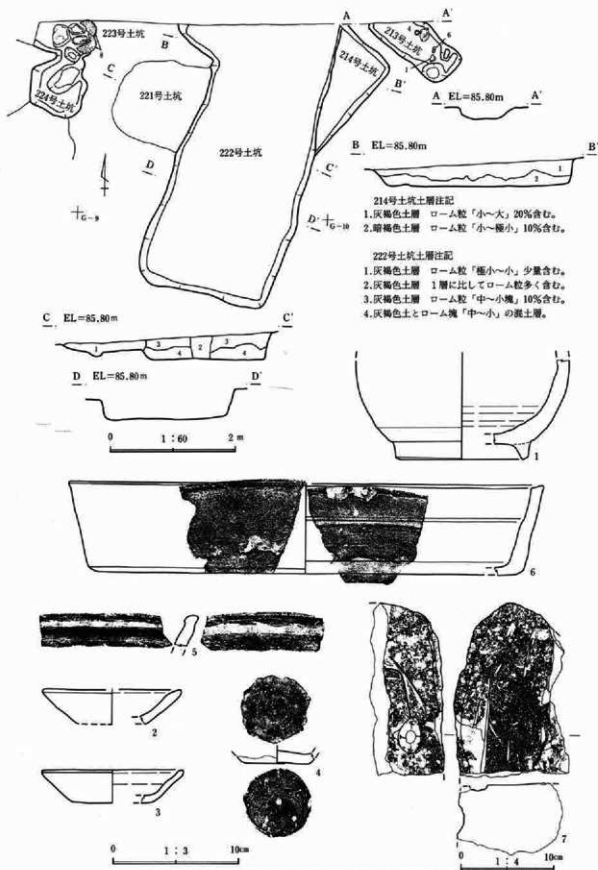
第49図 138・144・156・176・180号土坑実測図・出土遺物



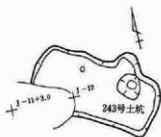
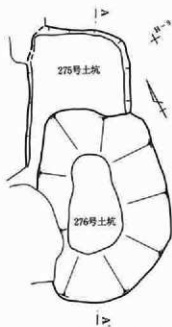
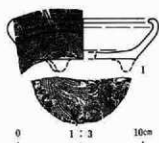
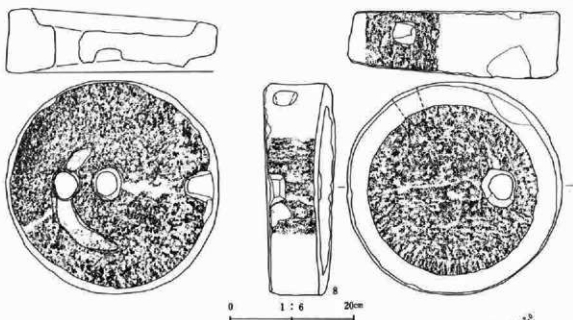
- 211・212号土坑土層注記
- 1.耕作土層
 - 2.暗褐色土層 灰褐色土小塊、暗褐色土層小塊、ローム小塊30%含む。
 - 3.暗褐色土層 灰褐色土柱状の「極大」、暗褐色土、ローム粒「極大」20%含む。



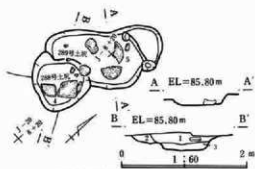
第50図 211・212・215号土坑実測図・出土遺物



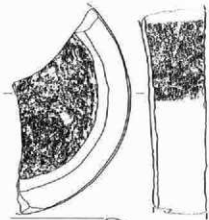
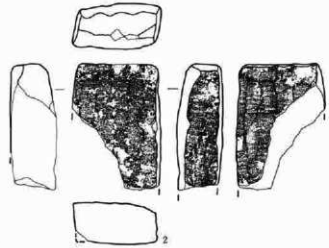
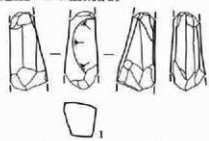
第51図 213・214・222～224号土坑実測図・出土遺物



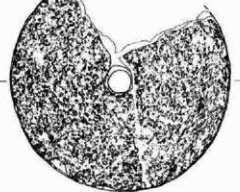
第52图 222·223·209·240·241·243·261·275·276号土坑实测图·出土遗物



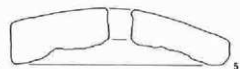
288号土坑土層注記
 1. 灰黄褐色土層 ローム粒10%含む。
 2. 灰黄褐色土層 ローム粒20%含む。
 3. 灰褐色土層 ローム粒20%含む。



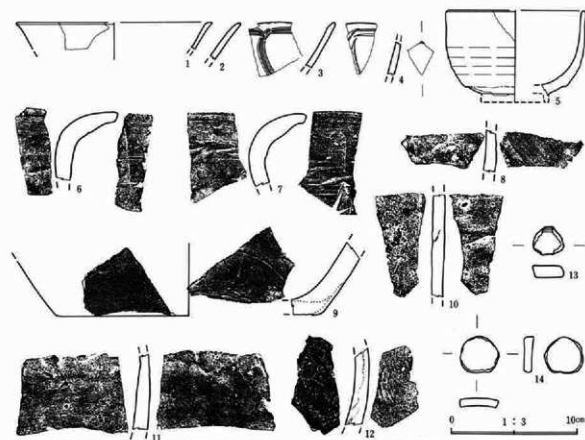
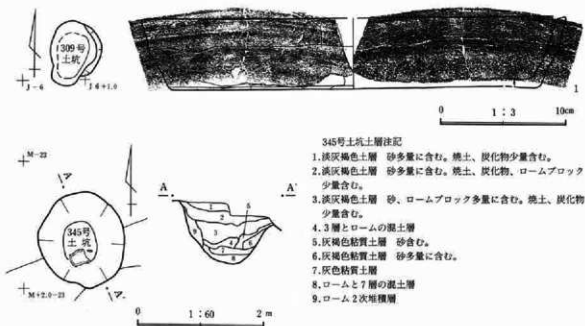
0 1 : 3 10cm



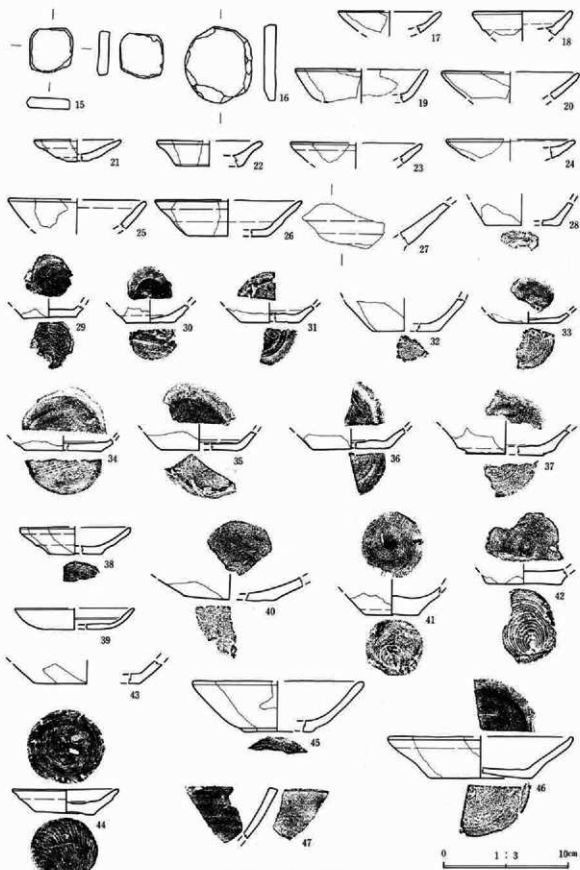
0 1 : 6 20cm
 (4・5)



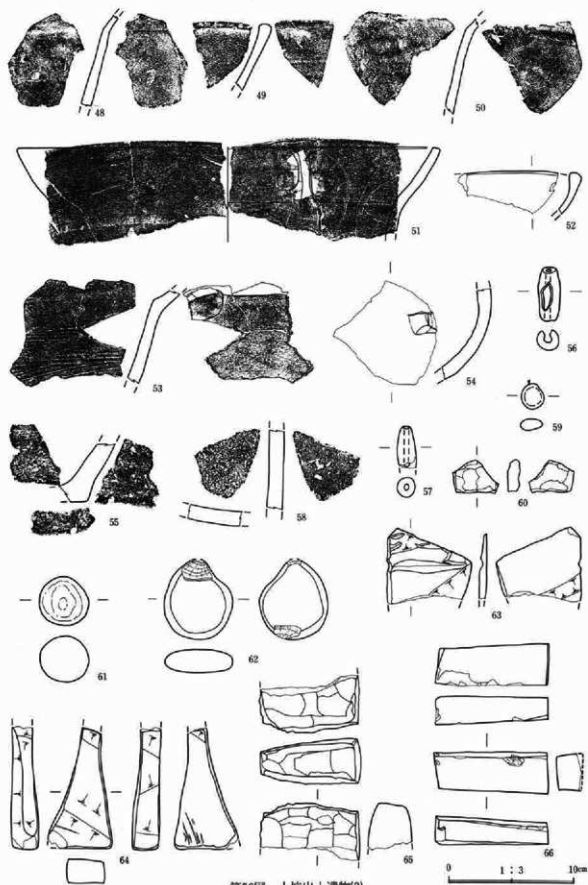
第53図 288・289号土坑実測図・出土遺物



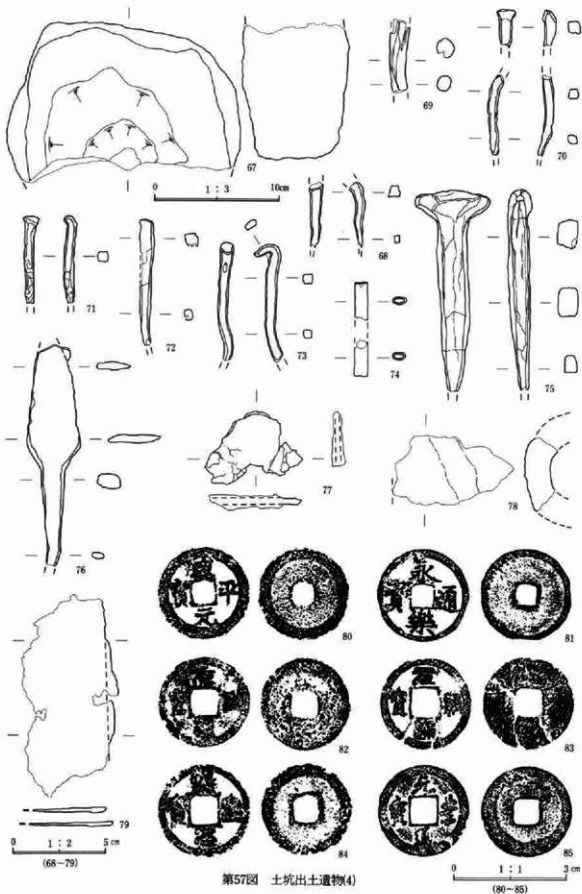
第54図 309・345号土坑実測図、土坑出土遺物(1)



第55図 土坑出土遺物(2)



第56図 土坑出土遺物(3)



第57图 土坑出土遺物(4)

7. 墓

1号墓 (19号土坑)・4号墓 (178号土坑) (第58・59図, PL-10・11, 49)

遺構

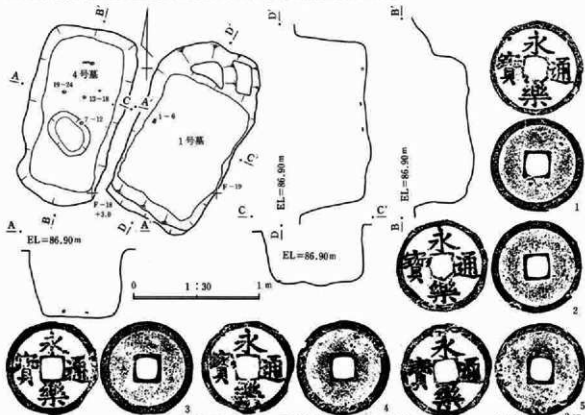
1号墓の平面形は、北壁を浅い攪乱によって破壊されているが、長軸約1.2m、短軸80cmの長方形を呈すると考えられる。底面には凹凸が認められ、深さは42~48cmである。人骨の出土はないが、渡来銭が1カ所から6枚重なって出土していることから墓と判断した。4号墓は、1号墓の西約10cmと近接して掘られている。平面形は、ややいびつな長方形を呈し、規模は、長軸1.44m、短軸80cm、深さ53~58cmである。長軸方位は、1号墓と約13°程ずれがあり、両者に時期差のあることが伺える。底面にはやはり小さな凹凸が認められる。底面北東よりの部分からは、人歯が検出された。毛抜き状鉄製品 (25) も出土している。

遺物

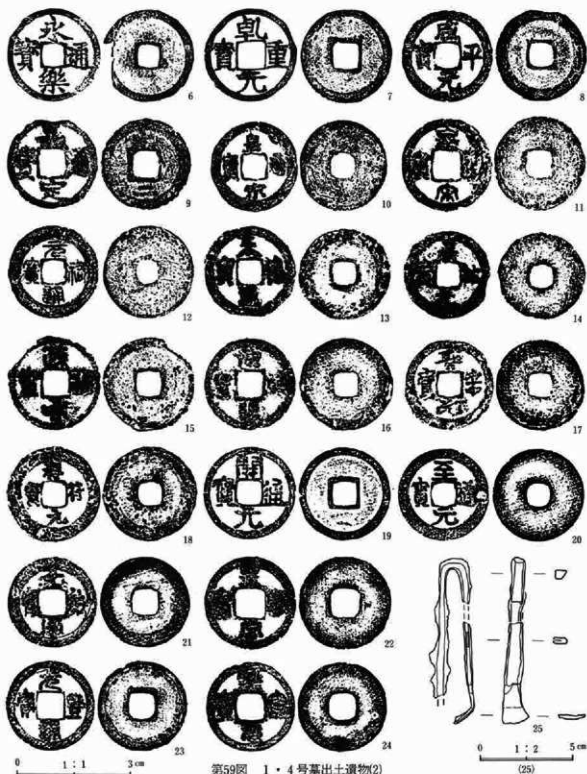
銭貨 (第58図1~第59図24)

4号墓の渡来銭は、中央の3カ所から6枚ずつ重なって18枚出土している。このうち、13~18は、1カ所糸で縛ったうえ布でくるまれていた (PL-49)。また、6~12も同様であったようで、緑青に布の痕跡が僅かに認められた。甬と渡来銭は、いずれも底面から7・8cm厚いた状態で出土している。

1~6は、1号墓から6枚重なって出土した銭である。6枚ともに明銭の「永楽通寶」である。4号墓出土の渡来銭は、唐銭の「乾元重寶」(7)、同「開元通寶」(19)、北宋銭の「咸平元寶」(8)、南宋銭の「嘉定通寶」(9)、北宋銭の「皇宋通寶」(10・11・22)、同「元祐通寶」(12・16・21)、同「天禧通寶」(13)、同「景祐元寶」(14)、同「政和通寶」(15)、同「聖宋元寶」(17)、同「祥符元寶」(18)、同「至道元寶」(20)、同「元豐通寶」(23)、同「熙寧元寶」(24)である。総数18枚の出土であるが、明銭が認められない。これは、遺構長軸のずれに認められるように、時期差の現れであろうか。



第58図 1・4号墓実測図・出土遺物(1)



第59図 1・4号墓出土遺物(2)

2号墓(27号土坑) (第60図、PL-10)

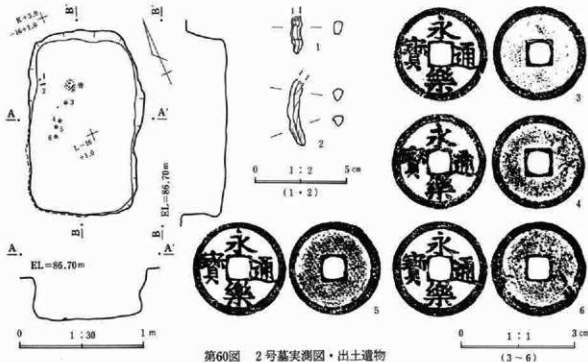
遺構

平面形は、長軸1.46m、短軸93cmの長方形を呈する。長軸方位はN-23°-Eを示し、深さは33~36cmである。底面は、小さい凹凸や緩い傾斜が認められる。底面北寄りからは歯が、西壁に接して不明鉄製品が出土している。渡来銭は、中央西寄りから1枚ずつ計4枚出土している。

遺物

金属製品 (1~6)

4枚はすべて「永楽通寶」であるが、字体に違いが認められる。鉄製品は、釘の可能性が高い。1・2共に先端部分であろうか。木質の遺存は認められない。



第60図 2号墓実測図・出土遺物

3号墓 (72号土坑) (第61図、PL-11、49)

遺構

平面形は長方形を呈するが、長軸1.60m、短軸1.28mと他の墓に比してより正方形に近い。長軸方位は、N-20°-Eを示し、深さは75cmである。遺物は、底面中央から完形のカワラケ(2)と埋土中から同小片(1)が出土している。また、北寄りからは、木質の付着した釘が4本認められた。骨は遺存しておらず、僅かに歯が中央から出土した。土坑の南には、礫の集中が認められたが、本墓に伴うものではないと考えられる。平面形、深さ、歯の出土位置から、座棺と推定される。

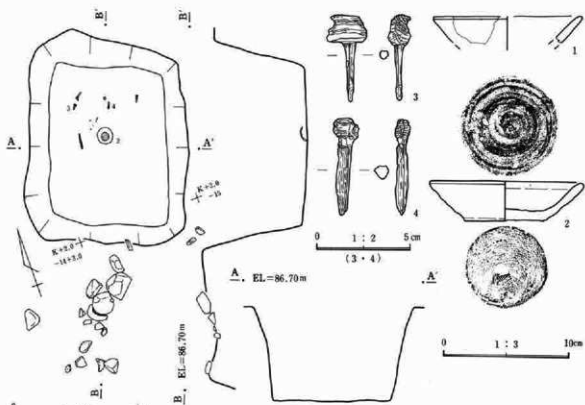
遺物

カワラケ (1・2)

1・2共に皿で、胎土は「1」である。2は、底部左回転糸切り。1は、混入である。

金属製品 (3・4)

遺存の関係で、図示し得たのは3・4の鉄釘のみである。2点共に、棺材の一部が錆びにより遺存している。3は、頭から1.9cm直交方向の木目が、その先には平行した木目が認められる。4は、頭から1.6cm直交方向の木目が、その先には平行した木目が認められる。



第61図 3号墓実測図・出土遺物

5号墓 (217号土坑) (第62図、P L-11)

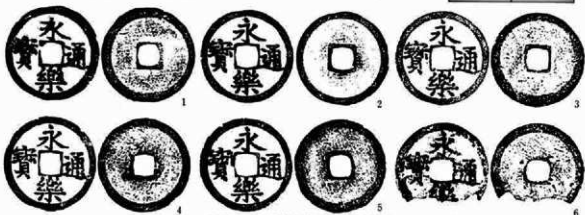
遺構

5号溝の東壁に位置し、5号溝より古い。重複のため、短軸規模は不明であるが、他より狭いようである。長軸は1.24m、深さは32cmであるが、北側はピットとの重複があるようである。骨や歯の出土はないが、2枚重なった渡来銭が3カ所から、計6枚出土している。

遺物

銭貨 (1~6)

6枚ともに「永楽通寶」である。



第62図 5号墓実測図・出土遺物

8. 井戸

1号井戸 (第63図、P.L-11)

遺構

4区で検出された唯一の井戸である。中央南寄りに位置し、平面形は、隅丸の五角形に近い。危険防止と調査の都合上、底部の検出は行えなかった。出土遺物がなく時期不詳であるが、埋土が2区の土坑に比して新しい感があり、江戸時代若しくはそれ以降と考えられる。

遺物

出土遺物はない。

2号井戸 (第63・64図、P.L-11)

遺構

7号溝と重複し、本井戸が古い。地山井筒朝顔型の掘形を有し、直径は1.75～1.60m、深さは2mである。確認面から1.3mほどの壁には、小さな「アグリ」が認められる。調査時の湧水は滲む程度であった。遺物は埋土中出土である。井戸の時期は、江戸時代と考えられる7号溝より古いことから、中世から江戸時代と考えられる。加えて、石臼の存在から14世紀以降であろう。

遺物

中国製磁器 (1・2)

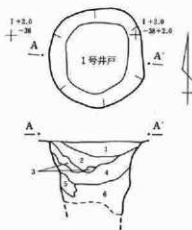
1は、焼成不良のためか釉の白濁した青白磁細片である。内面は無釉で、体部は筒状を呈するようである。外面には、篋による文様を施す。文様は、いわゆる梅瓶に多く認められるものである。13世紀。この破片と同様の発色をした青白磁片が、本遺跡の約450m西に存在する二之宮千足遺跡¹⁾からも出土している。2は、器種・時期ともに不詳である。両面に施釉され、片面には轆轤目状の明瞭な凹凸が認められる。焼成不良もあって青磁か白磁かも不詳である。

石製品 (3)

直径32cm程の粉挽上臼の約1/2破片である。擦り面の剥落が多く、片割りの度合は不明である。白の目は擦り減って見えない。

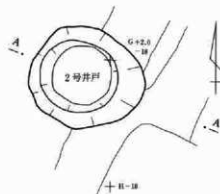
註

1. 朝鮮馬場埋蔵文化財調査事業団 「二之宮千足遺跡」 1992



1号井戸土層注記

1. 褐色砂壤土層 ロームブロック多量に含む。硬質。
2. 褐色砂壤土層 ロームブロック多量に含む。やや軟質。
3. 黒褐色土層 ローム粒少量含む。砂含む。
4. 黒褐色砂壤土層 焼土・ロームブロック含む。
5. 褐色土層 焼土・ロームブロック含む。
6. 黒褐色砂壤土層 焼土・ロームブロック多量に含む。



2号井戸土層注記

1. 灰褐色土層 ローム中のやや赤味を帯びた部分を粒状に10%程含む。6号溝。
2. 灰褐色土層 ローム粒「小」微量含む。7号溝。
3. 灰褐色土層 2層に比してやや黒味があり、ローム粒「小」10%程含む。
4. 暗褐色土と灰褐色土の混土層 ローム粒「極小～小塊」10%程含む。
5. 暗褐色土層 灰褐色土「小塊」20%程含む。
6. 暗褐色土層 灰褐色土「小塊」30%程含む。

第63図 1・2号井戸実測図

3号井戸 (第65・66図、P.L-51)

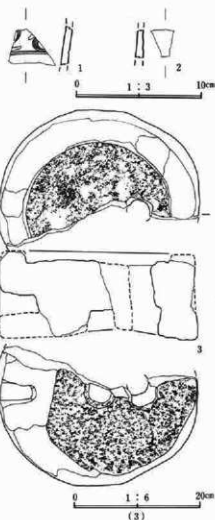
遺構

15号住居南西隅に位置する直径約90cm、深さ1.6m程の小さい井戸である。新旧関係は、本井戸が新しい。確認面から1m程の所には小さい「アグリ」が認められる。検出時の湧水層は、底から50cm以下で1.0l/minの湧水があり、水位も底から50cmであった。底から50cm程までは、直径10～30cmの円礫が投げ込まれていた。しかも、これらの礫の多くが被熱によると思われる赤変と表面の剝離が認められた。

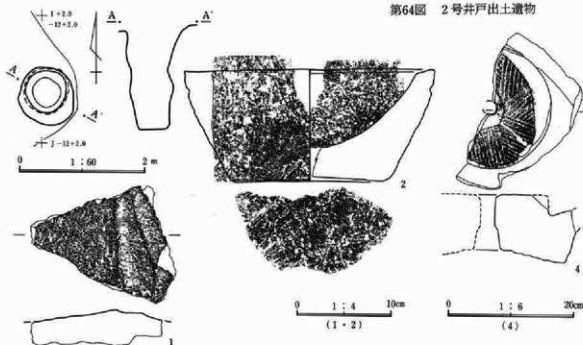
遺物

石製品 (1～8)

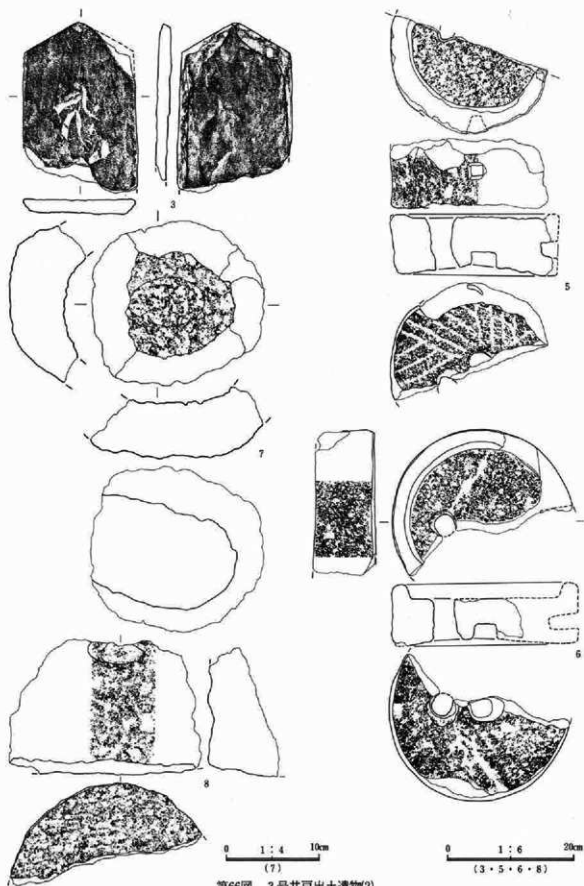
1は、形状不明の砥石状石製品である。擦り痕は、断面「U」字状にくぼんだ部分にのみ認められる。2は、石鉢である。底部から体部下位内面には、擦った痕跡があり、すり鉢としても使用したのであろう。片口部分は遺存していない。3は、一尊種子と蓮座の一部が残る板碑である。4は、7～12本1単位6分画の茶白型の下白である。はんざりは欠損。5～6は、共に粉挽きの上白である。5は、6分画で挽き手を付け替えている。6の目は摩滅しており、分画は不明である。直径は29cmである。残存部での片減りは殆どない。7は、鉢状を呈すると思われるが、石鉢に比して石質や加工が非常に粗い。8は、不明石製品である。



第64図 2号井戸出土遺物



第65図 3号井戸実測図・出土遺物(1)



第66图 3号井戸出土遺物(2)

4・42号井戸 (第67~69図、PL-12、51・52)

遺構

121・122号土坑と重複し、本井戸が最も古い。堀形は、地山井筒朝顔型であるが、開口部は大きく開いている。確認面から1m以内の埋土中からは、遺物がまとまって出土している。確認面からの深さは1.8m、底から50cm部分に湧水層がある。検出時の湧水量は2.0l/min、水位は底から50cmである。

42号井戸は、4号井戸に25cmと近接している。堀形は地山井筒円筒型であり、規模は直径約1.45m、深さ2mである。本井戸は、121・123号土坑と重複し、いずれも本井戸が古い。堀形は、地山井筒円筒型で、深さは、確認面から1.95mである。検出時の湧水層は底から40cm以下、湧水量は2.0l/min、水位は底から60cmであった。

遺物

4号井戸埋土上層には、軟質陶器内耳鍋を中心とした遺物が廃棄されていた。

瓦 (1~3)

図示した3点は、いずれも平瓦である。胎土は、1・2が「1」、3が「2」である。1は、全形を知り得る数少ない例で、上端幅25.7cm、下端幅22.9cm、上端厚2.9cm、下端厚2.7cm、長さ31.1cmを測る。凹面は、丁寧な調整で、布目と思われる痕跡を僅かにとどめる程度である。撫で方向は縦であるが、側縁は強く、上下端は横方向に撫でる。端部は糸切りであるが、すべて撫でている。凸面は、上端から下端に向かって僅かに糸切り痕が認められる。離れ砂は、胎土中に含まれるものと同じであり、撒き方には粗密がある。被熱しているようである。2は、上端部のみである。上端幅25.9cm、同厚2.7cmを測る。特徴は1と同じであり、1同様被熱している。3は、胎土の異なる上端右側破片である。上端厚2.6cm。1・2に比して焼き締まり、凸面には、糸切り痕が残る。また、上端中央部には、欠損のため不明であるが、叩目らしきものも認められる。離れ砂は目立たない。これらの瓦は、全形の判明する1の調整痕や長さと上下端の比率から、室町時代頃と推定され、この時期は、伴出遺物の年代とも矛盾しない。

カワラケ (4・5)

4は、胎土「1」で底部左回転糸切り。5は、大型品で胎土は「2」。内面は、油煙若しくは油の付着により黒くなる。底部は、回転糸切りであるが回転方向は不明。

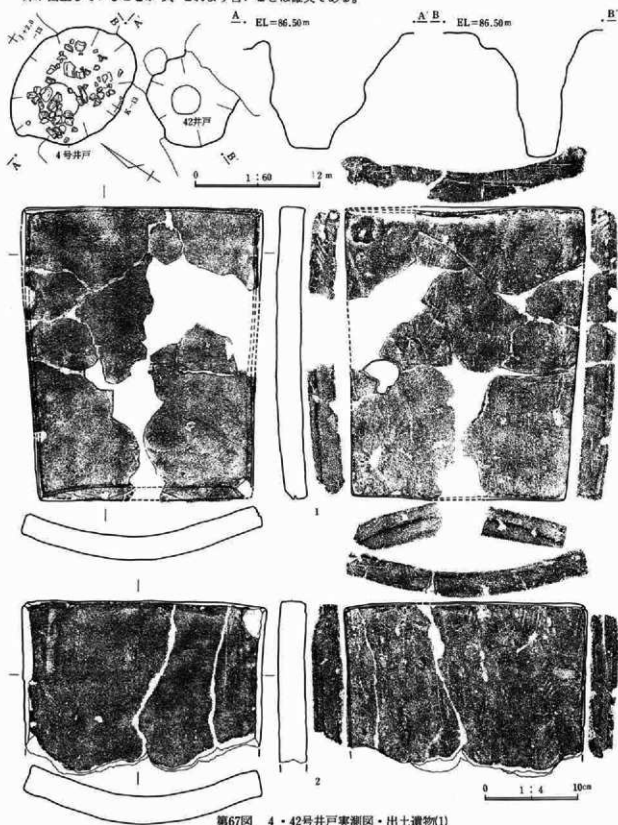
軟質陶器 (6~15)

6は、器壁の薄い製品で、口縁部は肥厚する。胎土は「4」である。焼成は、鍋に似るが、端部の形状や傾きが異なる。器種は不詳であるが、中世の上野国における器種構成から考えるとすり鉢の可能性もある。7は、すり鉢部品の小片である。胎土は「1」で、接合しないが表土出土の第108図64と同一個体であろう。内耳鍋は、8~15の8個体を図示した。胎土は、「1」が8・10・15、「4」が9・11・12・13・14である。11以外は、口縁部から体部外面に煤が付着する。しかし、底部の遺存する12・13・15では、体部外面に厚く煤が付着していても底部外面には全く付着しておらず、底部外面は赤褐色に変色しているのみである。なお、9・13・14・15は16号井戸と、11は237号土坑と接合関係がある。

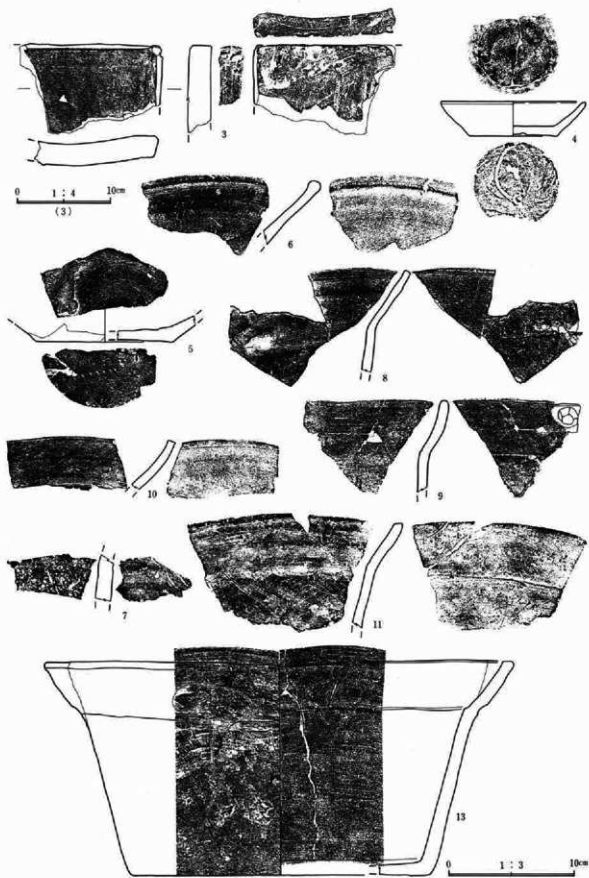
石製品 (16・18)

16は、くぼみ部分に叩打痕を有する粗粒安山岩製の不明石製品である。17は、粉挽下白破片である。推定直径は約30cm、周縁の高さ6.4cm、推定ふくみは3cmである。目の数と分画数は不明。底部外面には、転用によると見られるくぼみが2カ所ある。16と同様な用途に使用されたものか。18は、板碑の下部破片である。右側縁は欠損する。「五年三月日」の記年が残る。裏には、幅1.8cmのノミ状工具痕が残る。

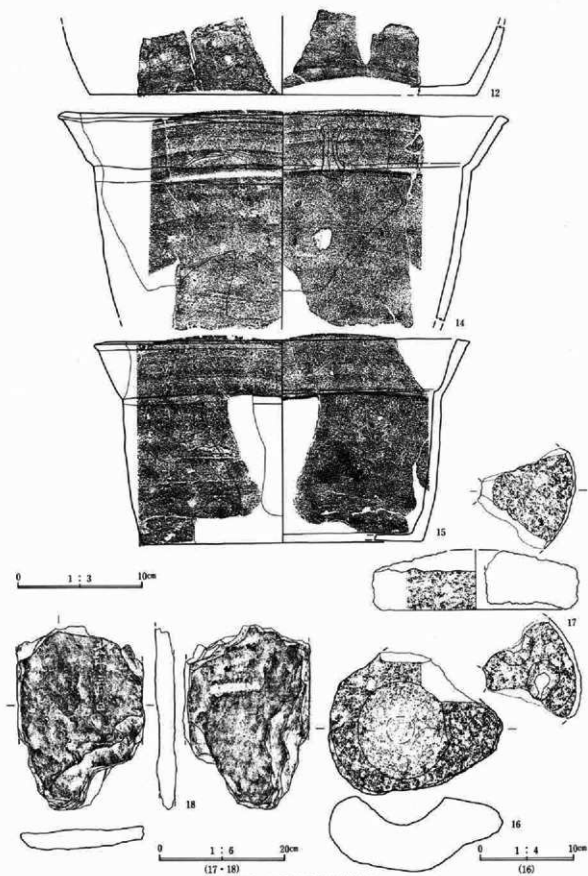
42号井戸からは、古代の土師器片が3点出土したのみで、図示しうる遺物は出土していない。重複する123号土坑、若しくは123号土坑より新しい浅い土坑から、17世紀後半から18世紀前半の唐津系青緑釉皿の細片が出土していることから、これより古いことは確実である。



第67図 4・42号井戸実測図・出土遺物(1)



第68图 4号井戸出土遺物(2)



第69图 4号井戸出土遺物(3)

5号井戸 (第70図、PL-12)

直径1.1~1.2mの不整形円形を呈する。検出時の深さは1.2mと浅いが、5号溝と重複しているため本来は2m前後であったと考えられる。遺物の出土はないが、5号溝プラン確認時に検出できなかったため、5号溝より古いであろう。湧水量は少なく、滲み出る程度である。

遺物

遺物の出土はない。

5号井戸土層記

1. 褐色土層 ローム粒少量含む。
2. 黒褐色土層 ローム粒少量含む。
3. ローム粒と砂粒、灰褐色粘質土粒の混土層
4. 淡灰褐色粘質土層 ローム粒、砂含む。

6号井戸 (第70図、PL-12)

遺構

5号井戸同様、5号溝より古いと思われる。確認面での平面形は、直径2mの円形を呈する。堀形は、地山井筒朝顔型で、深さ2.55mである。検出時の湧水層は、底から60~80cmの間で、自然水位は、底から1mである。湧水層直下には「アグリ」が認められる。また、井筒は斜めに掘り込まれている。

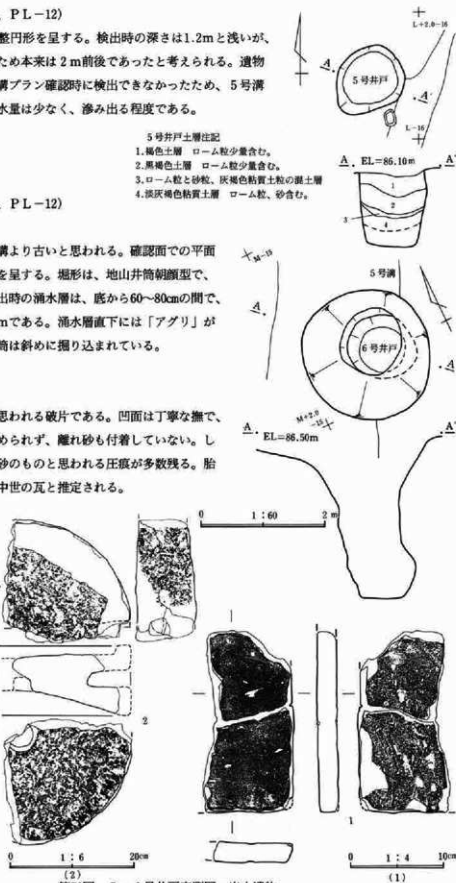
遺物

瓦 (1)

胎土「2」の平瓦と思われる破片である。凹面は丁寧な撫で、凸面には糸切り痕は認められず、離れ砂も付着していない。しかし、表面には、離れ砂のものと思われる圧痕が多数残る。胎土・調整・焼成から、中世の瓦と推定される。

石製品 (2)

粉挽き上白の1/4程度の破片である。目や分面数は不明。ふくみは、かなり大きいようである。周縁部は勿論よく擦れているが、本来あまり擦れないはずの軸受けと周縁の中間部分には、同心円状の擦れ跡が垢本にも現れるほど明瞭に残る。上下白の調整不良であろう。



第70図 5・6号井戸実測図・出土遺物

7・14・48号井戸 (第71図, P L-12)

遺構

2区東端、すなわち8・9号溝の東に接するように位置し、3基とも近接して掘削される。最も5号溝に近い7号井戸は、直径1.1mの円形である。危険防止と調査の都合上、底部の検出はできなかった。重複関係は、27号溝より古い。底部の確認をしていないが、埋土に砂を多く含んでいることから、8・9号溝東の溝群に近い時期であろう。遺物の出土はない。

14号井戸は、直径1.2mの円形を呈する。掘形の断面形は、やや上が開き、深さは1.1mである。埋土上層には砂の堆積が認められ、73号溝の延長であるかもしれない。涌水は、滲む程度である。遺物の出土はないが、埋土上層に砂層が認められることから溝群より古いと考えられる。また、埋土上層を除いて砂の堆積が認められないことから、先の7号井戸より古い可能性もあろう。

48号井戸は、長径2.3m、短径1.7mの楕円形を呈する。深さは1.15mであるが、最深部は台地側に偏っている。一方、谷地側は緩い傾斜となっており、後述する溜井の12号井戸と同様な形状を呈している。したがって、48号井戸は、形状と位置から溜井と考えられる。出土遺物や、埋土中のテフラがなく時期は不詳であるが、砂の堆積が認められることから、As-B堆積以降、8・9号溝東の溝群以前であろう。

遺物

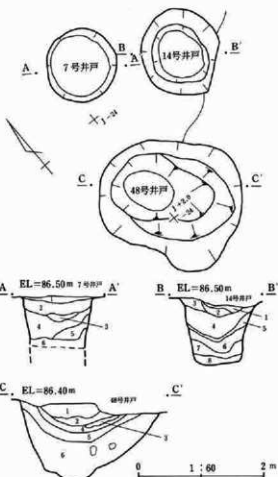
出土遺物はない。

8号井戸 (第73図, P L-12)

遺構

3区で検出された唯一の井戸である。直径85cmの円筒形を有するが、深さ65cmまでで危険防止と調査の都合上、調査を進めなかった。調査範囲での遺物の出土はない。したがって、遺物からの時期推定はできない。しかし、確認が後述する12世紀後半の包含層調査中であつたことから、上層の13世紀前半代から12世紀後半の掘削であろう。

遺物



7号井戸土層注記

1. 褐色土と灰褐色土の混土層 黄褐色砂含む。
2. 暗褐色砂層 ローム塊「小」微量含む。
3. 3層に炭化物粒多量に含む。
4. 灰褐色壤質砂土層 焼土粒、炭化物粒含む。ローム塊「小」含む。
5. 灰褐色壤質砂土層 焼土粒、炭化物粒含む。ローム粒「中」5%程度含む。
6. 灰褐色壤質砂土層 焼土粒、炭化物粒含む。ローム粒含まない。

14号井戸土層注記

1. 灰褐色土層 27号溝。
2. 灰褐色土層 ロームブロック含む。下部に砂層堆積。73号溝か。
3. 灰褐色土層 ロームブロック含む。
4. 褐色土とローム、黒灰色土の混土層 焼土、炭化物を含む。
5. 灰色粘質土層 ローム粒含む。
6. 灰色粘質土層 ローム粒を少量含む。
7. 灰色粘質土層 ロームブロック含む。
8. 灰色粘質土層 ロームブロック少量含む。

48号井戸土層注記

1. 暗褐色土層 白色軽石を多く含む。ローム粒もみられる。
2. 暗褐色土層 ロームブロック多く含む。
3. 暗褐色土層 ローム粒を少量含む。砂質層。
4. 暗褐色土層 粘質土層。
5. 暗褐色土層 ロームを帯状に含む。粘質層。
6. 暗褐色土層 砂層と粘質層の互層。

第71図 7・14・48号井戸実測図

9号井戸 (第72図、PL-26、52)

遺構

確認面での平面形は、直径2.9m前後の円形を呈する。しかし、底部は台地側に偏し、規模も長径1.45m、短径1.1mと小さく、平面形も楕円形である。深さは、1.75mである。調査時の湧水層は底面から20cm、量は3.5l/min、水位は底面から45cmであった。埋土には、砂層が認められることから、台地縁辺溝群とほぼ同時期と考えられ、遺物からは13世紀前半と考えられる。位置と形態から、溜井と考えられる。

遺物

中国製磁器 (1~6)

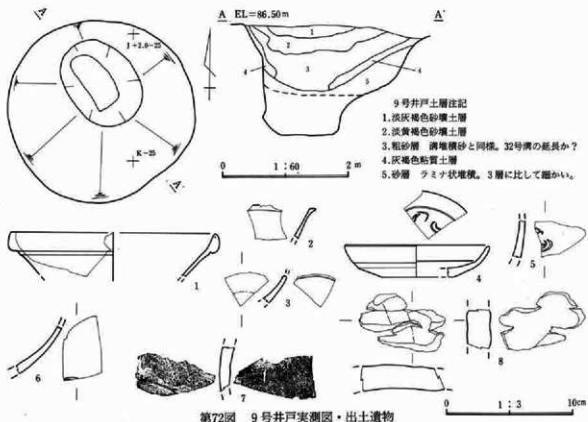
1は、白磁碗IV類であり、内外面の軸に擦れが目立つ。2区表土出土破片と接合している。2は、同V類かと思われる口縁部小片であり、軸はやや白濁し光沢も少ない。3は、VI類と考えられる皿で、外面下位は無軸である。内面には、やや深い凹線が写る。胎土は十分に磁化しておらず、軸も緑色を帯びている。4は、白磁皿V類であろう。内面には、片彫りであろう文様を施す。外底の軸は掻き取る。5・6は、龍泉窯系青磁碗I類の体部破片である。5は、焼成不良で内面に片彫りの文様を有する。6は、内外面無文である。

焼締陶器 (7)

渥美窯製甕の体部破片である。接合しないが、52号井戸出土の第95図1と同一個体の可能性がある。

石製品 (8)

滑石製石鍋の小片である。外面には成型時の工具痕が残り、内面は平滑に仕上げられている。内外面の調整、成型痕と器壁の曲がり具合から、石鍋と判断した。



第72図 9号井戸実測図・出土遺物

13号井戸 (第73図、P.L-13)

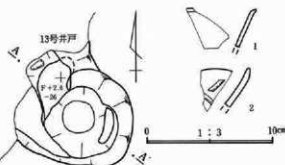
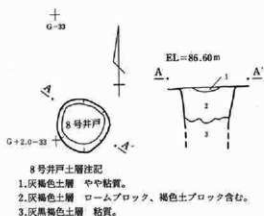
遺構

5号溝東に位置し、5号溝と一部重複する。また、27号溝は埋土上層を掘り込んでいる。新旧関係は、いずれも本井戸が古い。平面形や断面形は、他の井戸と異なっている。埋土は、底部にまで砂が認められ、中にはラミナ堆積が認められ、流水によって埋没したことが伺える。これは、埋没時期が、台地縁辺溝群の埋没時期と大きな時間差がないことを示している。深さは、1.10mである。なお、5層中から馬歯が出土している。

遺物

中国製磁器 (1・2)

1は、白磁碗口縁部破片である。端部は、外側に小さく折り曲げ、平坦面を作る。内面器表は、虫食い状に剝離する。白磁碗V型であろう。2は、龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。口縁部は内湾し、外面には片彫りによる蓮弁文を施す。鈎の存在は、細片のため不明であるが、蓮弁を構成する片彫りの幅が狭く、14世紀のものであろう。



15・41号井戸 (第74図)

遺構

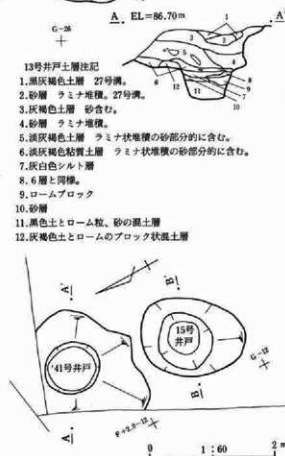
2区の調査区北側に位置し、確認面において15cmと近接する。15号井戸の掘形は、地山井筒朝顔形である。開口部は、長径1.65m、短径1.25mの楕円形となって開く。深さは1.95m、調査時の湧水層は底から39cm以下、自然水位は底から88cmである。湧水量は、2.0l/minである。

41号井戸の掘形は、地山井筒朝顔形と考えられ、開口部は、確認面が大きく広がるが、攪乱のため規模は不詳。下部の井筒が円筒形になる部分では、直径80~90cmと小さい。深さは1.75mであり、湧水層は底から20cmの範囲である。なお、調査時の自然水位は、底から79cmであった。

遺物

染付 (1)

遺物は、図示した染付が15号井戸から1点出土して



第73図 8・13・15・41号井戸実測図・出土遺物

いるのみである。1は、製作地不詳の具須を吹き付けA、E.L.=86.30m
た破片である。年代は、胎土・吹き墨の状態から大
正から昭和と考えられる。

16号井戸 (第75図、P.L-53)

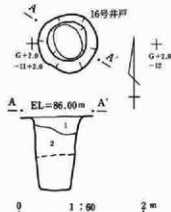
遺構

開口部の平面形は、直径95cmの円形を呈する。深さは1.15m、検出時の湧水層は底面、自然水位は底から90cm、湧水量は1.0l/minであった。

遺物

軟質陶器 (1)

1は、内耳鍋である。口縁部のくびれは深く、内面の段差も明瞭である。胎土は「1」である。本資料は、4号井戸、75・76号土坑、5号溝出土破片と接合している。図示したのは1のみであるが、4号井戸の中で図示した第68・69図9・13・14の3点も本井戸出土資料と接合している。したがって、本井戸の埋没時期は、4号井戸とほぼ同時期、若しくは4号井戸の遺物が埋土上層であることを考慮するとやや後に埋没したと考えられる。



- 16号井戸土層注記
1. 灰褐色土層 ローム粒「小」少量含む。
2. 灰褐色土層 ローム粒「小〜中」微量含む。

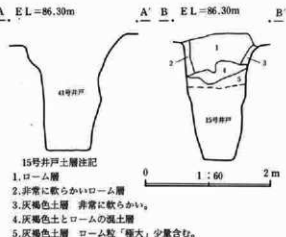
17号井戸 (第75図)

遺構

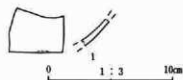
確認面での平面形は、長径1.10m、短径80cmの卵形を呈する。深さは、1.35mである。検出時の湧水層は底面、水量は滲む程度である。

遺物

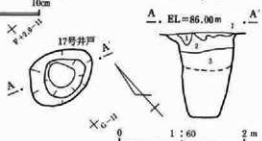
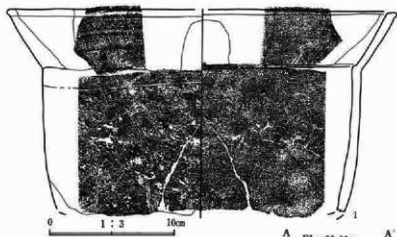
遺物の出土はない。



- 15号井戸土層注記
1. ローム層
2. 非常に軟らかいローム層
3. 灰褐色土層 非常に軟らかい。
4. 灰褐色土とロームの混土層
5. 灰褐色土層 ローム粒「種大」少量含む。



第74図 15・41号井戸断面図・出土遺物



- 17号井戸土層注記
1. 明治時代以降の擾乱
2. 淡褐色土と黒褐色土の混土層 ローム小塊少量含む。
3. 暗褐色土層 ローム小塊少量含む。

第75図 16・17号井戸実面図

19号井戸 (第76図)

遺構

平面形は、直径95cmの隅丸方形に近い円形である。深さは65cm以下の調査を行っておらず不明である。

遺物

出土遺物はない。

20・26号井戸 (第76図、P L-13・14)

遺構

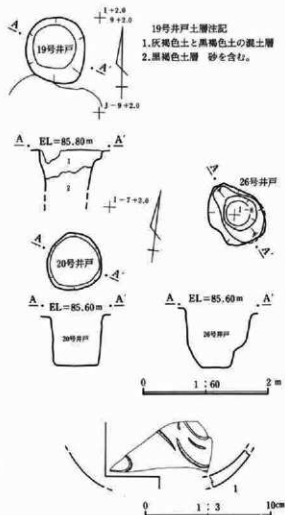
20号井戸は、直径85cm、深さ80cmと規模が小さく、土坑とすべきかもしれない。涌水は滲む程度である。

26号井戸は、長径1.05m、短径75cmの楕円形を呈する。深さは、90cmと先の20号井戸同様浅い。検出時の涌水層は底から20cm、自然水位は底から30cm、水量は滲み出る程度である。

遺物

中国製磁器 (1)

1は、26号井戸出土の内面に片彫りによる文様を有する白磁碗である。釉の発色は、青磁を思わせる。焼成不良であろうか、胎土は青灰色を呈する。底部内面には、使用によると思われる擦れが認められる。14世紀後半。20号井戸からは、図示していないが漆碗細片が出土している。



第76図 19・20・26号井戸実測図・出土遺物

21・36号井戸 (第77～82図、P L-13・14、53～55)

遺構

21号井戸は、開口部直径1.60m、地山井筒朝顔形の堀形を有していたと考えられる。深さは、3.10mと本遺跡では深い。検出時の涌水層は、底から1.5～1.9m間と2.2～2.5mの2カ所である。また、涌水量は2.5 l/min、自然水位は確認面から50cmと高い。底から70cm～2.7mの埋土中には、多量の礫が投棄されていた。この中には、後述する石臼をはじめとした石製品が出土している。また、水位が高いため、木製品も出土している。36号井戸は、21号井戸より古く、軸長80cmの隅丸方形を呈する。深さ80cmと浅く、土坑とした方がよいかも知れない。涌水層は底面であり、その量は滲み出る程度である。

遺物

36号井戸からは、遺物の出土はなく、図示したのはすべて21号井戸出土遺物である。

瓦 (1)

胎土「1」の丸瓦上端部破片。本遺跡出土丸瓦に全形を知り得る例はなく、1が最も遺存の良い破片である。最大厚3.1cm、面取り部厚1.4cmを測る。焼成は軟質。凹面には細かい布目があり、紐疋痕が波状に残っている。紐疋痕は、布の上下を繰り返しており、布を縫い合わせている。木口と則縁の面取りは大きい。ま

た、木口面取り部分には布目が所々認められ、面取り部分が傾斜した型を使用しているであろう。

カワラケ (2~4)

2は、左回転糸切りで、胎土は「3」である。3は、左回転糸切り後、浅い凹痕がある。胎土は「2」。4は胎土「1」で、轆轤の回転方向は左である。

軟質陶器 (5・6)

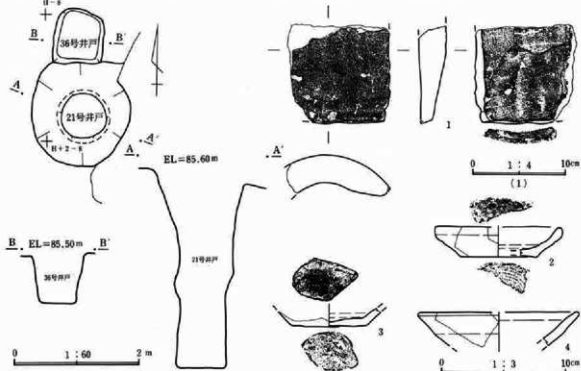
5は、胎土「5」のすり鉢である。内面のすり目は、すりこぎ状工具の使用によりほとんど摩滅している。底部砂底。276号土坑出土すり鉢(第56図55)と同一個体の可能性がある。6は、胎土「1」の器壁の薄い内耳鍋である。外面煤付着。

石製品 (7~32)

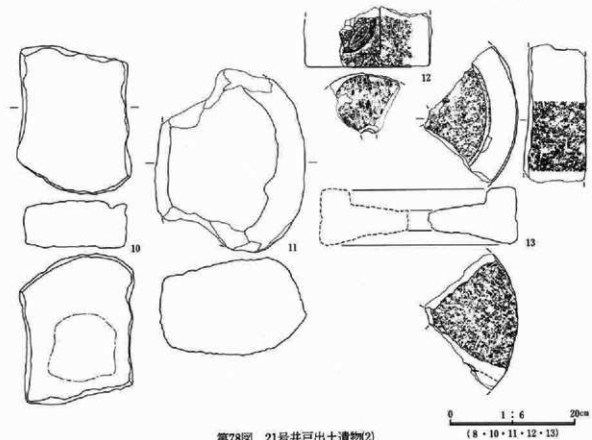
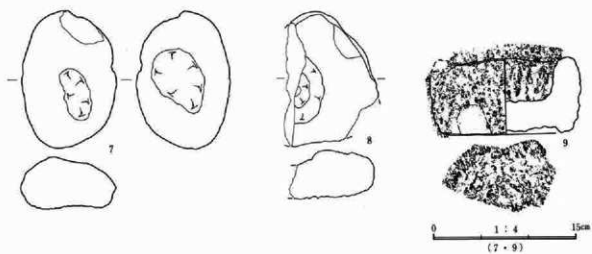
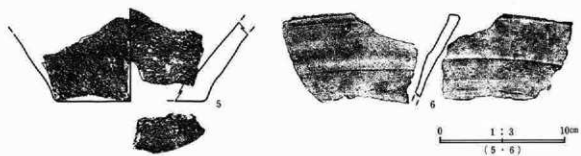
7・8はくぼみ石で、7は両面使用している。9は、二ツ岳軽石で製作した鉢である。10・11も二ツ岳軽石製で、1面を平坦にしている。12は、茶白型の上臼である。挽き手周辺は突出させ、文様を刻んでいる。13~18が粉挽き上臼、19~21が粉挽き下臼である。17・18は、挽き手を作り出すタイプである。14・16は、使用による摩滅が著しく、挽き手がすり面に露出したために作り直している。また、16・17・18は、片減りが著しい。19は、県内では例の少ない牛伏砂岩製である。分面の判明するものは、すべて6分面である。22は、直径43cm、厚さ9cmの牛伏砂岩製不明品である。表面調整は粗く、製品か否かも不明である。23は、立方体に近い製品で、断面鼓形の貫通穴がある。24~28は、五輪塔の地輪であろうか。27は、加工痕を明瞭に残す。29は、五輪塔空風輪である。30~32は、五輪塔火輪である。

木製品 (33~35)

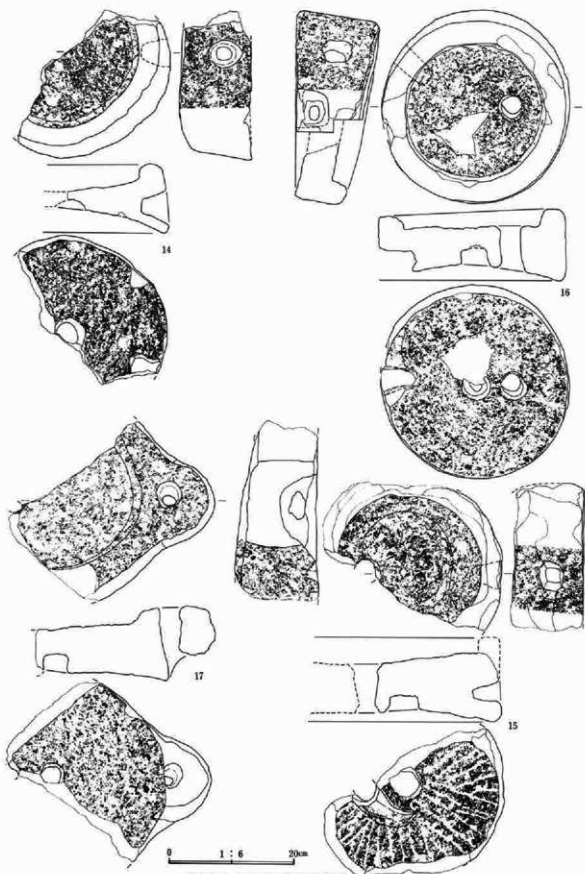
33・34は、曲物底板である。検出時には側板も遺存していたが、脆弱なため取り上げ時に破損してしまい、実測していない。使用材は、33がヒノキ属、34が不詳。35は、全長106.4cmのマツ属丸太材を使用した杭である。枝は、根元から落とさず雑に切っている。頭部に近い部分には欠き込みを作る。



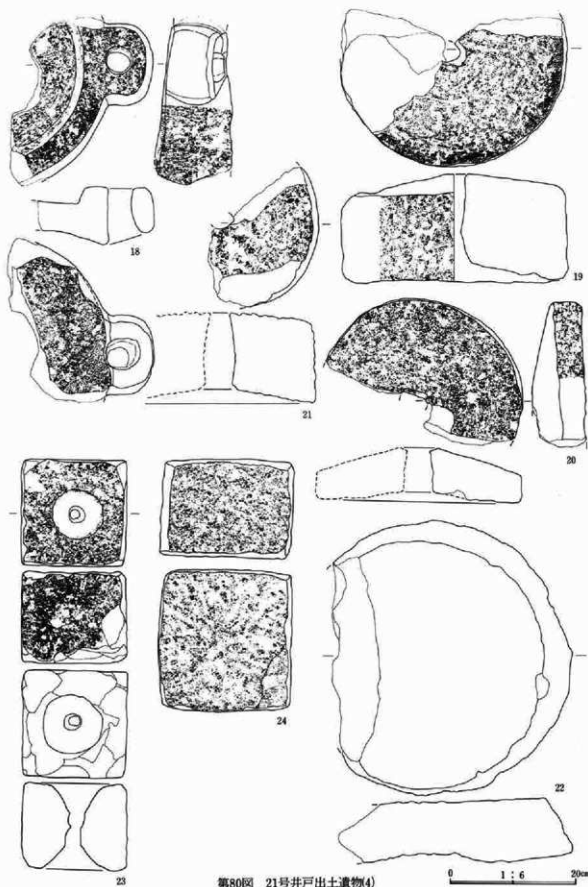
第77図 21・36号井戸実測図・出土遺物(1)



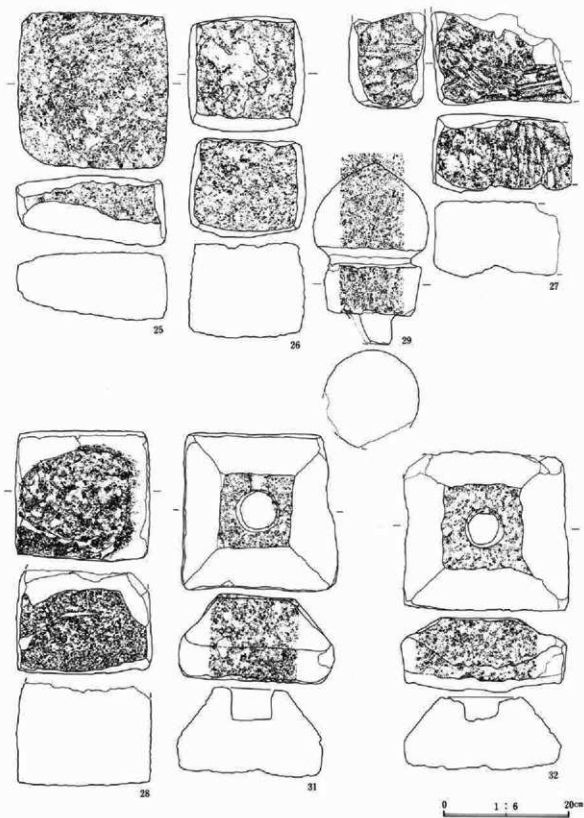
第78图 21号井戸出土遺物(2)



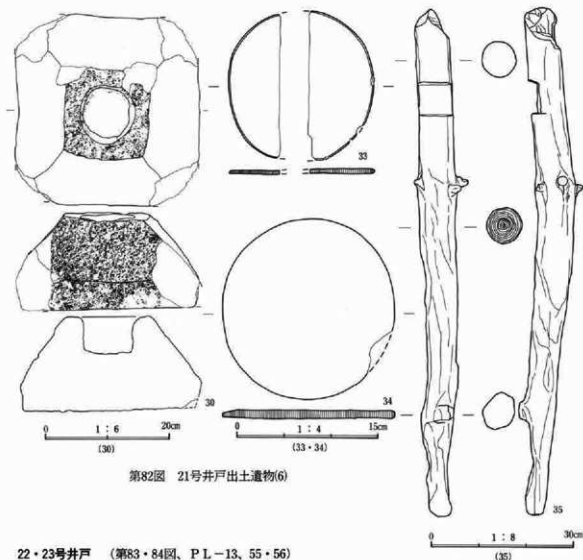
第79図 21号井戸出土遺物(3)



第80图 21号井戸出土遺物(4)



第81圖 21号井戸出土遺物(5)



第82図 21号井戸出土遺物(6)

22・23号井戸 (第83・84図、P.L-13、55・56)

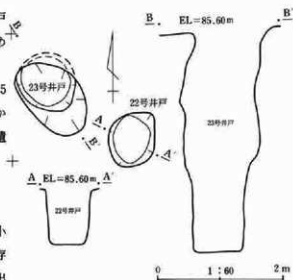
遺構

22号井戸は、直径70cm、深さ85cmと浅い。23号井戸は、長径1.35m、短径85cmの楕円形を呈し、やや斜めに掘り込む。掘形は、地山井筒円筒形と考えられ、3.5mの深さがある。検出時の湧水層は、底面から2.5mから2.7mで、量は1.0l/min、自然水位は確認面から80cmと高い。したがって、木製品や瓢箪の果皮が遺存していた。

遺物

軟質陶器 (1・2)

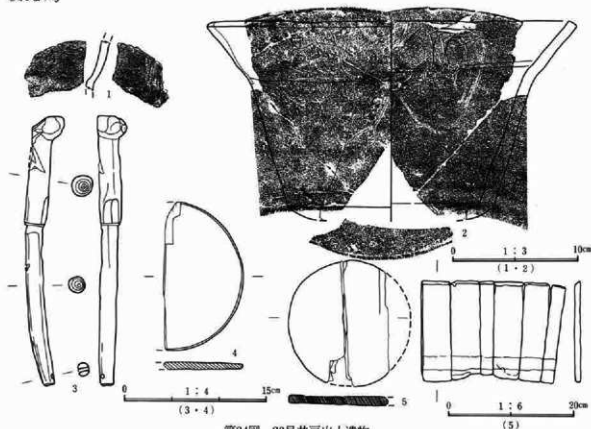
2点共に内耳鍋である。1は、胎土「4」の耳部小片である。2は、胎土「6」の丸底鍋で、体部と残存する底部外面は黒変する。なお、2は43号井戸底部出土破片と接合している。



第83図 22・23号井戸実測図

木製品 (3~5)

4は曲物底板と思われ、5は桶である。2点共に、スギ材で製作されている。桶側板内面の底板が当たる部分は、ややへこんでいる。3は、カマツカ材を使用した栓状木製品である。全体に、摩滅した痕跡は認められない。



第84図 23号井戸出土遺物

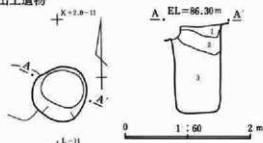
24号井戸 (第85図)

遺構

直径90cm、深さ1.35mの円筒形を呈する。底部埋土には、砂が多く含まれていた。検出時の涌水は、滲む程度と少なかった。

遺物

遺物の出土はない。



24号井戸土層注記

1. 黒褐色土層 ロームブロックと軽石含む。
2. 黒褐色土層 軽石多量に含む。
3. 灰黒褐色土層 ロームブロック含む。砂多量に含む。

第85図 24号井戸実測図

25・45号井戸 (第86・87図、P L-13、56・57)

遺構

2基は重複し、25号井戸が新しい。25号井戸は直径1m、45号井戸は直径90cmである。深さは、前者が1.53m、後者が86cmである。共に涌水は、調査時には認められなかった。25号井戸の底部付近には、五輪塔を中心とした石製品や礫が投棄されていた。

遺物

遺物は、すべて25号井戸出土である。

焼締陶器 (1)

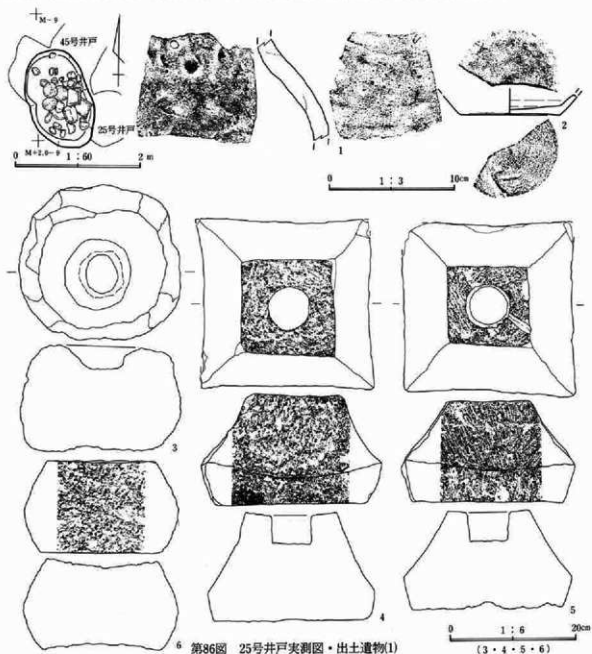
知多窯製甕の肩部破片である。外面は、鉄錆び色を帯た光沢がある。15世紀。

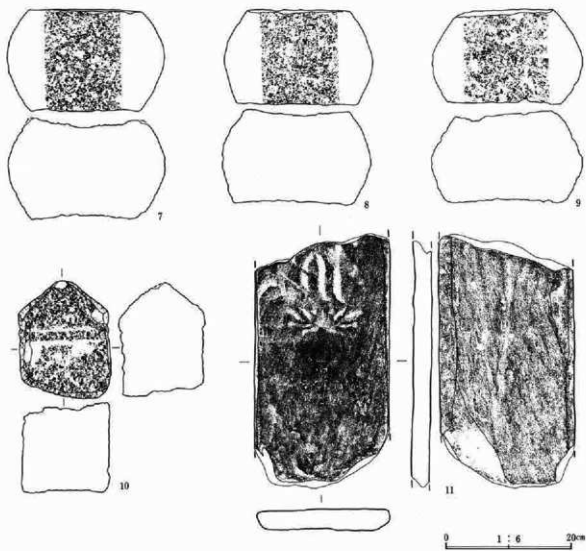
カワラケ (2)

胎土「2?」の皿1点の出土である。底部外面は、左回転糸切りの後浅い圧痕が付いている。底部内面には、弱い撫でを施す。

石製品 (3~11)

3は、二ツ岳軽石製で深さ3.5cmのくぼみがある。周囲の調整は行わず、成型痕を残す。4~9は、五輪塔で、4・5が火輪、7~9が水輪である。10は、角塔婆の頭部であろう。頭部山形下に2条線があり、その下部には、不明瞭であるが梵字と思われる刻線が認められる。いずれも粗粒安山岩製である。11は、板碑下部破片である。阿弥陀如来を表すキリークの一尊である。蓮座はかなり簡略化され、彫りも浅く断面「U」字状である。紀年銘、供養者とみられる銘が認められるが、遺存不良で判読できない。





第87图 25号井戸出土遺物(2)

27・28・29・35号井戸 (第88・89図、P.L-14、57)

遺構

27・28号井戸は、直径80cmと85cm、深さは共に95cmとほぼ同じ規模である。新旧関係は、不明瞭であった。遺物の出土はない。

29号井戸は、確認面で長軸1.25m、短軸1.2mの不整形を呈するが、底部は直径75cm程の円形となる。深さは1mと浅い。検出時の湧水層は、底面から17cmの範囲で、その量は1.5l/minである。湧水量は、本遺跡としては多い部類であるが、水位は30cmと浅い。

35号井戸は、直径90cm、深さ1mである。底面は、平坦でなく「U」字状を呈する。検出時の湧水層は、底面から20cm以内、量は1.0l/min、水位は水深30cmである。

遺物

中国製磁器 (1)

龍泉窯系青磁碗の体部小片である。外面は、片彫りによる蓮蓮弁文である。

焼締陶器 (2)

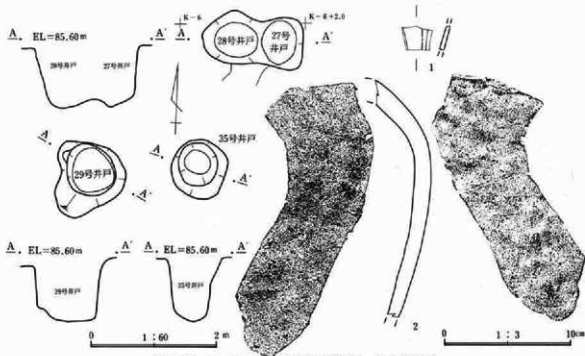
知多窯製壺の肩部破片である。14世紀。下部を除き、外面には自然釉が付着する。

軟質陶器 (3・4)

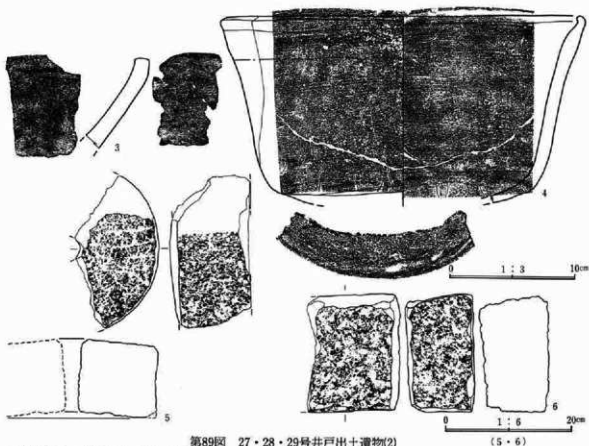
3は、すり鉢とも考えられるが、小片のため不詳。外面には煤が付着する。胎土は「3」。4は、口縁部が軽く開き、端部を内側に折り曲げる。砂底は丸みを帯びる。本遺跡出土土鍋の中で最も古い一群に属する。

石製品 (5・6)

5は、粗粒安山岩製の粉挽き臼である。目は、摩滅により不明瞭となる。分面数は不明。他の製品から類推すると、6分面であろう。6は、1辺18cm、高さ10cmの五輪塔地輪であろうか。6が27号井戸、2・3・4が28号井戸、5が29号井戸、1が35号井戸出土である。



第88図 27・28・29・35号井戸実測図・出土遺物(1)



第89図 27・28・29号井戸出土遺物(2)

30号井戸 (第90図、P.L-14)

遺構

直径80cm、深さ95cmの円筒形を呈する。2基のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

遺物

出土していない。

31号井戸 (第91図)

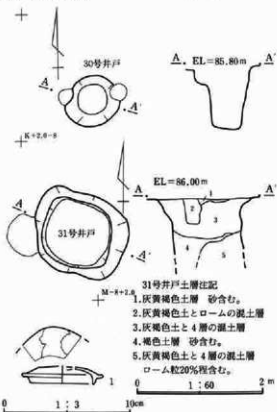
遺構

平面形は、長軸1.55m、短軸1.30mの隅丸方形を呈する。危険防止のため、80cm程で調査を中断し、深所調査を委託で行うようにしていたが、調査の都合上できなかった。

遺物

施釉陶器 (1)

製作地不詳の蓋である。天井部と内面には、光沢のある透明釉を施し、一部に鉄を流す。胎土は石器質に焼き締まる。大きさから急須の蓋と考えられ、明治以降の製作である。



第90図 30・31号井戸実測図・出土遺物

32・43号井戸 (第91・92図、P.L-58)

遺構

32号井戸の平面形は、直径90cmの円形を呈し、深さは1.8mである。掘形は、地山井筒円筒形で、底面から60cm~1.3mの間に小さな「アグリ」がある。調査時の湧水層は底面から8cm、量は滲み出る程度、自然水位は底面から20cmであった。

43号井戸の平面形は、直径90cmの円形を呈し、深さは1.75mである。底面から30cmの所に、小さい「アグリ」が認められる。調査時の湧水量や水位は、32号井戸とほぼ同様である。

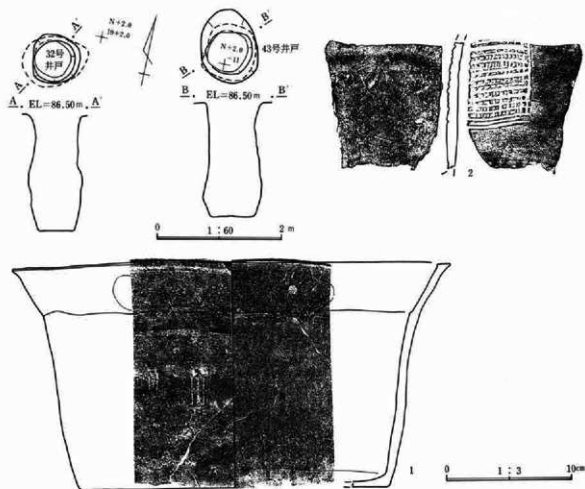
遺物

軟質陶器 (1・2)

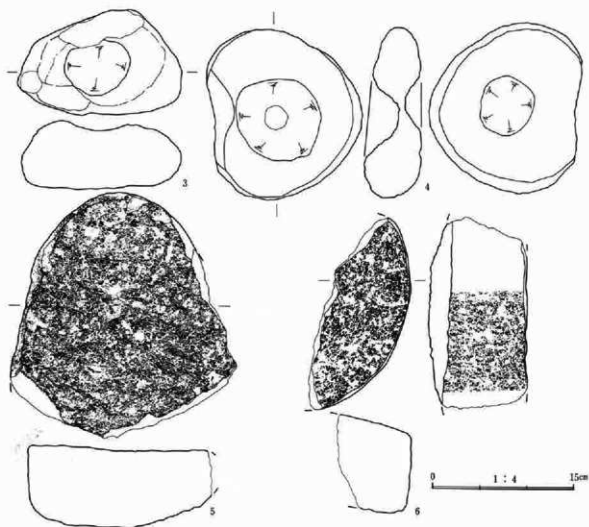
2点共に43号井戸底部出土の内耳鍋であるが、2は体部内面に卸し目を篋で刻む。卸し目の状態は、瀬戸・美濃産の施釉陶器卸し皿と同様である。卸し目に使用痕は認められない。胎土「1」。2は、遺存の良い鍋で、体部外面に厚く煤が付着するが、底部外面には付着しない。底部外面は、熱により赤変する。

石製品 (3~6)

3・4は、32号井戸出土のくぼみ石である。3は片面、4は両面叩打痕のあるくぼみがある。5は、32号井戸出土の不明石製品で、1面を平坦にしている。6は、43号井戸出土の粉挽下臼である。目は、周縁に僅かに遺存している。分画数は不明。



第91図 32・43号井戸実測図・出土遺物(1)



第92図 32・43号井戸出土遺物(2)

33・34号井戸 (第93図)

遺構

33号井戸は、直径95cmの不整形円形を呈し、深さは1.6mである。34号井戸は、長径80cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さは80cmと浅い。

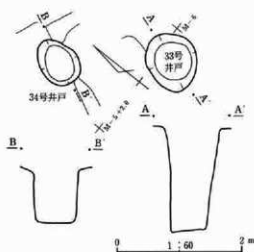
遺物

出土遺物はない。

37・38号井戸 (第94図、P L-14)

遺構

37号井戸は、直径95cm、深さ80cmである。断面形は、深いすり鉢状を呈している。形状から、土坑とするべきかもしれない。38号井戸は、直径95cm、深さ95cmと小規模である。検出時の湧水層は、底面から30cm。湧水量は滲み出る程度、自然水位は底面から51cmである。2基共に時期不詳。



第93図 33・34号井戸実測図

37・38号井戸 (第94図、P L-14)

遺物

出土遺物はない。

44号井戸 (第94図)

遺構

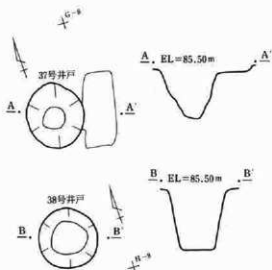
平面形は、長径90cm、短径80cmの不整形円形である。

調査は、深さ1mで中断し、後に委託により調査する予定であったが、全体計画の都合上調査できなかった。

時期不詳。

遺物

出土していない。



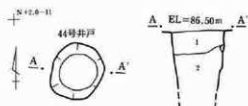
46・47号井戸 (第94図)

遺構

46号井戸は、直径95cmの円形を呈し、深さは95cmである。検出時の湧水層は底面、量は滲み出る程度、水位は底面から10cmであった。47号井戸は、直径95cmの円形を呈し、深さは1.15mである。検出時の湧水層は底面から10cm、量は1.5l/min、水位は底面から30cmである。共に時期不詳。

遺物

出土していない。



44号井戸土層注記

1. 灰黄褐色土層 ロームブロック30%程含む。
2. 灰黒褐色土層 ロームブロック30%程含む。

39号井戸 (第94図)

遺構

平面形は、直径70cmの円形を呈し、深さは1.8mである。底面から60cm~1.0mの部分に「アグリ」が認められる。

遺物

軟質陶器 (1)

胎土「1」の内耳鍋体部破片である。

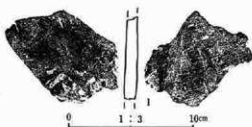


第94図 37~39・44・46・47号井戸実測図・出土遺物

その他の井戸出土遺物 (第95
図)

焼締陶器 (1)

渥美窯製壺体部破片である。内面には、自然釉が斑状に付着しており、体部下位片と考えられる。接合しないが、9号井戸出土破片(第72図7)と同一個体の可能性がある。52号井戸出土。



第95図 51・52号井戸出土遺物

石製品 (2)

粗粒安山岩製の阿弥陀三尊板碑である。横断面は、薄錐形。縦断面は、前面がほぼまっすぐで、後面は先端が薄く、基部に向かうに従い弧を描いて厚くなる。51号井戸出土。



9. 3区谷地の遺構と遺物

中世畠 (第96図、P.L-15)

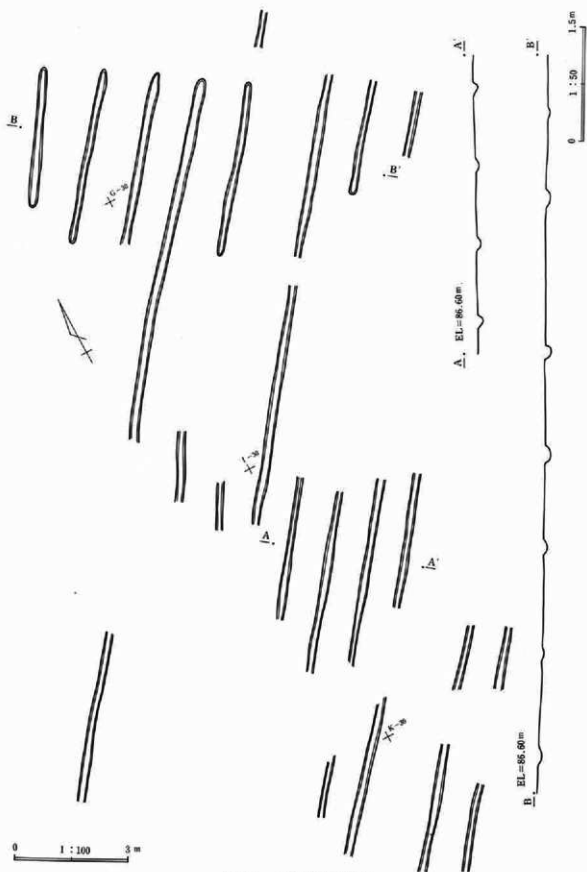
3区谷地で検出された遺構のうち、最も上層の3区基本土層5層(第192図参照)で確認されたものである。畠は、畝が検出された訳ではなく、確認面での幅約20cm、深さ6cmから8cmのサク状遺構が検出されたのみである。サク状遺構もその遺存は悪く、最も長く検出できたものでも長さ約10m、短いものでは1m足らずであった。しかし、遺存は不良であるものの間隔は概ね100cmであり、広い箇所でも130cmとほぼ等間隔である。南側から2条目と3条目の間隔は2mと非常に広いが、間隔が2mであることから中間のサク状遺構が検出できなかったためと判断される。このように、サク状遺構には規則性が認められ、断続的ではあるが3条のサクと判断され、その間隔は1mである。サクの走向は、谷地の向きと平行し、等高線は図示していないが等高線とほぼ平行するかたちとなる。

本遺構の時期であるが、出土遺物がないうえにテフラにも覆われず、年代の判明する層に挟まれてもいないため時期は不詳である。したがって、ここで中世としたのも積極的な理由からではなく、サクが埋り込まれている5層中から14世紀代の白磁(第98図10)が出土していること、本遺構検出中(4層中)に近世遺物が出土していないという理由からである。3区とした谷地は、現地形において埋没しているが、少なくとも江戸時代以前にはほとんど埋没し、畠として利用され始めたのである。

中世第1水田 (第97・98図、P.L-15、58)

遺構

先述の畠より1層下の3区基本土層6層(第192図参照)上面で検出したが、畠同様、テフラや洪水層に覆われているわけではない。このため、水田面(耕作土上面)の検出ではなく床土面における痕跡の検出であると考えられる。したがって、畦畔は比高差ではなく、鉄分凝集によって生ずる色調の差によって検出している。そのため、検出作業もかなり困難であり、区画も当時の区画そのままを検出できたとは考えておらず、当然のことながら部分的な検出にとどまっている可能性は高い。また、畦畔とした色調の異なる部分は、畦畔に直交するように設定した4カ所のトレンチによって溝ではないことを確認している。



第96图 3区中世中新统图

水田区画は、3区谷地全体すなわち幅約20mにわたっている。谷地縁辺にあたる西と東には6層で検出された小さい溝が等高線に沿って走向し、その溝に沿って谷地と平行に畦畔も検出されている。谷地に直交する畦畔は、北東隅にごく一部検出できたものを含めて5カ所確認した。各畦畔の間隔はクランク状に折れる北東寄り部分で9.5mから11m間隔である。この区画に扶まれた部分の等高線(86.4m)は、各区画内でまとまる傾向があり、区画内が比較的平坦であることを物語っている。また、等高線が近接する東側縁辺部では、不明瞭ながら等高線に沿って畦畔が認められ、クランク状の折れ部分にも存在したと考えられる。なお、北東から2本目の畦畔に沿って2条の溝が存在し、それぞれ東側の溝に続いている。この2条の溝には、新旧関係は判然としないものの重複がめられ、どちらかが本水田に伴わない溝である。しかし、より外側に位置する溝は、位置関係から次に述べる中世第2水田に伴う溝である可能性が高い。

遺物

中国製磁器 (第98図1～29)

1から13・17は白磁である。1から3は、碗の口縁部小片であり、口縁端部を外方に突出させる。口縁端部内面は稜をなし、端部上面は平坦、外面は尖る。太宰府分類による碗V4類もしくはV類であろう。4はやや直線的な立ち上がりをもつ体部下位の破片で、外面の軸下には鋭形り痕が確認できる。8も体部破片であるが、碗の可能性が高いものの器種は不詳である。5は体部中位の破片で、内面に片彫りによる低い沈線状の段を巡らしている。6・7は碗の玉縁状口縁片である。玉縁口縁には大きく丸みを有するもの(6)と尖り気味(7)の2者がある。6の玉縁直下は沈線状に窪む。また、6の軸には擦れが多く認められるが、7には認められない。9は碗の底部片で高台は欠損している。内面の軸はど取りや段は認められず、外面は無軸である。太宰府分類による碗V類の底部であろう。10は内面に文様を施す白磁碗の体部下位片である。下部は底部周縁にあたり、内面には段差が認められる。太宰府分類による碗VII類であろうか。11・12・13は皿である。13は底部片であり、外面の軸を削り取っている。いずれも内面の軸には擦れが認められる。

14から16、18から29は青磁である。青磁には同安窯系(14～16)、龍泉窯系(18～26、28・29)と不詳の3種に分類できる。同安窯系の3点は、いずれも碗であり、14は口縁部、15・16は体部片である。15は体部でも下位の破片で、外面下半は無軸である。龍泉窯系の内18・19・22が太宰府分類による碗I2類、20・21が碗I4類である。25・26は共に碗I2かI4類の体部下位片である。26は底部内面周縁に明瞭な沈線を巡らし、体部内面には文様の一部が確認できる。25も底部内面周縁に沈線を巡らしていたようであり、ごく一部が残存している。胎土、釉調共に21と同一個体と思われるほど似ている。23・24・28は外面に蓮弁を施す碗である。24は明瞭な鎊を有するが、28は不明瞭、23には認められない。29は碗の底部で、内面に不明瞭なスタンプによる文様が観察される。外面は高台端部から内面が無軸である。全体に軸には貫入が入る。27は碗の体部と考えられ、軸は厚く、気泡を多く含んでいる。外面は、篋形りによる沈線を縦に施し、内面は文様を陽刻している。

焼締陶器 (第98図30～34)

30は、美濃窯と推定される山皿である。時期は、口縁部の特徴から13世紀末頃と考えられる。31・32は片口鉢の口縁部である。31は外面の纏紐目が明瞭で、焼き締まっていない。32は口縁端部内面に浅い沈線を1条巡らし、端部は丸くおさめ、外面の纏紐目も顕著ではない。器表は鈍い茶褐色を呈し、内面には自然釉がかかっている。31は知多窯、32の製作地は不詳である。また、32はAs-B上包含層出土の第103図74と同一個体の可能性が高い。33は渚美窯の裏口縁部破片である。内面には自然釉がかかり白くなっている。As-B上包含層出土の第103図78と同一個体の可能性がある。34は知多窯の裏破片である。部位は、外面に白濁

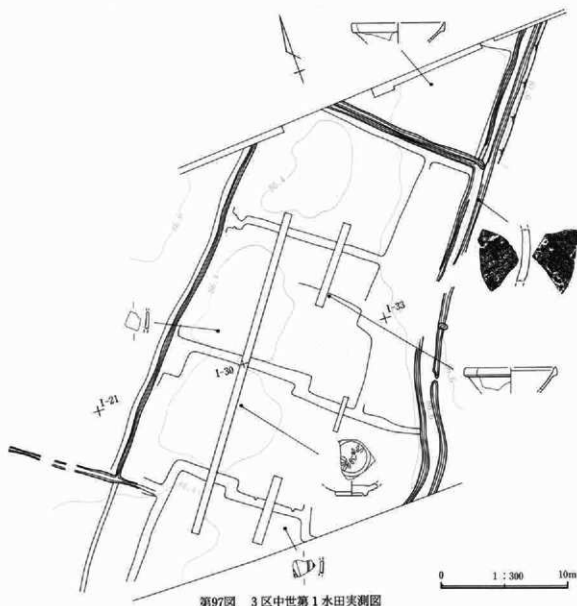
した自然釉が薄く一面にかかっていることから、肩部から体部上位にかけての部分である。外面には押印文の一部が認められる。

土製品 (第98図39)

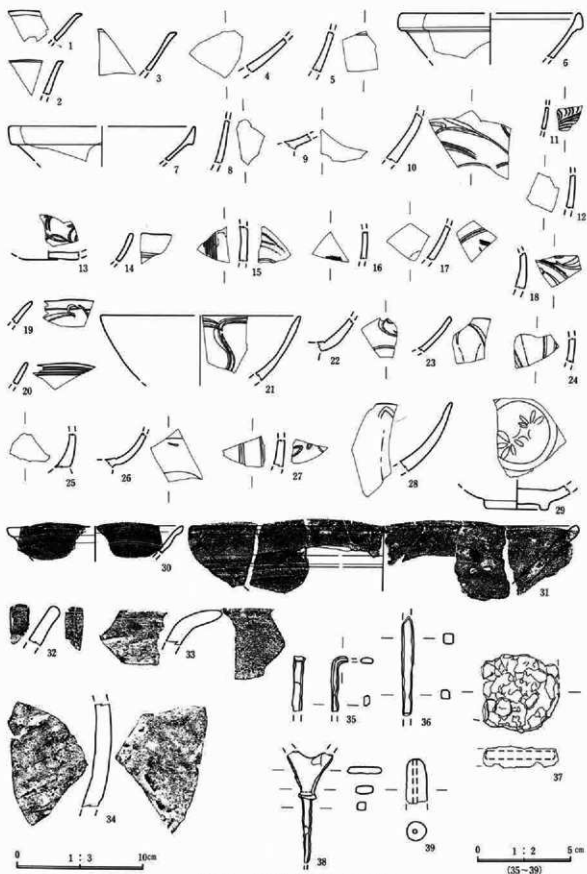
土師質の土鍾2/3程の破片である。

金属製品 (第98図35~38)

35は不明鍛造製品である。両端は欠損しており全形は不明である。36は断面正方形を呈する鍛造製品であり、一方が次第に細くなっていることから釘と考えられる。両端は欠損している。38は鉄鎌である。先端は欠損している。37は鋳造製品であるが、小片であるうえに鏽が著しく器種は不明である。



第97図 3区中世第1水田実測図



第98图 3区中世第1水田出土遺物

中世第2水田 (第99・100図、P L-15、58)

遺構

先述の中世第1水田より1層下の3区基本土層7層(第192図参照)上面で検出したが、第1水田同様水田面の検出ではなく床土面における痕跡を確認したと考えられる。したがって、畦畔の比高差はごく僅かであり、ほとんどは鉄分の凝集によって生ずる色調の差によって検出している。そのため、検出作業も第1水田同様困難であり、区画も当時の区画の正確に検出したとは考えられない。また、畦畔とした色調の異なる部分は、畦畔と直交するように設定したトレンチによって溝ではないことを確認している。

水田区画のうち東西の谷地縁辺を区切る畦畔は、位置・形状共に同じである。また、その畦畔を横に区切る畦畔も位置・形状はほぼ同様であった。しかし、南側2本のクランク状に折れる部分は直線的となっている。水田区画内すなわち谷地は、中央がしだいに窪み、傾斜が急となってきている。したがって、本来は等高線にほぼ平行する方向には多くの側畦が構築され、より小さい区画であったであろう。谷地に沿って長く延びる西側畦畔の約3m内側と南西端には畦畔を貫く溝が存在するが、この溝の所属時期は不明である。

遺物

中国製磁器 (第100図1~22)

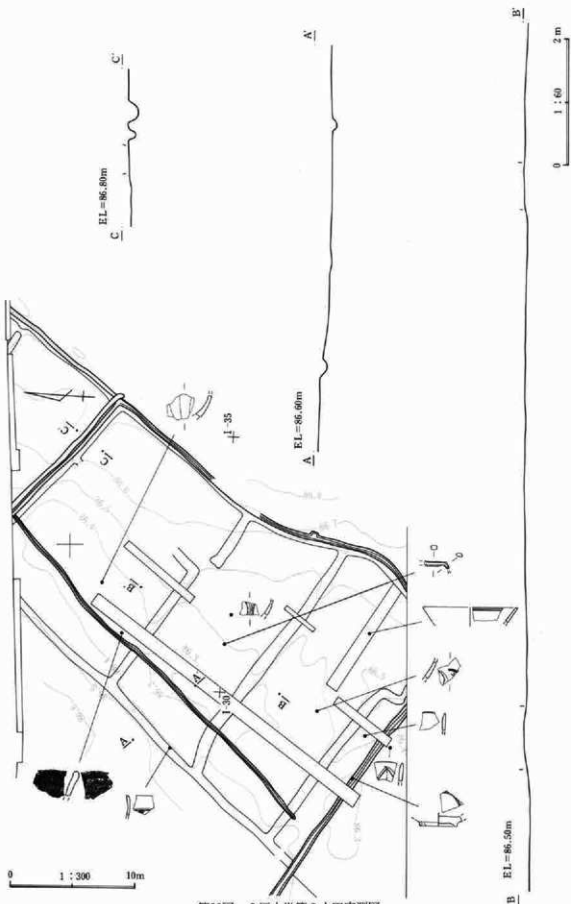
中国製磁器は白磁(1~3)、同安窯系青磁(4~7)、龍泉窯系青磁(8~22)に大別できる。白磁はいずれも碗形態であり、1は口縁端部内面が稜をなして小さく外反し、太宰府分類の碗V4類であろう。2・3は体部下位片であり、2の外面下半は無軸、3は残存部全面施軸である。2の内面には深い沈線が巡る。3の底部付近内面には櫛描文が認められる。4・5は同安窯系碗の口縁部片であり、内外面に櫛描文が認められる。6・7は体部片であり、口縁部同様特徴的な櫛描文がある。6の外面下位は無軸で、底部内面周縁には明瞭な沈線が巡る。これらは、すべて同安窯系青磁碗I1類であろう。8から22は龍泉窯系青磁である。8から14は内面に片彫りによる寛楯文を施すタイプであり、縦に2条の分画線を施すI4類(8)、内面に片彫りの蓮華文を施すI2類(9・10・13)がある。なお、小片のためI5類ではないことのみ判明するものとして11・12・14がある。また、同じく小片のため判然としないが、内外面無文のI1類の可能性のある個体として15から18がある。外面に片彫りの蓮華文を施すI5類として19から21がある。22はI1類の底部であり、軸は高台端部の一部にまで施される。底部内面周縁には片彫りによる沈線が巡る。

焼締陶器 (第100図23~26)

本遺構出土の焼締陶器はすべて片口鉢である。23・24は瀬美窯製であり、24は片口部脇の小片である。外面右側には、片口成形時の指頭圧痕が認められる。端部は尖り気味である。23は口縁端部を外反させる。外面の轆轤目は顕著である。内面自然軸が薄くかかり、全体に白くなっている。25は胎土が粗く、焼き締まりがややあまい知多窯製である。外面体部下位には寛削りを施し、それ以上には明瞭な轆轤目が残る。高台は接合部から剥がれている。2区27溝・67溝、13号井戸出土破片に接合しないが同一個体が存在し、これらを含めて復元実測を行った。口縁部などの特徴から13世紀前半と考えられよう。

金属製品 (第100図27~29)

27は鉄鏃の先端であろうか。28・29は不明。いずれも鍛鉄製品である。



第99图 3区中世第2水田実測图



第100图 3区中世第2水田出土遺物

As-B上遺物包含層 (第101~105図、P.L-15・58・59)

遺構

先述の中世第1、第2水田共に、検出中から県内では出土量の少ない12・13世紀代の遺物がかかり出土しており、下面での遺構の存在が予測された。そのため、中世第2水田の調査終了後、谷地中央にトレンチを長く設定し、下面での遺構の有無を確認した。その結果、3区基本土層8層中(第192図参照)に僅かながら灰層が部分的に認められ、更に先のトレンチ中央付近に直交するトレンチを設定したところ、薄いながらも明瞭な灰層が確認された。また、トレンチ調査中も遺物が出土していたことから灰層(第101図6a層)までは人力による掘削を行い遺物の検出にも努めた。トレンチによって確認された灰層は、谷地の2区台地寄り(西側)に2カ所平面的な広がりをもって検出され(第101図の破線部分)、遺物もほぼこの範囲に集中して分布していた。これに対して谷地の東側(4区側)は、灰の分布が認められず、遺物量も非常に少ない。灰層は薄く、谷地内で何かを焼いた形跡は認められない。なお、中央部で谷地を横断するように検出された溝は、断面観察によって中世第1水田と第2水田の中間に位置づけられる。多量の遺物と灰層が検出された部分に近い2区台地縁辺には、12世紀代から15世紀代にいたる遺物が出土した溝が存在し、これらの溝群と無関係ではないと考えられる。これらの溝群は、いずれも上流側から流下したと考えられる砂で埋まっており、出土遺物の多くも調査区北側よりもたらされたと考えられる。以上の点から本包含層の遺物は、北側調査区外を含む2区台地上からの廃棄と溝からの流入によるものと解される。本包含層は、上層の第2水田確認層と明瞭な分層が行えない部分があり、上層の遺物が混入している可能性がある。

遺物

中国製磁器 (第102・103図1~73)

本包含層出土の中国製品は、青白磁・白磁・青磁の3種であり陶器は出土していない。1から6は青白磁であり、1から3は型押し成形で作られている。1は、蓮弁状の文様を有する小壺の身で、体部下位以下は無軸である。軸は接合部に境に暗灰色を呈する破片があり、破損後に一部の破片が焼けているようである。2区東側出土の破片と接合すると共に、同一個体片も出土している。2・3は、体部下位以下と蓋受け部無軸の合子である。3は、接合しないが、3区表土から同一個体が出土している。4から6は、器壁が非常に薄く、4・5は内面に片彫りの篋描き文を有する。6は外反する口縁部小片である。

白磁(7~26)には、碗、皿、壺があり、総数で20点図示した。9から16は、碗の体部片と考えられ、9・10・12・14は残存部無文である。8は器壁が薄く、内面に文様がある。5・6は近似しており、青白磁の可能性がある。11は、外面下位が無軸で、内面下位に沈線を施す。また、下端は段をなして無軸部分がわずかに観察され、底部の軸を輪状に掻き取っていると考えられる。15も体部外面下位に施軸しないが、内面下位にも掻き取った状態ではない無軸部分が認められる。16は皿の可能性のある体部片である。外面下位は無軸で、内面には浅い沈線が巡る。17から20は、碗の底部片である。17・18・20は高台が欠損するが、高い高台を有していたと考えられる。いずれも高台縁以下は無軸であり、17・18は底部内面の軸を輪状に掻き取り、18は境が段をなす。19は、低い高台を有し、内面に浅い沈線が巡ることからIV類の底部と考えられる。21・22は皿の底部片であり、21は焼成不良により陶器の灰軸に似た軸調となっている。22の焼成は良好であり、底部外面は茶褐色に発色する。いずれも、体部外面下位以下は無軸である。前者が11世紀後半から12世紀前半、後者が12世紀前半の焼成である。23から25は碗の口縁部片であり、玉縁を有する23・24と端部を外側に小さく屈曲させる25の2者がある。23はIV 1類、24はIV 1類で体部外面は無軸となる。25は端部内面に稜をなし、先端を尖り気味にする。内面口縁部下15mmの部分に、ごく浅く不明瞭な沈線を1条巡らす。V 4類で

あろう。26は壺の体部片で、内外面施釉しているが、外面の釉がやや厚い。体部の丸みが少ないことから12世紀の製品であろう。

青磁(27~72)には同安窯系と龍泉窯系の2種があり、それぞれ碗と皿の2器種が出土し、46点を図示した。これらのうち、27から46の20点が同安窯系青磁である。27・28・37は、同安窯系青磁碗I1類の口縁部片である。中でも28・37は、I1b類の特徴である内外面の櫛目文が施されている。27もおそらく同類であろう。29から36は体部片であり、そのほとんどがI1b類である。33は、破片がやや大きいものの、体部外面に櫛目文がなくI1a類と考えられる。他に、口縁部でも38・39は残存部外面に文様がなく、I1a類の可能性もある。35は体部下位を無釉とし、外面に篋状櫛目文を、内面には篋描き文を施す。内面底部周縁には沈線を巡らす。本資料は、その特徴から同安窯系青磁碗III1類であると考えられる。40・41はI1類の底部片であり、前者は器壁が薄く後者はやや厚い。いずれも体部外面下位以下は無釉で、内面底部周縁は沈線、体部内面には篋描き文を施す。42から46は、同安窯系青磁皿である。42から45は口縁部小片であり、口縁部と体部境の内面には深い沈線が巡る。46は底部であり、内面に櫛と篋による文様を施す。底部外面は、皿I2類の特徴である施釉後の釉の掻き取りが認められる。

47から70・72の25点が龍泉窯系青磁である。このうち、24点が碗で1点が皿である。碗のうち63・66・67は、残存部の内外面が無文のため、I5類以外であること以上の細分は不可能である。本包含層出土の龍泉窯系青磁碗のうち、外面に蓮弁文を有するI5類は70の1点のみである。70は焼成不良の底部であり、高台外側まで施釉している。蓮弁には錆が認められ、I5b類であることがわかる。上記以外は、内面に片彫りによる篋描き文を有するI2・3・4類である。内面に蓮華文を施すI2類は、47から49、51から53、55から59、65・69である。一方、口縁部下と内面を縦に分画する2条の篋描き沈線の特徴とするI4類は、50・54・61・64であり、62もその可能性が高い。なお、52の口縁端部の輪花状窪みは、付近の素地が荒れていることから偶然のものであろう。62もI4類の可能性が高い。62は2区32溝出土片と接合し、63と同一個体の可能性がある。68は内面に片彫りの篋描き文を施し、底部周縁に沈線を巡らしている。I2類かI4類であろう。72は龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。

71・73は焼成不良が原因で釉が白くなり、中国磁器ということ以外不明な個体である。71は体部外面下位以下は無釉であり、内面に沈線を有する。器種は皿であろうか。73は皿の底部であり、外面は無釉である。

焼締陶器 (74~85)

74は、中世第1水田出土の第98図32と同一個体と考えられる壺の体部下位片である。内面には自然釉が多くかかるが、内面下位は使用により磨滅している。器表は鈍い茶褐色を呈し、やや焼き締まっている。外面下半は篋削りを施している。75・79は瀝美窯の片口鉢底部片である。75の内面は使用により器表の黒灰色部分が磨滅している。高台は低い張り付け高台で、端部は磨れている。上層の第2水田出土片と接合している。79は高台が張り付け部から剥がれている。内面はやはり使用により磨滅する。76は製作地不詳の片口鉢で、2区1号溝・4号溝、2区表土出土片と接合もしくは同一個体が出土している。胎土は知多窯と瀝美窯の中間的な感があり、断面は青灰色、器表は赤錆色を呈する。内面は自然釉が厚く流れるほどかかっている。轆轤目はなく、口縁部外面と外面体部中位の2カ所に回転横撫でを施し、体部の回転横撫でに挟まれた部分は低い突帯状をなしている。口縁端部外面は沈線状に窪んでいる。恐らく12世紀代の製品であろう。77は外面に格子状押印文のある知多窯の壺片である。内面に自然釉が付着していることから、部位としては体部下位の可能性が高い。80も内面に自然釉が付着しており、体部下位片と考えられる。知多窯製であり、器表は茶褐色を呈している。図示していないが、2区2号土坑出土片と同一個体と考えられる。78は瀝美窯の壺肩部

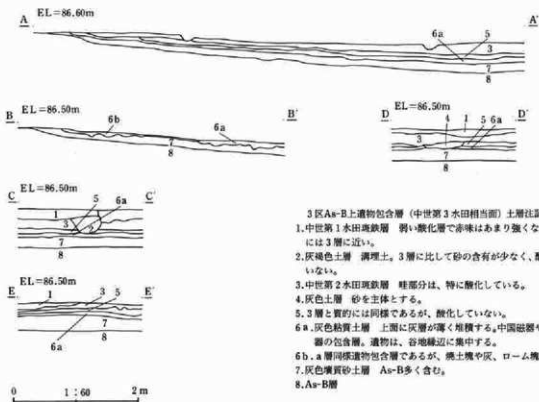
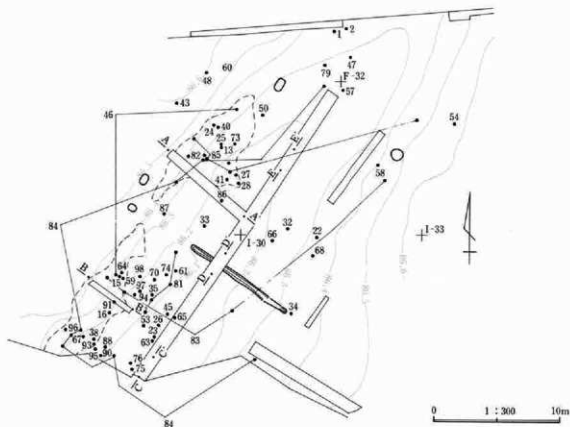
片で、頸部の一部が残る。外面には、自然釉が薄くかかり白くなっている。81は、高台脇が欠損しているが、図上復元により全体が判明する。体部はわずかに湾曲し口縁端部を丸く仕上げている。口縁部から体部外面は轆轤目が顕著にのこり、下位は篋削りを行っている。内面体部下位は使用により磨滅する。13世紀前半の知多窯製片口鉢である。本資料は、中世第2水田出土片や2区8号溝と2区12号井戸最上層出土片と接合している。82は知多窯の壺底部であろう。接合資料や同一個体片は2区8号溝、155号土坑、中世第1水田から出土している。しかし、本包含層出土片は細片であり、混入の可能性がある。83は瀝美窯の壺であり、2区と3区から約70点にのぼる同一個体片が検出された。出土点数は多いものの接合率は悪く、破片の一部を使用して復元実測を行わざるを得なかった。本資料は、瀝美焼としては焼成が非常に良好でよく焼き締まっている。更に色調も黒灰色ではなく、断面は鈍い黄橙、器表は茶褐色を呈しており、一見瀝美焼とは見えない。口縁部が出土していないため時期は不詳であるが、瀝美諸窯における壺生産は13世紀前半でほとんど終了しており、これ以前の製品と考えられる。本資料の同一個体片は、2区1号溝、2区4号溝、2区8号溝、2区9号溝、2区27号溝、2区30号溝、2区90号溝、2区9号井戸、2区15号土坑、2区18号土坑、3区中世第1水田、3区中世第2水田などから出土している。84は83同様2区1号溝、II区8号溝、2区30号溝、2区31号溝、2区34号溝、2区9号井戸、2区12号井戸最上層、3区中世第2水田などから約70点近い同一個体片が出土している。本資料も接合率が悪く、一部の破片を使用して復元実測を行った。84は胎土の特徴から知多窯製と判断され、口縁部内面と肩部には自然釉がかかっている。体部の器表は茶褐色を呈し、断面は鈍い黄橙を呈する。全体にやや焼成はあまく、焼き締まっていない。口縁端部内面は、沈線状にわずかに窪んでおり、この特徴から12世紀後半の所産と考えられる。85は瀝美窯壺の体部片である。外面にはわずかに押印文が認められ、2区9号出土資料と接合している。2区8号溝出土の口縁部片(第15図11)と同一個体の可能性がある。

金属製品 (第105図86~98)

銭貨を除く金属製品は、鍛造品(86~95)と鋳造品(96~98)とに大別され、以下その概略を述べる。まず鍛造品には、火打ち金(86)、釘(88・89)、釘の可能性のある棒状製品(87)や不明製品(90~95)がある。火打ち金は(86)山形を呈し、中央上部に円孔を設けている。両端上部のかえりは不明瞭である。叩打部は厚みがあり、さほどすり減っていない。91・92は楔状の小さい製品であるが、上部は欠損しているかもしれない。鋳造製品には鍋(96)と考えらる小片や瓶状(97)の体部片、板状(98)破片がある。96は、鍋の体部から底部にかけての部分と考えられる。97は、体部は丸く湾曲し、3条の突帯を巡らす。98はやや厚みのある板状の破片であり、第1水田出土の第98図37と同一個体もしくは同形片品であろう。

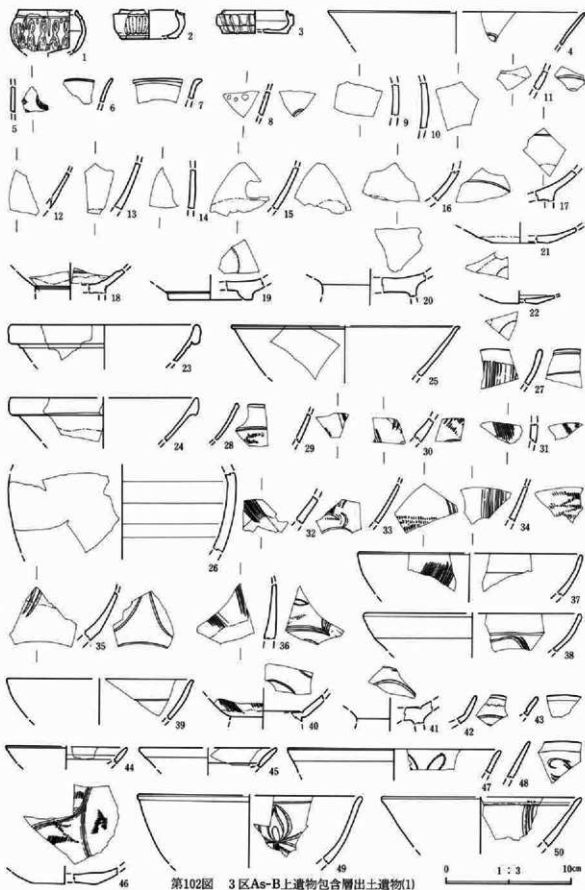
銭貨 (第105図99)

行書の「紹聖元寶」で、背の月文や星文は認められない。初鑄年代は、北宋の紹聖元年、西暦1094年である。

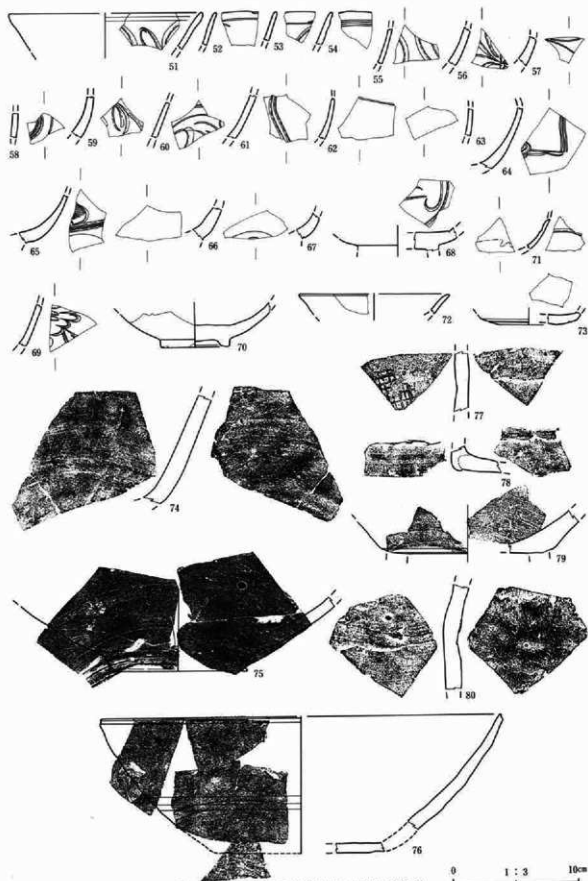


- 3区As-B上遺物包含層(中世第3水田相当面)土層注記
1. 中世第1水田底鉄層 弱い酸化層で赤味はあまり強くない。質的には3層に近い。
 2. 灰褐色土層 調理土。3層に比して砂の含有が少なく、酸化していない。
 3. 中世第2水田底鉄層 畦部分は、特に酸化している。
 4. 灰色土層 砂を主体とする。
 5. 3層と質的には同様であるが、酸化していない。
 - 6 a. 灰色粘質土層 上面に灰層が薄く堆積する。中国磁器や焼酎甕の包含層。遺物は、谷地縁辺に集中する。
 - 6 b. a層同様遺物包含層であるが、焼土塊やローム塊含む。
 7. 灰色壤質砂土層 As-B多く含む。
 8. As-B層

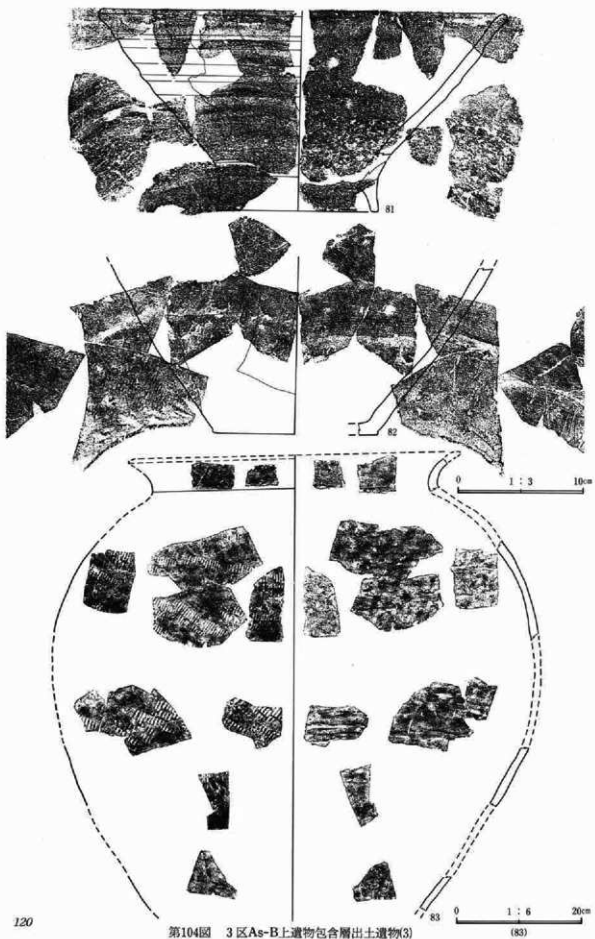
第101図 3区As-B上遺物包含層実測図



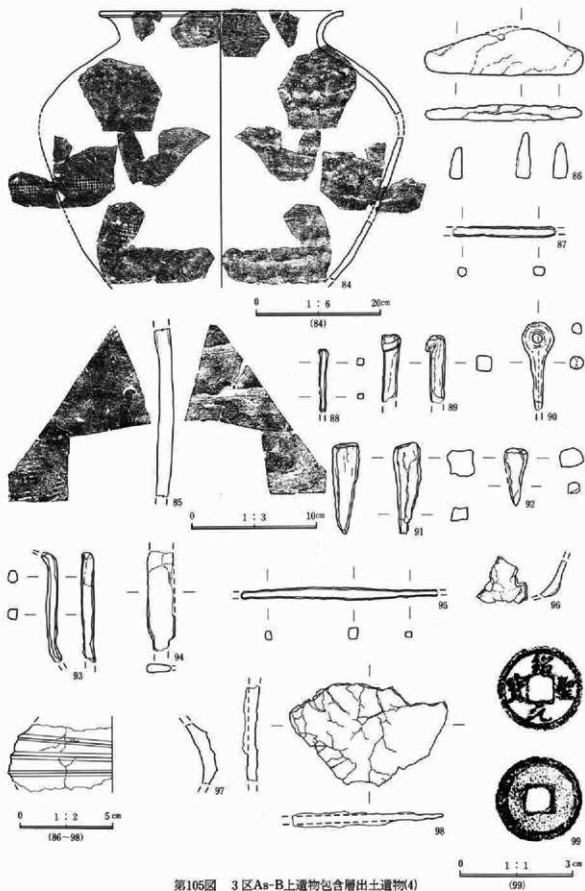
第102图 3区As-B上遺物包含層出土遺物(1)



第103图 3区As-B上遺物包含層出土遺物(2)



第104图 3区As-B上遺物包含層出土遺物(3)



第105图 3区As-B上遺物包含層出土遺物(4)

10. 遺構外出土遺物

1区遺構外出土遺物 (第106図1~5)

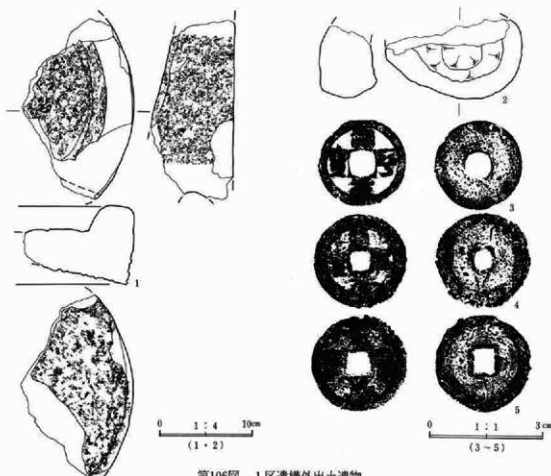
調査開始時に調査区西端の道路付近から谷地が検出されると予測されたため、この谷地部分を1区とし、その東に接する台地部分を2区として調査を開始した。しかし、予想以上に台地が西に広がり、1区とした谷地はかろうじてその縁辺が一部で確認できたのみであった。したがって、1区の遺構は皆無であり、遺物の出土量も非常に少ない。図示し得たのは5点のみである。

石製品 (1・2)

石製品は2点ともに粗粒安山岩製である。1は粉挽臼の上臼である。片減りが認められ、臼の目も観察できない。2は、県内の中世遺跡で多く出土している窪み石である。窪みは浅く、中は擦れておらず、叩打によって生じたものであろう。

銭貨 (3~5)

銭貨は北宋銭が3枚出土し、うち4・5の2枚が付着していた。銭種は、3が篆書の「治平元寶」、4が背に月や星文のない「紹聖元寶」、5は不明瞭であるが「天禧通寶」である。初鑄年代は、順に1064年、1094年、1017年である。



第106図 1区遺構外出土遺物

2区遺構外出土遺物 (第107～110図、P L-59)

2区遺構外出土遺物とは、文字どおり表土や遺構確認作業中に出土した遺物を中心としているが、古代の堅穴住居調査中に出土した遺物も含んでいる。このような場合、正確には小土坑やピットが重複しているのであるが、調査中にプランが把握できなかったためこのような扱いとす。

中国製磁器 (第107図1～45)

2区台地の遺構外出土遺物にも白磁は認められ、第107図の1から12の12点を図示した。1から5は白磁碗の口縁部小片である。1・2は口縁端部を外反させ、共に端部内面と先端は丸みを持つ。1がV類、2がV3類か。3から5は口縁端部を外側に折り曲げ、3と4は端部内面に稜を有し、先端を尖らす。5も端部内面に稜を有するが稜は鈍い。いずれも白磁碗V4類であろう。6から9は白磁碗の体部片であり、6は内面に沈線を有する。7は外面下位無軸、8は軸調がやや柔らかく、他の白磁に認められる軸のピンホール状の穴が認められず、内面には縦の隆線を持つ。10は底部のやや薄い碗の底部である。白磁の皿は11・12の2点である。11は焼成不良であり、軸は青磁に似た発色をしている。口縁部は外反し、体部との境は屈曲する。皿V1類の可能性が高く、11世紀後半から12世紀前半の製品である。12は、いわゆる口元の皿底部で、全面に施釉している。胎土、軸共に白色を呈し、底部内面周縁には沈線を巡らす。この皿は、2区遺構外出土の白磁では最も新しく、13世紀中頃から14世紀前半である。

13から45は青磁であり、これらのうち13から18、19から22が同安窯系である。13から17は内外面に櫛目を施すことを特徴とする碗I1b類である。18は、細片であるうえに残存部外面が無文であるためI1類以上の細分は不可能である。21は皿の口縁部片であり、内面の体部との境に深い沈線を巡らす。22は、皿I1b類の特徴である底部外面の軸掻き取りを行わないことと、寛による片彫り文と櫛目文が認められる。23以下は、41と45を除いて龍泉窯系青磁である。23から27は、口縁部内面を巡る2条の片彫り沈線から縦に分面線を入れ、その間に片彫りによる雲文を配することを特徴とする碗I4類である。なかでも、24は輪花を施すI4b類である。28・29は、内面に片彫りによる寛描きで蓮華文を施すI2類である。30・32・33は、内面に片彫りによる文様が認められるが、細片のため細分はできない。31は軸の発色が良好であり、3区遺構外出土の第111図22と同一個体の可能性がある。34・36は残存部無文である。35は底部片であり、周縁の沈線内外に片彫りによる文様を配する。碗I2か4類であろう。37から40は、外面に蓮蓬弁文を軸する碗I5b類の体部片である。42から44は龍泉窯系青磁皿である。42・44は体部から底部片で、底部外面の軸を掻き取る。43は口縁部片である。45は、瓶の遊環と称される取っ手部分である。上部には体部との接合部分が残る。41は、焼成不良で軸が濁った白色を呈しており、青磁か白磁かも判断できない。内面は無軸であり、瓶の体部と考えられる。

焼締陶器 (第107図46～第108図60)

焼締陶器の器種としては、山茶碗(46・47)、山皿(48)、片口鉢(49・50)、壺(51～60)がある。山茶碗は、従来県内での出土は知られておらず、本遺跡出土資料により初めて明らかとなった。46は、知多窯製山茶碗の口縁部小片である。内面には赤色物質が付着している。口縁端部形状から13世紀の製品であろう。47も山茶碗の口縁部片と考えられ、胎土の特徴から渥美窯のものであろう。48は、胎土の特徴から美濃窯と考えられる山皿である。口縁端部には油煙と考えられる黒色物質が多く付着している。口縁部形態や器高、口径、底径の比率から12世紀末から13世紀前半の皿であろう。49は、知多窯片口鉢の片口部破片である。口縁端部は丸く仕上げ、更に中央に沈線を入れている。50も片口鉢と考えられるが、胎土の特徴から渥美窯であろう。内面は使用により磨滅している。57は、知多窯系地方窯の可能性のある広口壺である。口縁部は大き

く外反させた後、折り返すように上方に屈曲させる。端部は肥厚し、先端には浅い沈線を巡らしている。口縁部の特徴から13世紀前半の製品であろう。51から56、58から60は焼締陶器の裏もしくは壺の体部片である。これらのうち、53と56は渥美窯製品、その他は知多窯製品である。52は頸部付近の肩部片で頸部内面と外面には自然釉がかかる。59は体部下位片であり、器表が茶褐色を呈し、外面には自然釉が2条流れ、内面には自然釉が斑状に付着している。60の内面は、やや磨滅して平滑になっていることから、破損後に転用された可能性が考えられる。

瓦 (第108図61・62)

4号井戸出土中世瓦と同様な胎土・焼成の瓦小片である。

軟質陶器 (第108図63～73)

63から65は、すり鉢の小片である。65は、底部内面にも1単位5本以上のすり目が施され、外面は砂底である。64は、4号井戸出土の第68図7と同一個体の可能性がある。66、68から73は内耳鍋、67は焙烙の破片である。67の焙烙は、耳の断面形状が円形に近く、耳下端が底部にまで達していないことから17世紀以前と考えられる。71は、底部外面周縁に窪みが認められ、器壁がやや薄いが丸底となる可能性もある。72は口縁端部を内側に小さく折り曲げるもので、鉢状の鍋の可能性もある。すり鉢の胎土は、63が「5」、64が「1」、65が「7」である。内耳鍋・焙烙の胎土は、「1」が68・69、「3」が72、「4」が70・73、「5」が71である。

カワラケ (第109図74～101)

2区遺構外出土のカワラケは、すべて轆轤を使用している。74は、口径が小さく、体部下端の器壁が厚い。轆轤は右回転、底部は回転糸切り無調整、胎土は「1」である。75は、体部がやや外反し、口縁端部に至りわずかに肥厚する。胎土は「1」で、轆轤は左回転である。76・77も75とほぼ同様な器形である。胎土は76が「1」、77が「2」で轆轤は共に左回転である。78は、口径が小さく、体部が外傾する。轆轤の回転方向は不明である。胎土は「4」。77は、轆轤左回転で体部がわずかに内湾する。胎土「2」。80から82は底径が小さく、体部が外傾する。轆轤の回転方向は、82が右回転で他の2点が左回転である。胎土は80・81が「4」、82が「2」である。83は、復元実測ではやや底径が大きくなっているが、歪みが著しいため正確な径、傾きは不明である。底部左回転糸切り。胎土「5」。84は、器高がやや高く、体部が外傾する。内面底部と体部の境は沈線状に窪む。底部左回転糸切り無調整。胎土は「2」。85は器壁が厚く、底径が小さい。底部は左回転糸切り無調整、胎土は「2」。86は、小型で口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたようである。底部回転糸切り無調整。なお、轆轤の回転方向は不明である。胎土は「2」である。87は84と同様な器形である。内面には、油もしくは油煙が付着している。底部は、回転糸切り無調整であるが、回転方向は不明。胎土は「2」。88は、底径が大きく器高が低いカワラケである。器表が磨滅しており、底部の調整など不明である。胎土は「2」。89は、やや器高が高く、底部左回転糸切り無調整である。胎土は「2」。90から97は中型のカワラケ底部片である。底部は、93が静止糸切りである以外、すべて左回転糸切り無調整である。なお、底部内面の撫では90・95に、底部外面の浅い圧痕は97に認められた。胎土は、「1」が97、「2」が90から92、95、96、「3」が93、「4」が94である。98・99は、器高がやや高く体部がやや外湾するカワラケである。底部は共に左回転糸切り無調整で、99の外面には浅い圧痕、内面には撫でが認められる。胎土は98が「1」、99が「2」である。100・101は、底部右回転糸切り無調整のもので、100は内面に轆轤目を明瞭に残す。共に平安時代(As-B降下以前)の皿であろう。胎土は「2」、「4」に似ている。

土製品 (第109図102~104、第110図128~130)

103・104は土鍾。102、128から130は、内耳鍋もしくは焙烙の割れ口を粗く磨いて不整形に仕上げた不明土製品である。

金属製品 (第110図105~112)

105は銅製の煙管籠首である。106・108は釘、110は鋸であろう。113は刀子であろうか。他は不明鍛鉄製品である。

銭貨 (第110図114~127)

114と116の2枚は付着して出土した。銭種は114が「洪武通寶」、116が不明瞭であるが篆書の「熙寧元寶」である。117も篆書の「熙寧元寶」だが若干書体が異なる。他に北宋銭としては、115の篆書「皇宋通寶」、120の真書「嘉祐元寶」、121の「祥符元寶」、122の篆書「元祐通寶」がある。初鑄年代の古いものとしては、119の「開元通寶」、更に南唐の篆書「唐國通寶」がある。また、初鑄年代の新しいものとして126の「永樂通寶」、安南の「紹平通寶」がある。なお、127は「寛永通寶」であろう。124・125は判読不能である。

3区遺構外出土遺物 (第111図1~38、P L-59)

3区遺構外出土遺物とは、中世第1水田確認面より上層から出土した遺物と出土層位不明の遺物を指す。

中国製磁器 (第111図1~23)

1から5は、白磁碗の口縁部片であり、端部を外側に屈曲させる1・2と玉縁に作る3・4・5の2者がある。前者は白磁碗V類であり、後者は3・4が白磁碗IV類、5がIV2類であろう。10も白磁碗の口縁部であるが、端部先端と内面の軸を削り取ったいわゆる口禿の碗である。碗IX類に分類され、時期は13世紀後半から14世紀前半である。6から8は、白磁碗の体部片であり、6は体部下位に沈線を施している。7の体部外面下位は無軸である。9は白磁の底部で、高台脇の一部と高台外面以下は無軸である。内面底部周縁には、片彫りによる明瞭な沈線が巡る。11は、本遺跡出土白磁皿の中で最も遺存状態が良好である。内面には片彫りによる草花文を施し、底部外面の軸は掻き取っている。白磁皿VII類である。

12から23は青磁であり、12・14が同安窯系、13と15以降が龍泉窯系である。12は、同安窯系青磁碗I 1b類の体部片である。14は、同安窯系青磁皿I 1類である。16・18・19・21は、内面に片彫りによる蓮華文を施す龍泉窯系青磁碗I 2類である。15・17・20は、外面に蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗である。15がI 5a類、20がI 5b類である。17は軸が不透明であり、無文であるかもしれない。22は、軸が厚く発色も良好である。軸は高台外面まで施釉し、その境は茶褐色に発色する。13世紀の龍泉窯系青磁である。23は、内面にも施釉されているが、瓶と考えれば元の所産であろう。

焼締陶器 (第111図24~29)

24は、いわゆる山茶碗である。高台端部には朽痕を有し、高台内には回転糸切り痕を残している。製作地は編集者の力量不足により判断できない。25は、知多窯の片口鉢体部下位片である。外面下半は寛削り、内面下半は使用により磨減している。胎土はやや粗く、さほど焼き締まらない。26は知多窯の壺口縁部と考えられ、内外面には均一に自然釉がかかる。口縁部形態から12世紀後半のものであろう。27は知多窯製の薄い体部片であり、外面には押印文が認められる。28も知多窯製の壺体部片であり、器壁は厚い。内面には自然釉が斑状に付着しており体部下位の破片と推定される。29は、胎土・焼成から渥美窯と判断される壺体部片である。外面には押印文が認められる。

カワラケ (第111図30)

小片による復元実測によれば、器形は底径が大きい割に器高が非常に低いという特徴を有している。また、外面の底部と体部との境は稜をなさず、丸みをおびている。轆轤の回転方向と底部の切り離し技法は不明である。胎土はカフラケの「4」である。

軟質陶器 (第111図31~33)

31は、すり鉢口縁部である。端部は、上方に屈曲させて玉縁状にする。2区84・67溝出土(第22図6)のすり鉢と同一個体の可能性がある。32は、内耳輪の体部片である。33は、外面に押印文を掘する有する香炉と推定される口縁部小片である。

金属製品 (第111図34~38)

すべて銀鉄製品である。34・38は釘である。35も曲がっているが釘であろう。36は不明。37は鏝である。

4区遺構外出土遺物 (第112図1~10)

4区では時期不詳の井戸が1基検出されたが、中世遺構は検出されていない。これを反映するように遺構外出土遺物も量的に少なく、遺物組成の点でも軟質陶器が欠落している。

施釉陶器 (1)

錆色の鉄釉を施した皿の口縁部である。口縁端部を小さく波状にしたいわゆる嬰皿であろう。美濃窯の製品と考えられる。

中国製磁器 (2・3)

2は外面無軸の白磁碗底部である。底部内面の軸は輪状に掻き取っており、白磁碗Ⅳ類であろう。

焼締陶器 (4~9)

4は、知多窯と思われる壺・甕の頸部小片である。5は、知多窯製片口鉢の片口部である。端部は丸く、器壁もやや薄いことから12世紀末から13世紀前半に生産された製品であろう。6から9は甕の体部片であり、8が瀝美窯である以外、3点は知多窯製である。7は体部下位片、6・9は外面に自然釉がかかっていることから体部上位と考えられる。

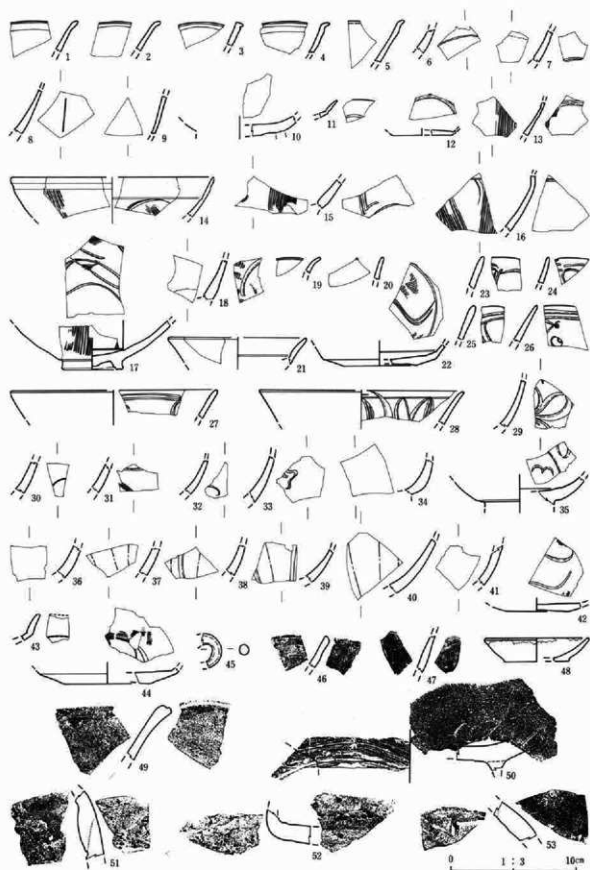
金属製品 (10)

不明銀鉄製品である。

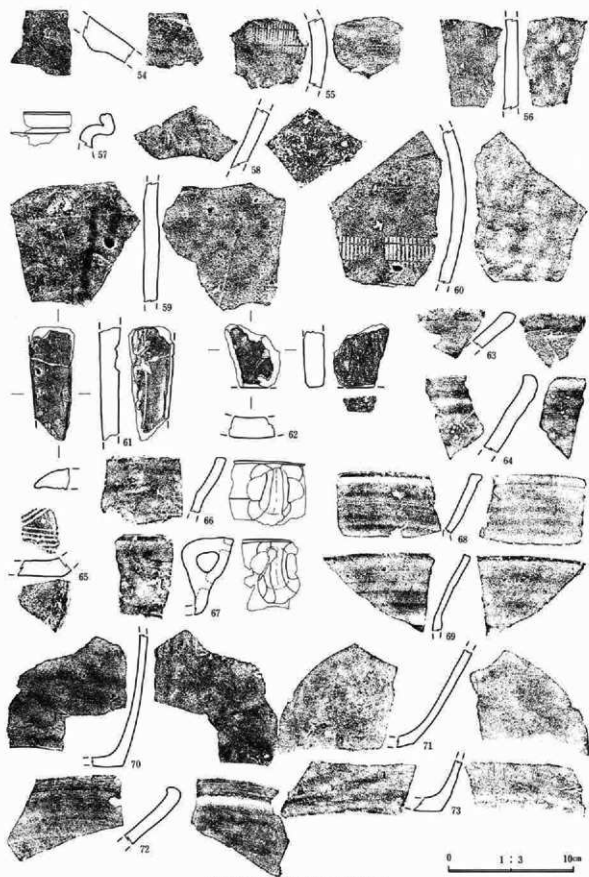
5区遺構外出土遺物 (第113図1・2)

中国製磁器 (1・2)

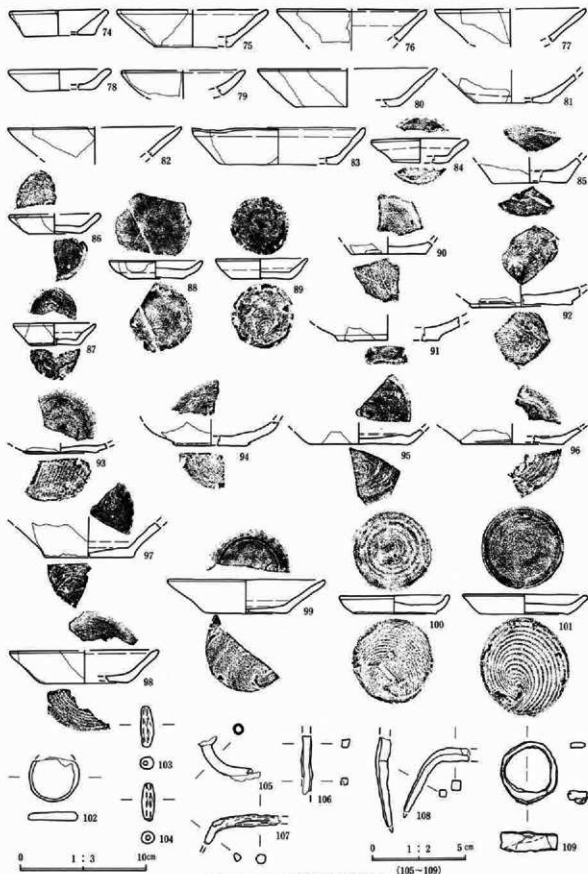
1は玉縁口縁を有する白磁碗である。玉縁が大きく、白磁碗Ⅳ類と考えられる。2は、外面に蓮蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗であるが、蓮弁文を櫛状工具で施文している。この点を考慮しなければ、碗Ⅰ5b類の特徴を有している。



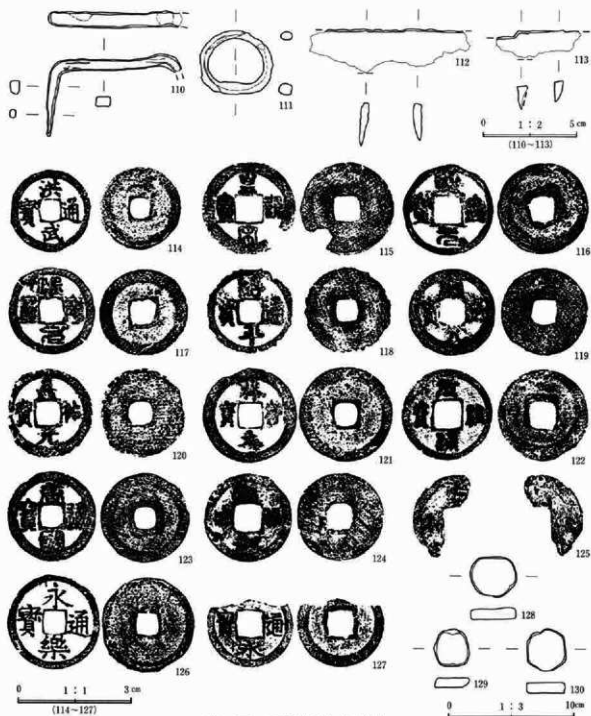
第107图 2区遺構外出土遺物(1)



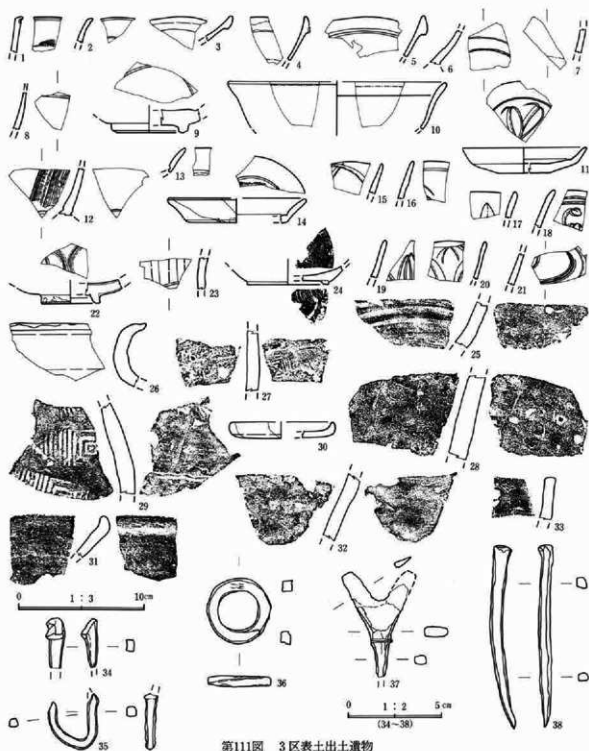
第108图 2区遺構外出土遺物(2)



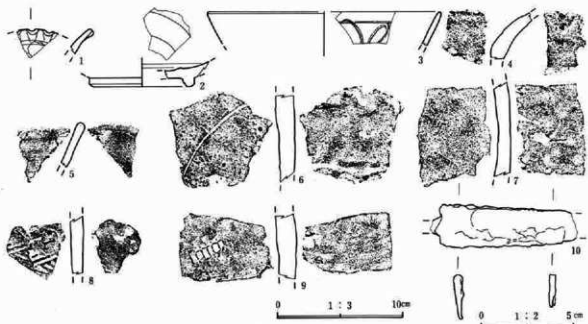
第109图 2区遺構外出土遺物(3)



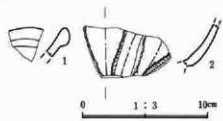
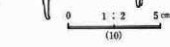
第110图 2区遺構外出土遺物(4)



第111图 3区表土出土遗物



第112图 4区遺構外出土遺物



第113图 5区表土出土遺物

第2節 As-B降下以前の遺構と遺物

1. 竪穴住居

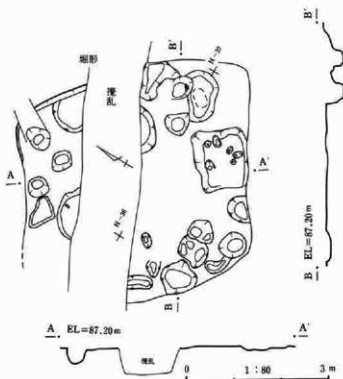
1号住居 (第114図、P L-16)

遺構

4区G-36グリッドに位置し、楕形底部のみ検出された。楕形下部での検出であるため、平面形は、ややいびつであるが隅丸方形を呈すると推定される。確認された規模は、4.69m×4.78mである。竈は、痕跡も確認できず、幅1mの覆土に破壊されていると考えられる。

遺物

遺物は、図示し得るものはない。しかし、出土した細片から、住居の時期は奈良・平安時代と考えられる。



第114図 1号住居掘形実測図

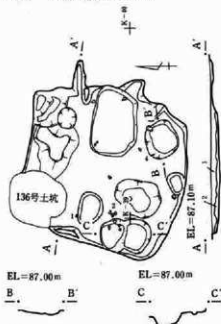
2号住居 (第115・116図、P L-16)

遺構

4区J-38グリッドに位置し、1号住居同様床面は削平されており、楕形のみ検出された。遺存状態は、不良で壁が直線的でない部分もある。北西壁は136号土坑と重複し、本住居が古い。平面形は不詳であるが、一辺3.3~3.4mの隅丸方形と推定される。現状での長軸方位は、N-17-Eである。竈は、東壁北寄りに設けられ、煙道は壁外に延びる。

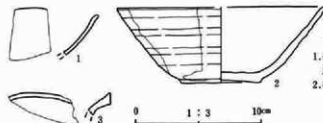
遺物

出土遺物のうち4点を図示した。1・2は須恵器杯、3は灰胎陶器瓶の口縁部破片である。4は、土師器甕の口縁部である。いずれも掘形出土である。



2号住居土層注記

1. 褐色土層 2~3 の安山岩粒とローム粒を多量に含む。焼土・炭化物少量含む。
2. 褐色土層 安山岩粒少量含む、ローム粒やや多く含む。



第115図 2号住居掘形実測図・出土遺物(1)

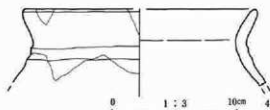
3号住居 (第117図、P.L-16、60)

遺構

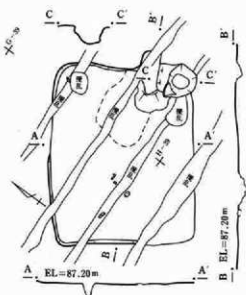
4区のG-39グリッドに位置し、遺構確認時に床面が露出する状態であった。したがって、埋土は深い部分でも約2cmしかなかった。硬化した床面は、竈西側から住居中央にかけての狭い範囲のみであった。平面形は、長軸3.7m、短軸3.06mの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-56°-Eである。竈は、東隅に近い位置に設置され、隅には貯蔵穴を設けている。なお、竈のほとんどは擾乱により破壊されている。堀形は、全体が掘り込まれているわけではなく、床下土坑が複数認められた。

遺物

床面からは、少量遺物が出土しているが、図示できるものはない。図示した2点は、いずれも堀形出土である。1は、胎土の緻密な口縁部の外反する土師器杯である。2は、胎土の粗い土師器小壺である。2の遺存は良好である。図示した遺物は、2点とも古墳時代の所産であるが、住居の形態・規模、床面出土の細片から、本住居は奈良・平安時代と推定される。したがって、図示した遺物は混入と判断される。

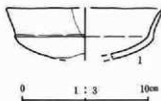
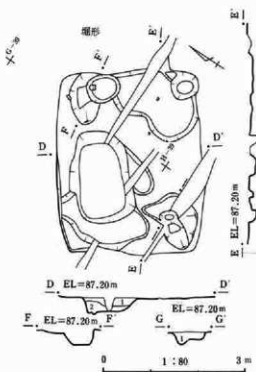


第116図 2号住居出土遺物(2)



3号住居堀形土層注記

- 1.暗褐色土層 ローム塊10%配合む。
- 2.暗褐色土層 黒色土粒「中～大」10%配合む。



第117図 3号住居実測図・出土遺物

4号住居 (第118図、PL-16)

遺構

4区G-39グリッドに位置し、主柱穴と推定されるピット4基を確認した。主柱穴間の距離は、2.2~2.4mである。方位的にも住居との相違がなく、住居として測量し、報告する。時期は不詳である。

遺物

出土しない。

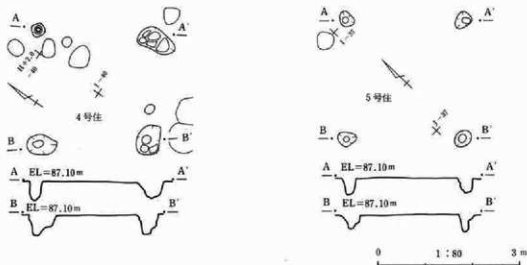
5号住居 (第118図、PL-16)

遺構

4区I-37グリッドに位置し、主柱穴と推定されるピット4基を確認した。主柱穴間の距離は、約2.5mである。方位的にも住居との相違がなく、住居として測量し、報告する。時期は不詳である。

遺物

出土しない。



第118図 4・5号住居実測図

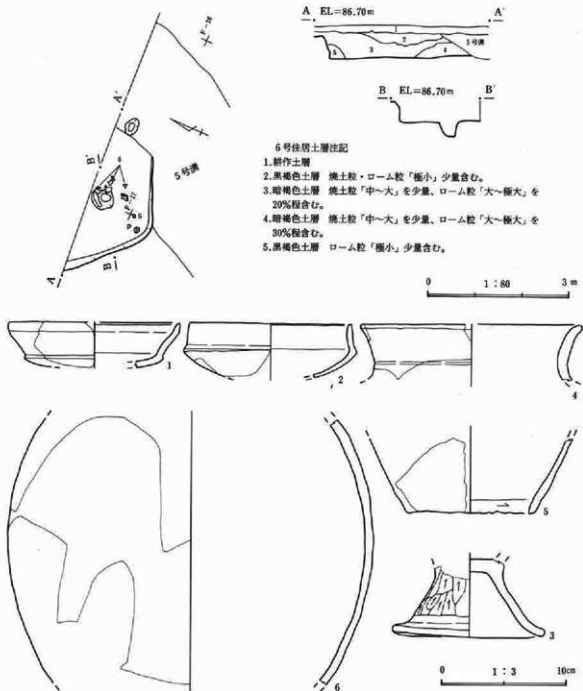
6号住居 (第119図、PL-16)

遺構

2区調査区北端のE-16グリッドに位置し、南壁のみ検出された。更に、5号溝との重複により南東隅は破壊されている。したがって、検出し得たのは南西隅のみであるが、残存壁高は40~48cmと本遺跡中最も深い。甕は、調査区外に位置するであろう。また、床には主柱穴と思われるピットが1基存在する。

遺物

6点図示した。1・2は、胎土の粗い土師器杯である。3は、土師器高杯の脚。4・6は、土師器壺。5は、土師器椀の底部である。



第119図 6号住居実測図・出土遺物

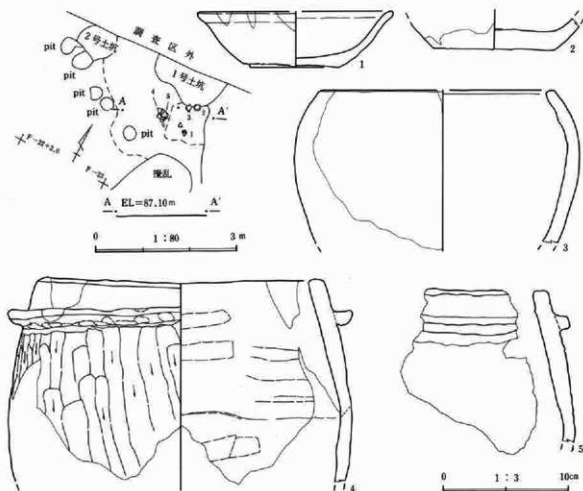
7号住居 (第120図、PL-16)

遺構

2区調査区北端のE-22グリッドに位置し、壁は検出できなかったが、焼土と硬化面を確認した。住居の平面形は不明。焼土の位置から、竈は東壁に設置されていたと推定される。

遺物

遺物は、すべて焼土付近から出土した。1は、須恵器杯。2は、羽釜底部で外面に砂が付着する。3は、羽釜と同様な胎土・焼成である。4・5は、酸化炎焼成の羽釜で、造りは雑になっている。



第120図 7号住居実測図・出土遺物

8・9号住居 (第121・122図, PL-17)

遺構

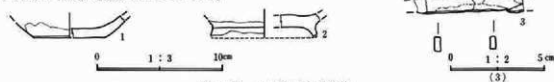
2区8号住居は、F-22グリッドに位置し、9号住居、1号溝と重複する。新旧関係は、1号溝より古く、9号住居より新しい。南東壁を1号溝によって破壊されているが、平面形は長方形と推定される。残存深度は0~8cmと浅い。電付近は、壁が遺存せず僅かなくぼみから、東壁南寄りに設置されていたと考えられる。堀形は、南東部分を掘り込み、ロームを多く含んだ土で埋めている。

9号住居は、8号住居の西壁に重複する。8号住居より古く、残存壁高が2cm程と浅いため、平面形や規模は不明である。堀形は、8号住居同様南東を掘り込んだ後、埋め戻している。

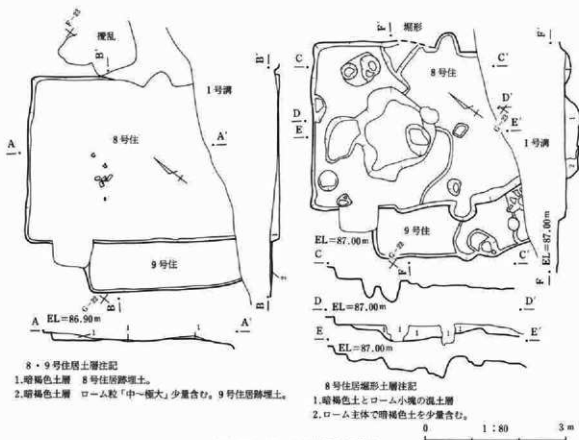
遺物

8号住居からは、中央西寄りから遺物が出土している。1・2は、須恵器杯、3は不明鉄製品である。

9号住居からは、遺物が出土していない。



第121図 8号住居出土遺物



第122図 8・9号住居実測図

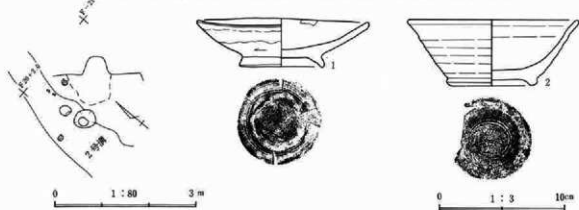
10号住居 (第123図、P.L-17、60)

遺構

2区F-20グリッドに位置する。位置関係から2・3号溝と重複していたと考えられる。新旧関係は、本住居が古い。本住居は、遺存が非常に悪く、竈部分の焼土によってかろうじて検出できた。平面形や規模は不明である。

遺物

1は、焼土付近出土である。2は、溝からの出土であるが、ここに掲載した。1は、口縁部が開き、体部外面下位に篋削りを施す須恵器碗で、酸化炭焼成である。2は、還元炭焼成の須恵器碗である。



第123図 10号住居実測図・出土遺物

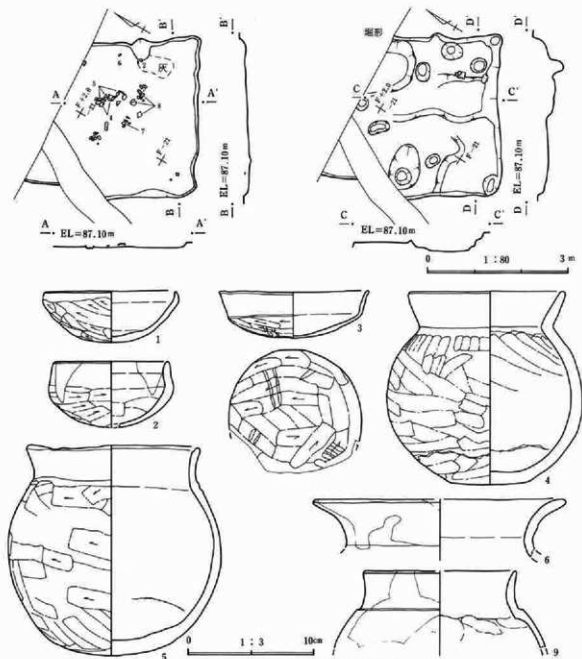
11号住居 (第124・125図、P L-17、60)

遺構

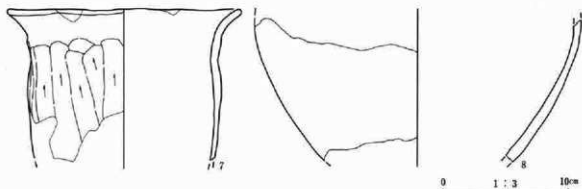
2区D-20グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。平面形は、短軸3.3mの隅丸長方形を呈すると考えられる。残存壁高は、2~14cmと低い。西側は、2・3号溝と重複し、本住居が古い。竈は、東壁南寄りに構築され、前面には狭い範囲で灰が分布していた。遺物は、東壁際と中央部からまとまって出土している。掘形は、全体や部分を掘り下げるタイプではなく、床下土坑を設けるタイプである。

遺物

1~3は土師器杯、4・5・8・9は同壺である。9は、薄手の杯と同様の緻密な胎土を有する。6・7は土師器壺である。壺・甕は、いずれも住居中央部出土である。



第124図 11号住居実測図・出土遺物(1)



第125図 11号住居出土遺物(2)

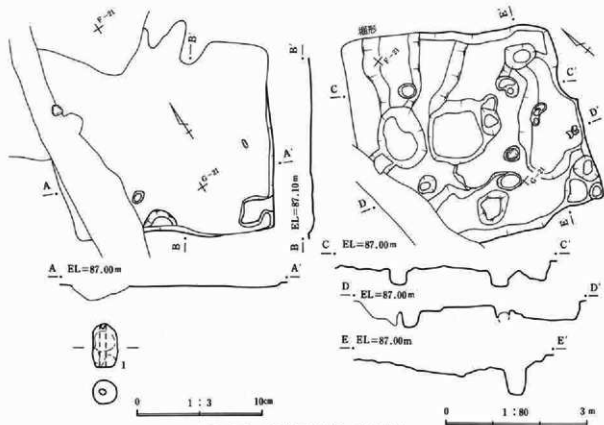
12号住居 (第126図、P L-17)

遺構

2区F-20グリッドに位置し、2号溝、11・13号住居と重複する。壁がほとんど遺存しておらず、新旧関係は判然としませんが、2号溝、11号住居より古く、13号住居より新しいと考えられる。遺存が悪いため、検出した平面形はいびつであるが、長方形を呈していたと考えられる。現状での長軸は4.52m、短軸は4.0mで、残存壁高は0~10cmであった。竈は、東壁やや南よりに設置している。堀形は、底面を複雑に掘り込んでおり、中央を中心に床下土坑も認められる。また、床面では検出できなかったが、4本の主柱穴が確認された。主柱穴の存在から、本住居の時期は古墳時代から奈良時代と推定される。

遺物

図示し得た遺物は、土師質の土錘1点のみである。



第126図 12号住居実測図・出土遺物

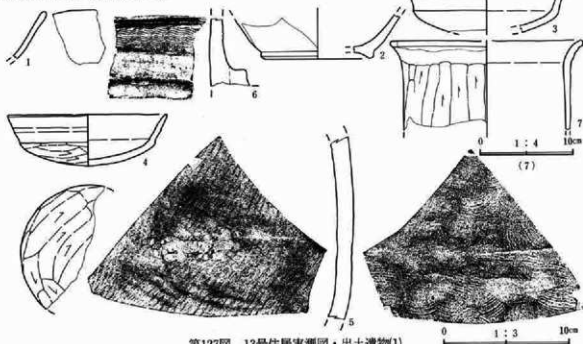
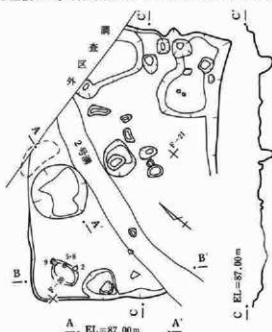
13号住居 (第127・128図、P.L-17、60)

遺構

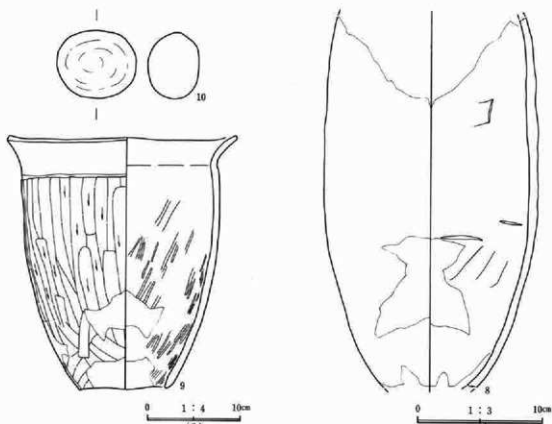
2区E-20グリッドに位置し、2号溝、11・12号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。北側が調査区外に位置するため、全体は検出できなかった。しかし、検出部分から長軸5.8m、短軸4mの長方形を呈すると考えられる。残存壁高は、0～18cmである。床面には、後のピットが多く認められ、かなり荒れた状態である。竈は不明瞭であるが、東壁南寄りに壁が僅かに突出した部分があり、ここに設置されていたと考えられる。西壁中央には、地下式土坑状を呈する土坑が検出されたが、住居との時期差は不明である。

遺物

遺物は、西隣壁際からまとも出土しており、図示した10点のうち半数がこの地点から出土している。1は、内面黒色処理の須恵器碗で、外面は酸化炎である。2は、還元炭焼成の須恵器碗である。3・4は、古墳時代後期の土師器杯である。5・6は、須恵器甕であり、6は、肩部に断面三角形の突帯を貼り付ける。7・8は、土師器甕である。9は、土師器甕である。10は、粗粒安山岩製の球状石製品である。遺物には、時期差が認められるが、住居の形状からは、平安時代の可能性が高いと推測される。



第127図 13号住居実測図・出土遺物(1)



第128図 13号住居出土遺物(2)

14号住居 (第129・130図、P.L-18、60)

遺構

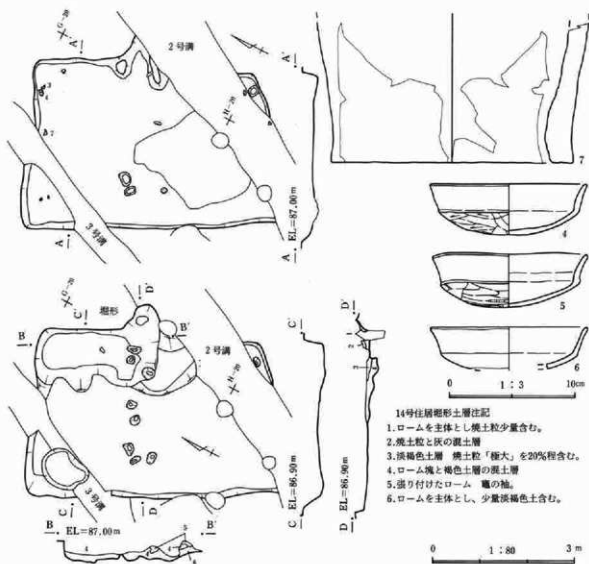
2区G-19グリッドに位置し、2・3号溝、4号溝と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。2・3号溝と重複する南壁は、遺存が悪く検出できない。また、かろうじて検出できた東隅の位置は、他の壁と位置的に合わない。全体は不明であるが、平面形は長方形であろう。短軸は3.6m、残存壁高は10~20cm、長軸方位はN-30°-Wである。北側の床面は、攪乱により広い範囲を破壊されている。竈は、東壁やや北よりに設置している。焚口の壁は、床面から粘土を積み上げて構築していた。堀形は、竈前面と北隅のみ床下土坑を掘り込んでいた。

遺物

竈袖部分からは、1の墨書須惠器碗が出土している。1は、体部外面寛削りで、酸化炭焼成である。2は、還元炭の須惠器杯。3~6は、土師器杯。7は、円筒埴輪の基部破片である。本住居出土遺物も時期差が認められるが、主柱穴が検出されない点気になるが、竈の位置などから、土師器杯3~6の時期と推定しておきたい。



第129図 14号住居出土遺物(1)



第130図 14号住居実測図・出土遺物(2)

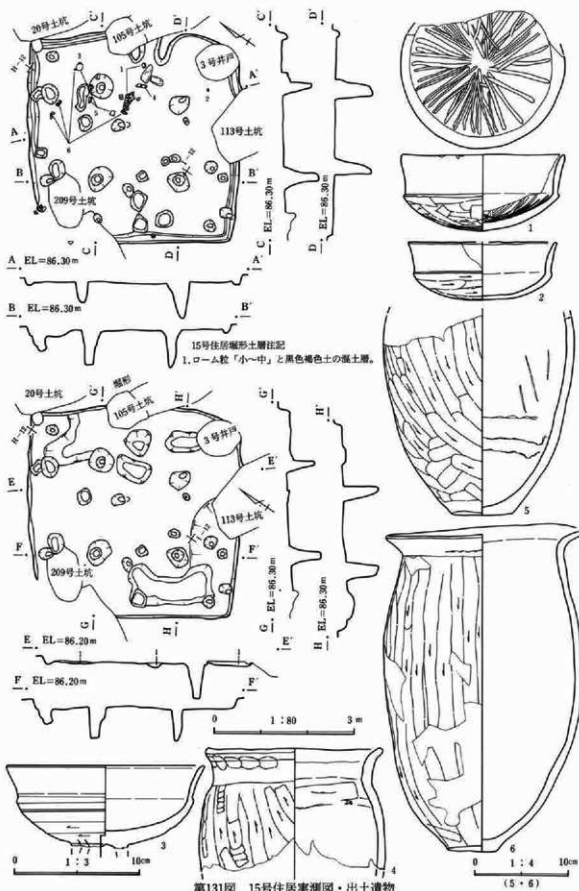
15号住居 (第131図、P L-18、61)

遺構

2区H-11グリッドに位置し、土坑や3号井戸と重複する。重複関係は、いずれも本住居が古い。規模は、長軸4.6m、短軸4.48mであり、平面形は、ほぼ長方形である。長軸方位は、N-44°-Wを示す。床面には、後世のビットが多く認められ、遺存は良くない。壁溝は、殆ど検出できた。主柱穴は、東の柱の位置がずれるものの、4本確認された。電は、東壁南寄りに設置されている。しかし、電本体は、土坑などにより破壊されている。焚口部壁は、床面に粘土を貼り付けて構築している。掘形は、底面をあまり掘り込まず、小規模の床下土坑を掘り込んでいる。

遺物

遺物は、北隅床面を中心に出土し、図示した6点のうち5点が北隅出土である。1は、内面に暗文のある土師器杯、2は土師器杯である。3は、焼成の甘い須恵器高杯である。脚部は欠損しているが、杯部は完存している。4は、平安時代の土師器甕で混入である。5・6は、土師器甕である。



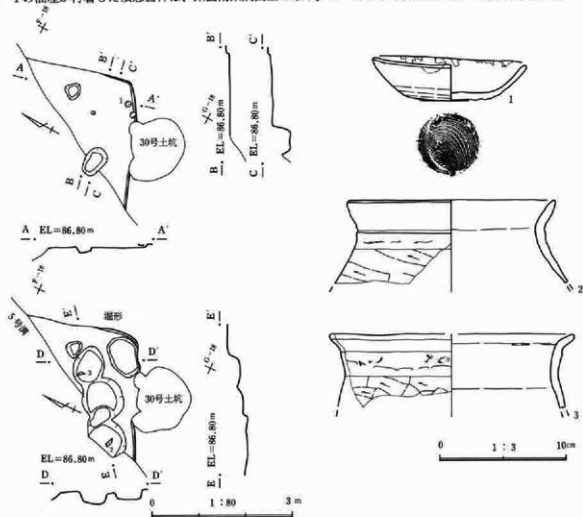
16号住居 (第132図、P L-18・19、61)

遺構

2区F-9グリッドに位置し、西側の大半分を5号溝に破壊され、平面形・規模は不明である。新旧関係は、本住居が古い。残存壁高は、0～10cmと低い。掘形は、4基の床下土坑が確認されたのみである。

遺物

1の油煙が付着した須恵器杯は、床面南東隅出土である。2・3の土師器甕は、床下土坑出土である。



第132図 16号住居実測図・出土遺物

17号住居 (第133図、P L-19)

遺構

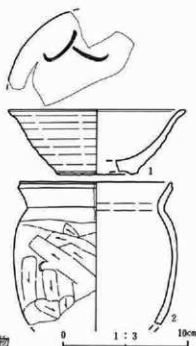
2区F-13グリッドに位置し、80・81・84・141号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。東壁が土坑と攪乱により確認できないため、平面形・規模は不明である。長軸のみは計測可能で、3.6mを測る。北東部分は、住居隅のようであり、南東には貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。したがって、平面形は、南北に長い長方形若しくは隅丸長方形を呈していたと考えられる。床面は、中央南寄り硬化していた。竈は、他の住居や床面硬化範囲から、東壁に設置されていたと考えられる。

遺物

1は、埋土出土の「人」と墨書された須恵器碗である。2は、貯蔵穴出土の土師器甕である。



第133図 17号住居実測図・出土遺物



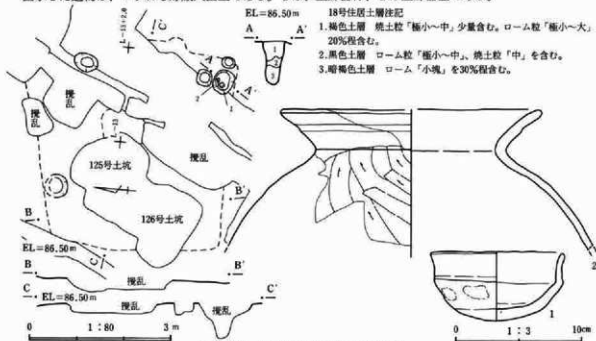
18号住居 (第134図、P L-19、61)

遺構

2区K-12グリッドに位置し、125～127号土坑や攪乱によって床面の殆どを破壊される。壁は全く検出されず、かろうじてローム層に入り込んだ黒色土の範囲で住居範囲を推定した。中央部には、狭い範囲ながら硬化した床面が確認されている。竈は、東壁南寄りに設置されていたと考えられる。また、南東隅には、貯蔵穴が穿たれている。貯蔵穴付近には、ピットが2基存在するが、本住居には伴わないと考えられる。

遺物

図示した遺物は、いずれも貯蔵穴出土である。1は、土師器杯、2は土師器壺である。



第134図 18号住居実測図・出土遺物

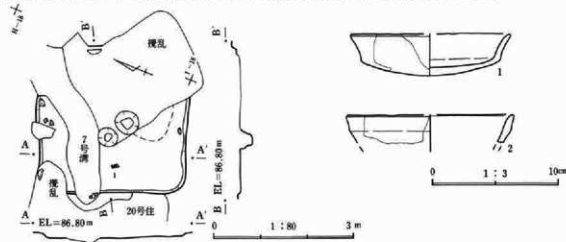
19号住居 (第135図、P L-19)

遺構

2区H-17グリッドに位置し、7号溝・20号住居と重複する。新旧関係は、7号溝より古く、20号住居より新しい。平面形は、残存部から推定すると、長軸3.25m、短軸3.1mの隅丸方形と考えられる。床面は、南東寄りの部分が硬化していた。竈は、攪乱部分に存在していたであろう。

遺物

図示した2点は、いずれも貯蔵穴出土である。2点とも土師器で、1が杯、2が甕である。



第135図 19号住居実測図・出土遺物

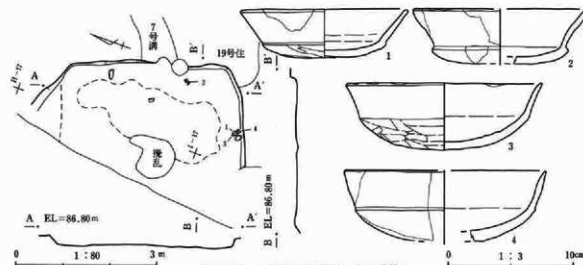
20号住居 (第136図、P L-19、61)

遺構

2区H-17グリッドに位置し、5・7号溝、19号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。住居の西半分は検出できず、東壁と南壁半分程度を検出したに留まった。北壁は、不明瞭である。床面東半分は、硬化していた。竈は、7号溝との重複部分に設置されており、上面を削平されていた。竈部分には、焼土や灰の分布は認められなかった。

遺物

図示した遺物は、いずれも床面南東部から出土している。4点共に土師器杯である。



第136図 20号住居実測図・出土遺物

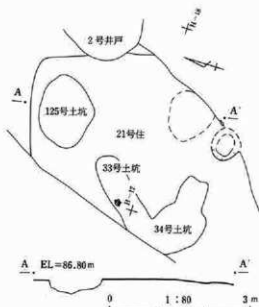
21号住居 (第137図、P.L-20)

遺構

2区G-17グリッドに位置し、5・7号溝、2号井戸、33・34・125号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。住居の遺存は悪く、辛うじて床面の広がりを確認し得た程度で、壁溝も検出されない。床面東寄りの部分は、狭い範囲で硬化している。竈は、検出されない。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。



第137図 21号住居実測図

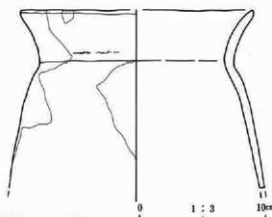
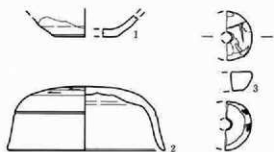
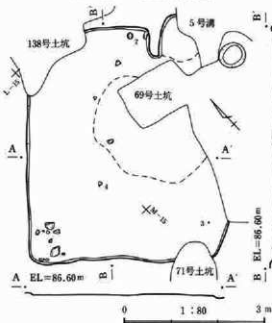
22号住居 (第138図、P.L-20、61)

遺構

2区I-14グリッドに位置し、5号溝、69・71・138・146号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。土坑により東壁の殆どが検出できないうえ、南東隅の形状が不正確なため規模は不明である。平面形は、隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸は、4.89mとやや大きい。残存壁高は2~10cmと低い。床面中央東寄り部分は、硬化している。竈は、東壁南寄りに設置されている。右半分は、5号溝によって破壊されているが、燃焼部底面は焼土化していた。焚口部壁は、床面から粘土を貼り付けて構築している。

遺物

遺物は散在しており、竈左から完形の須恵器杯蓋(2)、ほぼ中央からは土師器壺(4)、南隅からは石製紡錘車(3)が出土している。須恵器蓋は、焼成は甘く焼き締りはない。



第138図 22号住居実測図・出土遺物

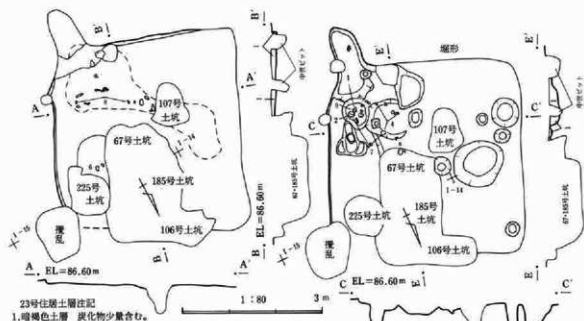
23号住居 (第139・140図、P L-20、61)

遺構

2区H-14グリッドに位置し、67・106・185号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。本住居も遺存が悪く、平面確認時に床が露出してしまう状態であった。残存壁高は0～5cmと浅く、西壁と竈の壁は確認できなかった。平面形状は、やや歪であるが、長軸4.14m、短軸4.06mの方形を呈している。東壁付近は、硬化した床面が検出され、西壁付近から北隅にかけての広い範囲には炭化物が分布していた。竈は、北隅に構築され、燃焼部は壁外に突き出す。燃焼部に底面は、焼土化していた。掘形は、竈前を中心に床下土坑が掘り込まれていた。

遺物

遺物は、床面より掘形出土個体が多く、9点図示した内8点が掘形出土である。床面出土の8も、掘形出土破片と接合しており、厳密な意味での床面出土遺物で図示し得る物はなかった。1～3は、須恵器皿であり、3は、口縁部に油煙が付着している。4は、混入の須恵器杯。5は、酸化炭焼成の須恵器椀。6～8は、羽釜である。9は、混入であるが、太刀形埴輪片である。

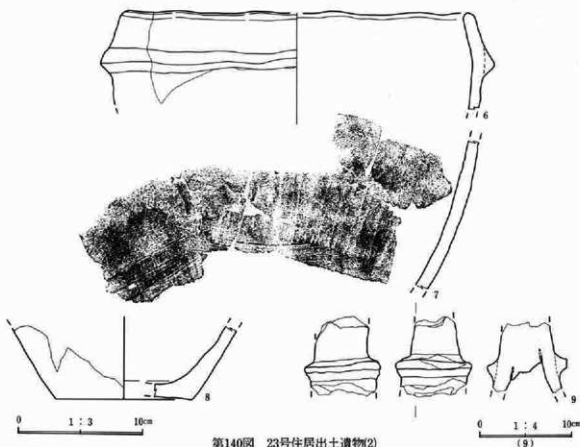


23号住居土層注記
1.暗褐色土層 炭化物少量含む。

23号住居掘形土層注記
1.暗褐色土層 ローム「小塊」、焼土、灰を20%程含む。



第139図 23号住居実測図・出土遺物(1)



第140図 23号住居出土遺物(2)

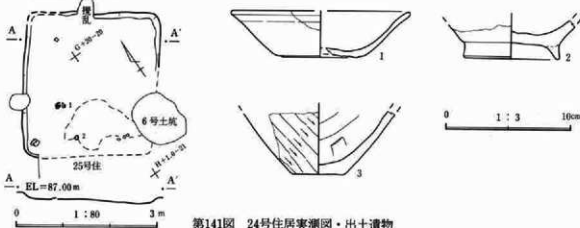
24号住居 (第141図、P L-20)

遺構

2区F-20グリッドに位置し、6号土坑、25号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。25号住居との重複などにより南壁と東壁南寄りが検出できない。このため、平面形は不詳であるが、長軸約3.0m、短軸2.88mの隅丸方形と推定される。竈は検出されないが、重複部分に存在していたであろう。床面は、南隅付近が硬化していた。

遺物

遺物は3点図示し、床面からは、1・2の須恵器杯が出土している。埋土中からは、3の「コ」の字状口縁土師器甕の底部が出土している。



第141図 24号住居実測図・出土遺物

25・32号住居 (第142～145図, P L-20・21, 61・62)

遺構

25号住居は、2区G-20グリッドに位置し、24・32号住居と重複する。新旧関係は、本住居が新しい。平面形は、長軸3.62m、短軸3.12mの隅丸長方形を呈する。残存壁高は、0～26cmである。床面北隅には粘土が認められ、遺物は全体から出土している。竈は、東壁やや南寄りに設置されているが、明瞭な焼土や灰の分布は認められなかった。

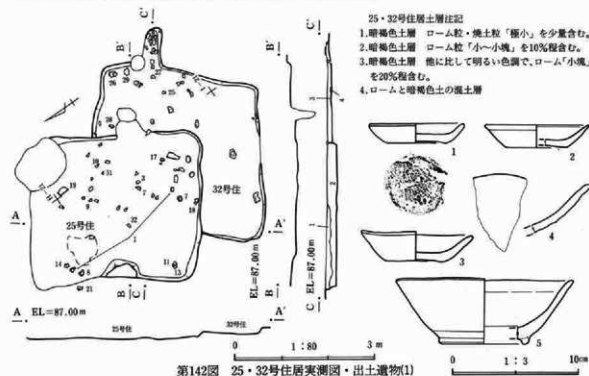
32号住居は、H-20グリッドに位置し、25号住居と重複する。新旧関係は、本住居が古い。平面形は、長軸3.5m、短軸3.3mのややいびつな隅丸方形を呈する。北隅は、25号住居との重複から検出できない。残存壁高は、6～14cmである。竈は、東壁北寄りに設置されている。遺物は、竈を含む東側から比較的集中して出土している。

堀形は、両住居とも床下土坑を有するタイプである。床下土坑は、どちらの住居に属するものか不明瞭なものも存在する。

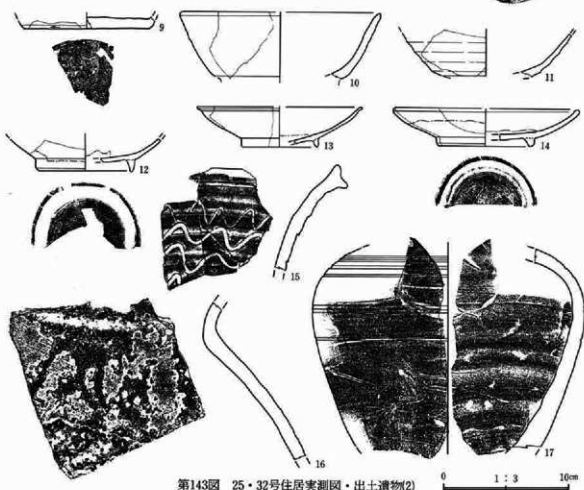
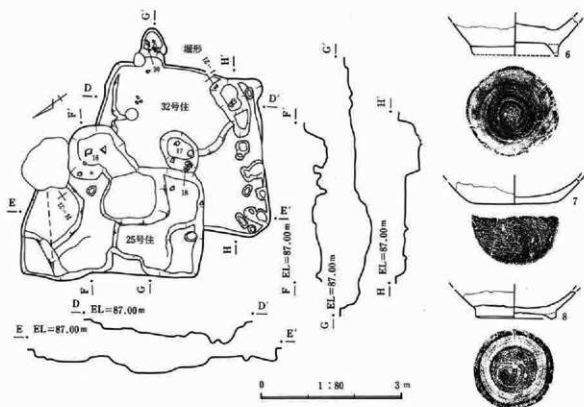
遺物

25号住居からは、床面全体から遺物が出土しており、本遺跡の住居では出土遺物は最も多い。1～3は、轆轤成形、酸化炭焼成の皿である。4～11は須恵器碗と杯であり、9・7の杯は混入品で前代の所産である。12・13は灰釉陶器碗、14は同皿、32も灰釉陶器壺である。なお、32は接合しなが同一個体と推定される。15～18は須恵器壺と壺である。17は、床下土坑と床面出土破片が接合している。19～21は羽釜であり、21は型的にやや古いと考えられる。23は、磨目面を有する軽石製品。24は鉄製釘である。

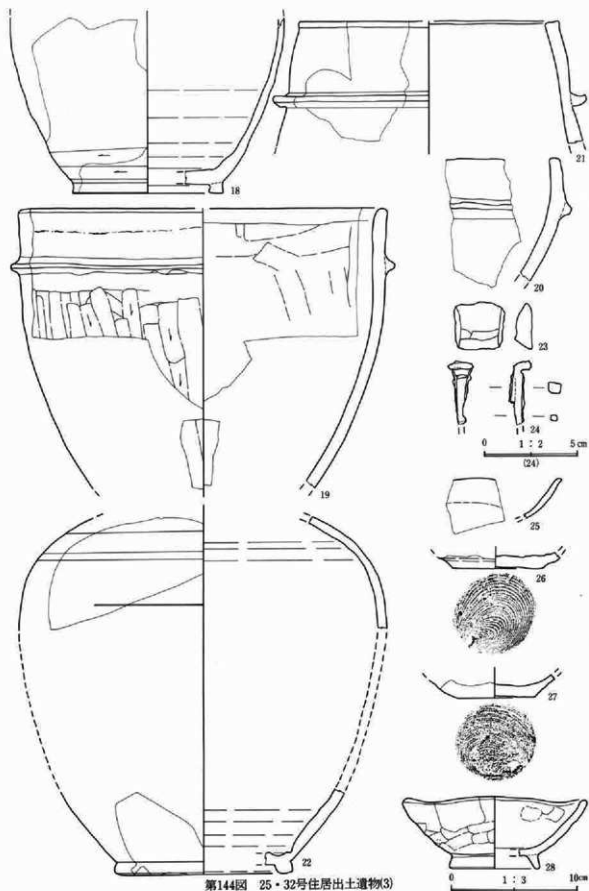
32号住居は、25号住居との重複のため、床面東側に遺物が遺存していた。本遺跡住居の中では、決して遺物の少ない方ではない。25は、灰釉陶器碗の口縁部破片。26・27は9世紀代の須恵器杯。28は、体部外面に篋削りを有する酸化炭焼成の須恵器碗、29も酸化炭焼成であるが、轆轤成形である。30は、器壁の厚い「コ」の字口縁土師器壺である。31は、土釜とも称される壺である。



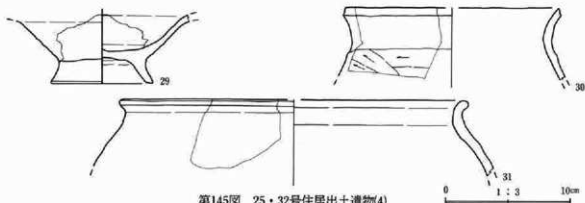
第142図 25・32号住居実測図・出土遺物(1)



第143图 25・32号住居実測図・出土遺物(2)



第144图 25・32号住居出土遺物(3)



第145図 25・32号住居出土遺物(4)

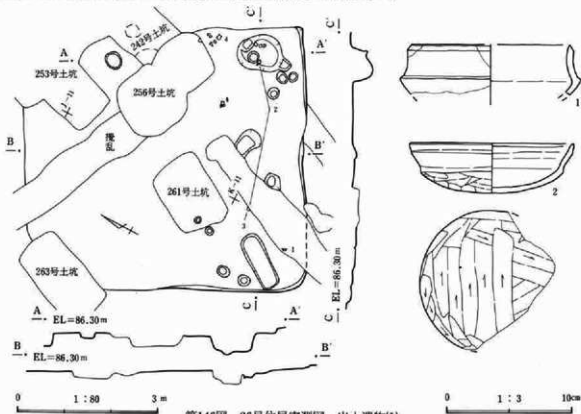
26号住居 (第146・147図、P.L-21、62)

遺構

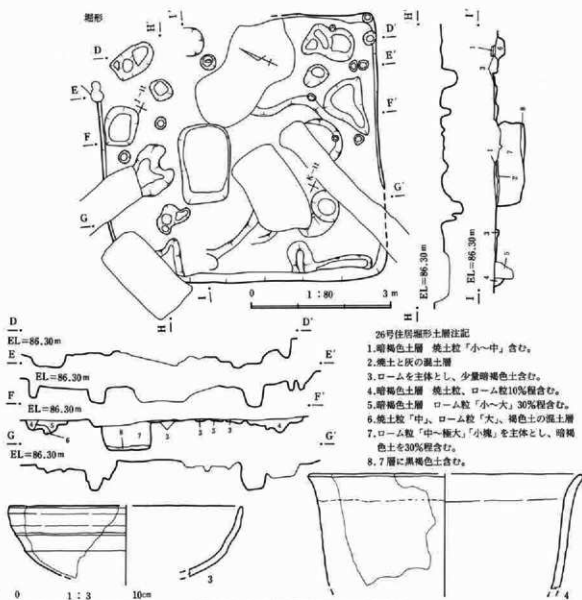
2区J-10グリッドに位置し、242・253・256・261・263号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。本住居も、他の住居同様後世の削平が著しく、平面確認時に床面が露出する状態であった。壁が遺存しない部分や破壊されている部分があるが、平面形は、長軸5.9m、短軸5.5mの隅丸長方形を呈する。残存壁高は、0～10cmと低い。竈は、検出されないが、242・256号土坑部分に設置されていたと推定される。堀形は、大小多くの床下土坑を設けるとともに、全体に薄く貼床を施している。また、堀形調査時には、4本の支柱穴が検出された。

遺物

遺物は、壁の遺存する北側から出土している。1～3は、土師器杯である。4は、小片であるが、口縁部形態から土師器甕と考えられる。遺物と住居形態の特徴とは矛盾しない。



第146図 26号住居実測図・出土遺物(1)



第147図 26号住居実測図・出土遺物(2)

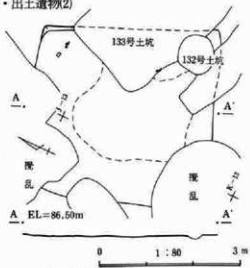
27号住居 (第148図、P.L-21)

遺構

2区J-12グリッドに位置し、132・133号土坑と重複する。新旧関係は、本住居が古い。本住居も後世の削平が著しく、壁は北壁の一部が残っているのみであった。しかし、残存部分から、平面形は、1辺3.8m前後の方形と推定される。壁の遺存は悪いが、床は中央の広い範囲で硬化面が認められた。竈は、他の住居の位置から133号土坑部分に設置されていたと推定される。

遺物

図示し得る遺物の出土はない。



第148図 27号住居実測図

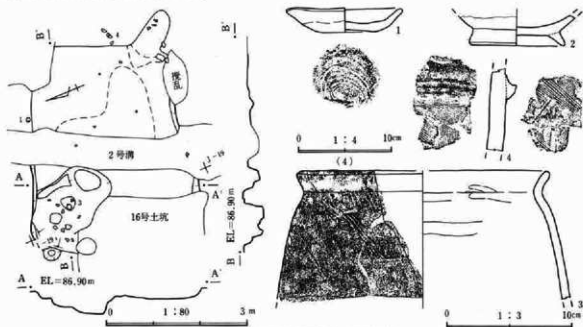
28号住居 (第149図、P L-21、62)

遺構

2区I-19グリッドに位置し、2・3号溝、16号土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。本住居も後世の削平が著しく、壁は西半で確認されたのみである。平面形は、長軸4.4m、短軸3.6mの隅丸長方形と考えられる。床面中央部には、広く硬化面が認められた。北西隅には、土坑状の掘り込みが存在するが、住居の掘り込み自体が浅く、重複関係は確認できなかった。したがって、ここでは土坑としてはではなく、住居として報告しておく。竈は南東隅に設置され、底面は焼土化し、前面には灰の分布が認められた。

遺物

1は、恐らく壁際に位置してしたであろう酸化炭焼成の須恵器皿である。2は、須恵器椀。3は、土坑部分出土の土釜と称される土師器甕である。4は、住居外出土であるが、形象埴輪片である。遺物の時期と竈の位置等の住居形態とは矛盾しない。



第149図 28号住居実測図・出土遺物

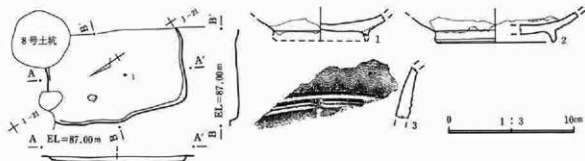
29号住居 (第150図、P L-21)

遺構

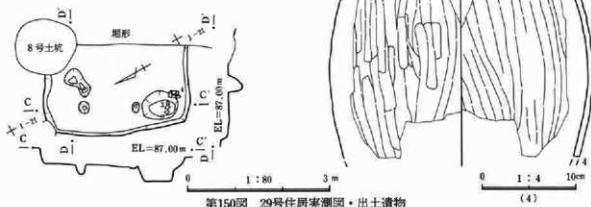
2区I-21グリッドに位置し、1号溝と重複する。新旧関係は、本住居が古い。東側約半分を1号溝に破壊されており、全景は不明である。規模は、計測できる南北軸が2.9mを測る。残存壁高は、4~10cmと本遺跡では平均的な遺存状態である。竈は、本遺跡では東壁に設置する例が多く、遺存していない東壁に存在していたであろう。掘形は、床下土坑を設けているのみである。

遺物

床面出土遺物で、図示し得る個体は灰釉陶器椀の底部(1)1点のみであった。床下土坑からは、灰釉陶器椀(2)、須恵器壺か甕の口縁部小片(3)、土釜と称される土師器甕(4)が出土している。



29号住居土層注記
1. 増緑色土層 ローム粒「極小～小塊」10%程含む。



第150図 29号住居実測図・出土遺物

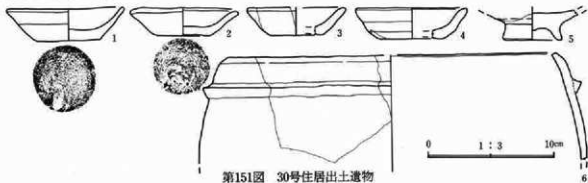
30号住居 (第151・152図、P L-30、62)

遺構

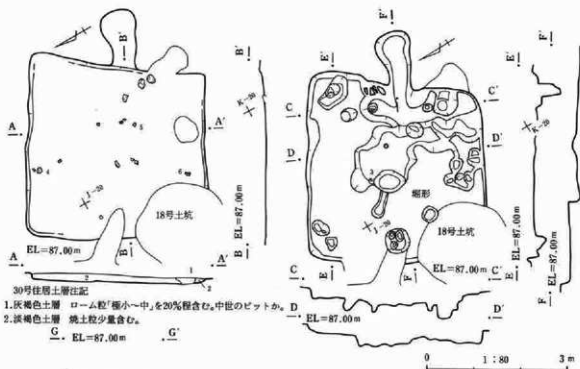
2区 I-20グリッドに位置し、1号溝、18号土坑、28号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。平面形は、長軸3.8m、短軸3.6mの正方形を呈する。残存壁高は、他の住居同様0～8cmと低い。竈部分は、1号溝との重複のため、かろうじてプランが確認できた程度である。竈は、東壁中央に設置され、煙道は長く延びる。堀形は、竈前面を中心に掘り込まれている。

遺物

床面からは、2の須恵器杯、5の須恵器碗底部、6の羽釜が出土している。また、埋土中からは3・4の須恵器杯が出土している。いずれも酸化炎焼成である。堀形からは、1の酸化炎焼成の須恵器杯が出土している。竈が壁の中央に位置するが、図示した遺物より古い遺物の出土はなく、これらの遺物が住居の時期を示しているものと解される。



第151図 30号住居出土遺物



第152図 30号住居実測図

31・49号住居 (第153～155図、P L-22、62)

遺構

31号住居は、K-18グリッドに位置し、2・3号溝、49号住居と重複する。新旧関係は、2・3号溝より古く、49号住居より新しい。平面形は、長軸4.5m、短軸3.2mの長方形を呈するが、西壁が不明瞭であるため、長軸規模はやや小さくなる可能性がある。竈は、東壁南側に小さく設置される。竈北側には、ロームが大きく残っており、壁の構築材であった可能性が高い。

49号住居は、K-17グリッドに位置し、2・3号溝、31号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。平面形は、長軸4.3m、短軸3.7mの正方形に近い長方形を呈する。残存壁高は、2～20cmである。壁の立ち上がりは4周で確認されているが、竈は検出できなかった。时期的には、竈が設置されていたものと考えられる。床面中央は、やや広い範囲で硬化していた。

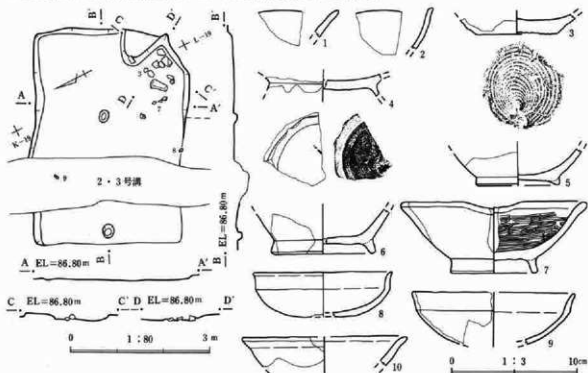
堀形は、調査の都合上同時に検出しており、同一図面で示した。このため、床下土坑の一部はどちらに属するか不明である。堀形は、全体に掘り込まれておりロームを含む土を主体として埋め戻されていた。

遺物

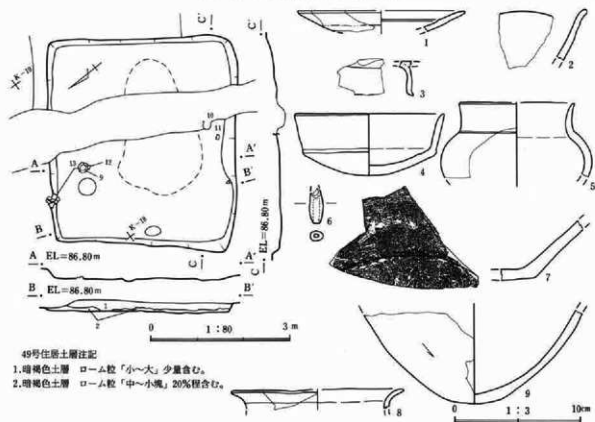
31号住居の竈前から南壁際の範囲からは、3の須恵器杯、暗文を有する内面黒色処理を施した須恵器碗(7)、混入の土師器杯(8)が出土している。なお、3は堀形出土破片と接合している。溝との重複部分からも、住居より古い時期の土師器杯(9)が出土している。4は、底部外面に墨書のある須恵器碗である。1・2・5・6・10は、埋土出土の須恵器碗である。

49号住居の床面付近からは、9の土師器甕底部、10・11の土師器甕、12の土師器甕、13の須恵器壺が出土している。なお、10・11は2・3号溝出土破片と接合している。埋土からは、灰釉陶器皿、古墳時代後期の胎土が緻密で焼成温度の高い土師器(4・5)などが出土している。また、堀形からは、葉室型須恵器の蓋(3)、須恵器碗(2)、須恵器壺底部破片(7)が出土している。出土遺物には、大きな時期差が認められ

るうえ、埴形出土遺物に平安時代の個体が認められる。しかし、重複や、後世の削平が深くまで及んでいることを考慮すれば、床面出土の9・10・11の時期を考慮しておきたい。



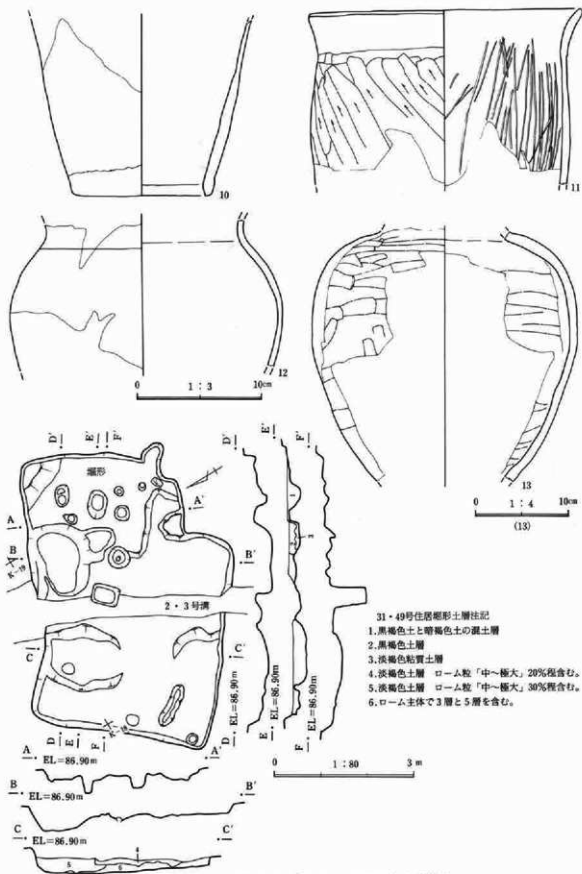
第153図 31号住居実測図・出土遺物



49号住居土層注記

1. 暗褐色土層 ローム粒「小〜大」少量含む。
2. 暗褐色土層 ローム粒「中〜小塊」20%程含む。

第154図 49号住居実測図・出土遺物(1)



第155図 31・49号住居掘形実測図 49号住居出土土物(2)

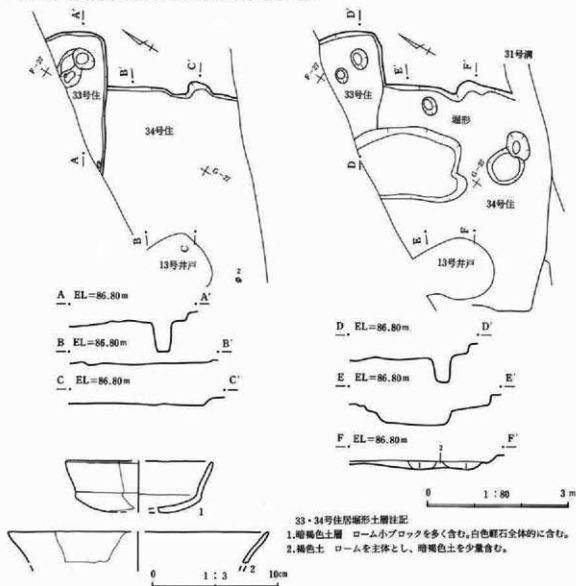
33・34号住居 (第156図、P L-23)

遺構

2区F-26グリッドに位置し、両住居とも8号溝と重複する。34号住居は、27・31号溝、13号井戸と重複する。新旧関係は、33号住居が8号溝・34号住居より古く、34号住居が井戸・溝より古く、33号住居より新しい。残存壁高は、33号住居が8cm、34号住居が4～6cmである。33号住居は、南東壁部分のみ検出。34号住居は、東壁のみの検出であるため、両者共に平面形・規模は不明である。33号住居の竈は、南東隅に小規模の貯蔵穴が存在することから、東壁南寄りに設置されていたと推定される。34号住居の竈は、東壁南寄りに小さく燃焼部が突き出ている。堀形は、両住居ともに全体を浅く掘り込んでおり、34号住居には大きい床下土坑も構築されていた。

遺物

図示し得る遺物は、両住居とも1点のみであった。33号住居からは、土師器杯(1)、34号住居からは「く」の字状口縁土師器壺の口縁部破片が出土している。



第156図 33・34号住居実測図・出土遺物

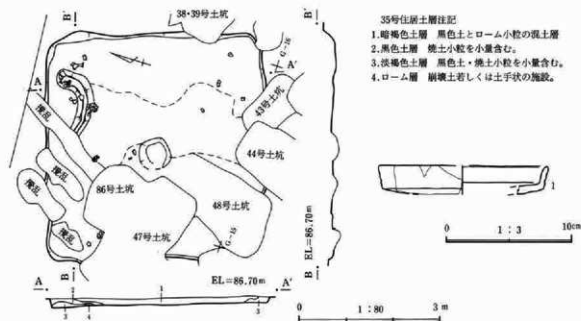
35号住居 (第157図、P.L-23)

遺構

2区F-14グリッドに位置し、多くの土坑と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。平面形は、1辺4.7mの隅丸方形である。残存壁高は、10~14cmと本遺跡ではやや良好な遺存である。床面中央部は、南北に長く硬化面が認められた。北壁寄りには、土手状の高まりが弧状に認められた。竈や炉は検出できなかった。

遺物

土手状の高まりを中心に土器片が出土しているが、図示できる個体はなく、埋土中出土の土師器杯(1)1点のみを図示した。住居の時期を決定できる遺物の出土はないが、おそらく古墳時代後期であろう。



第157図 35号住居実測図・出土遺物

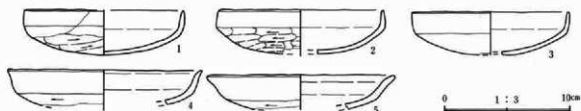
36号住居 (第158・159図)

遺構

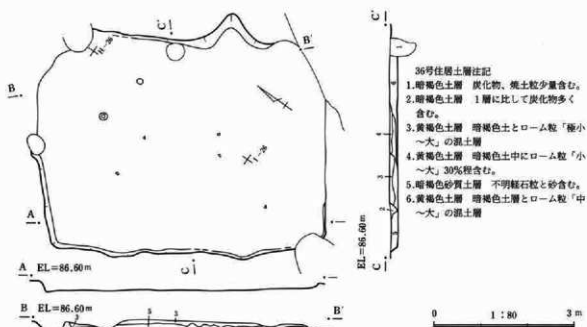
2区H-25グリッドに位置する。北壁東側と南壁は遺存していないが、平面形は、長軸5.9m、短軸4.5mの隅丸長方形若しくは長方形と考えられる。残存壁高は0~10cmで、壁溝は検出されない。長軸方位はN-35°-Wである。竈は、東壁南寄りに設置されるが、顕著な焼土や灰の分布は認められない。

遺物

図示得たのは、いずれも埋土中出土の土師器杯(1~5)である。これらの遺物は、本住居の年代を示すと考えられる。



第158図 36号住居出土遺物



第159図 36号住居実測図

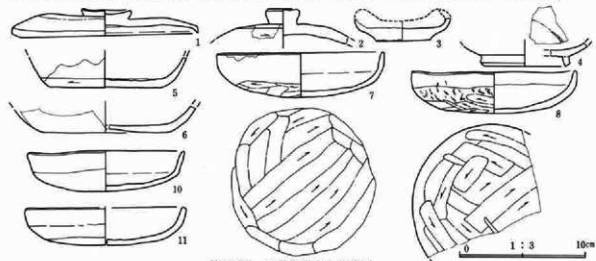
37号住居 (第160～162図、P L-23・24)

遺構

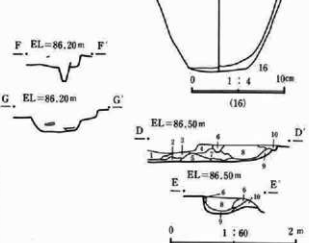
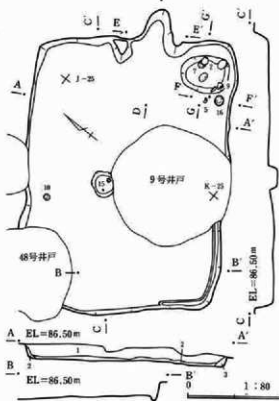
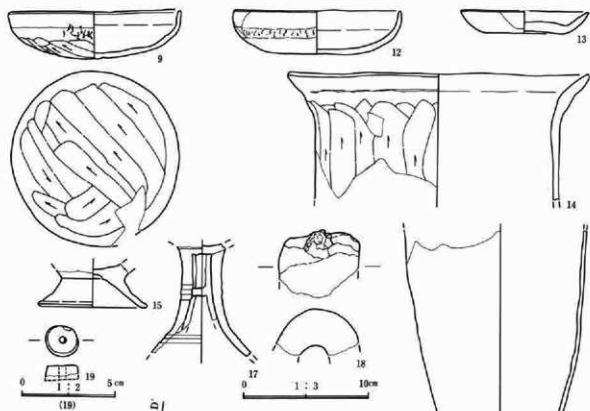
2区J-24グリッドに位置し、9・48号井戸と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が古い。平面形は、長軸5.8m、短軸4.3mの東西に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-58°-E、残存壁高は高い部分で34cmを測る。本住居は、台地縁辺に占地するため、後世の削平をさほど受けていないようである。竈は、東壁やや南寄りの設置され、左側には壁の基部が僅かに残っている。貯蔵穴は、竈に向かって右側、南東隅に穿たれている。また、堀形は確認できなかったが、16の土師器壺が貯蔵穴の西に近接して埋置されていた。床面中央の浅いピットは、位置的に住居には伴わないと考えられる。

遺物

貯蔵穴とその周辺を中心に、焼け歪みのある須恵器杯蓋(1)、同杯(5)、土師器杯(7・9)、土師器壺(16)が出土している。また、埋土からは、住居に伴わないと考えられる灰釉陶器耳皿(3)、同椀(4)、須恵器長脚2段透かしの高杯脚部(17)が出土している。18は籬羽口の先端、19は滑石裂白玉である。



第160図 37号住居出土遺物(1)



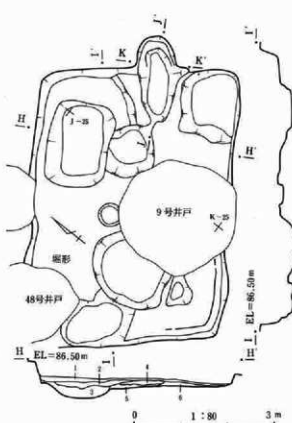
37号住居土層注記

1. 褐色土層 ローム粒と白色軽石多く含む。
2. 褐色土層 ローム小ブロックと焼土・ローム粒を少量含む。
3. 褐色土層 ローム粒「中」を含む。

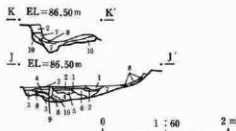
37号住居土層注記

1. 褐色土層 ローム粒と白色軽石多く含む。
2. 褐色土層 ローム小ブロックと焼土・ローム粒を少量含む。
3. 灰褐色土層 ローム粒多く含む、焼土と灰を含む。
4. 灰褐色土層 ローム粒多く含む、焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土層 焼土粒多く含む、ローム・灰粒を含む。
6. 暗褐色土層 ローム粒・焼土粒・白色軽石を含む。
7. 褐色土層 ロームを主体とし、焼土と灰を含む。
8. 暗褐色土層 ローム粒と焼土を多く含む。
9. 暗褐色土層 焼土と灰を多く含む。
10. 暗褐色土層 ローム粒と白色軽石、焼土を含む。

第161図 37号住居実測図・出土遺物(2)



第162図 37号住居掘形実測図



37号住居掘形土層注記

- 1.褐色土層 ロームを主体とした貼り床。
- 2.褐色土層 ローム多く含む。焼土を少量含む。
- 3.褐色土層 ローム多く含む。黒褐色土、焼土を少量含む。
- 4.褐色土層 ロームブロック、焼土含む。
- 5.褐色土層 焼土を多く含む。
- 6.褐色土層 ロームを多く含む。

37号住居掘形土層注記

- 1.灰層
- 2.暗褐色土層 貼り床。
- 3.褐色土層 ロームブロック主体とし、焼土粒、暗褐色土を少量含む。
- 4.暗褐色土層 ローム、黒褐色土と灰、焼土を含む。
- 5.暗褐色土層 ロームブロックと焼土を多く含む。
- 6.暗褐色土層 ローム粒「大」と焼土を含む。
- 7.暗褐色土層 ロームブロック多く含むが焼土はほとんど含まない。
- 8.暗褐色土層 灰と焼土が主体。
- 9.暗褐色土層 ロームブロック、灰、焼土を含む。
- 10.ロームブロック

38・50号住居 (第163・164図、P L-24、64・65)

遺構

38号住居は、L-21グリッドに位置し、8号溝、50号住居と重複する。新旧関係は、8号溝より古いのが50号住居との関係は、壁の遺存がなく不明であった。平面形・規模は不明である。竈は、東壁南寄りに設置され、燃焼部は壁外に位置する。床面南西に存在するピットは、本住居に伴うか否か不明である。

50号住居は、38号住居の南壁西寄りで竈先端部のみ検出された。38号住居との新旧関係は不明である。竈の掘り込みはなく、僅かに焼土の分布で確認した。その後、堀形の調査で西側にもピットが検出され、柱穴の可能性もある。

遺物

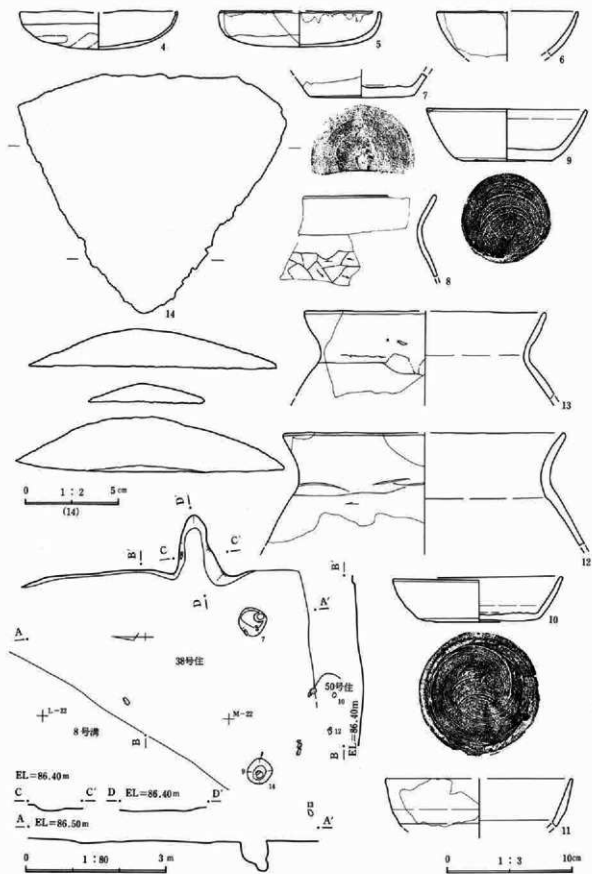
38号住居のピット内からは、須恵器杯底部(7)が出土している。また、埋土からは、須恵器杯口縁部(6)と土師器杯(1~5)、土師器甕(8)破片が出土している。1の須恵器が若干新しいと考えられるが、その他の遺物の時期は、本住居の年代を表していると考えられる。ピット内から9の底部周縁回転削りの須恵器杯と鉄鉄(14)が出土している。鉄鉄の炉底側に付着していた厚い錆びには炉底が付着しておらず(P L-64)、他の場所から運ばれたと考えられる。

50号住居からは、竈内から底部周縁回転削りの須恵器杯(10)が出土している。

両住居の時期については明確にはないが、どちらかが奈良時代の所産であることは疑いない。



第163図 38号住居出土遺物(1)



第164图 38・50号住居实例测图・出土文物(2)

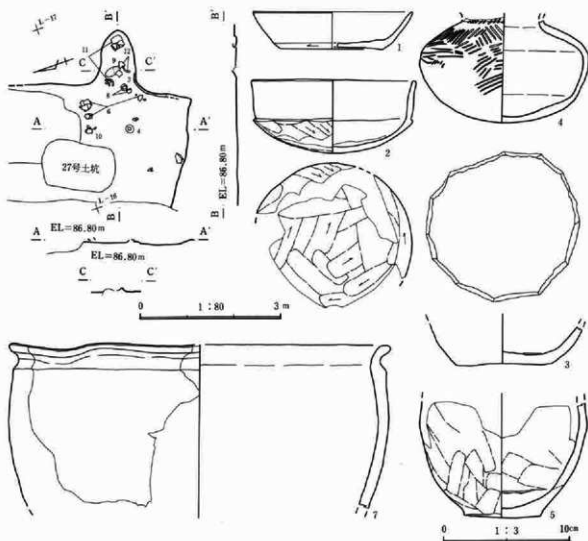
39号住居 (第165・166図、P L-24、62・63)

遺構

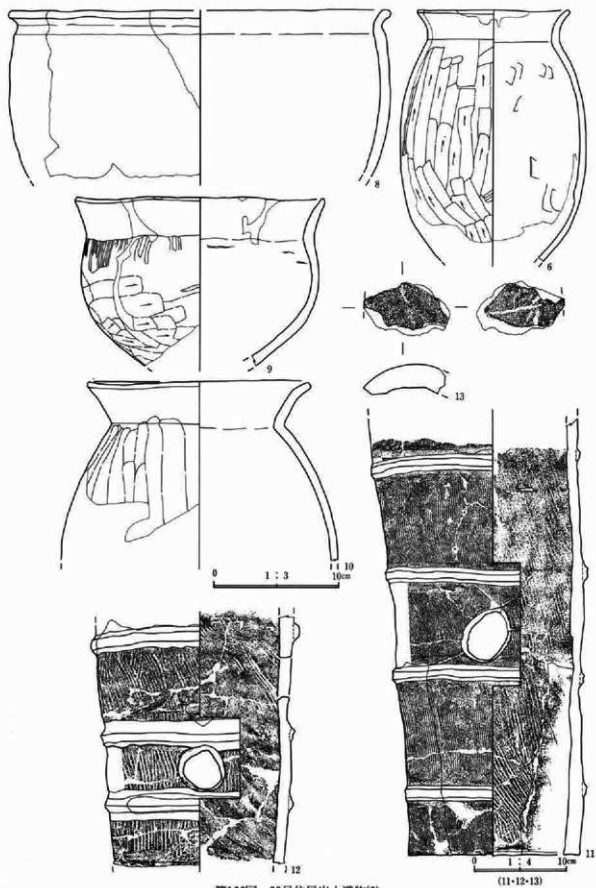
2区K-16グリッドに位置し、5号溝、27号土坑、42号住居と重複する。新旧関係は、5号溝、27号土坑より古く、42号住居より新しいようである。42号住居は、図示していないが竈南側が重複している。壁の立ち上がりは確認できず、床の広がりて住居範囲を確認した。南壁の位置は、図面より若干南に広がる可能性が高い。竈は、東壁に設置されていた。

遺物

遺物は、竈内と竈前から出土しており、遺存が悪いわりにその量は多い。竈内からは、竈構築材として利用されたと考えられる円筒埴輪(11・12)や土釜と称される土師器甕(7・8)、混入と考えられる土師器台付壺(9)、底部左回転半切り無調整、酸化炭焼成の須恵器杯(3)が出土している。なお、7・8は、接合しないが同一個体の可能性が高く、3は口縁部を人為的に打ち欠いている。竈前からは、混入と考えられる土師器甕(6)、同壺(10)、叩目状の痕跡を有する土師器?壺(4)が出土している。須恵器杯(1)と土師器壺(5)、同杯(2)、瓦(13)は、埋土出土である。



第165図 39号住居実測図・出土遺物(1)



第166图 39号住居出土遺物(2)

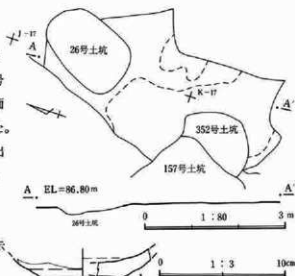
40号住居 (第167図、P L-24)

遺構

2区J-17グリッドに位置し、5号溝、31・159・352号土坑、52号住居と重複する。新旧関係は、52号住居より新しく、他の遺構より古い。本住居は、平面確認時に焼土と硬化床面が検出され、住居と判断した。したがって、平面形・規模は不明である。竈は、検出できなかったが、東壁付近に焼土の分布が認められ、東壁に設置されていた可能性が高い。

遺物

遺物の出土は殆ど無く、須恵器杯1点(1)を図示した。



第167図 40号住居実測図・出土遺物

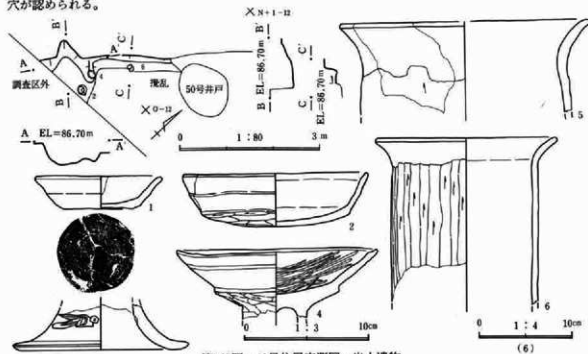
41号住居 (第168図、P L-24、63)

遺構

2区N-12グリッドに位置し、南は調査区外、東は攪乱によって破壊されており、僅かに竈部分が検出されたのみである。竈右側には壁の基部が遺存していた。壁の残存が良好であったため、遺物の遺存度も比較的良好であった。

遺物

竈前と壁基部分からは、土師器杯(2)、土師器高杯(4)が出土している。また、西壁際からは、土師器壺(6)が出土している。これらの遺物は、本住居の時期を示していると考えられる。1の酸化炎焼成須恵器杯は、攪乱などによって混入したものであろう。3は、土師器高杯の脚部と考えられ、焼成後の途中穿穴が認められる。



3 第168図 41号住居実測図・出土遺物

42・45号住居 (第169・170図, P L-24・25、63)

遺構

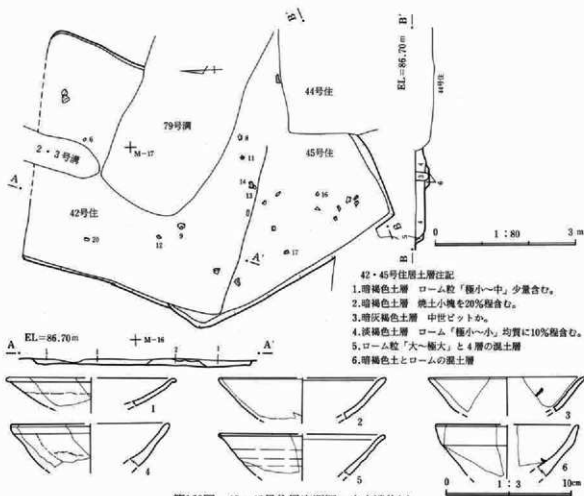
42号住居は、L-18グリッドに位置し、2・3・79号溝、45号住居と重複する。新旧関係は、2・3・79号溝より古く、45号住居より新しい。平面形は、ややいびつであるが1辺4.6m前後の方形を呈している。竈は、79号溝で破壊されているであろう。残存壁高は0~12cmである。

45号住居は、42・44号住居と重複する。新旧関係は、いずれも本住居が新しい。壁は、西と南の一部が検出できたのみであり、平面形・規模は不明である。残存壁高は、18~20cmである。竈は、44号住居との重複により検出できないと考えられる。

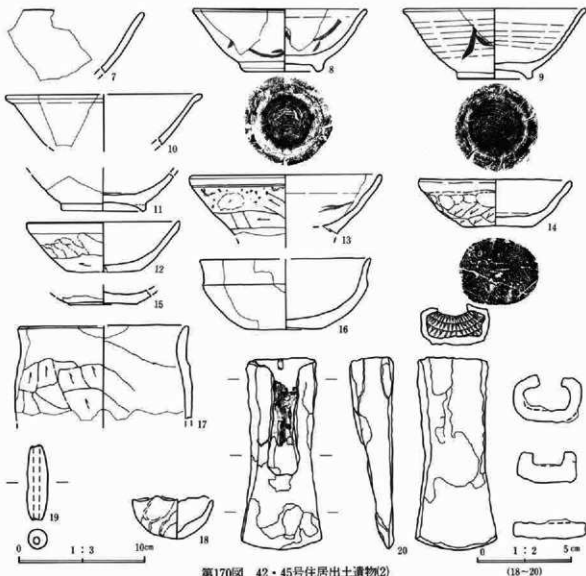
遺物

42号住居からは、南壁付近を中心に遺物が出土している。南壁付近からは、「人」と墨書した須恵器椀(8)、同椀底部破片(11)、体部外面に型肌と篋削りを有する酸化炭焼成椀(13)と同杯(14)が出土している。なお、13には、判読できないが内面に墨書が認められる。また、他の部分からは、「人」と墨書した須恵器椀(9)、外面に篋削りを有する酸化炭焼成の杯(12)、鉄弁(20)、外面器表の剝離した酸化炭焼成椀(6)が出土している。なお、20の袋部に柄が炭化して残っていた。また、6の内面には墨度が認められる。18の手裡ね土器は、45号住居の遺物であったろう。

45号住居からは、土師器杯(16)、土師器甕(17)が出土している。



第169図 42・45号住居実測図・出土遺物(1)



第170図 42・45号住居出土遺物(2)

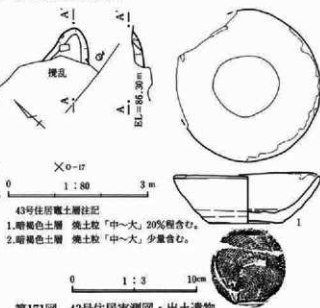
43号住居 (第171図、P L-25、64)

遺構

2区N-17グリッドに位置し、44号住居埋土中に竈を構築していた。住居自体は、攪乱と調査区の関係で検出できなかった。

遺物

図示した遺物は、電外出土であるため、本住居の時期は表していない。図示した須恵器杯は、還元炎焼成で口縁部に油煙が付着している。また、底部外面は、左回転糸切り無調整である。



43号住居電土層注記

1. 暗褐色土層 焼土粒「中〜大」20%程度含む。
2. 暗褐色土層 焼土粒「中〜大」少量含む。

第171図 43号住居実測図・出土遺物

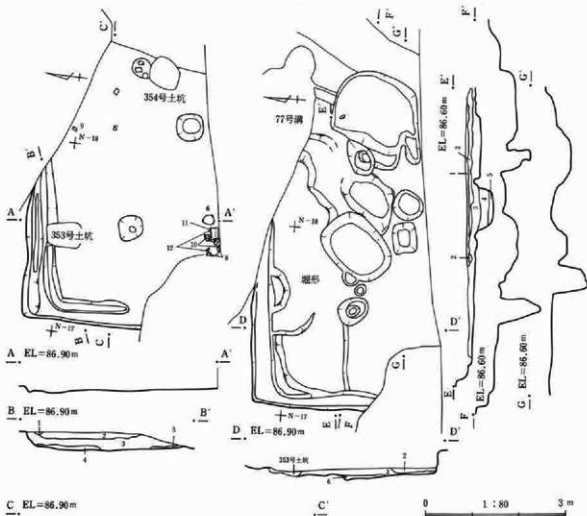
44号住居 (第172・173図、P.L-25、64)

遺構

2区M-19グリッドに位置し、1・79号溝、43・45号住居と重複する。新旧関係は、1・79号溝、43号住居より古く、45号住居より新しい。本住居は、重複が多いうえに南側が調査区外であるために平面形・規模は不明である。残存壁高は、12~30cmとやや高い。北壁から西壁北側にかけて、2条の壁溝が検出され、拡張が行われている可能性がある。堀形は、全体を掘り下げたうえで、更に床下土坑を構築していた。竈は、1号溝との重複により検出できないと考えられる。

遺物

遺物は、調査区南端西側に瓦(11・12)、須恵器盤(6)、土師器釜(8・10)が集中して検出された。4の土師器杯、5の須恵器高杯は古墳時代後期の所産であり、混入と考えられる。



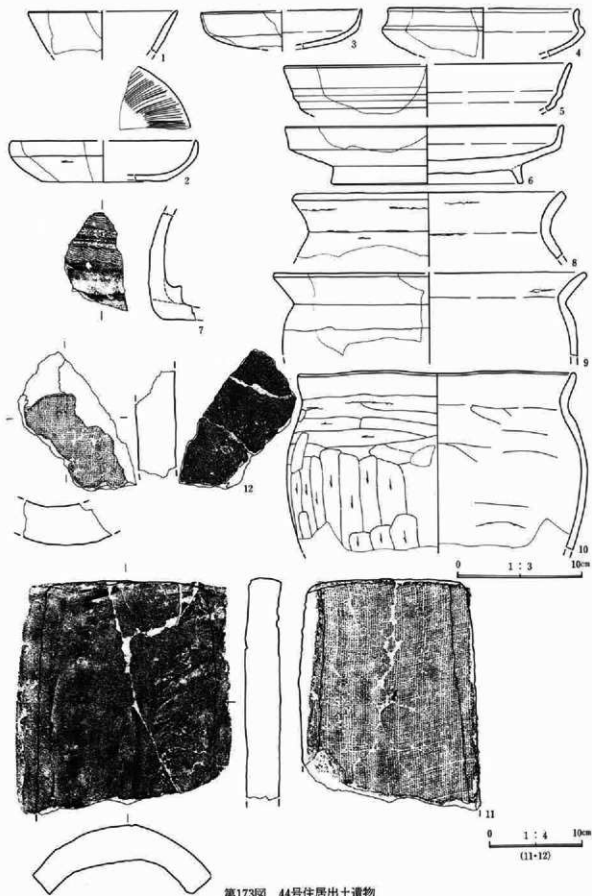
44号住居土層注記

1. 灰褐色土層
2. 暗褐色土と黒褐色土の混土層
3. 淡褐色土層 ローム粒「大」、少量含む。
4. 3層と暗褐色土、ローム粒「極大」の混土層
5. 3層とロームの混土層

44号住居堀形土層注記

1. ロームを主体とし、少量暗褐色土含む。貼り床。
2. ロームを主体とし、暗褐色土1層に比して多く含む。
3. 暗褐色土層 ローム粒「中~小塊」を20%程含む。
4. 暗褐色土小塊とローム「小塊」の混土層
5. 暗褐色土層 ローム「小塊」を30%程含む。
6. ローム粒「極小」を主体とし、少量3層を含む。

第172図 44号住居実測図



第1736圖 44号住居出土遺物

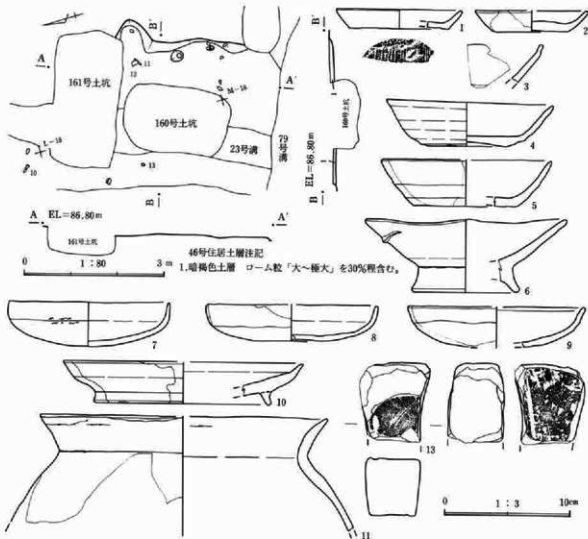
46号住居 (第174・175図、P.L-25、64)

遺構

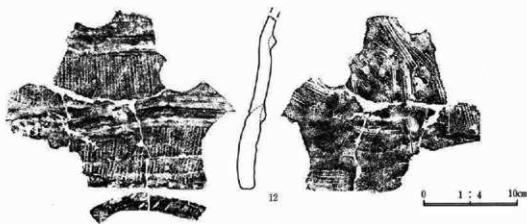
2区L-18グリッドに位置し、2・3・79号溝、160・161号土坑、42・52号住居と重複する。新旧関係は、溝・土坑より古いのが、住居との重複は不明瞭であった。壁は、東壁の一部が確認できたのみであり、他は不明である。これは、調査期間の都合上、この部分の調査を急いだことも原因のひとつである。このため、平面形・規模は不明である。東壁の残存壁高は、10~12cmである。竈は、東壁に設置され、燃燒部は壁外に位置する。

遺物

遺物は、竈前と床面中央、北側から出土している。竈前からは、土師器甕(11)と竈の構築材として使用されたと考えられる円筒埴輪(12)が同一箇所から出土している。床面中央と推定される部分からは、砥沢石製の砥石(13)、本住居に伴うか否か微妙な箇所からは須恵器盤(10)が出土している。埋土からは、1・2の酸化炭焼成須恵器皿、高台のやや高い酸化炭焼成の須恵器椀(6)、灰釉陶器椀(3)など、やや新しい時期の遺物も出土している。したがって、本住居の時期を推定することは、重複関係も不明瞭であることから困難である。



第174図 46号住居実測図・出土遺物(1)



47号住居 (第176図)

第175図 46号住居出土遺物(2)

遺構

2区E-27グリッドに位置し、南は検出できず、北は調査区外である。このため、検出できたのは東隅のみである。僅かに検出できた部分には、貯蔵穴と考えられる落ち込みがあり、炭化物が出土している。

遺物

出土していない。



第176図 47号住居実測図

51号住居 (第177・178図)

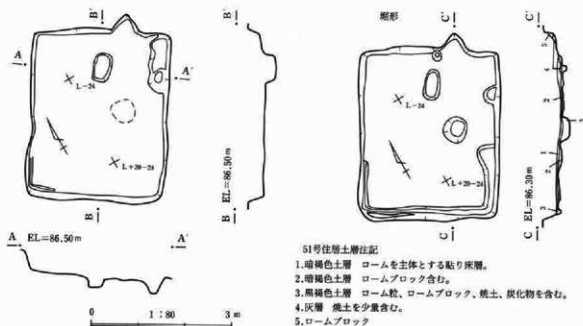
2区東側のK-24グリッドに位置する。平面形は、長軸3.6m、短軸2.9mの長方形を呈する。長軸方位はN-31.5-Eである。台地縁辺に位置することから、後世の削平をさほど受けておらず、残存壁高は34~46cmと高い。しかし、壁溝は西隅の一部で検出されたにすぎない。竈は北東壁の南寄りに設置している。貯蔵穴は、竈の右にあたる東隅に設けている。竈前の小土坑は、本住居には伴わない可能性が高い。床面中央東寄りには、狭い範囲で焼土が認められた。掘形の調査では、この位置に床下土坑が検出されている。掘形は、全体に掘り込み、ロームを主体とした土で埋めている。また、硬化していないが、貼り床層も確認されている。床面では不明瞭であった壁溝が南西壁と隅を巡っていた。

遺物

底部周縁回転篋削りの須恵器杯(1・3)と須恵器杯口縁部(2)、土師器杯(4)が出土している。また、体部が球形を呈し、緻密な胎土を有し高温で焼成された土師器壺(5)も出土しているが、これは古墳時代後期の遺物の混入であろう。



第177図 51号住居出土遺物



第178図 51号住居実測図

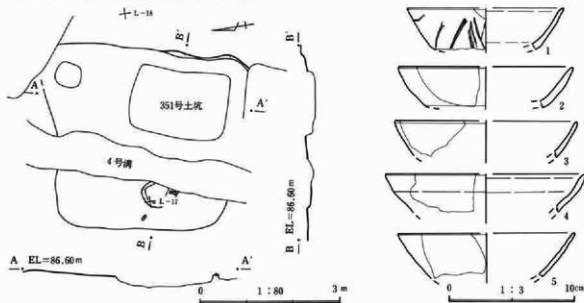
52号住居 (第179・180図, P L-64)

遺構

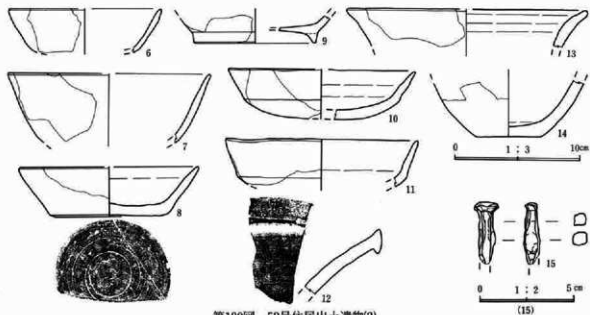
2区K-16グリッドに位置し、351号土坑、4号溝、40・42・49号住居と重複する。新旧関係は、351号土坑、4号溝より古い。しかし、40・42・49号住居より後で検出しているが、前後関係は不明瞭で、新旧逆に調査している可能性もある。壁は、東壁南側で僅かに確認できたのみであり、他は床面の範囲で推定している。したがって、平面形・規模は不詳である。竈は検出できない。

遺物

平面確認時に、須恵器杯・碗 (1~9)、土師器杯 (10・11)、須恵器壺若しくは甕の口縁部 (12)、土師器壺 (13・14)、鉄釘 (15) が出土している。



第179図 52号住居実測図・出土遺物(1)



第180図 52号住居出土遺物(2)

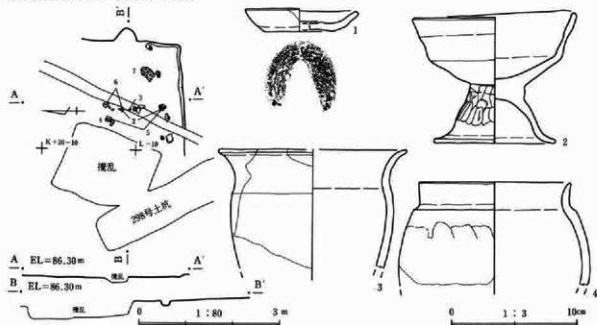
53号住居 (第181・182図、P L-25、65)

遺構

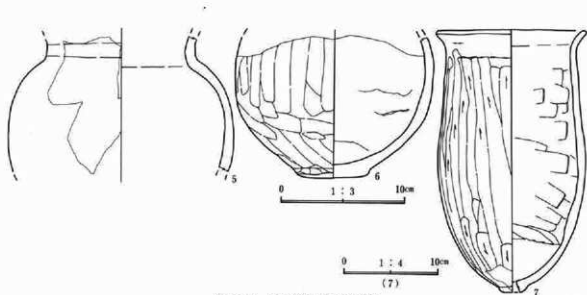
2区西側のK-10グリッドに位置する。台地上は、後世の削平が南東隅のみが検出された。残存壁高は、高い部分で6cmと低い。竈は、東壁南寄りに設置されているが、明瞭な焼土や灰の分布は認められない。

遺物

遺存の悪い住居であったが、他の遺構との重複も少なかったため、床面に密着した状態で遺物が出土している。2・4～7はすべて床面に密着して出土した土師器であり、本住居に伴うと考えられる。3は、攪乱内から出土した土師器甕?であるが、おそらく本住居にともなうであろう。平面確認時に出土した酸化炭焼成の須恵器皿(1)は混入である。



第181図 53号住居実測図・出土遺物(1)



第182図 53号住居出土遺物(2)

2. 墓

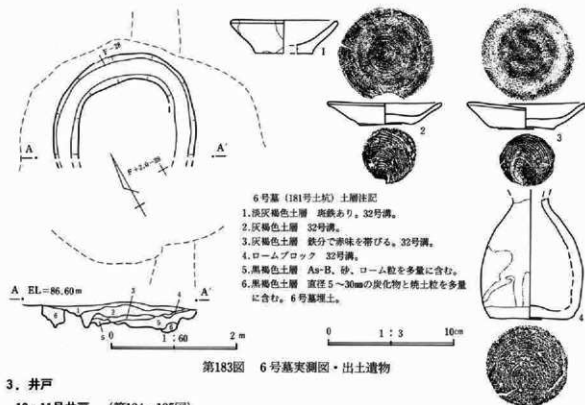
6号墓 (第183図、P L-26、65)

F-27グリッドに位置し、32号溝、12号井戸と重複する。新旧関係は、12号井戸より新しく32号溝より古い。本遺構は、8世紀後半の溜井(12号井戸)埋土上層に構築され、その後32号溝が構築されていた。その最も古い12号井戸は、古代末から中世前半に至っても埋土の陥没があったようで、32号溝も12号井戸部分で平面確認が不可能であった。このため、調査当初は12号井戸がより新しい可能性もあると判断し、半載して確認を行ったところ、埋土上層(1~5層)で陥没した32号溝埋土を検出した。また、この際12号井戸埋土中から酸化炭焼成の須恵器皿(2・3)と灰釉陶器小瓶(4)が正位で出土した(P L-26)。その後、改めて土層断面を詳細に観察したところ、溝状に堆積している6層に炭化物和焼土が多く含まれていることから、ドーナツ状を呈した土坑の存在が確認された。したがって、北側約半分を記録したにとどまった。また、土層断面での確認がやや遅れたこともあって遺物出土状態の平面図を作成できなかった。

遺構の形状は、直径2.3m、幅34~41cmのドーナツ状を呈している。この円形周溝の南側に、須恵器皿と灰釉陶器が置かれていた。溝埋土には、焼土と炭化物が多く含まれているが、周囲は焼土化していない。しかし、これは地山が黒色土であることも関係があるかもしれない。

遺物

遺物は、南側溝内から須恵器皿(2・3)と灰釉陶器小瓶(4)がまとも正位で出土している。灰釉陶器小瓶は、口縁部を打ち欠いているうえ被熱している。しかし、須恵器皿は被熱しておらず、油煙の付着も認められない。調査後、灰釉陶器小瓶内の土を観察したところ、骨片が少量入れられていた。この骨は、後段に述べてあるように、宮崎重雄氏により火を受けた人骨であることが確認された。この種の土坑は、県内では淡川市の有馬遺跡でも確認されており、口縁部を打ち欠き、被熱した須恵器壺内に火を受けた少量の人骨が納められていた。有馬遺跡でも、溝壁に焼土化は認められず、取められた骨の量が少ないなど共通点がある。しかし、まだ類例に乏しいため詳細な性格は不明である。



3. 井戸

10・11号井戸 (第184・185図)

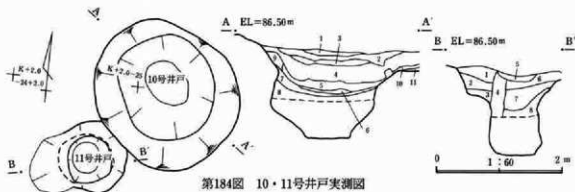
遺構

10号井戸は、2区台地縁辺のK-24グリッドに位置し、11号井戸と重複する。新旧関係は、不詳である。平面形は、長径2.4m、短径2.1mの楕円形を呈し、長軸は等高線に直交する。断面形は、途中に「アグリ」を有するが、浅く開いた「U」字状である。深さは1.7m、調査時の湧水層は底面から20cm、自然水位は40cm、水量は4.0l/minである。構築位置と形状から、溜井と判断される。出土遺物は殆どないが、埋土中にAs-B層が認められ、古代に廃棄されたことが判明した。

11号井戸は、10号井戸と重複し、その新旧関係は不詳である。確認面での平面形状は、直径1.1m程の円形を呈していたが、177号土坑との重複により図面上では不整形となっている。深さは1.4m、調査時の湧水層は底面から10cm、自然水位は18cm、湧水量は2.5l/minであった。10号井戸同様、埋土にAs-B層が堆積しており、さほど隔たりのない時期に廃棄されたと推定される。形状からは溜井と考えにくい。

遺物

10号井戸からは、灰軸陶器壺の底部(1)が出土している。11号井戸からは、遺物の出土はない。



10号井戸土層注記

1. 灰褐色土層 砂含む。
2. 灰褐色土とAs-Bの混土層
3. As-B層
4. 灰褐色土層 焼土と炭化物粒含む。
5. 灰黒褐色粘質土層 ロームブロックと焼土、炭化物粒少量含む。
6. ローム層 2次堆積。
7. 淡灰褐色粘質土層
8. 灰褐色泥土層
9. ロームと4層の混土層

11号井戸土層注記

1. 灰褐色土と灰を含む黒色土の互層 As-B多量を含む。177号土坑。
2. 灰褐色土層 As-B多量を含む。177号土坑。
3. 1層と同様。177号土坑。
4. 1～3層の混土層
5. As-B層
6. 灰褐色土層 焼土と炭化物粒含む。10号井戸4層と同様。
7. 灰褐色土層 ロームブロック多量を含む。
8. 灰褐色土層 粘質でくすんだ色調。



第185図 10号井戸出土遺物

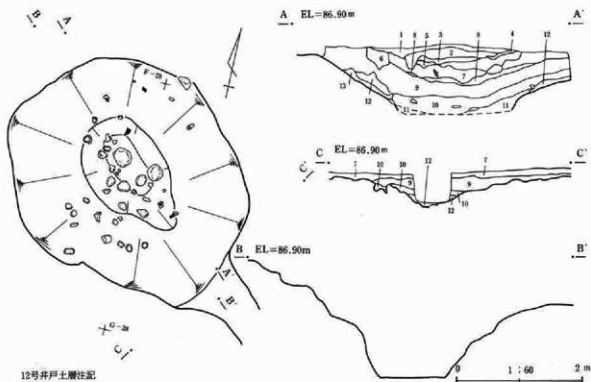
12号井戸 (第186～189図、付図3、P L-26、65・66)

遺構

2区台地縁辺のF-27グリッドに位置し、34号溝、6号墓と重複する。新旧関係は、いずれも本井戸が古い。平面形・規模は、長径4.0m、短径3.5mの楕円形を呈し、本遺跡中最大規模である。深さは、台地側の確認面から1.9mである。底面も確認面同様楕円形を呈し、長軸は等高線とほぼ直交する。井戸の谷地側には、流出部と溝(81号溝)が3区15層下流部に向かって検出された(付図3)。井戸底面と流出部には、小石が敷かれていた(P L-26)。調査時の湧水層は、底面から20～40cmの間で、水位は40cm、水量は2.0l/minであった。本井戸は、8世紀後半にあって3区谷地下流部に存在していたであろう水田に水を供給する重要な溜井であったのであろう。

遺物

遺物の出土量は多く、39点を図示し得た。先の6号墓で述べたように、本井戸は、中世前期にも埋土陥没を起こしているため、出土遺物にはこの時期までのものが含まれている。1～4は、34号溝埋土と思われる砂層出土である。3は、白磁碗の底部破片であり、外面無軸。2は、同安窯系青磁碗体部破片。1は、龍泉窯系青磁碗口縁部破片である。4は、左回転糸切りの土師質土器皿である。5は灰釉陶器皿、6は同碗、34は灰釉陶器短頸壺である。34は、8・54・56号溝、31・37号住居、3区13～15層、10号井戸出土破片が接合もしくは同一個体が出土している。22は、酸化炭焼成須恵器碗で、底部外面と体部内面に「矢」の墨書がある。23は、須恵器碗である。以上は、埋土中位出土である。7～18は須恵器杯。19～21、24・25は須恵器台付杯、26は須恵器盤である。27・28は土師器杯、29・30・33は須恵器壺、31・32は須恵器壺である。36は、両端を欠損した火鑽白であり、2カ所は使用により炭化している。1カ所は未使用で側面の切り込みがある。一端は、中央に穿孔らしき穴が認められ、白をとめるものであった可能性がある。しかし、穴は不明瞭であり欠損時に生じたくぼみであるかもしれない。

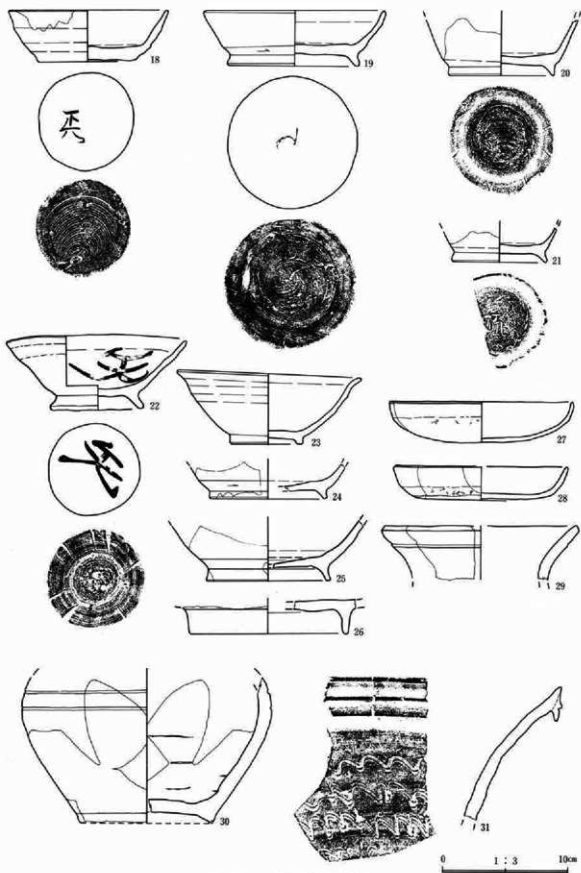


12号井戸土層注記

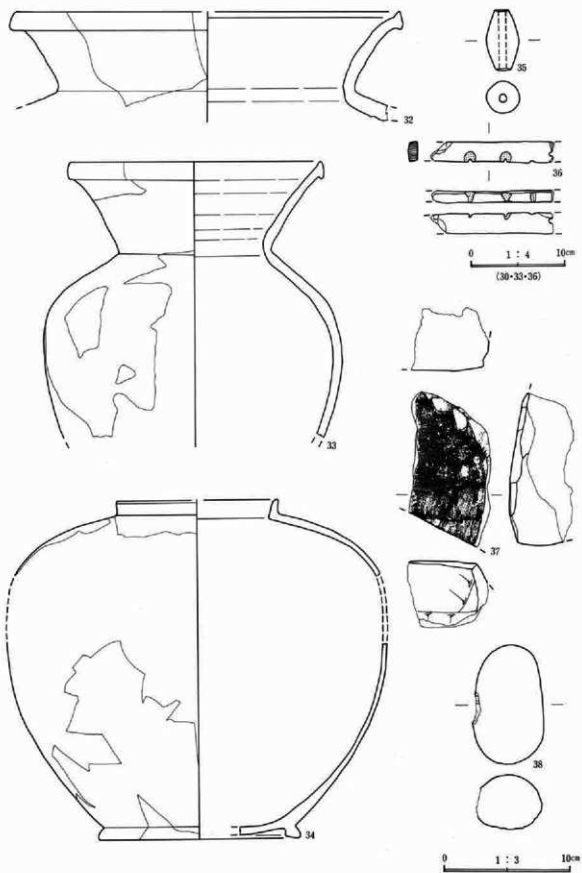
1. 淡灰褐色土層 斑鉄あり。32号溝。
2. 灰褐色土層 32号溝。
3. 灰褐色土層 鉄分で赤味を帯びる。32号溝。
4. ロームブロック 32号溝。
5. 黒褐色土層 Aa-B、砂、ローム粒を多量に含む。
6. 黒褐色土層 直径5~30mmの炭化物と焼土粒を多量に含む。6号基。
7. 黒褐色土層 焼土と炭化物粒、軽石含む。
8. 灰褐色土とロームの混土層
9. 灰褐色土層 炭化物粒、焼土粒含む。
10. 黒褐色粘質土層 焼土、炭化物粒少量含む。
11. 灰色粘質土層
12. 淡灰褐色粘質土層 焼土、炭化物粒少量含む。
13. 12層とロームの混土層



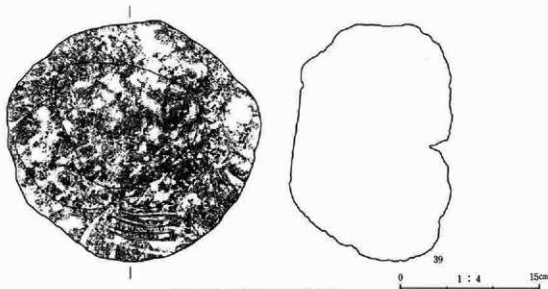
第186図 12号井戸実測図・出土遺物(1)



第187图 12号井戸出土遺物(2)



第188図 12号井戸出土遺物(3)



第189図 12号井戸出土遺物(4)

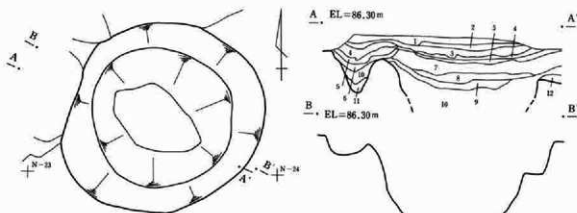
40号井戸 (第190・191図, P.L-26)

遺構

2区台地縁辺のM-23グリッドに位置する。確認面での平面形は、直径約3.2mのほぼ円形を呈する。しかし、底面は、他の溜井同様楕円形である。深さは、1.3mと平面規模の割に浅い。調査時の湧水層は、底面から20~35cmであり、水位は25cmであった。水量は、1.5l/minである。本井戸も、構築された位置や形状から溜井と考えられる。埋土には、3区As-B下水田耕作土と同層位の土が堆積していた。

遺物

1は灰釉陶器皿、2・3は内面に磨きと黒色処理を施した須恵器椀である。4は、古墳時代後期頃と推定される内面に渦巻き状当て具痕を有する須恵器甕体部破片である。5は、灰釉陶器壺頸部破片である。6・7は、羽釜底部と推定される。6は、焼成後に1カ所深く抉られている。

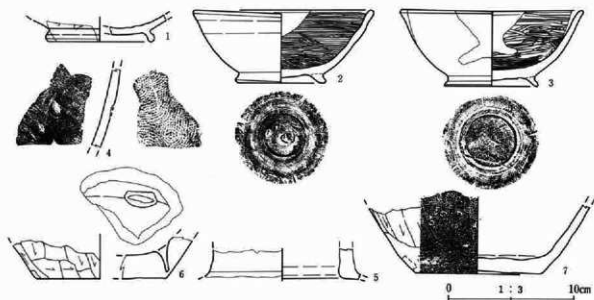


40号井戸土層注記

1. 灰褐色土層 砂含む。
2. 灰褐色土層 1層に比して黒味を帯びる。
3. 灰褐色土層 砂含む。下半にAs-Bブロック含む。
4. 灰黒褐色粘質土層 As-B下水田耕作土。338号土坑。
5. 灰黒褐色粘質土層 ロームブロック含む。338号土坑。
6. 灰黒褐色土層 338号土坑。

7. 灰黒褐色土層 焼土、炭化物多量に含む。
8. 灰黒褐色土層 珪鉄多量に現れる。
9. 灰黒褐色粘質土層 炭化物薄層入る。
10. 灰褐色粘質土層 ロームブロック少量含む。クミナ状堆積砂多量に含む。
11. 10層とロームの凝土層
12. 灰褐色土層

第190図 40号井戸実測図



第191図 40号井戸出土遺物

4. 3区As-B下水田

3区基本土層 (第192図)

3区は2区と4区の台地に挟まれた幅の狭い谷地である。第1節で既述したように、この谷地は中世まで水田として利用されていたが、As-B降下以前の様子を以下に説明しておく。

基本土層10層が降下したAs-B層であり、層厚は中央部で約10cmを測る。As-B層下では水田が確認されている。この水田耕作土下にあたる13層と14層からは平安時代を最新とする遺物が少量出土している。層厚は両者合わせて26cmであるが、調査時には両者をバックホーで除去している。しかし、遺物量は15層に比して非常に少ない。谷地中央部で層厚約30cmを測る15層は、当初バックホーで掘削を開始したが、遺物の出土量と遺物個々の遺存状態が良好なため、途中から本調査に切り替えた。遺物包含層中最も層の厚い16層は、植物質を含む泥炭状の土質であり、土器のみでなく木製品も出土した。13層から16層は途中にテフラ層などの鏡層を挟まなかったため、多少の遺物の混入が認められる。この直下には、中央部で層厚4・5cmのHr-FA(17層)が堆積していた。したがって、谷地縁辺部を除いてこの上下で遺物の混入は基本的に認められない。更にその下にはAs-Cの堆積が認められ、少量ではあるが土器と木製品が出土している。

3区とした谷地は、断面観察の結果、As-C降下から大きく遡らない時代から黒色土の堆積が始まり、As-B降下時まで継続する。As-B降下以降、谷地の堆積土は砂質に大きく変質する。

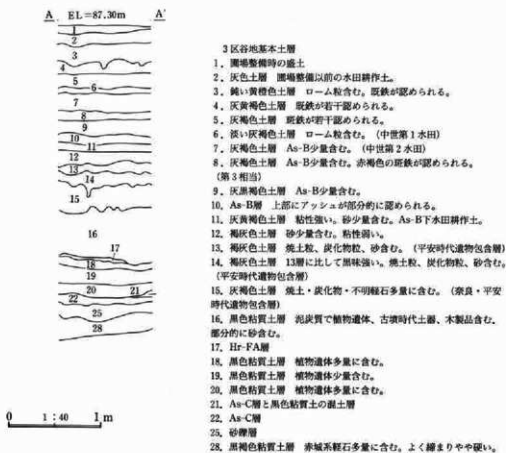
遺構 (第193図)

As-Bは谷地全体を覆っており、その下から水田が確認された。水田が営まれていた谷地は、幅が25mと狭く、谷地縁辺と中央との比高差は70cmと大きい。このため、縁辺部の水田区画は長方形、中央部は方形に近い傾向が認められる。また、各区画は小さく段をなしている。

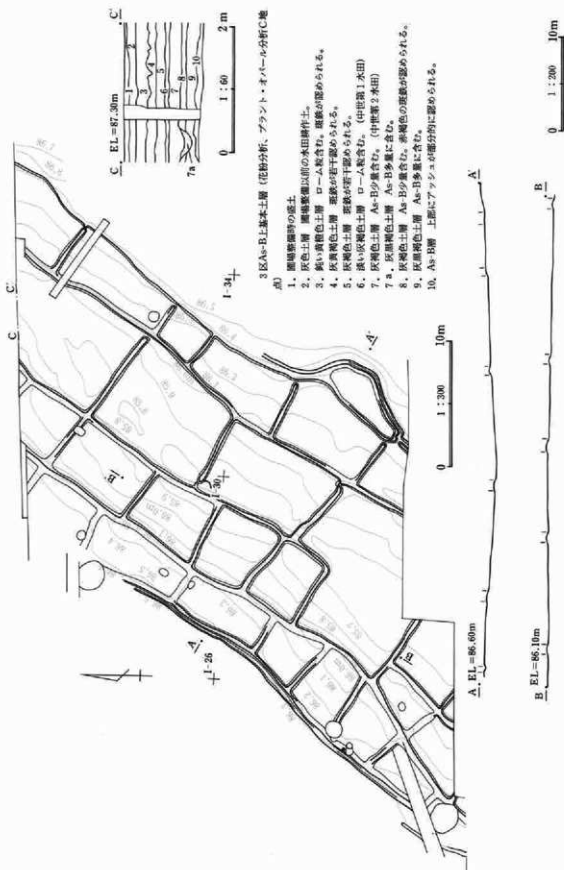
水口は谷地縁辺部東側と中央部の区画に認められるが、西側では確認されなかった。なお、西側谷地縁辺部には、浅い溝が等高線に沿って存在する。

遺物

As-B直下からの出土遺物はない。



第192図 3区谷地基本土層



第193図 3区B下水田

5. 3区平安時代の遺物包含層(13・14層)

遺構

13層はバックホーで除去し、14層上面で遺構の有無を確認したが、遺構は確認できなかった。13層をバックホーで除去中、谷地東側縁辺で緑釉陶器唾壺(3)が出土した。出土後周辺を精査したが、他の遺物や遺構は確認されなかった。14層は遺物の存在に注意を払いながらバックホーで土の除去を行ったが、遺物量が少なく人力による掘削は行わなかった。また、除去後に15層上面で遺構確認を行ったが、遺構は確認されなかった。

遺物

緑釉陶器 (第194図3、第195図47)

緑釉陶器は唾壺(3)と手付瓶(47)が出土している。手付瓶は、14層と2区5号溝出土片が接合している。また、焼成後に被熱しており、部分的に赤く変色している。唾壺は頸部より上位が欠損している。体部外面は丁寧に回転磨削を行い、端部が窪む幅広の高台を貼り付ける。高台内中央には回転糸切り痕が残る。外面はすべて施釉され、底部内面にも薄く釉が付着している。

灰釉陶器 (第194図1、2、11~15、第195図48)

灰釉陶器は1、2、11~15、48の8点を図示した。製作地はすべて東濃地方と考えられる。器種は48が瓶、他は碗、皿である。施釉部分が残るものに刷毛塗りは認められず、すべて浸け掛けである。

須恵器 (第194図4~10、16~31、第195図32~46、49~51、第196図52、53、55)

図示可能な遺物の主体は須恵器であり、最も特徴的な一群として「白色針状鉱物」、「海綿骨針」と呼ばれている物を多量に含む須恵器が存在する。器種としては杯(第194図17、19~24、29)が多く、盤(第195図45)は1点のみである。器形としては底部器壁が薄く、底部と体部の境が外方に広がる特徴を有している。底部外面は23、24が回転磨削り、20、21が中央部に糸切痕を残し、他を回転磨削り調整する。29は右回転糸切無調整後周縁のみ回転磨削りである。

他の須恵器杯も底部については、糸切後に磨削調整を行うものを主体とし、無調整は点のみ(39)である。時期的に新しいのは38、40の酸化炭焼成の碗である。8世紀中頃から後半の前者は、後述する15層に属する遺物であろう。55は酸化炭焼成、高高台の碗である。

壺類も時期的には15層に属する遺物である。50は短頸壺である。49は直線の体部を有し、50は体部下半にやや張り有する。50は灰白色を呈し、灰釉陶器に似た色調であり、外面には自然釉が全面に掛かる。52は外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。

土師器 (第196図54、56)

54は杯の小片であるが、底部外面に墨書が認められる。56も杯であるが、器表は磨滅している。

土製品 (第196図57~59)

3点ともに土師質の鍾である。

石製品 (第196図60、61)

60は石製の紡錘車である。61は分割に似た不明石製品である。上部には丁寧な穿孔を行い、両面は平滑に仕上げ、「里鳳」、「見」と刻書する。周囲にはやや粗い削り痕を残す。

瓦 (第196図62、63)

62は寛で粗く文様を刻んだ軒平瓦である。胎土に細砂を多く含み、焼き締まりはない。還元炭焼成。63も同様な丸瓦であるが、焼成は酸化炭である。時期的には10世紀頃であろう。

6. 3区奈良・平安時代の遺構と遺物（3区15層）

遺構（付図3、第197図）

15層下で確認できた遺構は溝のみである。谷地西側では、12号井戸から谷地中央に向かって下流に延びる溝（81号溝）が確認された。12号井戸の底部と流出部には敷石が認められ、下流部に延びる溝の存在や位置から、下流部に営まれていたであろう水田の灌漑用に構築された井戸であろう。

一方、谷地東側では等高線に沿って掘られた溝群が認められた。断面観察や谷地の堆積状態から、より縁辺に位置する溝が新しいと考えられる。これらの溝内は砂で埋もれており、底部には水流によって生じた小穴が多数認められた。また、谷地堆積土上層に洪水層が認められないことから、洪水によって埋没したのではなく、通水によって埋没していったと考えられる。これらの溝群のうち、57号溝より台地側に位置する溝は、13・14層に伴うものであろう。

遺物

須恵器蓋（第198図1～第199図51）

42、43は葉蓋である。いずれもつまみを欠損するが、特徴である天井部周縁の突帯を有する。他は51まで杯蓋である。ただし、8は瓶、9は7世紀代の杯蓋の可能性があり、19は内面の器壁が剝離しており、つまみの形態も他と異なるがここに含めた。蓋のなかで口縁部に「かえり」を有するものは11から13、18、44である。また、1、12、48は内面が平滑であり、転用碗であろう。

須恵器杯、碗（第199図52～第202図113、第203図115～117、第203図119～第209図237）

52から113、115から117、237は杯、碗である。これら蓋、杯類のうち26、28、65、66、69、70、72、76、78、85、119、133、142、143、213、225の胎土には、「海綿骨針」、「白色針状鉱物」と称される物が多量に含まれており、他県から搬入された製品である。この胎土を有する製品は杯類に限られ、図示した以外にも壺類は1点も認められない。なお、高台を有する杯は1点のみである。杯の底部切り離し技法や調整技法は、以下のとおりである。

寛切り：98、107、141、151、156、171、173、176、178、182、188、203、204。

回転寛削り：60、71、80、82、83、85、87、88、90、100、110、112、119、120、123、124、127、133、134、135、138、142、149、150、152、155、157、160、163、164、165、167、168、172、174、181、183、184、185、189、193、196、199、202、205。

糸切り後周縁寛削り：52、53（手持ち）、73（手持ち）、84、91、93（手持ち）、102、104、113、116、137、139、146、153、170、194、200（手持ち）。以上周縁のみ寛削り。

55、140、143、144、147、158、186、187、191（手持ち）、195、198。以上中央付近まで寛削り。

糸切り無調整：63、79、86、97、121、122、126、128、129、130、131、136、145、161、162、169、177、179、180、190、192、197、201。

体部下端寛削り：108、159、175。

また、図上ではわかりにくい148と154は高台が削がれている。器形以外の特徴では、229の底部中央は焼成後に穿孔され、196と234の口縁部には油煙が付着している。

第212図327、328は酸化炭焼成の須恵器皿であり、底部は右回転糸切り無調整である。326も酸化炭焼成の台付の杯である。3点共に時期的には13層、14層の製品である。

須恵器盤 (第202図114、第203図118、第209図251)

114、118、251の3点は須恵器盤の底部である。114、118の2点には墨書が認められる。

灰釉陶器 (第209図238～249)

238、241は皿、239、240、242、243、245は碗、244、246、247、248は瓶類である。249は器種不詳であるが、胎土がわずかに異なることから須恵器の可能性もある。249以外は東濃諸窯の製品である。

土師器杯 (第200図56、第210図252～第212図325、第212図329、330)

土師器杯は8世紀中頃から後半に一般的な器形、調整を有するものが主体である。図示したうち、276、277、280、284、305は古墳時代の土器である。これらのうち276、305以外は胎土が緻密で夾雑物を含まない。なかでも、280は器表以外が青灰色を呈し、この部分を中心に発泡して厚さが増している。口径もやや小さいが、これも焼成により縮んでいると考えられる。325、329、330は内面に筥磨きを施す。325、329は須恵器的な器形であるが、底部外面は全面手持ち筥削りである。329の胎土は緻密で片岩を含んでいる。

須恵器瓶類ほか (第213図331～第217図378、第217図380、第218図381、383、387)

338の平瓶、339の高瓶、366、376の提瓶は古墳時代の製品である。347も古墳時代の製品であろうか。367も器種不詳であるが、胎土や焼成が16層出土須恵器に近似し、波状文の特徴から古墳時代の可能性が高い。334、335、336は脚付の盤であろう。336の脚部外面にはカキ目状の調整痕が認められる。瓶類のなかで数量的に目立つ製品として長頸瓶(333、337、346、348、350、364、365、370)がある。337は小形である。短頸壺は342、351、344の3点で、前者2点は葉壺形を呈する。須恵器杯に8世紀中頃の製品も多く認められるが、同時期と考えられる瓶類に横瓶(359、374、378)がある。接合率は低いが、復元的に全体形状を知りうる個体は1点(374)である。356の壺は、ほぼ全面にカキ目を施す。壺の口縁部文様は、360が2列の刺突、381が4段の波状文、383が波状文である。

331はコップ形で底部周縁と体部下端は筥削りを行う。332は底部のみで形状不明であるが、底部の内面調整が粗く、小形の瓶類であろう。

灰釉陶器瓶 (第217図379)

外面にたっぷり施釉された長頸瓶である。15層において主体を占める時期の所産でない。

土師器壺壺類ほか (第218図382、384～386、388～第219図394)

382、384、386、390から393は古墳時代の土器である。なかでも386と390は胎土が緻密で夾雑物を含まず、焼成温度が高い一群である。他は「く」の字状口縁の壺である。土師器と須恵器の破片数は数えていないが、土師器の数量は少ない。

三彩陶器 (第219図395)

60号溝出土の小壺底部片である。胎土は白色で焼成は軟質である。外面の釉薬はほとんど剥がれているが一部に褐色が残る。

手捏土器 (第219図396～400)

54溝、55溝、56溝などからの出土であるが、時期は古墳時代後期であり、本来は16層中に入った遺物であろう。

瓦 (第219図413、414)

413は酸化炭焼成の平瓦、414は還元炭焼成の丸瓦である。胎土は両者共に粗く、鉱物粒を多く含み、14層出土の軒平瓦と同様である。やはり時期的には15層で主体を占める8世紀代というより13、14層であろう。

土製品 (第219図415~417)

3点共に土師質の土鍾である。

石製品 (第219図401~412、第219図418~第222図439)

401、402は小形の白玉、404から412は大型の白玉である。401は石が異なるが、他は滑石製である。418、419も滑石であり、418は模造品片で小孔が穿たれている。419には表面の調整が認められず、原石であろうか。403は勾玉片であろう。時期的には次に述べる16層のものである。

420は石製の紡錘車、421、424は砥石である。

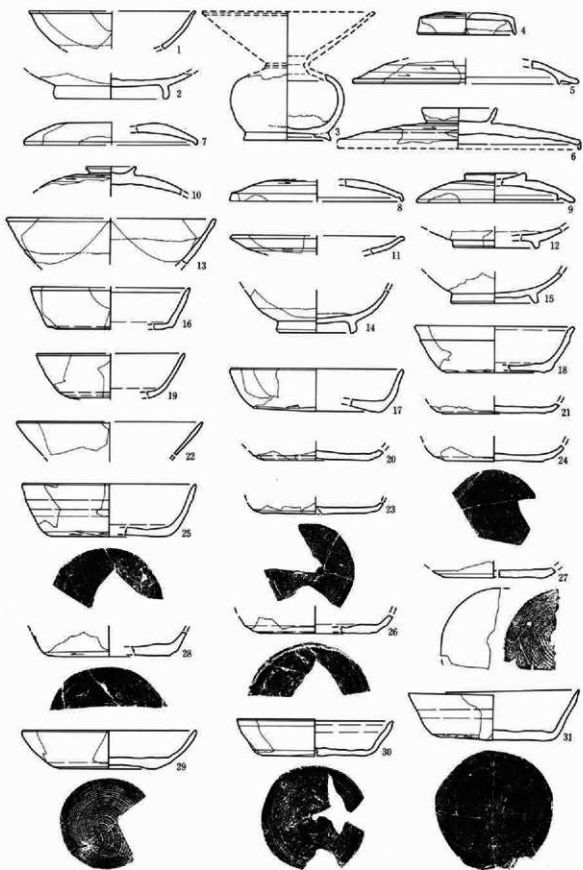
422は河原石の一部を打ち欠いている。425は粗粒安山岩製で一面が砥石状に擦られている。他はすべて榛名軽石製の石製品で、430、431には溝状の擦り痕が認められる。433、437、439の木口面には直角の切り込みがあり、地覆石の可能性もある。他は加工痕を有する榛名軽石である。

金属製品 (第222図440、491)

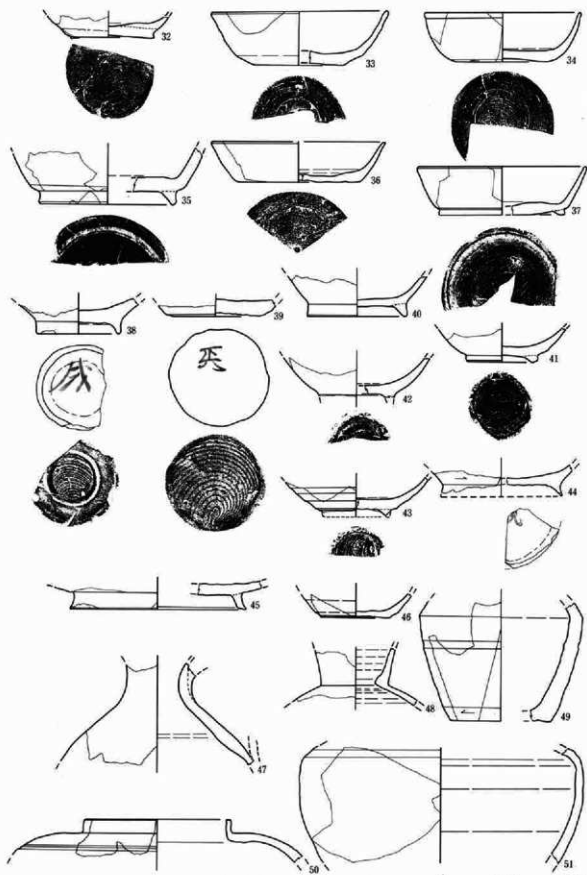
440は銅製の方形薄板で角に小孔を穿っている。巡方の裏金の可能性が高いが、中央部がやや厚く確定できない。441は鍛造の不明鉄製品である。

漆附着土器 (第223図、第224図)

15層中と谷地東側の溝群内から28点の漆附着土器が出土した。中には胎土や色調から同一個体と推測される個体も存在するが、細片のため確証はない。土器種としてはすべて土師器であり、須恵器、灰釉陶器では確認できなかった。また、器種としては杯が多く、小型甕が少量認められ、すべて内面に漆が付着している。これらの中で小型甕(450)の附着痕は注目される。この破片は頸部であるが、内面の漆は口縁部側から流下した状態を示しており、この甕から杯などに漆を注いだことを示している。漆附着土器は、墨書土器とともに本道跡の性格を考える上で重要であり、すべての資料を図示した。なお、詳細については永島正春氏の第5章「漆関係資料について」を参照されたい。

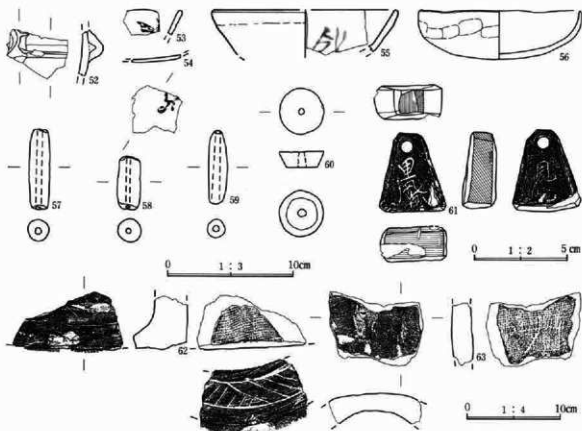


第194图 13・14層出土遺物



第195图 14层出土遗物 (2)

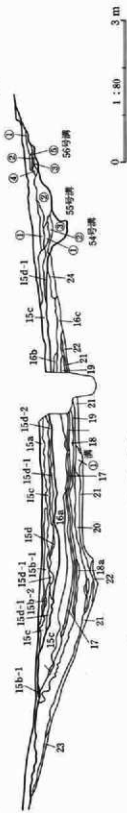
0 1 3 10cm



第196图 14層出土遺物 (3)

A. E.L.=86.50m

B. E.L.=86.50m

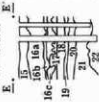


C. E.L.=86.20m

D. E.L.=86.50m



E. E.L.=85.10m



分析E地点

- 15. 灰褐色土層 砂含む、腐土・炭化物多量を含む。(奈良・平安朝代遺物包含層)
- 16a. 黒色粘質土層 泥炭質で、ヨシ類の植物遺体を含む。(古墳時代後期同、木製品含む層)
- 16b. 黒灰白色粗砂層
- 16c. 黒色粘質土層 泥炭質で、ヨシ類の植物遺体を含む。U。
- 17. 黒色粘質土層 ヨシ類の植物遺体を含む。SC系にAr-F/A層 (約2cm) が地積するが、上部に乱風される部分が多い。
- 18. Aa-Cと灰褐色土粘質土の混成層 ヨシ類の植物遺体多量を含む。
- 19. 黒灰色粘質土層 ヨシ類の植物遺体多量を含む。
- 20. 黒灰色粘質土層 ヨシ類の植物遺体多量を含む。
- 21. 灰粘質土層 ヨシ類の植物遺体層位に入る。
- 22. 黄灰色粘土層

※本地点の土層番号は、谷地の土層番号とは異なる。

第197図 3区奈良・平安朝代包含断面図

3区谷地土層

- 15a. 灰褐色土層 腐土・炭化物・不明解石多量によくむ。
- 15b1. 淡灰茶褐色土層 砂含む、腐土・炭化物・不明解石を15a層より多量に含む。
- 15b2. 粗砂層
- 15c. 灰褐色土層 砂含む、腐土・炭化物・砂少量含む。
- 15d1. 粗砂層 灰褐色土少量含む。
- 15d2. 砂層 ラミナ堆積。
- 15e. 灰黒褐色粘質土層 炭化物・砂含む。
- 16a. 黒色粘質土層 泥炭質で植物遺体、古墳時代土器、木製品含む。部分的に砂含む。16b. 黒灰白色粗砂層
- 16c. 黒色粘質土層 Hr-F/A含む。質的には16a層と同じ。
- 17. Aa-F/A層
- 18. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。
- 18a. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。砂少量含む。
- 19. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。砂少量含む。
- 20. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。
- 21. Aa-C層と黒色粘質土の混成層
- 22. Aa-C層
- 23. 黒色粘質土層

54号溝

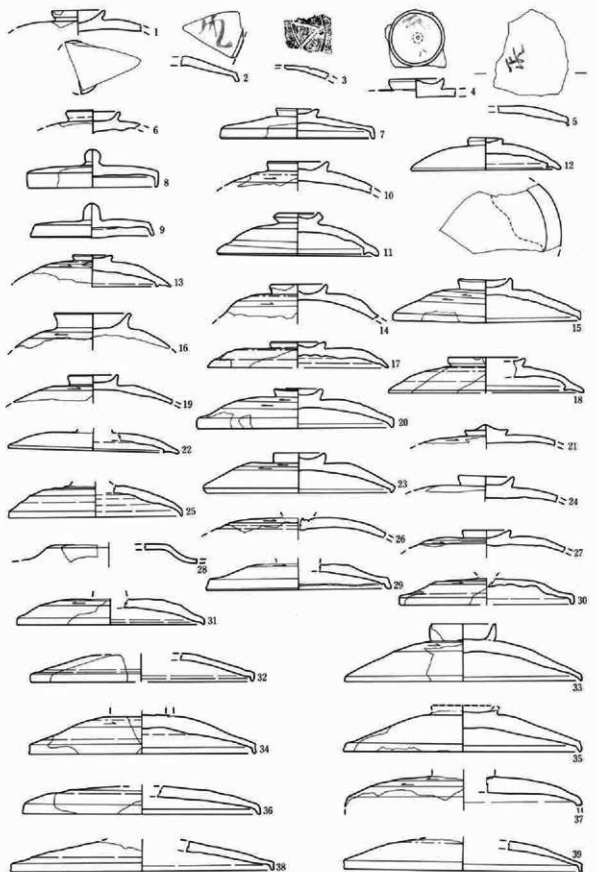
- ①. 砂層 ラミナ堆積。
- ②. 黒灰色粘質シルト層
- ③. 粗砂と黒灰色粘質土の互層

55号溝

- ①. 灰褐色土層 砂アロック状を含む。
- ②. ローム層と砂の混成層

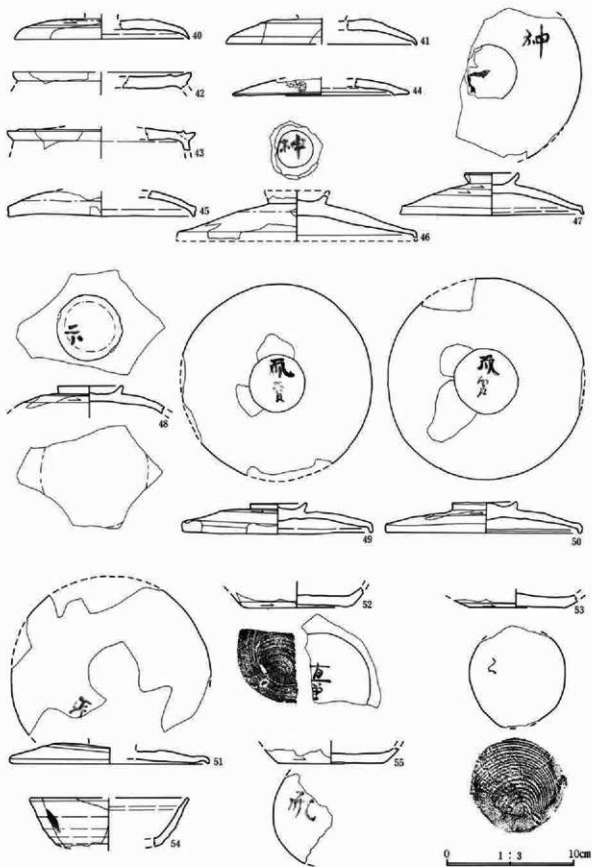
56号溝

- ①. 灰褐色土層
- ②. ロームアロック
- ③. ローム層と砂の混成層
- ④. 黒灰粘質土層
- ⑤. 砂層 ローム層、黒灰粘質土含む。

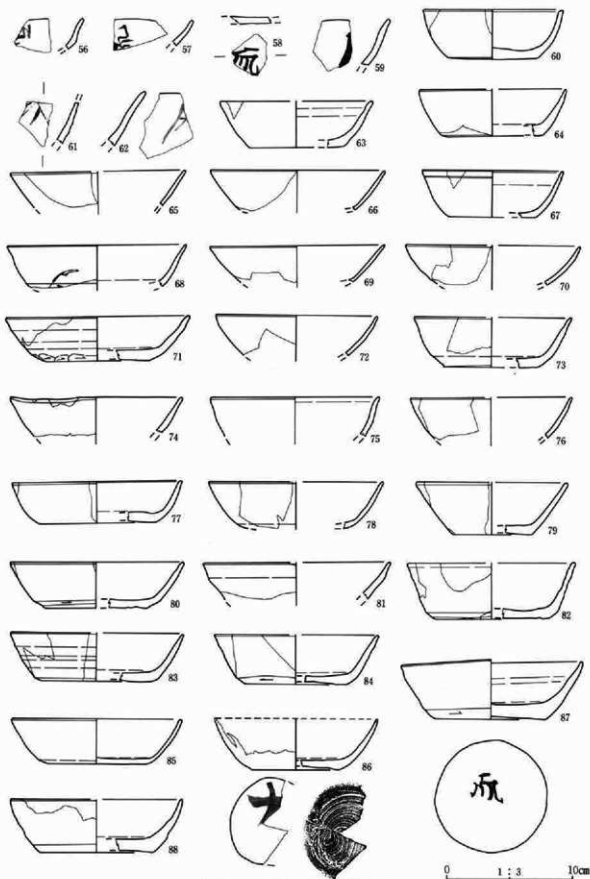


第198圖 3区15層出土遺物(1)

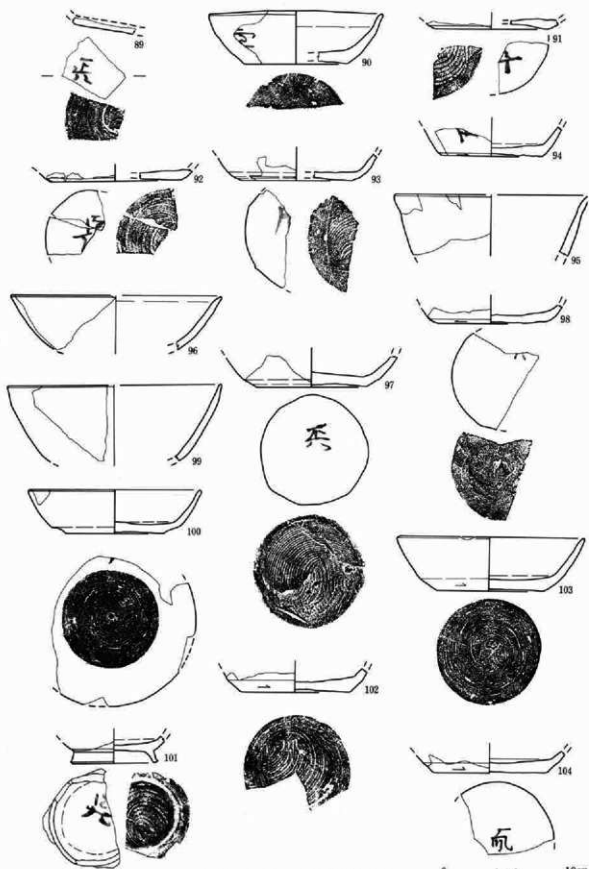
0 1:3 10cm



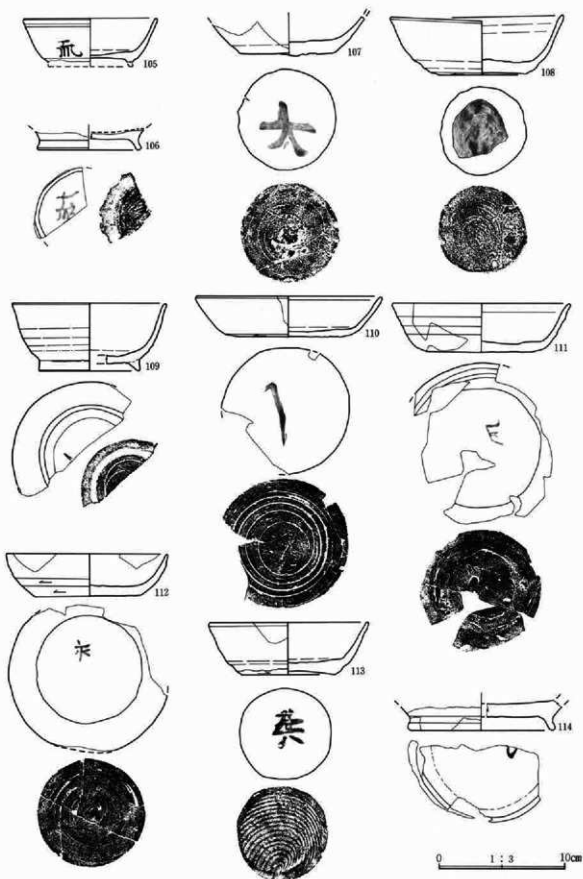
第199图 3区15層出土遺物(2)



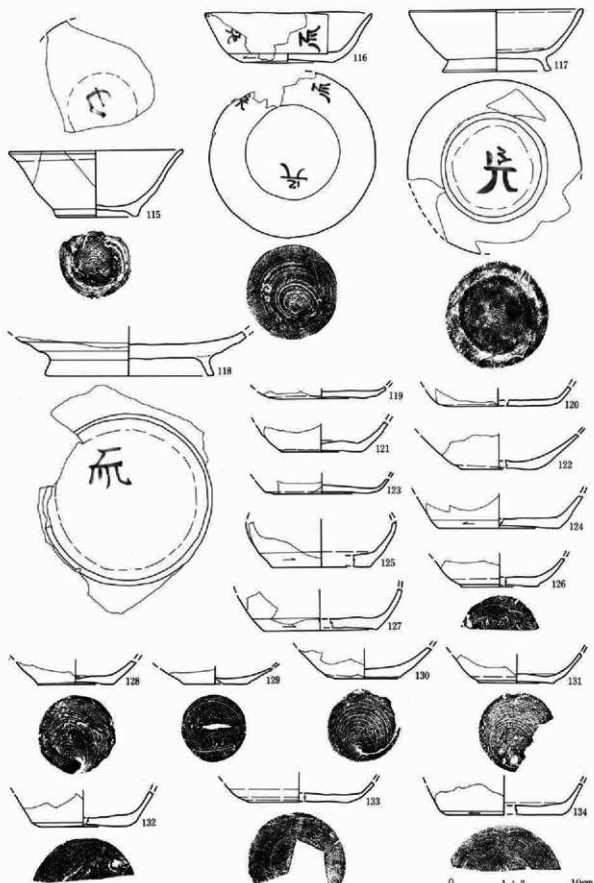
第200图 3区15層出土遺物(3)



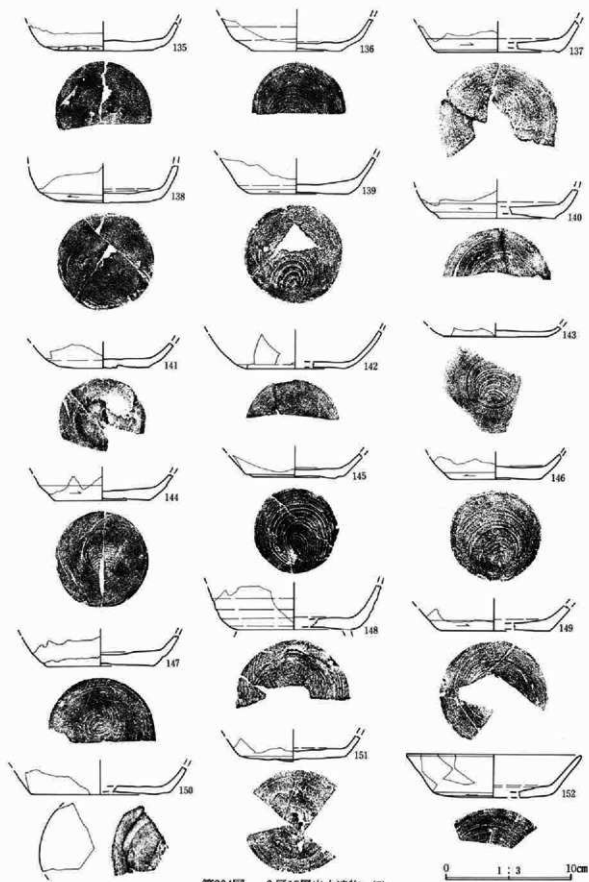
第201图 3区15层出土遗物 (4)



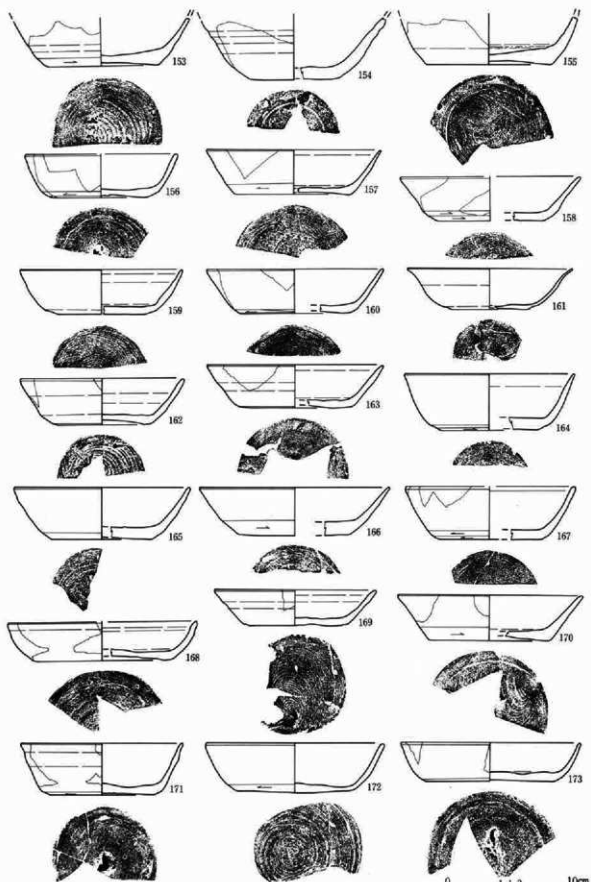
第202图 3区15层出土遺物 (5)



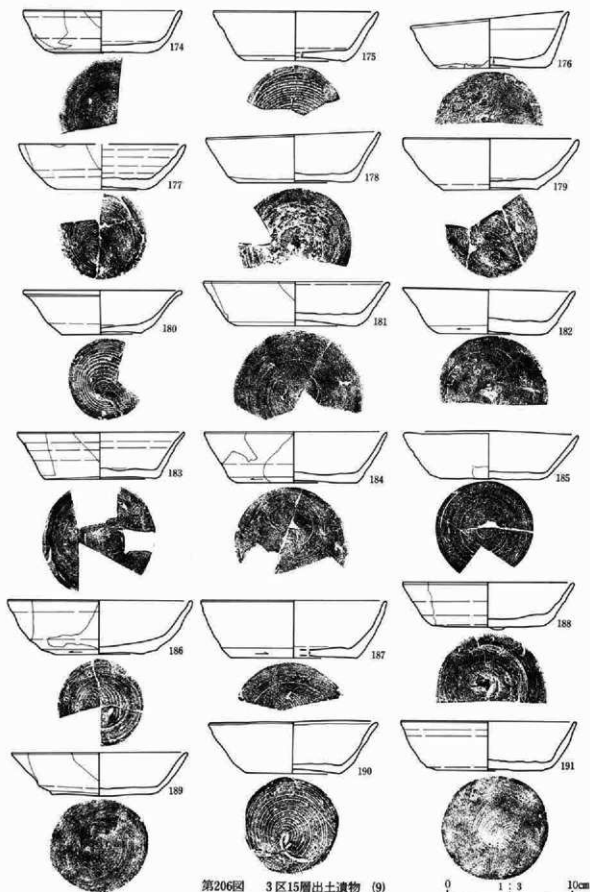
第203图 3区15层出土遗物 (6)

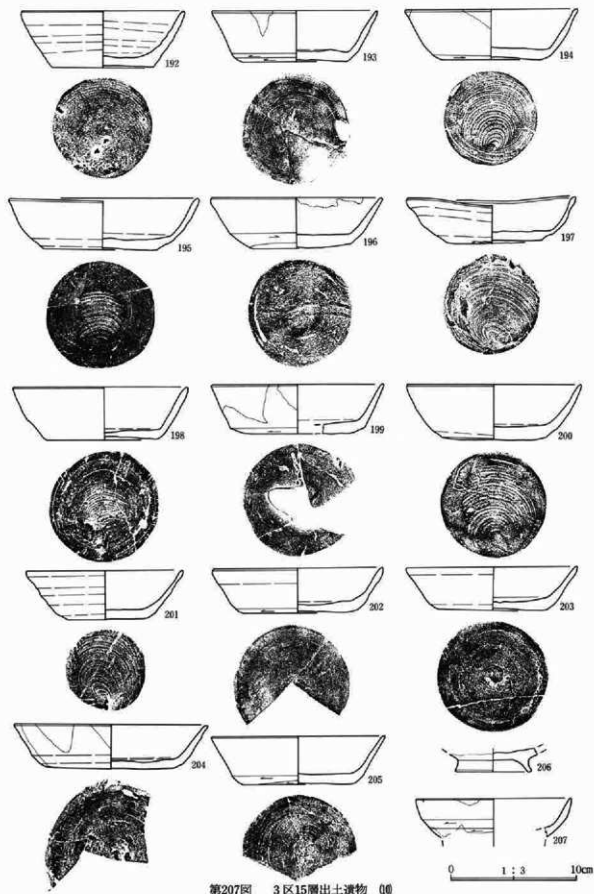


第204图 3区15層出土遺物 (7)

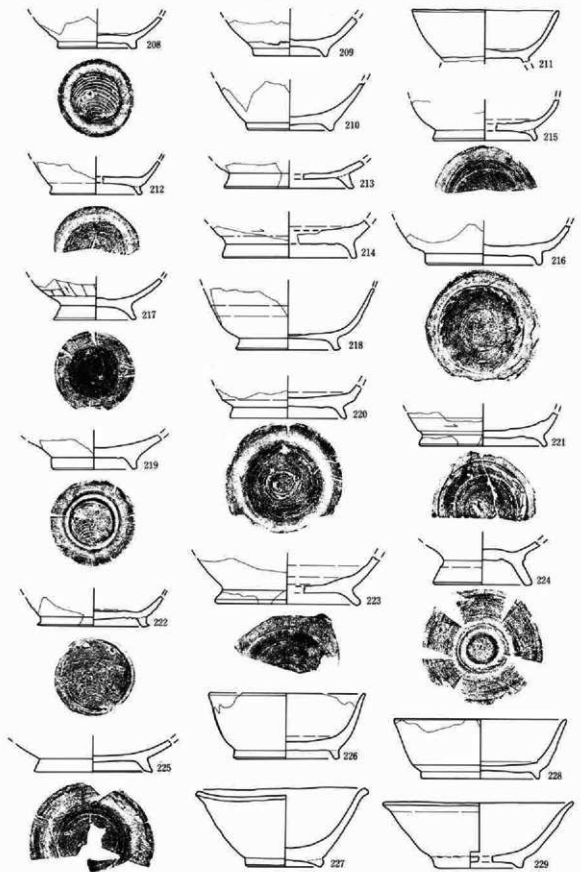


第205图 3区15層出土遺物 (8)



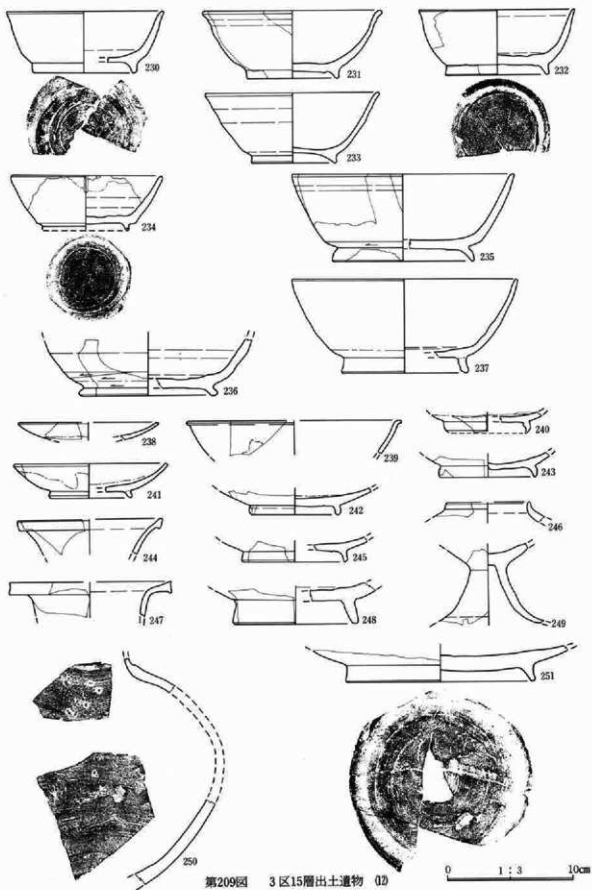


第207图 3区15層出土遺物 00

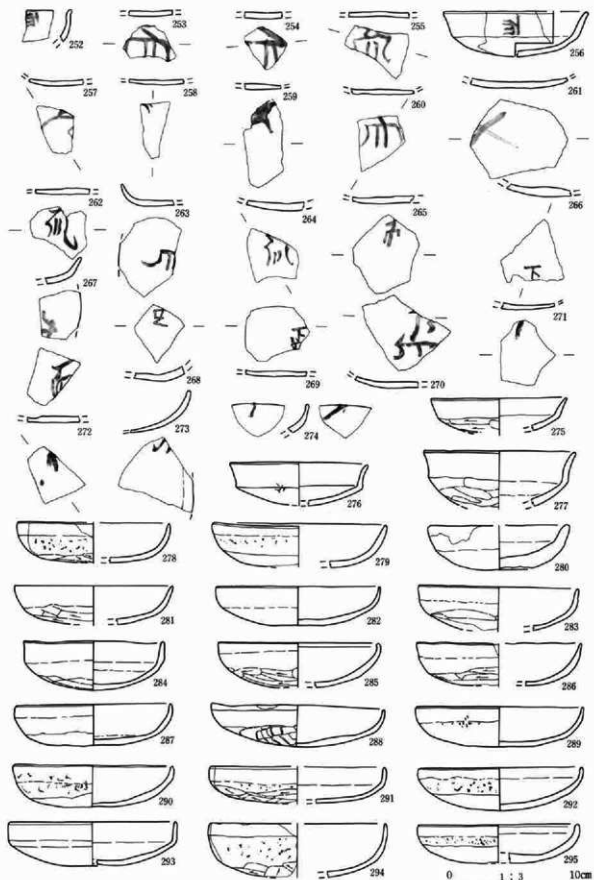


第208图 3区15层出土遗物 01

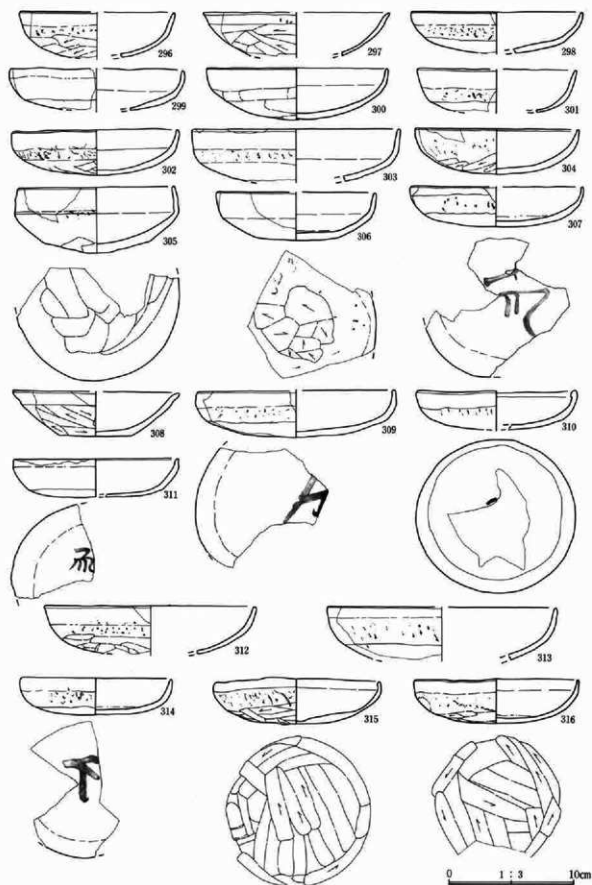
0 1:3 10cm



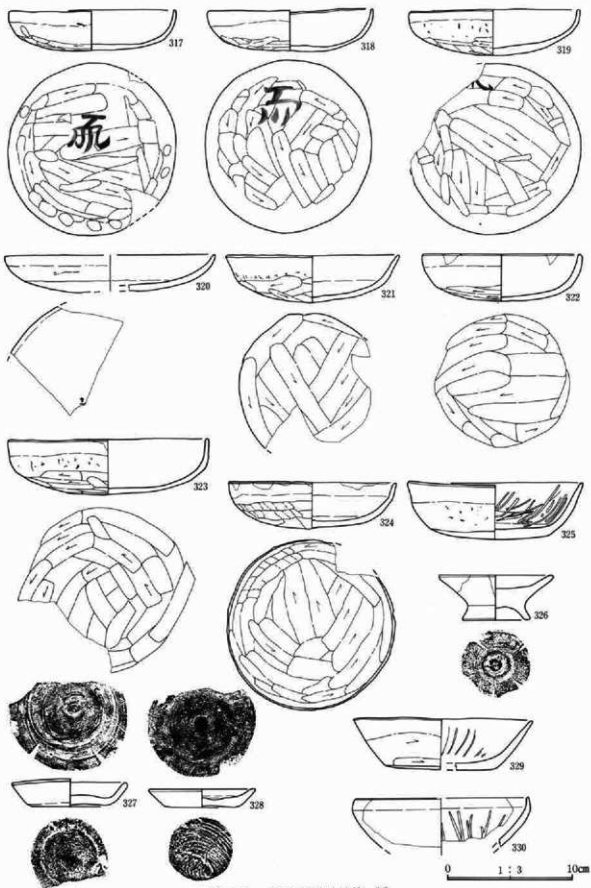
第209回 3区15層出土遺物 02



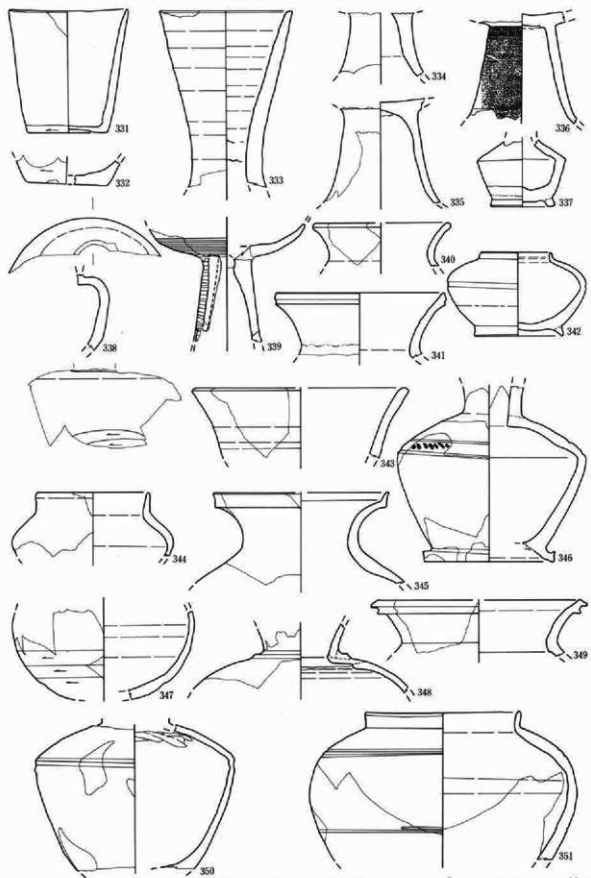
第210图 3区15层出土遗物 (13)



第211图 3区15層出土遺物 00

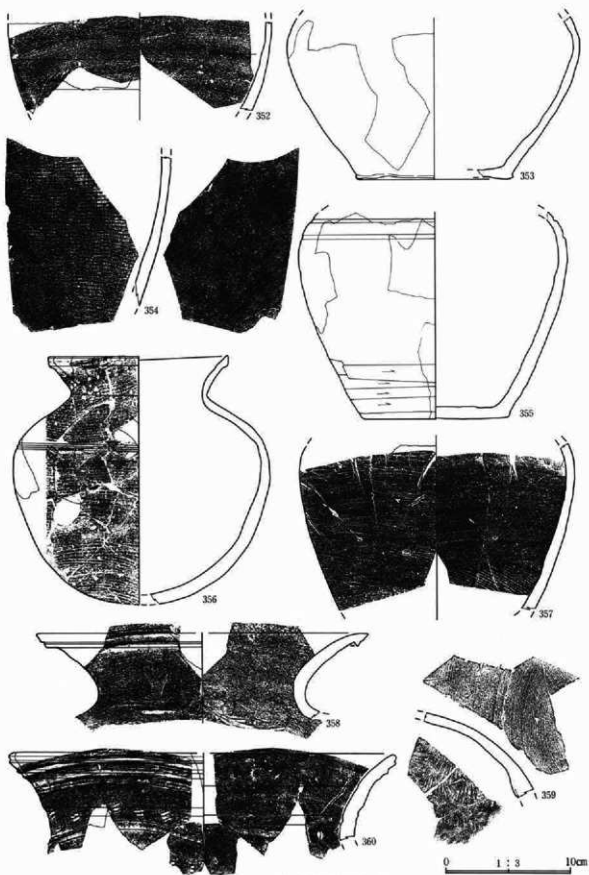


第212图 3区15層出土遺物 (9)

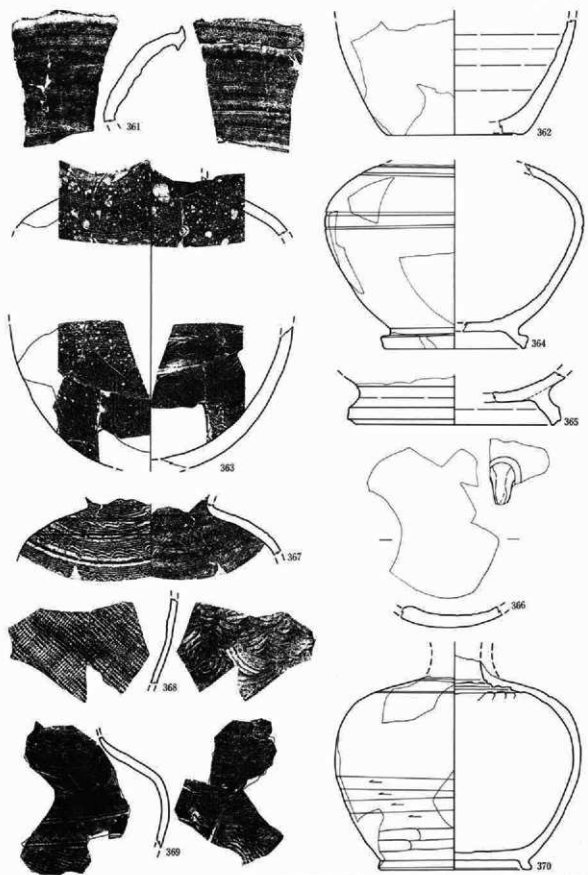


第213图 3区15层出土遗物 06

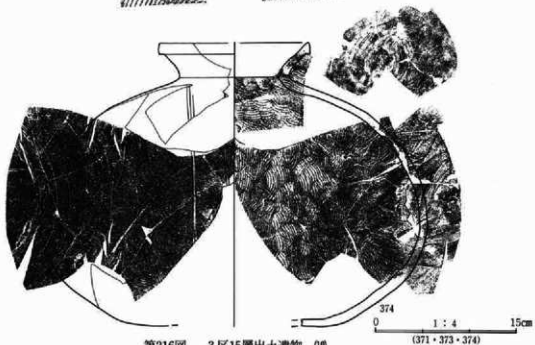
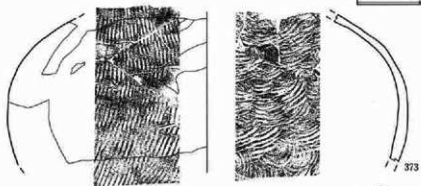
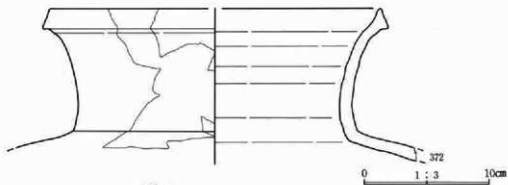
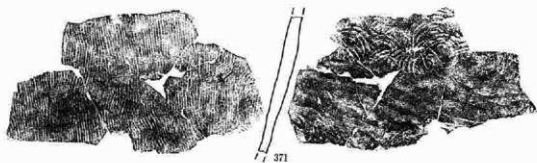
0 1:3 10cm



第214图 3区15層出土遺物 (17)

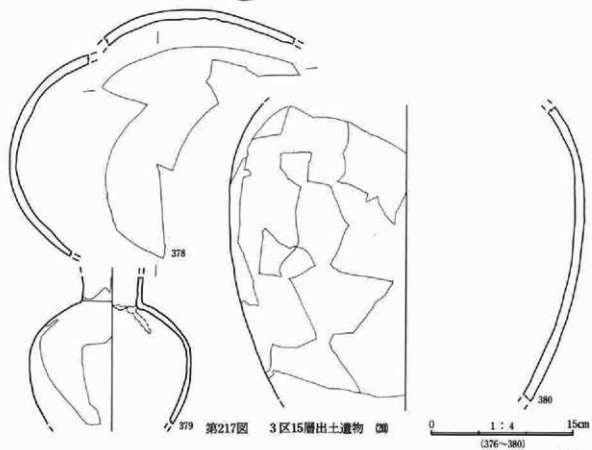
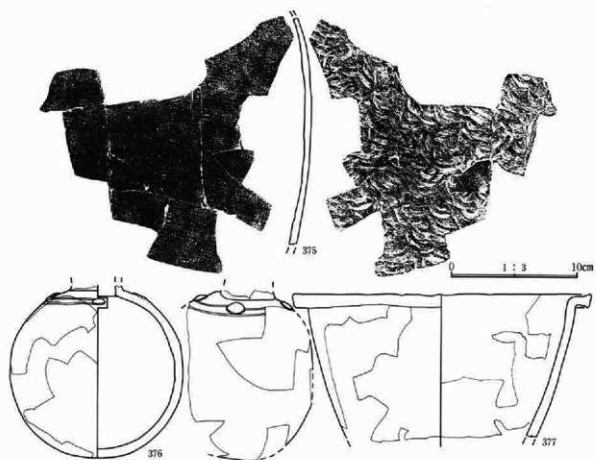


第215图 3区15層出土遺物 (08)

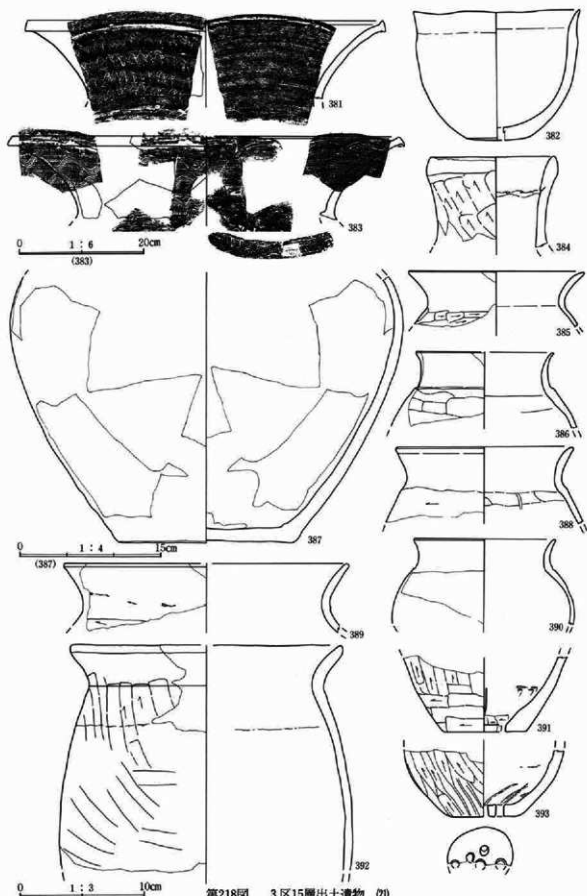


第216图 3区15层出土文物 (9)

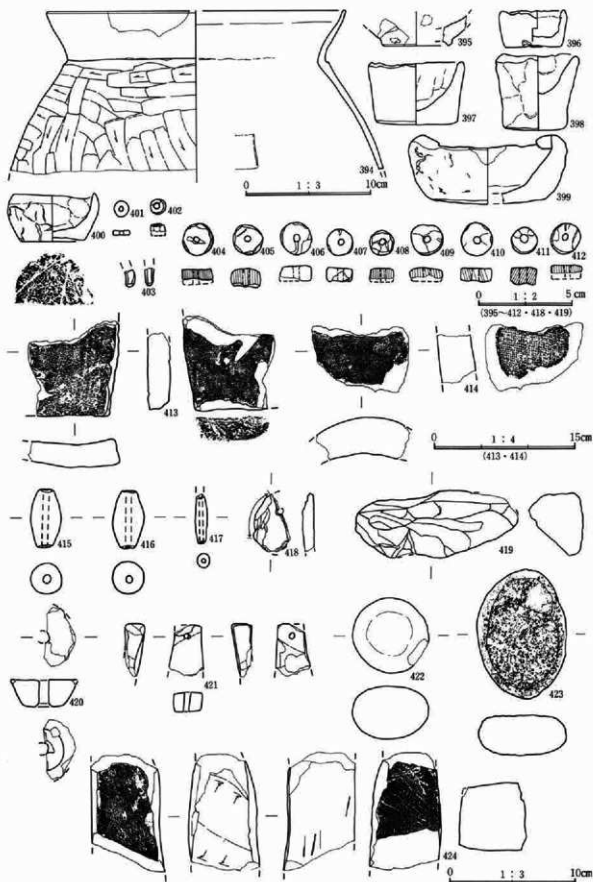
(371·373·374)



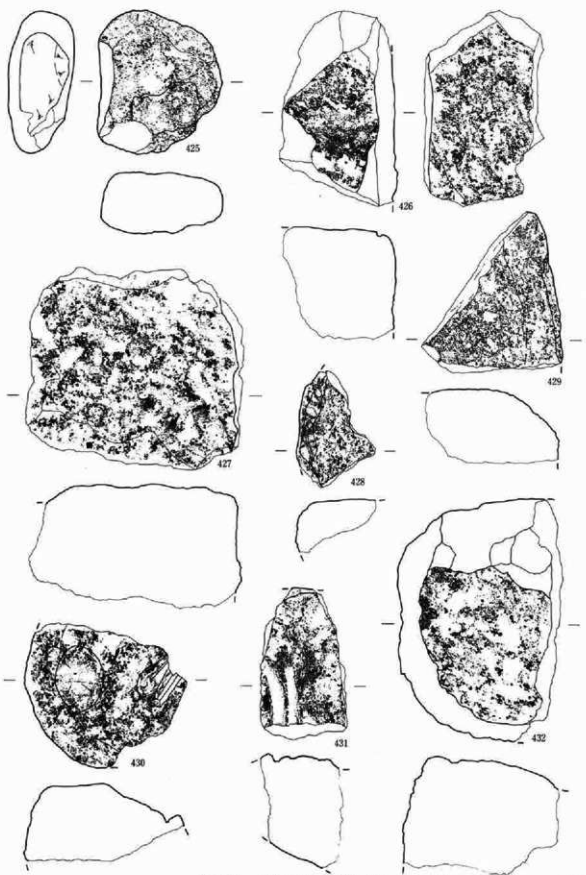
第217图 3区15層出土遺物 (3)



第218図 3区15層出土遺物 (2)

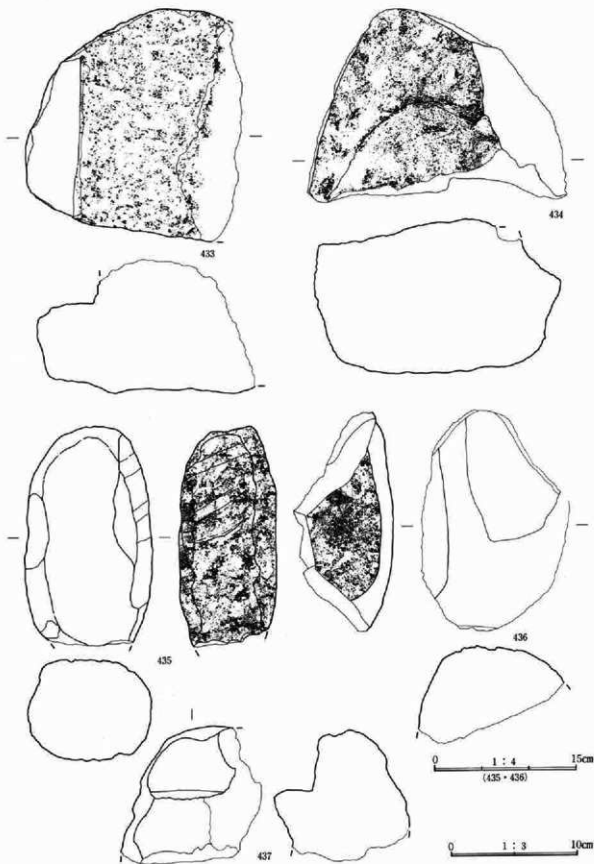


第219图 3区15层出土遗物 (2)

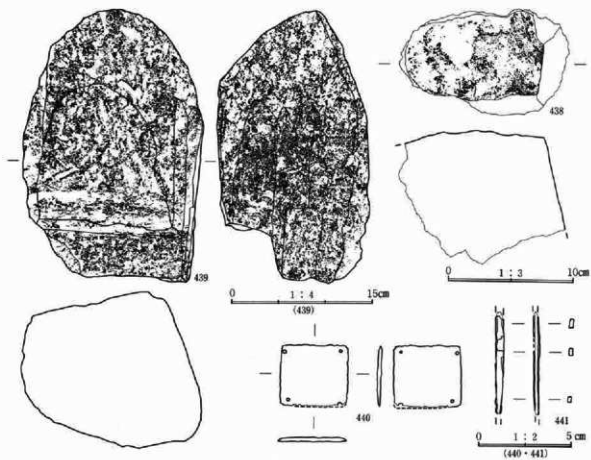


第220图 3区15层出土遗物 ②

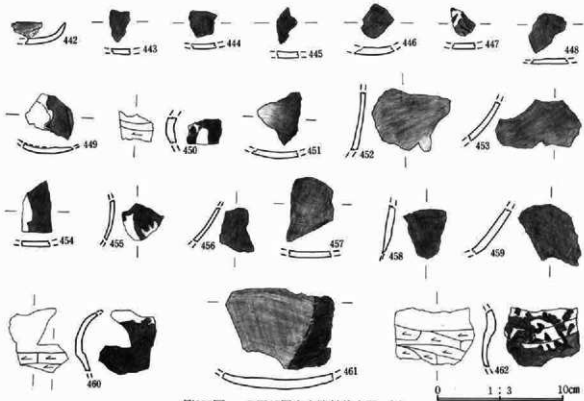
0 1:3 10cm



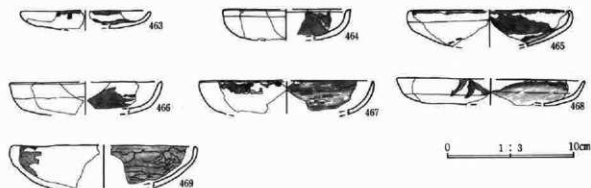
第221图 3区15层出土遗物 04



第222图 3区15層出土遺物 (5)



第223图 3区15層出土土漆附着土器 (1)



第224図 3区15層出土漆附着土器 (2)

7. 3区古墳時代後期の遺構と遺物 (16層)

遺構 (付図4、5)

古墳時代後期を中心とした遺物を包含する16層はHr-FA上に位置し、谷地中央部で厚さ約50cm、平均幅11mにわたって堆積していた。16層中には6世紀中頃から7世紀初め頃の土器とともに二千数百点にのぼる木本遺存体が包含されていた。後者のうち、状態の良い木製品については次項で説明する。16層除去後、すなわちHr-FAを掘り込んで構築された遺構は確認されなかった。しかし、明瞭ではないものの谷地南側中央では、杭状の加工木が並んでいるように見受けられた。

遺物

須恵器杯蓋、杯身 (第226図4～19)

4から8は杯蓋であり、4は径が小さく突帯もやや明瞭である。他の須恵器と胎土がやや異なり、搬入の可能性はある。5、7、8の天井部には焼成前に記号が刻まれている。記号は7が「×」、5、8が「-」である。また、7の天井部内面には青海波の当て具痕が残っている。9から19は杯身で完形品は14のみである。19は破片が小さく、図示したより径は小さいであろう。これらには約半世紀ほどの時期差が認められる。

須恵器高杯 (第226図1～3、第230図104～109、112、113、115～121)

1から3は高杯の蓋である。天井部外面にはカキ目を施し、1、3には低い突帯がある。2はつまみや天井部の形状が異なる。104から107は無蓋高杯だが、106は杯蓋の可能性もある。小片が多く脚部の透かし数は不明であるが、108、109が三方透かし、112が二方か三方透かし、113が不明である。脚端部においても116から121までは透かしの一部が認められる。121は器形がやや異なるように見えるが焼け歪みによるものである。

須恵器器台 (第230図110、111)

110は脚が三方透かしで、この間の杯部に透かしが認められる。111は焼け歪みの著しい大型器台である。外面の口縁部下に2条、更にその下に1条、この間に波状文を巡らしている。脚部は四方透かしである。

罎 (第231図140～150)

144から149は体部で、145と146は沈線間に櫛状工具による刺突を施し、頸部には波状文を巡らす。他は無文で144、149は肩部に稜をなす。145の底部には焼成前に「U」字状の記号が刻まれている。149には穿孔部がなく小壺の可能性もある。口縁部の中で143は無文、140はカキ目、141、142は口縁部下位に、150は口縁部に波状文を巡らす。142は胎土が緻密で焼き締まっており、搬入品であろう。また、突帯も明瞭なうえ口縁端部も非常にシャープであり、他の須恵器より古いと考えられる。

須惠器瓶類、甕 (第231図151、152、第232図153~160、第236図199)

151は小型壺の口縁部。152、153は胎土や焼成から同一個体の可能性がある。154は短頸壺と考えられるが、口縁部を欠損する。肩部にはカキ目を巡らす。155は甕の体部小片であるが、内面に螺旋状の当て具痕が明瞭に認められる。156は壺の口縁部で、内面に意図的か否かは判然としないが竪による直線が刻まれている。158、159は提瓶の体部片と推定され、158には同心円状のカキ目を施す。157、160、199は大甕である。

土師器杯 (第226図20、第227図21~第228図76、第229図78~94、第229図96、100)

須惠器同様かなり時期差が認められ、70、73の内斜口縁は古い部類である。新しい時期の杯としては、胎土が緻密で比較的高温で焼成される26、27、40、63、66、67、69などがあげられる。また、58、68、75、76は「漆仕上げ」と考えられ、82の内面には赤色塗彩が施される。なお、71、80、81、85、86、90、92はHr-FA下出土である。96は15層からの混入である。

土師器埴 (第229図93、95、97~99、第230図101~103)

深い碗状を呈し、口縁部のみ小さく外反する。これらの中で97、101は緻密な胎土を有し、高温焼成される一群である。

土師器壺 (第232図161~163、第233図164~170、172、173、178、第234図180~191、第235図192、193、)

162、163、172は体部、底部ともに丸みを有する小形壺である。162、172は緻密な胎土を有し高温焼成される一群である。180はかすかに2重口縁の形状をとどめている。183、186、187、188は口縁部中位に沈線や低い突帯を有する。

161、164は古い土器の混入である。

土師器鉢、櫃 (第233図174、176、179、第236図200、204~206)

174、176、179は鉢であり、174は杯を深くし、平底にした形状である。200、204から206は櫃で、206の底部は欠損している。

土師器甕 (第233図171、175、177、第235図194~197)

194から196は長頸甕、他は丸みを帯びた甕である。

土製品 (第236図201、202、203、第237図230、233、246~248)

202は表面に被熱痕が認められないが甕の支脚であろう。203は「漆仕上げ」と思われる土師器杯底部を円盤状に整形したものである。230、233は土製の丸玉で表面には化粧土を塗り、ガラス玉風に仕上げている。201は脚状の上部に円形の穴があり、上面のみ色調が異なっている。用途不明。

手捏土器 (第236図207~第237図228)

207から221は小形で鉢状を呈するものとコップ状を呈するものの2者がある。222から228は大形品である。

ガラス玉 (第237図229)

ガラス小玉が1点出土している。

石製品 (第237図231、232、234~245、249~252、第238図253~第240図264)

232、234は白玉、231、235から237は滑石製の白玉である。238から245も滑石製である。238から241は模造品の未製品であろう。249は紡錘車、250、253は溝状の使用痕が認められる砥石である。同様の使用痕は粗粒安山岩製の256にも認められる。252、254、255は用途不明のくぼみ石、257から261、264は加工痕を有する標名砥石である。262の表面は比較的平坦に加工され、一部に溝状の使用痕が残る。251は敲き石、263は台石である。

8. 3区Hr-FA下の遺構と遺物

遺構 (付図6)

標記はHr-FA下としているが、遺物が出土したのは直下ではなく18層から20層(第225図)中のものを指している。堆積土は16層同様植物遺体を含む黒色土であり、木本遺存体も包含していた。15層、16層に比して遺物量は少ない。As-Cを含む堆積土を掘り込んだ遺構は認められないが、中央部は流路状にくぼんでいる。

遺物

土師器杯 (第241図1~10)

1はいわゆる模倣杯。2から8は口縁部が内湾する丸底タイプである。4と6は内面に荒磨きを施す。9は口縁部下にゆるい稜をなして立ち上がったのち外反する。10は内面に比較的密な荒磨きを施した内斜口縁の杯である。

土師器高坏 (第241図12、13)

12は脚部上位片である。13は脚の径が大きく、口縁部は内斜する。口縁端部は上位に引き上げている。

土師器壺 (第241図11、14、18、第242図23、24)

11、14は丸底壺である。18は口縁部を折り返すが、無文のうえ胎土も粗い。23、24は大型の壺であり、23の口縁部外面には沈線を巡らし、直下は突帯状に小さく突出する。

土師器甔 (第241図16、第242図22、第243図33)

33はほぼ完形の大型品で、16は鉢形の小型品であろう。22は口縁部形状から甔の可能性はある。

手握土器 (第242図31)

コップ状を呈した完形品である。

土師器甕 (第241図15、17、19、20、第242図21、25~30、第243図32)

15、17は小型甕、他は長胴気味の甕である。

9. 3区As-C下の遺構と遺物

遺構 (付図7)

谷地中央部で幅約6m、更に最深度で幅約1.5mにわたり、浅く溝状にくぼむ。しかし、等高線に表れているように、深さや形状から人為的とは考えられない。

遺物

土器は出土せず、木本性植物遺存体が少量認められた。これらの中には明らかに加工されたものが認められ、図示したものは木製品の項で記述した。

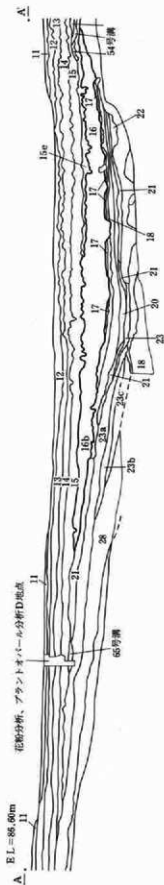
10. 3区As-C下砂層下の遺構と遺物

遺構 (付図8)

As-C下同様、谷地最深度に浅い溝状のくぼみが確認されたが、深さや形状から人為的とは判断できない。

遺物

土器は出土せず、木本性植物遺存体が少量認められた。しかし、これらの中に加工痕を有するものは認められなかった。



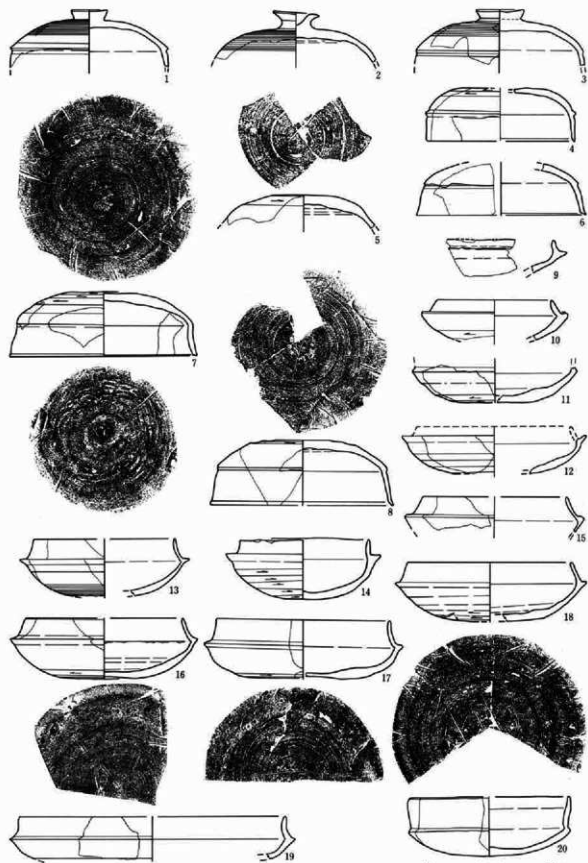
3区古墳土層 (花船分析、プラント・オパール分析D地点)

11. 灰黄褐色土層 粘性強い、砂少量含む。As-B下水田耕作土。
 12. 褐色土層 砂少量含む。粘性弱い。
 13. 褐色土層 燧石粒、炭化物粒、砂含む。(平安朝代遺物も含む)
 14. 褐色土層 13層に比して黒味強い。燧石粒、炭化物粒、砂含む。(平安朝代遺物も含む)
 15. 灰褐色土層 燧石・炭化物・不明鉱石多量を含む。
 15e. 灰黄褐色粘質土層 炭化物・砂含む。
 16. 黒色粘質土層 肥土質で植物遺体、古墳時代土器、木製品含む。部分的に砂含む。

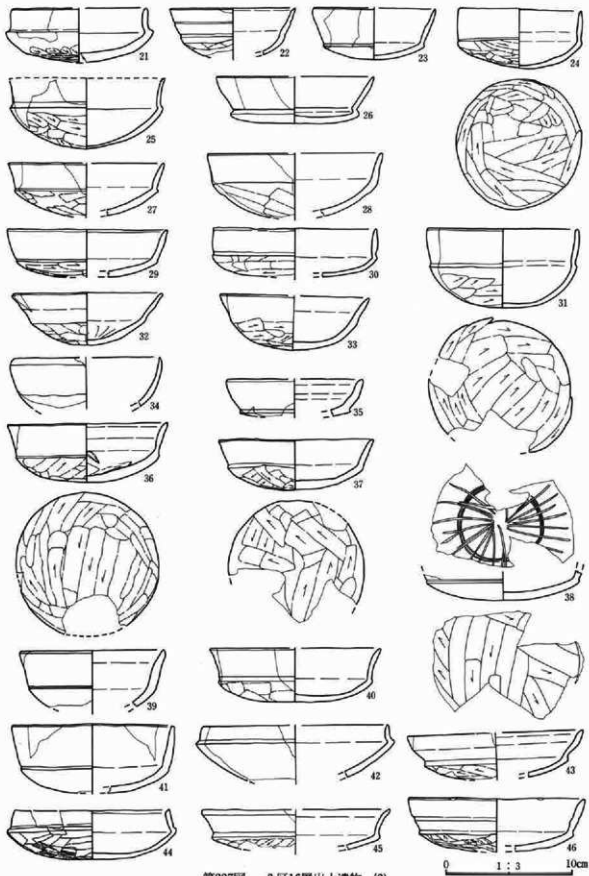
17. Ht-FA層

18. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。
 19. 黒色粘質土層 植物遺体少量含む。
 20. 黒色粘質土層 植物遺体多量を含む。
 21. As-C層と黒色粘質土の混土層
 22. As-C層
 23a. 黒色粘質土層 植物遺体含む。
 23b. 黒色粘質土層
 23c. 黒色粘質土層 赤褐色鉱石含む。
 25. 砂層
 26. 黒褐色粘質土層 赤褐色鉱石多量を含む。よく腐り中や硬い。

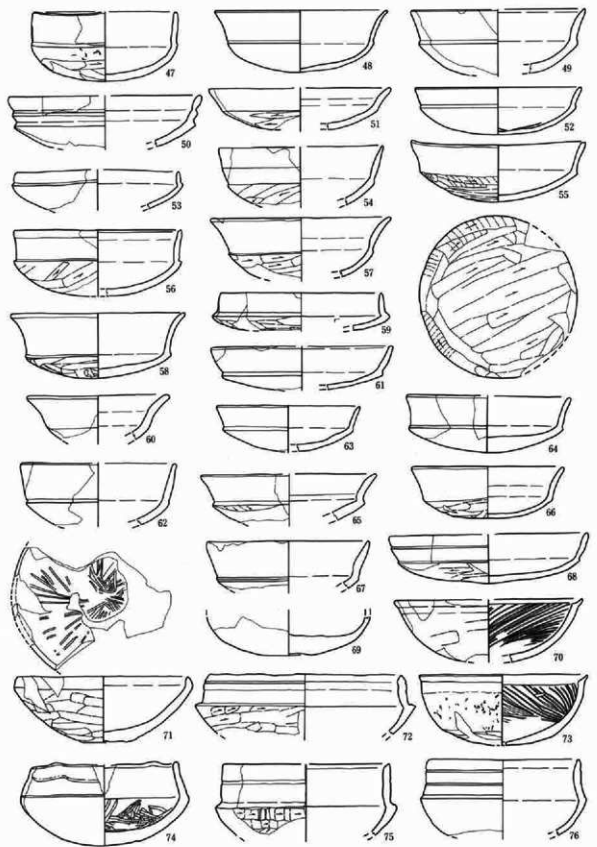
第225図 3区古墳時代包合層 (16層) セクショーン



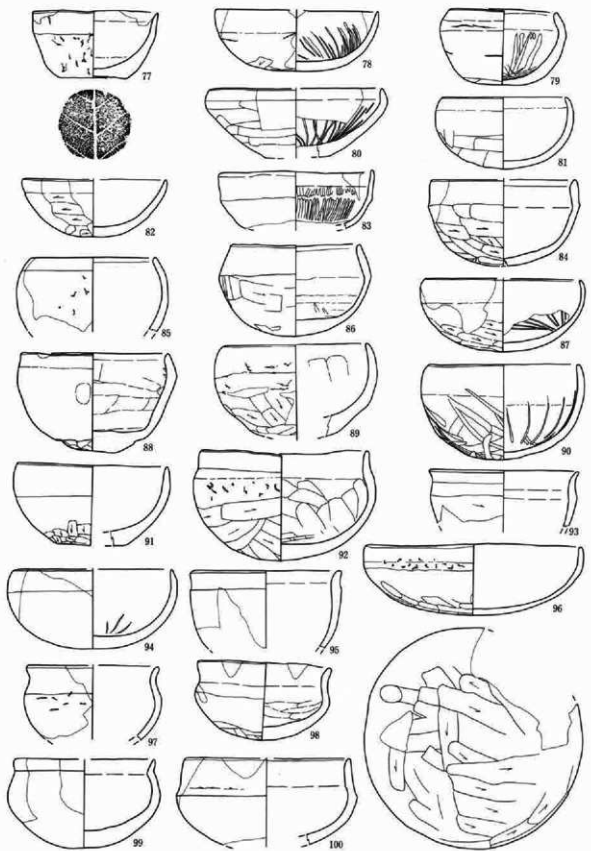
第226图 3区16层出土遗物 (1)



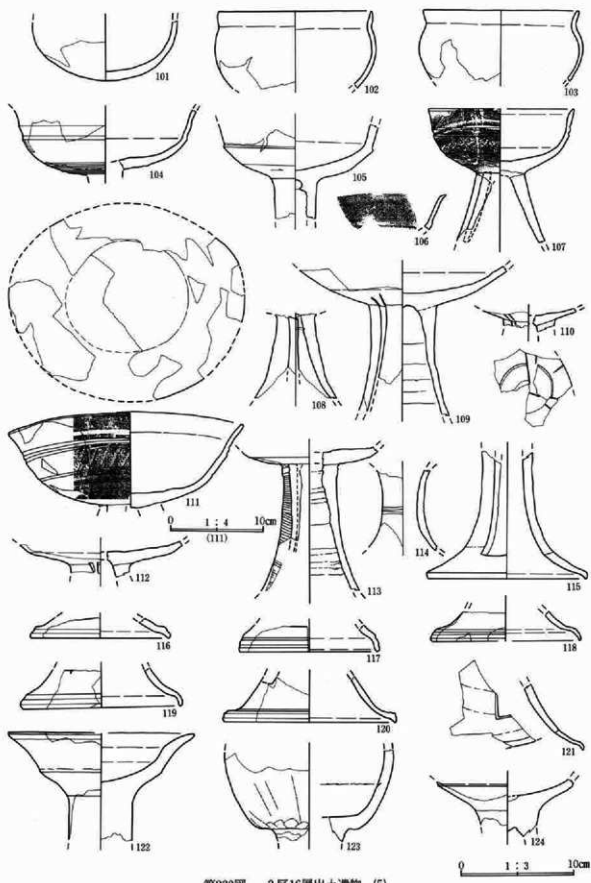
第227图 3区16层出土遗物(2)



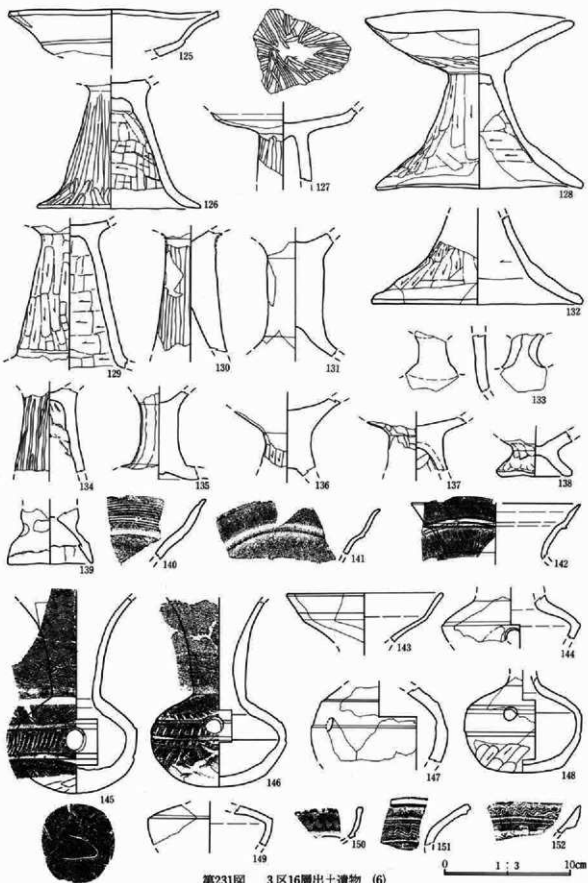
第228图 3区16层出土遗物(3)



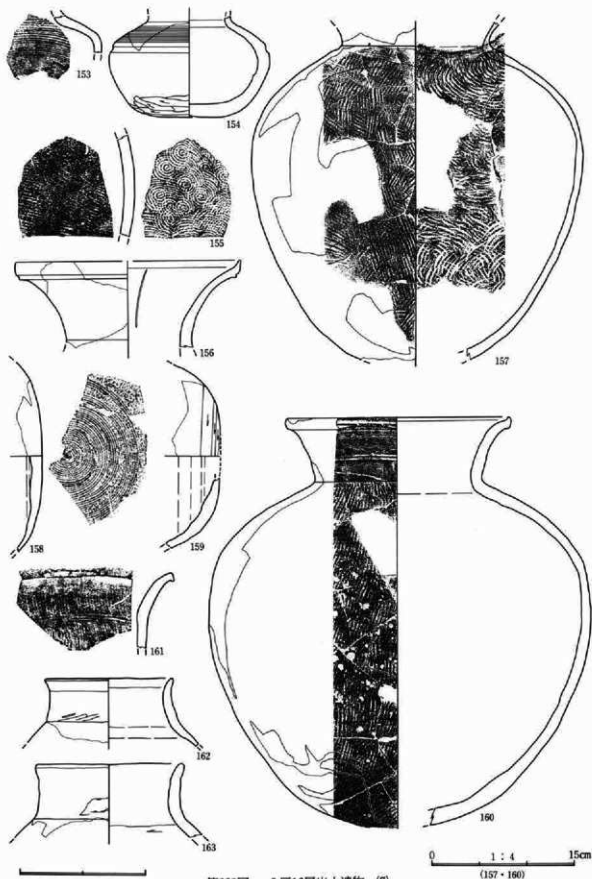
第229图 3区16层出土遗物 (4)



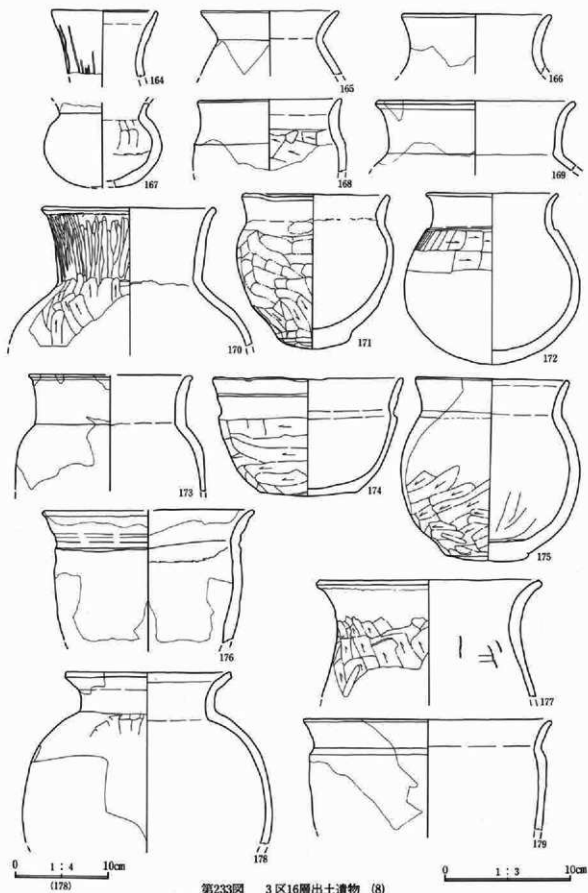
第230图 3区16层出土遗物(5)



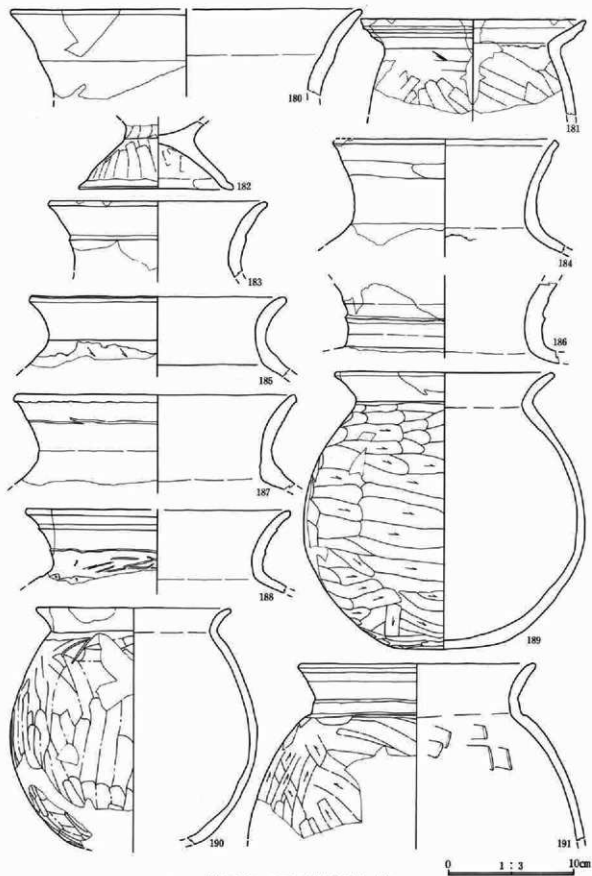
第231图 3区16层出土遗物(6)



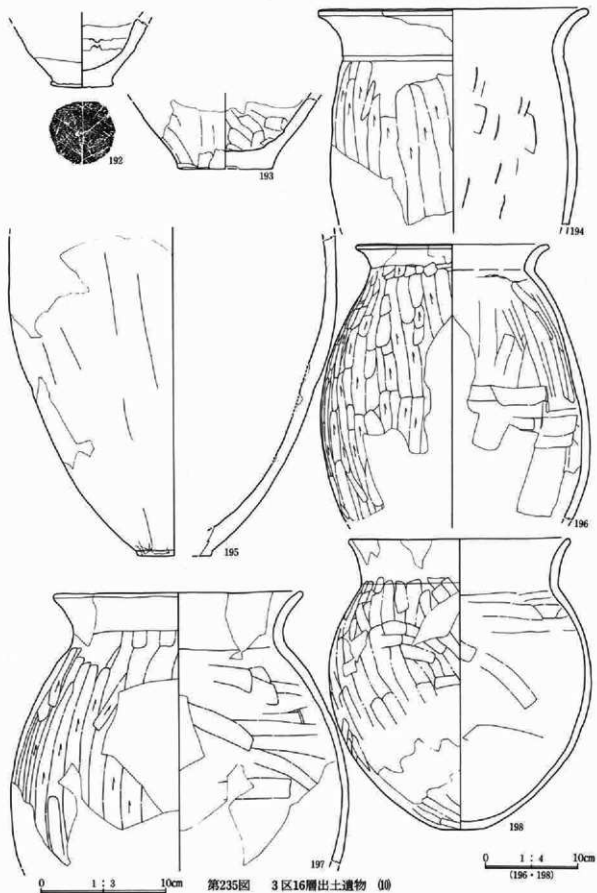
第232图 3区16層出土遺物 (7)



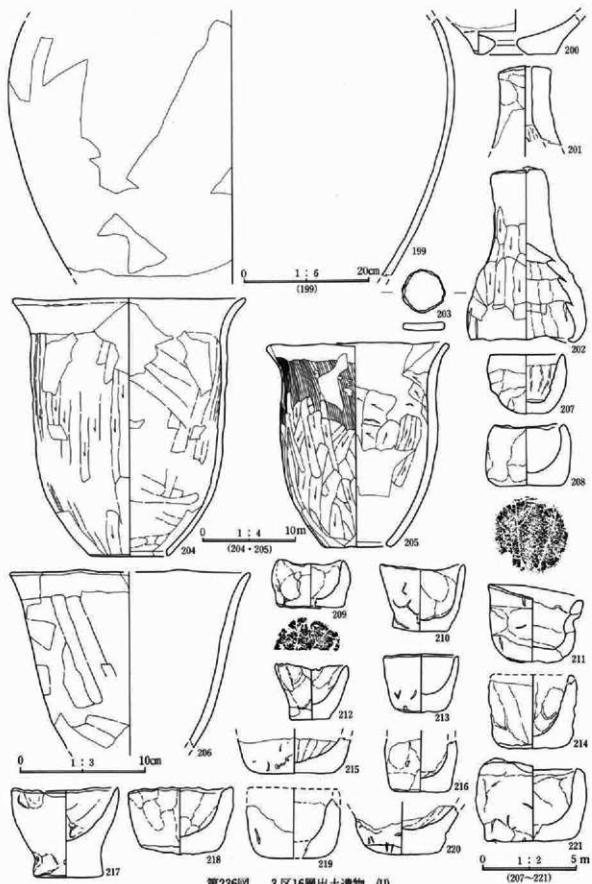
第233图 3区16层出土遗物 (8)



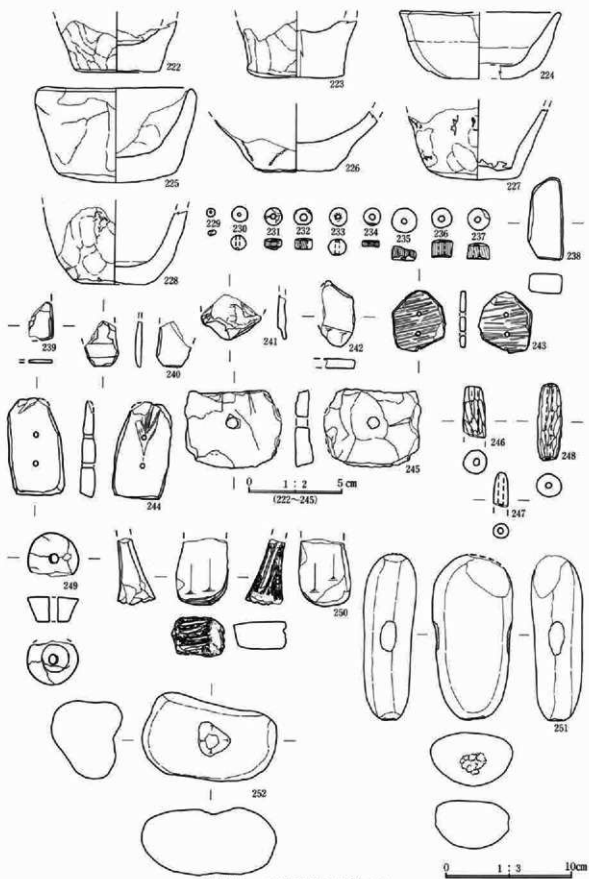
第234图 3区16层出土遗物(9)



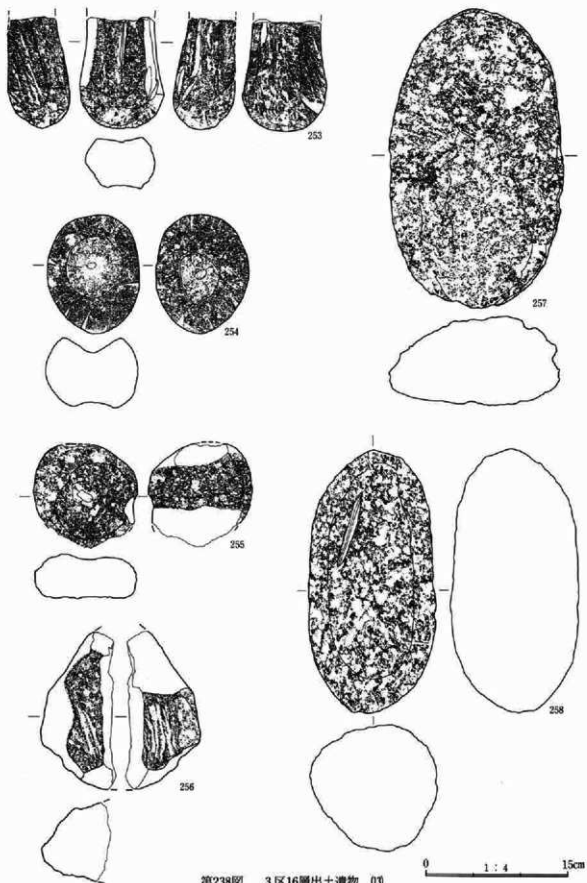
第235图 3区16層出土遺物 (10)



第236图 3区16层出土遗物 (1)

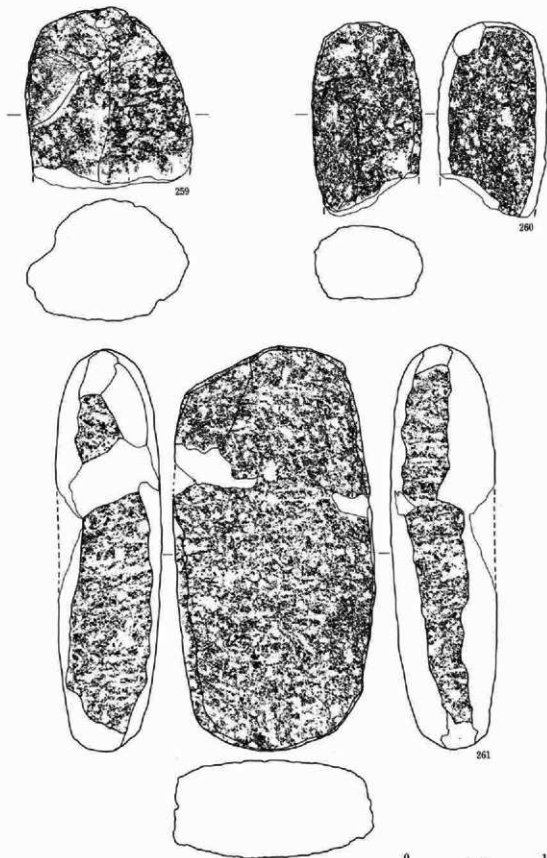


第237图 3区16层出土遗物 02

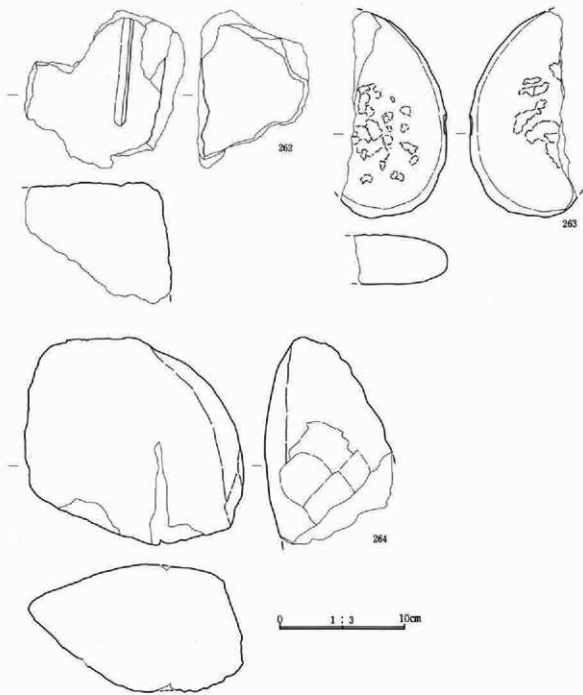


第238图 3区16層出土遺物 03

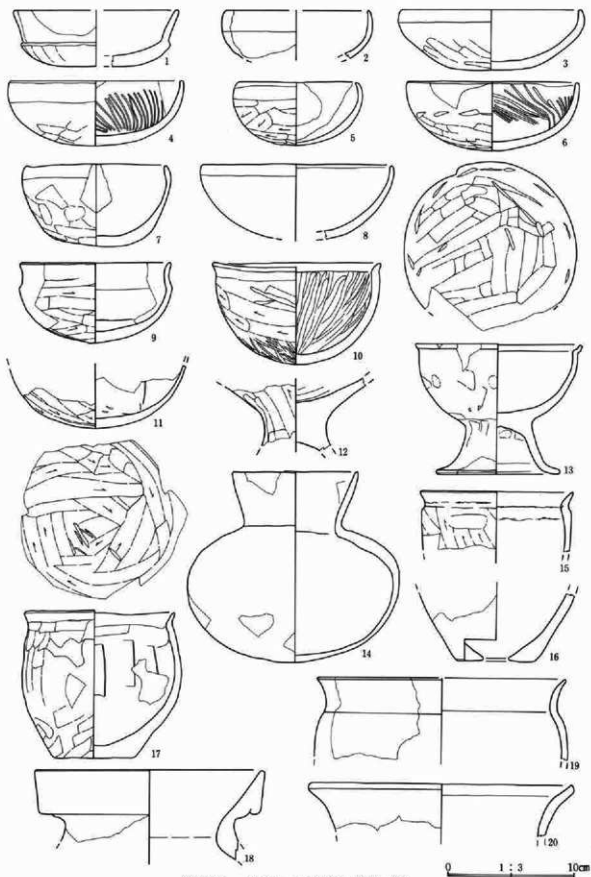
0 1:4 15cm



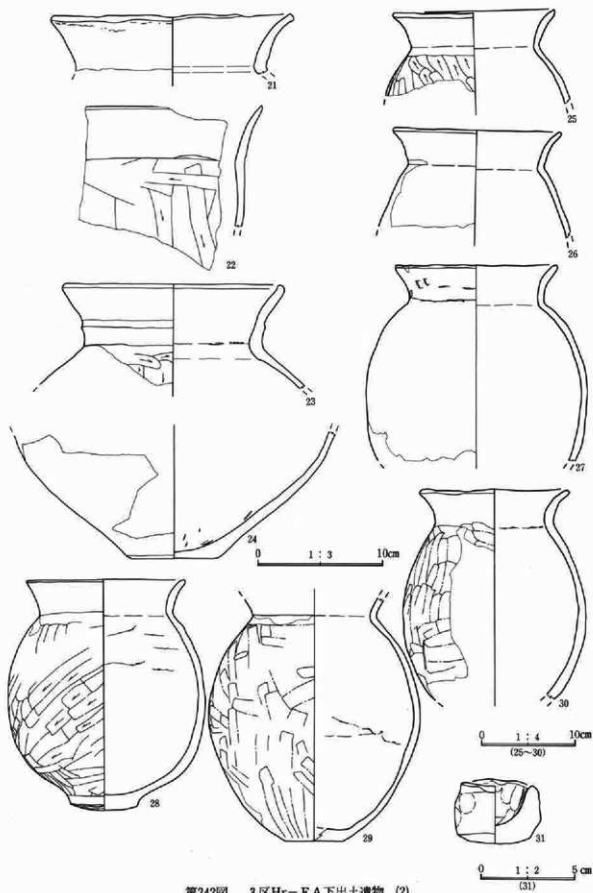
第239图 3区16层出土遗物 00



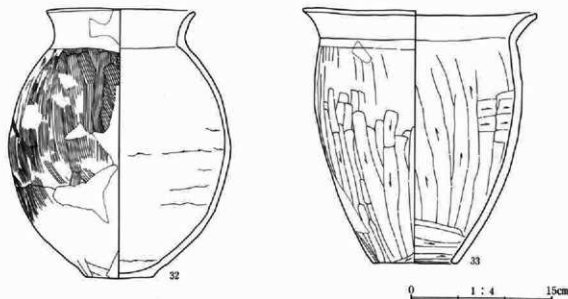
第240图 3区16層出土遺物 05



第241图 3区Hr-FA下出土遗物(1)



第242图 3区Hr-FA下出土物(2)



第243図 3区Hr-F A下出土遺物 (3)

11. 3区出土の木製品

鞍橋 (第244図1)

鞍橋はアカガシ亜属の曲がり木を縦目に取り、4ヶ所に長方形の居木先を挿入すると推定されるほぞ孔を穿っている。一端は3ヶ所に補修孔が認められ、補修部分から先は検出されなかった。中央には挟り込みがある。後輪であろう。漆などの塗彩は認められない。16層出土。

刀状木製品 (第244図2～第245図7)

5～7は完形若しくはほぼ完形である。割材を板目や柾目に取り、柄は丸く削り出している。刃部に当たる部分は丸みを有し、背側は弧状に抉っているため反りがあるように見える。5は身部と柄部の比率がほぼ同じであるが、6、7は柄がやや短い。刃部には叩打痕や摩滅が認められない。3、4は柄断片であり、2はやや小型であるが、この種の柄となる可能性がある。樹種は2、4～6がクスノギ、3がムクノキ、7がコナラ節である。出土層位はいずれも16層である。

着柄鋏・鎌 (第245図8～第246図19)

11点中全形を知り得るものは17の1点である。また、固定部の形状を知り得るものは6点あり、いずれもナスの帯状の突起と挟りを有する。なお、12、17の挟り部には緊縛痕が認められた (PL-78参照)。16は身部が丸みを持っており形態が異なっている。また、17には鉄製鎌(鋏)先を装着する細工がなされる。12～16は部分的に炭化する。木取りには柾目と板目の2者があり、前者が8～10、14、15、17、18、後者が11～13、16である。19は柾目板を縦に取り、ナスの帯状を呈した笠部が認められるなど着柄鋏・鎌の特徴を有している。しかし、笠部中央には組孔があげられている。なお、この部分は肥厚していないことから柄の装着孔ではないと考えられる。着柄鋏・鎌の転用品であろうか。

樹種は8、10、14、15、17～19がクスノギ、9がアカガシ亜属、11～13、16カバノキ属である。出土層位は8～18か16層、19が15層出土である。

横歌？ (第247図20)

身部の約半分を欠損する。柁目板を横に取り、いわゆる船状突起を削りだして柁孔を補強している。柁孔位置は、ほぼ中央であったと考えられる。両端は欠損しているが、残存部分から丸みを帯びていたと考えられ、身全体には反りがある。刃の部分はやや薄く造り、端部はより薄く仕上げている。樹種はクスギ節。出土層位は、Hr-FA下である。

農具膝柄 (第247図21、第248図23)

曲がり木の割り材を使用して柄部は丸く、固定部は断面長方形に削っている。固定部下面は、共に段を削り出して面を整える。特に低い部分は平坦に仕上げている。以上の理由から農具膝柄と考えた。23には固定部上面に枝を利用した小突起がある。また、23の柄部は炭化している。柄固定部の段差と着柄部固定部の段差は逆となり、固定した場合には段差部分と直交方向に力がかかるようになっていてと解される。しかし、21、23では、この部分に繊維の湾曲などは認められなかった。また、緊縛痕も観察されない。滋賀県長浜市国友遺跡出土資料中に類品がある。また、若干形態が異なるが、京都府石本遺跡にも鉄柄と解される資料がある。樹種は21がムクノキ、23がヤマグワである。出土層位は共に16層である。

直柄鋤 (第247図22、第248図24、25)

22はケヤキ板目板の中央を棒状に削ったもので、身部と把手の区別が不明瞭である。また、端部も尖らせたり薄く加工していない。形態から鋤としたが、他と木取りも異なることから用途不明とすべきかも知れない。16層出土。24もケヤキを使用しているが、木取りが柁目である。柄は断面長方形、身部の形状は22に近似する。16層出土。25は把手と鋤身の一部が欠損するのみの良好な資料である。クスギ節の柁目板を縦に取り、中心部に柄を削り出している。全体に厚く、加工痕も明瞭であることから未製品であろう。3区54号溝底部出土であり、時期的には15層、すなわち8世紀中頃から9世紀後半の所産となる。しかし、54号溝は砂の堆積が著しく、かなりの流水があったことがわかる。加えて水位の低い環境にあって大型木製品が遺存することは考えにくい。したがって、25は16層中にあったものが54号溝によって一部洗い出されたと推定されよう。

鎌柄 (第249図26～第250図36)

鎌柄として分類したのは11点ある。このうち、刃部装着孔を有しないのが3点(26、27、34)存在する。26、27は小片であるうえに刃部装着孔を有しないが、形態から鎌柄未製品と判断した。また、34は刃部装着孔を有しないうえ、柄部も断面円形に仕上げていないなどの特徴から未製品と考えられる。完成品は8点あり、刃部装着孔が遺存するのは6点である。これらは、先端の刃部補強部分の形状によって分類される。すなわち、31のように先端まで柄と同じ太さで補強部分を有さないもの。28のように平面三角形の補強部分を有するもの。29、32、35、36のように平面四角形の補強を有する一群である。樹種は26、31、34～36がクスギ節、27がイヌシデ属、28がカバノキ属、29、32がカエデ属、30がケヤキ、33がアカガシ亜属である。29は、一部炭化している。

膝柄 (第250図37～第251図42、第285図334)

37～39は柄が細く固定部も短いものである。37は樹皮の付いたままのクリ細枝を用い、端部を切断している。固定部先端は斜めに削るが断面は円形である。38はヤマグワ細枝の分枝部分を切断して「く」の字状に取り、固定部上面を平坦に加工している。39は柄に反りがあるうえ固定部の断面形が三角形を呈するなど疑問もあるがここに含めた。モミ属を使用。40、41は固定部と柄の角度が異なるが、固定部の形状や柄の太さは近似する。40は固定部先端が欠損するが、先端付近に袋状鉄弁を装着するための段差を有する。固定部後

方は円錐状に削る。41は表面が摩滅しており加工痕は観察できない。固定部上面は炭化している。42は固定部上面を平坦に削ると共に先端を1段細くしている。柄を欠損するが、最も加工を加えた個体である。袋状鉄斧を装着したものであろう。40がクスギ節、41がサクラ属を使用。334は、枝分かれ部分を使用したもので、基本的には40、41と同様であるが、固定部先端が非常に短い。表面はやや摩滅する。クスギ節を使用。出土層位は37が15層、他は総て16層出土である。

下駄 (第251図43～45)

3点出土しているが、いずれも1木から削り出した連歯下駄である。木取りは削り材を使用している。鼻緒孔(後ろ壺)の判明する2点は、後ろ歯の前に開けている。前壺は、3点共に不明である。また、いずれも歯の形状が異なり揃っていない。45は接合しないが出土状態から同一個体と推定される。

もじり編み用木製錘 (第252図46～第255図74)

もじり編み用木製錘と考えられるものは28点出土している。形態からA類からF類の6種に分類され、樹種からはクスギ節とモモの2種に分類される。A類は、丸太中央に溝が一周するもので、溝は鉋状工具で付けられる。渡辺誠氏のIYd型に相当し(註1)、すべてクスギ節で作られる。B類は、クスギ節の丸太をほぼ半截し、一方の側縁を抉ったもので、抉りないものをC類とした。D類は、渡辺氏のIYb型に当たるが直線的な穿孔ではなく「V」字型に抉り込んでいる。使用樹木はすべてモモである。E類は、D類の抉り残り部分のないもので、錘ではない可能性もあるが、D類と同一樹種で形態も近いため錘に含めた。F類は、渡辺氏のIYa型にあたり、モモの丸太両端を切断したのみのものである。

これら木製錘の類型と出土層位を比較すると、おおむねHr-FA下出土はB類、C類、D類、E類、16層はA類、F類である。次に推定重量を渡辺氏が行った民具調査の成果(註1,2)と比較すると、F類が最も軽く平均で約310gとなり、第3群に属し、B類、E類は第3群と第4群の両者に、A類、C類、D類は第4群に属する。

なお、第255図76は形態的に錘に近似するが、木口に叩打痕を有するうえに樹種が「ケヤキ」であることから錘ではないと判断した。

もじり編み用木製錘一覧表

形態	図番号	長さ(cm)	直径(cm) 幅、厚さ	樹種	気乾比重	体積 (cm^3)	推定重量 (g)	備考	登録番号	出土位置
A	46	12.5	7.9	クスギ節	0.85	576	490		62	16層
A	47	14.3	—	クスギ節	0.85	—	—	1/2欠損、表面炭化	63	16層
A	48	12.4	7.1	クスギ節	0.85	663	564	樹皮付	64	16層
A	49	12.8	5.6	クスギ節	0.85	459	(390)	木口欠損	95	16層
D	50	12.6	6.4	モモ	0.81	441	(357)	一部欠損	98	Hr-FA下
D	51	12.9	7.8	モモ	0.81	622	504		97	Hr-FA下
D	52	12.7	8.3	モモ	0.81	642	520		116	Hr-FA下
D	53	13.0	7.7	モモ	0.81	642	520		96	Hr-FA下
E	54	13.7	7.4	モモ	0.81	516	(418)	一部欠損	101	Hr-FA下
E	55	11.6	5.9	モモ	0.81	382	(309)	一部欠損	102	Hr-FA下
E	56	13.1	7.2	モモ	0.81	632	512		100	Hr-FA下
E	57	12.8	6.3	モモ	0.81	473	383		99	Hr-FA下
B	58	11.4	9.7, 3.6	クスギ節	0.85	417	354	一部欠損	107	Hr-FA下
B	59	18.0	7.9, 2.9	クスギ節	0.85	446	379		109	16層
B	60	12.9	9.2, 4.4	クスギ節	0.85	525	446		103	Hr-FA下
B	61	12.0	8.0, 4.2	クスギ節	0.85	438	372		105	Hr-FA下

B	62	14.3	8.1, 3.6	クスギ節	0.85	419	(356)	一部欠損	104	Hr-FA下
B	63	12.7	8.4, 4.1	クスギ節	0.85	511	434		106	Hr-FA下
C	64	12.5	11.7, 4.3	クスギ節	0.85	714	607		119	Hr-FA下
C	65	11.9	9.7, 5.1	クスギ節	0.85	565	480		118	Hr-FA下
C	66	13.6	10.2, 3.6	クスギ節	0.85	597	507		108	16層
C	67	13.9	10.6, 4.1	クスギ節	0.85	654	556		120	Hr-FA下
C	70	13.9	10.8, 4.1	クスギ節	0.85	694	(590)	一部欠損	117	Hr-FA下
F	68	17.9	5.2	モモ	0.81	420	340	樹皮付	243	16層
F	69	17.9	4.5	モモ	0.81	380	308	樹皮付	114	16層
F	71	14.5	5.8	モモ	0.81	324	262		112	16層
F	72	17.3	4.6	モモ	0.81	387	313	樹皮付	111	16層
F	73	16.3	5.5	モモ	0.81	442	358	樹皮付	113	16層
F	74	17.3	4.3	モモ	0.81	343	278	樹皮付	134	Hr-FA下

気乾比重は、「貴島恒夫ほか『原色木材大図鑑』(改訂版)保育社1980」を使用。

編み台目盛り板 (第255図75)

編み台目盛り板は、16層から1点出土している。ほぼ中央で折損するが接合できる。形状は全長140.7cm、幅6.1~5.0cm、厚さ1.9~2.3cmの厚板状を呈する。目盛りは上下2種類刻まれ、一方は17.5cm間隔で6カ所、他方の刻みは不明瞭で、4カ所の間隔は21.0cm、19.5cm、19.0cmである。樹種はモミ属である。脚に固定する挟り部分の一方は遺存が悪く、目盛りの刻みも明瞭ではない。

槌 (第255図76~第256図82)

7点を槌として分類した。76は先に記した木製鎚に似るが、横槌がケヤキであることや木口に叩打痕が認められることからここに含めた。76の槌としての使用は転用であろう。16層出土。横槌は6点出土しているが形槌のパラエティーはない。77は一部炭化しており、握り部と作用部の境は斜めに削るが、境は明瞭である。カヤで作られ、Hr-FA下出土。78から82は16層出土で、78、80がクスギ節、79がケヤキ、81がカバノキ属で作られる。形態は82を除き作用部と握り部の境は不明瞭である。82は握り部と作用部の中心がずれるタイプであるが、欠損しているためか使用痕が認められず握り部も長いことから槌でない可能性もある。77のみ丸木を使用し、他の横槌は割材を使用している。77のみHr-FA下出土、他は16層出土。

竪杵 (第256図83)

完形品1点のみ確認した。アカガシ重属の丸木材を素材とする芯持ちのものである。搦部と握り部の境は稜をなし明瞭に区別できる。一部炭化している。握り部中央が算盤玉状をすものは、小片においても確認できなかった。16層出土。

容器 (第256図84~第257図90)

全体形状を知りうる個体は86と90のみである。86は平底で底部外面に2脚を有し、全体では4脚と推定される。平面形状は楕円形を呈し、端部に突起を有する可能性がある。モミ属を使用。90はケヤキの柄杓で、握り端部につり下げのためと推定される方形孔をあけている。84、85、87から89は丸底を呈すると推測される容器である。84、85がモミ属、87、89がクリ、88がエノキ属を素材とする。84、85は同一樹種で同様な目やせが認められることから同一個体の可能性が高い。85のみHr-FA下出土、他は16層出土。

たも網? (第257図91)

モモの芯持ち丸木材の枝分かれ部分を使用し、細枝の両側を削っている。全体形状が不明であるため製品ではない可能性もある。16層出土。

丸木弓 (第258図92)

カヤの丸木芯持ち材を素材とし、放射状に延びる枝を丁寧に打ち払っている。弦は一方のみ遺存している。16層出土。

へら状木製品 (第258図93、94)

93は約40cmのヤマグワ割材を丸棒状に成形し、一端をへら状に薄く削っている。94はモミ属の薄板をへら状にしたものである。ともに16層出土。

構築部材 (第258図95～第260図103)

96はクリの板目材を素材とし、端部に方形の欠き込みと2カ所づつの方形くぼみを有する。16層出土で表面の一部は炭化している。150は腐食により両端の遺存が不明瞭であるが、断面形状からまぐさ材の可能性が高い。16層出土でケヤキを使用。99は16層出土の全長118cm、厚さ24cmを測る板目のクリ厚板である。両端には欠き込みを有し、高床建物の壁板状を呈するが、長さが短く高床建物部材か否かは不明。95はクヌギ節の半裁材で両端を欠損する。表面の一部は炭化し、遺存が悪く不明瞭であるが、貫通しない方形の仕口穴を有していたと考えられる。16層出土。97もクヌギ節の半裁材を使用し、仕口穴を有する。16層出土で両端は焼失する。98はクヌギ節の芯持ち丸材の端部付近に仕口穴を有する。16層出土。100はクリの芯持ち丸木材の両端に欠き込みを作出している。16層出土。101も一端に欠き込みがあるが、他端は欠損か否か不明瞭である。樹種はクリで16層出土。102はクリの厚板で現存長1.55mと長い。端部には丸みを帯びた仕口穴がある。Hr-FA下出土で高床建物の構築部材であろうか。

原材? (第260図104、第261図105)

木材が伐採地付近で粗加工された状態と推測されるような材である。従って、端部の切断痕は明瞭であるが表面は未加工の割材である。104は15層出土でサクラ属。105はAs-C下出土でコナラ節。

有頭状木製品 (第261図106～第262図112)

棒状木製品の端部付近に加工を加え、頭部を削りだしたものですべて16層出土である。106は現存長46cmのクヌギ節芯持ち丸木材の端部を削り込んで頭部を削り出す。端部は両面から斜めに削っている。107はカヤの芯持ち丸木材の一方を平坦に削り、端部にわずかな切り込みを入れて頭部を作出する。108はアカガシ亜属の芯持ち丸木材の端部を両側から切り込んで頭部を作る。109はクリの芯持ち丸木材を使用している。遺存が悪く詳細不明。110は断面三角形を呈するクリ割材を使用している。頭部と反対側の端部は焼失している。111はカヤの芯持ち丸木材を使用したものであるが、表面全体は削られている。112はヤマグワの曲がり部を使用している。表面の一部は炭化している。

板材 (第262図113～第267図156)

板状をなし、仕口や切り込みが認められないものを板材として一括して扱う。出土層位と樹種は表に示す。113から115は板目薄板、127、128は柾目薄板で、製品の一部であろう。122、123、131、132、134、136、137、138、149、150は幅と厚さが一定した板材で、構築部材の一部と考えられる。特に123、149、150は建築部材の可能性が高い。板状を呈する原材もしくは未製品と考えられるものとして、124、130、133、135、143がある。122、126、154のトーン部分は炭化している。なお、121の仕口状の穴は欠損である。

図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種
113	16層	モミ属	114	16層	モミ属	115	16層	モミ属
116	16層	ケヤキ	117	16層	ヒノキ属	118	16層	ケヤキ
119	16層	トチノキ	120	16層	ケヤキ	121	Hr-FA下	クリ
122	16層	ヒノキ属	123	16層	クリ	124	16層	クスギ属
125	16層	ケヤキ	126	Hr-FA下	クスギ属	127	15層	ヒノキ属
128	16層	モモ	129	16層	クスギ属	130	16層	クスギ属
131	Hr-FA下	コナラ属	132	Hr-FA下	クスギ属	133	16層	クスギ属
134	Hr-FA下	ケヤキ	135	16層	クスギ属	136	16層	クスギ属
137	16層	ケヤキ	138	16層	ケヤキ	139	16層	クスギ属
149	Hr-FA下	クスギ属	141	16層	クスギ属	142	Hr-FA下	クリ
143	16層	クリ	144	16層	クスギ属	145	16層	ケヤキ
146	16層	クスギ属	147	16層	ケヤキ	148	16層	モミ属
149	16層	クリ	150	16層	クスギ属	151	16層	モミ属
152	16層	モミ属	153	16層	クスギ属	154	16層	クスギ属
155	16層	クスギ属	156	16層	モミ属			

杭状 (第268図157~第274図233)

丸木もしくは角材木製品の端部をとがらせたものを杭状としてまとめた。したがって、打ち込まれた状態で出土していないものが主体を占めている。出土層位と樹種は表に記した。芯持ち丸木材を使用したものは表面加工を施さないことを原則とし、167、171、176、177、180、182、187、188、191、196、200、203、204、206、208、213、216から218、226には樹皮が残っている。量的には少ないが159、173、178、192、201、202、205、215、219、223、226、227、229は割材を使用している。また、3区谷地の堆積土には未分解の植物遺体を多く含み、この影響から185、188、196、200には「圧密現象」と考えられる繊維の屈曲が認められる。161、165、198、205、225、230、233の一部は炭化し、195は周囲が削られている。

図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種
157	16層	モモ	158	16層	モモ	159	16層	イヌシダ属
160	16層	カエデ属	161	16層	クスギ属	162	16層	クスギ属
163	16層	アカメゴシツ	164	16層	カエデ属	165	16層	モミ属
166	16層	コナラ属	167	16層	クスギ属	168	16層	ヤマグワ
169	16層	ヤマグワ	170	16層	クリ	171	16層	クスギ属
172	16層	カマツカ	173	16層	モモ	174	16層	クスギ属
175	16層	クスギ属	176	Hr-FA下	クスギ属	177	Hr-FA下	クスギ属
178	16層	モミ属	179	16層	トネリコ属	180	16層	クスギ属
181	16層	ヤナギ属	182	16層	クスギ属	183	16層	クスギ属
184	16層	モモ	185	16層	ケンボナシ属	186	16層	イヌシダ属
187	16層	クスギ属	188	Hr-FA下	クスギ属	189	16層	クスギ属
190	16層	カエデ属	191	16層	クスギ属	192	16層	クスギ属
193	16層	クスギ属	194	16層	クスギ属	195	16層	クスギ属
196	16層	クスギ属	197	16層	サクラ属	198	16層	クスギ属
199	16層	クスギ属	200	16層	クスギ属	201	16層	クスギ属
202	16層	クスギ属	203	Hr-FA下	クスギ属	204	16層	ヤマグワ
205	16層	クスギ属	206	16層	ヤマグワ	207	16層	ヤマグワ
208	16層	モモ	209	16層	カヤ	210	16層	クスギ属
211	16層	ヤマグワ	212	16層	クスギ属	213	16層	ヤマグワ
214	16層	ヤマグワ	215	16層	モミ属	216	16層	クスギ属
217	16層	モモ	218	16層	モモ	219	16層	クリ
220	16層	クスギ属	221	16層	クスギ属	222	16層	クスギ属
223	16層	モミ属	224	16層	アカメゴシツ	225	16層	ヤマグワ
226	16層	クスギ属	227	16層	クスギ属	228	16層	ムクロジ
229	16層	クスギ属	230	16層	コナラ属	231	16層	サクラ属
232	16層	モモ	233	16層	クスギ属			

曲物 (第285図335~339)

すべて15層出土でヒノキを使用した底板である。336と338は側板を載せる欠き込みを有する。

図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種
335	15層	ヒノキ属	336	15層	ヒノキ属	337	15層	ヒノキ属
338	15層	ヒノキ属	339	15層	ヒノキ属			

その他 (第274図234~第285図333)

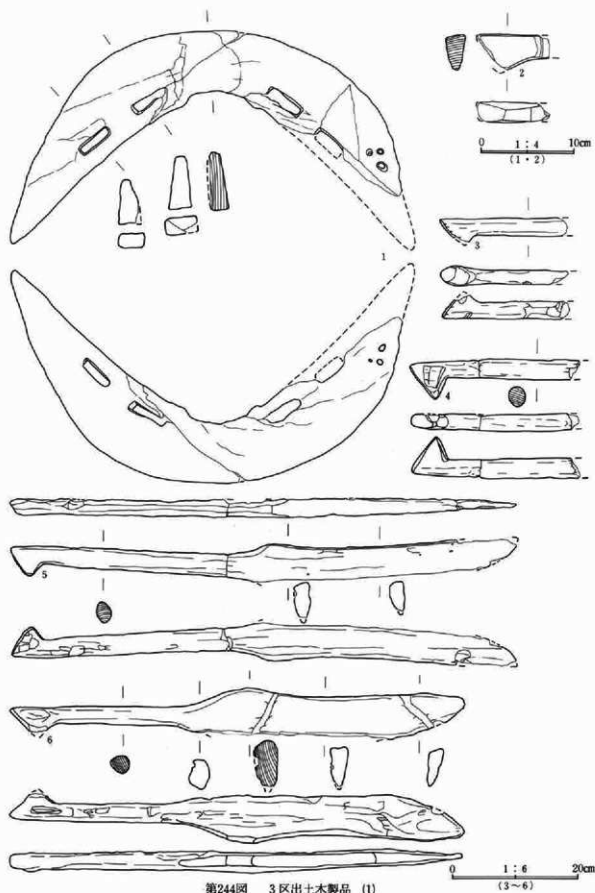
用途不明木製品、棒状木製品、割材などをその他とし、代表的な木製品のみ説明する。なお、出土層位と樹種は表に記した。

234から247は小型品である。235は横楕に似た形態であるが、全長11cmと小さい。238は不正円形の中央に小孔を穿っている。239は「U」字状もしくは円盤状を呈する製品の一部と推測される。246は端部側から削り込んで頭部を作出する。249は棒状の端部を両側面から削ってやや薄くしている。250は角棒端部に小孔をあけている。252は柁目板の端部両側面に小さい切り込みを入れており、紡織具の可能性も考えられる。257は断面「L」字状を呈し、中央部に大きな欠き込みを作る。遺存状態が悪いが、261も同様な木製品であろう。表面加工のない割材としては301から304、308、309、320、321がある。306は芯持ち丸木材の端部であり、製品や未製品ではなく切れ端の可能性が高い。307も同様である。312は割材を面取りしており、原材もしくは未製品であろう。315は2枚の板が土により張り付いているが、破損防止のため斜がしていない。表面調整が粗いため、容器ではなく未製品であろう。323から330は製作時に出る端材である。

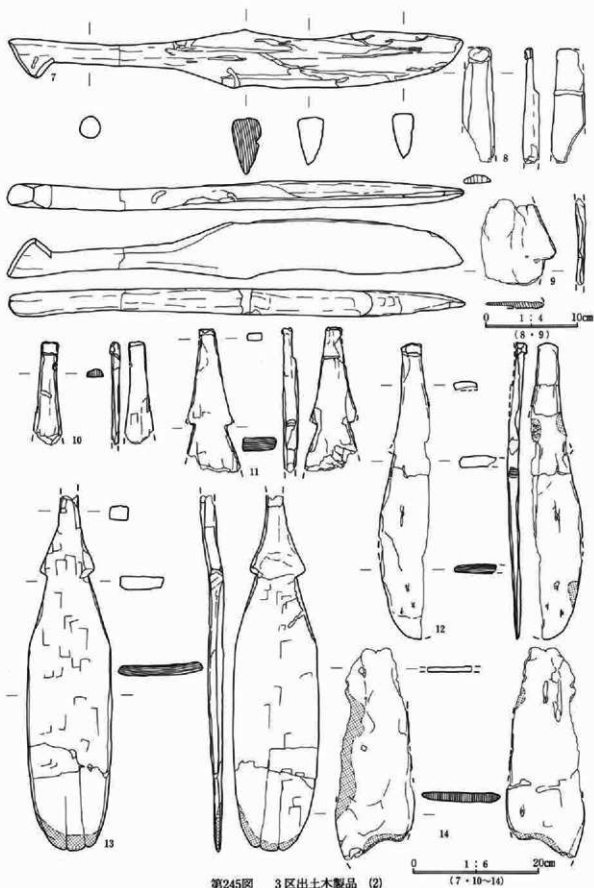
図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種	図番号	出土層位	樹種
234	16層	カエデ属	235	16層	ヤマグサ	236	16層	ヤマグサ
237	16層	モミ属	238	15層	アサダ	239	15層	クスギ節
240	16層	クスギ節	241	15層	ヒノキ属	242	16層	ムラサキシキブ属
243	16層	クスギ節	244	16層	カヤ	245	16層	カヤ
246	16層	クスギ節	247	16層	モミ属	248	16層	ケヤキ
249	16層	モミ属	250	Hr-FA下	ケヤキ	251	16層	クスギ節
252	16層	クリ	253	15層	クスギ節	254	16層	クスギ節
255	16層	モミ属	256	16層	クスギ節	257	16層	ケヤキ
258	16層	モミ属	259	16層	モミ属	260	16層	クスギ節
261	16層	モミ属	262	16層	モミ属	263	16層	モミ属
264	16層	サクラ属	265	16層	ケヤキ	266	16層	ヒノキ属
267	16層	クスギ節	268	Hr-FA下	カヤ	269	16層	クスギ節
270	16層	クスギ節	271	16層	クスギ節	272	16層	クスギ節
273	16層	アカガシ属	274	16層	モミ属	275	16層	モミ属
276	16層	ケヤキ	277	Hr-FA下	カバノキ属	278	16層	クスギ節
279	Hr-FA下	クスギ節	280	16層	クリ	281	16層	モミ属
282	16層	クリ	283	16層	クスギ節	284	16層	クスギ節
285	16層	ヒノキ属	286	16層	モミ属	287	16層	クスギ節
288	Hr-FA下	モミ属	289	16層	クスギ節	290	16層	クスギ節
291	16層	クリ	292	16層	クスギ節	293	16層	クスギ節
294	16層	クスギ節	295	16層	クスギ節	296	16層	カバノキ属
297	16層	モモ	298	16層	クスギ節	299	16層	クスギ節
300	Hr-FA下	クスギ節	301	Hr-FA下	クスギ節	302	16層	クスギ節
303	16層	クリ	304	16層	クリ	305	16層	クスギ節
306	16層	コナラ節	307	16層	ヤブツバキ	308	16層	コナラ節
309	49号溝	ヒノキ属	310	16層	クスギ節	311	16層	アカガシ属
312	16層	クスギ節	313	Hr-FA下	コナラ節	314	16層	ヤマグサ
315	16層	ケヤキ	316	16層	クスギ節	317	16層	クスギ節
318	Hr-FA下	コナラ節	319	16層	クスギ節	320	As-C下	コナラ節
321	352土坑	コナラ節	322	16層	トチノキ	323	16層	グミ属
324	16層	クスギ節	325	16層	カヤ	326	16層	カヤ
327	16層	ケヤキ	328	16層	クスギ節	329	16層	クリ
330	16層	クスギ節	331	Hr-FA下	コナラ節	332	Hr-FA下	コナラ節
333	Hr-FA下	クリ						

註

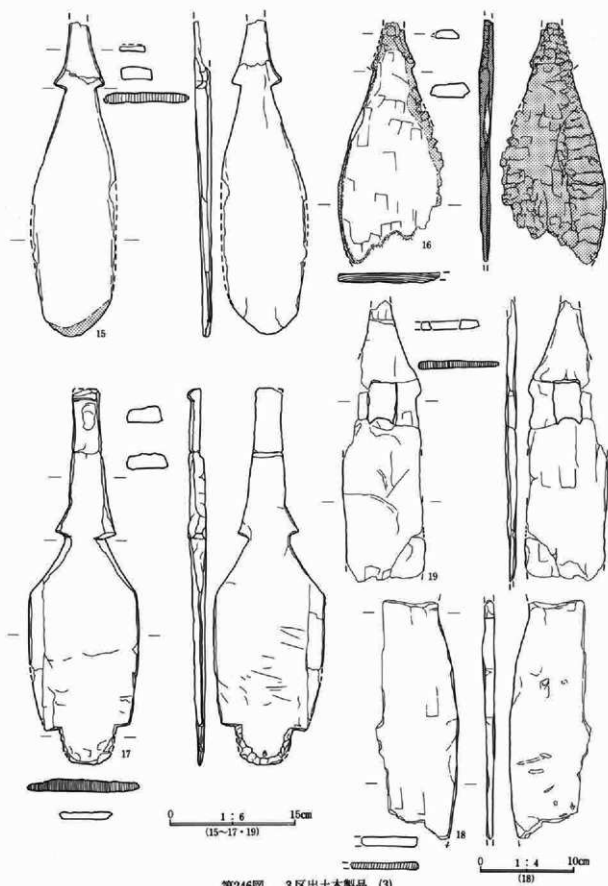
1. 渡辺 誠 「もじり編み用木製網の考古資料について」『考古学雑誌第66巻第4号』日本考古学会 1981
2. 渡辺 誠 「編み物用網具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集第80』名古屋大学 1981



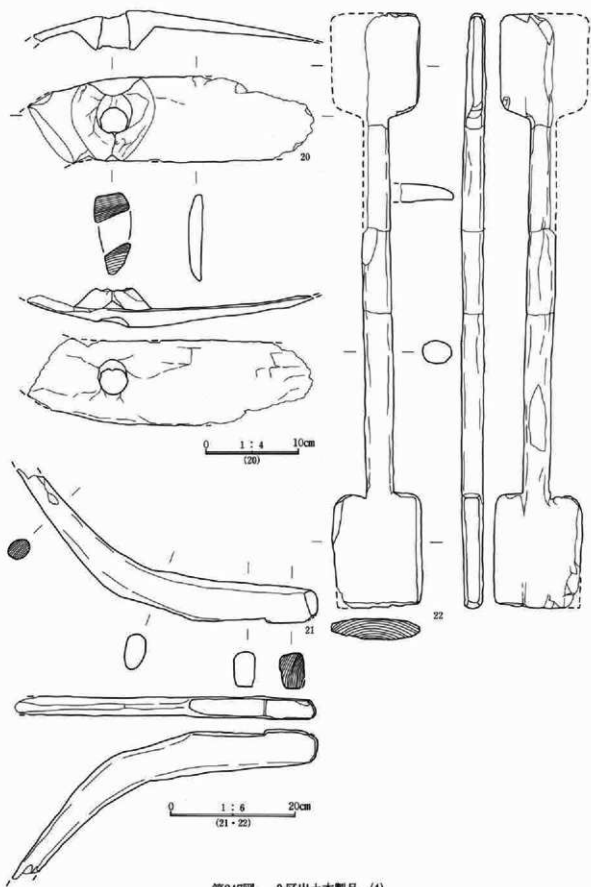
第244图 3区出土木製品 (I)



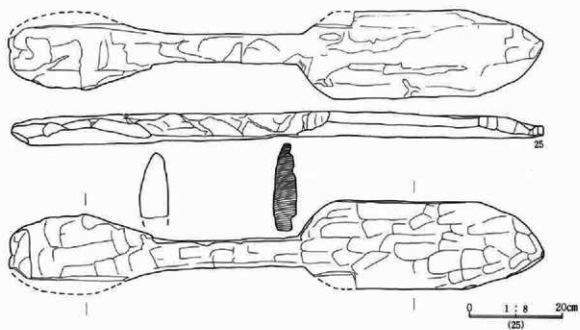
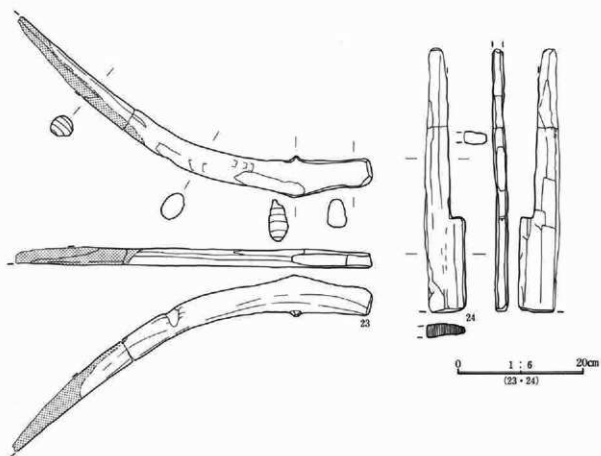
第245图 3区出土木製品(2)



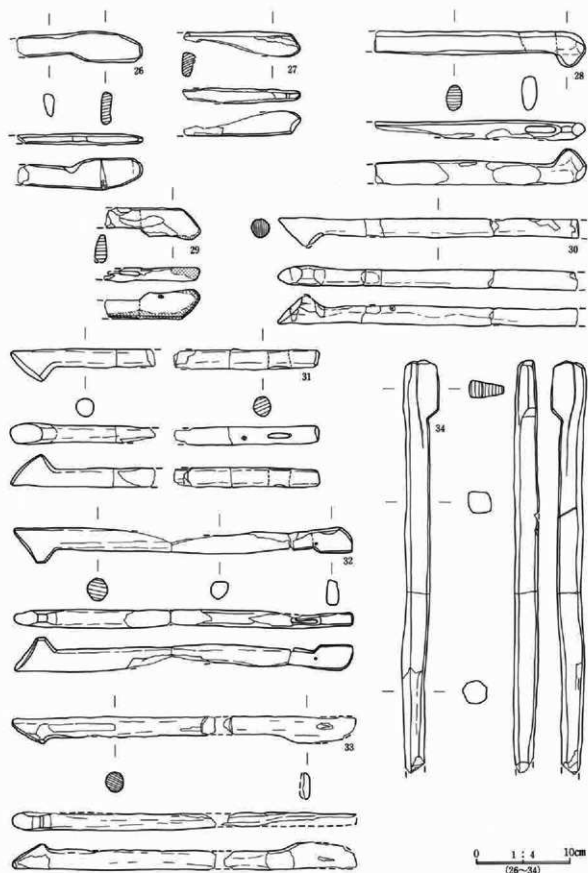
第246图 3区出土木製品 (3)



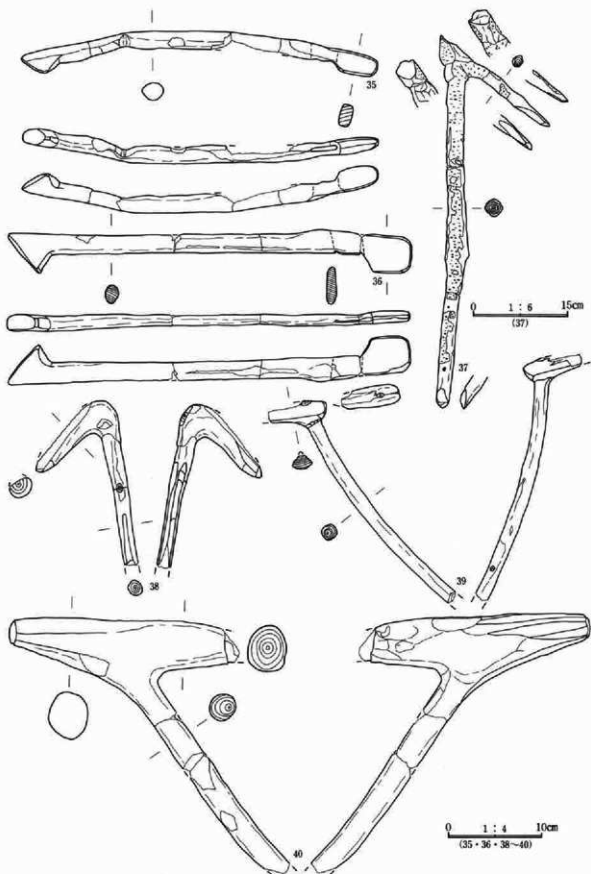
第247图 3区出土木製品 (4)



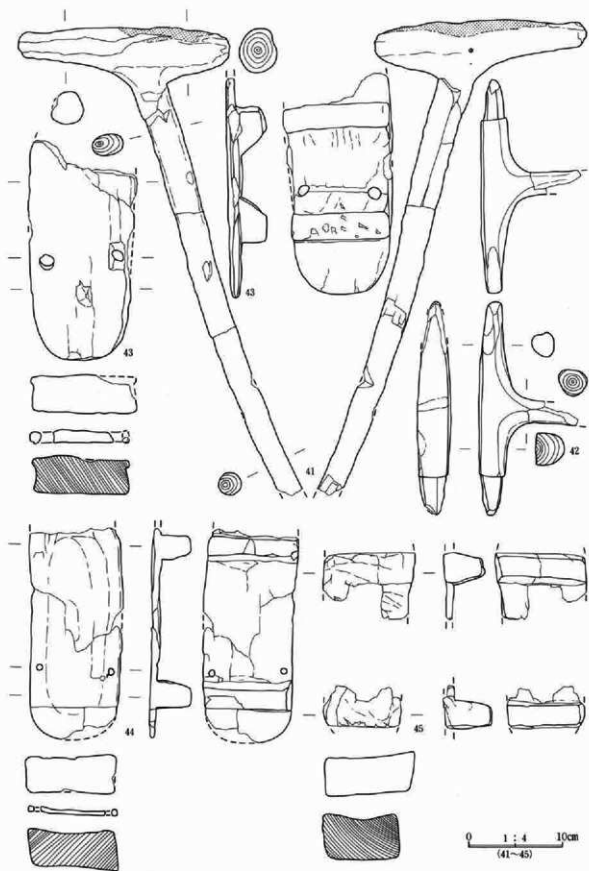
第248图 3区出土木製品 (5)



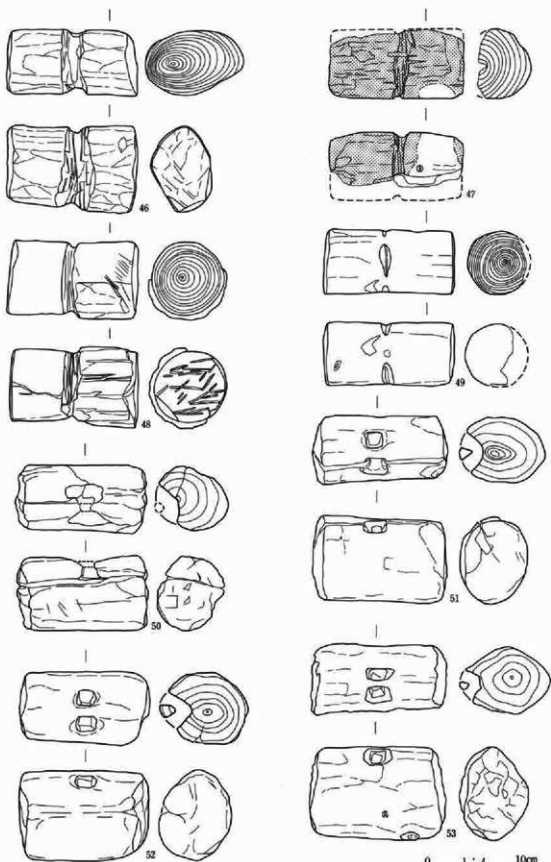
第249图 3区出土木製品 (6)



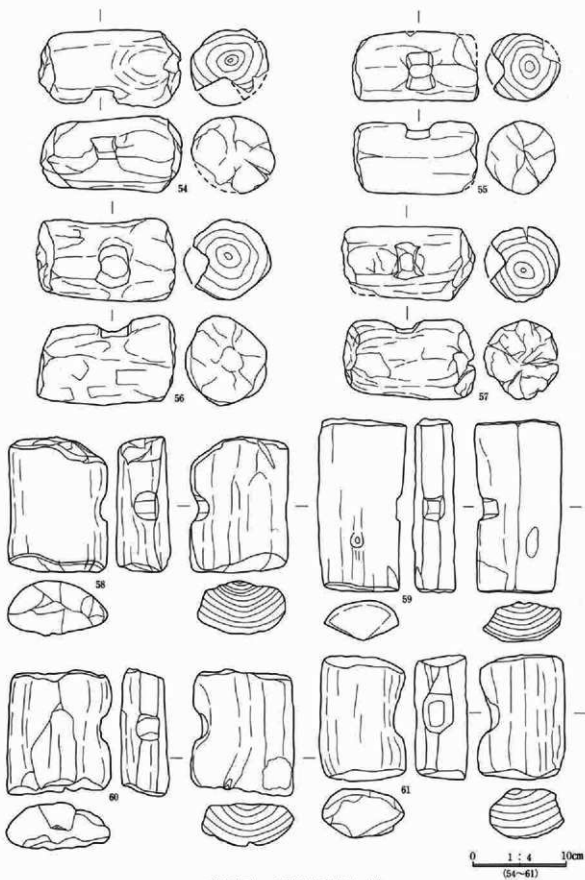
第250图 3区出土木製品 (7)



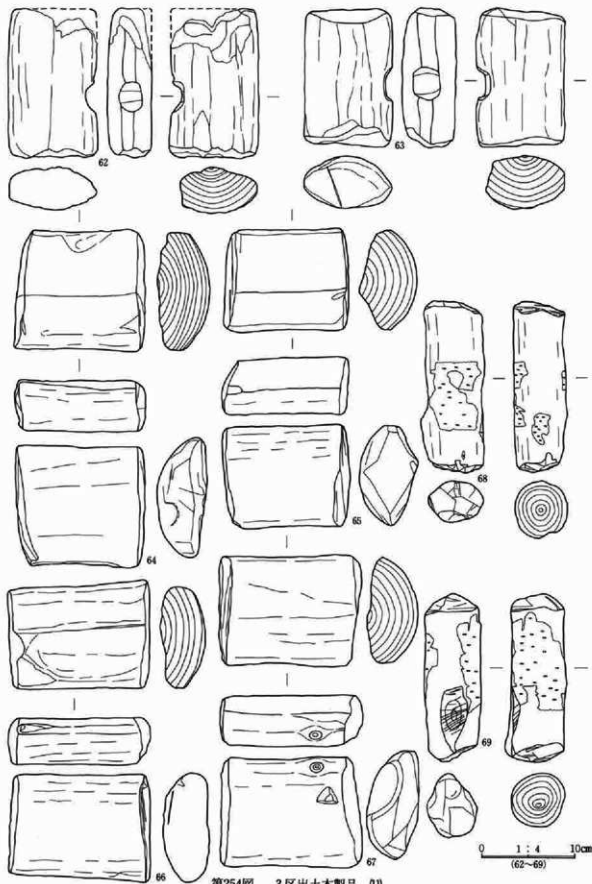
第251图 3区出土木製品 (8)



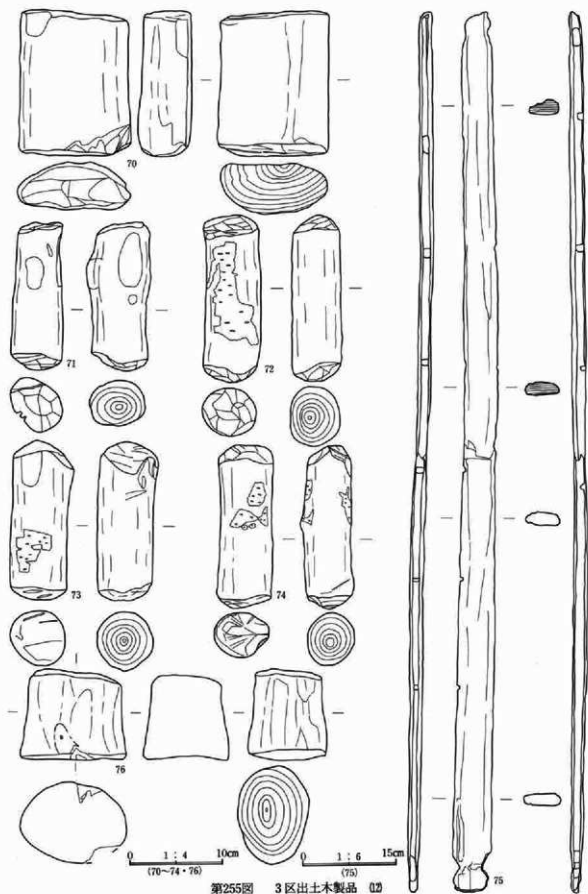
第252图 3区出土木製品 (9)



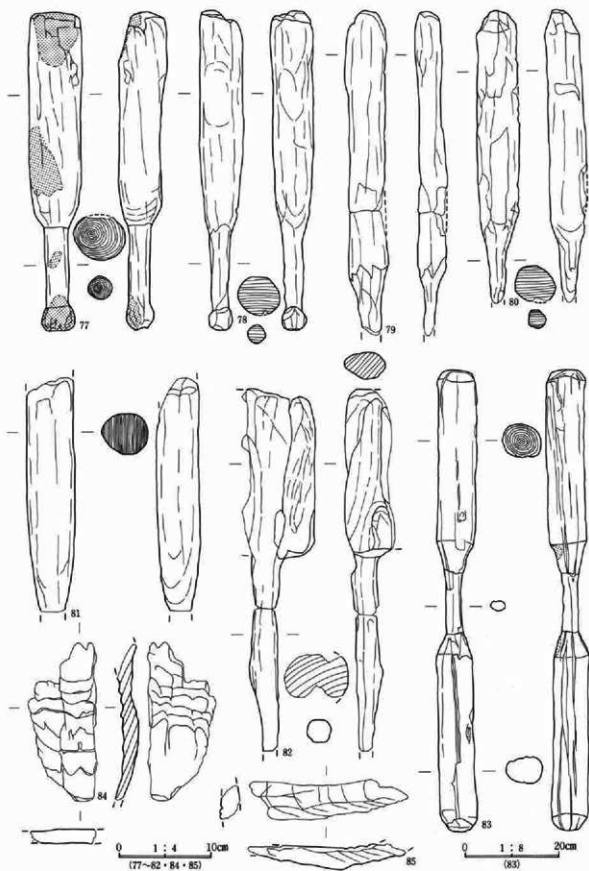
第253图 3区出土木制品 (10)



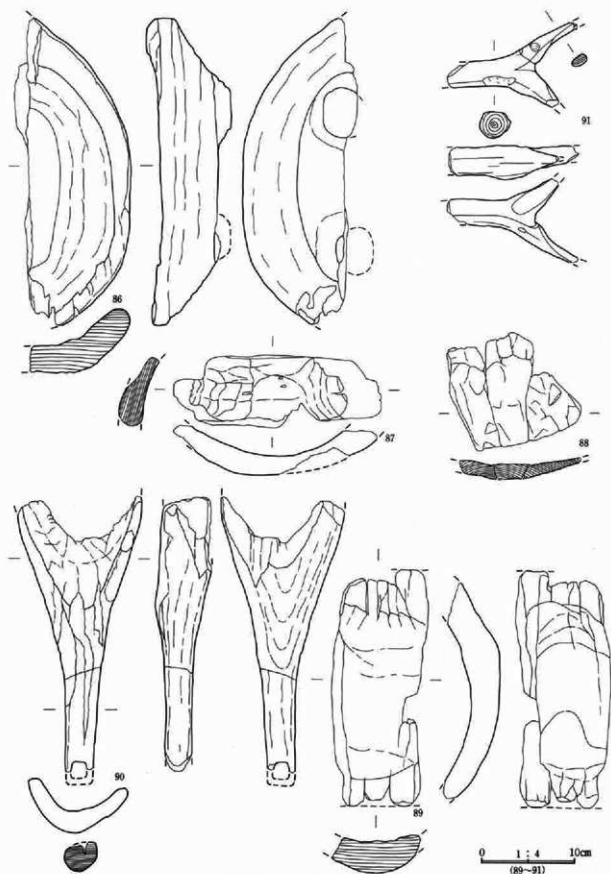
第254图 3区出土木製品 01



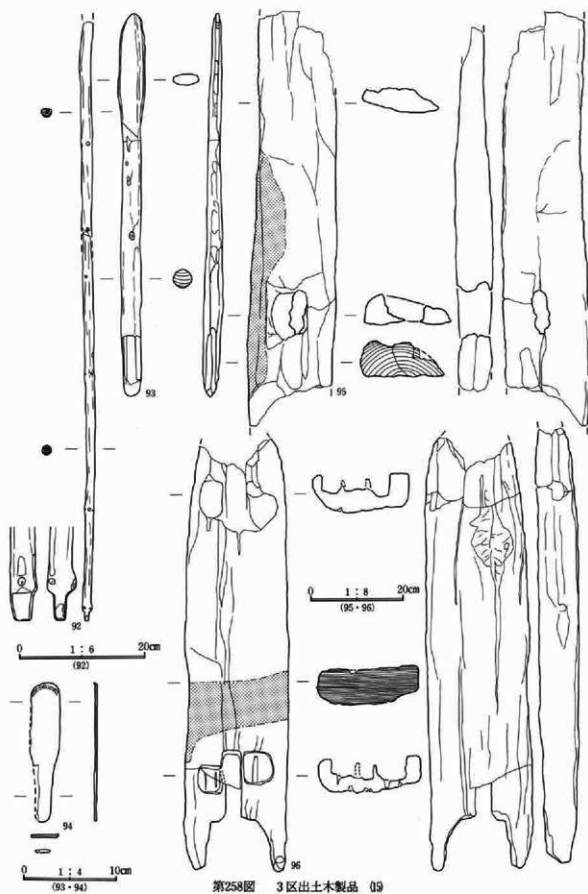
第255图 3区出土木製品 02



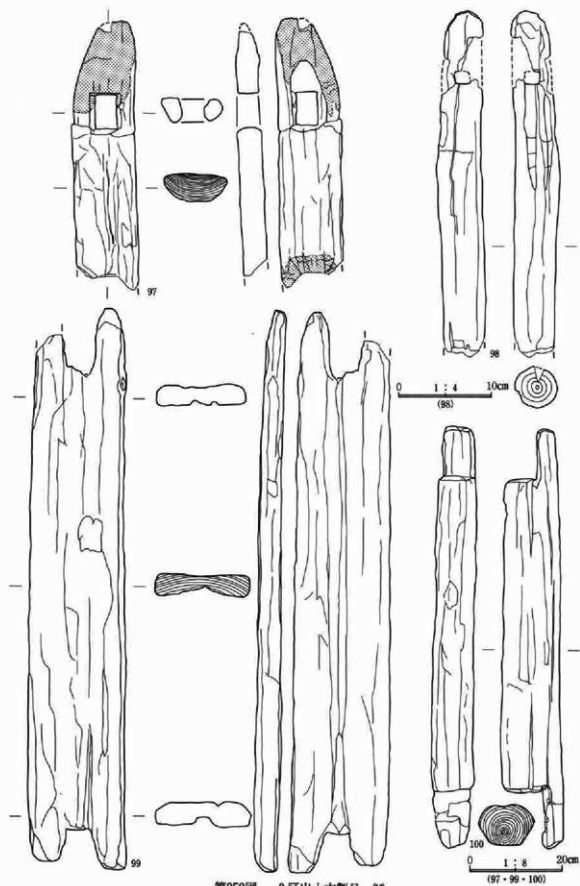
第256图 3区出土木製品 (19)



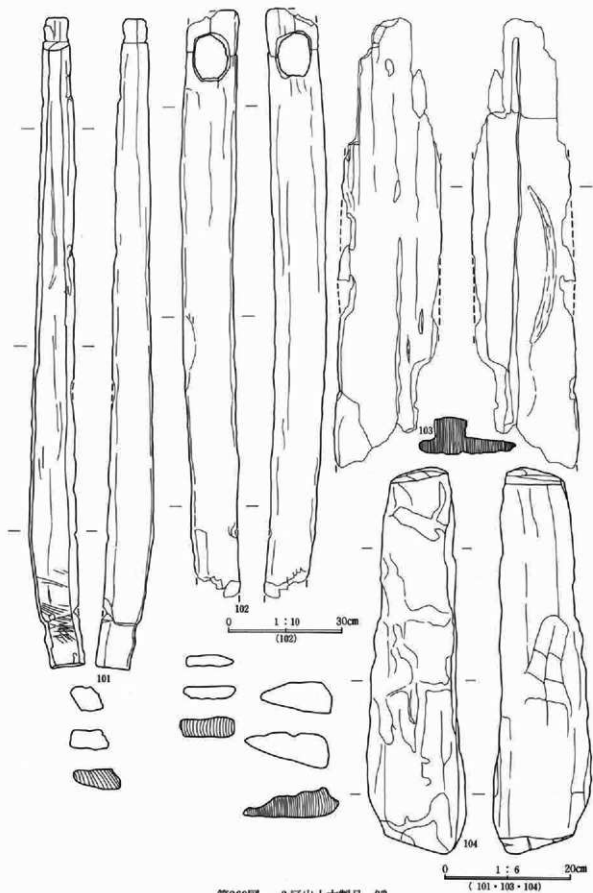
第257图 3区出土木製品 04



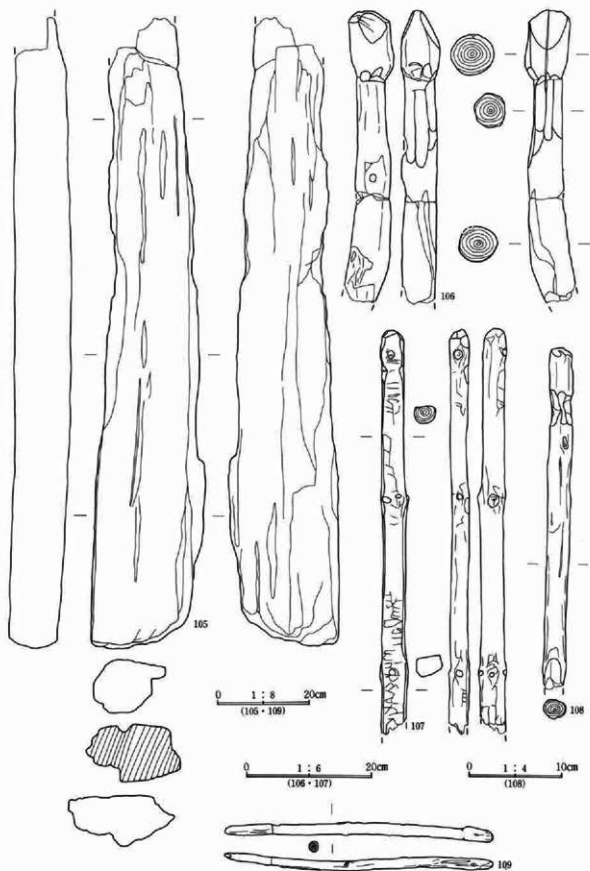
第258图 3区出土木製品 09



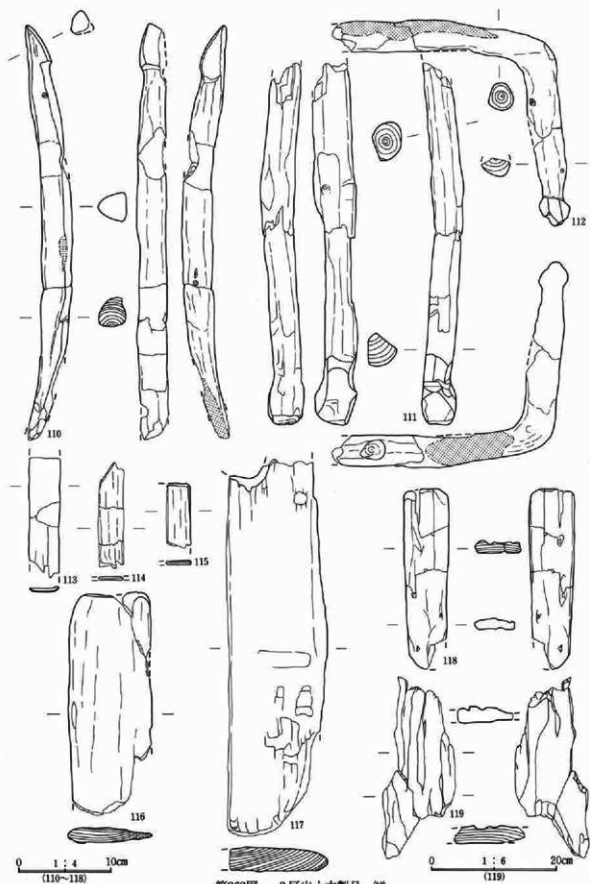
第259图 3区出土木製品 09



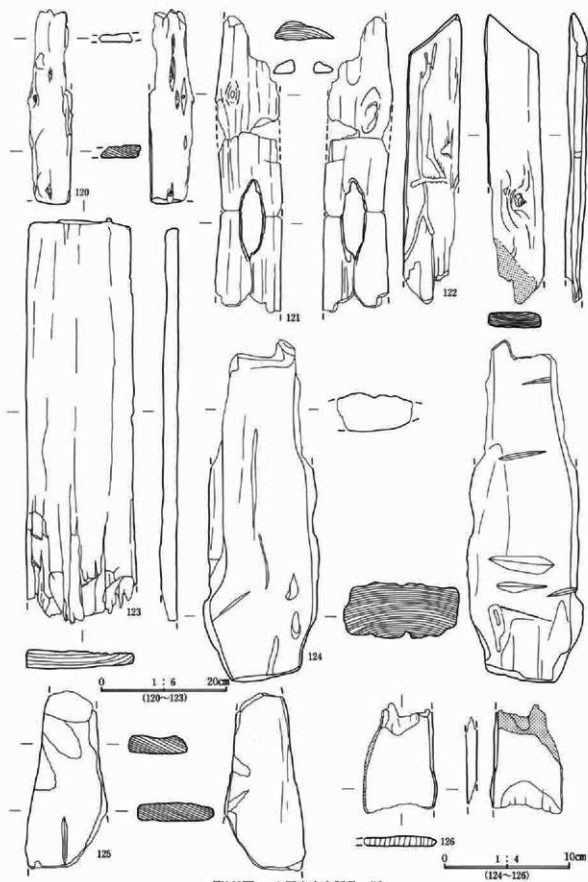
第260图 3区出土木製品 07



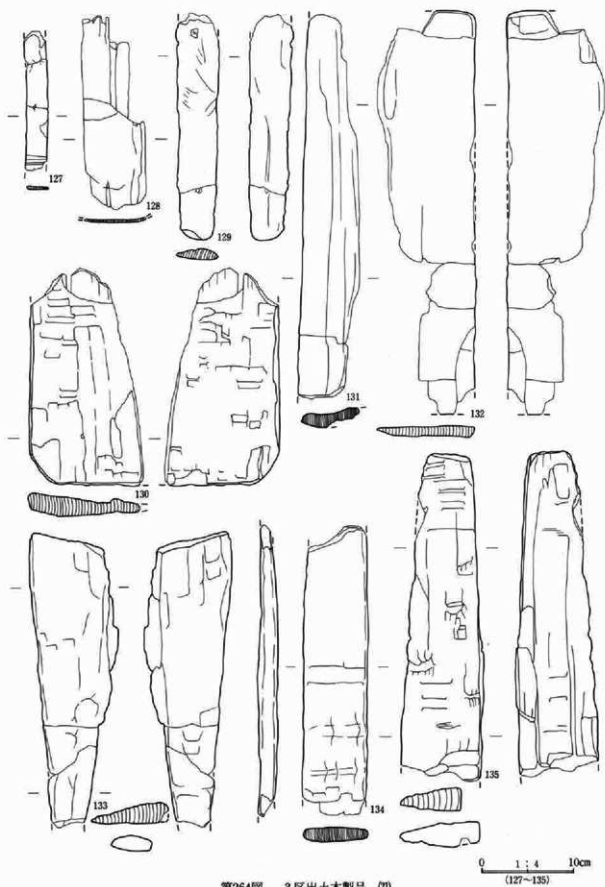
第261图 3区出土木製品 08



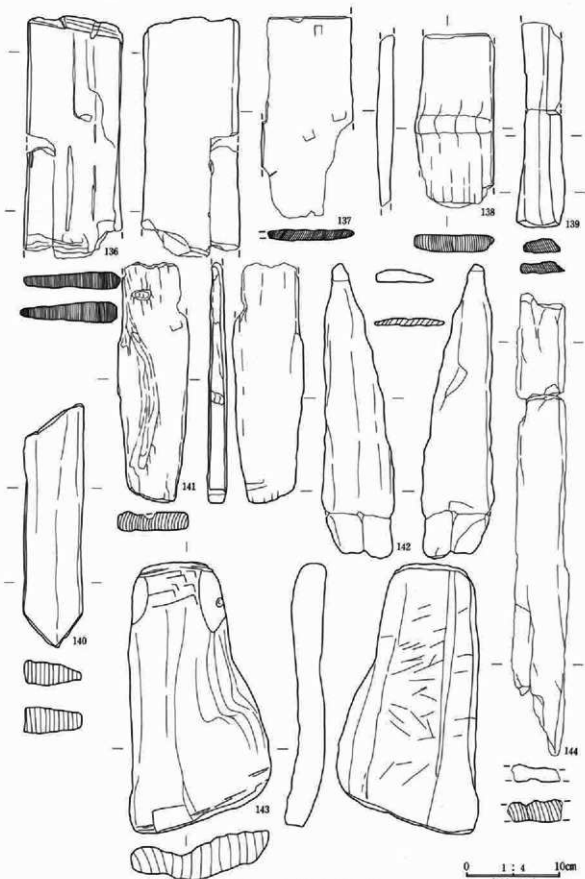
第262图 3区出土木製品 09



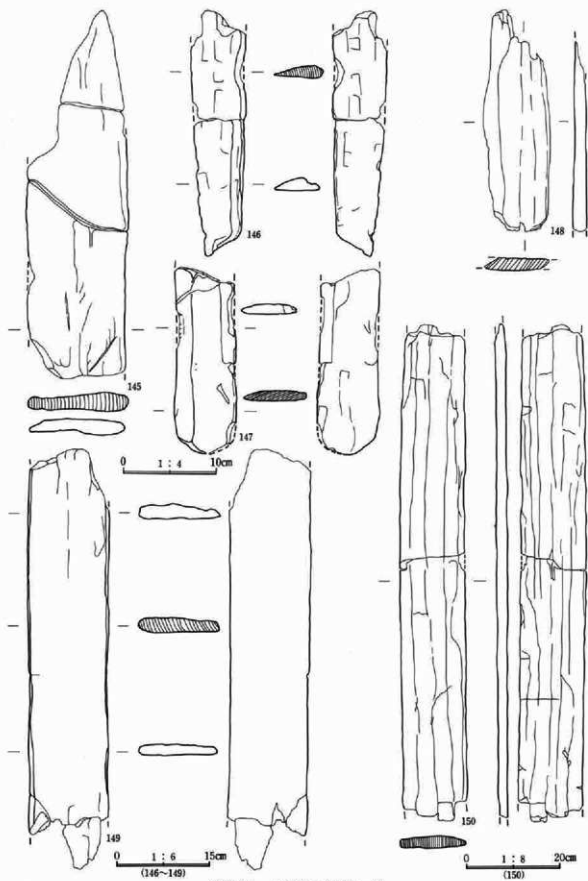
第263图 3区出土木製品 00



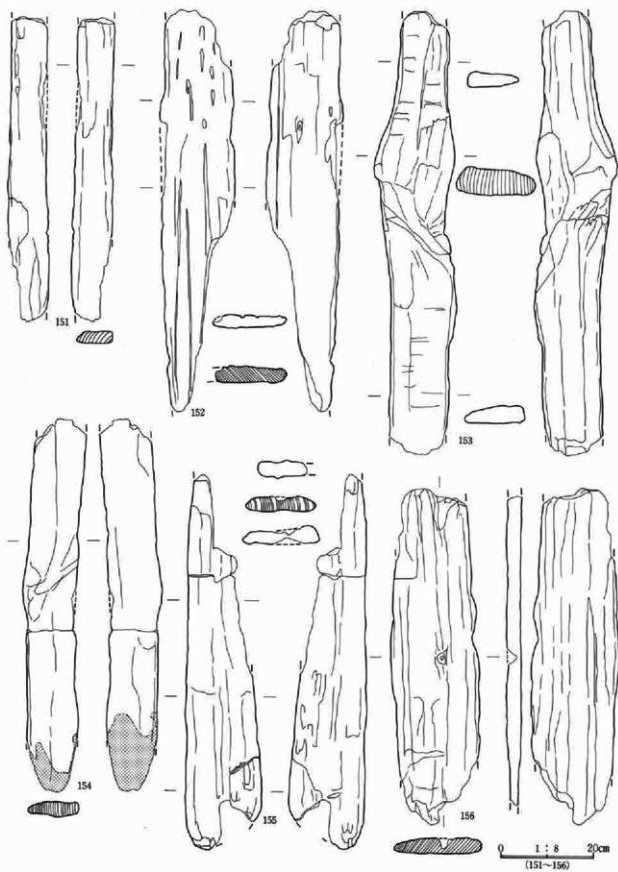
第264图 3区出土木製品 (2)



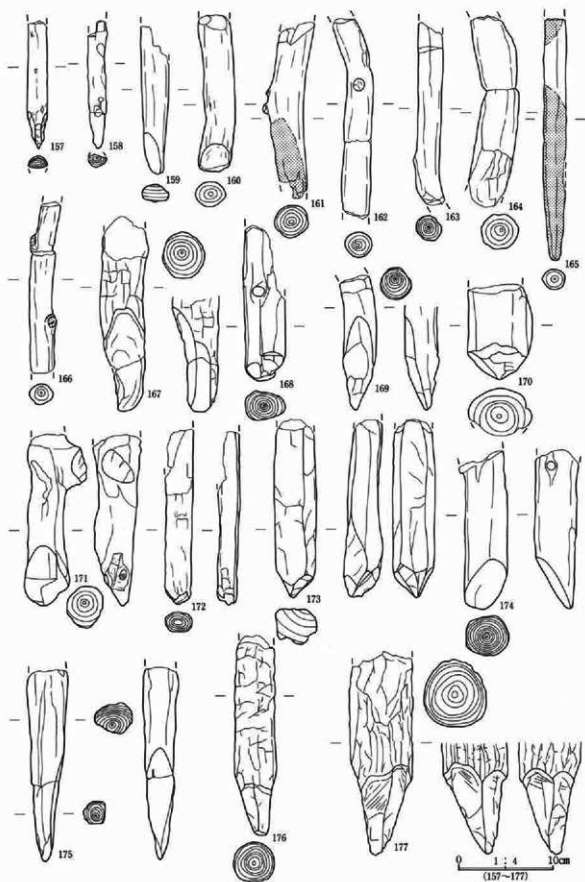
第265图 3区出土木製品 (2)



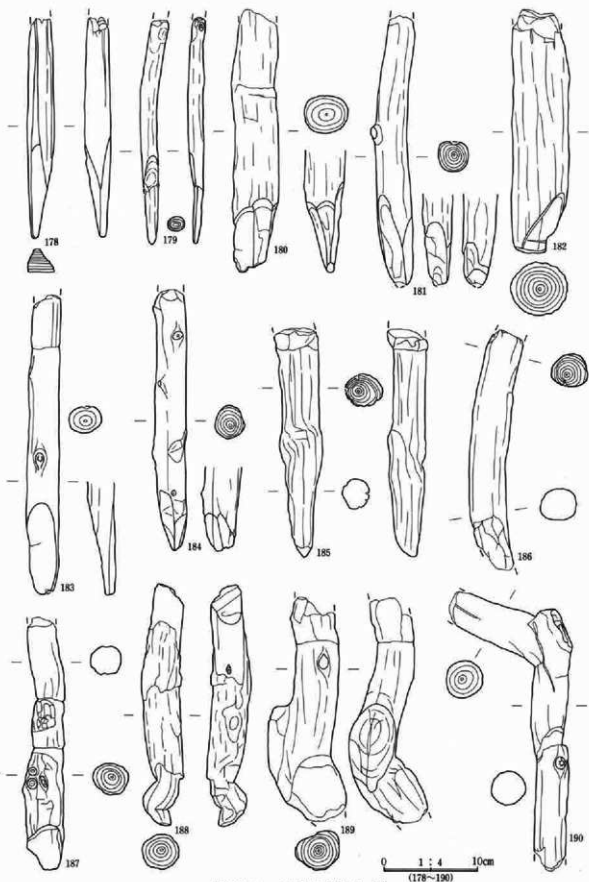
第266图 3区出土木製品 四



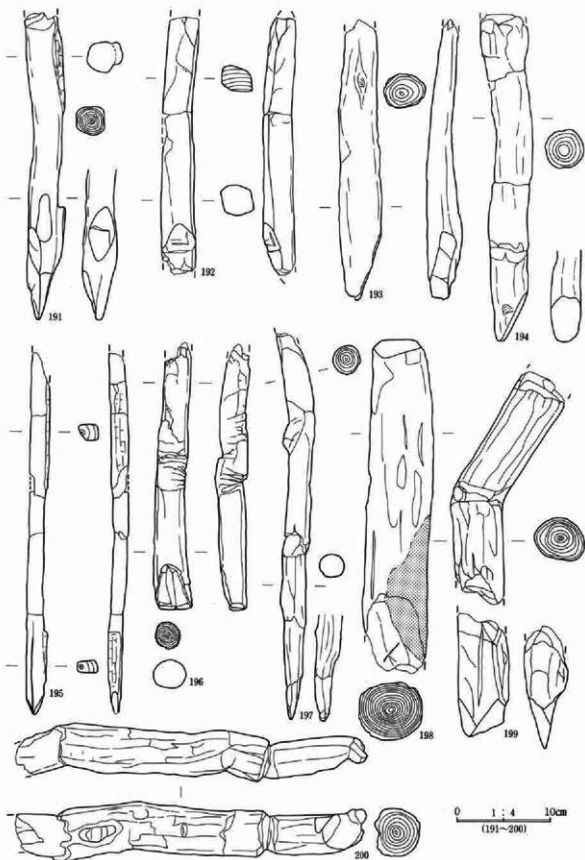
第267图 3区出土木製品 ④



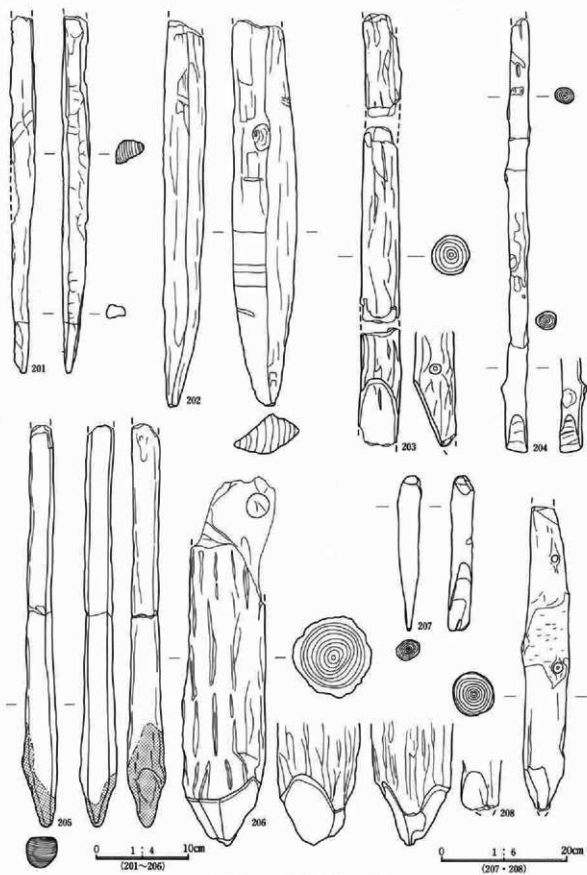
第268图 3区出土木製品 (四)



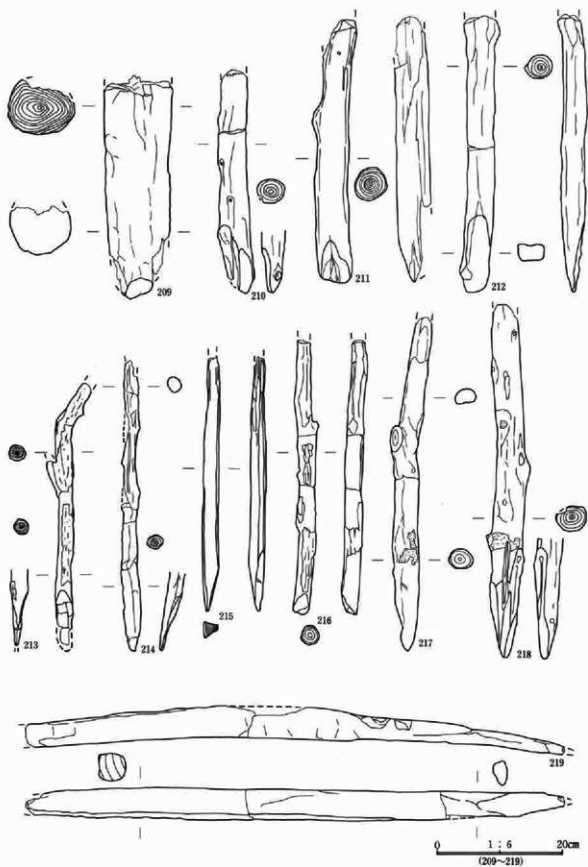
第269图 3区出土木製品 ⑤



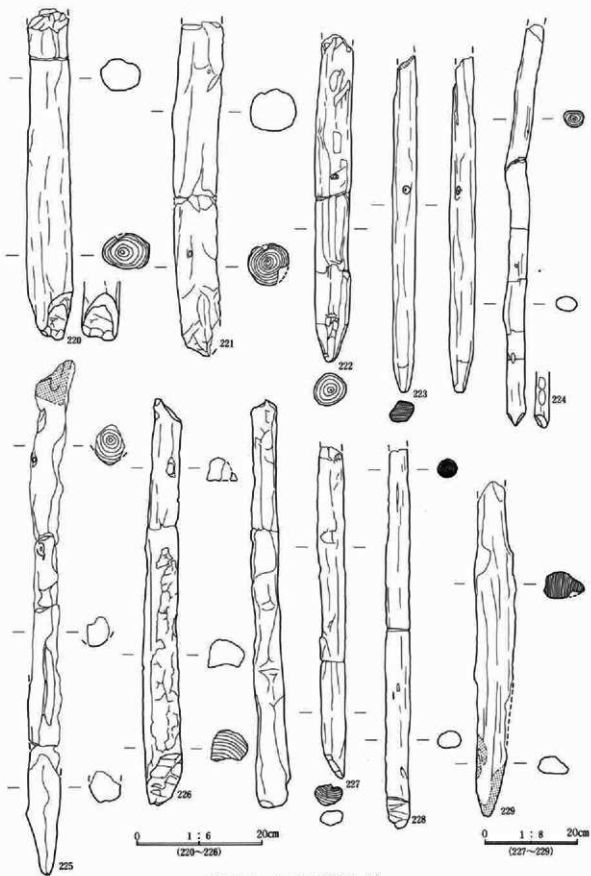
第270图 3区出土木製品 ⑦



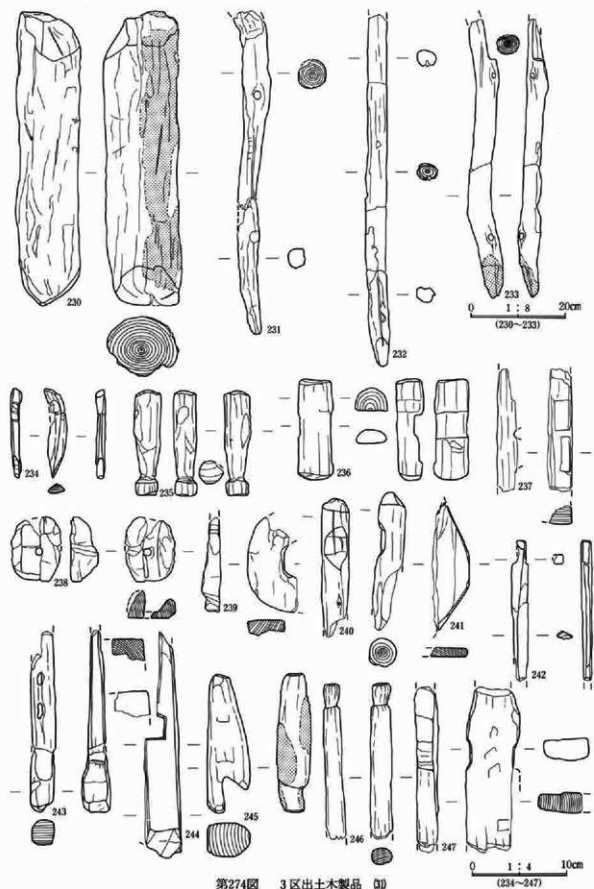
第271图 3区出土木製品 ④



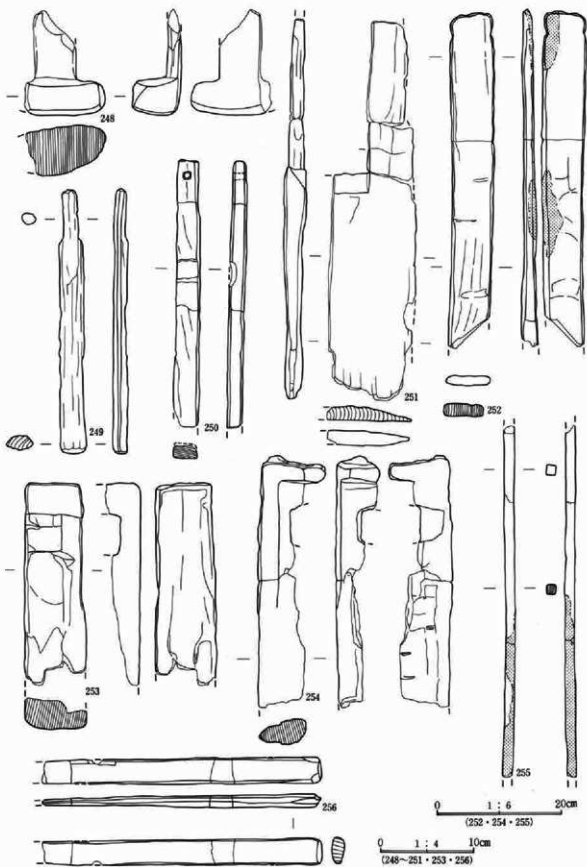
第272图 3区出土木製品 (四)



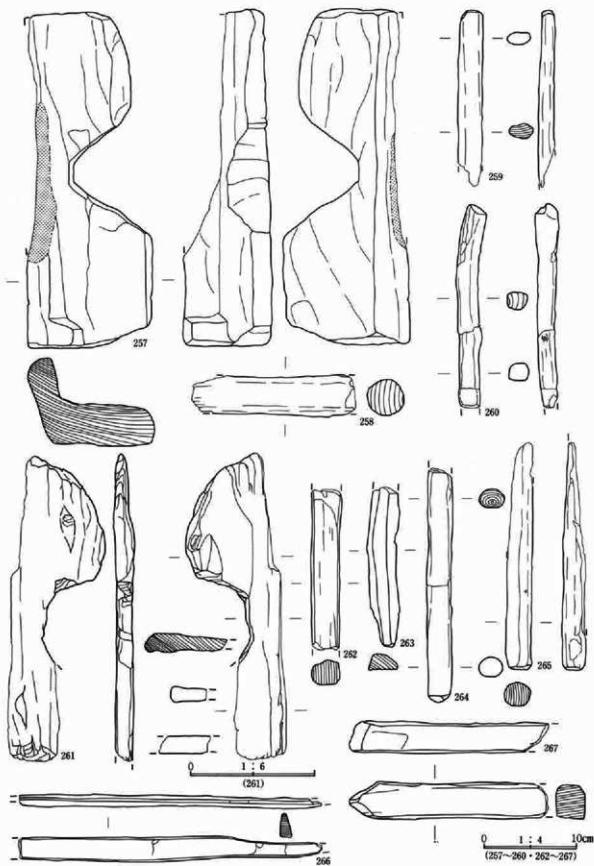
第273图 3区出土木製品 (四)



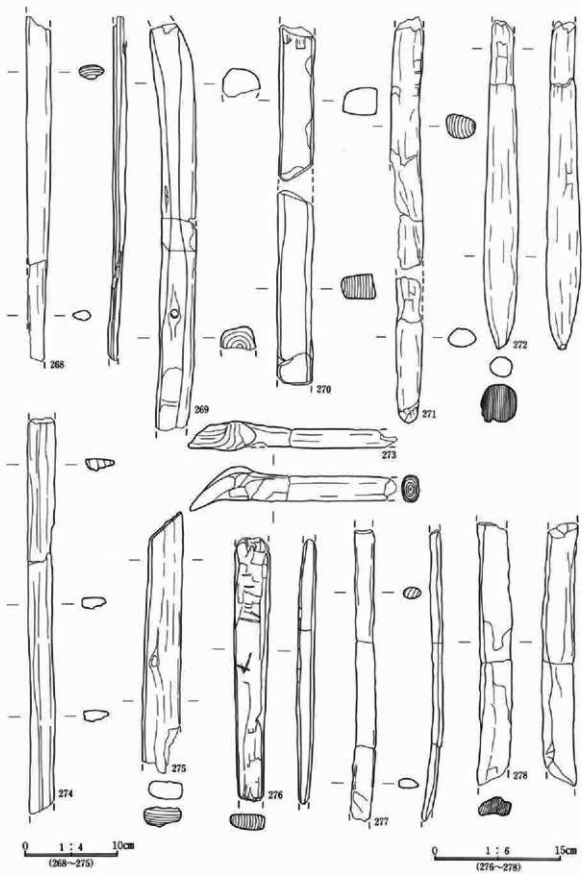
第274图 3区出土木製品 (如)



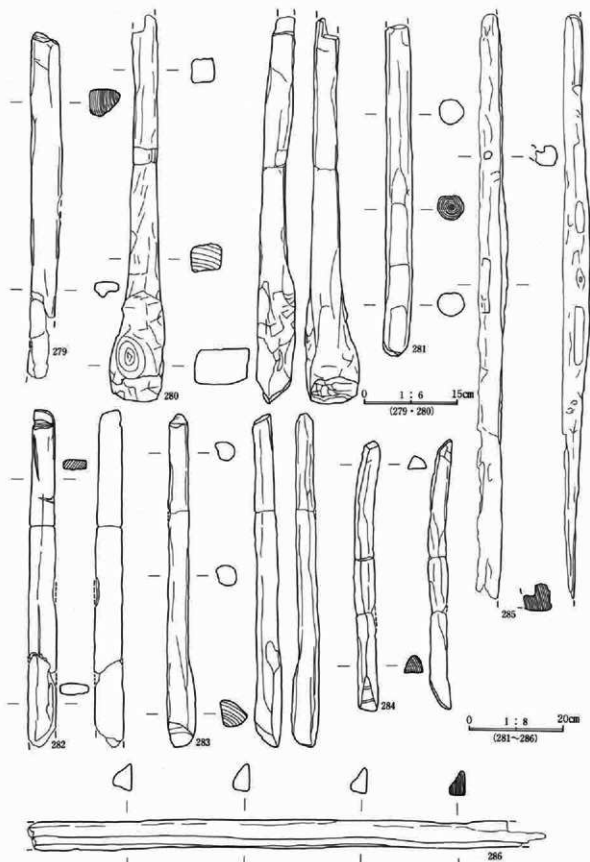
第275图 3区出土木製品 (3)



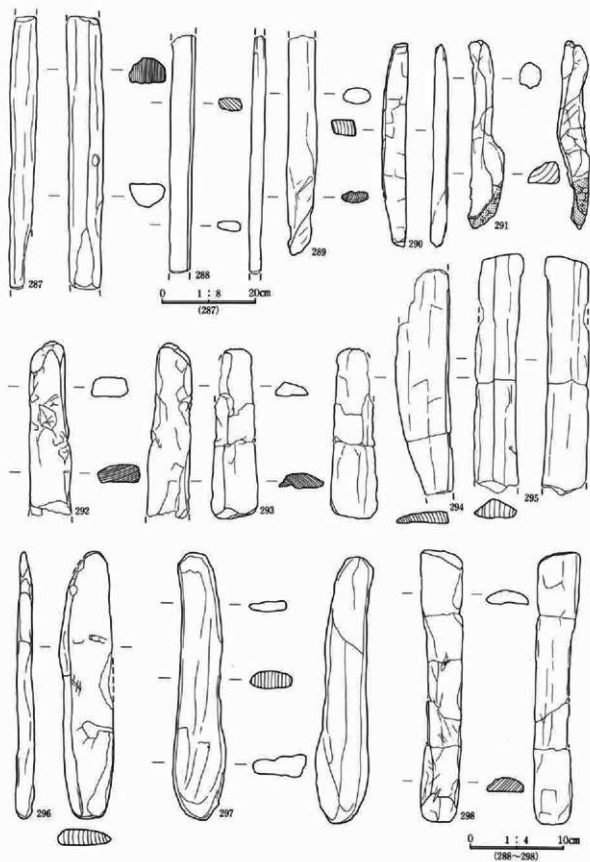
第276图 3区出土木製品 03



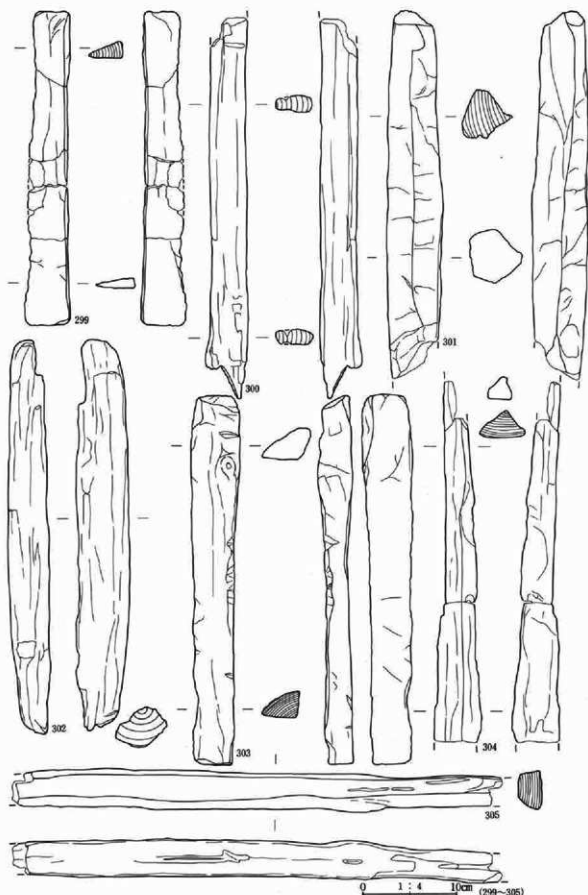
第277图 3区出土木製品 64



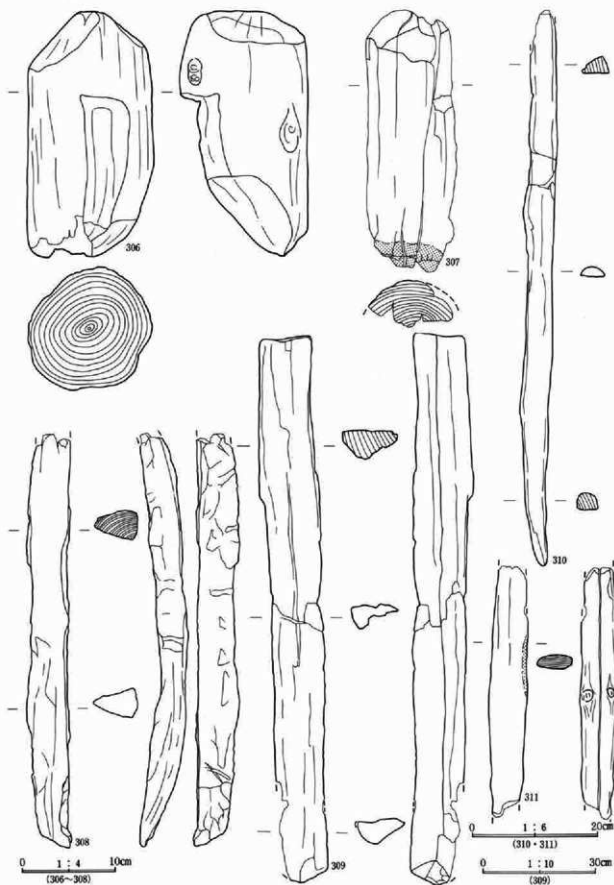
第278图 3区出土木製品 (国)



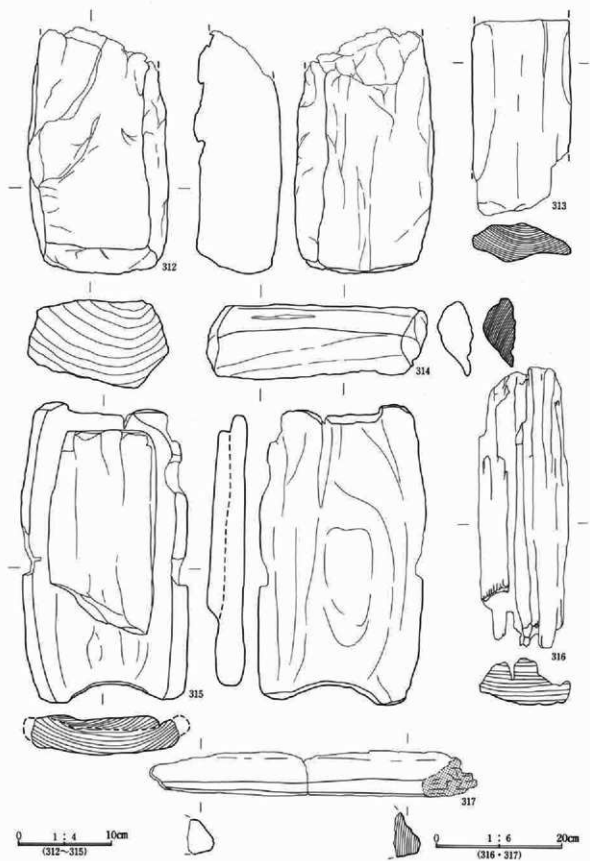
第279图 3区出土木製品 (30)



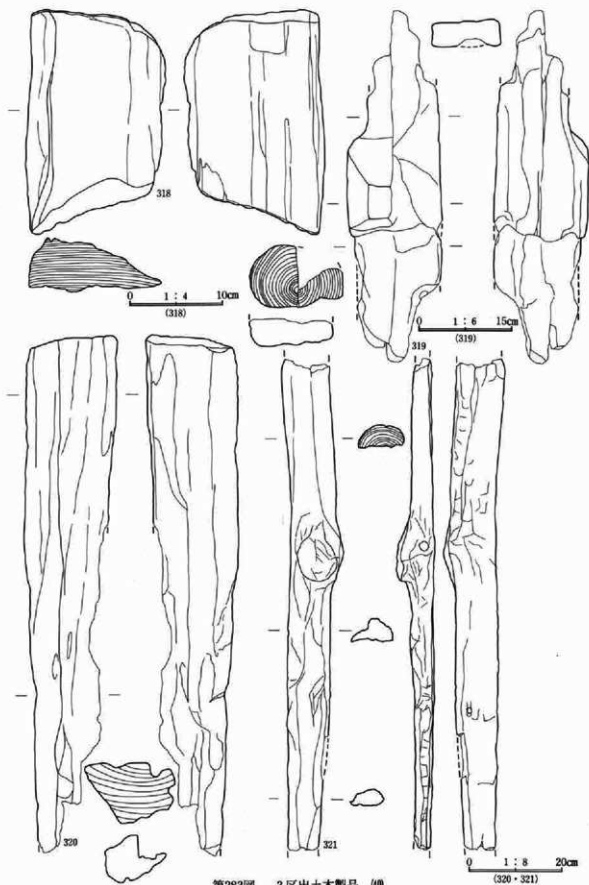
第280图 3区出土木製品 (3)



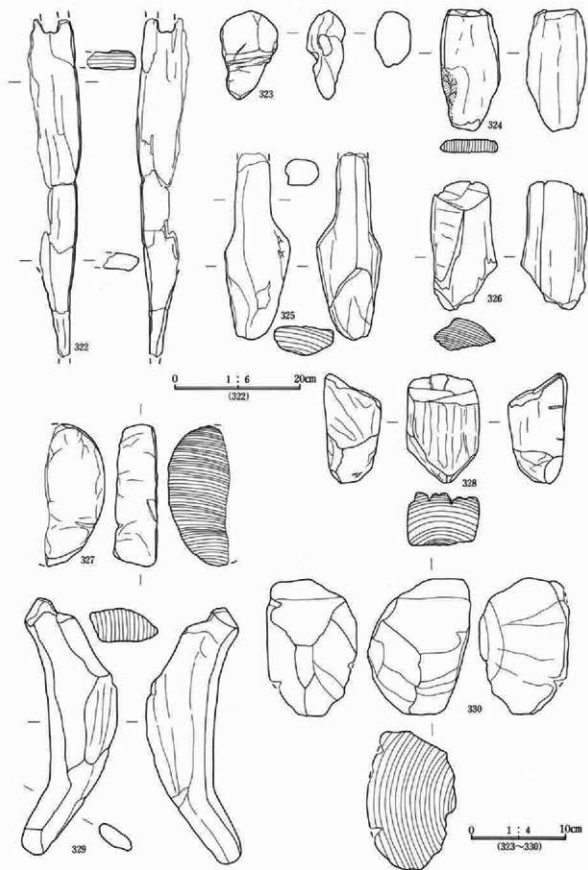
第281图 3区出土木製品 00



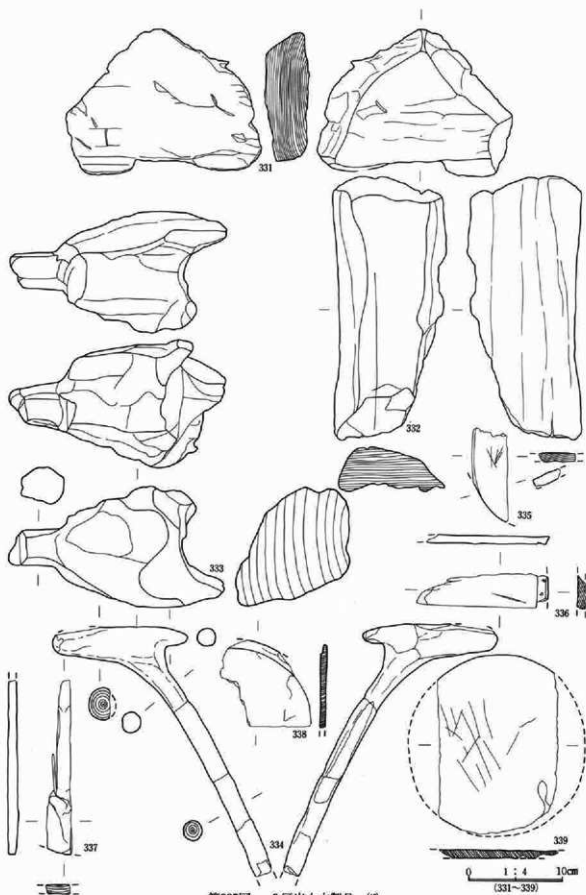
第282图 3区出土木製品 (3)



第283图 3区出土木製品 (40)



第284图 3区出土木製品 40



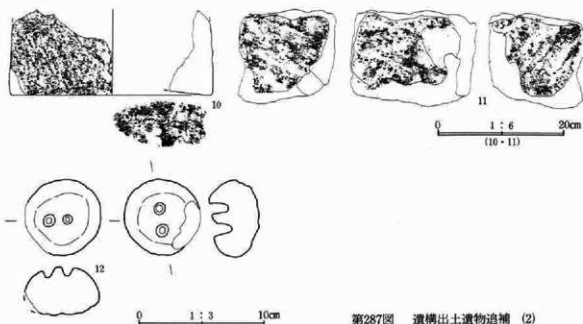
第285图 3区出土木製品 (4)

12. 遺構出土遺物追補 (第286図1～第287図12)

2号井戸からは、榛名軽石製の用途不明石製品(1)が出土している。球形を呈した一部が平坦に擦られている。4号井戸からも擦られた面が多いものの、同様な榛名軽石製品(2)が出土している。4号井戸からは、他にくぼみ石(3、7)や砥石(4、5)、石臼の転用品(8)、不明石製品(11)が出土している。更に、21号井戸と26号井戸からは砥石(9、6)、23号井戸からは下白片(10)が出土している。3区谷地出土のものとして、As-C下から軽石に2カ所穴をあけた製品(12)が出土している。



第286図 遺構出土遺物追補 (1)



第287図 遺構出土遺物追補 (2)

13. 2～4区遺構外出土遺物

2区遺構外出土遺物 (第288図1～第291図62)

灰釉陶器 (第288図1～15、17、18)

1から13は碗、14は碗か皿、15は皿、17は耳皿である。14は高台の断面形が方形を呈し、底部内面にも施釉されている。胎土の特徴から14のみ猿投産の可能性がある。18は壺の口縁部小片で、耳壺であろうか。

須恵器 (第288図16、19～第289図36、37、42)

16は灰釉陶器皿を意識した須恵器である。色調は黒灰色を呈し、胎土も他の須恵器と異なる。23は墨書を有する酸化炭焼成の皿である。19から22、24から31は杯と碗である。19、27は墨書を有し、28、31は酸化炭焼成である。27の杯底部には焼成後の穿孔が行われている。32は小型瓶の底部、30も底部外面回転糸切り無調整の同様な底部であるが、底部内面は使用によって非常に平滑となっている。33から35は内面に螺旋状当て具痕を有する壺片である。36は全形不詳であるが、外面に突帯を巡らす壺である。37は非常に小型の壺である。42は羽釜である。

土製品 (第289図40、41)

40は時期、用途ともに不詳の土製品で、つまみ状に引き出した部分に小孔をあける。41は中央に孔を有する円柱状土製品で、胎土と焼成の特徴が古墳時代後期の土師器に近い。用途不明。

土師器 (第289図38、39、43、44)

39は緻密な胎土を有し、高温焼成された丸底壺である。43、44は壺。

瓦 (第289図45～第290図47)

3点ともに焼き締まりのない酸化炭焼成の古代瓦である。器厚は厚い。

埴輪 (第290図48～第291図59)

すべて円筒埴輪で、57が最も遺存が良好である。2段目と3段目に円形透かしが1カ所ずつ残り、唯一横刷毛を施している。57は345号土坑出土であるが、堆積土から古代の土坑と判断されたため、遺構外として掲載した。59は口縁部である。

石製品 (第292図60～62)

60は片岩質の棒状礫両側面に3カ所小さく抉りを入れている。表土出土で時期不詳。61は石製巡方小片、62は滑石製白玉である。

3区遺構外出土遺物

灰軸陶器 (第292図1～第293図第293図22)

1から15は椀皿である。軸はすべて浸け掛けで東濃産である。17から20は瓶の底部片、22は口縁部と同一個体と考えられる体部片である。21は小瓶の体部片。

須恵器 (第293図23～32)

23は葉壺形短頸壺の蓋、24から28、32は還元炎焼成の杯である。26、27には墨書があり、26のような墨書は近接した二之宮千足遺跡から複数出土している。29、30は付け高台を有する椀、31は酸化炎焼成の皿状を呈する製品である。いわゆる耳皿のような口縁部の湾曲は認められない。

土師器 (第293図33～38)

33は時期不詳の土師蓋である。天井部には1カ所小孔が穿たれている。34から37は杯、38は小型壺である。

瓦 (第293図40～第294図43)

40、41はやや薄く、酸化炎焼成で胎土に白色粘土粒を含む。この白色粘土粒は本遺跡出土の中世瓦にも認められるが、41がAs-B下出土であることから古代瓦である。42、43は器厚の厚い還元気味焼成の瓦である。時期は古代。

土製品 (第294図44～48)

44から48の5点はすべて土師質の土甕である。48のみ円柱状を呈する。

石製品 (第294図50～52)

50は球状礫、51は玉髓の破片で用途不明。52は小型の砥石である。

その他 (第294図49)

49は椀状滓で上面に炭化物が挟まっている。

4区遺構外出土遺物

須恵器 (第295図1～3)

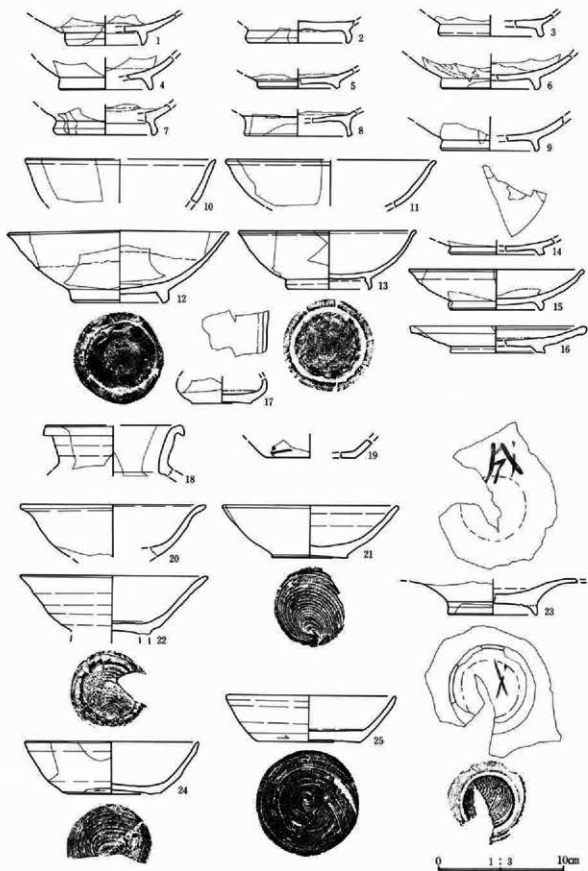
1から3すべて杯、椀である。3は小片のため径は不正確である。

瓦 (第295図4～6)

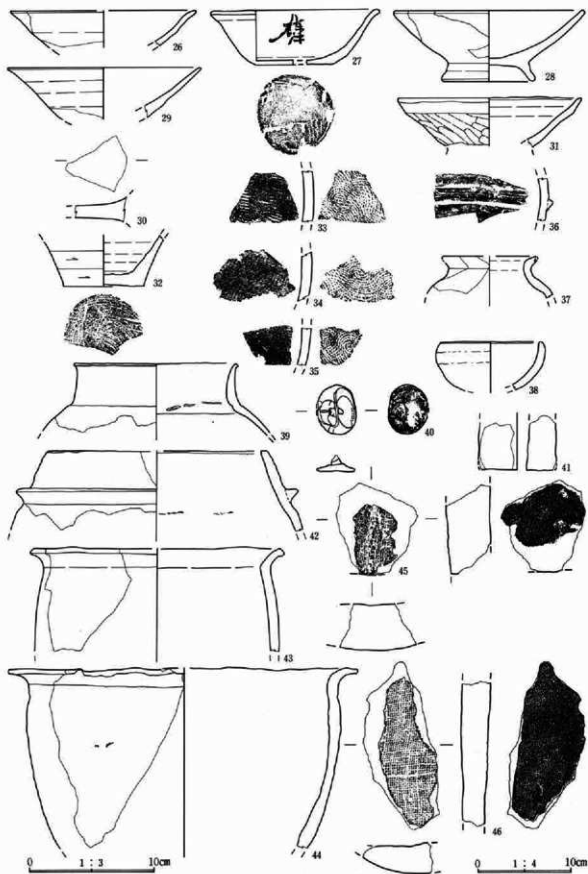
3点ともに器厚の厚い古代瓦。4、5は酸化炎焼成、6は還元炎焼成である。ともに焼き締まりはない。

石製品 (第295図7)

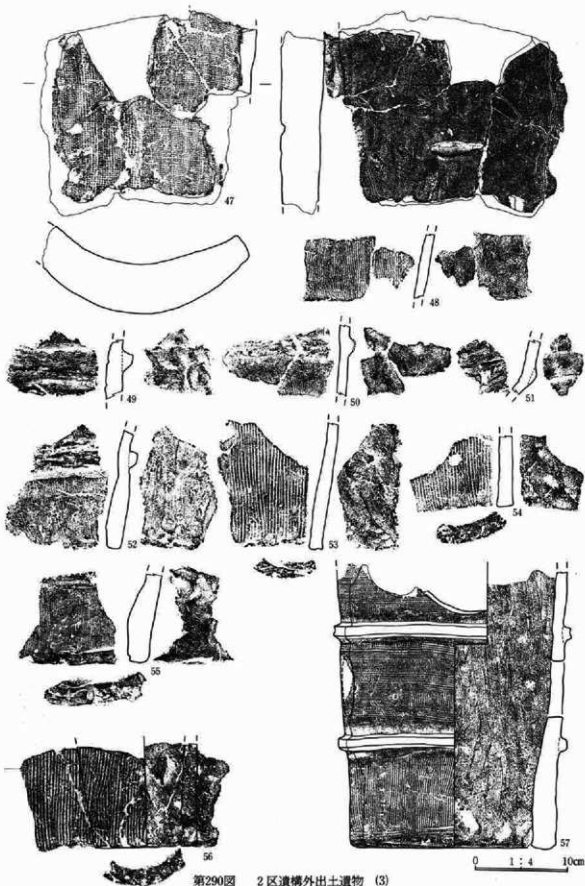
河原石の一部を打ち欠いたもので用途不明。



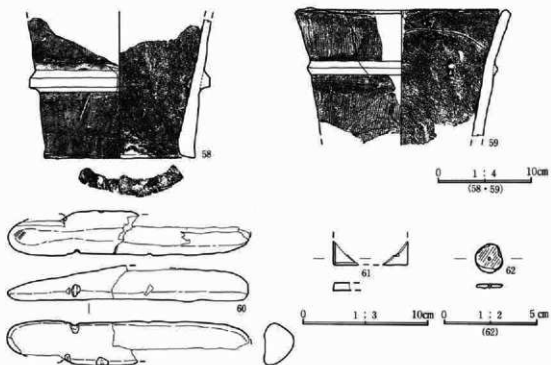
第288图 2区遺構外出土遺物 (1)



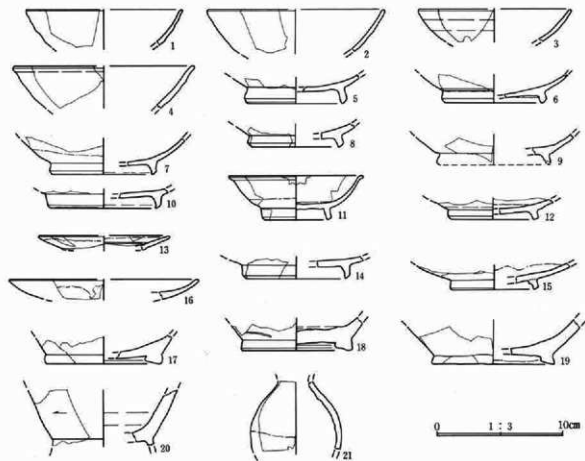
第289图 2区遺構外出土遺物(2)



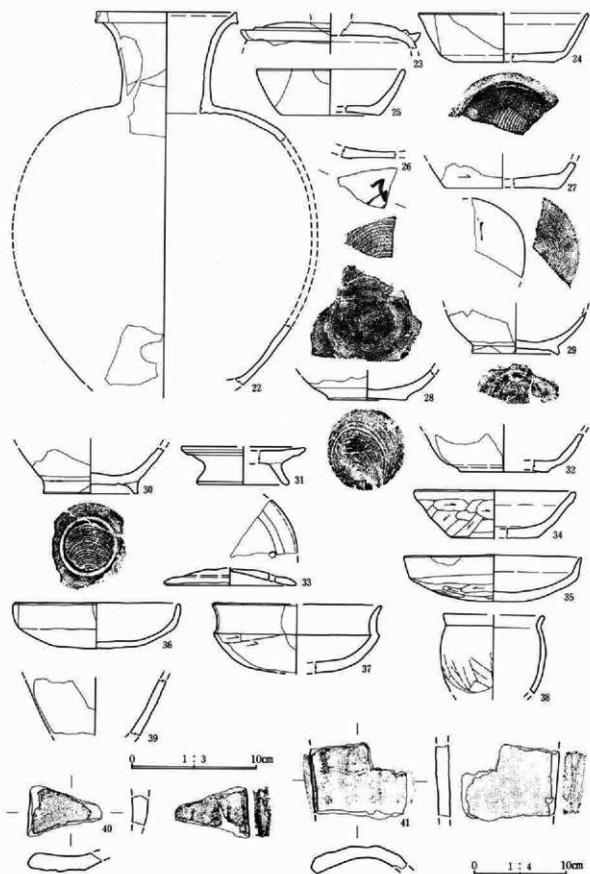
第290图 2区遺構外出土遺物 (3)



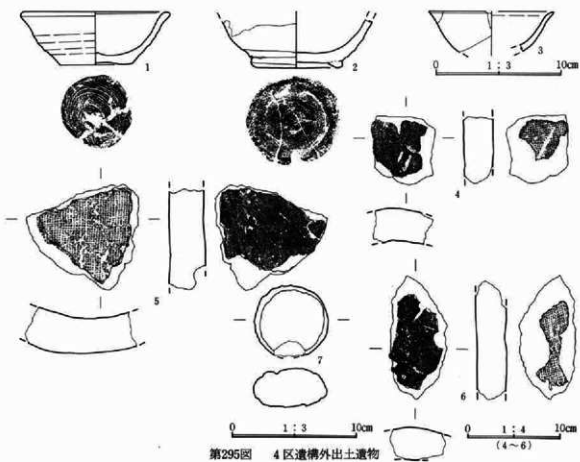
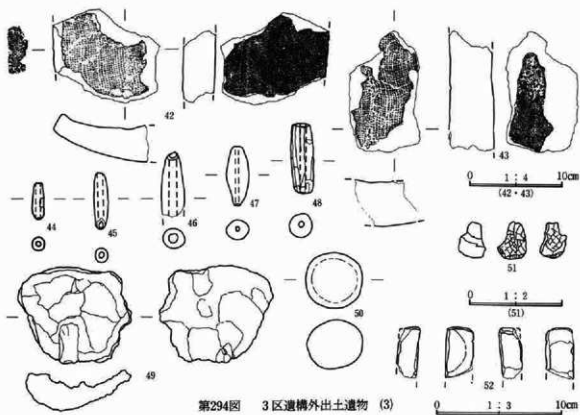
第291图 2区遺構外出土遺物 (4)



第292图 3区遺構外出土遺物 (1)



第293图 3区遺構外出土遺物 (2)



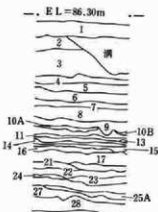
14. 5区基本土層 (第296図)

5区は本遺跡の東端に位置し、その東端には小河川が存在する。この小河川は降雨があると急激に水量が増加する。この特徴は現在のみのもことではなく、Hr-FA上に7枚の洪水に伴うと考えられるシルト層(実際には細砂層)が堆積し、河川に近い東側ではAs-B下において砂で埋没した溝群が確認されている。したがって、流水の少ない3区と比較すると黒土は薄く、全体に砂質を帯びた堆積土である。5区において洪水層以外の鍵層としてAs-BとHr-FAが認められるが、後者の堆積は薄く部分的であるため遺構を確認することは不可能であった。また、As-Cの純層は確認されなかった。

15. 5区第1氾濫層下水田

遺構 (第297図)

5区南東側で確認されたが、畦の残りは悪く痕跡程度である。確認面積が狭いこともあって水田区画が判明するのは2枚のみである。このうちの1枚には水口があり、水が流下する際に生じたと推定されるくぼみも確認された。このくぼみの位置は、等高線からもわかるように高低差とも矛盾しない。畦と等高線の走行は湾曲しており、水田区画の東端付近を確認したと推定される。時期を示す遺物の出土がなく、As-B降下(1108年)以降という以外時期を示す根拠はない。



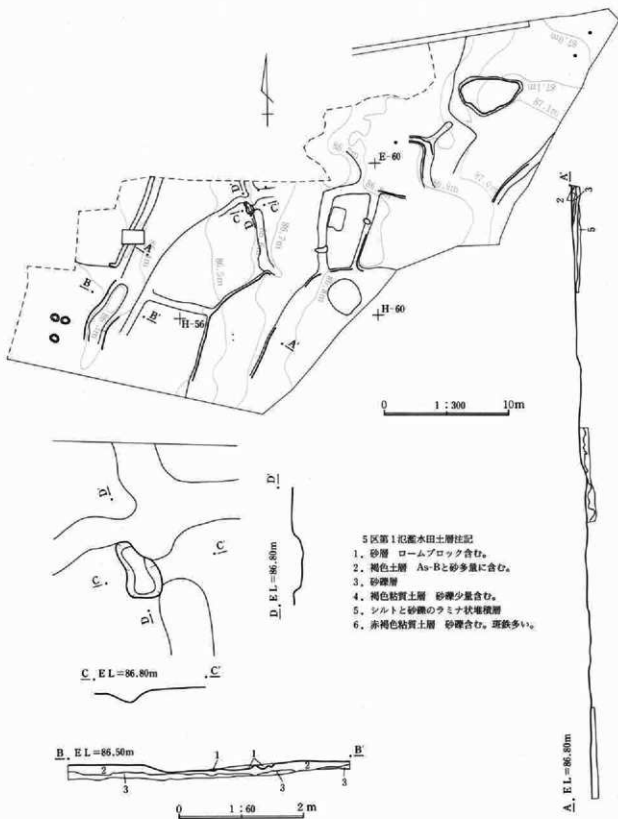
5区As-B下水田土層記 (花粉分析、ブランド・オパール分析 A・B地点)

1. 黒灰褐色土層 圃場整備後耕作土。
2. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。腐鉄多い。
3. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。腐鉄多い。ローム粒多く含む。
4. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。腐鉄非常に多い。ローム粒多く含む。
5. 灰黒褐色土層 少量の斑鉄とマンガン斑が認められる。第1氾濫層含む。
6. 灰黒褐色土層 砂、不明軽石粒、マンガン斑含む。第1氾濫水田耕作土。

7. 灰黒褐色土層 6層に比べて砂、軽石少ない。
8. 灰黒褐色土層 As-B少量含む。
9. As-B層 上面にピンクアッシュが認められる。
- 10a. 灰黒色粘質土層 As-B下水田耕作土。
- 10b. 10a層と1層の混土層
11. 褐灰色粘質土層
12. 灰白色細砂層 第2氾濫層
13. 黒灰褐色粘質土層 第2氾濫層下水田耕作土?
14. 褐灰色土層 15層少量含む。
15. 灰白色シルト層 第3氾濫層。下部に砂がブロック状に入る。
16. 褐灰色粘質土層 第3氾濫層下水田耕作土。
17. 黒灰色粘質土層 第4氾濫層下水田耕作土。他の部分では、この上に灰白色シルト層(第4氾濫層)が認められる。
18. 黒灰色粘質土層 19層多量に含む。(第5氾濫水田耕作土)
19. 黄灰白色砂層 粗砂が主体でシルトと5~15mmの円礫含む。(第6氾濫層)
20. 灰褐色粘質土層 第6氾濫水田耕作土。
21. 灰白色シルト層 第7氾濫層
- 21a. 灰白色シルトと粗砂のラミナ状堆積層 黄灰白色軽石含む。
22. 黒褐色粘質土層 第7氾濫層下水田耕作土。
23. 灰黒色粘質土層 Hr-FA含む。
24. Hr-FA層
25. 黒色粘質土層 As-C含む。
- 25a. As-C層 黒色粘質土少量含む。
26. 灰黒色風土層
27. 灰白色シルト層
28. 砂礫層

0 1 : 40 1m

第296図 5区基本土層



第297図 5区第1灌溉渠下水田、水口実測図

遺物 (第298図)

灰釉陶器 2点 (1、2) と須恵器碗 2点 (3、4) が出土しているが、水田の時期を示すものではない。なお、墨書の認められる 1 の底部周縁は、意図的に打ち欠かれていると考えられる。

16. 5区As-B下水田

遺構 (付図9、第299図)

5区は小河川によって南北方向に形成された沖積低地を東西方向に貫いており、この河川に沿って形成された水田を横断するように調査区が設定されている。水田は5区全域で確認され、台地に接する西側は溝と溝に沿った畦によって台地と明瞭に区分される。しかし、河川に近い東側は、遺存が悪く痕跡程度の確認にとどまった。

この沖積低地の幅は狭く、確認された水田区画の形状と面積は一定していない。しかし、等高線の間隔が広く屈曲していない北側は、東西に長い整った長方形を呈している。水田の中央、すなわち低地の最も低い部分には3条の溝が確認されたが、西側の等高線に沿った溝は畦に挟まれて走行しており水田の排水溝と考えられる。他の溝はAs-B下の確認であるが、水田耕作土が薄く、水田との前後関係は不詳である。遺物はすべて耕作土中出土であり、図示した遺物が水田の時期を示すとは限らない。

遺物

緑釉陶器 (第302図1、2)

1は焼成が軟質の碗体部下位片、2は焼成が硬質で高台内無軸である。釉はやや灰色味を帯びる。

須恵器 (第302図3～8)

7は8世紀中頃から後半の杯で、他の土器とは時期が異なる。3から6は酸化炎焼成の碗、8は還元炎焼成の碗である。6の口縁部内外面には油煙が付着している。

土器 (第302図9)

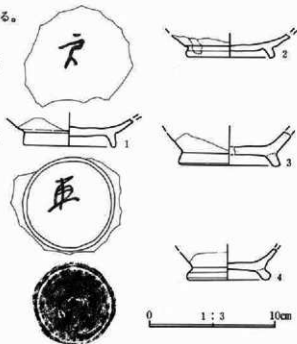
器壁の厚くなった段階の「コ」の字状口縁甕である。

瓦 (第302図12)

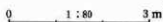
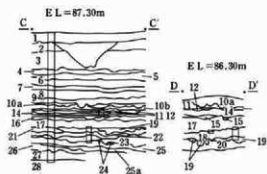
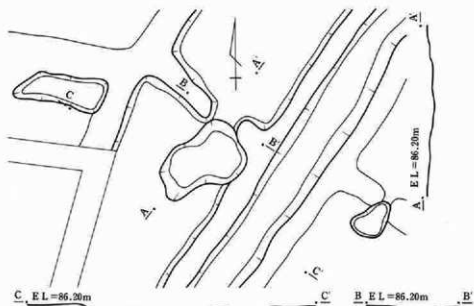
夾雑物は少ないが、粗い胎土を有する。還元炎焼成で焼き締まりはない。割れ口の一部は磨滅する。

石製品 (第302図10、11)

10は平坦面に擦り痕のある河原石である。11は著名経石の一部に溝状の刃物痕が認められる。

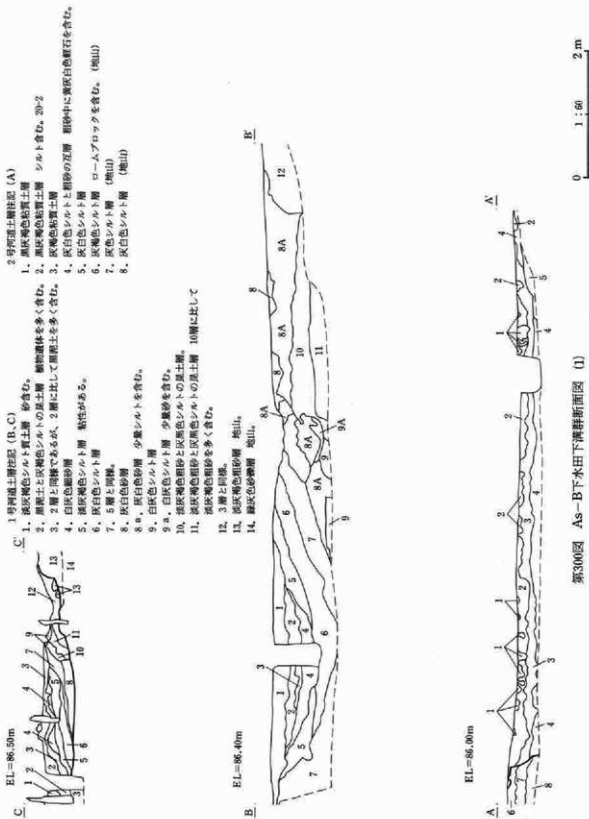


第298図 5区第1氾濫層下水田出土遺物



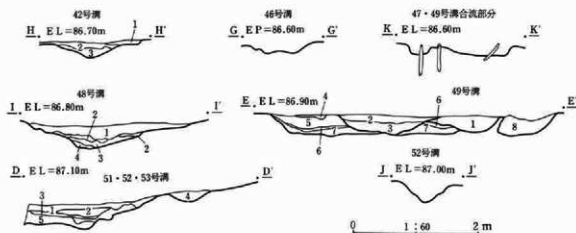
第299図 5区As-B下水田エレベーション、水口実測図

A, EL=86.60m



5区As-B下水田土層注記 (花粉分析、プラント・オパール分析
A・B地点)

1. 黒灰褐色土層 圃場整備後耕作土。
2. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。斑鉄多い。
3. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。斑鉄多い。ローム粒多く含む。
4. 灰褐色土層 砂、安山岩粒含む。斑鉄非常に多い。ローム粒多く含む。
5. 灰黒褐色土層 少量の斑鉄とマンガン斑が認められる。第1泥炭層含む。
6. 灰黒褐色土層 砂、不明軽石粒、マンガン斑含む。第1泥炭水田耕作土。
7. 灰黒褐色土層 6層に比して砂、軽石少ない。
8. 灰黒褐色土層 As-B少量含む。
9. As-B層 上面にピンクアッシュが認められる。
- 10a. 灰黒色粘質土層 As-B下水田耕作土。
- 10b. 10a層と1層の混土層
11. 褐色粘質土層
12. 灰白色細砂層 第2泥炭層
13. 黒灰褐色粘質土層 第2泥炭層下水田耕作土?
14. 褐色土層 15層少量含む。
15. 灰白色シルト層 第3泥炭層。下部に砂がブロック状に入る。
16. 褐色粘質土層 第3泥炭層下水田耕作土。
17. 黒灰色粘質土層 第4泥炭層下水田耕作土。他の部分では、この上に灰白色シルト層(第4泥炭層)が認められる。
18. 黒灰色粘質土層 19層多量を含む。(第5泥炭水田耕作土)
19. 黄灰白色砂層 粗砂が主体でシルトと5~15mmの円礫F含む。(第6泥炭層)
20. 灰褐色粘質土層 第6泥炭水田耕作土。
21. 灰白色シルト層 第7泥炭層
- 21a. 灰白色シルトと粗砂のラミナ状堆積層 黄灰白色軽石含む。
22. 黒褐色粘質土層 第7泥炭層下水田耕作土。
23. 灰黒色粘質土層 Hr-FA含む。
24. Hr-FA層
25. 黒色粘質土層 As-C含む。
- 25a. As-C層 黒色粘質土少量含む。
26. 灰黒色混土層
27. 灰白色シルト層
28. 砂礫層



42号溝土層注記

1. 円礫層 直径5~10mm。
2. 砂層 ラミナ堆積。
3. 円礫層 直径5~10mm。

48号溝土層注記

1. 砂礫とシルトの互層
2. 灰白色シルト層
3. 砂礫層 粒径細かい。
4. 灰白色シルト層 砂礫含む。

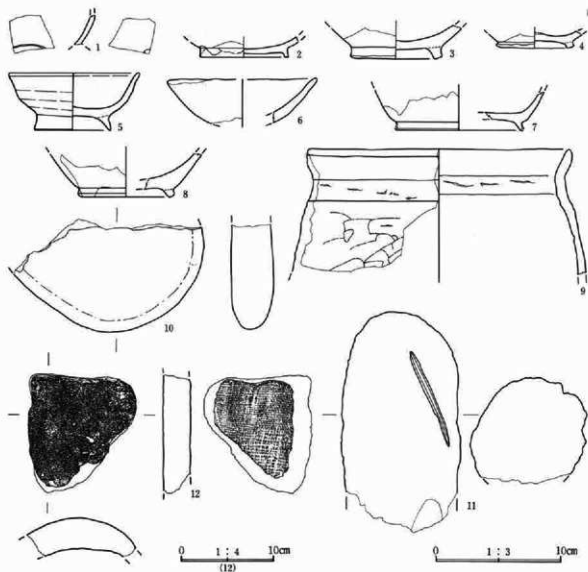
49号溝土層注記

1. 灰色シルト層 粗砂をブロック状に含む。
2. 細砂礫層 ロームブロック含む。
3. 粗砂層 灰黒色粘質シルトを挟む。
4. 灰黒褐色土層 As-Bブロック含む。
5. 灰色シルト、ローム、粗砂のラミナ状堆積層
6. 灰黒色粘質シルト層
7. 直径20~30mmの円礫層 ロームブロック含む。

51・52・53号溝土層注記

1. 灰黒褐色土層 As-B下水田耕作土。
2. 白灰褐色シルト層
3. 灰黒色粘質シルト層
4. 灰白色シルト灰褐色土のラミナ互層
5. 砂礫層

第301図 5区As-B下溝群(付図)断面図(2)



第302図 5区As-B下溝群出土遺物

17. 5区As-B下水田下溝群

遺構 (付図10、第301図)

5区東側、現河川寄りからは砂を主体とした土で埋没した溝群が確認された。層的にはAs-B下水田より下である。これらはかなりの乱流状態を示しており、人為的な溝は少ないであろう。但し、エレベーションKK' (第301図) に示したように杭が打ち込まれている箇所もある。これらの溝の埋没土中からは、上流から流れてきた遺物が出土しているが、磨滅が少なく近接した場所からの流下であろう。溝群は先に述べたように乱流状態であり、遺物から時期を限定できる状態ではないが、9世紀から10世紀代である。出土遺物の中で注目されるのは第303図21の灰釉陶器多口瓶である。多口瓶は出土例が少なく、埼玉県では高岡院寺で須恵器多口瓶が出土している。高岡院寺は寺院であり、瓦の存在などを考慮すると本遺跡の北側に寺院等の施設が存在した可能性もある。

遺物

緑釉陶器 (第303図3)

焼成が軟質の椀底部片である。全面施釉。

灰釉陶器 (第303図15、19~22)

15、20は椀、19は段皿、22は小瓶の体部片である。21は多口瓶の肩部に位置する口縁である。頸部は屈曲せず立ち上がり、頸部下位はへら削りしている。釉は全体に施釉されている。前者は東漢産、21は狼投産であろう。

須恵器 (第303図2、4~12、14、16~18、23、第304図26)

2は酸化炭焼成の皿である。12酸化炭焼成で内面は黒色、16、18には墨書が認められる。23は壺の頸部、26は酸化炭焼成の羽蓋である。

土師器 (第303図1、13)

1は古墳時代後期の杯である。13は10世紀代の平底杯で、口縁部には油埋が付着している。

瓦 (第304図27~31)

27、30は本遺跡の古代瓦の中では器壁の薄いものである。胎土に目立った違いは認められない。他は器壁の厚い瓦であり、還元炭焼成で焼き締まりはない。

石製品 (第304図32~35)

32は叩打痕を有する河原石、35は溝状の使用痕を有する様名軽石である。33は紡錘車、34は用途不明の玉髓片である。

木製品 (第305図36~47)

36はモミ属の柁目板を素材とした曲物底板である。37~47は杭状木製品であり、38、39、42から44は49号溝(エレベーションKK')に打ち込まれていたものである。39、43、47は樹皮が残っている。樹種は37、40、43、44がクスギ節、38がエノキ属、39、41がクリ、42がヒノキ属、45がカヤ、46がトネリコ属、47がサクラ属である。

18、5区旧河道

遺構 (付図10、第300図)

As-B下水田耕作土下で確認した。河道は5区西側と中央の2カ所であるが、周囲が砂質であることと湧水が激しいため、底部までの完掘は行っていない。出土遺物は1号河道の堆積土中のものである。確認面と出土遺物から推定すると、平安時代の河道と考えられる。

遺物

須恵器 (第306図1~第307図9、13、14、15)

1から3、9は8世紀代の杯であり、4、5、7、8は9世紀代である。6、8、9には墨書が認められ、6と9には同じ記号?が記されている。13は盤の底部片、14は瓶の頸部で右上がりのカキ目が施されている。15は黒灰色に焼き締まった壺である。

土師器 (第307図10~12)

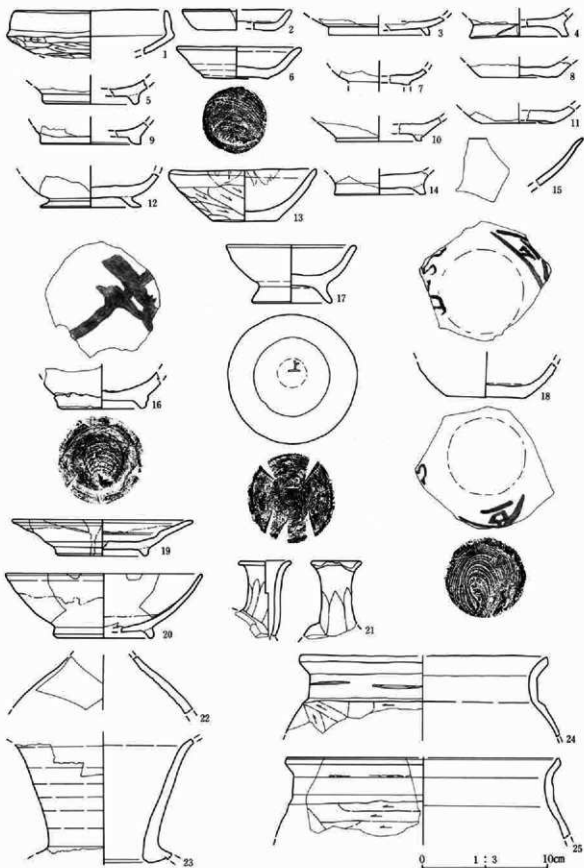
10は底部内面に墨書の施される杯、11、12は器壁が厚くなった段階の壺である。時期的には後者が後出する。

石製品 (第307図16)

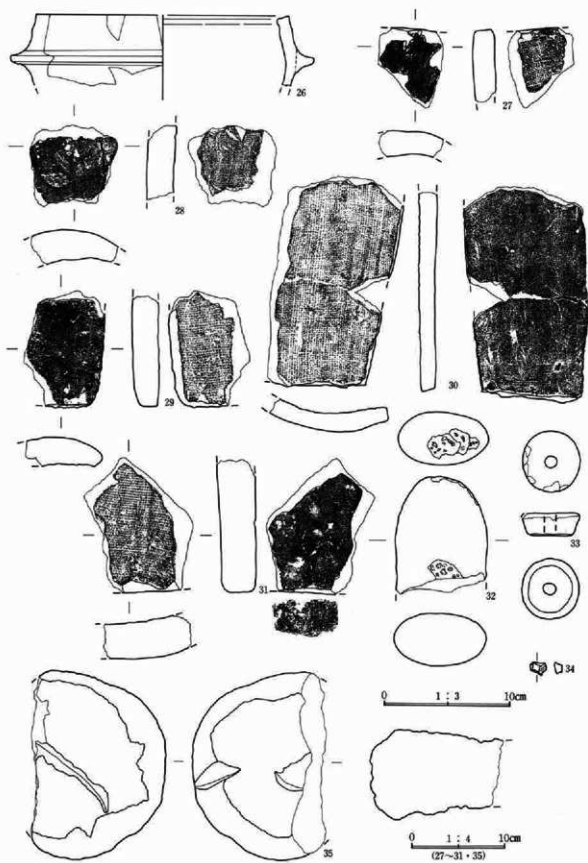
河原石の側面を打ち欠いたものである。

木製品 (第307図17)

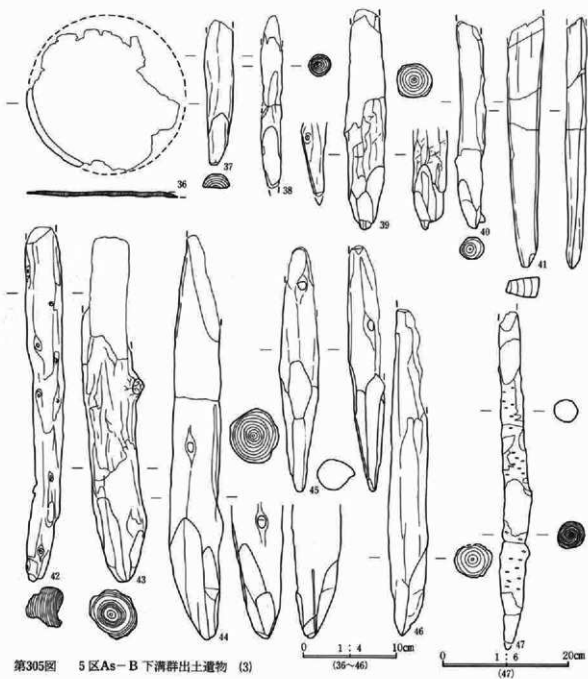
1号旧河道出土。クスギ節の割材を素材として端部を加工している。遺存が悪く加工痕は不明瞭である。

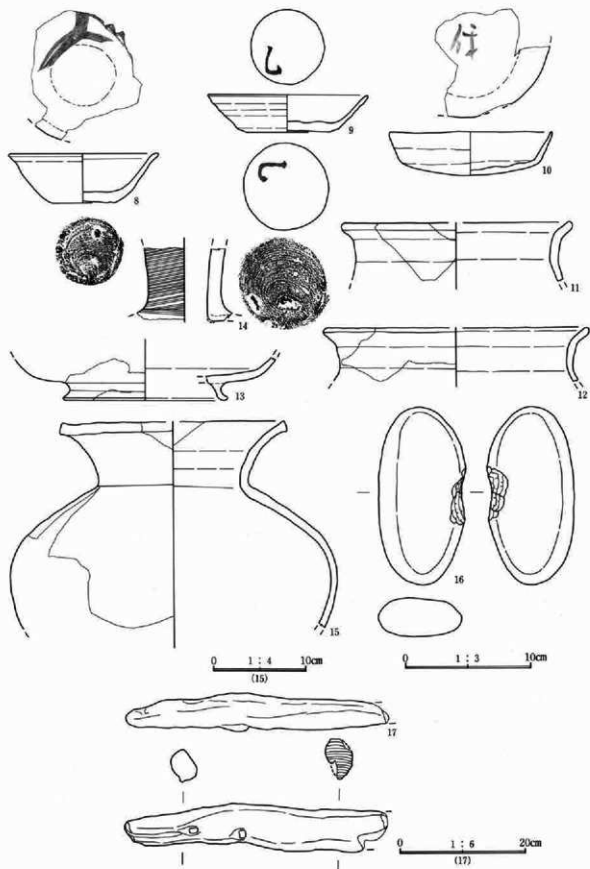


第303图 5区As-B下清群出土遗物 (1)



第304图 5区As-B下海群出土遺物 (2)





第307 5区旧河道出土遺物 (2)

19. 5区第2氾濫層下出土遺物

遺構

As-B下水田より更に下層で氾濫層を確認したが、遺構は確認できなかった。

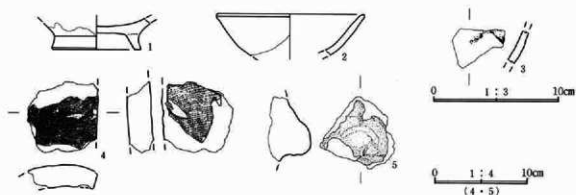
遺物

須恵器 (第308図1~3)

1から3は碗であり、3は墨書が認められる。

瓦 (第308図4、5)

4は酸化炭焼成で焼き締まりのない瓦。5は還元炭焼成で焼き締まりのない鬼瓦小片である。共に本遺跡で多く認められる瓦と同じ焼成、胎土である。時期は平安時代であろう。



第308図 5区第2氾濫層下出土遺物

20. 5区第3氾濫層下水田

遺構 (第309図)

5区西寄りで確認された。遺存状態は悪く、かろうじて痕跡が確認できた状態である。しかし、確認できた畦もごく一部であって区画が判明する箇所はない。この面では、洪水層で埋没した牛と考えられる足跡が多数確認された。この足跡には一定の方向性が認められず、どのような状況下で残されたのか不明である。本水田と上層の水田出土遺物との間に時期差は認められない。

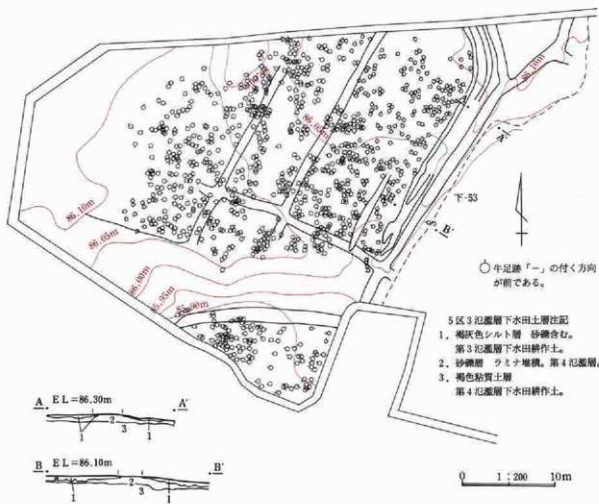
遺物

須恵器 (第310図1)

須恵器碗の底部片である。

土師器 (第310図2)

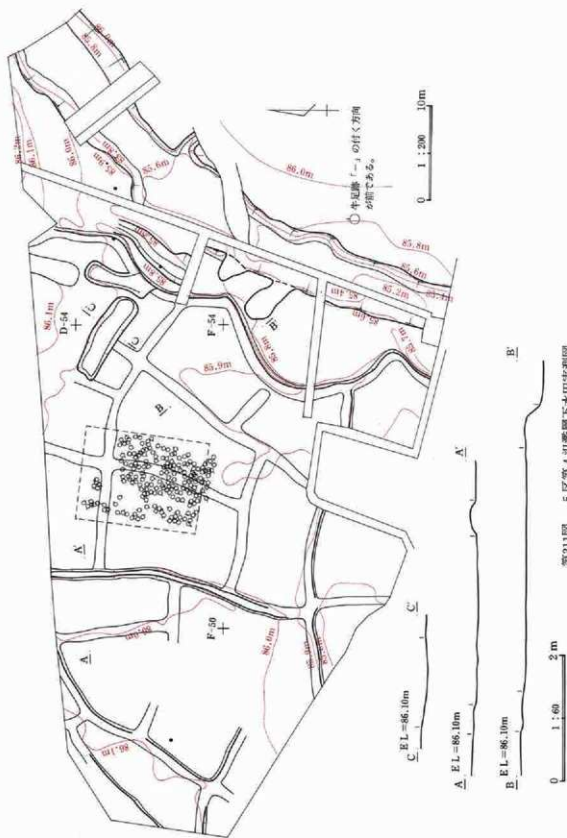
「コ」の字状口縁臺の口縁部から体部上位にかけての破片である。



第309図 5区第3区氾濫層下水田実測図



第310図 5区第3区氾濫層下水田出土遺物



第311図 5区第4把巻層下木田実測図

21. 5区第4氾濫層下水田

遺構 (第311図)

第3氾濫層下水田同様、標高の低い5区西寄りで確認された。本水田も全体に遺存が悪いが、部分的であるが畦の状態が良好な箇所が認められる。5区は沖積低地の幅が狭く、水田区画の形状や面積は一定せず、台地に近い西側は三角形に近い変形区画となっている。東側はエレベーションに現れているように段差となって水田が確認されず、流失したと考えられる。なお、水田内に畦と重複して土坑状のわずかなくぼみがあるが、水田との新旧関係や性格は不明である。本水田においても牛と考えられる足跡が確認されたが、方向性は認められない。

遺物 (第312図)

須恵器 (第312図1、2)

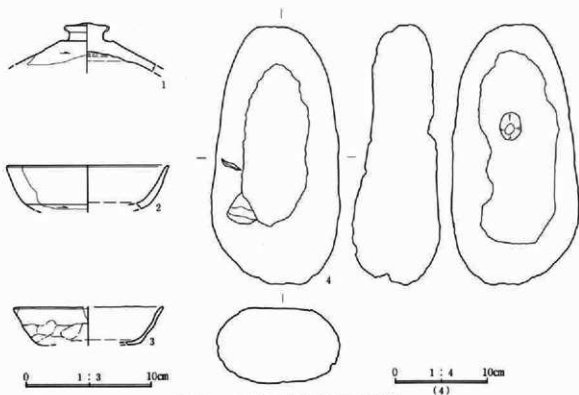
1は器高の高い蓋、2は体部下位回転削りの杯である。

土師器 (第312図3)

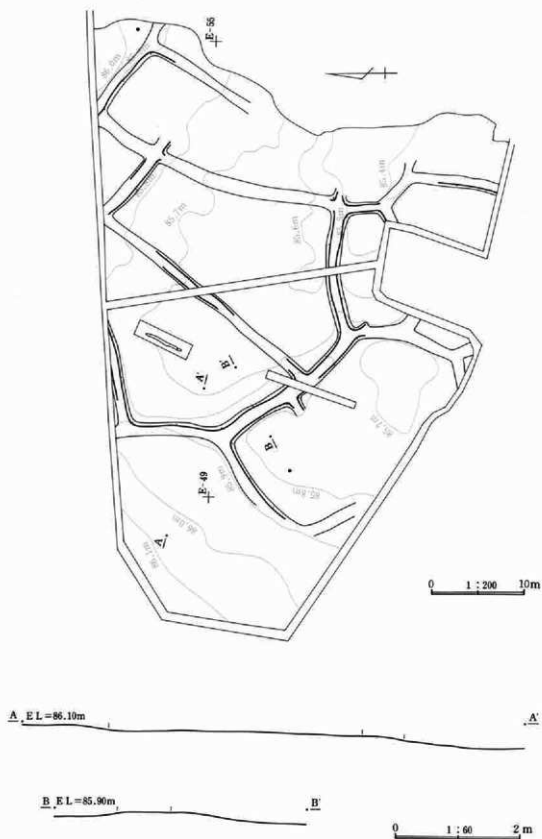
平底の杯である。

石製品 (第312図4)

平坦面に小さいくぼみと溝状の使用痕を有する。



第312図 5区第4氾濫層下水田出土遺物



第313图 5区第6区灌溉层下水田夹测图

22. 5区第6 祀蓋層下水田

遺構 (第313図)

5区西よりで確認された。畦の残りは悪く、中央の畦は等高線から判断するとやや不自然で、すべての畦が確認できていない可能性が高い。東側は流失している。

遺物

須恵器 (第314図1、2)

則天文字の「天」を記したと考えられる蓋が出土している。2は杯の底部である。第4 祀蓋層下水田出土遺物との間に時期差は認められない。しかし、本水田が8世紀を遡る可能性はない。

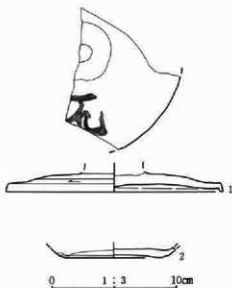
23. 5区遺構外出土遺物

木製品 (第315図1)

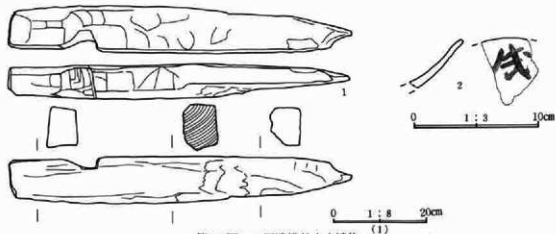
遺物ラベルの紛失により出土遺構不明となった。マキ属の割材を素材とした構築部材を杭に転用したものである。

須恵器 (第315図2)

酸化炭焼成の須恵器椀で、体部外面に墨書を施す。



第314図 5区第6 祀蓋層下水田出土遺物



第315図 5区遺構外出土遺物 (1)

第3節 弥生・縄文時代の遺物

今回の調査範囲では、弥生・縄文時代の遺構は確認されていないが、両時代の土器と石器は少量ではあるが検出されている。縄文時代の遺物は、3区低地に面した両側の台地縁辺に広く分布するのに対し、弥生時代の遺物は2区台地北の東側縁辺に集中する傾向が認められた。いずれも3区低地を望む台地縁辺に活動の場をもっていたものと考えられる。

第316図1～17は弥生時代の土器である。1～4はクシ描弧線文を施す一群で、2は地文に条痕が認められ、3は地文に無節の縄文（あるいは反撚りか）が施されている。いずれも焼成は良好で淡黄褐色を呈し、内面にはハケ目を残す。5・7・8は縄文LRを地文に、半截竹管様の施文具による平行沈線で文様を描く一群である。5・8は同一個体で、直線と弧線で文様が構成される。縄文はいずれも節が大きく、7は施文帯に無文部が認められる。焼成は良好で黄褐色を呈し、内面は丁寧にナデが施される。6は台付土器の脚部破片で、脚部上端に沈線で区画した矢羽根状の文様をめぐるし、以下を細かな縄文LRで充填している。内面にははかるくミガキが施される。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。9は全面に縄文RLが施された口縁部破片で、内面にはミガキが施されるが、一部にハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈す。10は折り返し口縁の破片で、わずかに肥厚する口縁部に縄文LRを施す。焼成は良好で褐色を呈す。11・12は結節を伴う縄文を間隔をあけて帯状施文する一群で、無文土器部には細かなハケ目が残る。縄文はLR。内面は丁寧にナデが施される。焼成は普通で、灰褐色を呈す。13～16は無節縄文を施す一群である。13は薄手の土器で、無文部と内面にはミガキを施すが、外面無文部には粗いハケ目が残る。縄文はL。14も縄文Lを横位施文する。15・16は直前段反撚りLLの縄文を施す土器で、15は結節部の施文が伴う。いずれも焼成は良好で、13は黄褐色、14～16は淡赤褐色を呈す。17は胴部にハケ目を施す土器で、内面はナデで仕上げている。焼成は良好で赤褐色を呈す。

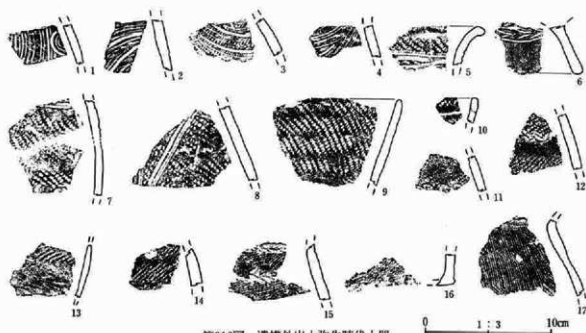
以上のように、本遺跡出土の弥生土器は多様な要素を含んでいるが、これらの中には明らかに中期後半の一群が含まれている。群馬県の中期後半の土器群がどのような要素で構成されているか、まだ不明確な段階であり、ここでは一括して中期後半に位置づけておきたい。なお、石器では石英閃緑岩製の扁平片刃石斧が一点出土している（第318図）。

第317図1～40は縄文時代の土器である。早期後半の茅山上層式から中期後半加曾利E3式までの土器が出土しているが、主体を占めるのは前期後半浮島・興津式土器である。

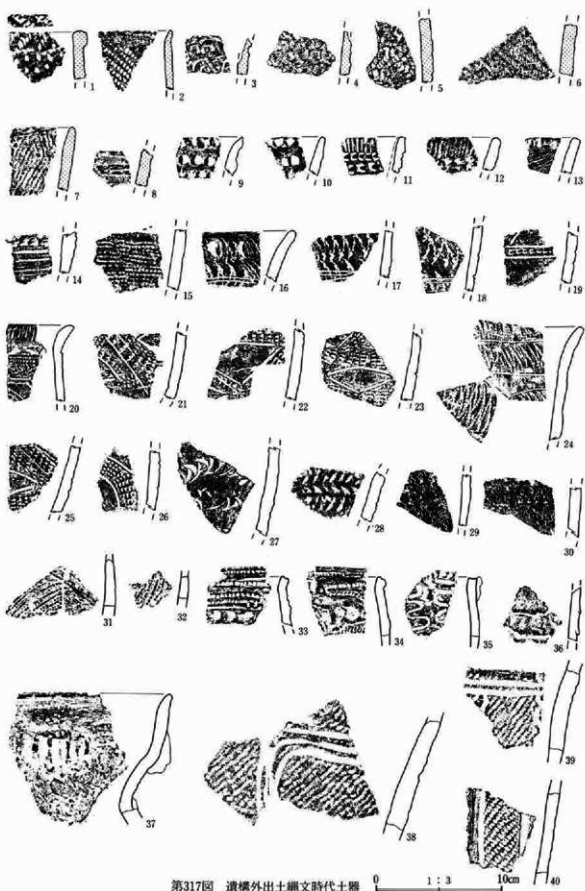
1は早期後半茅山上層式である。肥厚する口縁部と平坦な口唇部上面、斜行する刺突文を施して羽状の文様を構成し、肥厚部以下に刺突文を施す。羽状の文様は、筋条体圧痕によるものか連続刺突か不明瞭。胎土に砂粒と繊維を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。2はRLの斜縄文を施した口縁部破片で、内面に条痕文が認められることから、早期終末に位置づけておきたい。胎土に多量の繊維を含み、焼成は普通で黄褐色を呈す。3～5は前期前半の関山I式土器である。いずれも0段多条縄を使用した環付縄文を多段に施文し、3ではこの間にいわゆるコンパス文が施される。胎土に多量の繊維を含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。6～8は前期中葉の黒浜式土器である。6・7は無節縄文で羽条縄文を構成する一群で、原体は6がRとL、7はLである。8は爪形文を施す。いずれも胎土に多量の繊維と砂粒を含み、焼成は良好で、6・7は褐色、8は黄褐色を呈す。9～30は前期後半の浮島・興津式土器である。大半がアナグラ属の貝殻腹縁を多用するが、27・28は異なった種の貝殻を使用している。9・10は抉ったような刺突文を、口縁部に数条施す。11・12は口唇部下に半截竹管による縦位の集合沈線を施し、以下に爪形文を数条めぐらせている。14も同類で、

爪形文下に横位の平行沈線を施す。13は口唇部外端に抉ったような爪形文を施し、以下に無節Lの斜縄文を施す。15～26は沈線によると文様と貝殻腹縁による連続刺突で文様が構成される一群である。文様構成は菱形状、あるいは三角形状となるものが多く、文様を区画する沈線は半截竹管平行沈線によるもの(15～18・20)と、1本単位の沈線によるものがある。貝殻腹縁の施文は、平行にひきずるものと波状施文のものが認められる。27～30は沈線が施文されない一群である。貝殻腹縁の施文は、いずれも波状施文である。以上の土器は、胎土に多量の砂粒を含むものが多く、色調は黄褐色～灰褐色である。31・32は前期終末諸磯C式の新しい段階に比定される一群で、同一固体である。大波状口縁の深鉢で、半截竹管による斜行沈線を地文とし、結節浮線文による渦巻状のモチーフが構成される。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で明褐色を呈す。33～36は中期中葉の阿玉台I b式土器である。1本単位の押引文による文様構成を特徴とし、胴部には襷状の指頭痕が施される。胎土に金雲母と砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈す。37～40は中期後半の加曾利E式土器である。37は口唇部下に無文部をもち、2～3条の隆帯で口縁部文様を構成するが、隆帯が大きく剥げ落ちている。38・39は0段3条RLの斜縄文を地文に、2～3条の沈線によるクランク文や蛇行懸垂文で胴部文様を構成する。40は胴部懸垂沈線間に縄文RLを施文する。以上の土器は、文様の特徴から37は加曾利E1式に、38・39は同2式に、40は同3式に各々比定される。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好でくすんだ褐色を呈す。

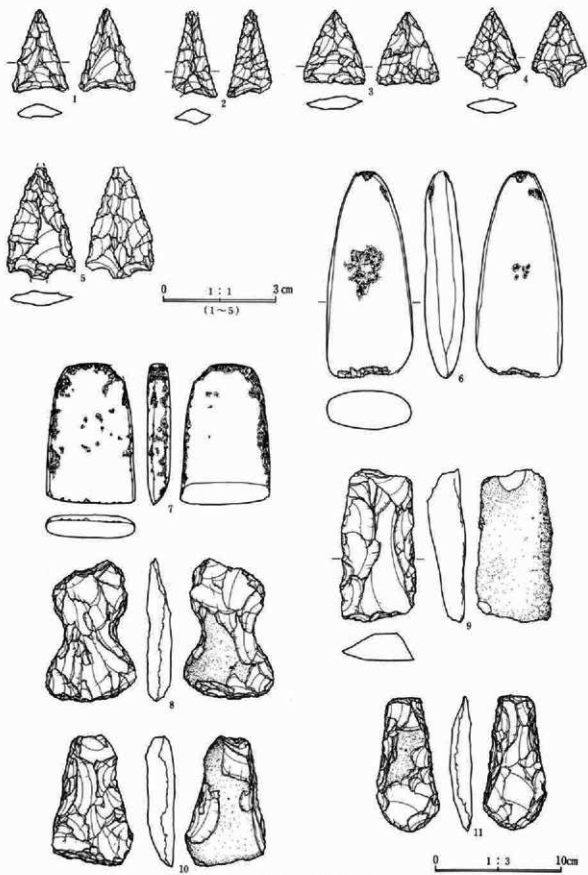
この他に縄文時代に該当する石器が出土しており、第318図～第320図に示した。出土位置は縄文時代の土器と共通するが、当然のことながら所属時期は判然としない。1～5は石鏃で、1～3は無茎、4・5は有茎のタイプである。石質は1・3・4がチャート、2・5は黒色安山岩、6は磨製石斧で、刃部につぶれがあることから、敲石として転用されたのであろう。石質は緑色変岩。8～14は打製石斧で、13は片刃状を呈す。石質は8・10が黒色安山岩、他は黒色頁岩である。15～36は削器類で、大型厚手で刃部に角度をもつものや、薄手の剝片を加工したものなど、形態は様々である。石質は15・16が黒色安山岩、他は黒色頁岩である。



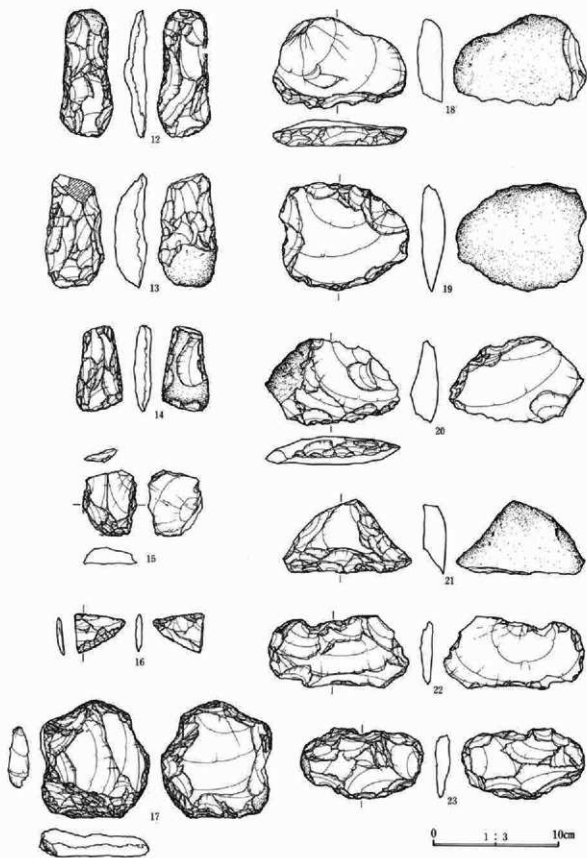
第316図 遺構外出土弥生時代土器



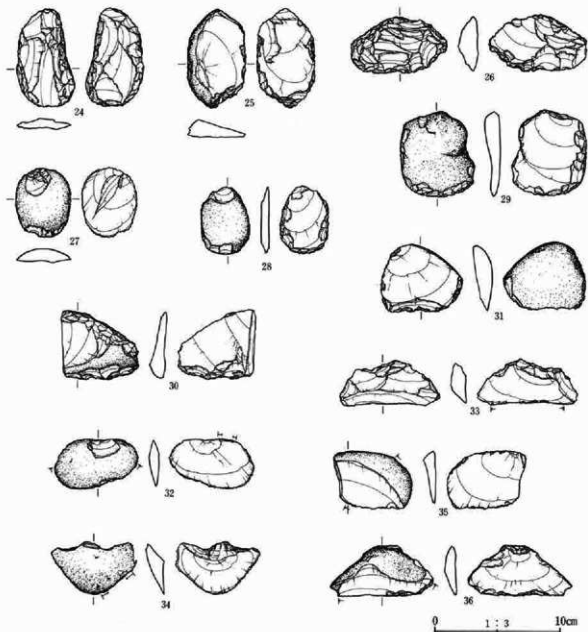
第317図 遺構外出土縄文時代土器



第318図 石器実測図 (1)



第319图 石器实测图 (2)



第320图 石器实例图 (3)

第4章 自然科学分析

1. 二之宮宮下東遺跡より出土したウリ科植物の遺体

元大阪府立大学農学部教授 藤 下 典 之

『二之宮千足遺跡』の発刊(1992年2月¹¹⁾)から丸一年を経過したが、この間メロン仲間*Cucumis melo* L.の種子出土確認遺跡数は、新たな秋田県下のものなどを含めて118遺跡に、ヒョウタン仲間*Lagenaria siceraria* Stand.のそれは126遺跡になった。これらの内、筆者が直接、種子の観察できた遺跡数はともに70遺跡になる。¹²⁾群馬県下での出土をみると、メロン仲間では、弥生後期の日高遺跡と新保遺跡(ともに高崎市)から、関東より以東の地域で現生植物が未だに発見されていない雑草メロンの種子に似た小粒種子が、それぞれ36、18%も出土し、¹³⁾二之宮千足遺跡(6世紀前半～平安時代)からは全国で1・2位を競うほど¹⁴⁾の1万粒以上が出土し、その中に遺隋使や遣唐使などによってもたらされたとみている大粒のモモルディカメロン型の種子が含まれていた。¹⁵⁾これらの成果は、日本の古代におけるメロン仲間の種類やその変遷、あるいは利用・栽培の様相を推考する上で重要な示唆を与えてくれると同時に、高崎市や前橋市の古代史の発掘にもつながるものとなろう。一方、ヒョウタン仲間の種子は、上述の3遺跡ともメロン仲間と同一の遺構から出土し、弥生時代の日高、新保両遺跡の種子は小さく、古墳時代の二之宮千足遺跡の種子は大きく、細身(長さ/幅の値が大きくなる)になっていた¹⁶⁾。また、ヒョウタン仲間の果皮片が新保、二之宮千足遺跡のそれぞれ数カ所から出土し、新保遺跡の果実は横径が5～10cmたらずのナスビ型やフラスコ型と推定されるものがおもて、¹⁷⁾二之宮千足遺跡の10世紀の井戸からのものは、果頂部分(果梗のついていた部分)が残っていて、果皮片の面積・厚さ・曲がりぐあいや維管束の太さなどから、ギボシ型または偏球型のものと推定された。¹⁸⁾

本報告書では二之宮千足遺跡と同じで前橋市の二之宮町内において、約500m東に離れ、出土遺構の年代が古墳時代の中で若干おそい時代にあたる、二之宮宮下東遺跡から出土したウリ科植物の遺体について観察計測した結果を述べる。

調査材料と方法

種子、果皮のいずれもアルコールに浸して保存されていた。種子については「新保遺跡」¹⁹⁾「二之宮千足遺跡」²⁰⁾で採用した方法と同じで、自然乾燥させたのち観察計測したが、果皮片は乾かすと萎縮したりひび割れたりするので、アルコールからとり出して、果皮の表面を軽くふいたあと直ちに調査した。

出土種子の類別の中に出てくる完形成熟、しいな、奇形、部分欠損のうち、「しいな」(枇)は種子の中身(胚)の発育が悪いか全く無かった、種皮の薄い種子をいう。原因には未熟と無受精があるが、まとまった数のしいなが出土した場合には、未熟と考えられる。

「出土種子をマクワ、シロウリあるいはヒョウタンと断定せずに、メロン仲間やヒョウタン仲間としたのは、植物分類学上の種(species)の下の変種(variety)が前者にはマクワ、シロウリ、ネットメロン、モモルディカメロン、ヘビメロン、イボメロン、雑草メロン…など40余、後者にはヒョウタン、ユウガオ、フクベ、センナリヒョウタン…などがあるが、現生の種子でも大きさは連続変異を示すので、1粒ごとの種子の形態のみから個々の変種を識別し同定することは極めて困難である。このような理由から、変種(variety)が違っていても分類上同属(genus: *Cucumis*, *Lagenaria*) 同種(species: *melo*, *siceraria*)のものを仲間という言葉をつけて表現した。メロン仲間は*Cucumis melo*全般を、ヒョウタン仲間は*Lagenaria siceraria*全般を

さす。」

結果と考察

1. メロン仲間 (*Cucumis melo* L.) の種子

隣接した二之宮千足遺跡からは総数で1万粒をこえる出土があったのに対し、当遺跡からはわずか7粒のみであった。この7粒から多くを論ずることはできないが、日高・新保遺跡の弥生時代の遺構から36%と18%、二之宮千足遺跡の古墳時代と奈良・平安時代の遺構からともに8%ずつ出土した、長さ6.0mm以下の小粒の雑草メロン型種子は、7粒の中にはみあたらなかった。筆者が計測した全国にまたがる弥生時代の23遺跡からは、全く出土のなかった長さ8.1mm以上の大粒モモルディカメロン型の種子¹⁾は、本遺跡に近い弥生時代の日高と新保遺跡²⁾からも1粒も出土しなかった。しかし、先の二之宮千足遺跡の古墳時代と奈良・平安時代の遺構からは、同時代の他地方の遺跡とほぼ同じ程度にそれぞれ9%と15%出土し、¹⁾本遺跡では7粒中に3粒含まれていた(第1表・写真1-1、残りの4粒は中粒のマクワ・シロウリ型)。モモルディカメロン型の種子が内陸部に位置する現在の高崎市近郊の古墳～奈良・平安時代の2遺跡から出土し、太平洋岸の仙台市郊外に位置する奈良時代後期の多賀城遺跡から大量に確認され、さらには本報告書執筆の過程で、秋田県大館市の12世紀後半の矢立庵寺のトイレ遺構から、高い頻度で出土している(未発表)。これらの調査結果から、モモルディカメロン型メロンの利用(栽培?)の北進の跡が伺えようである。

2. ヒョウタン仲間 (*Lagenaria siceraria* Stand.) の種子と果皮

(1) 種子: 計測可能な完形正常種子は、整理No017(6世紀前半～6世紀中頃)から139粒と、No016-1(6世紀中頃～7世紀初頭)から1粒あった(第1表、写真)。No017からの種子の平均長は11.26mmで、隣接する二之宮千足遺跡の種子³⁾の大きさ(平均長11.06～11.55mm)や形態と相似していた。しかし、弥生時代の日高遺跡(平均長10.89mm)や新保遺跡(平均長9.93mm)の種子⁴⁾よりはかなり大きかった。整理No015-2(6世紀中頃～7世紀初頭)からはやや未熟なものが15粒、ピンセットで挟むだけでこわれる種皮の軟らかい“しいな”が2粒出土した(第1表、写真1-3・4)。これらは果実の成熟前に何らかの理由で埋蔵された1果実のものらしく、種皮の発育が悪くヒョウタン仲間の種子に特有の縦の縫線がほとんど認められなかった(写真1-4)。しかし、平均長は12.21mmと大きく、かりに成熟しておればさらに大きくなっていただろうから、現生の本邦でみられる栽培ヒョウタンやユウガオの種子の大きさにはおよばないにしても、⁴⁾既往の出土種子のなかでは大きい部類に入るものであった。ただし、現在のところ、ヒョウタン仲間では種子の大きさ・形態から果実の大きさや形態を推定するところまで研究は進展していない。

(2) 果皮: 6世紀中頃～7世紀初頭の3区16層からの5資料と10世紀の2区の井戸からの1資料があったが(第1表)、いずれももの果形が推定できるほどに果皮片が揃っていないかった。また果形の推定に役立つ果頂部(果梗のついていた部分)は全く失われており、果底部(花おちのある部分)が整理No014-3と018の資料中に1片ずつ認められた(写真2-1)。古墳時代の014-1と10世紀の井戸からの018の果皮片は、比較的よく残りよく拾われていた。前者では1cm²大の小破片が多く、総表面積は約80cm²、厚さは2～3mmであったから(写真2-2)、果実の横径が5～10mm大の小さい果実に由来するものと推定され、他の古墳時代の4資料も類似のものと思われた。後者の井戸から出土した果皮は56破片からなり、表面積が6～9cm²大のものが多く(写真2-1)、総表面積は約410cm²、アルコールを十分含んだ状態の果皮片ではあるが、厚さは平均5mm、最大7mmあり、個々の果皮片が平板に近かったことなどから、ゴボシ型または偏球型の大きい果実^{5,6)}に由来するものと思われた。No014-1の果皮40片の内の4片の表面に、直径5～15mmの平たいカサブタ様のもりあがり部分が認められたが(写真2-3)、その裏面(果実の内側)には異常がなかった。これ

は若い果実の表皮についた傷の傷い組織のあとか、または罹病時の病斑の名残ともとれたが、現在までに観察した28遺跡からの数多くの果皮片にはみられなかったものである。新保遺跡のヒョウタン仲間では、ほぼ完全に近い果皮(果実)の中に種子が胎座部分とともに詰まっていたり、同一果実のものと思われる果皮と種子が、一緒に拾いあげられていたが、¹⁰⁾本遺跡の果皮片は種子を伴っていないかった。本遺跡と二之宮千足遺跡のともに10世紀の井戸からの果皮片も種子を伴っておらず、厚手の皮をもった大きなギボシ型または偏球型の果実のものともみられ、井戸への祭祀儀礼的供物であった可能性が高い。

引用文献

- 藤下典之、1992、二之宮千足遺跡より出土したウリ科植物の遺体、「二之宮千足遺跡」自然科学・分析編23-29
- 藤下典之、1992、出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、考古学ジャーナル354：7-13
- 藤下典之、1986、新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体、新保遺跡：62-70
- 藤下典之、1980、池上遺跡より出土した*Cucumis melo*の種子について、池上・四ッ池、6：105-124
- 藤下典之、1984、佐室遺跡から出土したウリ科植物の遺体について、佐室その1：93-98
- 藤下典之、1983、和爾・森本遺跡出土のヒョウタン仲間の種子について、和爾・森本遺跡発掘調査報告書：227-231
- 藤下典之、1988、曾根貝塚低湿地遺跡(縄文前期)から出土したヒョウタン仲間の果実と種子について、曾根：262-269

第1表 二之宮宮下東遺跡より出土したウリ科植物の遺体(1986-1987年発掘)

A. メロン仲間(*Cucumis melo* L.)の種子

整理No	出土遺構	推定時代	出土種子数				計測値(mm)			長さ(mm)ごとの頻度(%)			写真No	
			完形成熟	しいな	奇形	部分欠損	種子数	平均長	平均幅	長さ/幅	6.0以下	6.1-8.0		8.1以上
016-1	3区16層	6C中頃-7C初頃	7	0	0	0	7	7.79	3.70	2.10	0	4	3	1-1

B. ヒョウタン仲間(*Lagenaria siceraria* Stand.)の種子

整理No	出土遺構	推定時代	出土種子数				計測値(mm)			写真No	
			完形成熟	しいな	奇形	部分欠損	種子数	平均長	平均幅		長さ/幅
017	3区Hr-FA下	6C前半-6C中頃	139	0	16	0	100 ^{a)}	11.26	5.39	2.09	1-5
015-2	3区C-16B層	6C中頃-7C初頃	15 ^{b)}	23	2	12	15 ^{b)}	12.21	5.67	2.16	1-3+4
016-1	3区16層	6C中頃-7C初頃	1	0	0	1	1	11.20	6.0	1.87	1-2

a)、完形成熟種子の中から無作意的に選んだ b)、やや未熟種子 c)、別記

C. ヒョウタン仲間の果皮

整理No	出土遺構	推定時代	破片数	総表面積約cm ²	平均厚さ(mm)	果頂部	花痕部	写真No
014-1	3区16層	6C中頃-7C初頃	40	80	2-3	なし	なし	2-2+3
014-2	3区16層	同上	10	40	2	なし	なし	
014-3	3区16層	同上	27	46	2	あり	なし	
014-4	3区16層砂層中	同上	4	10	2-3	なし	なし	
015-1	3区16層	同上	1	4	2	なし	なし	
018	2区23号井戸	14-15	56	410	5-7	あり	なし	2-1

2. 歯と骨について

宮崎重雄

I. はじめに

二之宮宮下東遺跡は群馬県前橋市に所在し、動物遺存体として、人歯・骨、人骨、牛歯が出土している。

ここでは、これら出土遺物の調査結果について報告する。人歯による性別および年齢の判定基準はそれぞれ権田 (1959)、上条 (1978)、栃原 (1957) を用い、人歯の解剖学的特徴は上条 (1978) によって記録した。計測法は藤田 (1949) に従っている。日本在来馬の分類は林田 (1978)、馬歯の歯冠形態の名称は長谷川・原田 (1979) を、年齢推定はLevin (1982) を用いた。

II. 記載

A. ヒトの歯と骨

1. 6号墓 (181号土坑) 時代: 11世紀

最も大きいものでも、保存長が26mmの10数片の細骨片で、すべて焼骨片である。亀裂が多く、炭化して真黒になっているものもある。骨表面には、人骨に特有な長軸に平行した縦方向に多くの細い溝が走っていることで、人骨と判断される。

2. 2号墓 (27号土坑) 時代: 15・16世紀

歯種鑑定可能な歯が25本検出されている。

- ① 右上顎第一大臼歯: 近心辺縁隆線と舌側・遠心咬頭にエナメル質の咬耗がある。咬合面から見た歯冠外形は1型で、辺縁結節は観察されず、副隆線は遠心舌側咬頭の近心側に欠くのみで、各咬頭部に発達している。辺縁溝は遠心側で認められ、三角溝は近心の舌側・頬側の両咬頭で欠いている。
- ② 右上顎第二大臼歯: 舌側の2咬頭にごく僅かのエナメル質の咬耗がある。咬合面両角部鈍円化の型では、B2型である。辺縁結節は近心側で認められ、副隆線は近心側の両咬頭に発達し、遠心側では欠く。辺縁溝は近心・遠心両側に存在し、三角溝は遠心側の両咬頭で発達する。
- ③ 右上顎第三大臼歯: 近心側に位置する第二大臼歯の隣接面に接点がないので、第三大臼歯は埋伏歯が先天的に欠如していたものと思われる。
- ④ 右下顎第一大臼歯: 各咬頭に僅かずつのエナメル質の咬耗がある。辺縁溝は近心側にあり、三角溝も近心側の舌側・頬側にある。裂溝型はX5である。
- ⑤ 右下顎第二大臼歯: 頬側の咬頭にごく僅かのエナメル質の咬頭がある。辺縁溝・三角溝は近心側に見られ、裂溝型はY4である。
- ⑥ 右下顎第三大臼歯: 咬耗は全くない。歯の大きさはおよそ第二大臼歯と同じで、退化傾向はあまり見られない。なお左下顎第三大臼歯は、第二大臼歯に接点があるので萌出していたことは確かであるが、現在は何等かの理由で喪失している。

上顎の犬歯は近遠心径が右8.3mm、左8.7mmと大きく、男性を示唆している。また、歯の咬耗度からは、20~30才の青年期後半から壮年期前半の年齢が推定される。

3. 4号墓 (178号土坑) 時代: 14世紀頃か

- ① 右下顎犬歯: 尖頭部に菱形をしたエナメル質の露出がある。頬側には歯垢が形成されている。棘突起はなく中央舌面隆線・舌面溝・舌面歯頸隆線は観察される。尖頭部における咬耗面は唇側に70°程傾斜し、屋根状または缺状咬合を示唆している。

- ② 右上顎第二小臼歯：頬側咬頭に面状の象牙質の露出がある。咬耗のため歯冠形態の詳細は不明である。下顎の大歯の大きさは、女性を思わせる。また咬耗度から、壮年期後半から熟年期前半が推定される。

4. 3号墓(72号土坑) 時代：15世紀

本土坑からは5本の歯が検出されている。

- ① 左上顎中切歯：唇面溝が2本、唇面隆線が1本観察される。舌側面は破損のため歯冠形態は不明である。
② 左上顎犬歯：尖頭部およびその周辺には象牙質が大部大きく露出している。咬耗のため歯冠形態は不明である。棘突起はない。
③ 右下顎第一小臼歯：頬側咬頭に象牙質の露出がある。辺縁溝は近心・遠心とも観察されない。頬側・舌側三角隆線は連合隆線となり、側方から見て両者は軽度の切れ込みをなすだけである。咬合面の溝の形はI型である。舌側の付加結節は正常型のb型である。舌側溝はない。
④ 右下顎第二小臼歯：象牙質が面状に広がり、咬耗が甚だしく、歯冠形態の詳細は不明である。

上顎犬歯は近遠心径が7.7mm、唇舌径が8.2mmと小さく、女性的である。また、咬耗度からは熟年期から老年期の初めの年齢が推定される。

以上の各人歯には齧蝕された歯はない。

B. 獣骨類

1. 48号井戸 時代：不詳

楕円形の平面形をなす、長径2.3m、短径1.7m、深さ1.15mの井戸で、左下顎第二後臼歯・右上顎第一後臼歯・左上顎第二後臼歯の3本の馬歯が検出されている。

3本の歯が同一個体に属するのかが、否かは不明であるが、いずれにしても、年齢は比較的若く5～9才の牡令馬である。歯冠長は小さく、馬格は小型在来馬相当であろう。左上顎第二後臼歯の前小窩と後小窩はエナメル質が連続し、特徴的である。

その他、保存全長32.6mmの中型動物の四肢骨片が出土している。灰白色を呈し、加熱による亀裂が骨表面に生じていることから、焼骨であることが分かる。

2. 13号井戸 時代：14世紀か

円形の平面形をなす、直径1.6m、深さ1.1mの井戸で、家牛の臼歯片10片が出土している。歯冠高が低くて、老齢牛と思われる。

桜井(1992)によれば、井戸内から出土する牛馬の部位は、井戸廃棄後に投棄されたと見なされる1体分の馬骨が出土する群馬県中村遺跡¹⁾などいくつかの例を除けば、大半が歯や骨などの部分的なものであり、最初から部分的部位のみ意識的に投入し、埋納した可能性が高いと考えられる。

宮下東遺跡出土の歯・骨も、部分的であり、上記の観点に立てば、意識的に埋納された可能性も考えられるが、出土層位が明確でなく、これ以上の言及はできない。

3. 2区8号溝 時代：14世紀後半から15世紀

下顎の12本の臼歯と下顎中切歯6本の馬歯が出土している。下顎の全臼歯列長は155.0mmで、大塚他(1985)の示す小型在来馬の計測値、すなわち、野間馬の165.3mm、トカラ馬の163.0mmに比べても、かなり小さく、本馬は小型在来馬の小型タイプに相当する。咬耗の度合いからすると、8～9才の牡令馬が推定される。

4. 3区15層 時代：8世紀後半から9世紀前半

いずれも馬歯で、歯種判定可能な2本の上顎臼歯と1本分の左上顎臼歯片と2本分の右上顎臼歯片が出土している。保存状況が不良で、得られる情報は少ないが、咬耗度からして、11～12才の牡令馬が推定される。

5. 3区16層 時代：6世紀中頃から7世紀前半

ニホンシカの臼歯片約20片で、破片で判断する限りでは現生のニホンシカよりやや大きいようである。

6. 3区15C層 時代：8世紀後半から9世紀前半

長さ53.7mm、幅22.8mm、厚さ9.8mmの板状に加工された骨角器で、人骨を用いている可能性も考えられるが確定できない。

引用文献

- 権田和良 (1959) 歯の大きさの性差について。人類学雑誌、67(3)、47-59。
 兵谷川善和・原田俊治 (1979) 「馬と進化」、動物社、(Simpson, G. G., 1951, *Horses*, Oxford University Press, New York.)
 林田重幸 (1978) 「日本在来馬の系統に関する研究」、日本中央競馬会。
 藤田恒太郎 (1949) 歯の計測基準について。人類学雑誌、64(1)、27-32。
 上条庵彦 (1978) 「日本人永久歯の解剖学」、アトナーム社。
 Levine, M. A., 1982, The use for crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In Wilson, B., Grigson, C., and Payne, S., ed. *Ageing and sexing animal bones from archaeological sites*. *Bar British Series* 109, 223-250.
 大家鶴一・広田桂一・松元光春・横口 勉 (1985) 野間馬の形態。野間馬に関する学術調査報告書、10-15。
 坂井秀雄 (1992) 井戸から出土する牛馬遺存体について—動物種性との関係—。考古学研究、39(2)、125-138。
 柳原 博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学雑誌、31、補冊、4、1-27。

註

1. 「中村遺跡」 廣州市教育委員会 1986

馬上顎臼歯計測値

		3区15層		48号井戸	
		左	右	右	左
		第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯
歯冠長	咬合面	27.6*	23.6*		22.4
	中央		22.9*		21.6
原歯幅	咬合面	13.7			
	中央	13.4			
歯冠高	頰側	38.6		69.5	70.6
	舌側	34.3		59.0	63.0
咬合面の傾斜		95	85		78
山形傾	咬合面		4.4		
	中央		4.8	2.6	2.9

単位：mm

人歯計測値 (単位：mm)

4号墓

	近遠心径	頬舌径	歯冠高
右下顎犬歯	6.0	6.8	9.5
右上顎第二小臼歯	5.7	8.5	5.8

3号墓

	近遠心径	頬舌径	歯冠高
左上顎中切歯	8.8		9.4
左上顎犬歯	7.7	8.1	8.0
右上顎第二小臼歯	7.2	9.1	6.7
右下顎第一小臼歯	6.5	7.8	6.3
右下顎第二小臼歯	7.2*	8.0	4.5

人歯計測値 (単位：mm)

2号墓

	近遠心径	頬舌径	歯冠高
右上顎中切歯	7.1	6.8	10.2
右上顎側切歯	6.4	7.0	9.2
左上顎中切歯	7.2	6.1	9.2*
左上顎側切歯	6.5	7.0	9.2
右下顎中切歯	5.5	6.4	9.8
左下顎中切歯	5.6	6.6	9.8
右上顎犬歯	8.3	9.3	10.1
左上顎犬歯	8.7	9.2	10.1
右下顎犬歯	6.7	7.8	10.5
左下顎犬歯	6.8	7.9	10.5
右上顎第一小臼歯	7.7	10.0	8.7
右上顎第二小臼歯	7.2	9.9	8.1
左上顎第一小臼歯	7.7	9.8	8.2
左上顎第二小臼歯	7.1	9.8	6.6
右下顎第一小臼歯	7.5	8.6	8.1
右下顎第二小臼歯	7.6	9.1	7.4
左下顎第一小臼歯	7.5	8.5	8.5
左下顎第二小臼歯	7.7	9.0	7.4
右上顎第一大臼歯	10.8	13.1	12.3
右上顎第二大臼歯	9.7	11.9	5.3*
右下顎第一大臼歯	12.5	12.0	6.9
右下顎第二大臼歯	11.6	10.5	7.3
右下顎第三大臼歯	11.6	10.7	6.0
左下顎第一大臼歯	12.2	11.8	7.6
左下顎第二大臼歯	11.6	10.6	7.0*

馬下顎臼歯計測値

		2区8号溝						48号并戸
		左						右
		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯	第二後臼歯
歯冠長	咬合面中央	28.8	26.6	24.7	23.2	24.9	30.7	22.2
歯冠幅	咬合面中央	14.9	14.9	14.8	13.2		11.9	12.6
歯冠高	頬側	28.7	42.0	50.5	45.7			
	舌側	25.7	43.3	53.4	46.2		53.5	51.0
下後齧谷長		5.7	9.4	8.7	8.3		8.8	8.2
下内齧谷長		15.7	12.7	11.3	8.9		10.4	8.8
double knot長	咬合面中央	14.2	16.1	15.2	13.4		12.8	12.6
	咬合面中央		16.3	15.5	13.2		12.8	11.8
咬合面の傾斜		95	90	85	75	72	63	67
下内齧幅		5.4	5.7	5.0	4.2	4.2		

全臼歯列長：155.0cm

単位：mm

3. プラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

二之宮宮下東遺跡では、発掘調査によって浅間BテフラやFAの下層などから、合計8時期の水田面が確認されていた。

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、水田跡の分析的確認、および他の層における水田跡の調査を行ったものである。以下に、調査結果を報告する。

2. 試料

サンプリングは、昭和62年12月22日に行った。サンプリング地点は、5区でA、B地点、3区でC、D、E地点の計5地点である。(図1)。

基本層序は各区ごとに設定され、5区で1~28層、3区で1~22層に分層されていた。このうち、水田耕土とされていたのは、5区の6層、10A層、10B層、13層、16層、17層、18層、22層、および3区の7層、11層である。

試料は、容量50ccの採土管およびポリ袋を用いて、各層ごとに5~10cm間隔で採取した。採取した試料数は計58試料であり、このうち50試料について分析を行った。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105°C・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μ m、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (150W・26KHz・15分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去
- 6) 乾燥の後封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1g中のプラント・オパール個数(Sp)は、次式に従って求めた。

$$Sp = \{(Gw \times a) / Sw\} \times (\beta / \alpha)$$

ただし、Gwは添加したガラスビーズの重量、 α と β は計数されたガラスビーズおよびプラント・オパールの個数を表している。

植物体生産量の推定値(Bw、単位 t/10a・cm)は、次式に従って求めた。

$$Bw = Sp \times As \times K \times 10$$

ただし、Asは資料の仮比重、Kは換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物各部乾重）を表している。これに層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量（t/10a）を求めた。

換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ネザサ節はゴキダケの値を用いた。機動細胞珪酸体1個あたりの地上部全重（単位： 10^{-5} g）は、それぞれ2.94、6.31、0.48である。また、イネの機動細胞珪酸体1個あたりの植実重は1.03である。

4. 分析結果

当遺跡で検出されたプラント・オバールの分類群は、次のとおりである。イネ科について、イネ、ヨシ属、ジュズダマ属、ウシクサ族（ススキなどが含まれる）、シバ属、キビ属（ヒエなどが含まれる）。タケ亜科について、ネザサ節、クマザサ属、その他。不明について、Aタイプ、Cタイプ、棒状、表皮毛起源、その他。および樹木起源である。

なお、不明Aタイプは扁平で長軸方向に棟をもつ珪酸体、Cタイプは食パン状でキビ族に類似しているが珪酸体裏面に紋様が認められない珪酸体である。不明Aタイプは、埼玉県川口市の泥炭層（杉山・藤原、1987）などでも多数検出され、花粉分析との対応関係からカヤツリグサ科の可能性が考えられているが、珪酸体標本としては未確認である。樹木起源はブナ科に類似している。（以上については、顕微鏡写真を参照されたい）

上記の分類群について同定・定量を行った。表1には、各層の深度や層厚および仮比重の値などとともに、イネの推定生産量を示した。

図3に、イネのプラント・オバールの出現状況を示した。図4に、環境の指標となるおもな分類群（イネ、ヨシ属、ネザサ節）について、植物体生産量とその変遷を示した。なお、3区の6～10層はC地点において、11～15層はD地点において採取されたものである。

5. 考察

(1) 水田跡の確認および探査

水田跡の確認や探査を行う場合、イネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オバール密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて検討を行い、稲作の可能性を◎○△▲×の5段階に区分して表2に示したので参照されたい。

a. 5区

水田耕土とされていた1層（表土）、10A層、10B層、13層、16層、17層、18層、および22層の各層は、いずれも稲作が行われていた可能性が高いと判断され、これらの層が稲作跡であることが分析的にも確認された。

また水田耕土、とされていなかった2層、3層、11層、および25層でもイネのプラント・オバールが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、4～7層および15層でも、稲作が行われていた可能性があるとして判断された。26層以下では、イネのプラント・オバールは検出されなかった。

以上のことから、5区では25層（浅間Cテフラ混）の時期に稲作が開始されたものと推定される。その後、24層（FA）、21層、14層、9層（浅間Bテフラ）、および8層の時期に稲作は休止されたが、それ以外の層ではほぼ連続的に稲作が営まれ、現在に至ったものと推定される。

b. 3区

水田耕土とされていた7層、11層は、いずれも稲作が行われていた可能性が高いと判断され、これらの層が稲作跡であることが分析的にも確認された。

また、水田耕土とされていなかった6層、8層、9層、12層、13層、および14層でも、イネのプラント・オパールが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、15層、16A層、および16C層でも、稲作が行われていた可能性があるとして判断された。17層以下では、イネのプラント・オパールは検出されなかった。

以上のことから、3区では16C層（FA混）の時期に稲作が開始されたものと推定される。その後、16B層（砂層）および10層（浅間Bテフラ）の時期に稲作は休止されたが、それ以外の層ではほぼ連続的に稲作が営まれたものと推定される。

(2) 稲穀の生産量の推定

水田耕土とされていた層および水田跡の可能性が高いと判断された層（表3の○、○印）のうち、浅間Bテフラよりも下層について、そこで生産された稲穀の総量（面積10aあたり）を推定した。また、当時の稲穀の年間収量を面積10aあたり100kgと仮定して、稲作が営まれていた期間を推定した。これらの結果を次に示す。なお、生産量の算出過程は表2を参照されたい。

層位	備考	稲穀生産量 (t/10a)	稲作期間 (年間)
5区	10A B水田耕土	3.9	39
	10B B水田耕土	2.9	29
	11	1.9	19
	13 2H水田耕土	4.2	42
	16 3H水田耕土	2.5	25
	17 4H水田耕土	8.4	84
	18 5H水田耕土	15.2	152
	22 7H水田耕土	7.1	71
	25 浅間Cテフラ混	6.1	61
3区	11 B水田耕土	4.5	45
	12	5.8	58
	13	12.9	129
	14	14.4	144

以上のように、各水田とも比較的長期間にわたって稲作が営まれていたものと推定される。

なお、以上の値は、収穫方法が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穀の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

(3) 古環境の推定

図3のように、5区の25層(浅間Cテフラ混)以降、3区の14層以降では、おおむねイネが卓越しており、ネザサ節やヨシ属などの雑・野草は比較的少量である。このことから、当遺跡では古くから水田稲作が盛んに行われており、その周辺でネザサ節やヨシ属などが生育していたものと推定される。

ネザサ節は、林床では生育しにくく、何らかの原因で森林群落が破壊された結果、侵入する(室井、1960)といわれていることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、ネザサ節が生育するような比較的開かれた環境であったものと推定される。

二之宮千足遺跡をはじめ前橋市周辺の遺跡では、一般に浅間Bテフラ直下でヨシ属の圧倒的な卓越が認められているが、当遺跡ではこのような傾向は認められなかった。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志、1986、機軸細胞壁構造の形態によるタケ型科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学、19：69—84。
- 杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山—古環境編—、川口市遺跡調査会報告、第10集：281—298。
- 藤原宏志、1978、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の塊体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9：15—29。
- 藤原宏志、1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究③—稲岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定—、考古学と自然科学、12：29—41。
- 藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田の調査—、考古学と自然科学、17：73—85。
- 室井 紳、1960、竹笹の生態を中心とした分布、富士竹類植物園報告、5：103—121。

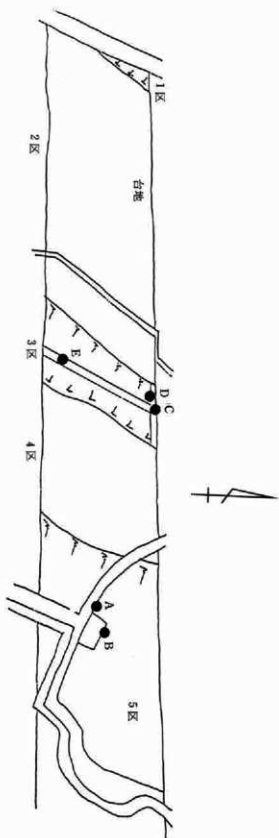


图 1 试样探取地点

表1 イネの生産量の推定

A地点								
試料名	深さ cm	層厚 cm	P. O. 数 個/g	仮比重	P. O. 数 個/cc	稲わら重 t/10a. cm	稲物重 t/10a. cm	稲物総量 t/10a
1	0	16	26,500	0.99	26,200	5.00	2.70	43.18
2	16	12	18,800	1.00	18,800	3.59	1.94	23.24
3-1	28	15	19,100	1.00	19,100	3.65	1.97	29.51
3-2	43	14	7,800	1.00	7,800	1.49	0.80	11.25
4	57	9	4,300	1.02	4,300	0.82	0.44	3.99
5	66	8	2,600	1.00	2,600	0.50	0.27	2.14
6	74	11	3,600	1.00	3,500	0.67	0.36	3.97
7	85	6	3,300	1.00	3,300	0.63	0.34	2.04
8-1	91	7	0	1.00	0	0.00	0.00	0.00
8-2	98	8	800	1.00	800	0.15	0.08	0.66
9	106	6	0	1.00	0	0.00	0.00	0.00
10A	112	4	12,100	0.79	9,400	1.80	0.97	3.87
10B	116	5	7,000	0.80	5,600	1.07	0.58	2.88
11	121	3	7,800	0.80	6,200	1.18	0.64	1.92
13	124	4	12,800	0.80	10,200	1.95	1.05	4.20
14	128	3	800	0.80	600	0.11	0.06	0.19
15	131	3	2,400	0.80	1,900	0.36	0.20	0.59
16	134	6	5,100	0.80	4,000	0.76	0.41	2.47
17-1	140	5	13,500	0.90	12,100	2.31	1.25	6.23
17-2	145	5	4,700	0.90	4,200	0.80	0.43	2.16
21	150	7	0	1.00	0	0.00	0.00	0.00
22	157	10	8,700	0.80	6,900	1.32	0.71	7.11
24	167	3	0	1.00	0	0.00	0.00	0.00
25	170	10	7,600	0.78	5,900	1.13	0.61	6.08
26	180	10	0	0.80	0	0.00	0.00	0.00
27	190	-	0	0.99	0	0.00	0.00	—
B地点								
試料名	深さ cm	層厚 cm	P. O. 数 個/g	仮比重	P. O. 数 個/cc	稲わら重 t/10a. cm	稲物重 t/10a. cm	稲物総量 t/10a
18	150	12	15,400	0.80	12,300	2.35	1.27	15.20
C・D地点								
試料名	深さ cm	層厚 cm	P. O. 数 個/g	仮比重	P. O. 数 個/cc	稲わら重 t/10a. cm	稲物重 t/10a. cm	稲物総量 t/10a
6	65	6	11,200	1.00	11,200	2.14	1.15	6.92
7	71	17	16,900	0.97	16,400	3.13	1.69	28.72
8	88	12	7,600	1.00	7,600	1.45	0.78	9.39
9	100	12	17,700	1.00	17,700	3.38	1.82	21.88
10	112	3	700	1.00	700	0.13	0.07	0.22
11	115	4	12,300	0.90	11,000	2.10	1.13	4.53
12	119	7	9,000	0.89	8,000	1.53	0.82	5.77
13	126	10	13,900	0.90	12,500	2.39	1.29	12.88
14	136	14	11,200	0.90	10,000	1.91	1.03	14.42
15	150	12	2,100	0.89	1,800	0.34	0.19	2.22
E地点								
試料名	深さ cm	層厚 cm	P. O. 数 個/g	仮比重	P. O. 数 個/cc	稲わら重 t/10a. cm	稲物重 t/10a. cm	稲物総量 t/10a
16A-1	150	9	900	0.37	300	0.06	0.03	0.28
16A-2	169	18	1,800	0.40	700	0.13	0.07	1.30
16B	187	3	0	0.70	0	0.00	0.00	0.00
16C	190	10	1,600	0.70	1,100	0.21	0.11	1.13
17	200	8	0	0.70	0	0.00	0.00	0.00
18A-1	208	6	0	0.63	0	0.00	0.00	0.00
18A-2	214	6	0	0.63	0	0.00	0.00	0.00
19	220	7	0	0.65	0	0.00	0.00	0.00
20	227	11	0	0.65	0	0.00	0.00	0.00
21-1	238	12	0	0.81	0	0.00	0.00	0.00
21-2	250	12	0	0.80	0	0.00	0.00	0.00
22	262	-	0	0.72	0	0.00	0.00	—

表2 各区、各層位における稲作の可能性

<5区>			<3区>		
層位	判定	備考	層位	判定	備考
1	◎	現耕土	6	◎	
2	◎		7	◎	中世1水田耕土
3	◎		8	○	
4	△		9	◎	
5	△		10	▲	浅間Bテフラ
6	△	1H水田耕土	11	◎	B水田耕土
7	△		12	○	
8	▲	浅間Bテフラ混	13	◎	
9	×	浅間Bテフラ	14	◎	
10A	◎	B水田耕土	15	△	奈良・平安
10B	○	B水田耕土	16A	△	古墳時代後期
11	○		16B	×	
13	◎	2H水田耕土	16C	△	FA混
14	▲		17	×	
15	△		18A	×	浅間Cテフラ混
16	○	3H水田耕土	19	×	
17	◎	4H水田耕土	20	×	
18	◎	5H水田耕土	21	×	
21	×		22	×	
22	○	7H水田耕土			
24	×	FA			
25	○	浅間Cテフラ混			
26	×				
27	×				

<記号説明>

- ◎ … イネのプラント・オパール密度が10,000個/g以上と非常に高く、稲作の行なわれていた可能性が極めて高いと判断される所。
 - … 密度がおよそ5,000個/g以上と高く、稲作の行なわれていた可能性が高いと判断される所。
 - △ … 密度が1,000～5,000個/gと比較的低く、稲作の行なわれていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も否定できない所。
 - ▲ … 密度が1,000個/g未満と微量であり、稲作の行なわれていた可能性は考えにくい所。
 - ×
- × … イネのプラント・オパールが検出されなかった所。

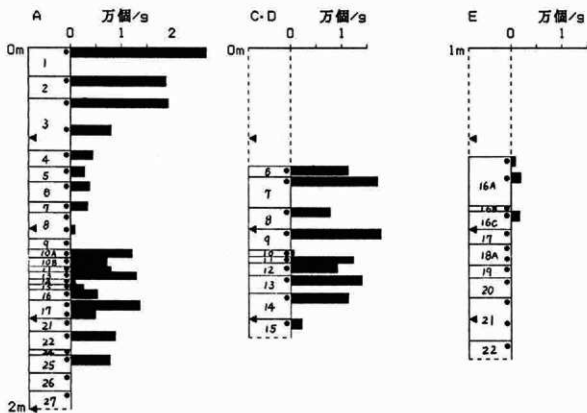


図2 イネのプラント・オパール密度
 ・印は試料を採取した箇所、◀印は50cmごとのスケール

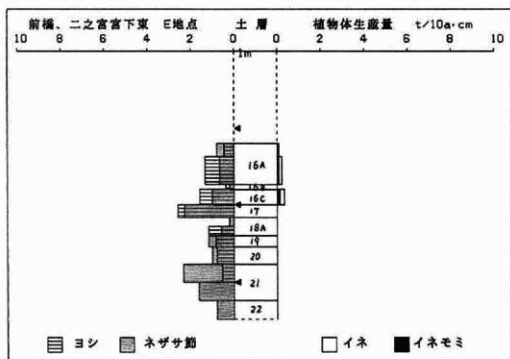


図3 おもな植物遺体の推定生産量
 ◀印は50cmごとのスケール
 植物遺体の推定

4. 花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二之宮宮下東遺跡は、赤城山南麓の緩傾斜の台地上とそれを開析する低地部に位置する。本遺跡の低地においては、数枚の水田面が確認されている。これら検出されている水田耕作土は洪水堆積物により覆われているものと時間の指標となるテフラ層により覆われているものがある。ここでは、これらの水田耕作土およびその前後の堆積層について花粉分析を行い、遺跡が営まれていた当時の周辺の植生を明らかにすることを試みた。

I. 5区低地の花粉分析

1. 試料

試料は、遺跡内の5区南壁断面(A・B地点)から採取した20点である。試料の採取層位および土質は図1に示した。堆積層中には7回の氾濫性堆積層が認められ、その下位に水田面(第1氾濫～第7氾濫水田)が確認されている。また、時間の指標となるテフラ層としては、下位より浅間C軽石(As-C)、二ツ岳火山灰(Hr-FA)、浅間Bテフラ(As-B)が純層あるいは散在して認められる。その内のAs-B直下にも水田面(As-B下水田耕作土)が確認されている。

2. 方法および結果の表示法

花粉胞子化石の抽出方法は、以下に示した通りである。

試料を15g秤量し、フッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液(ZnBr₂ 比重2.2)を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロベットで適量を取り、グリセリンで封入する。検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した。

古植生の検討を行うために、計数の結果にもとずいて花粉化石群集変遷図を作成した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉胞子数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

全試料を通じて検出された化石の種類は、樹木花粉36種類、草本花粉31種類、シダ類胞子3種類であり、検出される個体数は草本花粉が最も多かった。また、今回検出された花粉・胞子化石(花粉化石群集)の中には、保存状態の良くない外膜が壊れている化石が認められ、特に8層(浅の堆積層(試料番号8-2~4))と22層以下の堆積層(試料番号22~26)で多く認められた。

花粉化石群集の変遷の中で樹木花粉化石群集の変遷は、比較的広域の植生を反映している可能性が高い。その樹木花粉化石群集は、25層(As-C)から8層まではほとんど変化せずコナラ亜属が優占するが、その上位の7層になると若干変化し、コナラ亜属が減少しクリ属が増加する傾向が認められる(図2)。ここでは、この樹木花粉化石群集の変遷に基づいて2局地花粉化石群集帯(下位よりNMA-I・II帯)を設定し

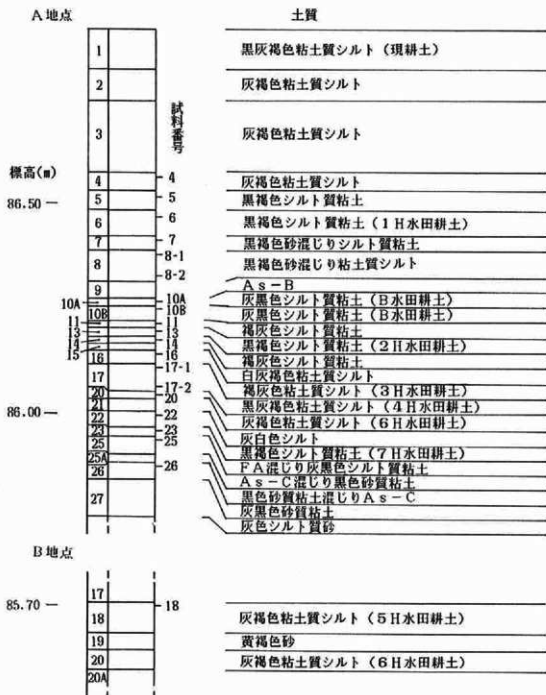


図1 二之宮宮下東遺跡5区A・B地点の模式柱状および試料採取層位

た。次に各帯の特徴および草本花粉の産状について述べる。

NMA-I帯(A地点25層~8層、B地点18層)は、コナラ亜属・クマシダ属-アサダ属などの落葉広葉樹花粉の高率出現により特徴づけられる。この他に常緑広葉樹のアカガシ亜属、針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などを伴う。また、冷温帯の沢沼いなどに多いトチノキ属がほぼ連続して出現する。草本花粉ではイネ科が最も高率に出現し、14、13、11各層では一時的に増加した。そのイネ科の中には栽培植物とされるイネ属の花粉が含まれていた。また、カヤツリグサ科・ヨモギ属も高率に出現するが、それらはそれぞれ8層と20層で減少する。この他、安定した浅い水域などに生育するガマ属・オモダカ属などの抽水植物がほぼ連続して出現し、荒地・人里などに多いオオバコ属や栽培植物とされるソバ属などを伴うのも特徴である。

NMA-II帯(A地点7~4層)になると高率に出現していたコナラ亜属が減少傾向を示し、クリ属が増加傾向を示す。また、コナラ亜属の減少と相関するようにアカガシ亜属や針葉樹など出現率および樹木花粉の種類も減少傾向を示す。草本花粉は、NMA-I帯とほぼ同様で大きな変化は認められない。ただし、抽水植物の種類は減少傾向を示し、アブラナ科が増加傾向を示し、人里・荒地などに多いタケニグサ属が連続して出現するようになる。

4. 考察

遺跡周辺の台地上の植生は、25層から8層が堆積する頃、すなわちテフラ層から判断すると4世紀中葉から12世紀頃までは急激な変化はしなかったと考えられる。その当時の森林は、ナラ類・シマ類などの落葉広葉樹が多く、常緑広葉樹のカシ類も混生していたと考えられることから暖温帯落葉広葉樹林が成立していたと推定される。また、この森林にはトチノキ属などの冷温帯性の落葉広葉樹も混生していた可能性があり、樹種構成の豊富な森林であった可能性が考えられる。一方、ほぼ同時期に本地点の南東約35kmに位置する館林市周辺では、ナラ類などの落葉広葉樹と常緑広葉樹のカシ類が卓越していた(辻ほか、1986)と推定されている。本地点ではカシ類は存在しても卓越する状態ではなかったと推定される。このことは、カシ類が高緯度に位置する本地域においては冬の寒さなどにより分布拡大できなかったことを示唆し、分布限界が館林地帯と本地域の間にあったことが推定される。また、当時の森林は、下記するように低地周辺でソバ栽培など畝作の可能性が考えられること、木製品が多数出土していること等を総合的に考察すると人類の干渉を受けていた可能性も示唆される。このような森林は、7層が堆積する頃になると変化してくる。それは、周辺でのクリ属・ブドウ属など樹木の増加である。この変化は、人類の森林に対する干渉が強くなり及ぶようになった結果、闊樹であるクリなどが増加したとも考えられる。しかし、1地点で認められた変化であり、クリが虫媒花であることから今後地点数を多くして精査すべきであろう。

低地の環境は、26層から4層が堆積するまで大きく変化しなかったと考えられ、ガマ属やオモダカ属などの抽水植物が繁茂する底湿地的環境であったと推定される。当時の低地には多くのイネ科植物も生育していたと推定される。その中には栽培植物とされるイネ属も含まれており、水田遺構が確認されていることを考慮すると低地において稲作が行われていたことはほぼ間違いないと判断される。このように稲作の可能性が高く、タケニグサ属・オオバコ属などの人里植物とされる種類や栽培植物とされるソバ属が出現すること等を合わせ考えると低地の植生に対する人類の干渉は著しく強かったことが伺われる。7層が堆積するころから低地内に成育していた抽水植物の種類数は減少していったと推定される。この変化もまた人類の植生干渉が強くなった結果と見なせる。

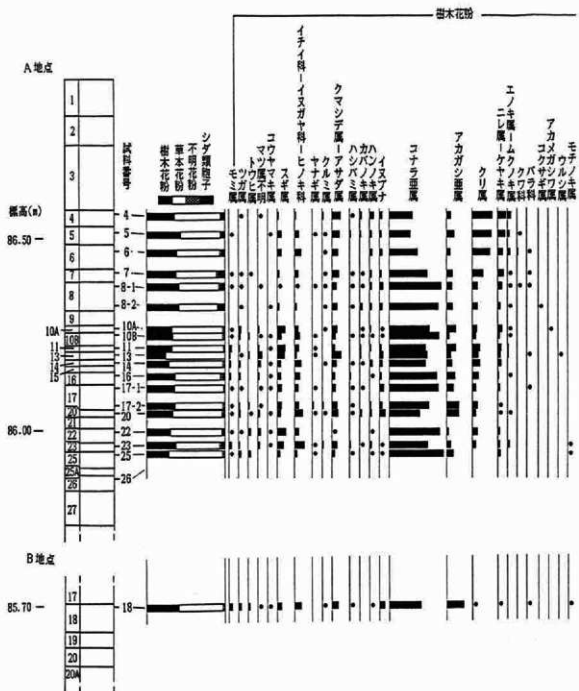


図2 二之宮宮下東遺跡5区A・B地点における花粉化石群集の変遷

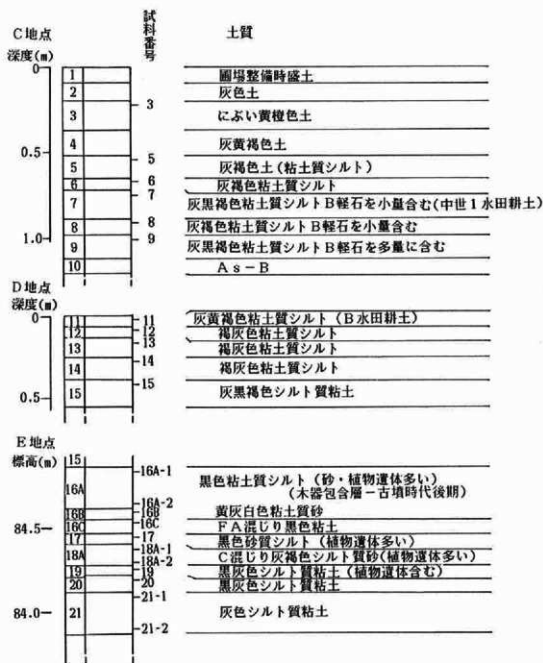


図3 二之宮宮下東遺跡3区C・D・E地点の模式柱状図および試料採取層位

今回の分析では洪水層の直上の堆積層については分析を行っていないので、氾濫による低地の植生に及ぼした影響など環境の変化は推定することはできず、また稲作についてもイネ属比率(鈴木・中村、1977)などから再検討する必要があり今後の研究課題として残される。

II. 3区谷地の花粉分析

1. 試料

試料は、遺跡内の3区北壁(C地点・D地点)と3区の南部のE地点で採取した22点である。3地点の採取層位は、E地点(26層から16A層)、D地点(15層から11層)、C地点(10層から3層)と順に谷地内の堆積層の全層位を補うように採取した。試料の採取層位および土質は図1に示した。

2. 方法および結果の表示法

1の2と同じ

3. 結果

3地点の堆積層から検出された花粉・胞子化石は、全層準を通じて樹木花粉37種類、草本花粉40種類、シダ類胞子4種類であった。しかし今回の試料には、検出される個体数が少ない試料が多かった。また、それらの検出個体数の少ない試料における化石の保存状態は良くなく、化石の外膜が壊れているものがほとんどであった。なお、D地点で比較的良好に検出された試料にも保存状態が良くない化石も含まれていた。E地点では化石の保存状態は比較的良かったのだが検出される個体数は少なかった。

3地点の連続する堆積層における樹木花粉化石群集の変遷は、E地点の18層を境に変化する。18層までは樹木花粉が総花粉・胞子に対して70%前後を占めており、その中ではコナラ亜属が70%以上を占める。17層になると高率であった樹木花粉は減少する。またその中の花粉組成も変化し、スギ属・アカガシ亜属が増加するようになる。ここでは、このような樹木花粉化石の変遷に基づいて2局地花粉化石群集帯(NME-I・II帯)を設定した。

NME-I帯(E地点21層~19層)は、コナラ亜属などの落葉広葉樹の高率出現により特徴づけられる。草本花粉は非常に少なく、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが出現する。

NME-II帯(E地点17~16A層、D地点12、11層)になると優占していた落葉広葉樹花粉の他に常緑広葉樹のアカガシ亜属、針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが増加する傾向が認められる。低率であった草本花粉は増加し、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの抽水植物が出現するようになる。また、荒地・人里においてタケニグサ属・オオバコ属・ネナシカズラ属などやソラマメ属やアズキ属近似・ナス属近似種など栽培植物の種をもつ種類が出現するようになることも注目し値する。また、イネ科の中には栽培植物とされるイネ属が含まれていた。

4. 考察

NME-I帯が認められる21層から19層が堆積した頃、遺跡周辺の台地にはナラ類などからなる落葉広葉樹林が成立していたと推定される。この森林には、カシ類などの常緑広葉樹も混生していたことが推定され、当時の森林構成種であった可能性が高い。一方、当時の低地内にはガマ属などが生育する水湿地が存在した可能性はあるが、ここではその景観を推定するほどの情報はなく今後の検討を要する。

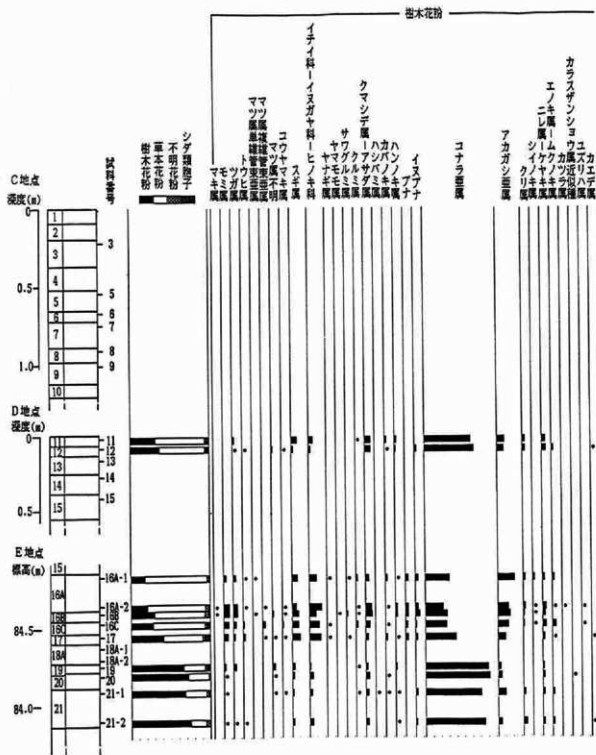
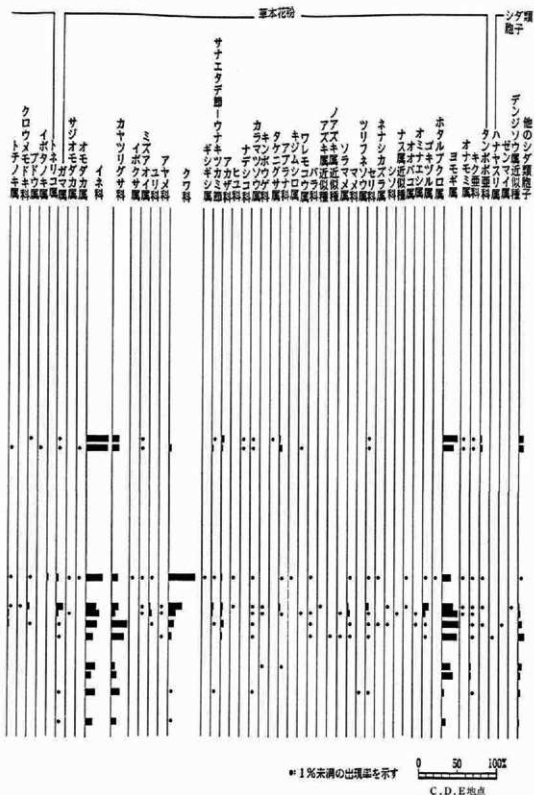


図4 二之宮宮下東遺跡3区C・D・E地点における花粉化石群集の変遷



このような遺跡周辺の植生は、NME-II帯の認められる17層が堆積する頃に急激に変化したと推定される。この変化は、主に低地で起こった変化としてとらえられ、ガマ属・オモダカ属などの抽水植物やイネ科などの草本類が繁茂する低湿地的環境に変化したことが推定される。ここで増加するイネ科のなかには栽培植物とされるイネ属が含まれており、稲作の可能性が推定される。また、人里植物とされるオオバコ属や栽培植物の種を含むアズキ属近似種などの出現なども当時の人類の植生干渉を示唆する。ここではイネ属比率(鈴木・中村, 1977)を求めているので、今後稲作の様態を明らかにする目的で再検討したいと考えている。

このようなNME-II帯での低地の変化は、堆積層の層相変化と時期を同じくすることから堆積環境の変化に起因する可能性が考えられる。さらに上記したように人里植物とされる種類や栽培植物の種を含む種類の出現などから人類の植生干渉の結果とも考えられる。このことについてはNME-I帯の頃の低地環境が明らかにされることと、地形発達過程を明らかにする必要があり、今後の研究に期待される。

一方、この当時の台地上の植生は低地での変化ほど大きくは変化せず基本的にはNME-I帯と同様な景観であったことが推定される。ただし、本帯では樹木花粉数が少なくなる傾向が認められ、このことが低地での草本類の繁茂に起因するだけではなく、森林破壊などによる減少も反映している可能性も考えられる。またこのような植生は、A地点におけるNMA-I帯の植生と類似し、時間的にもテフラにより層序対比されることから矛盾しない。

今回の堆積層中における化石の保存状態は良くなかった。これらの化石の保存状態は外膜が壊れて薄くなっているものと、外膜の所々に穴があいているものの2通りが認められた。このような結果になった原因としては堆積時あるいは堆積後の経年変化により酸化分解したこと、辻ほか(1986)が指摘しているようにバクテリアによる食害が考えられる。このような状況はいずれの場合も酸化状態のもとで起こる現象であり、本堆積域で堆積当時あるいは堆積後に離水する時期があったことが示唆される。

引用文献

- 鈴木功夫・中村 純(1977) 稲科花粉の堆積に関する基礎的研究。文部省科研費特定研究「古文化財」「稲作の起源と伝播に関する花粉分析的研究-中間報告-」(中村 純編)、P.1~10
辻 誠一郎・南木謙彦・小杉正人(1986) 茂林寺沼及び低湿原調査報告 第2集 館林の池沼群と環境の変遷史 館林市教育委員会 P. 110

5. 材の樹種同定、大型植物遺体同定、昆虫遺体同

藤根 久・吉川 純子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

二之宮宮下東遺跡は、前橋市二之宮町地内に所存する台地上および低地遺跡である。このうち低地遺跡からは、浅間火山や榛名二ツ岳から噴出したテフラ群と共に木製品や自然木が多量に出土している。これら木製品や自然木は、As-C 軽石（浅間火山噴出テフラ）やHr-F A（榛名二ツ岳噴出テフラ）により画され、明確な時代を示す。こうしたことから当時の木材利用の状況あるいは周辺植生の復元において、非常に重要な資料と考える。

ここでは、こうした木製品あるいは自然木について、その樹種の同定を行い、各時代における木製品とその樹種の関係から、木製品に対する樹種利用状況について、また大型植物遺体と合わせて周辺植生について検討する。ここで樹種同定は藤根、大型植物遺体は吉川がそれぞれ担当した。なお、一部の木材の樹種同定に関しては、農林水産省森林総合研究所木材部組織研究室の能城修一博士に御指導頂いた。また、大型植物遺体とともに検出された昆虫遺体については、愛知県立明和高等学校の森 勇一氏にその同定をお願いした。ここに両氏に感謝致します。

2. 木材の樹種同定

a. 樹種の記載と結果

ここで樹種の検討を行った試料は、木製品（実測試料）として454点、自然木（非実測試料）として1742点の合計2196点についてである。これらは、群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べ、表1~23にその結果を示す。なお、プレパラートは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。以下に、同定された各分類群の代表的な標本についての記載あるいは同定根拠について述べる。

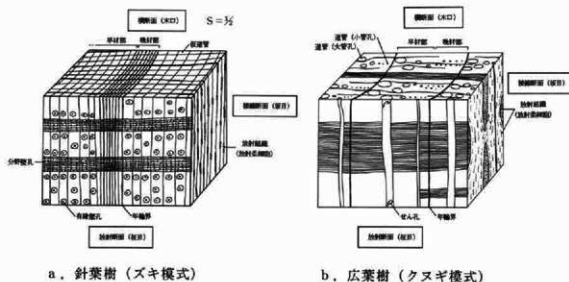


図1 材組織とその名称

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版 1a~1c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で1~3細胞高である(接線断面)。分野壁孔はヒノキ型で4個見られる。仮道管の内壁には、2本のらせん肥厚が対になって分布する(放射・接線断面)。

以上の形質から、イチイ科カヤ属のカヤの材と同定される。カヤは、宮城県以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、直径90cmに達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 図版 2a~2c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく薄壁で、晩材部仮道管は厚壁で偏平でかつ狭い(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で2~19細胞高である(接線断面)。その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じゅう状末端壁を有する(放射断面)。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ(*A. veichii*) やオオシラビソ(*A. mariesii*)、暖帯から温帯にかけて分布するモミ(*A. firma*) などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版 3a~3c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している(放射断面)。放射組織は、エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~12細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属複雑管束亜属のアカマツの材と同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する樹高30~35m、幹径60~80cmに達する常緑針葉樹である。

マツ属単維管束亜属 *Pinus* (*Haploxylon*) マツ科 図版 4a~4c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は平滑である(放射断面)。エビセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2~22細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属単維管束亜属の材と同定される。マツ属単維管束亜属は、五葉松類で北海道から九州にかけて広く見られるヒメコマツ(*P. parviflora*) とチョウセンゴヨウ(*P. koraiensis*) がある。いずれも樹高は約30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don スギ科 図版 5a~5c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、単列で2~12細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、スギ科スギ属のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版 6a~6c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で、1分野に1~2個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、2~12細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ (*C. Obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* (Linn. fil.) Sieb. et Zucc. 図版 7a~7c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、樹脂細胞は晩材部に漏在する（横断面）。分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2~4個見られる（放射断面）。放射組織は、柔細胞からなり、1~12細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヒノキ科アスナロ属のアスナロの材と同定される。アスナロは温帯を中心に分布する樹高30m、幹径80cmに達する常緑針葉樹である。

マキ属 *Podocarpus* マキ科 図版 8a~8c.

仮道管および樹脂細胞からなる針葉樹で、早材から晩材への移行は緩やかで、樹脂細胞はまんべんなく散在する（横断面）。分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個見られる（放射断面）。放射組織は、単列で2~22細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マキ科マキ属の材と同定される。マキ属の樹木には、関東以西に分布する樹高20m、幹径50cmに達するイヌマキ (*P. macrophyllus*) と和歌山県以西に分布する樹高20m、幹径80cmに達するナギ (*P. nagi*) とがある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 図版 9a~9c.

大型の管孔がやや径を減じながら単独または放射方向に2~4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性に近い同性で、1~5細胞幅、3~29細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クルミ科クルミ属のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科 図版 10a~10c.

中型の管孔が単独または放射方向あるいは塊状に2~4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、道管と放射組織との壁孔は蜂巣状で大きい（放射断面）。放射組織は、同性単列で、2~14細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ヤナギ科のハコヤナギ属の材と同定される。ハコヤナギ属の樹木には、北海道~四国に分布する樹高20m、幹径60cmに達するヤマナラシ (*P. sieboldii*) や中部以北に分布する樹高30m、幹径1.5mに達するドロノキ (*P. maximowiczii*) などがある。これらはいずれも落葉広葉樹である。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版11a~11c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である。道管と放射組織との壁孔は、蜂巣状で大きい(放射断面)。放射組織は異性単列、3~19細胞高である。また、末端細胞は長く伸び平伏細胞からなる(接線断面)。

以上の形質から、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定される。ヤナギ属の樹木には、日本において約40種程度あり、高木から低木までその大きさはさまざまである。ヤナギ属の樹木は、陽光の水湿地に生育する落葉広葉樹である。

ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gumnothysus* カバノキ科 図版12a~12c.

中型の管孔が放射方向または塊状に2~4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、20本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は同性で、単列もしくは2細胞幅、3~28細胞高で、集合放射組織も見られる(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のハンノキ属ハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ (*A. japonica*)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ (*A. hirsuta*)、そして山地に生育するヤシヤブシ (*A. firma*) などがある。ハンノキ節の樹木は、いずれも樹高20m、幹径50cmに達する落葉広葉樹である。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. 図版13a~13c.

丸みを帯びた小~中型の道管が放射方向に2~5個複合した散孔材である。木部柔組織は1細胞幅で接線状に配列している(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁には微細ならせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、ほぼ同性1~3細胞幅、4~40細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科アサダ属のアサダの材と同定される。アサダは北海道南部から九州にかけて分布する樹高20mに達する落葉広葉樹である。

クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 図版14a~14c.

やや小型の丸の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合し散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはわずかにらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性で1~3細胞幅、3~47細胞高であり、両端細胞はやや大きい(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のクマシデ属イヌシデ節の材と同定される。イヌシデ節には、イヌシデ (*C. tschonoskii*) 及びアカシデ (*C. laxiflora*) があり、暖帯から温帯にかけて分布する樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版15a~15c.

やや丸い中型の道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してほぼ均一に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は15~21本の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は同性で1~3細胞幅、1~24細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のカバノキ属の材と同定される。カバノキ属の樹木には、樹高25m、幹径1mに達するウダイカンバ (*B. maximowicziana*) や亜高山帯上部に広く分布するダケカンバ (*B. ermanii*)、

山地帯の二次林に多いシラカンバ (*B. platyphylla* var. *japonica*) など10種類ほどある (落葉広葉樹)。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版16a~16c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見えるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する (横断面)。道管のせん孔は単一である (放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版17a~17c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる (放射断面)。放射組織は、単列同性のもの集合放射組織のものがある (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ (*Q. acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版18a~18c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である (横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である (放射断面)。放射組織は、単列同性のもの集合放射組織からなる (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ (*Q. serrata*) やミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosserrata*)、カシワ (*Q. dentata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版19a~19c.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一で、チロースが見られる (放射・接線断面)。放射組織は、単列同性のもの集合放射組織のものがある (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ (*Q. acuta*) やアラカシ (*Q. glauca*) やシラカシ (*Q. myrsinaefolia*) をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹である。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版20a~20c.

丸い小型の管孔がややまばらに散在する散孔材である (横断面)。道管のせん孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状で、道管内部にはチロースが見られる (放射断面)。放射組織は同性で、細胞幅の広い複合放射組織からなる (接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のブナ属の材と同定される。日本に分布するブナ属の樹木には、温帯に生育するブナ (*F. crenata*) と中間温帯に分布するイヌブナ (*F. japonica*) の2種類があるが、材組織からは識別できない。いずれも樹高25mに達する落葉広葉樹で、ブナは日本の温帯林の主要構成要素である。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版21a~21c.

厚壁で中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である。木部柔組織は、早材部で連合翼状ないし帯状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~23細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ムクノキ属のムクノキの材と同定される。ムクノキは、関東地方以西の暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版22a~22c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、3~34細胞高で、鞘細胞をもつ(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ (*C. sinensis*) や、温帯に分布するエゾエノキ (*C. jessoensis*) などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版23a~23c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~23細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

アキニレ *Ulmus parviflora* Jacquin ニレ科 図版24a~24c.

年輪のはじめにやや大型の管孔が放射方向に延びて数個配列し、晩材部では小型の管孔が斜めに複合して配列する放射孔性の環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、ほぼ同性1~5細胞幅、3~33細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ニレ属のアキニレの材と同定される。アキニレは、本州中部以西に分布する樹高15m、幹径6cmに達する落葉広葉樹である。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版25a~25c.

年輪のはじめに大型の管孔が数個配列し、晩材部では小型の管孔が径を減じて斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性4~8細胞幅、10~42細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のニレ属の材と同定される。ニレ属の樹木には、先のアキニレ以外に北海道から

九州にかけての平野部や山麓部で普通に生える樹高30m、幹径1mに達するハルニレ(*U. davidiana* Planch. var. *japonica*)や北海道に特に多く見られる樹高25m、幹径1mに達するオセヨウ(*U. laciniata*)がある。いずれ落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 図版26a~26c.

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合して散在する環孔材で、また木部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~56細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科クワ属のヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹である。

クワ属 *Morus* クワ科 図版27a~27c.

年輪のはじめに大型の管孔が3列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部で接線方向に数個複合してやや斜め方向に連続して散在する管孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~31細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クワ科のクワ属の材と同定される。クワ属の材は、材組織から同定されるヤマグワを除いて、樹高15mに達する落葉広葉樹のケグワ(*M. cathayana*)などがある。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版28a~28c.

小型の管孔が単独または放射方向に2~4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、5~28細胞高であり、両端部では軸方向にやや長く延びている(接線断面)。

以上の形質から、モクレン科のモクレン属の材と同定される。モクレン属の樹木には、ホウノキ(*M. obovata*)やコブシ(*M. kobus*)などがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高10~20mに達する落葉広葉樹である。

クスノキ科 *Lauraceae* クスノキ科 図版29a~29c.

中型で角張った管孔が単独あるいは2~3個放射方向に複合して散在する散孔材で、軸柔細胞は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、2~12細胞高で、大型の結晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科の材と同定される。クスノキ科の樹木には、常緑広葉樹のクスノキ(*C. camphora*)やヤブニッケイ(*C. japonicum*)あるいはクロモジ(*L. umbellata*)などがある。

クロモジ属 *Lindera* クスノキ科 図版30a~30c.

厚壁で中型の管孔が単独または2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~30細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クスノキ科のクロモジ属の材と同定される。クロモジ属の樹木には、樹高6m程度のクロモジ(*L. umbellata*)やシロモジ(*L. triloba*)など本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹で

ある。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版31a~31c.

中環で角張った管孔が密に分布する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は34本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、4~17細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カツラ科カツラ属のカツラの材と同定される。カツラは、全国の温帯から暖帯にかけて分布する樹高20m、幹径60cmの落葉広葉樹で、日本特産の樹木である。

ヤブツバキ *Camellia japonica* ツバキ科 図版32a~32c.

年輪のはじめに小型の管孔がやや密に並び、晩材部にかけては小型で角張った管孔が散在する環孔性の散孔材である。また、木部柔組織は散在状である(横断面)。道管のせん孔は、19本程度の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性で1~2細胞幅、1~7細胞高で、単列部の細胞は大きく時に大型結晶が認められる(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科ツバキ属のヤブツバキの材と同定される。ヤブツバキの樹木は、屋久島や沖縄に分布する変種のヤクシマツバキ (*C. japonica* var. *macrocarpa* Masamune)を除き、一般的にツバキと呼ばれているものである。このヤブツバキは、全国の暖帯に広く分布する樹高10m、幹径30cmの常緑広葉樹である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. pro emend. Sieb. et Zucc. ツバキ科 図版33a~33c.

角張った管孔がほぼ単独に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、26本前後の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は異性単列あるいはまれに2細胞幅、1~16細胞高からなり、数細胞は大きくかつ長く伸びる方形である(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科サカキ属のサカキの材と同定される。サカキは、関東地方以西の暖帯に分布する樹高10m、幹径30cmの常緑広葉樹である。

ヒサカキ *Eurya japonica* thunb. ツバキ科 図版34a~34c.

小型の管孔が単独ないし2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は30本前後の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、1~17細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科ヒサカキ属のヒサカキの材と同定される。ヒサカキは、本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高10mに達する常緑広葉樹である。

モモ *Prunus persica* バラ科 図版35a~35c.

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~3列ほど並び、そこから径を減じた小管孔が2~4個放射方向あるいはやや斜めに複合して散在する環孔性散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には明瞭ならせん肥厚が認められる(接線・放射断面)。放射組織は異性で、1~4細胞幅、4~45細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科サクラ属のモモの材と同定される。モモは中国北部原産であるが、日本には有史

以前に渡来し、鑑賞用あるいは果樹として栽培され、一部野生状態で生えている。本種が日本に自生するという考えもある。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版36a~36c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある。道管の内部にはガム状物質が詰まっている(放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で、1~5細胞幅、2~60細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、材組織から識別されるモモやヤマザクラ(*P. jamasakura*)を除いては、温帯から亜熱帯にかけて分布する樹高10mに達するミヤマザクラ(*P. maximowiczii*)など数種類ある。

バラ属 *Rosa* バラ科 図版37a~37c.

年輪のはじめに丸い管孔が2列ほど並び、そこから径を減じて散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は異性で、1~13細胞幅、1~52細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のバラ属の材と同定される。バラ属の樹木には、蔓性のノイバラ(*R. multiflora*)から落葉低木のヤマイバラ(*R. sambucina*)までその種類は多い。

イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) C. K. Schn. マメ科 図版38a~38c.

年輪のはじめに大管孔が並び、そこから径を減じた管孔が2個程度複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状で(横断面)、接線断面においては層階状である。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~54細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マメ科イヌエンジュ属のイヌエンジュの材と同定される。イヌエンジュは、北海道から本州中部の温帯に分布し、その変種であるハネミイヌエンジュは本州中部から九州の暖帯に分布する。イヌエンジュは、樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

カマツカ *Pourthiaea villosa* (Thunb.) Decne. バラ科 図版39a~39c.

小型で丸い管孔がほぼ単独で散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~23細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科カマツカ属のカマツカの材と同定される。カマツカは、北海道から九州の丘陵地などに普通に生える樹高3mないし4m程度の落葉広葉樹である。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. トウダイグサ科 図版40a~40c.

年輪の始めにやや大きく厚壁の管孔があり、そこから順次径を減じ、晩材部では比較的厚壁の小道管が2~6個放射方向に複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性で単列まれに2細胞幅、2~16細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、トウダイグサ科アカメガシワ属のアカメガシワの材と同定される。アカメガシワは東北

地方以南の暖帯の陽光地に普通にみられる樹高10m、幹径30cm程度になる落葉広葉樹である。

コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 図版41a~41c.

小型の管孔が集合して雲紋状を呈する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、かすかにらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、3~25細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ミカン科コクサギ属のコクサギの材と同定される。コクサギは本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹(低木)である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版42a~42c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1~6細胞幅、1~38細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く、その種類も20種以上と多い。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版43a~43c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、早材部には2~3個複合した小管孔が散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一、小管孔の内壁には肥厚がある(放射断面)。木部柔細胞は連合翼状に分布し、放射組織は、同性1~4細胞幅、3~37細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ムクロジ科ムクロジ属のムクロジの材と同定される。ムクロジは関東地方以西の暖帯から亜熱帯に分布する樹高15m、幹径40cm程度になる落葉広葉樹である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. トチノキ科 図版44a~44c.

小型の管孔が単独または2~4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一である。内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、同性単列まれに1~2細胞幅で、3~17細胞高である。また、この樹種を最も特徴づけるリップルマーク(規則的な層階状配列)を示している(接線断面)。

以上の形質から、トチノキ科トチノキ属のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科 図版45a~45c.

中型の管孔が単独ないし2~3個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、2~100細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、アワブキ科アワブキ属のアワブキの材と同定される。アワブキは、本州以西の暖帯から温帯にかけて分布する樹高10m、幹径25cmに達する落葉広葉樹である。

モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版46a~46c.

小型で角張った管孔が単独あるいは2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は30

本前後の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~5細胞幅、2~36細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、モチノキ科のモチノキ属の材と同定される。モチノキ属の樹木には、本州東北部以西に分布する樹高10mに達する常緑広葉樹のモチノキ (*I. integra*) や北海道から九州の低山地などに分布する樹高8mの落葉広葉樹のアオハダ (*I. macropoda*) など23種ほどある。

ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版47a~47c.

小型で丸い管孔がほぼ単独で均一に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面および接線断面)。放射組織は、異性単列、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ニシキギ科のニシキギ属の材と同定される。ニシキギ属の樹木には、樹高15mに達する落葉高木のマユミ (*E. sieboldianus*) あるいは常緑低木のマサキ (*E. japonicus*) など18種類ほどあり、暖帯から温帯にかけて分布する。

ミツバウツギ *Staphylea bumalda* DC. ミツバウツギ科 図版48a~48c.

やや小型で角張った管孔が単独で散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、31本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、1~26細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ミツバウツギ科ミツバウツギ属のミツバウツギの材と同定される。ミツバウツギは、暖帯から温帯にかけて分布する樹高3mほどの落葉広葉樹である。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版49a~49c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列程度並び、晩材部では小型の管孔が塊状あるいは放射方向に複合して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は、単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~35細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クロウメモドキ科のケンボナシ属の材と同定される。ケンボナシ属の樹木には、ケンボナシ (*H. dulcis*) やケンボナシ (*H. tomentella*) があり、いずれも樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹で、ケンボナシが全国の温帯に、ケンボナシが本州西部や四国などに分布する。

グミ属 *Elaeagnus* グミ科 図版50a~50c.

年輪のはじめに中型の管孔が1列並び、そこから径を減じた小管孔が単独で散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1~13細胞幅、2~50細胞高以上である(接線断面)。

以上の形質から、グミ科のグミ属の材と同定される。グミ属の樹木には、アキグミ (*E. umbellata*) やマメグミ (*E. montana*) などが、いずれも樹高3mほどの落葉広葉樹である。

ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版51a~51c.

小型の管孔が接線方向からななめ接線方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は異性で、2~6細胞幅、4~55細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ウコギ科のウコギ属の材と同定される。ウコギ属の樹木には、落葉高木のコシアブラ(*A.*

sciadophylloides)を除く、樹高2～5mの落葉低木のヤマウコギ (*A. spinosus*)や樹高1mの落葉低木のオカウコギ (*A. nipponicus*) などがある。

ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科 図版52a～52c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、以後径を減じた管孔が接線方向に帯状に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1～5細胞幅、3～31細胞高である(接線断面)。

以上の形質からウコギ科ハリギリ属のハリギリの材と同定される。ハリギリは温帯から暖帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版53a～53c.

小型の管孔が放射方向に2～5個複合し、早材部ではやや径を減じて放射方向に2～5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は10程度の太い横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1～3細胞幅、2～12細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ (*S. japonica*) や全国の温帯に分布するハクウンボク (*S. obassia*) あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク (*S. shirasawana*) などがある。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版54a～54c.

年輪のはじめに大型の管孔が1～3個並び、以後径を減じた管孔がやや塊状に分布する環孔材である。また、木部柔細胞は周囲状もしくは連合翼状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1～3細胞幅、3～20細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ (*F. japonica*) やシオジ (*F. spaethiana*) あるいはヤチダモ (*F. mandshurica*) があり、全国の温帯に分布する。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版55a～55c.

やや大型の丸く厚壁の管孔が単独もしくは2～5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1～3細胞幅、3～53細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定される。ムラサキシキブ属の樹木には、ムラサキシキブ (*C. japonica*) やヤブムラサキ (*C. mollis*) があり、いずれも樹高3m程度の本州、四国、九州に分布する落葉広葉樹である。

キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ゴマノハグサ科 図版56a～56c.

年輪の初めに大型で丸い管孔が単独あるいは2個放射方向に複合し、晩材部では丸い小型～中型の管孔が周囲状柔細胞に囲まれて散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1～3細胞幅、4～20細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ノウゼンカズラ科キリ属のキリの材と同定される。キリは、東北・関東地方北部においてよく生育する樹高10mほどの落葉広葉樹である。キリは中国中部原産などと考えられている。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex. Graebn. スイカズラ科 図版57a~57c.

小型の管孔が年輪のはじめにやや密に並び、以後接線方向に2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~4細胞幅、4~12細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、スイカズラ科ニワトコ属のニワトコの材と同定される。ニワトコは樹高5m程度の全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

根材 図版58a~58c.

小型で丸い管孔が単独あるいは2個複合して散在する散孔材で、木繊維の径はやや大きい(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~5細胞高、40細胞高である。

草本類 図版59a~59c.

中型の管孔が単独あるいは2~3個放射方向に複合して散在する散孔材と思われる(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、背は非常に高い(接線断面)。

b. 考察

1) 出土木材の樹種

当遺跡から出土した木製品(実測試料)および自然木(非実測試料がすべて自然木ではない)において検出される樹種の分類群は、全体としては61分類群に達し、木製品では35分類群、自然木では55分類群、両者に共通して検出される分類群は33分類群である。出現頻度の高い分類群を見ると、コナラ属クヌギ節(約44.9%)が最も多く、次いでコナラ属コナラ節(約13.3%)、モモ(約7.6%)、ヤマグワ(約6.4%)、クリ(約6.1%)、モミ属(約3.0%)、ケヤキ(約2.6%)、サクラ属(約1.5%)、カエデ属(約1.1%)、アカメガシワ(約1.0%)、トチノキ(約0.9%)、エノキ属(約0.9%)、イヌシデ節(約0.7%)、ヒノキ属(約0.5%)などである。

非実測試料について各時代ごとにその樹種分類群を見ると、4世紀前半のAs-C下およびAs-C下砂層では、4分類群と少ない。このうち最も多く出現する分類群はコナラ属クヌギ節(51%)で、他はコナラ属コナラ節(43%)である(表24)。また、Hr-F A下においても検出される分類群は少なく10分類群で、コナラ属コナラ節(約70.3%)が最も多く、次いでコナラ属クヌギ節(約18.5%)である。このHr-F A下より下位層から出土する自然木の樹種構成は、点数が少ないことも関係するが、全体で10分類群と少なく、当時の周辺樹木組成を考えるとやや貧弱で偏りが著しい。

一方、16層から検出される分類群は、樹皮・草本類を除いて51分類群に達する。このうち最も多く出現する分類群はコナラ属クヌギ節(約48.8%)で、次いでモモ(約9.3%)、ヤマグワ(約7.6%)、クリ(約6.2%)、コナラ属コナラ節(約3.7%)、モミ属(約3.4%)、ケヤキ(約2.8%)、サクラ属(約1.8%)、カエデ属(約1.4%)、アカメガシワ(約1.3%)、トチノキ(約1.1%)、エゴノキ属(約1.1%)、エノキ属(約1.0%)、クマシデ属イヌシデ節(約0.9%)などである。このうち、サクラ属に属するモモは、これまで県下の他遺跡では例を見ないほど多く検出されている。大型植物遺体の結果では、試料番号23、36などにおいてモモ殻が多量に産出し、完形に限っても650個出土している(大型植物遺体参照)。当時周辺において群生していたことも考えられるが、鋸などの木製品としても多く検出されていることから、加工に際し数個体から分

割・拡散した可能性も考えられる。

当遺跡の西側約1～2kmに位置する二之宮千足遺跡での花粉分析の結果では、コナラ属コナラ亜属（樹木分類群におけるコナラ節およびクスギ節からなる）が優占し、他にスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが比較的高率に出現する。なお、Hr-F A下の層位からこのコナラ亜属の花粉化石が減少し、同時にアカガシ亜属やクマシデ属-アサダ属あるいはイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが相対的に増加している。コナラ亜属の減少は人間の生業活動による分布域の減少と推定されている（バリノ・サーヴェイ卿、1992）。また、Hr-F A下より下位層と16層では、出現分類群数に大きな違いがあると同時に、コナラ節とクスギ節の出現率が逆転していることが注目される。なお、この隣接する千足遺跡の花粉化石の結果では、先のモモが属するサクラ属の花粉化石は検出されていない。

2) 木製品とその樹種

各時代における木製品（実測試料）の樹種分類群は、全体としては35分類群が検出されている（表25）。このうち最も多く検出される分類群はコナラ属クスギ節（約38.5%）で、次いでモミ属（約8.1%）、クリ（約7.9%）、ケヤキ（約7.0%）、コナラ節（約6.2%）、モモ（約6.2%）、ヤマグワ（約4.2%）、ヒノキ属（約3.5%）、カバノキ属（約2.4%）、カヤ（約2.2%）などである。非実測試料と比較した場合、実測試料においてのみ検出される分類群は、アスナロ（1点）、マキ属（2点）、ニレ属（1点）、ヤブツバキ（1点）、ムラサキシキブ属（2点）、根材（1点）である。このうちアスナロは21号井戸内からの曲げ物底板として、マキ属は37溝および5区杭状として、ニレ属は16層中、ヤブツバキは16層中木製品として、ムラサキシキブ属は16層中木製品あるいは不明木製品として、また根材は16層中にそれぞれ検出されている。このうちマキ属は、関東以西に分布するイヌマキなどがあるが、県下でははじめての検出例ではないかと思われる。非実測試料に対して高率で検出される主な分類群としては、カヤ、モミ属、ヒノキ属、カバノキ属、アカガシ亜属、ケヤキ、トチノキなどである。これらは木製品としての樹種選択性の強い分類群と位置付けられると考えられる。二之宮宮下東遺跡から出土する木製品において特徴的な分類群としてはモモがある。これは、先にも述べたように非実測試料においても1742点中133点（約7.6%）検出されている。モモは実測試料および非実測試料とも16層を中心にHr-F A下などから検出されている。このモモの大半が鍾として出土している。高崎市の新保遺跡において弥生時代後期～古墳時代前期において杭や分削材あるいは自然木として検出された例はあるが（鈴木・能城（1988）、鈴木・能城（1986））、二之宮宮下東遺跡のように多量に製品や自然木において検出されたことは注目される。

前出の新保遺跡などにおいても見られる現象であるが、コナラ属のうちクスギ節の樹木が製品に多く利用されるのに対し、コナラ属のコナラ節は自然木として多く検出されるものの製品としての利用度は低いことである。これは、一般的にコナラ節の樹木はクスギ節の樹木に比べ質が劣るとされているが、製品とした場合、形状が保たれにくいとか折れ易いなどの性質を示すものと思われる。こうしたことから、木材の性質をある程度経験的に理解し利用しているものと思われる。クスギ節の樹木の利用は、焼失家屋からなる住居跡の炭化材（建築材）においてもよく見られる事柄である。二之宮宮下東遺跡から出土する木製品のうち、このクスギ節の樹木からなるものは、杭類、構架材、板材、割材、棒類、鋤、柄、鎌、刀状など土木材や建築材あるいは農具類などによく利用されている。

木製品に注目すると、杭類や柄類などでは、クスギ節の利用が多いものの、比較的多くの種類を利用していると言える。

3. 大型植物遺体同定

試料は、二之宮宮下東遺跡で現地取り上げられた種実とブロック試料である。分析試料は№65を除き16層から採取された試料であり、1～65までの番号が付けられている。これらの試料番号に従って同定、作表を行った。表には65を除く全試料をまとめてあり、分類群別、産出部位別に個数を数えた。なお、試料65は、123号土坑出土であり別に記載する。

また、昆虫、種子用としてブロック試料(2241、2242)が採取されている。これら試料については、約100ccを水洗し、0.25mm目の篩かけをしたのち、残渣を顕微鏡で同定した。

次に、おおむね層位ごとに産出分類群を検討する。

13から15層は、オニグルミとモモの核を産出している。試料19からはオニグルミの変種であるヒメグルミを産出している。

16層からはオニグルミ、モモのほか、サクラ属の核も多く産出する。また、少しではあるが、ヒョウタン、ウリ属メロン仲間、カナムグラ、ヒメグルミ、コナラ属、サンショウ、クリを産出する。

溝及び水田からはオニグルミ、モモ核のほか、サクラ属、ヒメグルミ、イヌガヤを産出する。123号土坑出土の試料65は、炭化米が5つの容器に入っており、総個数およそ1万から1万3千と算定される。容器1つについて同定したところ、総個数およそ2千個のうち、外穎がついたものがほとんどで、外穎がとれた炭化胚乳は100個、外穎がついたアワが30個であった。収穫したのちに籾の状態で炭化し、穎の取れているものは、おそらく採取時と容器に出入れしている間に穎が擦れ取れた可能性が高い。

ブロック試料の同定結果を表3に示してある。産出分類群数、個体数ともに少ない。イネの穎とともにヘラオモダカやイボクサも産出することから、水田の堆積物と思われる。また、2試料ともシロザ近似種が多く、カタバミ属やクワクサなどとともに水田周辺に生育していたと思われる。

次に産出した分類群のうち一部について若干の記載を行う。

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.)、ヒメグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr. var. *cordiformis* (Maxim.) Rehder)：核を割り、中の仁を食用にする。ヒメグルミはオニグルミと同様の川岸などにオニグルミと混在している場合が多く、山中で確認されていないため、栽培品か自生していたかどうかは分かっていない。

コナラ属 (*Quercus*)：乾燥しているが、果実が大きく、コナラ属のなかでもナラガシワなどの果実が大きい種類ではないかとおもわれる。

モモ (*Prunus persica* (Linn.) Batsch)：核を多量に産出しているため、食用にした後に廃棄したか、モモ畑の可能性が高い。大きい核は35mm、小さいものでは19mmと多様である。ネズミ等の仲間による被害を受けている核も多数産出している。完形の核については長さ、幅、厚さの計測値を表に示してある。長さが小さい核は、長さ／幅の値が小さく、丸みを帯びていて厚みがあるという古代モモの特徴と一致している。特に24.1mm以下のものは、長さ／幅の値が1.00以下となるものがある。現在食用とされているモモの核は、長さが35mm以上のものが多く、長さが幅に比してかなり長い。また、表面の彫紋も、凹凸が激しい。

サクラ属(*Prunus*):核は現在のアンズよりは小さく、食用のミザクラよりは大きい。形態はミザクラの様に球形ではなく、アンズのように薄くもなく、モモ核をそのまま小さくしたような形である。参考のために計測値を表に示してある。

イネ (*Oryza sativa* Linn.):産出されたほとんどが外穎がついたままの状態であった。穎が取れているものも、僅かに穎が所々に残っている。参考のために穎がついた状態(炭化穎)の計測値と、穎が取れた状態(炭化米)の計測値を表に示す。表中、小さく厚みのない炭化米は、しいな米(未熟)である。

アワ (*Setaria italica* Beauv.):穎がついたものだけを産出した。エノコログサ属と区別しにくいのが、穎の表面形態と、膨らみぐあいからはアワで間違いないと思われる。

ヒョウタン (*Lagenaria leucantha* Rusby var. *Gourda* Makino):果皮は破片であるが、果実の花柱がついている尻にごく近い部分である。種子も産出しているので、ヒョウタンと同定した。

ウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo*):個数が少ないので確定的なことは言及できないが、種子は8mm程度と、大きく、観察すると、完熟しているものばかりである。メロン仲間の中でも、完熟したものを食用にする種類かも知れない。

4. 昆虫遺体同定

試料は、大型植物遺体同定を行ったものと同一のブロック試料(2241、2242)である。試料は、各試料を手で分割し、分割面から検出した。検出された昆虫片(甲虫片)は、4片でいずれも同一種である。

セマルガムシ *Coelostoma stultum* (WALKER)、左鞘翅

鞘翅は2.0~3.0mm前後で、黒色である。上翅は密に点刻されている(図版)。分布は、本州、四国、九州、琉球;台湾、中国、東南アジア、インド、スリランカ。(森本ほか、1989)

このセマルガムシは、水田や水路、水深1m程度の止水域に生息する水生・食糧性昆虫である。

引用文献

- 森本 桂ほか(1989):原色日本甲虫図鑑(II)、保育社
バリノ・サーヴェイ師(1992):二之宮千足遺跡の古環境解析。二之宮千足遺跡(自然科学・分析編)、建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、p61-111。
鈴木三男・熊城修一(1986):新保遺跡出土加工木の樹種。「新保遺跡I・弥生、古墳時代大講編-関越自動車道(新潟編)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集-」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、p71-94。
鈴木三男・熊城修一(1988):新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古環境復元。「新保遺跡II・弥生、古墳時代大講編-関越自動車道(新潟編)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集-」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、p435-453。

表1. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (実測No.1)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
1	16層	鞍轡	アカガシ亜属	51	16層		
2	〃	刀状木製品	コナラ節	52	〃	容器	モミ属
3	〃	〃	クスギ節	53	〃	弓	カヤ
4	〃	〃	〃	54	〃	用途不明木製品	ムラサキシキブ属
5	〃	〃	〃	55	〃	ヘラ状木製品	ヤマグワ
6	〃	〃	ムクノキ	56	〃	〃	モミ属
7	〃	ナスビ形着柄鋸歯	クスギ節	57	〃	整杆	アカガシ亜属
8	〃	〃	カバノキ属	58	〃	横槌	モモ
9	〃	〃	クスギ節	59	〃	〃	クスギ節
10	〃	〃	カバノキ属	60	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	61	〃	用途不明木製品	ヤマグワ
12	〃	〃	〃	62	〃	鎌	クスギ節
13	〃	〃	クスギ節	63	〃	〃	〃
14	〃	〃	アカガシ亜属	64	〃	〃	〃
15	〃	ナスビ形着柄鋸歯?	クスギ節	65	Hr-FA 下	柱目板	〃
16	〃	〃	〃	66	16層	杭状	カマツカ
17	〃	板柱目板	ケヤキ	67	〃	棒状木製品	ケヤキ
18	〃	直柄鋸	〃	68	〃	用途不明木製品	クスギ節
19	〃	〃	〃	69	〃	柱目板	ケヤキ
20	〃	鉄斧柄	クスギ節	70	〃	用途不明木製品	カバノキ属
21	〃	〃	〃	71	〃	〃	モミ属
22	〃	〃	サクラ属	72	〃	横槌	ケヤキ
23	〃	膝柄	モミ属	73	〃	柱目板	〃
24	〃	鉄斧柄	クスギ節	74	〃	横槌	カバノキ属
25	〃	鉄柄	ヤマグワ	75	〃	板目板	ケヤキ
26	〃	〃	ムクノキ	76	〃	棒状木製品	クスギ節
27	〃	鎌柄木製品	クスギ節	77	〃	柱目板	〃
28	〃	有頭状木製品	ヤマグワ	78	〃	用途不明木製品	〃
29	〃	〃	クリ	79	〃	〃	カバノキ属
30	〃	膝柄	ヤマグワ	80	〃	柱目板	クスギ節
31	〃	鎌柄	クスギ節	81	〃	棒状木製品	〃
32	〃	〃	カバノキ属	82	〃	〃	アカガシ亜属
33	〃	〃	カエデ属	83	〃	〃	クスギ節
34	〃	〃	アカガシ亜属	84	〃	〃	クリ
35	〃	〃	ケヤキ	85	〃	棒状木製品	モミ属
36	〃	〃	クスギ節	86	〃	〃	クスギ節
37	〃	〃	〃	87	〃	〃	モミ属
38	〃	ナスビ形着柄鋸歯	〃	88	〃	杭状	トネリコ属
39	〃	鎌柄木製品?	〃	89	〃	〃	クスギ節
40	〃	〃	イヌシダ節	90	〃	用途不明木製品	モミ属
41	〃	用途不明木製品	クスギ節	91	〃	板目板	〃
42	〃	鎌柄	カエデ属	92	〃	〃	〃
43	〃	刀状木製品?	クスギ節	93	〃	用途不明木製品	カエデ属
44	〃	〃	〃	94	〃	有頭状木製品	カヤ
45	〃	下駄	ケヤキ	95	〃	鎌	クスギ節
46	〃	〃	〃	96	Hr-FA 下	〃	モモ
47	〃	〃	〃	97	〃	〃	〃
48	〃	柄杓	〃	98	〃	〃	〃
49	〃	容器	クリ	99	〃	〃	〃
50	〃	〃	〃	100	〃	〃	〃

表2. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (実測No.2)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
101	Hr-FA 下	鍾	モモ	151	16層	構築部材	クリ
102	〃	〃	〃	152	〃	〃	モミ属
103	〃	〃	クスギ節	153	〃	杭状	クリ
104	〃	〃	〃	154	〃	構築部材	〃
105	〃	〃	〃	155	〃	板目板	クスギ節
106	〃	〃	〃	156	〃	用途不明木製品	ヒノキ属
107	〃	〃	〃	157	〃	杭状	コナラ節
108	16層	〃	〃	158	〃	板目板	クリ
109	〃	〃	〃	159	〃	用途不明木製品	コナラ節
110	〃	櫛?	ケヤキ	160	〃	割材	クスギ節
111	〃	鍾	モモ	161	〃	板目板	ヒノキ属
112	〃	〃	〃	162	〃	板目板	ケヤキ
113	〃	〃	〃	163	〃	用途不明木製品	クスギ節
114	〃	〃	〃	164	〃	板目板	ヒノキ属
115	Hr-FA 下	横楕	カヤ	165	Hr-FA 下	板目板	ケヤキ
116	〃	鍾	モモ	166	16層	棒状木製品	モミ属
117	〃	〃	クスギ節	167	〃	構築部材	クスギ節
118	〃	〃	〃	168	〃	用途不明木製品	モミ属
119	〃	〃	〃	169	〃	板目板	トチノキ
120	〃	〃	〃	170	〃	用途不明木製品	ケヤキ
121	15層	直柄鋸未製品	〃	171	〃	〃	〃
122	〃	曲げ物底板	ヒノキ属	172	〃	構築部材	クスギ節
123	〃	鋸?	クスギ節	173	〃	用途不明木製品	〃
124	〃	曲げ物底板	ヒノキ属	174	〃	板目板	モミ属
125	〃	〃	〃	175	15層	用途不明木製品	クスギ節
126	〃	〃	〃	176	16層	〃	〃
127	〃	板目板	〃	177	〃	〃	ヤブツバキ
128	〃	曲げ物底板	〃	178	〃	棒状木製品	クスギ節
129	〃	用途不明木製品	〃	179	〃	〃	〃
130	〃	〃	アサダ	180	〃	用途不明木製品	トチノキ
131	〃	藤柄	クリ	181	Hr-FA 下	〃	クリ
132	〃	用途不明木製品	クスギ節	182	16層	〃	ヤマガワ
133	Hr-FA 下	〃	カヤ	183	Hr-FA 下	板目板	クリ
134	〃	鍾	モモ	184	16層	用途不明木製品	カヤ
135	37溝	曲げ物底板	モミ属	185	〃	割材	クスギ節
136	〃	杭状	クリ	186	〃	〃	〃
137	〃	〃	マキ属	187	〃	割材	〃
138	12井戸	火きり白	—	188	〃	杭状	カヤ
	23井戸	〃	—	189	Hr-FA 下	〃	クリ
140	21井戸	曲げ物底板	ヒノキ属	190	16層	〃	クスギ節
141	〃	〃	アスナロ	191	〃	板板目板	ケヤキ
142	23井戸	櫛	ヒノキ属	192	〃	板目板	クリ
				193	〃	構築部材	〃
145	23井戸	栓状木製品	カマツカ	194	〃	〃	クスギ節
146	23号井戸	曲げ物底板	ヒノキ属	195	〃	〃	〃
148	16層	構築部材	クスギ節	196	Hr-FA 下	杭状	〃
149	〃	目盛板	モミ属	197	16層	〃	〃
150	〃	構築部材	ケヤキ	198	〃	〃	〃
				199	〃	〃	イヌシダ節
				200	〃	〃	ケンボナシ属

表3. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (実測No.3)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
201	16層		トチノキ	249	16層	有頭状木製品	アカガシ亜属
202	〃	杭状	クスギ節	250	〃	割材	クスギ節
203	〃	〃	サクラ属	251	〃	用途不明木製品	〃
204	〃	〃	ヤマグワ	252	〃	杭状	〃
205	〃	棒状木製品	モミ属	253	〃	〃	ムクロジ
206	〃	杭状	アカメガシフ	254	〃	板目板	モミ属
207	〃	〃	ヤナギ属	255	〃	木片	クスギ節
208	〃	〃	コナラ節	256	〃	用途不明木製品	ケヤキ
209	〃	〃	根	257	〃	杭状	クスギ節
210	〃	〃	クスギ節	258	〃	〃	クワ
211	〃	杭状	〃	259	〃	杭状	クスギ節
212	〃	〃	〃	260	〃	〃	ケヤキ
213	〃	〃	〃	261	〃	杭状	クスギ節
214	〃	杭状	〃	262	〃	棒状木製品	〃
215	〃	〃	カエデ属	263	〃	有頭状木製品	〃
216	〃	〃	〃	264	〃	棒状木製品	クワ
217	〃	〃	〃	265	〃	杭状	モミ属
218	〃	〃	クスギ節	266	〃	〃	ヤマグワ
219	〃	杭状	〃	267	〃	有頭状木製品	クワ
220①	〃	〃	〃	268	〃	用途不明木製品	アカガシ亜属
220②	〃	棒状木製品	一	269	〃	板目板	クワ
221	〃	板目板 or 割材	クスギ節	270	〃	杭状	モミ属
222	〃	杭状	ヤマグワ	271	〃	板目板	クスギ節
223	〃	〃	モモ	272	Hr-FA 下	容器	モミ属
224	〃	用途不明木製品	クワ	273	〃	木片	クスギ節
225	〃	割材	クスギ節	274	16層	割材	クワ
226	〃	杭状	〃	275	〃	〃	クスギ節
227	〃	〃	〃	276	〃	板目板	〃
228	〃	〃	〃	277	〃	杭状	〃
229	〃	〃	〃	278	〃	〃	ヒノキ属
230	〃	有頭状木製品	カヤ	279&280	〃	用途不明木製品	モミ属
231	〃	板目板	クスギ節	281	〃	未製品	クワ
232	〃	割材	クワ	283	16層	板目板	モモ
233	〃	〃	コナラ節	284	Hr-FA 下	用途不明木製品	ケヤキ
234	〃	杭状	クスギ節	285	〃	板目板	クワ
235	〃	棒状木製品	クワ	286	〃	横敷	クスギ節
236①	〃	〃	ケヤキ	287	〃	〃	〃
236②	〃	〃	クスギ節	288	16層	用途不明木製品	モミ属
237	〃	棒状木製品	ヒノキ属	289	〃	〃	クスギ節
238	〃	杭状	クスギ節	290	〃	〃	イヌシダ節
239	〃	〃	〃	291	〃	木片	グミ属
240	〃	〃	ヤマグワ	292	〃	棒状木製品	モミ属
241	〃	〃	クスギ節	293	〃	〃	イヌシダ節
242	〃	杭状	〃	294	〃	〃	カバノキ属
243	〃	縄	モモ	295	〃	〃	クスギ節
244	〃	杭状	〃	296	〃	板目板	〃
245	〃	〃	クスギ節	297	〃	杭状	〃
246	〃	〃	サクラ属	298	〃	板目板	〃
247	〃	〃	ヤマグワ	299	〃	用途不明木製品	ケヤキ
248	〃	棒状木製品	クスギ節				

表4. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (実測No.4)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
300	16層	棒状木製品	クスギ節	347	16層	タモ割?	モモ
301	〃	杭状	モモ	348	〃	〃	エノキ属
302	〃	棒状木製品	クスギ節	349	〃	〃	クスギ節
303	〃	板目板	〃	350	〃	杭状	〃
304	〃	杭状	モモ	351	〃	〃	〃
305	〃	板目板	クスギ節	352	〃	木片?	クリ
306	〃	用途不明木製品	クリ	353	〃	用途不明木製品	クスギ節
307	〃	容器	エノキ属	354	〃	杭状	クリ
308	〃	杭状	モモ	355	〃	〃	クスギ節
309	〃	〃	ケヤキ	356	〃	棒状木製品	サクラ属
310	〃	用途不明木製品	クスギ節	357	〃	〃	コナラ節
311	〃	〃	モミ属	358	〃	杭状	ヤマグワ
312	〃	板目板	ケヤキ	359	〃	〃	トチノキ
313	〃	〃	〃	360	〃	〃	マツ属単管末重属
314	〃	〃	クスギ節	361	〃	〃	クスギ節
315	〃	〃	〃	362	〃	〃	イヌシダ節
316	〃	〃	モミ属	363	〃	〃	クスギ節
317	〃	用途不明木製品	クスギ節	364	〃	〃	〃
318	〃	〃	ヤマグワ	365	〃	木片	ヤマグワ
319	〃	〃	ニレ属	366	〃	〃	クスギ節
320	〃	〃	ケヤキ	367	〃	杭状	モミ属
321	〃	〃	カヤ	368	〃	〃	〃
322	〃	〃	クスギ節	369	〃	棒状木製品	〃
323	〃	杭状	ヤマグワ	370①	〃	杭状	クスギ節
324	〃	用途不明木製品	クスギ節	370②	〃	用途不明木製品	モモ
325	〃	棒状木製品	〃	371	〃	〃	コナラ節
326	〃	杭状	モモ	372	〃	〃	ムラサキシキブ属
327	〃	〃	ケヤキ	373	〃	〃	クスギ節
328	〃	杭状	モモ	374	〃	〃	トチノキ
329	〃	〃	クスギ節	375	〃	〃	モモ
330	〃	〃	ヤマグワ	376	〃	〃	クスギ節
331	〃	板板目板	ケヤキ	377	〃	〃	〃
332①	〃	〃	トチノキ	378	〃	〃	〃
332②	〃	〃	コナラ節	379	〃	〃	クリ
333	〃	〃	クスギ節	380	〃	〃	クスギ節
334	〃	杭状	ヤマグワ	381	〃	〃	トチノキ
335	〃	〃	〃	382	〃	〃	アカメガシワ
336	〃	〃	モミ属	383	〃	板目板	クスギ節
337	〃	〃	クスギ節	384	〃	〃	モミ属
338	〃	木片	カヤ	385	〃	〃	モモ
339	〃	杭状	アカメガシワ	386	〃	〃	エノキ属
340	〃	〃	モミ属	387	〃	杭状	クスギ節
341	〃	杭状	クスギ節	388	〃	〃	〃
342	〃	〃	〃	389	〃	板目板	〃
343	〃	板目板	〃	390	〃	杭状	モモ
344	〃	〃	〃	391	〃	構築部材	クリ
345①	〃	クリ	〃	392	Hr-FA 下	〃	〃
345②	〃	〃	〃	393	352土坑	割材	コナラ節
345③	〃	〃	〃	394	Hr-FA 下	〃	〃
346	〃	〃	クスギ節	395	〃	〃	クリ

表5. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (実測No 5)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
396	Hr-FA 下		ハリギリ	444	5区不詳	杭状	マキ属
397	〃	桎目板	クスギ節	445	21井戸	〃	アカマツ
398	〃	未製品?	コナラ節				
399	〃		〃				
400	〃		〃				
401	〃		〃	449	16層	木片	クスギ節
402	〃		〃	550	〃	桎目板	クスギ節
403	〃	桎目板	〃	551	〃	割材	〃
404①	〃		クスギ節	552	〃	棒状木製品	モミ属
404②	〃		〃	553	〃	杭状	クスギ節
405	〃		〃	554	〃	割材	モミ属
406	〃	棒状木製品	カバノキ属	555	〃	桎目板	クスギ節
407①	不詳		ヤナギ属	556	〃	〃	モミ属
407②	〃		ケヤキ				
408	Hr-FA 下	桎目板	クスギ節	902	15層	原材?	サクラ属
409	〃	〃	〃	2268	20号井戸	漆碗	ブナ属
410	〃	割材	コナラ節				
411	〃	棒状木製品	モミ属				
412	〃		〃				
413	〃	割材	コナラ節				
414	〃	板目板	〃				
415	〃		カバノキ属				
416	〃		コナラ節				
417	〃		〃				
418	〃	用途不明木製品	ヤマグツ				
419	〃		クスギ節				
420	〃	杭状	〃				
421	〃	〃	〃				
422	〃	〃	〃				
423	〃	割材	〃				
424	〃	〃	〃				
425	As-C 下	〃	コナラ節				
426	〃		〃				
427	〃		〃				
428	〃		〃				
429	〃	原材?	〃				
430	〃		〃				
431	〃		〃				
432	37溝	杭状	サクラ属				
433	49溝	〃	タリ				
434	50溝	〃	クスギ節				
435	〃	〃	〃				
437	49溝	杭状	クスギ節				
438	〃	〃	エノキ属				
439	50溝	〃	カヤ				
440	1号旧河道	〃	クスギ節				
441	44溝	〃	トネリコ属				
442	49溝	〃	クスギ節				
443	〃	〃	ヒノキ属				

表6. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No.1)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
447	16層		クリ	497	16層		モミ属
448	〃		アカマツ	498	〃		クスギ節
449	〃		クスギ節	499	〃		モチノキ属
450	〃		ケヤキ	500	〃		クスギ節
451	〃		〃	501	〃		ケヤキ
452	〃		クスギ節	502	〃		アサダ
453	〃		コナラ節	503	〃		クスギ節
454	〃		モミ属	504	〃		クリ
455	〃		〃	505	〃		モモ
456	〃		クスギ節	506	〃		クスギ節
457	〃		〃	507	〃		ブナ属
458	〃		〃	508	〃		モミ属
459	〃		ケヤキ	509	〃		エノキ属
460	〃		モミ属	510	〃		トチノキ
461	〃		〃	511	〃		モミ属
462	〃		クスギ節	512	〃		〃
463	〃		モミ属	513	〃		クスギ節
464	〃		トチノキ	514	〃		〃
465	〃		ヤマグワ	515	〃		〃
466	〃		ケヤキ?	516	〃		〃
467	〃		クリ	517	〃		〃
468	〃		クスギ節	518	Hr-FA 下		コナラ節
469	〃		モモ	519①	〃		〃
470	〃		ケヤキ	519②	〃		〃
471	〃		クリ	520	〃		〃
472	〃		クスギ節	521	〃		〃
473	〃		〃	522	〃		〃
474	〃		モモ	523	〃		〃
475	〃		クリ	524	〃		〃
476	〃		クスギ節	525	〃		〃
477	〃		キリ	526	〃		〃
478	〃		モミ属	527	〃		〃
479	〃		ケヤキ	528	〃		〃
480	〃		モモ	529	〃		〃
481	〃		ヤマグワ	530	〃		〃
482	〃		クスギ節	531	〃		〃
483	〃		モモ	532	〃		〃
484	〃		クスギ節	533	〃		〃
485	〃		〃	534	〃		〃
486	〃		アサダ	535	〃		ヤマグワ
487	〃		クリ	536	〃		コナラ節
488	〃		クスギ節	537	〃		〃
489	〃		ケヤキ	538	〃		〃
490	〃		アカガシ属	539	〃		〃
491	〃		モミ属	540	〃		クスギ節
492	〃		クスギ節	541	〃		〃
493	〃		クリ	542	〃		コナラ節
494	〃		モミ属	543	〃		〃
495	〃		ヤマグワ	544	〃		〃
496	〃		クスギ節	545	〃		〃

表7. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No.2)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
546	Hr-FA 下		コナラ節	596	16層		クスギ節
547	#		#	597	#		アカガシ亜属
548	#		クスギ節	598	#		モミ属
549	#		#	599	#		カエデ属?
				600	#		クスギ節
				601	#		イヌシダ節
				602	#		クスギ節
				603	#		カエデ属
				604	#		クスギ節
				605	#		#
				606	#		ヤナギ属
557	16層		モミ属	607	#		クリ
558	#		クリ	608	#		クスギ節
559	#		クスギ節	609	#		アワブキ
560	#		#	610	#		クスギ節
561	#		#	611	#		#
562	#		ケヤキ	612	#		ケヤキ
563	#		クスギ節	613	#		イヌシダ節
564	#		#	614	#		モモ
565	#		モミ属	615	#		アカメゴシノ
566	#		クスギ節	616	#		ケヤキ
567	#		#	617	#		アワブキ
568	#		#	618	#		クスギ節
569	#		#	619	#		#
570	#		#	620	#		モモ
571	#		ヤマグワ	621	#		クスギ節
572	#		クスギ節	622①	#		#
573	#		#	622②	#		モミ属
574	#		クリ	623	#		クスギ節
575	#		クスギ節	624	#		ヤマグワ
576	#		モミ属	625	#		クスギ節
577	#		ケヤキ	626	#		#
578	#		クスギ節	627	#		#
579	#		モミ属	628	#		イヌシダ節
580	#		モモ	629	#		クスギ節
581	#		モミ属	630	#		アサダ
582	#		#	631	#		クリ
583	#		カエデ属	632	#		トチノキ
584	#		コナラ節	633	#		カエデ属
585	#		クスギ節	634	#		クスギ節
586	#		#	635	#		#
587	#		ウコギ属	636	#		クリ
588	#		クリ	637	#		ケヤキ
589	#		クスギ節	638	#		ヤマグワ
590	#		クリ	639	#		クスギ節
591	#		#	640	#		ヤマグワ
592	#		クスギ節	641	#		クリ
593	#		#	642	#		クスギ節
594	#		#	643	#		樹皮?
595	#		ヒサカキ	644	#		クスギ節

表 8. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 3)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
645	16層		ケヤキ	694	16層		クリ
646	〃		クスギ節	695	〃		クスギ節
647	〃		〃	696	〃		ウコギ属
648	〃		アカメガシワ	697	〃		グミ属
649	〃		モモ	698	〃		モミ属
650①	〃		〃	699	〃		ヤマグワ
650②	〃		クスギ節	700	〃		〃
651	〃		モモ	701	〃		クスギ節
652	〃		クスギ節	702	〃		〃
653	〃		〃	703	〃		〃
654	〃		〃	705	〃		〃
655	〃		トチノキ	707	〃		モモ
656	Hr-FA 下		クリ	708	〃		カエダ属
657	〃		ヤナギ属	709	〃		クスギ節
658	16層		アツバキ	710	〃		クリ
659	〃		クスギ節	711	〃		モミ属
660	〃		〃	712	〃		ヤナギ属
661	〃		〃	713	〃		クスギ節
662	Hr-FA 下		クリ	714	〃		〃
663	16層		〃	715	〃		ヤナギ属
664	〃		トチノキ	716	〃		クスギ節
665	〃		ケヤキ	717	〃		モモ
666	〃		〃	718	〃		クスギ節
667	〃		クスギ節	719	〃		ヒノキ属?
668	〃		モモ	720	〃		クスギ節
669	〃		イヌシダ節	721	〃		〃
670	〃		クスギ節	722	〃		モミ属
671	〃		〃	723	〃		〃
672	〃		クリ	724	〃		〃
673	〃		クスギ節	725	〃		クリ
674	〃		〃	726	〃		クスギ節
675	〃		〃	727	〃		〃
676	〃		〃	728	〃		クリ
677	〃		カヤ	729	〃		クスギ節
678	16層		モミ属	730	〃		〃
679	〃		クスギ節	731	〃		クリ
680	〃		モミ属	732	〃		クスギ節
681	〃		クリ	733	〃		サクラ属
682	〃		クスギ節	734	〃		ケヤキ
683	〃		〃	735	〃		クリ
684	〃		〃	736	〃		クスギ節
685	〃		〃	737	〃		ヒノキ属
686	〃		モモ	738	〃		クスギ節
687	〃		クスギ節	739	〃		〃
688	〃		トチノキ	740	〃		〃
689	〃		アカガシ属	741	〃		樹皮
690	〃		ケヤキ	742	〃		モモ
691	〃		クスギ節	743	〃		モミ属
692	〃		〃	744	〃		トチノキ
693	〃		〃	745	〃		クスギ節

表9. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No.4)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
746	16層		クスギ節	795②	Hr-FA 下		コナラ節
747	〃		〃	796	〃		〃
748	〃		〃	797	〃		〃
749	〃		〃	798	〃		〃
750	〃		モモ	799	〃		〃
751	〃		クスギ節	800	〃		クスギ節
752	〃		〃	801	〃		コナラ節
753	〃		〃	802	〃		〃
754	〃		イヌシヅ節	803	〃		〃
755	〃		クスギ節	804	〃		クリ
756	〃		カバノキ属	805	〃		モミ属
757	〃		クスギ節	806	〃		クスギ節
758	〃		〃	807	〃		〃
759	〃		〃	808	〃		〃
760	〃		〃	809	〃		クリ
761	Hr-FA 下		コナラ節	810	〃		コナラ節
762	16層		クスギ節	811	〃		〃
763	〃		モモ	812	〃		〃
764	〃		ケヤキ	813	〃		クスギ節
765	〃		〃	814	〃		コナラ節
766	〃		クスギ節	815	〃		〃
767	〃		ヤナギ属	816	〃		モミ属
768	〃		クリ	817	〃		コナラ節
769	〃		クスギ節	818	〃		〃
770	〃		〃	819	〃		〃
771	〃		ケヤキ	820	〃		〃
772	〃		クスギ節	821	〃		〃
773	〃		〃	822	〃		〃
774	〃		〃	823	〃		〃
775	〃		〃	824	〃		〃
776	〃		〃	825	〃		〃
777	〃		〃	826	〃		〃
778	〃		クリ	827	〃		〃
779	〃		クスギ節	828	〃		〃
780	〃		モミ属	829	〃		〃
781	〃		ケンボナシ属	830	〃		〃
782	〃		クスギ節	831	〃		〃
783	〃		〃	832	〃		〃
784	〃		〃	833	〃		〃
785	〃		〃	834	〃		〃
786	〃		〃	835	〃		〃
787	〃		〃	836	〃		ケヤキ
788	〃		〃	837	〃		クスギ節
789	〃		〃	838	〃		〃
790	〃		モミ属	839	〃		コナラ節
791	〃		ヤマグワ	840	〃		〃
792	〃		クリ	841	〃		〃
793	Hr-FA 下		ハリギリ	842	〃		〃
794	〃		クスギ節	843	〃		〃
795①	〃		〃	844	〃		クリ

表10. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 5)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
845	Hr-FA下		コナラ節	895	15層		クリ
846	〃		〃	896	〃		ケヤキ
847	〃		〃	897	〃		クスギ節
848	〃		〃	898	〃		ケヤキ
849	〃		クリ	899	〃		エノキ属
850	〃		コナラ節	900	〃		モミ属
851	〃		〃	901	〃		クリ
852	〃		クリ	902	〃		サクラ属
853	〃		コナラ節	903	〃		クスギ節
854	〃		モモ	904	〃		カマツカ
855	〃		ヤマグワ	905	〃		ウコギ属
856	〃		クスギ節	906	〃		クスギ節
857	〃		モミ属	907	〃		〃
				908	〃		ヒノキ属
				909	〃		クスギ節
				910	〃		マツ属単維管束組織
				911	〃		ヒノキ属
862	As-C下		コナラ節	912	〃		クスギ節
863	〃		クスギ節	913	〃		クリ
864	〃		コナラ節	914	〃		クスギ節
865	〃		クスギ節	915	〃		ヒノキ属
866	〃		〃	916	〃		クスギ節
867	〃		コナラ節	917	〃		ヤマグワ
868	〃		〃	918	〃		クスギ節
869	〃		クリ	919	1号河道		スギ
870	〃		コナラ節	920	37溝		クスギ節
871	〃		クリ	921	〃		ケヤキ
872	〃		コナラ節	922	3H水田下		〃
873	〃		〃	923	37溝		〃
874	〃		〃	924	〃		クスギ節
875	〃		〃	925	3H水田下		ケヤキ
876	〃		クスギ節	926	旧河道		クスギ節
877	〃		コナラ節	927	37溝		クリ
878	15層		ヒノキ属	928	23井戸		スギ
879	As-C下		クリ	929	21井戸		アカマツ
880	〃		コナラ節	930	〃		〃
881	〃		〃	931	16層		クスギ節
882	〃		〃	932	〃		〃
883	〃		クスギ節	933	〃		〃
884	〃		コナラ節	934	〃		〃
885	〃		〃	935	〃		ヤマグワ
886	〃		〃	936	〃		クスギ節
887	〃		〃	937	〃		〃
888	〃		クスギ節	938	〃		〃
889	〃		コナラ節	939	〃		ヤマグワ
890	15層		スギ	940	〃		サクラ属
891	〃		クスギ節	941	〃		ヤマグワ
892	〃		モモ	942	〃		〃
893	〃		クスギ節	943	〃		アカメガシワ
894	〃		スギ	944	〃		アワブキ

表11. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 6)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
946	16層		クスギ節	997	16層		クスギ節
947	#		モモ	998	#		クリ
948	#		#	999	#		#
949	#		クスギ節	1000	#		ヤマグワ
950	#		#	1001	#		クスギ節
951	#		#	1002	#		ヤマグワ
952	#		カエデ属	1003	#		#
953	#		ヤマグワ	1004	#		#
954	#		クスギ節	1005	#		クスギ節
955	#		トチノキ	1006	#		#
956	#		#	1007	#		#
957	#		トネリコ属	1008	#		#
958	#		ヤマグワ	1009	#		#
959	#		サクラ属	1010	#		ケヤキ
960	#		アワブキ	1011	#		クスギ節
961	#		クスギ節	1012	#		#
962	#		エゴノキ属	1013	#		#
963	#		クスギ節	1014	#		#
964	#		#	1015	#		#
965	#		ヤマグワ	1016	#		#
966	#		クスギ節	1017	#		モモ
967	#		モミ属	1018	#		#
969	#		クスギ節	1019	#		クスギ節
970	#		クスノキ科	1020	#		モモ
971	#		クリ	1021	#		クスギ節
972	#		クスギ節	1022	#		#
973	#		#	1023	#		#
974	#		ヤマグワ	1024	#		#
975	#		クスギ節	1025	#		#
976	#		#	1026	#		カツラ
977	#		#	1027	#		#
978	#		モモ	1028	#		モモ
979	#		モミ属	1029	#		クリ
980	#		#	1030	#		樹皮
981	#		クスギ節	1031	#		クスギ節
982	#		#	1032	#		#
983	#		#	1033	#		クリ
984	#		モミ属	1034	#		クスギ節
985	#		ケヤキ	1035	#		モモ
986	#		アカガシ亜属	1036	#		ヤマグワ
987	#		クスギ節	1037	#		モモ
988	#		クリ	1038	#		カヤ
989	#		クスギ節	1039	#		ヤマグワ
990	#		#	1040	#		クリ
991	#		モモ	1041	#		カエデ属
992	#		クスギ節	1042	#		#
993	#		#	1043	#		ヤマグワ
994	#		#	1044	#		クスギ節
995	#		#	1045①	#		モモ
996	#		モモ	1045②	#		クスギ節

表12. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 7)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
1046	16層		クリ	1097	16層		クスギ節
1047	〃		クスギ節	1098	〃		〃
1048	〃		クリ	1099	〃		〃
1049	〃		クスギ節	1100	〃		〃
1050	〃		〃	1101	〃		〃
1051	〃		カエデ属	1102	〃		〃
1052	〃		ヤマグワ	1103	〃		〃
1053	〃		クスギ節	1104	〃		〃
1054	〃		〃	1105	〃		〃
1055	〃		〃	1106	〃		〃
1056	〃		〃	1107	〃		〃
1057	〃		クリ	1108	〃		モモ
1058	〃		クスギ節	1109	〃		クスギ節
1059	〃		〃	1110	〃		〃
1060	〃		モモ	1111	〃		コナラ節
1061	〃		カエデ属	1112	〃		クリ
1062	〃		ヤマグワ	1113	〃		クスギ節
1063	〃		ケヤキ	1114	〃		〃
1064	〃		クスギ節	1115	〃		〃
1065	〃		モモ	1116	〃		〃
1066	〃		クスギ節	1117	〃		〃
1067	〃		アカガシ属	1118	〃		〃
1068	〃		ヤマグワ	1119	〃		〃
1069	〃		クスギ節	1120	〃		アカメガシワ
1070	〃		クリ	1121	〃		クスギ節
1071	〃		ケヤキ	1122	〃		クリ
1072	〃		〃	1123	〃		クスギ節
1073	〃		クスギ節	1124	〃		〃
1074	〃		ヤマグワ	1125	〃		〃
1075	〃		クスギ節	1126	〃		〃
1076	〃		〃	1127	Hr-FA 下		〃
1077	〃		モモ	1128	16層		〃
1078	〃		クスギ節	1129	〃		〃
1079	〃		〃	1130	〃		モモ
1080	〃		ヤマグワ	1131	〃		クスギ節
1081	〃		ハンノキ節	1132	〃		〃
1082	〃		カエデ属	1133	〃		〃
1083	〃		モモ	1134	〃		アカメガシワ
1084	〃		クスギ節	1135	〃		クリ
1085	〃		ヤマグワ	1136	〃		クスギ節
1086	〃		クスギ節	1137	〃		コナラ節
1087	〃		〃	1138	〃		クスギ節
1088	〃		〃	1139	〃		〃
1089	〃		アサダ	1140	〃		〃
1090	〃		ケンボナシ属	1141	〃		モモ
1091	〃		モモ	1142	〃		ムクロジ
1093	〃		クスギ節	1143	〃		クスギ節
1094	〃		モモ	1144	〃		クリ
1095	〃		〃	1145	〃		クスギ節
1096	〃		ヤマグワ	1146	〃		モモ

表13. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 8)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
1147	16層		クスギ節	1199	16層		クスギ節
1148	〃		ヤマグワ	1200	〃		コナラ節
1149	〃		クリ	1201	〃		〃
1150	〃		クスギ節	1202	〃		〃
1151	〃		コナラ節	1203	〃		クスギ節
1152	〃		クスギ節	1204	〃		〃
1153	〃		コナラ節	1205	〃		〃
1154	〃		クスギ節	1206	〃		クリ
1155	〃		コナラ節	1207	〃		コナラ節
1156	〃		クスギ節	1208	〃		クスギ節
1158	〃		〃	1209	〃		コナラ節
1159	〃		〃	1210	〃		〃
1160	〃		コナラ節	1211	〃		モミ属
1161	〃		クスギ節	1212	〃		コナラ節
1162	〃		〃	1213	Hr-FA 下		〃
1163	〃		〃	1214	16層		クスギ節
1164	〃		コナラ節	1215	〃		コナラ節
1165	〃		〃	1216	〃		〃
1166	〃		クスギ節	1218	〃		クスギ節
1167	〃		〃	1220	〃		〃
1168	〃		コナラ節	1221	Hr-FA 下		コナラ節
1169	〃		〃	1222	〃		〃
1170	〃		クスギ節	1223	〃		〃
1171	〃		コナラ節	1224	〃		〃
1172	〃		〃	1225	〃		クスギ節
1173	〃		〃	1226	〃		コナラ節
1174	〃		クスギ節	1227	〃		クスギ節
1175	〃		〃	1228	〃		コナラ節
1176	〃		コナラ節	1229	〃		〃
1177	〃		〃	1230	〃		〃
1178	〃		〃	1231	〃		〃
1180	As-C 下		〃	1232	〃		クスギ節
1181	16層		〃	1233	〃		コナラ節
1182	〃		〃	1234	〃		〃
1183	〃		〃	1235	〃		〃
1184	〃		クスギ節	1236	〃		〃
1185	〃		コナラ節	1237	〃		〃
1186	〃		〃	1238	〃		〃
1187	〃		〃	1239	〃		〃
1188	〃		クスギ節	1240	〃		〃
1189	〃		コナラ節	1241	〃		〃
1190	〃		ハリギリ	1242	〃		クスギ節
1191	〃		クリ	1243	〃		〃
1192	〃		クスギ節	1244	〃		〃
1193	〃		コナラ節	1245	〃		コナラ節
1194	〃		〃	1246	〃		〃
1195	〃		クスギ節	1247	〃		クリ
1196	〃		コナラ節	1248	〃		コナラ節
1197	〃		クリ	1249	〃		〃
1198	〃		クスギ節	1250	〃		〃

表14. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No 9)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
1251	Hr-FA下		クスギ節	1301	As-C下砂層下		クスギ節
1252	〃		コナラ節	1302	〃		〃
1253	〃		〃	1303	〃		〃
1254	〃		〃	1304	〃		コナラ節
1255	〃		〃	1305	〃		クスギ節
1256	〃		〃	1306	〃		〃
1257	〃		〃	1307	〃		〃
1258	〃		〃	1308	〃		〃
1259	〃		〃	1310	〃		〃
1260	〃		〃	1311	〃		コナラ節
1261	〃		〃	1313	〃		クスギ節
1262	〃		〃	1314	〃		〃
1263	〃		〃	1315	〃		〃
1264	〃		〃	1316	〃		〃
1265	〃		〃	1317	〃		〃
1266	〃		〃	1318	〃		〃
1267	〃		〃	1319	〃		〃
1268	〃		〃	1320	〃		〃
1269	〃		〃	1321	〃		〃
1270	〃		〃	1323	〃		〃
1271	〃		〃	1324	〃		〃
1272	〃		〃	1325	16層		モモ
1273	〃		〃	1326	〃		コナラ節
1274	〃		〃	1327	〃		クスギ節
1275	〃		〃	1328	〃		草本類
1276	〃		クスギ節	1329①	〃		〃
1277	As-C下砂層下		コナラ節	1329②	〃		クスギ節
1278	〃		クスギ節	1330	〃		〃
1279	〃		コナラ節	1331	〃		サクラ属
1280	〃		クスギ節	1332	〃		クスギ節
1281	〃		ヤマグワ	1333	〃	板	クリ
1282	〃		クスギ節	1334	〃		〃
1283	〃		〃	1335	〃		クスギ節
1284	〃		コナラ節	1336	〃		ヤマグワ
1285	〃		クスギ節	1338	〃		クスギ節
1286	〃		〃	1339	〃		〃
1287	〃		コナラ節	1340	〃		グミ属
1288	〃		クスギ節	1341	〃		クスギ節
1289	〃		〃	1342	〃		ハンノキ節
1290	〃		〃	1343	〃		エノキ属
1291	〃		コナラ節	1344	〃		クスギ節
1292	〃		〃	1345	〃		ミツバウツギ
1293	〃		クスギ節	1346	〃	板	ケヤキ
1294	〃		〃	1347	〃		クスギ節
1295	〃		〃	1348	〃		ムクノキ
1296	〃		コナラ節	1349	〃		イヌシデ節
1297	〃		クスギ節	1350	〃		クスギ節
1298	〃		〃	1351	〃		ヤマグワ
1299	〃		コナラ節	1352	〃		トチノキ
1300	〃		クスギ節	1353	〃		クスギ節

表15. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No10)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
1354①	16層		コナラ節	1403	16層		クスギ節
1354②	〃		クスギ節	1404	〃		〃
1355	〃		ウコギ属	1405	〃		〃
1356	〃		モモ	1406	〃		ヤマグワ
1357	〃		ヤマグワ	1407	〃		サクラ属
1358	〃		クスギ節	1408	〃		クリ
1359	〃		〃	1409	〃		サクラ属
1360	〃		エゴノキ属	1410	〃		クスギ節
1361	〃		カエデ属	1411	〃		クリ
1362	〃		クスギ節	1412	〃		〃
1363	〃		〃	1413	〃		クスギ節
1364	〃		モモ	1414	〃		〃
1365	〃		クスギ節	1415	〃	板	クリ
1366	〃		〃	1416	〃	板	ムクノキ
1367	〃	板	〃	1417	〃	板	モモ
1368	〃		〃	1418	〃		クスギ節
1369	〃		ヤマグワ	1419	〃		〃
1370	〃		モモ	1420	〃		スルア
1371	〃	板	草本類	1421	〃		クスギ節
1372	〃		クスギ節	1422	〃		モモ
1373	〃		オニグルミ	1423	〃		カマツカ
1374	〃		クスギ節	1424	〃		ハコヤナギ属
1375	〃		〃	1425	〃		モモ
1376	〃		〃	1426	〃		カエデ属
1377	〃		ヤマグリ	1427	〃		アカメガシワ
1378	〃		クスギ節	1428	〃		カマツカ
1379	〃		モモ	1429	〃		ウコギ属
1380	〃		エゴノキ属	1430	〃		モモ
1381	〃		クスギ節	1431	〃		クスギ節
1382	〃		ムクノキ	1432	〃		ヤマグワ
1383	〃		〃	1433	〃		クスギ節
1384	〃		クスギ節	1434	〃		エゴノキ属?
1385	〃		〃	1435	〃		クスギ節
1386	〃		〃	1436	〃		コクサギ
1387	〃		〃	1437	〃		クスギ節
1388	〃		〃	1438	〃		〃
1389	〃		カエデ属	1439	〃		エゴノキ属
1390	〃		クスギ節	1440	〃		ヤマグワ
1391	〃		クリ	1441	〃		アカメガシワ
1392	〃		モモ	1442	〃		ヤマグワ
1393	〃		ヤマグワ	1443	〃		〃
1394	〃		クスギ節	1444	〃		クスギ節
1395	〃		ヤマグワ	1445	〃		〃
1396	〃		アカメガシワ	1446	〃		ムクロジ
1397	〃		ヤマグワ	1447	〃		クスギ節
1398	〃		モモ	1448	〃		サクラ属
1399	〃		〃	1449	〃		クスギ節
1400	〃		クスギ節	1450	〃		ケヤキ
1401	〃		〃	1451	〃		モモ
1402	〃		ヤマグワ	1452	〃		エゴノキ属

表16. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考№11)

登録№	出土層位	製品名	樹種	登録№	出土層位	製品名	樹種
1453	16層		クスギ節	1503	16層		クスギ節
1454	〃		モモ	1504	〃		〃
1455	〃	板	ケヤキ	1505	〃		ヤマグワ
1456	〃		モモ	1506	〃		モモ
1457	〃		アカメガシワ	1507	〃		クスギ節
1458	〃		クスギ節	1508	〃		〃
1459	〃		モモ	1509	〃		ヤマグワ
1460	〃		クスギ節	1510	〃		クスギ節
1461	〃		〃	1511	〃		〃
1462	〃		モモ	1512	〃		〃
1463	〃		クスギ節	1513	〃		〃
1464	〃		カマツカ	1514	〃		〃
1465	〃		グミ属	1515	〃		ヤマグワ
1466	〃		クスギ節	1516	〃		モモ
1467	〃		モモ	1517	〃		〃
1468	〃		クスギ節	1518	〃		カマツカ
1470	〃		トチノキ	1519	〃		〃
1471	〃		ケヤキ	1520	〃		クスギ節
1472	〃		クスギ節	1521	〃		コナラ節
1473	〃		グミ属	1522	〃		ムクノキ
1474	〃		ハンノキ節	1523	〃		クスギ節
1475	〃		カエデ属	1524	〃		ケヤキ
1476	〃		モモ	1525	〃		クスギ節
1477	〃		ヤマグワ	1526	〃		〃
1478	〃		モミ属	1527	〃		〃
1479	〃		クスギ節	1528	〃		ヤマグワ
1480	〃		〃	1529	〃		サクラ属
1481	〃		〃	1530	〃		クスギ節
1482	〃		ケヤキ	1531	〃		〃
1483	〃		ヤマグワ	1532	〃		〃
1484	〃		モモ	1533	〃		ヤマグワ
1485	〃		〃	1534	〃		〃
1486①	〃		トネリコ属	1535	〃		カエデ属
1486②	〃		クスギ節	1536	〃		クスギ節
1487	〃		モモ	1537	〃		〃
1489	〃		クリ	1538	〃		〃
1490	〃		ケヤキ	1540	〃		〃
1491	〃		クスギ節	1541	〃		〃
1492	〃		クワ属	1542	〃		クワ属
1493①	〃		クロモジ属	1543	〃		クスギ節
1493②	〃		ヤマグワ	1544	〃		〃
1494	〃		クスギ節	1545	〃		アカメガシワ
1495	〃		〃	1546	〃		クスギ節
1496	〃		ヤマグワ	1547	〃		ムクロジ
1497	〃		カエデ属	1548	〃		モモ
1498	〃		イヌエンジュ	1549	〃		エノキ属
1499	〃		サクラ属	1550	〃		クスギ節
1500	〃		クスギ節	1551	〃		〃
1501	〃		〃	1553	〃		ヤマグワ
1502	〃		草本類	1554	〃		クスギ節

表17. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考№12)

登録№	出土層位	製品名	樹種	登録№	出土層位	製品名	樹種
1555	16層		クスギ節	1612	16層		モモ
1557	#		クワ属	1613	#		クスギ節
1558	#		ヤマグワ	1614	#		ヤマグワ
1559	#		アカガシ亜属	1615	#		クスギ節
1560	#		クスギ節	1616	#		コナラ節
1561	#		#	1617	#		クスギ節
1562	#		#	1618	#		#
1563	#		アカメガシワ	1619	#		#
1564	#		ヤマグワ	1620	#		#
1565	#		草本類	1621	#		#
1566	#		クスギ節	1622	#		#
1567	#		イヌシデ節	1623	#		#
1568	#		ヤマグワ	1624	#		#
1569	#		#	1625	#		#
1570	#		エゴノキ属	1626	#		#
1571	#		アカメガシワ	1627	#		#
1573	#		サクラ属	1628	#		#
1574	#		#	1629	#		モミ属
1575	#		クスギ節	1630	#		ハリギリ
1576	#		#	1631	#		クスギ節
1577	#		トチノキ	1632	#		モモ
1578	#		クリ	1633	#		草本類
1579	#		サクラ属	1634	#		クスギ節
1580	#		ヤマグワ	1635	#		ムクロジ
1581	#		モモ	1636	#		クスギ節
1582	#		ヤマグワ	1637	#		イヌシデ節
1583	#		エノキ属	1638	#		ニワトコ
1584	#		クスギ節	1639	#		ヤマグワ
1585	#		#	1640	#		#
1586	#		モモ	1641	#		クスギ節
1588	#		#	1642	#		#
1592	#		#	1643	#		#
1593	#		クスギ節	1644	#		#
1594	#		ヤマグワ	1645	#		クリ
1596	#		クスギ節	1646	#		草本類
1597	#		#	1647	#		クスギ節
1598	#		ヤマグワ	1648	#		カエデ属
1599	#		ニワトコ	1649	#		クスギ節
1600	#		クスギ節	1650	#		モモ
1601	#		クリ	1651①	#		サクラ属
1602	#		クスギ節	1651②	#		草本類
1603	#		#	1652	#		トネリコ属
1604	#		#	1653	#		クスギ節
1605	#		ウコギ属	1654	#		#
1606	#		クスギ節	1655	#		ヤマグワ
1607	#		ヤマグワ	1656	#		ヤナギ属
1608	#		クリ	1657	#		クスギ節
1609①	#		クスギ節	1658	#		ニシキギ属?
1609②	#		クリ	1659	#		クスギ節
1611	#		クスギ節	1660	#		#

表18. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No.13)

登録No.	出土層位	製品名	樹種	登録No.	出土層位	製品名	樹種
1661	16層		エノキ属	1711	16層		ヤマグワ
1662	〃		モミ属	1712	〃		クロモジ属
1663	〃		不明	1713	〃		コナラ節
1664	〃		クスギ節	1714	〃		クスギ節
1665	〃		〃	1715	〃		クリ
1666	〃		草本類	1716	〃		ヤマグワ
1667	〃	板	モミ属	1718	〃		モモ
1668	〃		クリ	1719	〃		バラ属
1669	〃		クスギ節	1720	〃		クスギ節
1670	〃		クリ	1721	〃		〃
1671	〃		ムクノキ	1722	〃		〃
1672	〃		クスギ節	1723	〃		〃
1673	〃		モモ	1724	〃		〃
1674	〃		クスギ節	1725	〃		〃
1675	〃		サクラ属	1726	〃		〃
1676	As-C 下砂層		クスギ節	1727	不明		クリ
1677	16層		エノキ属	1728	16層		クスギ節
1678	〃		ハンノキ節	1729	〃		ヤマグワ
1679	〃		クスギ節	1730	〃		クスギ節
1680	〃		モモ	1731	〃		〃
1681	〃		ヤマグワ	1732	〃		ニワトコ
1682	〃		モモ	1733	〃		アカメガシワ
1683	〃		クスギ節	1734	〃		クスギ節
1684	〃		トネリコ属	1735	〃		クリ
1685	〃		モモ	1736	〃		エノキ属
1686	〃	板	クスギ節	1737	〃		クスギ節
1687	〃		モモ	1738	〃		クリ
1688	〃		〃	1739	〃		モモ
1689	〃		ヤマグワ	1740	〃		ムクノキ
1690	〃		ムクロジ	1741	〃		クスギ節
1691	〃		クスギ節	1742	〃		クリ
1692	〃		〃	1743	〃		クスギ節
1693	〃		ケヤキ	1744	〃		〃
1694	〃		クスギ節	1745	〃		〃
1695	〃		〃	1746	〃		モモ
1696	〃		ヤマグワ	1747	〃		クスギ節
1697	〃		クスギ節	1748	〃		モモ
1698	〃		クロモジ属	1749	〃		クスギ節
1699	〃		クスギ節	1750	〃		〃
1700	〃		アカガシ属	1751	〃		〃
1701	〃		クスギ節	1752	〃		モミ属
1702	〃		〃	1753	〃		モモ
1703	〃		〃	1754	〃		クスギ節
1704	〃		モモ	1755	〃		アキニレ
1705	〃		ヤマグワ	1756	〃		クスギ節
1706	〃		クスギ節	1757	〃		〃
1707	〃		モモ	1758	〃		〃
1708	〃		オニグルミ	1759	〃		〃
1709	〃		ヤマグワ	1760	〃		〃
1710	〃		モミ属	1761	〃		〃

表19. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考№14)

登録№	出土層位	製品名	樹種	登録№	出土層位	製品名	樹種
1762	16層		ヤマグワ	1813	16層		クスギ節
1763	〃		モモ	1814	〃		エノキ属
1764	〃		クスギ節	1815	〃		クスギ節
1765	〃		コナラ節	1816	〃		〃
1766	〃		クロモジ属	1817	〃		〃
1767	〃		クスギ節	1818	〃		〃
1768	〃		〃	1819	〃		〃
1769	〃		オニグルミ	1820	〃		〃
1770	不明		クスギ節	1821	〃		〃
1771	16層		〃	1822	〃		〃
1772	〃		サクラ属	1823	〃		〃
1773	〃		クスギ節	1824	〃		コナラ節
1774	〃		〃	1825	〃		クリ
1775	〃		〃	1826	〃		クスギ節
1776	〃		〃	1827	〃		〃
1777	〃		モモ	1828	〃		〃
1778	〃		クスギ節	1829	〃		アカメガシワ
1779	〃		モモ	1830	〃		クスギ節
1780	〃		クスギ節	1831	〃		〃
1781	〃		モモ	1832	〃		クリ
1782	〃		クスギ節	1833	〃		ヤマグワ
1783	〃		〃	1834	〃		クスギ節
1784	〃		エゴノキ属	1835	〃		エノキ属
1785	〃		草本類	1836	〃		クスギ節
1786	〃		カエデ属	1837	〃		〃
1787	〃		モモ	1838	〃	板	エノキ属
1788	〃		〃	1839	〃	〃	クスギ節
1789	〃		クスギ節	1840	〃		〃
1790	〃		〃	1841	〃		エゴノキ属
1791	〃		〃	1842	〃		クスギ節
1792	〃		ヤマグワ	1843	〃		〃
1793	〃		クリ	1844	〃		〃
1794	〃		クスギ節	1845	〃		〃
1795	〃		サクラ属	1846	〃		〃
1796	〃		エゴノキ属	1847	〃		〃
1797	不明		クスギ節	1848	〃		〃
1798	16層		モモ	1849	〃		〃
1799	〃		トネリコ属	1850	〃		草本類
1800	〃		〃	1851	〃	板	スギ
1802	〃		モモ	1852	〃		モモ
1803	〃		ヤマグワ	1853	〃	板	ケヤキ
1804	〃		クスギ節	1854	〃		クスギ節
1805	〃		ヤマグワ	1855	〃		アカメガシワ
1806	〃		クスギ節	1856	〃		エノキ属
1807	〃		〃	1857	〃		ケヤキ
1808	〃		サクラ属	1858	〃		モモ
1809	〃		クスギ節	1859	〃		クスギ節
1810	〃	板	〃	1860	〃		〃
1811	〃		〃	1861	〃		〃
1812	〃		モモ	1862	〃		モモ

表20. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No15)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
1863	16層		モモ	1913	16層	板	ウコギ属
1864	〃		クスギ節	1914	〃		クスギ節
1865	〃		モモ	1915	〃		〃
1866	〃		クスギ節	1916	〃		〃
1867	〃	板	草本類	1917	〃		エゴノキ属
1868	〃		クスギ節	1918	〃		クスギ節
1869	〃		ウコギ属	1919	〃		クリ
1870	〃		エノキ属	1920	〃		クスギ節
1871	〃		クスギ節	1921	〃		〃
1872	〃		〃	1922	〃		〃
1873	〃		〃	1923	〃		モミ属
1874	〃		〃	1924	〃		クスギ節
1875	〃		〃	1925	〃		ヤマグワ
1876	〃		〃	1926	〃		クスギ節
1877	〃		〃	1927	〃		モモ
1878	〃		〃	1928	〃		クスギ節
1879	〃	板	トチノキ	1929	〃		〃
1880	〃		クスギ節	1930	〃		〃
1881	〃		〃	1931	〃		モモ
1882	〃		〃	1932	〃		クスギ節
1883	〃		アカメガシワ	1935	〃		〃
1884	〃		エノキ属	1936	〃		ヤマグワ
1885	〃		ヤマグワ	1937	〃		ケヤキ
1886	〃		クスギ節	1938	〃		クスギ節
1887	〃		〃	1939	〃		グミ属
1888	〃		〃	1940	〃		ケヤキ
1889	〃		〃	1941	〃		クスギ節
1890	〃		〃	1943	〃		クリ
1891	〃		〃	1944	〃		クロモジ属
1892	〃		〃	1945	〃		クスギ節
1893	〃		ヤマグワ	1946	〃		〃
1894	〃		カエデ属	1947	〃		エゴノキ属
1895	〃		イヌシデ節	1948	〃		ヤマグワ
1896	〃		クスギ節	1949	〃		クスギ節
1897	〃		〃	1950	〃		ケンボナシ属
1898	〃		不明	1951	〃		クスギ節
1899	〃		クスギ節	1952	〃		サクラ属
1900	〃		草本類	1953	〃		クスギ節
1901	〃		アカメガシワ	1954	〃		〃
1902	〃		クスギ節	1955	〃		〃
1903	〃		ニフトコ	1956	〃		モモ
1904	〃		クスギ節	1957	〃		サクラ属
1905	〃		クリ	1958	〃		モモ
1906	〃		クスギ節	1959	〃		ヤマグワ
1907	〃		〃	1960	〃		クスギ節
1908	〃		ヤマグワ	1961	〃		〃
1909	〃		〃	1962	〃		クロモジ属
1910	〃		クスギ節	1963	〃		クスギ節
1911	〃		〃	1964	〃		〃
1912	〃		〃	1965	〃		ヤマグワ

表21. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No16)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
1966	16層		アカメガシワ	2014	16層		クスギ節
1967	#		クスギ節	2015	#		#
1968	#		#	2016	#		#
1969	#		クリ	2017	#		モモ
1970	不明		ヤマグワ	2018	#		クスギ節
1971	16層		クスギ節	2019	#		#
1972	#		#	2020	#		クリ
1973	#		#	2021	#		クスギ節
1974	#		#	2022	#		#
1976	不明		ヤマグワ	2023	#		#
1977	16層		エノキ属	2024	#		#
1978	#		トチノキ	2025	#		#
1979	#		モモ	2026	#		モモ
1980	#		#	2027	#		クスギ節
1981	#		ニワトコ	2028	#		クリ
1982	#		イヌシダ節	2029	#		クスギ節
1983	#		ヤマグワ	2030	#		#
1984	#		イヌシダ節	2031	#		#
1985	#		モモ	2032	#		#
1986①	#		クスギ節	2033	#		#
1986②	#		#	2034	#		#
1986③	#		#	2035	#		#
1986④	#		サクラ属	2036	#		コナラ節
1986⑤	#		モモ	2037	#		エゴノキ属
1987	#		#	2038	#		#
1988	#		#	2039	#		クスギ節
1989	#		クスギ節	2040	#		#
1990	#		#	2041	#		#
1991	#		#	2042	#		モミ属
1992	#		モチノキ属	2043	#		クスギ節
1993	#		サクラ属	2044	#		モモ
1994	#		ニワトコ	2045	#		ケヤキ
1995	#		クスギ節	2046	#		クスギ節
1996	#		モモ	2047	#		モモ
1997	#		ヤマグワ	2048	#		コナラ節
1998	#		#	2049	#		サクラ属
1999	#		モモ	2050	#		クスギ節
2000	#		クスギ節	2051	#		コナラ節
2001	#		イヌシダ節	2052	#		クスギ節
2002	#		クリ	2053	#		イヌシダ節
2003	#		クスギ節	2054	#		クスギ節
2004	#		#	2055	#		#
2005	#		モモ	2056	#		#
2006	#		クスギ節	2057	#		#
2007	#		コナラ節	2058	#		#
2008	#		アワブキ	2059	#		#
2009	#		モクレン属	2060	#		#
2010	#		ニシキギ属	2061	#		モミ属
2012	#		クスギ節	2062	#		クスギ節
2013	#		#	2064	#		#

表22. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考№17)

登録№	出土層位	製品名	樹種	登録№	出土層位	製品名	樹種
2065	16層		コナラ節	2115	16層		クスギ節
2066	〃		アツブキ	2116	〃		クリ
2067	〃		クスギ節	2117	〃		サクラ属
2068	〃		〃	2118	〃		クスギ節
2069	〃		〃	2119	〃	板	クリ
2070	〃		〃	2120	〃		ヤマグワ
2071	〃		サクラ属	2121	〃		クロモジ属
2072	〃		クスギ節	2122	〃		クリ
2073	〃		〃	2123	〃		クスギ節
2074	〃		〃	2124	〃		クリ
2075	〃		ウコギ属	2125	〃		ニワトコ
2076	〃		クリ	2126	〃		モモ
2077	〃		クスギ節	2127	〃		クスギ節
2078	〃		ハンノキ節	2128	〃		クリ
2079	〃		クスギ節	2129	〃		モモ
2080	〃		〃	2130	〃		クスギ節
2081	〃		ヤマグワ	2131	〃		〃
2082	〃		クリ	2132	Hr-FA 下		コナラ節
2083	〃		〃	2133	〃		〃
2084	〃		〃	2134	〃		〃
2085	〃		クスギ節	2135	〃		クスギ節
2086	〃		〃	2136	〃		〃
2087	〃		ヤマグワ	2137	〃		コナラ節
2088	〃		サカキ	2139	〃		クスギ節
2089	〃		クスギ節	2140	〃		〃
2090	〃		〃	2141	〃		コナラ節
2091	〃		〃	2142	〃		クリ
2092	Hr-FA 下	板	〃	2143	〃		クスギ節
2093	16層		〃	2144	〃		〃
2094	〃		モモ	2145	〃		〃
2095	〃		〃	2146	〃		クリ
2096	〃		〃	2147	〃		コナラ節
2097	〃		クスギ節	2148	〃		グミ属
2098	〃		モモ	2149	〃		クスギ節
2099	〃		〃	2150	〃		モミ属
2100	〃		クスギ節	2152	〃		モモ
2101	〃		モモ	2153	〃	板	クスギ節
2102	〃		コナラ節	2154	As-C 下砂層		クリ
2103	〃		モミ属	2155	〃		コナラ節
2104	〃		ヤマグワ	2156	As-C 下		〃
2105	〃		クスギ節	2157	As-C 下砂層	板	〃
2106	〃		ヤマグワ	2158	〃		〃
2107	〃		〃	2159	As-C 下		クスギ節
2108	〃		〃	2160	As-C 下砂層		コナラ節
2109	〃		クリ	2161	As-C 下		〃
2110	〃		トチノキ	2162	As-C 下砂層		〃
2111	〃		サクラ属	2163	〃		クスギ節
2112	〃		エゴノキ属	2164	〃		〃
2113	〃		モモ	2165	〃		〃
2114	〃		クスギ節	2166	〃		〃

表23. 二之宮宮下東遺跡出土材の樹種 (参考No18)

登録No	出土層位	製品名	樹種	登録No	出土層位	製品名	樹種
2167	As-C下		クスギ節	2233	16層		モミ属
2168	#		クリ	2234	Hr-FA下		コナラ節
2169	#		クスギ節	2487	16層		アサダ
2170	#		コナラ節				
2171	#		クスギ節				
2172	#		コナラ節				
2173	#		クスギ節				
2175	#		コナラ節				
2177	#		クスギ節				
2178	38溝		モモ				
2179	37溝		スギ?				
2180	66溝		#				
2181	37溝		クスギ節				
2182	54B溝		サクラ属				
2183	37溝		クスギ節				
2184	#		#				
2185	54B溝		#				
2187	49溝		ウコギ属				
2188	#		クスギ節				
2190	Hr-FA下		コナラ節				
2191	#		#				
2192	#		#				
2193	#		#				
2194	#		クスギ節				
2195	#		コナラ節				
2196	#		#				
2197	#		#				
2198	#		クスギ節				
2200	#		#				
2208	#		コナラ節				
2210	As-C下		#				
2213	Hr-FA下		#				
2214	16層		モミ属				
2215	#		モモ				
2216	#		クスギ節				
2217	#		ヤマグワ				
2218	#		#				
2219	As-C下		コナラ節				
2220	16層		クスギ節				
2221	As-C下		コナラ節				
2222	#		#				
2224	16層		クスギ節				
2225	#		コナラ節				
2226	#		モモ				
2227	不明	板	アカマツ				
2228	#	#	ヒノキ属				
2229	#	#	アカマツ				
2230	#	#	ヒノキ属				
2231	#		ヤマグワ				
2232	16層		クスギ節				

表24 非実測試料の出土層位と樹種

注) As-C砂: As-C下砂層とAs-C下砂層下、Hr-FA: Hr-FA下、河道: 1号旧河道、3日水田; 第3記帳層下水田

	As-C下	As-C砂	Hr-FA	16層	15層	23井戸	21井戸	37溝	38溝	49溝	54B溝	65溝	河道	旧河道	3日水田	不明	合計	(%)
カヤ				1												1	2	0.1
モミ属			4	47	1												52	3.0
アカマツ			1				2									2	5	0.3
マツ属(単葉実生属)					1												1	0.1
スギ			1	2	1			1				1	1				7	0.4
ヒノキ属			2	4												2	8	0.5
アスナロ																		
マキ属																		
オニグルミ				3													3	0.2
ハコヤナギ属				1													1	0.1
ヤナギ属			1	5													6	0.3
ハンノキ節				5													5	0.3
アサダ				5													5	0.3
イヌシダ節				13													13	0.7
カバノキ属				1													1	0.1
クリ	4	1	10	86	3			1								1	106	6.1
クスギ節	12	39	36	675	11			5		1	1			1		2	783	44.9
コナラ節	28	15	137	51													231	13.3
アカガシ亜属				7													7	0.4
ブナ属				1													1	0.1
ムタノキ				7													7	0.4
エノキ属				14	1												15	0.9
ケヤキ			1	39	2			2							2		46	2.6
アキニレ				1													1	0.1
ニレ属																		
ヤマグワ		1	2	105	1											3	112	6.4
クワ属				3													3	0.2
モクレン属				1													1	0.1
クスノキ科				1													1	0.1
クロモジ属				7													7	0.4
カワラ				2													2	0.1
ヤブツバキ																		
サカキ				1													1	0.1
ヒサカキ				1													1	0.1
モモ			2	129	1				1								133	7.6
サクラ属				25	1					1							27	1.5
バラ属				1													1	0.1
イヌエンジュ				1													1	0.1
カマツカ				5	1												6	0.3
アカメガシワ				18													18	1.0
コトサギ				1													1	0.1
カエデ属				20													20	1.1
ムタロシ				5													5	0.3
トナノキ				15													15	0.9
アワブキ				7													7	0.4
モチノキ属				2													2	0.1
ニシキギ属				2													2	0.1
ミツバクワギ				1													1	0.1
ケンボナシ属				3													3	0.2
グミ属			1	5													6	0.3
ウコギ属				8	1				1								10	0.6
ハリギリ			1	2													3	0.2
エゴノキ属				15													15	0.9
トネリコ属				6													6	0.3
ムラサキシキブ属																		
ネリ				1													1	0.1
ニワトコ				7													7	0.4
根																		
樹皮				3													3	0.2
草本類				13													13	0.7
不明				2													2	0.1
合計	44	56	195	1384	30	1	2	9	1	2	2	1	1	1	2	11	1742	100.4

表25 実測試料の出土層位と樹種

注) Hr-FA : Hr-FA下、352土 : 352号土坑、河通 : 1号旧河通、5区不 : 5区不詳

	As-C下	Hr-FA	16層	15層	352土	20井戸	21井戸	23井戸	37溝	44溝	49溝	50溝	河通	5区不	不明	合計 (%)
カヤ		2	7									1				10 2.2
モミ属		3	33						1							37 8.1
アカマツ							1									1 0.2
マツ属半線管束亜属			1													1 0.2
スギ																
ヒノキ属			5	7			1	2			1					16 3.5
アスナロ							1									1 0.2
マキ属									1					1		2 0.4
オニグルミ																
ハコヤナギ属																
ヤナギ属			1												1	2 0.4
ハンノキ節																
アサダ				1												1 0.2
イヌシダ節			5													5 1.1
カバノキ属		2	9													11 2.4
クナ		6	27	1					1		1					36 7.9
クスギ節	1	25	139	4							2	2	1		1	175 38.5
コナラ節	7	12	8		1											28 6.2
アカガシ亜属			7													7 1.5
ブナ属						1										1 0.2
ムクノキ			2													2 0.4
エノキ属			3								1					4 0.9
ケヤキ		2	29												1	32 7.0
アキニレ																
ニレ属			1													1 0.2
ヤマグワ		1	18													19 4.2
クワ属																
モクレン属																
クスノキ科																
クロモジ属																
カツラ																
ヤブツバキ			1													1 0.2
ササキ																
ヒサカキ																
モモ		8	19												1	28 6.2
サクラ属			4	1					1							6 1.3
バラ属																
イヌエンジュ																
カマツカ			1					1								2 0.4
アカメダシツ			3													3 0.7
コクサギ																
カエデ属			6													6 1.3
ムクロジ			1													1 0.2
トチノキ			7													7 1.5
アワブキ																
モチノキ属																
ニシキギ属																
ミツバウツギ																
ケンボナン属			1													1 0.2
グミ属			1													1 0.2
ウコギ属																
ハリギリ		1														1 0.2
エゴノキ属																
トネリコ属			1							1						2 0.4
ムラサキシキブ属			2													2 0.4
ネリ																
ニワトコ																
根			1													1 0.2
樹皮																
草本類																
不明																
合計	8	62	343	14	1	1	3	3	4	1	5	3	1	1	4	454 99.3

表28 木製品(実測試料)とその樹種

	282土瓦		20井戸		21井戸		23井戸		37溝			44溝		50溝		1号河運		5区不詳		不明			
	納付	密覆	枕頭	油物	計	楯	枕	油物	計	枕頭	不明	計	枕頭	枕	枕頭	枕頭	枕頭	枕頭	枕頭	枕頭	不明	不明	
カヤ																							
セミ属																							
アカマツ				1	1							1											
マツ属(針葉樹)																							
ヒノキ属				1	1	1		1	2														
アスナロ				1	1																		
マキ属																							
ヤナギ属																							
アサダ																							
イヌシラビ																							
カバノキ属																							
クマシロ																							
クヌギ																							
コナラ																							
アカガク	1																						
ブナ属																							
ムクノキ																							
エノキ属																							
ケヤキ																							
ニレ属																							
ヤマドリ																							
ヤマブキ																							
セモ																							
サクラ属																							
カマツカ																							
アカメガシワ																							
カエデ属																							
ムクロジ																							
トチノ木																							
クヌギ																							
グミ属																							
ハリギリ																							
トネリコ属																							
ムクサホシノキ																							
楡																							
計	1	1	1	2	3	1	1	1	3	2	1	1	4	1	5	3	1	1	1	1	1	3	4

表30 二之宮宮下東遺跡から出土した大型植物化石の組成表 (その2)

分類群	試料番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch																				
オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.																				
	種子 半形																				
	核 壳 形																				
	完形破損																				
	完形碎滅																				
	完形食痕																				
	半形	1	2																	2	1
	半形破損																				
	半形食痕																				
ヒメグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> (Maxim.) Rehd.																				1
コナク属	<i>Quercus</i>																				
	果実 壳 形																				
	破 片																				
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.																				
カナムグサ	<i>Humulus scandens</i> (Lour.) Merrill																				
	種子 半形																				
モモ	<i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch																				
	核 壳 形	8	26	169	3	1	41	35	24												
	完形破損	1	2	22	1	2			2												
	完形碎滅			29		3															2
	完形食痕		16	19		2	6	53	13		1	1	9	5	1	2					1
	半形	34	109		1	2	12	28	6	1	2	9	4	13	8	10					1
	半形食痕						1														
	破 片		2	12			3														1
サクラ属	<i>Prunus</i>																				
	核 壳 形		5				430		1												1
	半形		2	1			13		2												3
サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Linn.) DC.																				
	種子 壳 形																				
ヒヨウタン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rusby var. <i>Gourd</i> Makino																				
	果実 破 片																				1
	種子 壳 形						3														
ウリ属メロン仲間	<i>Cucumis melo</i>																				
	種子 壳 形																				7

表31 二之宮宮下東運路から出土した大型植物化石の組成表 (その3)

分類群	試料番号	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62		
イヌギヤ オニグルミ	Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch						1														1		
	Juglans silanthifolia Carr.	2																				1	
ヒメグルミ	種子 半形																						
	核 完形																						
	完形破損																						
	完形片	4					1															1	
	半形破損	22	2	7	16																		
半形片	1																						
コナク属	Juglans silanthifolia Carr. var. cordiformis (Maxim.) Rehd.	3																					
	果実 完形																						
	核 片	1																					
	果実 半形	20																					
	種子 半形																						
	クワ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.																					
		種子 半形																					
	モモ	Humulus scandens (Lour.) Merrill																					
		種子 半形																					
		核 完形	3	37			12	48															
完形破損		1				1		1															
完形片			29			2	9																
サクナク属	完形破損	2				4																	
	完形片																						
	半形	14	2	8	6			1					8	1	2							1	
	半形破損						3																
サクナク属	Prunus																						
	核 完形	1																					
サンショウ	種子 半形																						
	完形																						
ヒヨウタン	Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC.																						
	果実 破片																						
ウリ属メロン科間	Lagenaria leucantha Rusby var. Gorda Makino																						
	種子 完形																						
	Cucumis melo																						
	種子 完形																						

表32 二之宮宮下東遺跡から出土した大型植物化石の組成表 (その4)

分類群	試料番号	63	64
イヌゴヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch	種子	半形
オニグルミ	<i>Juglans allanthifolia</i> Carr.	核	完形 完形破損 完形摩滅 完形食痕 半形 半形破損 半形食痕
ヒメグルミ	<i>Juglans allanthifolia</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> (Maxim.) Rehder	核	半形
コナラ属	<i>Quercus</i>	果実	完形 破片
タリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実	半形
カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> (Lour.) Merrill	種子	半形
モモ	<i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch	核	完形 完形破損 完形摩滅 完形食痕 半形 半形食痕 破片
サクラ属	<i>Prunus</i>	核	完形 半形
サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Linn.) DC.	種子	完形
ヒョウタン	<i>Lagenaria leucantha</i> Rusby var. <i>Gourda</i> Makino	果実	破片
ウリ属メロン仲間	<i>Cucumis melo</i>	種子	完形

表33 二之宮宮下東遺跡のブロック試料から産出した大型植物化石の組成表

分類群	部位	2241	2242
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche	果実	7
オモダカ科	Alismataceae	種子	1
イネ	<i>Oryza sativa</i> Linn.	穎破片	18
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	穎	1
スグ属	<i>Carex</i>	果実	3
カヤツリグサ属	<i>Cyperus</i>	果実	1 1
イボクサ	<i>Ancilema keisak</i> Hassk.	種子	1
セリ科	Umbelliferae	果実	1
シロザ近似種	cf. <i>Chenopodium album</i> Linn.	種子	15 6
クワクサ	<i>Fatous villosa</i> (Thunb.) Nakai	種子	7 1
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子	2 1
キイチゴ属	<i>Rubus</i>	核	1
ポントクダゲ	<i>Polygonum pubescens</i> Blume	果実	1
ナス科	Solanaceae	種子	1

表34 二之宮宮下東遺跡から出土したモモ核の計測値 (その1)

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
No 4	22.2	17.7	13.1	1.25	1.69	No19	23.6	18.9	14.9	1.25	1.58
No 5	28.1	22.1	17.1	1.27	1.64	No22	22.7	17.9	13.9	1.27	1.63
	22.4	18.1	15.0	1.24	1.49		31.1	23.3	16.9	1.33	1.84
	24.2	20.9	16.8	1.16	1.44		30.5	22.4	16.7	1.36	1.83
	26.0	18.5	13.1	1.41	1.88		28.6	22.8	17.4	1.25	1.64
No 7	24.1	28.5	14.5	0.85	1.66		23.7	19.5	14.4	1.22	1.65
	27.8	22.7	18.8	1.22	1.48		29.6	24.4	18.5	1.21	1.60
No 8	23.3	18.4	14.2	1.27	1.64		24.0	19.2	16.1	1.25	1.49
	28.4	22.6	15.0	1.26	1.89		26.4	21.9	17.3	1.21	1.53
	26.5	23.2	19.2	1.14	1.38		25.4	19.8	16.1	1.28	1.58
	28.3	21.9	16.3	1.29	1.74		29.9	19.7	13.9	1.52	2.15
	28.9	21.5	14.5	1.34	1.99		24.6	18.1	14.8	1.36	1.66
	28.7	22.5	15.7	1.28	1.83		26.6	21.2	16.2	1.25	1.64
	23.3	18.9	14.6	1.23	1.60		30.1	22.0	17.8	1.37	1.69
	24.5	18.7	14.3	1.31	1.71		30.9	23.6	16.4	1.31	1.88
	22.1	18.7	14.1	1.50	1.99		25.9	18.9	14.6	1.37	1.77
	22.6	18.5	14.1	1.22	1.60		22.9	17.8	14.9	1.29	1.54
	25.3	18.2	14.4	1.39	1.76		23.7	20.7	15.8	1.14	1.50
	24.7	18.2	14.1	1.36	1.75		28.2	21.9	16.1	1.29	1.75
	28.6	20.1	15.8	1.42	1.81		25.4	18.9	16.6	1.34	1.53
	27.6	19.3	15.2	1.43	1.82		28.1	21.0	15.2	1.34	1.85
	20.6	17.7	14.3	1.16	1.44		29.5	23.5	17.6	1.26	1.68
	23.2	18.7	15.1	1.24	1.54		25.7	19.0	15.9	1.35	1.62
	28.9	18.1	17.1	1.60	1.69		24.9	17.5	14.5	1.42	1.72
	22.6	19.2	16.3	1.18	1.39		28.1	19.6	15.3	1.33	1.71
	28.6	21.0	17.8	1.36	1.61		25.6	19.4	15.4	1.32	1.66
	27.4	20.9	15.2	1.31	1.80		25.4	19.4	17.1	1.31	1.49
	26.4	20.7	15.6	1.28	1.69	No23	28.2	22.4	17.9	1.26	1.58
	30.9	21.0	14.3	1.47	2.16		28.9	23.2	17.8	1.25	1.62
	27.6	20.1	19.1	1.37	1.45		27.6	20.9	15.9	1.32	1.74
	31.3	22.8	17.1	1.37	1.83		29.4	20.0	15.2	1.47	1.93
	27.1	21.3	15.5	1.27	1.75		29.0	20.2	15.8	1.44	1.84
	33.1	24.9	17.4	1.33	1.90		25.5	21.0	16.1	1.21	1.58
	29.8	24.0	17.3	1.24	1.72		33.5	22.7	16.6	1.48	2.02
	29.8	22.1	17.5	1.35	1.70		30.0	21.8	16.3	1.38	1.84
	21.8	18.1	14.1	1.20	1.55		30.0	21.3	16.2	1.41	1.85
	23.6	18.5	13.9	1.28	1.70		30.3	20.8	15.4	1.46	1.97
No 9	23.6	19.5	15.1	1.21	1.56		30.9	22.5	16.3	1.37	1.90
	20.3	16.1	13.4	1.26	1.51		26.2	20.6	16.5	1.27	1.59
	23.6	20.5	25.9	1.15	0.91		25.4	20.5	15.9	1.24	1.60
	21.7	18.2	15.6	1.13	1.39		31.9	19.2	13.7	1.66	2.33
	26.1	19.2	15.5	1.36	1.68		33.2	24.6	18.4	1.35	1.80
	29.6	19.0	16.1	1.56	1.84		29.1	21.6	16.1	1.35	1.81
	32.2	23.2	17.4	1.39	1.85		26.8	23.9	19.9	1.12	1.35
No10	28.1	23.2	17.3	1.21	1.62		30.4	20.3	15.3	1.59	1.99
	29.9	21.2	16.1	1.41	1.86		29.5	21.7	17.3	1.36	1.71
No11	25.1	21.0	15.4	1.20	1.63		28.2	19.2	15.8	1.47	1.78
No12	21.8	17.8	14.9	1.22	1.46		31.7	20.4	15.0	1.55	2.11
	22.1	18.7	15.9	1.18	1.39		31.5	21.8	17.1	1.44	1.84
No13	25.5	21.1	16.5	1.21	1.55		22.9	16.1	14.1	1.42	1.62
	22.9	19.1	13.8	1.20	1.66		26.4	21.7	16.5	1.22	1.60
	25.9	20.0	14.5	1.30	1.79		23.7	19.0	14.9	1.25	1.59
	24.6	19.8	16.9	1.24	1.46		30.5	22.2	15.9	1.37	1.92
	24.4	20.9	16.9	1.17	1.44		30.1	22.8	17.9	1.32	1.68
	22.5	18.0	14.5	1.25	1.55		28.6	19.5	15.6	1.47	1.83
	24.9	19.3	16.8	1.29	1.48		27.6	20.7	15.1	1.33	1.83
	24.0	19.6	16.4	1.22	1.46		21.1	18.9	14.9	1.12	1.42
	22.1	17.6	15.6	1.26	1.42		28.0	18.7	15.2	1.50	1.84
No15	29.2	19.0	12.2	1.54	2.39		26.1	20.5	15.4	1.27	1.69
No16	22.1	19.8	15.7	1.12	1.41		25.5	21.8	16.7	1.17	1.53
No17	23.7	18.4	14.1	1.29	1.68		21.1	16.7	13.9	1.26	1.52
No18	23.3	19.1	14.6	1.22	1.60		30.1	19.6	13.5	1.54	2.23
	26.0	20.2	15.6	1.29	1.67		29.9	21.1	16.8	1.42	1.78
	25.0	20.2	14.8	1.34	1.69		24.5	17.3	13.5	1.42	1.81
	23.3	18.5	15.4	1.26	1.51		25.1	19.6	16.6	1.28	1.51

表35 二之宮宮下東遺跡から出土したモモ核の計測値 (その2)

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
No23	30.3	21.6	16.0	1.40	1.89						
	29.3	21.4	17.9	1.37	1.64	No23	30.0	20.8	15.5	1.44	1.94
	28.2	19.1	16.2	1.48	1.74		28.3	19.2	15.0	1.47	1.89
	28.8	22.6	17.8	1.27	1.62		24.2	20.4	18.4	1.19	1.32
	30.2	21.5	16.8	1.40	1.80		24.7	20.6	15.8	1.30	1.56
	29.9	19.0	15.2	1.57	1.97		28.6	21.5	15.8	1.33	1.81
	24.4	19.8	16.8	1.23	1.45		29.7	23.0	18.1	1.29	1.64
	23.5	18.9	15.4	1.24	1.53		32.0	22.4	14.8	1.43	2.16
	21.8	17.9	14.8	1.22	1.47		30.0	21.1	16.0	1.42	1.88
	16.2	19.7	15.1	0.82	1.07		28.5	21.1	15.7	1.35	1.82
	32.5	23.2	16.2	1.40	2.01		29.7	21.6	16.2	1.38	1.83
	31.9	22.4	17.8	1.42	1.79		23.4	21.0	18.0	1.11	1.30
	29.2	20.7	16.0	1.41	1.83		31.9	21.3	17.9	1.50	1.78
	29.0	22.3	16.2	1.30	1.79		28.0	19.5	15.3	1.44	1.83
	31.1	23.3	16.0	1.33	1.94		28.3	19.6	14.6	1.44	1.94
	23.9	22.4	17.6	1.07	1.36		27.8	21.3	17.3	1.31	1.61
	22.0	20.1	17.4	1.06	1.26		23.5	19.7	14.3	1.29	1.78
	15.5	19.6	14.2	0.79	1.09		25.2	17.7	15.5	1.42	1.63
	25.1	21.1	14.9	1.19	1.68		22.1	16.6	13.4	1.33	1.65
	22.9	19.4	15.1	1.18	1.52		24.4	19.5	15.3	1.25	1.59
	32.2	23.1	16.8	1.39	1.92		21.4	18.4	14.2	1.16	1.51
	27.6	22.6	18.0	1.22	1.53		30.0	22.2	18.4	1.35	1.83
	26.8	22.1	16.1	1.21	1.66		27.9	21.4	16.3	1.30	1.71
	25.8	19.2	15.6	1.34	1.65		28.0	21.1	16.1	1.33	1.74
	28.9	21.6	16.7	1.34	1.73		34.4	22.0	14.3	1.56	2.41
	28.0	20.6	16.2	1.36	1.73		26.3	20.6	15.8	1.28	1.66
	30.2	22.1	17.6	1.37	1.72		28.1	20.9	15.8	1.34	1.78
	30.6	23.7	18.5	1.29	1.65		26.7	21.1	15.3	1.27	1.75
	21.1	15.8	12.8	1.34	1.65		25.9	20.7	15.3	1.25	1.69
	24.3	19.9	16.5	1.22	1.47		31.3	22.8	16.8	1.37	1.86
	26.8	22.4	18.6	1.20	1.44		32.0	21.1	16.7	1.52	1.92
	33.7	23.6	20.1	1.43	1.68		27.6	20.3	16.1	1.36	1.71
	28.9	20.3	15.6	1.42	1.85		23.3	19.0	15.4	1.23	1.51
	30.7	21.6	15.7	1.42	1.96		24.8	17.9	15.1	1.39	1.64
	23.1	17.9	15.3	1.29	1.51		30.6	22.7	17.1	1.35	1.79
	23.5	17.9	13.7	1.31	1.72		21.3	17.7	14.2	1.20	1.50
	31.5	21.5	16.1	1.47	1.96		28.8	21.2	16.2	1.36	1.78
	27.6	20.5	16.7	1.35	1.65		31.6	21.7	16.7	1.45	1.89
	28.5	21.7	15.6	1.31	1.83		28.8	22.3	17.0	1.29	1.69
	29.3	22.1	16.8	1.33	1.74		29.0	19.6	15.4	1.48	1.88
	28.7	22.3	16.5	1.29	1.74		29.0	17.2	13.9	1.69	2.09
	29.7	21.3	17.0	1.39	1.75		27.6	22.1	17.5	1.25	1.58
	35.5	24.1	17.4	1.47	2.04		30.6	21.2	16.0	1.44	1.91
	28.7	20.5	15.6	1.40	1.84		26.0	20.1	17.4	1.29	1.49
	28.6	21.4	16.1	1.34	1.78		29.9	21.8	17.2	1.37	1.74
	29.6	21.7	15.9	1.36	1.86		32.8	21.0	14.1	1.56	2.33
	21.0	17.5	14.6	1.20	1.44		31.0	20.4	14.9	1.52	2.08
	29.1	21.3	15.9	1.37	1.83		29.0	23.1	17.1	1.26	1.70
	28.2	21.0	16.1	1.34	1.75		25.7	17.9	15.2	1.44	1.69
	28.0	20.9	15.8	1.34	1.77		30.7	22.2	16.2	1.38	1.90
	22.5	17.9	14.3	1.26	1.57		26.6	18.3	14.2	1.45	1.87
	23.3	19.2	14.9	1.21	1.56		23.6	20.1	14.9	1.17	1.58
	23.0	18.7	15.4	1.23	1.49		23.9	17.4	13.0	1.37	1.84
	28.2	22.4	17.2	1.26	1.64		29.7	21.6	16.6	1.38	1.79
	25.5	20.7	16.0	1.23	1.59		29.5	15.3	11.6	1.34	1.77
	25.7	21.4	17.1	1.20	1.60		28.5	19.2	14.2	1.48	2.01
	29.6	21.4	16.1	1.38	1.84		27.4	20.2	16.3	1.36	1.68
	27.9	21.2	16.0	1.32	1.74		28.5	21.3	16.3	1.34	1.75
	25.9	19.9	14.5	1.30	1.79	No25	30.3	22.8	16.7	1.33	1.81
	28.8	20.4	15.0	1.41	1.92		23.9	19.0	14.9	1.26	1.60
	23.9	20.0	14.4	1.20	1.66		28.4	21.5	16.8	1.32	1.69
	25.2	17.6	14.3	1.43	1.76	No26	29.8	23.0	18.2	1.30	1.64
	30.9	24.3	20.7	1.27	1.49	No27	24.3	19.8	16.1	1.23	1.51
	30.2	22.9	19.4	1.32	1.56		25.8	17.9	13.4	1.44	1.93
	30.1	20.5	15.8	1.47	1.91		30.5	21.3	16.4	1.43	1.86
							29.7	22.4	18.8	1.33	1.58

表36 二之宮宮下東遺跡から出土したモモ核の計測値 (その3)

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
No27	26.6	18.4	14.5	1.45	1.83	No29	26.0	21.1	16.5	1.23	1.58
	27.9	19.9	16.0	1.40	1.74		29.4	16.9	13.3	1.74	2.21
	23.5	20.2	16.0	1.16	1.47		23.5	20.4	15.3	1.15	1.54
	28.4	22.5	19.7	1.26	1.44		29.1	20.6	15.0	1.41	1.94
	25.4	18.1	13.2	1.40	1.67		25.0	19.3	14.6	1.30	1.71
	25.4	18.3	12.7	1.39	2.00		30.6	22.2	17.9	1.38	1.71
	32.7	24.9	17.4	1.31	1.88		26.6	20.3	16.9	1.31	1.57
	25.3	18.9	15.0	1.34	1.69		25.5	19.1	16.5	1.34	1.55
	29.4	23.0	17.4	1.28	1.69	No30	28.8	22.0	18.3	1.31	1.57
	25.6	21.2	16.5	1.21	1.55		33.4	21.7	17.2	1.54	1.94
	34.9	24.1	17.9	1.45	1.95		29.1	21.8	16.8	1.33	1.73
	26.6	22.0	16.6	1.21	1.60		25.6	20.5	16.2	1.25	1.58
	29.3	24.2	17.2	1.21	1.70		29.6	21.5	15.6	1.38	1.90
	29.6	22.6	16.0	1.31	1.85		28.8	18.4	14.9	1.40	1.73
	28.5	21.8	15.8	1.31	1.80		34.0	22.8	16.1	1.49	2.11
	30.7	21.2	15.0	1.45	2.05		28.8	20.3	15.7	1.42	1.83
	31.0	20.8	14.1	1.49	2.20		30.1	22.4	17.7	1.34	1.70
	29.6	22.3	16.5	1.33	1.79		25.2	20.4	16.6	1.24	1.52
	28.2	22.0	17.4	1.28	1.62		33.6	19.6	17.5	1.71	1.92
	28.0	22.5	17.6	1.24	1.59		31.3	21.1	15.9	1.48	1.97
	32.2	20.0	15.4	1.61	2.09		22.8	18.4	14.3	1.24	1.59
	28.9	19.7	16.3	1.47	1.77		26.1	19.8	15.0	1.32	1.74
	16.6	23.1	18.9	0.72	0.88		27.7	22.0	16.8	1.26	1.65
	28.2	21.3	15.5	1.32	1.82		24.9	21.0	15.8	1.19	1.58
	35.7	27.5	19.9	1.30	1.79		21.8	18.5	14.8	1.18	1.47
	24.4	18.2	15.3	1.34	1.59		23.1	19.7	16.6	1.17	1.39
	23.8	17.1	13.4	1.39	1.78		28.0	22.2	18.2	1.26	1.54
	34.7	24.3	17.8	1.43	1.95		26.0	20.4	17.3	1.27	1.50
	25.3	21.2	16.1	1.19	1.57		30.1	20.6	14.6	1.46	2.06
	28.4	21.3	17.2	1.33	1.65		24.7	18.1	15.2	1.36	1.63
	31.5	21.0	16.6	1.50	1.90		27.4	21.3	15.3	1.29	1.79
	27.4	19.6	15.4	1.40	1.78		29.6	21.4	15.9	1.38	1.86
	22.2	17.9	15.3	1.24	1.45	No33	21.2	18.6	15.3	1.14	1.39
	26.3	19.8	15.0	1.33	1.75		20.5	19.1	15.2	1.07	1.36
	25.3	19.2	14.8	1.32	1.71		26.6	19.9	14.5	1.34	1.83
	27.4	20.3	15.6	1.35	1.76		24.0	19.1	15.1	1.26	1.59
	28.8	21.6	17.9	1.24	1.50		23.2	17.1	13.3	1.36	1.74
	30.1	14.1	12.8	2.13	2.35	No34	31.7	21.9	16.2	1.45	1.96
No29	23.2	19.7	14.8	1.18	1.57		27.0	17.0	12.8	1.59	2.11
	19.3	16.9	14.1	1.14	1.37		26.0	20.8	16.1	1.25	1.61
	26.0	20.8	15.7	1.25	1.66		22.0	19.6	14.7	1.12	1.50
	25.8	20.1	16.8	1.28	1.94		31.8	22.1	18.4	1.44	1.73
	24.6	18.1	14.3	1.36	1.72		26.6	20.7	17.4	1.29	1.53
	29.7	21.8	16.8	1.36	1.77		25.8	19.3	15.0	1.34	1.72
	32.6	20.0	12.6	1.63	2.59		26.3	20.2	15.9	1.30	1.65
	30.3	20.8	16.5	1.46	1.84		27.4	19.4	15.5	1.41	1.77
	33.0	23.2	18.0	1.42	1.83		27.6	19.8	17.0	1.39	1.62
	23.8	19.7	15.3	1.21	1.56		23.1	18.5	16.9	1.25	1.37
	35.1	24.0	17.5	1.46	2.01		24.3	21.1	15.5	1.15	1.57
	28.0	20.7	16.5	1.26	1.58		30.9	21.5	15.1	1.44	2.05
	23.6	20.2	17.1	1.17	1.38		23.4	20.5	16.6	1.24	1.53
	35.2	24.8	18.8	1.42	1.88		30.2	21.8	14.5	1.39	2.08
	25.5	20.4	15.2	1.25	1.68		32.1	16.2	18.8	1.98	1.71
	25.8	20.3	18.0	1.27	1.43		31.7	20.0	14.3	1.59	2.22
	23.8	19.7	15.9	1.21	1.50		25.8	20.7	16.0	1.25	1.61
	26.0	21.3	16.1	1.22	1.61		24.8	19.9	14.6	1.25	1.70
	25.6	20.2	14.9	1.27	1.72		21.7	18.6	15.9	1.17	1.36
	24.3	19.1	15.9	1.27	1.53		23.7	18.5	16.6	1.28	1.43
	28.4	21.1	16.0	1.25	1.65		27.7	20.5	15.6	1.35	1.78
	30.5	20.6	15.6	1.48	1.96		28.0	21.3	17.6	1.31	1.59
	22.8	17.0	13.2	1.34	1.73		25.1	19.9	15.7	1.26	1.60
	24.3	19.2	15.7	1.27	1.55		23.9	18.7	16.2	1.28	1.48
	25.1	21.1	16.1	1.19	1.56	No35	31.7	22.1	18.3	1.43	1.73
	25.0	18.8	15.5	1.33	1.61		31.0	24.6	19.7	1.26	1.57
	25.2	20.0	15.2	1.26	1.66		26.4	20.9	16.3	1.26	1.62

表37 二之宮宮下東遺跡から出土したモモ核の計測値(その4)

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
No.35	24.2	21.0	16.0	1.15	1.51
	31.0	22.8	16.3	1.36	1.90
	25.9	18.5	13.5	1.40	1.92
	25.1	17.5	14.2	1.43	1.77
	32.1	24.5	19.6	1.31	1.64
No.36	32.6	19.8	15.0	1.65	2.17
	27.6	23.1	21.1	1.19	1.31
	26.0	18.9	13.8	1.38	1.88
	27.4	17.7	15.6	1.56	1.76
	28.1	22.6	18.9	1.24	1.49
	23.5	19.2	16.3	1.22	1.44
	27.2	20.3	16.3	1.34	1.67
	21.1	18.6	14.7	1.13	1.44
	25.7	17.7	13.7	1.45	1.88
	28.2	20.3	15.8	1.39	1.78
	25.7	19.7	16.7	1.30	1.54
	25.4	20.0	15.9	1.27	1.60
	20.7	22.8	16.1	0.91	1.29
	29.1	21.2	27.4	1.37	1.06
	23.3	17.5	13.9	1.33	1.68
	28.7	23.2	18.4	1.24	1.56
	33.5	25.0	17.5	1.34	1.91
	27.8	19.3	14.9	1.44	1.87
	22.1	19.3	14.7	1.15	1.50
	27.1	19.8	16.2	1.37	1.67
	28.9	22.2	16.7	1.30	1.73
	21.1	18.5	15.5	1.14	1.36
	28.8	22.3	17.7	1.29	1.63
	25.1	21.2	18.2	1.18	1.38
	25.3	20.4	15.3	1.24	1.65
	30.4	22.0	18.2	1.38	1.67
	27.3	20.0	15.4	1.37	1.77
	23.7	16.5	13.1	1.44	1.81
	28.7	25.2	22.4	1.14	1.28
	29.0	20.6	16.4	1.41	1.77
	23.8	18.8	15.5	1.27	1.54
	25.4	20.6	16.4	1.23	1.55
	25.3	20.1	15.9	1.26	1.59
	30.2	24.3	17.3	1.24	1.75
	28.4	21.6	16.6	1.31	1.71
26.2	19.1	16.1	1.37	1.63	
37.1	24.5	18.5	1.51	2.01	
29.5	20.3	15.4	1.45	1.92	
33.7	23.9	18.4	1.41	1.83	
22.9	17.8	15.3	1.29	1.50	
28.9	23.1	17.1	1.25	1.69	
27.6	22.8	18.5	1.21	1.49	
33.5	23.5	16.1	1.43	2.08	
34.9	23.7	16.8	1.47	2.08	
23.9	19.8	15.8	1.21	1.51	
27.9	18.6	14.3	1.50	1.95	
33.1	24.0	19.0	1.38	1.74	
30.5	22.5	14.2	1.36	2.15	
22.8	18.7	15.5	1.22	1.47	
32.8	20.5	13.7	1.60	2.39	
19.3	17.1	14.7	1.13	1.31	
24.6	20.1	16.2	1.22	1.52	
26.3	20.1	16.0	1.31	1.64	
27.9	22.6	17.6	1.23	1.59	
25.3	21.4	16.3	1.18	1.55	
26.9	20.4	15.4	1.32	1.75	
30.7	22.4	17.8	1.37	1.72	
28.2	21.3	15.6	1.32	1.81	
29.7	20.4	15.8	1.46	1.88	
25.5	22.0	17.2	1.16	1.48	

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	
No.36	29.6	21.3	16.3	1.39	1.82	
	27.0	20.7	16.2	1.30	1.67	
	27.9	22.1	18.2	1.26	1.53	
	24.2	20.0	15.4	1.21	1.57	
	23.8	19.7	14.6	1.21	1.63	
	27.6	21.9	15.7	1.26	1.76	
	27.1	19.5	15.4	1.39	1.76	
	26.1	22.1	17.8	1.18	1.47	
	29.2	20.7	16.8	1.41	1.74	
	28.9	22.1	17.4	1.31	1.66	
	No.37	21.9	17.1	14.5	1.28	1.51
		24.2	19.1	15.1	1.27	1.60
		23.4	19.6	15.7	1.19	1.49
		25.7	18.2	15.2	1.41	1.69
		24.7	20.3	15.7	1.22	1.57
23.9		19.6	16.4	1.22	1.46	
26.7		21.6	16.1	1.24	1.66	
28.9		22.5	16.9	1.28	1.71	
24.0		18.6	14.8	1.29	1.62	
21.3		17.4	12.7	1.22	1.68	
22.6		16.9	13.6	1.34	1.66	
26.6		20.0	15.0	1.33	1.77	
19.9		16.1	13.7	1.24	1.45	
21.2		18.8	15.3	1.13	1.39	
26.6		21.7	18.3	1.23	1.45	
27.5	20.7	17.1	1.33	1.61		
22.8	19.1	15.9	1.19	1.43		
28.6	24.5	16.8	1.17	1.70		
24.6	19.2	14.9	1.28	1.65		
26.9	21.1	17.8	1.27	1.51		
26.8	20.5	16.4	1.31	1.63		
26.5	20.9	16.0	1.27	1.66		
22.5	18.6	15.9	1.21	1.42		
23.5	20.3	15.3	1.16	1.54		
24.6	18.4	14.1	1.34	1.74		
27.2	23.6	18.6	1.15	1.46		
27.1	20.5	17.5	1.32	1.55		
24.1	19.1	15.2	1.26	1.59		
No.38	24.6	20.7	17.0	1.19	1.45	
	22.7	20.0	16.6	1.14	1.37	
	23.1	19.1	14.7	1.21	1.57	
	33.6	25.3	18.9	1.33	1.78	
	22.6	19.1	16.8	1.18	1.35	
No.39	24.1	20.5	18.3	1.18	1.32	
	31.2	21.6	14.3	1.44	2.18	
	24.4	20.0	17.2	1.22	1.42	
	29.1	20.3	14.8	1.43	1.97	
	30.2	23.2	18.2	1.30	1.96	
	28.5	23.1	17.3	1.23	1.65	
	29.8	22.6	17.9	1.32	1.66	
	29.1	22.0	16.3	1.32	1.79	
	30.6	19.3	15.1	1.59	2.03	
	25.8	20.6	15.5	1.25	1.66	
	22.7	19.4	16.8	1.17	1.35	
	28.0	22.7	16.9	1.23	1.66	
	33.0	24.0	18.0	1.38	1.83	
	24.8	20.5	15.7	1.21	1.58	
	27.4	19.7	16.0	1.39	1.71	
31.8	22.6	18.9	1.41	1.68		
28.4	21.3	16.6	1.33	1.71		
21.7	18.6	15.6	1.17	1.39		
22.6	18.1	13.2	1.25	1.71		
27.8	21.7	16.9	1.28	1.64		
30.9	21.2	15.3	1.46	2.02		
27.7	20.6	15.7	1.34	1.76		

表38 二之宮宮下東遺跡から出土したモモ核の計測値 (その5)

試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	試料番号	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ	
No39	31.3	22.7	17.3	1.38	1.81	No46	26.3	21.6	16.3	1.22	1.61	
	26.6	19.9	15.5	1.34	1.72		26.6	20.8	17.0	1.28	1.56	
	26.5	20.0	15.6	1.33	1.70		17.4	20.7	17.2	0.84	1.01	
	25.7	19.8	14.7	1.30	1.75		28.6	22.4	19.1	1.28	1.50	
	27.2	19.0	15.2	1.43	1.79		20.0	18.1	14.8	1.10	1.35	
	24.1	17.3	14.5	1.39	1.66		No47	28.8	21.0	15.8	1.37	1.82
	26.8	21.4	16.3	1.25	1.64			24.8	19.7	15.4	1.26	1.61
	22.8	18.9	16.0	1.21	1.43			24.2	20.8	16.4	1.16	1.48
	28.2	19.4	14.4	1.45	1.96			24.9	18.9	14.2	1.32	1.75
	19.2	17.3	14.2	1.11	1.35			26.3	19.6	17.2	1.34	1.53
	31.3	21.5	17.7	1.46	1.77			25.4	19.0	15.8	1.34	1.61
	30.9	22.0	15.8	1.40	1.96			25.9	20.7	16.7	1.25	1.55
	24.7	18.8	13.1	1.31	1.89			22.6	19.4	15.7	1.16	1.44
	24.1	19.7	14.7	1.22	1.64			25.0	20.7	17.2	1.21	1.45
No40	23.8	20.3	17.1	1.17	1.39	24.6		20.1	15.1	1.22	1.63	
	26.8	20.3	15.2	1.32	1.76	25.2		20.2	16.4	1.25	1.54	
No41	26.3	22.0	16.8	1.20	1.57	24.7		18.8	14.7	1.31	1.68	
	23.2	19.6	15.9	1.18	1.46	25.4		19.0	15.3	1.34	1.66	
No43	26.5	20.3	15.8	1.31	1.68	23.7		18.4	15.3	1.29	1.55	
	27.2	22.6	17.9	1.20	1.52	26.2	22.7	17.0	1.15	1.54		
No44	29.2	22.1	18.3	1.30	1.60	24.5	18.9	16.0	1.30	1.53		
	27.4	20.4	16.9	1.34	1.62	27.0	21.0	15.5	1.29	1.74		
No44	24.3	19.1	15.7	1.27	1.55	23.8	20.3	16.4	1.17	1.45		
	34.7	21.5	16.7	1.61	2.08	20.8	18.0	14.8	1.16	1.41		
	27.2	22.3	17.0	1.22	1.60	21.0	18.0	14.4	1.17	1.46		
	24.4	21.4	17.9	1.14	1.36	21.6	17.8	14.5	1.21	1.49		
	22.2	20.4	17.5	1.09	1.27	26.4	20.8	16.9	1.27	1.56		
	27.8	23.5	17.1	1.18	1.63	21.5	19.3	15.6	1.11	1.38		
	30.0	23.2	16.7	1.29	1.80	27.1	21.6	17.0	1.25	1.59		
	24.4	18.7	13.9	1.30	1.76	22.8	18.4	15.7	1.24	1.45		
	39.2	22.2	17.6	1.32	1.66	25.2	20.5	14.8	1.23	1.37		
	23.0	20.5	15.4	1.12	1.49	21.0	18.6	15.3	1.13	1.70		
	34.7	20.3	15.2	1.22	1.63	22.1	19.3	15.4	1.15	1.44		
	24.1	19.7	15.9	1.22	1.52	23.5	18.7	15.1	1.26	1.56		
	23.6	18.9	15.0	1.25	1.57	21.7	17.4	14.3	1.25	1.52		
	26.8	20.8	15.1	1.29	1.77	25.2	19.4	16.5	1.30	1.53		
27.2	19.0	13.7	1.43	1.99	21.3	16.1	12.8	1.32	1.66			
25.2	19.0	14.6	1.33	1.73	25.9	19.9	16.2	1.30	1.60			
26.8	22.1	17.2	1.21	1.56	28.0	23.1	16.7	1.21	1.68			
30.2	23.8	16.6	1.27	1.82	24.5	18.8	15.9	1.30	1.54			
21.2	17.5	14.7	1.21	1.44	22.3	18.7	15.2	1.19	1.47			
29.0	22.8	17.3	1.27	1.68	20.0	17.2	14.3	1.16	1.40			
27.1	21.2	15.9	1.28	1.70	26.2	19.6	15.3	1.34	1.71			
22.9	18.3	13.5	1.25	1.70	26.7	21.5	16.0	1.24	1.67			
24.8	20.8	15.5	1.19	1.60	27.1	21.1	15.9	1.28	1.70			
25.2	20.1	16.8	1.25	1.50	25.2	19.4	15.9	1.30	1.58			
24.6	19.4	16.2	1.27	1.52	27.4	20.5	17.0	1.34	1.61			
25.4	21.0	17.0	1.21	1.49	28.5	24.5	18.3	1.16	1.56			
29.3	20.9	14.9	1.40	1.97	27.7	23.9	20.1	1.16	1.38			
24.9	19.2	13.7	1.30	1.82	26.8	19.1	15.1	1.35	1.71			
25.2	19.6	16.2	1.29	1.56	27.5	21.4	18.0	1.29	1.53			
24.1	19.3	15.9	1.25	1.52	27.1	17.1	13.1	1.58	2.07			
25.4	19.8	15.0	1.28	1.69	25.3	19.0	13.6	1.33	1.86			
24.4	18.3	14.0	1.33	1.74	No48	23.3	17.6	12.6	1.32	1.85		
28.3	24.0	17.7	1.18	1.60		No52	24.8	20.3	17.5	1.22	1.42	
24.3	17.9	13.7	1.36	1.77	23.5		17.4	13.7	1.35	1.72		
22.4	16.0	13.8	1.40	1.62	No53	27.1	21.2	17.7	1.28	1.53		
29.0	21.6	16.9	1.34	1.72		24.1	19.5	15.4	1.24	1.56		
23.8	17.8	13.8	1.34	1.72		25.0	20.7	15.7	1.21	1.59		
No46	24.8	21.0	17.1	1.18		1.45	24.8	20.0	15.4	1.24	1.61	
	30.3	25.8	18.0	1.17	1.68	27.4	21.8	16.9	1.26	1.62		
	25.6	20.2	15.8	1.27	1.62	25.6	19.0	15.0	1.35	1.71		
	30.9	24.9	18.4	1.24	1.68	25.0	20.4	16.1	1.23	1.55		
28.1	19.6	14.6	1.43	1.92	No55	23.8	17.7	14.3	1.34	1.66		
25.6	19.1	14.9	1.34	1.72		No60	25.0	18.7	12.5	1.34	2.00	
25.0	20.2	17.4	1.24	1.44	No61		28.5	21.3	16.0	1.34	1.78	

表39 No65試料の炭化米の計測値

長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
4.6	2.5	1.9	1.84	2.42
4.0	2.2	1.7	1.82	2.35
4.4	3.3	2.1	1.33	2.10
4.9	2.9	2.1	1.69	2.33
4.7	2.6	1.9	1.81	2.47
4.5	2.6	2.1	1.73	2.14
4.8	2.8	1.9	1.71	2.53
5.0	3.0	2.2	1.67	2.27
4.4	1.9	1.3	2.32	3.38
5.0	2.3	2.1	2.17	2.38
4.9	2.9	1.9	1.69	2.58
4.3	2.6	1.8	1.65	2.39
4.9	2.8	1.9	1.75	2.58
4.7	3.0	2.1	1.67	2.24
4.6	2.9	2.0	1.59	2.30
4.8	3.0	2.5	1.60	1.92
4.6	3.1	2.0	1.48	2.30
4.7	2.9	1.9	1.62	2.47
4.8	2.7	2.0	1.78	2.40
5.4	2.7	1.6	2.00	3.38
5.1	2.6	2.4	1.96	2.13
4.9	2.6	1.9	1.88	2.58
4.3	2.8	2.1	1.54	2.05
4.3	2.9	2.2	1.48	1.95
5.1	2.7	2.4	1.89	2.13
4.9	2.7	2.2	1.81	2.23
4.8	3.2	1.8	1.50	2.67
3.5	1.9	1.2	1.84	2.92
4.7	3.1	2.1	1.52	2.24
5.0	3.1	1.9	1.61	2.63
4.9	2.7	2.1	1.81	2.33
5.0	2.6	2.5	1.92	2.00
4.7	3.0	2.2	1.57	2.14
4.8	2.8	2.2	1.71	2.18
4.6	2.7	2.4	1.70	1.92
4.8	2.3	1.5	2.09	3.20
5.4	3.1	2.1	1.74	2.57
4.8	2.7	2.5	1.78	1.92
4.5	3.0	2.1	1.50	2.14
4.1	2.8	2.5	1.46	1.64
4.6	2.7	1.9	1.70	2.42
4.6	2.7	2.4	1.70	1.92
5.1	2.3	2.3	2.22	2.22
4.2	2.9	2.4	1.45	1.75
4.2	2.7	2.2	1.56	1.91
4.0	2.8	1.8	1.43	2.22
5.1	2.6	2.0	1.96	2.55
4.9	2.8	2.3	1.75	2.13
4.8	3.0	2.2	1.60	2.18
4.9	2.3	1.4	2.13	3.50
5.1	3.3	2.0	1.55	2.55

表40 No65試料の炭化粉の計測値

長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
7.1	3.9	2.6	1.82	2.73
8.1	3.6	2.3	2.25	3.52
7.6	3.7	2.6	2.05	2.92
7.8	3.1	2.4	2.52	3.25
7.4	3.7	2.6	2.00	2.85
8.2	3.2	2.2	2.56	3.73
7.5	3.6	2.1	2.08	3.57
7.5	3.5	2.3	2.14	3.26
7.9	3.4	2.7	2.32	2.93
8.0	3.3	2.2	2.42	3.64
7.5	3.7	2.6	2.03	2.88
7.9	3.1	2.4	2.55	3.29
7.4	3.6	2.2	2.06	3.36
7.1	3.1	2.2	2.29	3.23
7.7	3.5	2.4	2.20	3.21
7.0	3.6	2.0	1.94	3.50
7.6	3.5	2.5	2.17	3.04
7.8	3.6	2.4	2.17	3.25
7.7	3.7	2.5	2.08	3.08
7.0	3.5	2.3	2.00	3.04
8.1	3.6	2.6	2.25	3.12
7.7	3.6	2.5	2.14	3.08
7.5	3.3	2.3	2.27	3.26
6.9	3.3	2.6	2.09	2.65
7.6	3.6	2.6	2.11	2.92
7.0	3.5	2.4	2.00	2.92
6.8	3.4	2.5	2.00	2.72
7.4	3.9	2.7	1.90	2.74

表41 サクラ属の計測値

長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ/厚さ
No35				
13.5	11.5	12.7	1.17	1.06
No27				
18.9	13.4	9.1	1.41	2.08
16.4	12.2	8.0	1.34	2.05
15.1	10.3	7.5	1.47	2.01
17.2	12.3	7.8	1.40	2.21
16.8	11.7	8.5	1.44	1.98
17.0	12.2	8.2	1.39	2.07
13.5	9.5	7.1	1.42	1.90
12.8	11.0	8.2	1.16	1.56
12.7	8.6	6.6	1.48	1.92
16.6	11.6	8.4	1.43	1.98
No29				
12.7	9.0	7.1	1.41	1.79

6. 鉱石の化学分析

關第四紀地質研究所

1. 分析結果

宮下東遺跡出土鉱石の分析では、磁鉄鉱7個、群馬鉄山より採取した褐鉄鉱の鉱石1個を日本電子製エネルギー分散型X線分析装置JED-2001で分析した。実験条件は15KV, WD:20mm, I NS:16mm, 倍率:200倍で行なった。分析結果は第1表化学分析結果表に示す通りである。分析結果に基づいて第1図 Fe_2O_3 - SiO_2 相関図を作成した。

1) 二之宮-1、2、3の磁鉄について

二之宮-2は Fe_2O_3 が92%と非常に高い含有量が検出されており、CuOも0.6%と高い。これに対して TiO_2 は0%となっている。二之宮-3は Fe_2O_3 が82.78%と高い含有量が検出されており、CuOも0.96%と高い。また、 TiO_2 は0%となっており、二之宮-2と成分的に類似性が高い。二之宮-1は Fe_2O_3 が69.87%と幾分低い含有量が検出され、 TiO_2 が0.45%、CuOが0%となっており、二之宮-2と3とは幾分組成が異なっている。

2) 二之宮-4、5、6、7の磁鉄について

二之宮-4、5、6の3個は中小坂鉄山の新坑入口付近の磁鉄、二之宮-7は焙焼炉付近の磁鉄である。二之宮-4は Fe_2O_3 の含有量が65.92%と幾分低く、 TiO_2 とCuOは0%である。二之宮-5は Fe_2O_3 の含有量が84.28%と高く、 TiO_2 は0.19%、CuOは0%である。二之宮-6は Fe_2O_3 が90.58%と高い含有量が検出されており、CuOは0.19%、 TiO_2 は0%である。二之宮-5と6は Fe_2O_3 の含有量が高く、良質の磁鉄であるが、二之宮-4は幾分含有量が低い。二之宮-7は焙焼炉付近の磁鉄であるが Fe_2O_3 は42.54%と含有量が低く、磁鉄的である。

3) 二之宮-8の群馬鉄山の磁鉄について

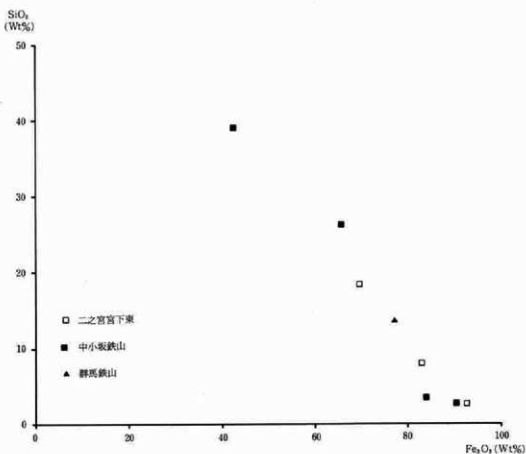
二之宮-8は群馬鉄山より採取した褐鉄鉱である。 Fe_2O_3 は77.8%と高く、 TiO_2 は0.14%、CuOが0.57%である。これは二之宮-1、4と二之宮-2、3、5、6の中間の含有量で、両方のグループとは明らかに異なっていることがわかる。

2. まとめ

二之宮-2、3、5、6の4個は Fe_2O_3 が80%以上の領域にあり、高い含有量が検出されている。二之宮-1、4、7、は Fe_2O_3 が65~70%の領域に分布している。この2つのグループの中間に二之宮-8があり、異質である。二之宮-7は焙焼炉付近の磁鉄 Fe_2O_3 が42.4%と低く、磁鉄的である。

第1表 化学分析表

Oxide	二宮鉄-1	二宮鉄-2	二宮鉄-3	二宮鉄-4	二宮鉄-5	二宮鉄-6	二宮鉄-7	二宮鉄-10
	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
Na ₂ O	1.090	0.000	0.000	0.770	0.580	0.000	0.640	0.420
MgO	0.870	0.000	0.110	0.000	0.330	0.000	4.910	0.120
Al ₂ O ₃	3.940	0.770	2.440	1.930	0.940	0.430	1.810	3.560
SiO ₂	18.840	2.620	8.600	26.430	3.650	2.940	39.070	13.300
K ₂ O	0.700	0.100	0.360	0.030	0.000	0.000	0.060	0.390
CaO	2.060	0.810	2.420	1.740	7.820	2.860	8.240	0.100
TiO ₂	0.450	0.000	0.000	0.000	0.190	0.000	0.000	0.140
MnO	1.380	2.250	1.840	1.740	1.870	2.710	1.700	1.980
Fe ₂ O ₃	69.870	92.050	82.780	65.920	84.280	90.580	42.540	77.800
CoO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
CuO	0.000	0.620	0.960	0.000	0.000	0.190	0.530	0.570
SnO ₂	0.460	0.570	0.000	0.440	0.250	0.280	0.000	0.160
HgO	0.000	0.000	0.330	0.110	0.090	0.000	0.000	0.020
PbO	0.330	0.210	0.160	0.880	0.000	0.000	0.550	1.460
SO ₂								
Total	99.990	100.000	100.000	99.990	100.000	99.990	99.990	100.020
	鉱滓	鉱滓	鉱滓	中小板鉄山	中小板鉄山	中小板鉄山	中小板鉄山	群馬鉄山



第1図 Fe₂O₃-SiO₂図

7. 鉄滓のX線回折

欄第四紀地質研究所

1. 実験結果

分析したサンプルは第1表に示すように、二之宮宮下東遺跡より出土した鉄滓3点と群馬県の中小板鉄山坑口付近と倍焼炉付近採集の磁鉄鉱4点を分析した。これら7点はエネルギー分散型X線分析装置で元素分析を行ったものと同じ試料である。

回折は日本電子製JDX-8020X線回折装置で行った。

回折条件はtarget: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40KV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.22, 計数時間: 0.2SECである。

第1表X線分析表に示すように、検出された鉱物は磁鉄鉱が最も多く、ついで褐鉄鉱となっている。二之宮宮下東遺跡より出土した鉄滓の磁鉄鉱の強度は低く、褐鉄鉱と共存していることがわかる。これに対して、中小板鉄山の鉱石はそのほとんどが磁鉄鉱で、褐鉄鉱は少ないという特徴がある。

Fe-1は磁鉄鉱を検出し、他のものはほとんど検出されない。

Fe-2は石英と斜長石が検出され、褐鉄鉱と共存して磁鉄鉱が検出された。

Fe-3はFe-2の組成と強度が類似している。

Fe-4は磁鉄鉱の強度が高く、褐鉄鉱と石英と共存する。

Fe-5は磁鉄鉱の強度が高く、角閃石と石英と共存する。

Fe-6は磁鉄鉱だけが検出された。

Fe-7は磁鉄鉱の強度が高く、角閃石と共存している。

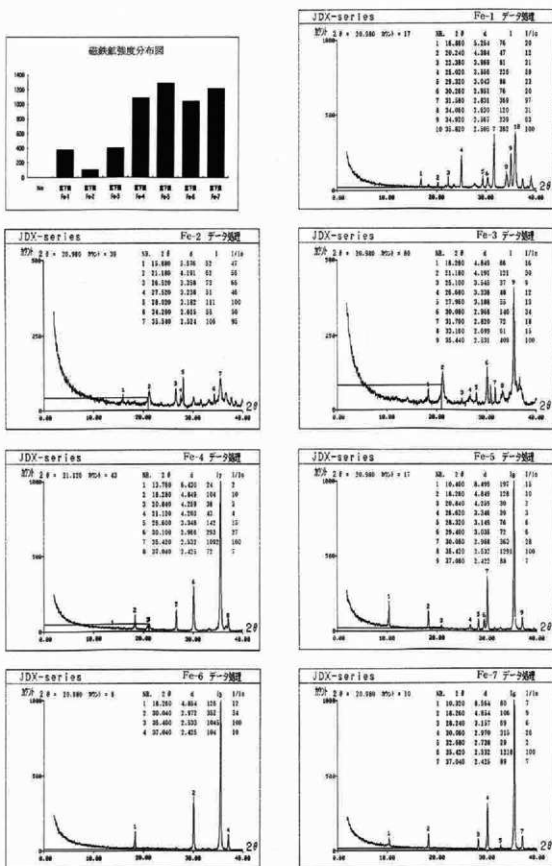
以上の結果からわかるように、二之宮宮下東遺跡から出土した鉄滓は磁鉄鉱の強度が低く、石英と斜長石と褐鉄鉱と共存している。これに対して、中小板鉄山採集の試料では褐鉄鉱の検出がほとんどなく、角閃石を一部含んでいるが、その主体はほとんどが磁鉄鉱である。

2. まとめ

磁鉄鉱の強度は中小鉄山の磁鉄鉱の方が二之宮宮下東遺跡の鉄滓よりも2~3倍高い。鉄滓は磁鉄鉱の強度が低い分褐鉄鉱が多く検出されている。これは磁鉄鉱 Fe_3O_4 の一部が風化して褐鉄鉱 $2Fe_2O_3 \cdot 3H_2O$ に変化したためであろう。これに対して、鉱石は新鮮で、風化作用をほとんど受けていないために、磁鉄鉱だけが検出されたものと判断される。

第1表X線分析表

試料 No	粘土鉱物および造岩鉱物											備 考
	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Kaol	Limonite	magnetite	K-fels	Qt	Pl	
宮下東 Fe-1								382				2227
宮下東 Fe-2							62	106		73	111	2334
宮下東 Fe-3							121	409		48	55	2325
宮下東 Fe-4							43	1092		142		中小板鉄山坑口付近
宮下東 Fe-5			197					1291		39		中小板鉄山坑口付近
宮下東 Fe-6								1045				中小板鉄山坑口付近
宮下東 Fe-7			80					1218				中小板鉄山坑口付近



第1図 磁鉄鉱強度分布図、X線回折チャート

第5章 考 察

1. 漆関係資料について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

1. はじめに

前橋市二之宮宮下東遺跡については、主に包含層のなかから漆様の付着物の認められる奈良時代の土師器片が多数出土している。また古墳時代に所属する土師器で、いわゆる漆による仕上げ処理を施したと思われるものもある。漆作業の存在が確認できれば、この遺跡の性格を検討してゆく上で大きな情報になる。今回はこの目的のために、遺物を子細に渡って観察するとともに、一部の資料については試料を採取した上で、その層断面試料を作製し内容の検討を行なった。以下にその結果を報告する。

2. 土師器に付着した漆

第224図469、第224図465、第224図463

奈良時代の土師器片で、同一個体に所属する断片と考えられている。付着物は口唇部を含む内面に残存しているが、外面部にも僅かながら認められる。胎土表面によく密着しており、その厚さも全体としては薄いものであるが、本土師器への装飾的な塗布でないことは一見して明らかな状況であり、いわゆる漆液容器すなわち漆作業に伴う漆液の入れ物、パレットの類として捉えるべき典型的な様相を呈している。その付着物には、口縁部に見られるきわめて黒色光沢の強い平滑な膜状のものや、同様な性状ながら縮みじわの目立つ部分が存在するのに加えて、艶の無い白褐色の一見すると漆紙が付着しているようにも見える部分も観察される(図1の1、1の5、以下巻頭カラー写真を参照)。

それらの素材内容を検討するため、要所より付着物を採取し、ポリエステル樹脂にて埋包固定後、層断面薄片試料を作製した。層断面には基本的に2種類の特徴ある層を観察することができた。図1の2、1の6の層断面にはこの2種類の層が同時に観察されるが、1つは下層に認められる微視的には不均質な白褐色の層であり、もう1つはその上に存在する褐色透明な均質性の高い層である。図1の5に見られる白褐色の漆紙風付着物の断面層が図1の7、1の8であるが、これは褐色の均質な層の中に白褐色の不均質な層が混ざり込んだ様な状況を示している。このなかで典型的に不均質な白褐色部を更に拡大したものが図1の8であるが、これは径が数ミクロン以下の粒状物質が集合したものをその主体としていて観察できる。これは混合物である漆液のなかで成分分離のきわめてよく進んだ状況を反映している。漆の存在状態のひとつがあたかも漆紙であるかのごとく見えるのであって、紙であれば本来存在するはずのセルロース繊維の断面を図1の7、1の8の中に認めることはできない。すなわち図1の6の漆紙状付着物は、漆そのものであり、紙ではない。この白褐色不均質漆層は図1の2、1の6の下層を成していることから、付着物の表面には現れていないものかなり広がり有していることがわかる。しかしながらこの白褐色不均質漆層を伴わない褐色透明な漆層も存在する(図1の3、1の4)。図1の4についてみれば、この褐色透明な漆層は器胎の表面にきわめてよく密着しているのに加え、1つの大きな特徴を有している。それは界面に於いて黒色化の進行が認められることである。すなわち、器表部に接する漆の表面、上面すなわち空気に接する漆の表面、外部に連続していると思われる漆層内の微小な空洞部に面する漆面が、多いところで10ミクロン前後の深さにまで

より黒色に変色していることである。これは褐色透明な漆層が土師器に付着した時点で、すでにその土師器は熱せられており、また周辺の空気雰囲気も高温であったことを意味しよう。その温度は高くても200～300°Cであったと思われる。ただ図1の3の漆層断面にはそれがさほど強くは認められないところから、同一個体ではあっても土師器の部位によって温度差があったと考えられる。

以上のような漆の状況を総合して考えた場合、漆液容器（パレット）としてさらに細かな分類にまで立ち入るべきであるが、厳密に結論づけるには再現実験等によって更に検討する必要がある。

第223図462・447・450・458・459・452・453・451、第223図456・460・443・444、第223図446、第223図455

奈良時代の土師器甕で同一個体の断片と推定されている。基本的には内面にのみ光沢を有する薄い塗膜状の付着物が認められ(図2の1)、外面にはごくわずかに汚れ状の部分が見いだせるに過ぎない。意図的な漆塗りを見た場合、薄いながらも塗りむらが大きいこと、塗り残し箇所があることなどは、それを否定する要因になる。付着物の層断面(図2の2)で見ると、均質性に優れており、クロメられた漆と判断できる。器胎表面によく密着しているが、場所により図2の3の層断面に示されたように黒色変色が進み、大きな気泡を抱え込んだ状況である。これは部分的には漆液が加熱され過ぎた状況であることを示している。層断面に見られる特徴を含めた付着物の全体状況から、本容器は漆液容器なかでも生漆をクロメ加工した容器と見るのが最も合理的である。なお、容器形態が壺であること、付着物の外観や層断面に被熱した痕跡が認められることから、天日によらず、弱く加熱することによりクロメ作業をおこなったものと判断する。

第223図457、第223図454、第223図448、第224図466

付着物の色が赤褐色であり、薄く付着しているにもかかわらず塗りむらが多く、なかには刷毛で擦り採った痕跡さえ認められる(図2の4)。付着物の色調、質感は漆そのものであるが、なかには白褐色味の強いもの(2663)もあるので、再調査を考えている。いずれにしても典型的な漆液容器（パレット）である。

459（二之宮千足遺跡出土）

古墳時代の土師器環であるが、器表面の内外全面に覆ってやや艶のある黒色物ごく薄く塗布されている様子(図2の5)は、筆者の言う“漆処理をした土師器”“漆仕上げ土師器”に該当する。これは、第一義的には土師器の透水性を防止することを目的として、土師器の焼成後まだ熱のあるうちに漆を拭き塗りして高温硬化法により漆を固着するものと考えている。本資料の器胎表面部の層断面(薄片)で見ると、胎土表面によく密着した厚さ数ミクロンと薄い褐色の層の存在が確認できる。これが高温硬化したいわゆる焼付け漆の層である。現在までのところ関東地方あるいは九州北部の古墳時代の土師器には一定程度の割合でこの種の資料が検出されており、今後更に時代的、地域的な広がりを受けてゆくものと考えている。

上記以外の土師器片

第224図468

内面は深さ1mm強に至るまで胎土が黒色変色しており、一見するとカーボン吸着によるものと判断される。しかしながら一般的な吸炭処理であれば、その黒色は胎土の深部に向かって漸減するはずである。ところがこの資料に特異的なのはその層断面(図2の7)にみるごとく胎土の深さ1.4mmを境にして黒色部と胎土そのものの色とが明瞭に分かれていることである。更に言えば、本資料の黒色部の硬度はその下層の黒色でない胎土の部分より著しく増大している。これは通常のカーボン吸着では考えられない現象である。ところでこの資料の内面器表面には厚さ5ミクロン前後の褐色の塗膜が認められるが、断文の存在などからしてこの塗膜は漆の高温硬化したものと推定される。この塗膜の存在と黒色胎土層の特異性から次の様に考えるのが最も合理的である。すなわち、土師器本体の温度を適当な状態にして、胎土の深部にまで漆を浸透させ

つ硬化させるのである。こうすることにより漆の浸透した胎土の部分は、その接着力により著しく強度・硬度を増し、さらに表面部で硬化した漆層は透水性の予防と装飾性とに寄与することになる。以上、特別な内容を持つ資料と判断できるが、漆の特性を承知して使いこなしていた人々であれば当然ながら行うべき方法であるとも言える。

第223図442、第224図464、第224図467、第223図449、第223図445、2664

縮みじわの顕著なもの等を含め、白褐色～黒色の付着物を内面に有する断片類であり、いずれも漆液容器（パレット）と認められるものである。

3. 転用硯 第199図48、第198図1、第198図12

標題とは内容を異にするが、ここで簡単に扱うこととする。3点共須恵器の蓋を転用したもので、内面の平滑さが増していること、その面に墨と思われる黒色の汚れが付着していることから硯に転用されたものと判断できるが、赤色顔料については顕微鏡的に見ても確認できない。念のため蛍光X線分析も実施したが、いずれの資料からも須恵器本体から検出される元素以外に有意なものは検出されていない。すべて墨のみの使用である。

4. おわりに

二之宮宮下東遺跡から出土した奈良時代の土師器のなかに、たくさんの漆液容器を見いだすことができた。パレット的な容器に加え、生漆のクロメ加工に使用したと思われる容器も確認できた。これは、本遺跡に於て奈良時代に漆を加工調整し、何等かの製品製作を行っていたことを意味するものである。その規模・内容等については不明であるが、遺跡の性格を考える場合に考慮されるべき重要な情報と言える。

またや遅った古墳時代の土師器に、漆仕上げ処理を施した例が検出できたことは、本処理方法の広がりを考える上で基礎的な情報になろう。なお時代が下った奈良時代に、胎土本体をも漆で強化した漆仕上げ土師器の例が検出できたことも興味深い事例になろう。

最後に、これら資料に関心をもって調査を企画された伊都群馬県埋蔵文化財調査事業団の方々にお礼を申し上げたい。

1) 永嶋正春「藤原市稲荷塚遺跡出土品の材質と技法—古墳時代後期の、漆による表面仕上げを施した土師器を中心に—」『稲荷塚・大野原 栃木県埋蔵文化財調査報告第84集 栃木県教育委員会 1987

2. 二之宮宮下東遺跡出土の墨書土器について

高島 英之

はじめに

本遺跡からは131点にもぼる墨書土器が出土している。ただし小片などで全く判読できないものが52点ほどある。それにしても県内のこれまでの1遺跡における墨書土器出土数からみれば極めて多い事例と言えるだろう。これらの墨書土器の殆んどは谷部包含層からの出土であり、遺構に伴うものは少ないので墨書土器の内容から集落内の単位集団の趨勢をあとづけることはできないが、則天文字を記したものが多量に含まれていることや、非常に特徴的な字形のものがみられることなど、近年、俄かに脚光を浴びようになってきた墨書土器研究に、大変有益な素材を提供することができる資料群と言えるだろう。殊に、最近、注目されたつつある字形論との関わりの中で、重視できる内容を含んでいると考えられる。

なお、本遺跡出土の墨書土器全点の内容や器形・器種・施文部位・時期などについては、表1および図1に掲げておいたので、以下では、出土資料中にみられる特徴的な事項2・3についてとりあげていくことにしたい。

1. 則天文字「𠄎」(天)

本遺跡では、則天文字「𠄎」(天)を記す墨書土器が25点出土している。時期は、いずれもほぼ8世紀後半から9世紀前半にかけてのものであり、須恵器・土師器の双方にみられる。則天文字としては1種類のみであるが、これほど則天文字がまとまって出土した例は、全国でも類をみない。

殆んどが「𠄎」1文字のみの記載であるが、須恵器蓋つまみ部に「𠄎寶」と記すものが2例あり、さらに下の字が判読不能ではっきりしないが、同じく熟語を記したであろうものももう1例存在している。「𠄎寶」は文字通り「天の宝」の意であり、吉祥句・呪句的な文言とみられる。これらと同時期とみられる須恵器蓋つまみ部に「神」と記すものが出土しているところからみて、これらはある一定の祭祀・儀礼的行為に際して使用されたものと考えて大過ないだろう。また、則天文字と他の通有の漢字とを組み合わせる1つの単語となした用例も非常に珍しい。

とりわけ注目されるのは、須恵器杯に寛書きで「𠄎」の字を記したものが3点含まれることである。¹⁴須恵器であるから当然焼成前の書き入れということになる。従来、墨書・刻書土器を考える上では、寛書きのものは土器焼前以前の刻字であるから生産段階においてなされたものであり、一方墨書や釘書きのものは、ほぼ消費地・すなわち集落遺跡であればその村落内で記されたものと考えられており、記された文字の性格も自ら分別されるものと考えられてきた。ところが本遺跡の出土例では、明らかに生産段階で記された文字と消費地で記されたと考えられる文字とが全く同一であり、甚だ稀有な事例と言わざるを得ない。つまり本遺跡地では、須恵器の生産段階に対して、「𠄎」の字を寛書きするように恰も発注するといったような行為がなされていたと考えることができよう。¹⁵近年、土器への墨書行為の意味・目的については、村落内あるいは単位集団内、さらには1住居内などにおける一定の祭祀や儀礼行為等の際に、土器になかば記号として意識された文字が記されたものが多いということが指摘されており、¹⁶本遺跡地では、そうした祭祀・儀礼に際してのある種のマークとして「𠄎」の字が用いられたと言うことができるだろう。そしてこのマークは、村落内で墨書するにとどまらず、須恵器生産段階にまで、刻字を求めるといって、この集団にとっては意味を有する文字であったということになろう。

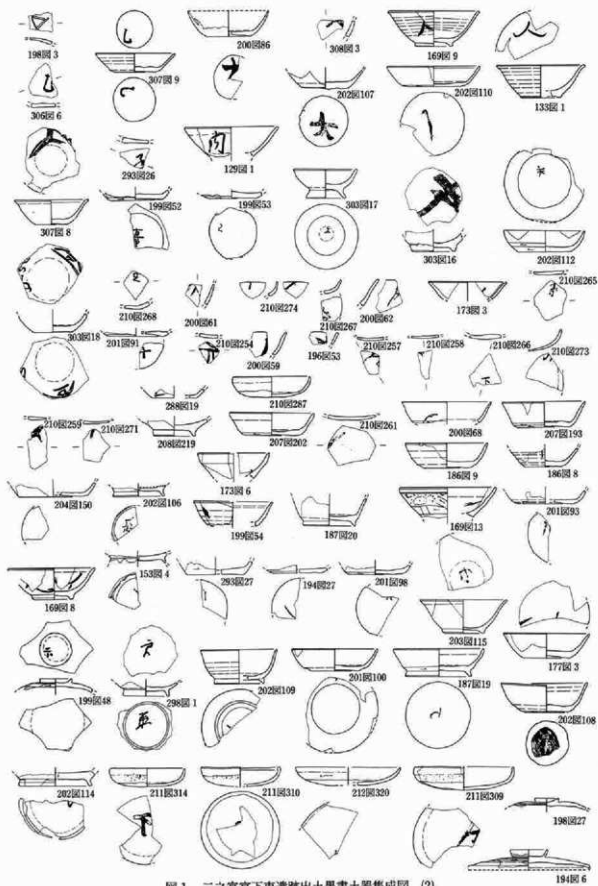


图1 二之宮宮下東遺跡出土墨書土器集成图(2)

表1 二之宮宮下東道跡墨書土器一覽表(1)

登録	図番号	出土位置	釈文	種別	器種	時期	備考
735	198図2	15層	鳳	須恵器	蓋	?	天井外面、刷文字「天」か
767	200図257	15層	鳳	須恵器	杯	8~9 C	底部外面、横位、刷文字「天」
763	200図258	55溝	鳳	須恵器	杯	8~9 C	底部外面、刷文字「天」
768	200図256	15層	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前?	底部外面、横位、刷文字「天」
1274	198図254	14層	鳳	土師器	杯	8~9 C	底部外面、刷文字「天」
1093	210図264	14、15層	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
1082	210図263	54溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」か
1094	210図260	54溝	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
1096	210図255	54・55溝	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
1095	210図262	15層	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
1100	210図253	15層	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
1097	210図272	15層	鳳	土師器	杯	?	底部外面、刷文字「天」
			□				底部外面
1102	210図252	15層	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、横位、刷文字「天」
1078	210図256	15層	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前?	底部外面、横位、刷文字「天」
732	198図4	15層	鳳	須恵器	蓋	8~9 C	蓋つまみ、刷文字「天」
741	201図94	15層	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、横位、刷文字「天」
760	202図105	54溝	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、(蓋書)、刷文字「天」
			鳳				底部外面、正位、刷文字「天」
2295	187図21	12井戸	鳳	須恵器	杯	8~9 C	底部外面、(蓋書)、刷文字「天」
739	201図102	54溝	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、(蓋書)、刷文字「天」
745	210図104	54溝	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
1238	199図44	14層	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前?	底部外面、刷文字「天」
755	199図55	56溝	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
742	200図87	15層	鳳	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
743	203図116		得万 得万 鳳	須恵器	杯		底部外面 底部外面、横位 底部外面、横位刷文字「天」
881	202図111	54溝		須恵器	杯	8 C後	底部外面、刷文字「天」
1070	212図318	54溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
1071	212図317	54溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
1072	212図319	54溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、正位、刷文字「天」
1079	211図311	54溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
1076	211図307	54・55溝	鳳	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面、刷文字「天」
1005	203図118	54溝	鳳	須恵器	蓋	8 C後~9 C前?	底部外面、刷文字「天」
2574	314図1	5区6 H水田	鳳	須恵器	蓋	8~9 C	蓋外面、刷文字「天」
728	199図49	15層	鳳	須恵器	蓋	8 C後~9 C前	蓋つまみ、刷文字「天」を含む
727	199図50	15層	鳳	須恵器	蓋	8 C後~9 C前	蓋つまみ、刷文字「天」を含む
730	199図47	14、15層	神	須恵器	蓋	8 C後~9 C前?	蓋外面
729	199図46	15層	神	須恵器	蓋	8 C後~9 C前?	蓋つまみ
747	201図92	15層	得万	須恵器	杯	8~9 C	底部外面
978	201図101	16層	得万	須恵器	杯		底部外面
758	203図117	54溝	得万	須恵器	杯		底部外面
1089	210図269	54・55溝	正合	土師器	杯	?	底部外面
852	201図89	15層	正合	須恵器	杯	?	底部外面
1086	210図270	54溝	正合	土師器	杯	?	底部外面
734	198図5	54溝	正合	須恵器	蓋	?	蓋外面
733	199図51	54溝	正合	須恵器	蓋		蓋外面
1237	195図39	14層	正合	須恵器	杯		底部外面
738	201図97	54溝	正合	須恵器	杯		底部外面
2388	187図18	12井戸	正合	須恵器	杯		底部外面
737	202図113	54溝	正合	須恵器	杯		底部外面
297	288図23	2区55往	成	須恵器	皿		底部内面、蓋部外面?
1275	195図38	14層	成	須恵器	輪		底部外面
2607	307図10	5区河原	成	土師器	杯	9 C前	底部内面
2681	315図2	5区表土	成	須恵器	輪	9 C後~10 C前	底部内面、正位、
1272	196図55	14層	成	須恵器	輪		底部内面、正位、187図22と同様

表1 二之宮宮下東遺跡墨書土器一覧表(2)

登録	図番号	出土位置	釈文	種別	器種	時期	備考
754	201図90	54溝	得	須恵器	杯	8 C後～9 C前	体部外面、横位
2361	286図27	322土坑	雄	須恵器	杯	9 C中～後	体部内面、正位
2390	187図22	12井戸	矢 矢	須恵器	椀		体部内面、正位 底部外面
736	198図3	15層	△	須恵器	蓋	8～9 C	底部外面、墨書
2615	306図6	5区中央河道	乙	須恵器	杯	8～9 C	底部外面
2611	307図9	5区中央河道	乙 乙	須恵器	杯	9 C前	底部内面 底部外面
740	200図86	15層	大	須恵器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
2671	308図3	2日水田	人カ	須恵器	椀	9～10 C	体部外面、正位
201	166図9	42住	人カ	須恵器	椀	10 C前	体部外面、正位
2466	1338図1	17住	人	須恵器	椀	10 C前～中	体部内面
753	202図107	15層	太	須恵器	杯	9 C前	底部外面、内面に朱痕あり
751	202図110	15層	人	須恵器	杯	8 C後	底部外面
2604	307図8	5区1号河道	人?	須恵器	杯	9 C後	体部内面、正位
2561	293図26	B水田下	子カ	須恵器	杯	8 C後～9 C	底部外面
746	199図52	15層	真里カ	須恵器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
48	129図1	14住	内	須恵器	椀		体部外面、正位
851	199図53	54溝	門	須恵器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
2682	303図17	5区37溝	上	須恵器	椀	10 C	底部外面、墨書
969	303図16	50溝	中カ	須恵器	椀	10 C前	底部内面
752	202図112	54溝	水	須恵器	杯	8 C後	底部外面、釈読不能
2582	303図18	5区37溝	門 △	須恵器	杯	9 C後	体部内面、正位
2582			□				体部内面
2582			□				体部内面
2582			U				体部外面
2582			倉				体部外面
1165	210図268	54溝	足	土師器	杯	?	底部内面、墨書
749	201図91	15層	十	須恵器	杯	8～9 C	底部外面
769	200図61	14・15層	□	須恵器	椀?	9～10 C	底部外面
1099	210図254	15層	□	土師器	杯?	?	体部外面、210図253と同じ文字か?
1101	210図274	14・15層	□ □	土師器	杯	8 C後～9 C前	体部内面 体部外面
765	200図59	15層砂上	□	須恵器	杯	9 C	体部外面
1083	210図267	15層	□	土師器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
1273	196図53	14層	□	須恵器	椀?	9 C～10 C	体部外面
764	200図62		□	須恵器	椀?	9～10 C	体部内面
1098	210図257	16層	□	土師器	杯	?	底部外面
203	173図3	42住	□	須恵器	椀	9 C～10 C	体部内面
1103	210図258	15層	□	土師器	杯	?	底部外面
1696	210図266	16層	□	土師器	杯	?	底部外面
1088	210図265	15層	□	土師器	杯	?	底部外面
1081	210図273	15層	□	土師器	杯	8 C後～9 C前	体部外面
1091	210図259	16層	□	土師器	杯	?	底部外面
1084	210図271	16層	□	土師器	杯	?	底部外面
2117	288図19	2区202土坑	□	かわらけ?	皿	中世?	体部外面
761	208図219	56溝	□	須恵器	皿?		底部外面、成?
1073	210図287	54溝	□	土師器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
889	207図202	55溝	□	須恵器	杯	8 C後	底部外面
1085	210図261	54・55溝	□	土師器	杯	?	底部外面
943	200図68	15層	□	須恵器	杯	9 C前～中	体部内面
2389	186図9	12井戸	□	須恵器	杯	8 C後～9 C前	底部外面
863	207図193	15層・9井戸	□	須恵器	杯	8 C後	底部外面
2385	186図8	12井戸	□	須恵器	杯	9 C中～後	体部外面
923	204図150	15層	□	須恵器	杯	8～9 C	底部外面
975	202図106	54溝	□	須恵器	杯	8～9 C	底部外面
212	173図6	42住	□	須恵器	椀		体部内面、196図13と同様な器形

表1 二之宮宮下東遺跡墨書土器一覧表(3)

登録	図番号	出土位置	釈文	種別	器種	時期	備考
757	1998054	55溝	□	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
2396	187820	12井戸	□	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
204	1968013	42住	□	須恵器	椀		底部内面
748	201893	15溝	□	須恵器	杯	8~9 C	底部外面
202	169808	42住	□	須恵器	椀	10 C前	底部内面と外面
129	153804	31住	□	須恵器	杯	9 C	底部外面
2562	298827	5区B水田	□	須恵器	杯	8 C~9 C前	底部外面
2828	194827	14溝	□	須恵器	杯	8 C後	底部外面
756	201898	55溝	□	須恵器	杯	9 C後	底部外面
759	2038115	56溝	□	須恵器	椀	10 C前	底部内面
268	177803	51住	□	須恵器	杯		底部内面
731	1998048	15溝	□	須恵器	蓋	8~9 C	蓋つまみ、転用痕
2882	298801	5区1H水田	□ □	灰胎陶器	椀	10 C	底部内外面
961	2028109	15溝	□	須恵器	杯	9 C前	底部外面
750	20180100	54溝	□	須恵器	杯	8 C後	底部外面
2394	187819	12井戸	□	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
744	2028108	54~55溝	□	須恵器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
762	2028114	54溝	□	須恵器	盤	8 C後~9 C前	底部外面
1080	2118314	54溝	□	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
1074	2118310	15溝	□	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
1077	2128320	15溝	□	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
1075	2118309	55溝	□	土師器	杯	8 C後~9 C前	底部外面
774		15溝	□	須恵器	蓋	8~9 C	蓋つまみ
1226	194806	14溝	□	須恵器	蓋	8 C後~9 C前?	蓋つまみ部

近年、則天文字を記した墨書土器は、全国各地で相次いで発見されている。

周知のように則天文字とは、中国・唐代の女帝、則天武后(624~705、在位690~704)が、載初2年(690)に制定した、独特の文字群である。

則天武后(武周)は、唐王朝第3代皇帝高宗(李治)の皇后で、病弱な夫に代わって政治の実権を握り、夫帝の死後は自ら帝位にのぼって、国号を「周」と改め、新王朝を創始しようとした、中国史上、空前絶後の女帝である。その武后が、新王朝を樹立したことを象徴する意味をこめて、独自の新しい文字を創製させ、従来ある文字の代わりにその使用を命じたのが則天文字である。⁽⁴⁾

中国史上では、時の絶対権力者が自らの権力を誇示するための手段の1つとして、特定の文字や書体・独特な文字を強制的に使用させることが往々にしてあった。⁽⁵⁾例えば秦の始皇帝が、中国全土支配の道具として漢字の統一を図り、用途に応じて書体まで指定したことは夙に知られている。また、はるかに時代は下るが、11世紀後半に建国されたタングート族の王国・西夏では、三代目の国王李元昊によって独自の西夏文字が制定され、国内で使用されていたことがわかっている。⁽⁶⁾

則天文字の数は、実際のところ明確ではないが、現在のところ確認されているのは17文字である(図2参照)⁽⁷⁾。天・地・人などの重要な文字の他、日・月・星・国・君・臣・正・禮・年・聖・など、主に皇帝に関する文字や、詔勅・公文書などで使用頻度の高いものが多く、彼女の在位中にたてた禮聖・載初・天授などの年号も、この新字の中から選びとられている。また「盟」という字は、武后の名である「照」の字に代わるものであるが、既存の「明」と「空」の字とを組み合わせて合成したもので、文字の構成の背景には、自らが天空を明るく照らす存在

𠂔	𠂕	𠂖	𠂗	𠂘	𠂙
(天)	(君)	(年)	(區)	(月)	(天)
𠂚	𠂛	𠂜	𠂝	𠂞	𠂟
(地)	(初)	(正)	(臣)	(星)	(地)
𠂠	𠂡	𠂢	𠂣	𠂤	𠂥
(照)	(盟)	(聖)	(國)	(人)	(日)

表2 則天文字一覧

でありたいとする絶対権力者・武後の願いがこめられているのだろう。自分の名前に用いる文字、使用頻度の高い文字や年号に使用する文字に限って新字を作成したのは、最高の権力者となった自分の権威を新しい文字によって示すことを意図したからにほかならない。¹⁰⁰事実、則天文字は従来からの文字に比して画数も多く、装飾的であり、神秘的な妖しささえ漂わせている。また、さきの「璽」(璽)でもみてきたように、一と忠を合わせて「忠」(臣)、一生と書いて「至」(人)、山・水・土を合成して「峯」(地)、一・人・大・吉を合成して「慮」(君)など、殆どどの字が、既製の漢字の偏やつくりを合成して意味を持たせて創製したものである。

この則天文字は、武后治政下においては、その強大な権力をもって強制されたため、社会にもある程度定着したようである。ただ、中国では武後の死後、直ちに使用が禁止され、後代全く用いられなくなったのだが、わが国では後世まで使用された文字もある。

わが国への則天文字の伝来は、正倉院宝物の慶雲4年(707)書写の「王勃詩序」中に、「冨」(天)「冨」(地)「冨」(日)「冨」(月)「冨」(星)「冨」(年)「冨」(人)「冨」(授)「冨」(国)「冨」(載)「慮」(初)などが用いられていることからみて、大宝の遣唐使(704年帰国)によるものと考えられている。¹⁰¹また、養老名例律八巻条に、「冨」(国)の字が使用されており、やはり奈良朝初期に唐律の写本によってこの字が伝えられたとみられる。¹⁰²また、和銅元年(708)の年紀を有する下道例勝国依母夫人骨藏器(1699年岡山県矢掛町出土)の銘文に見える「冨勝」「冨依」の字も同じくこの文字であり、¹⁰³天平勝宝八歳(756)2月6日付相模国朝集使解(早稲田大学蔵)に、「御浦郡司代大田部直「冨成」」の自署がみえる。さらに寛平、延喜の頃(9世紀末～10世紀初頭)の書写と考えられている岩崎本『日本書紀』の推古16年夏四月条に、

小野臣妹子至大唐、唐例号妹子臣日蘇因高。

とあり、また同16年9月条に、

新漢人大冨。

とみえ、ここにも則天文字の使用が指摘できる。¹⁰⁴さらにやや下って、平安時代末期・大治四年(1129)銘の宮城県名取市神宮寺一切経中の大方広仏蔵経巻19(304号)にも「冨」(天)「冨」(月)「慮」(初)の文字が用いられていることが確認されており、¹⁰⁵はるかに下って江戸時代前期の水戸藩主徳川光圀の名にも則天文字「冨」(国)が使用されている。¹⁰⁶さらに金石文における用例をみると、正倉院宝物の佐佐木鏡に、針書で「峯」(地)が記されたものがあり、¹⁰⁷神奈川原厚木市出土の古代の銅印に「璽」(璽)の1文字を鋳出したものがある。¹⁰⁸また、鎌倉時代以降、鐘や扁額、石燈籠、板碑などにおける紀年銘に「年」(年)を用いる例が散見できるという。¹⁰⁹

以上の点をもみても、この中国・唐代の特殊漢字・則天文字が、わが国内においてかなり広範囲に使用されていたことが判明するのだが、そのことを裏付けするのが、近年、各地で出土例が増加しつつある則天文字を記した墨書土器である。前述したように則天文字は、人為的に作字・制定され、短期間のうちに使用が限定された極めて特殊な文字であるから、それが記された墨書土器を検討することによって、古代の在地社会における文字文化の伝播・漢字文化の摂取の過程とその背景を解明する上での手掛りを得ることができるだろう。

則天文字を記す墨書土器については、東野治之氏が出雲国庁跡出土の墨書土器に「峯」(地)の存在をはじめて指摘して以来、¹¹⁰平川南氏の一連の論考によって体系的にまとめられ、¹¹¹以後のこの分野に関する指針となっている。これら先学の驍尾に付して、私もそれらの資料集成を行ない、全般的な見直しを少しばかり述べたことがある。¹¹²

現在のところ管見に触れた限り、本遺跡を含めて、全国19遺跡から53点に及んでいる（表2、図3参照）。則天文字が記された墨書土器の出土状況、文字の数、墨書されている土器の器種や墨書の部位・位置・方向などについてみると、特に他の墨書土器の様相とさしたる限りはないが、現時点における出土例をみる限りでは、出土遺跡の性格としては、特に官衙、寺院関連が多いようである。遺構の状況からすれば一般的な集落遺跡である場合でも、寺院や官衙との関連を色濃く匂わせる遺物が出土しているケースが少なくない。^[21]

すでに平川南氏も指摘されているように、^[22]武后治政下で作製された中国・唐代の經典には則天文字が多く使用されていたから、^[23]わが国内では、唐から傳來された經典を写経する過程で、則天文字も経文とともに寺院や僧侶を媒介として各地に広まったと考えられる。これと関連して最近では東野治之氏が、『新釈華嚴音義私記』『龍龕手鑑』『類聚名義抄』などの仏典に関する音義・字書の類から参照されるというケースも想定されているが、^[24]これも注目すべき見解と言えよう。また、さきにも掲げた養老律の写本の例にもあるように、地方官衙とそこに入り出す階層の人々を経由しての伝播というルートも想定可能である。

則天文字と他の通有の文字とを組み合わせると一つの単語となした例は極めてまれであり、本遺跡出土の「瓜寶」2点と、秋田県弘田遺跡出土の「缶舎」「缶口」、石川県徳久荒屋遺跡出土の「専當綱長江沼臣勝缶」の例にとどまり、余はすべて1文字のみの記載である。この点も古代の墨書土器に一般的にみられる特徴と共通する点であり、他の例と同じく、1文字のみの墨書では、それが何を意味するものであるのか判別つきがたい。つまり、則天文字の墨書土器のみが、特別な用途や機能があって、特殊な状況の下に使用されたというわけではなく、ごく一般的な、通有の墨書土器と同じ範疇の中で促して差し支えないと言えるだろう。

墨書土器の類別からみるならば、「瓜」「至」「缶」などは、則天文字17文字中でも比較的良好に普及していた文字と言えるのではないだろうか。^[25]また、1遺跡から複数種類の則天文字が出土する例は稀で、概ね1つの遺跡からは同一の文字が出土している。これらの点を勘案するならば、地方においては則天文字の全てが一群として伝わっているのではなく、その中の数文字が殆んど単発的といった形で伝播しているにすぎないだろう。

以上の諸点を考え併せるならば、そうした墨書土器の書き手の側には、則天文字という意識が存在していたかどうかは甚だ疑問であり、そのような字形が一種マジカルな威力をもった、特殊な記号の意味を有していたとみるべきではないだろうか。則天文字を制定した則天武后自身が、人一倍文字に対して神秘を感じていたふしがあるから、則天文字は従来字形より画数が多く、装飾的かつ示威的であり、一種の妖しささえ漂わせている。^[26]文字それ自身にある種の呪術的な魔力が付帯されていたとみられる古代社会にあっては、則天文字のような特異な字形こそ吉祥句・呪句としてはより効果的であったと考えられる。

先述したように、わが国最古の則天文字の使用例は、正倉院宝物中の慶雲4年（707）筆者の「王勃詩序」であり、その慶雲4年とは、則天文字制定の僅か17年後、武后の死の2年後にすぎない。中央の支配者階級にあっては、新来の則天文字が先進国・唐の最先端の文化として受けとめられていたであろうことは想像に難くないが、すでにその数十年後、8世紀後半段階には東国の村落にまで出現している。^[27]その在地社会への急速な伝播・浸透から考えるならば、地方村落においては、いかほどの認識があって使用されていたかは定かでないが、少なくともその特殊な呪力性が重んじられて受容されたには相違なく、おそらくは最新の、霊力高い符号として伝播していったと見られるのではないだろうか。

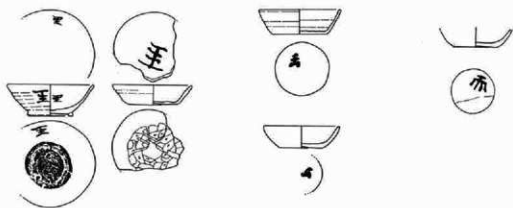
2. 「得万」

表3 則天文字を記した墨書土器

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	則天文字の点数	土器の年代	文 字	文献
1	弘田榑跡	秋田県仙北郡仙北町城廻	城跡	2	9世紀	缶舎・缶口	1
2	道伝	山形県東置賜郡川西町道伝	官衙(郡家)	2	11世紀	甌・缶	2
3	御山千軒	福島県福島市御山	集落	2	8~9世紀	甌	3
4	下野国府	栃木県栃木市田村町	官衙(国府)	1	8世紀	缶	4
5	二之宮宮下東	群馬県前橋市二之宮町	不明(祭祀)	25	8~9世紀	甌	本書
6	二之宮千足	群馬県前橋市二之宮町	不明	1	9世紀	缶	5
7	堀下八幡	群馬県佐波郡赤堀町他	集落	2	9世紀	缶	6
8	上矢島	群馬県佐波郡境町天島	集落	2	9世紀	甌	7
9	花前1	千葉県柏市花前	集落	1	9世紀	甌	8
10	作畑	千葉県東金市油井	集落	2	8~9世紀	缶	9
11	下曾我	神奈川県小田原市永塚	官衙(郡家?)	4	8世紀	缶	10
12	曾根	新潟県北蒲原郡豊浦町曾根	集落	2	9世紀	〇	11
13	下神	長野県松本市神林	荘家・集落	1	10世紀	缶	12
14	豆生田第3	山梨県巨摩郡大泉村	集落	1	9世紀	缶	13
15	榑坪	山梨県巨摩郡長坂町	集落	1	10世紀	缶	14
16	宮之前第2	山梨県重崎町	集落	1	10世紀	甌	15
17	三小牛ハバ	石川県金沢市三小牛町	寺院	1	8世紀	缶	16
18	徳久尻屋	石川県能美郡尻口町	荘家	1	8世紀	専喜郷長江府臣勝 缶	17
19	出雲国府	島根県松江市宮の後地	官衙(国府)	1	8世紀	甌	18

文献

1. 秋田県教育委員会 『弘田榑跡Ⅰ—政庁跡—』 1985
2. 川西町教育委員会 『道伝遺跡発掘調査報告書』 1984
3. 福島県教育委員会 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』 VI 1983
4. 栃木県文化振興事業団 『下野国府跡』 VII 1987
5. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『二之宮千足遺跡』 1992
6. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『堀下八幡遺跡』 1990
7. 境町教育委員会 『上矢島遺跡発掘調査概報』 1979
8. 千葉県文化財センター 『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書』 II 1984
9. 作畑遺跡調査会 『作畑遺跡発掘調査報告書』 1986
10. 国学院大学考古学資料室 『国学院大学考古学資料室要覧—下曾我遺跡出土遺物—』 1973
11. 豊浦町教育委員会 『曾根遺跡』 1982
12. 長野県埋蔵文化財センター 『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書6—松本市内その3—下神遺跡』 1990
13. 大泉村教育委員会 『豆生田第3遺跡』 1986
14. 山梨県教育委員会 『榑坪遺跡』 1986
15. 重崎町教育委員会 『宮ノ前第2遺跡・北堂地遺跡』 1991
16. 金沢市教育委員会 『三小牛ハバ遺跡調査概報』 1988
17. 石川県立埋蔵文化財センター 『尻口西部遺跡群』 1988
18. 松江市教育委員会 『出雲国府跡発掘調査概報』 1970



天
天



図2 各地出土の則天文字を記した墨書土器

「得万」の語を記す墨書土器が4点ほどみられる。また、欠損していて「得万」という熟語になるかどうかは判然としませんが、「得」のみ確認できるものが1点存在する。

これらの資料は、一見するとそのように判読できるように思われないが、この「B」のような非常に特徴的な字形については、すでに平川南氏が全国各地から集成されているように、「得」の草書体である(図3)⁹⁹。平川氏が掲げられているように、中国の居延漢簡等にみられる「得」の書体ともよく類似しており、また各地出土の墨書土器にも全く同一の書体のものがみられ、変形し記号化した字形として使用されている。また「得万」という熟語も各地でみられ、吉祥句・呪句的な単語としてかなり普遍的であったとみられよう。

なお、楷書体ではなく、却ってこのような草書体の字形が各地においてみられる点については、平川氏の指摘にもあるように、「得」の文字が他の文字とともに撰取され、楷書、行書、草書の各書体等の訓練を経て記されたのではなく、草書体がやや変形した字形のみで伝播してきたと言えるだろう。

3. 「正合」

「正合」と記するものが9点存在している。これも字形のみを見る限りにおいては、まず「正合」とは釈読できず、「正八」「正人」などと判読してしまうところであるが、平川南氏の検討の結果、「正」と「合」の字を組み合わせた字形であることが確認されている。¹⁰⁰この「正合」の字形「𠄎」も各地で出土しており(図4)¹⁰¹、単語としてもかなり普及していた語と言えるだろう。各地における出土例には、「正合」の他に「立合」「力合」などの語の用例もあり、また「正」については「正万」などの用例もあるので、やはり吉祥句・呪句的な表現の1つと考えられよう。

おわりに

さきにも述べたように、本遺跡出土の墨書土器は、点数こそ多いものの、殆んどものが谷部包含層から出土したものであり、遺構に伴うものが少なく、墨書土器それ自体から村落内の単位集団などを跡づけることはできなかった。そこで、出土資料の中から極めて特徴的な資料群をとりあげて、若干のコメントを付したにすぎないわけである。しかしながら、則天文字「𠄎」を記するものが非常に多いことや、特殊な組み合わせ字形のものが存在するなど、最近の墨書土器研究の動向の中で、新たな分析視点として注目されている字形論に、極めて良好な資料を提示できたと言えるだろう。

なお、最後に、本遺跡出土の墨書土器の全般的趨勢について一言まとめておこう。

25点の多きを数える則天文字「𠄎」の墨書土器は、ほぼ8世紀後半から9世紀前半に限られ、それ以降は全くみられなくなる。また、その時期には「𠄎」以外の文字を記すものは大変少なく、一方、「𠄎」以外の墨書が出現してくるのは9世紀以降である。すなわち本遺跡出土資料中で最多の「𠄎」は、極めて限定された期間の中で集中して記されているわけである。しかも中には土器生産段階にまで発注し刻書させたものまで存在している。少なくとも本遺跡地におけるこの時期の人々にとっては、どうしてもこの文字でなくてはならなかったような大変高い意義を有する文字であったと言えるだろう。そしてこの時期を過ぎると、全く記されなくなってしまう。この現象が、「𠄎」を記す集団の消長を物語るのか、それとも「𠄎」の字が何らかの祭祀・儀礼行為に付帯するもので、その祭祀の変更や断絶に起因するものであるのかは、現時点では明らかにしがたいが、今後も墨書行為の意味を考えていく上で注意すべきであろう。

以上、甚だ雑駁な行論に終始したが、大方の御批判、御叱正を御願ひして執筆することにした。

註

- (1) 「瓦」の裏書きがあるにもかかわらず、なおかつ別な部位に同じ文字を墨書してあるものが1点ある。
- (2) 土器生産段階においてある種の墨書がなされ、それがそのまま消費段階にまでもたらされる可能性は全く無いとはいえないものの、まだ想定しにくいだろう。
- (3) 平川南・天野野・黒田正典「古代村落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989年)。
- (4) 阿辻哲次『漢字の歴史』大修館書店 1989、171～176頁。
- (5) 阿辻哲次氏註(4) 前掲書。
- (6) 西田龍雄『西夏文字の謎』大修館書店 1989。
- (7) 常盤大定『武周新字の一研究』(『東方学报』6 1936)。
- (8) 阿辻哲次氏註(4) 前掲書173～174頁、外山軍治『則天武后』中公新書 116～120頁。
- (9) 阿辻哲次氏註(4) 前掲書175頁。
- (10) 意中進「上代則天文字考」(『古典学』編者部 1982)、東野治之「発掘された則天文字」(『出版ダイジェスト』1187 1986)。
- (11) 意中進氏註(9) 前掲論文、松中由美子「日本における則天文字の受容」(森浩一編『考古学と技術』同志社大学 1988)。
- (12) 松中由美子氏註(11) 前掲論文。
- (13) 意中進氏註(9) 前掲論文。
- (14) 東北歴史資料館「名取新宮寺一切経調査報告」1980。
- (15) 天照は最初から「元照」と称したのではなく、もとの名は「光照」であり、後年自ら「国」を則天文字「國」に代えたのだと言われている(佐々木利三「日本金石文に見る則天文字」(『東方学論集』龍谷大学 1982)。
- (16) 松嶋順正『正倉院宝物銘文集成』吉川弘文館 1978 171頁 38号銘文。なお意中進氏註(9) 前掲論文に指摘されている。本資料に紀年施はないが、天平崇寧4年(752)の東大寺大仏開眼会前後のものともて関連しないようである。
- (17) 本資料の印刷は「聖」となっており、則天文字「聖」の正確な字形とは若干異なる、上のつくりの「永」と「主」の位置が逆になっているが、単純な字形の錯誤によるものと解してよく、則天文字の「聖」とみなして間違いない(相澤勝「厚木市飯山出土の銅印」(伊勢京市教育委員会『文化財ノート』1992)。
- (18) 佐々木利三氏註(9) 前掲論文、京都山科岩屋神社願額「寛元元年」(1243)、京都華高寺願額「正応元年」(1288)、東京東京山市徳蔵寺板碑「元弘三号」(1333)など。
- (19) 東野治之氏註(9) 前掲論文。
- (20) 平川南「則天文字を追う」(『歴史博』34 1989)、同「下神遺跡出土の墨書土器について」(長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財調査報告』6—松本市下神遺跡—1990)、同「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』35 1991)。
- (21) 松嶋「則天文字を記した墨書土器について」(『信濃』502 1991)、同「則天文字の導入」(『月刊文化財』362 1993)。
- (22) 千葉県東金市の作畑遺跡は、検出遺物の状況からみれば東日本各地にみられる典型的な横溝遺跡の様相を呈しているが、則天文字「缶」と同遺構から「寺」と記された墨書土器が出土している他、別の遺構からは仏器とみられる反輪双耳尊が出土していて、遺跡内に所謂「村落内寺院」が存在していた可能性があり、墨書土器の町上矢島遺跡からも「寺」の墨書土器が出土している点が注目できる。また新潟県富浦町の曾根遺跡も、5点の木簡をはじめ付札木製品、多量の木製祭祀具、340点にのぼる墨書土器が出土しているところからみれば単なる一般村落とは考えにくいだろう。
- (23) 平川南氏註(9) 前掲論文。
- (24) 例えば飯地出土の『大方等無想大菩薩經』などの例がある(阿辻哲次氏註〔1〕前掲書)。
- (25) 東野治之「墨書・刻書土器の意義」(群馬県史編纂室『群馬県出土の墨書・刻書土器集成』? 1992)。
- (26) さきにもみてきたように、文書や金石文などでは「國」「平」などが比較的多くみられるのと対照的である。この相違は何を意味しているのか確定することはできないが、則天文字伝播経路の相違に因るとする仮説も成立しつかもしれない。
なお、長野県松本市の下神遺跡からは「南」と記した墨書土器が出土している。字形からみれば「南」(じしこうして)とみてまちがいが、則天文字「南」の崩れた字形の可能性が高いという(平川南氏註〔26〕前掲論文)。
- (27) 外山軍治氏註(8) 前掲書118～119頁。
- (28) 遺傳によってもたらされた則天文字が、中央を経由して地方へ伝播してくるというルートが、常識的に理解の前提となってしまふところであろうが、これは全く別個の伝播経路も想定しておく必要もあろう。例えば、全くの隣隣の域を出ないが、渡来人によってもたらされるなど、中央を経由しないダイレクトな伝播もあながち否定できないのではないだろうか。東国などの在地土器への非常な早い伝来からみれば、その蓋然性も低くないように思われる。
- (29) 平川南氏註(9) 前掲論文。
- (30) 平川南氏註(9) 前掲論文。なお、これに限らず、このような二文字を組み合わせて恰も一文字のように記す例は、各地の墨書土器に非常に多くみられ、さらには文書や木簡でも少なからず見られる(例えば「戸主」を「戸」・「嗣臣」を「嗣」と書くなど)。こうした組み合わせ字形は、古代社会においては、かなり普遍的に用いられていたと言えるだろう。
- (31) なお、この字形「天」については、東野治之氏が、天の古体「天」(天)との類似を指摘しておられるが(同氏註〔25〕前掲論文)、本資料では、字の上部の造りが明らかに「正」となっており、「正」ではないので、平川氏の見解に従って「正合」と釈した。

写真図版





2区中世遺構全景（西より）



2区中世遺構全景（東より）

PL-2



4区全景（南より）



4区全景（南東より）



2区1・2号溝 (東より)



2区1・2号溝断面B-B'部分 (南より)



2区1・2号溝断面C-C'部分 (南より)



2区1号溝南段差部分 (東より)



2区1号溝南段差部分 (北より)



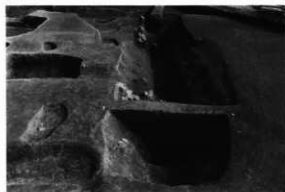
2区8・9号溝 (南より)



2区8・9号溝断面B-B'部分 (南より)



2区8・9号溝在地製すり鉢出土状態 (南より)



2区79号溝 (西より)



2区79号溝西部分近接 (西より)



2区89・90号溝 (南東より)

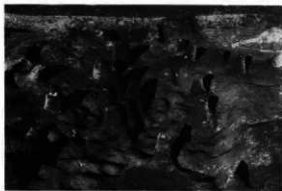


2区89・90号溝近接 (中央の黒い丸は新しい井戸)

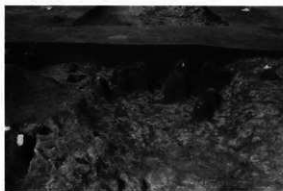


2区2～5号溝 (南より)

PL-6



2区5号溝遺物出土状態(南より)



2区5号溝断面C-C'部分(南より)



2区東側台地縁辺2面目(南西より)



2区東側台地縁辺2面目近接(南より)



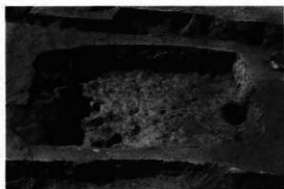
2区東側台地縁辺67~71号溝(南西より)



2区70号溝 (南西より)



2区71号溝 (南西より)



2区16号土坑 (東より)



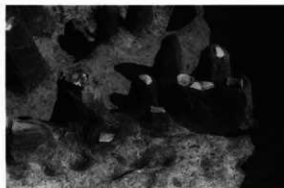
2区16号土坑柱穴



2区16号土坑柱穴



2区74号土坑 (南東より)



2区74号土坑遺物出土状態

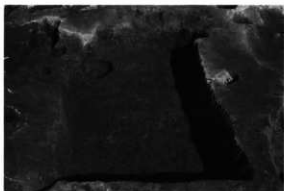


2区81号土坑 (南東より)

PL-8



2区145号土坑 (南東より)



2区200号土坑 (南西より)



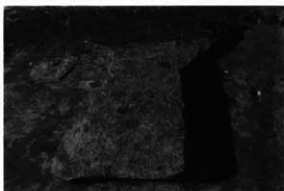
2区154号土坑 (南西より)



2区153号土坑 (南西より)



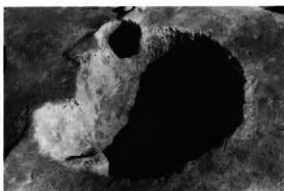
2区211・212号土坑 (南西より)



2区222号土坑 (南西より)



2区1号土坑 (東より)



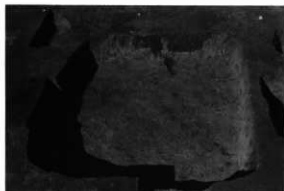
2区30号土坑 (南より)



2区37・135土坑（北西より）



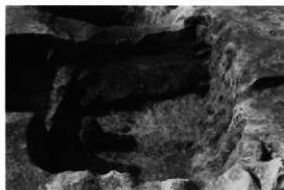
2区42・50・51・52・53号土坑（南東より）



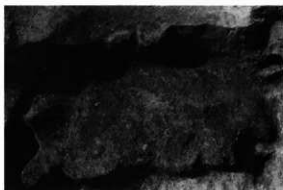
2区62・63・64号土坑（南東より）



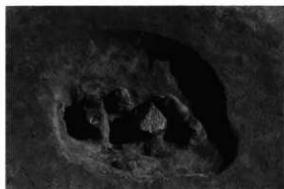
2区180号土坑（南より）



2区123号土坑（南東より）



2区123号土坑炭化米出土状態



2区215号土坑（西より）



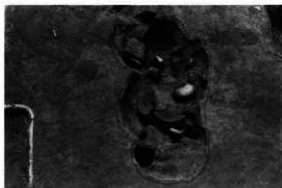
2区215号土坑遺物出土状態



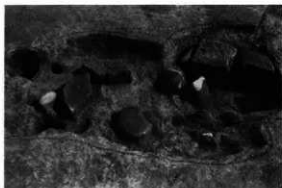
2区223号土坑(南より)



2区345号土坑(南西より)



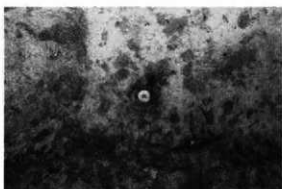
2区288・289・290号土坑(南西より)



2区288・289・290号土坑遺物出土状態



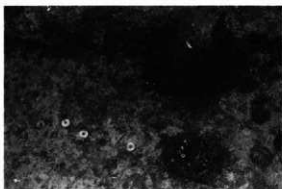
2区1号土坑墓(19号土坑、南西より)



2区1号土坑墓遺物出土状態



2区2号土坑墓(27号土坑、南西より)



2区2号土坑墓遺物出土状態



2区3号土坑墓 (72号土坑、南より)



2区3号土坑墓遺物出土状態



2区4号土坑墓 (178号土坑、南より)



2区4号土坑墓遺物出土状態



2区5号土坑墓 (217号土坑、南西より)



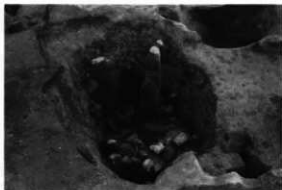
2区5号土坑墓遺物出土状態



4区1号井戸



2区2号井戸



2区4号井戸



2区4号井戸遺物出土状態



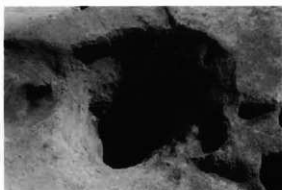
2区4号井戸遺物出土状態



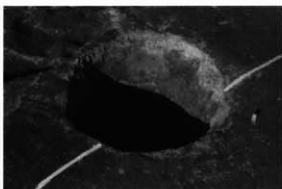
2区4号井戸遺物出土状態



2区5号井戸



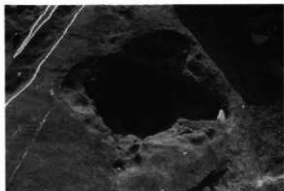
2区6号井戸



2区7号井戸



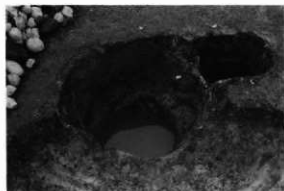
2区8号井戸



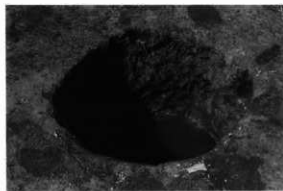
2区13号井戸



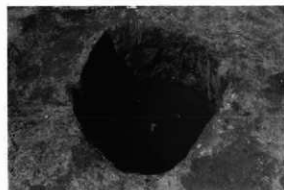
2区20号井戸



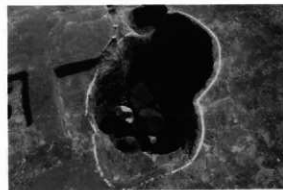
2区21号井戸



2区22号井戸



2区23号井戸



2区25号井戸遺物出土状態



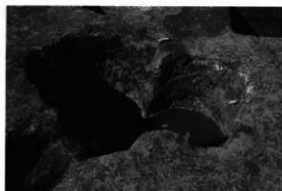
2区25号井戸遺物出土状態近接



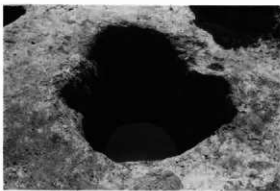
2区25・45号井戸



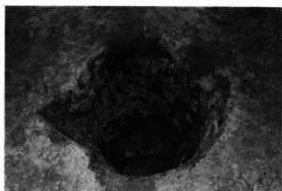
2区26号井戸



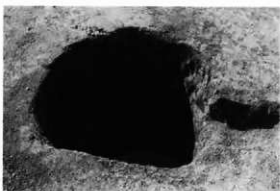
2区27・28号井戸



2区29号井戸



2区30号井戸



2区35号井戸



2区36号井戸



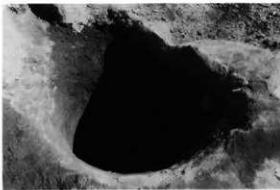
2区37号井戸



2区38号井戸



2区39号井戸



2区42号井戸



3区中世畠 (南より)



3区中世第1水田 (南より)



3区中世第2水田 (南より)



3区As-B上包含層 (斑鉄層下、南より)



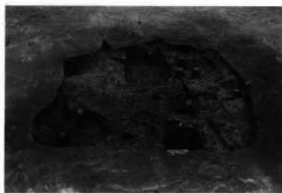
3区As-B上包含層 (斑鉄層下、南より)



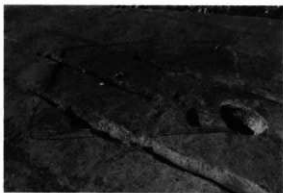
3区As-B上包含層 (斑鉄層下、南西より)



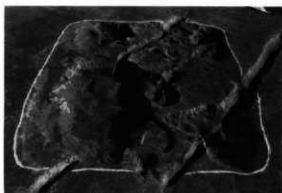
4区1号住居堀形



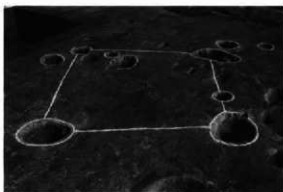
4区2号住居堀形



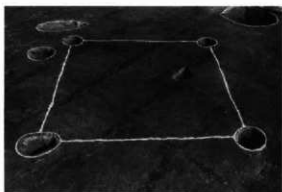
4区3号住居



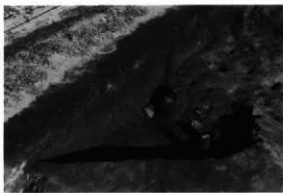
4区3号住居堀形



4区4号住居柱穴



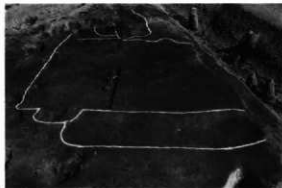
4区5号住居柱穴



2区6号住居



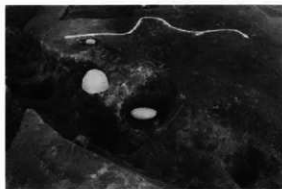
2区7号住居



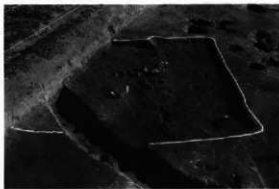
2区8・9号住居



2区8・9号住居堀形



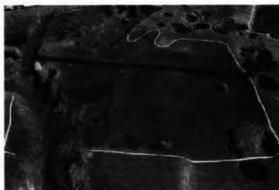
2区10号住居



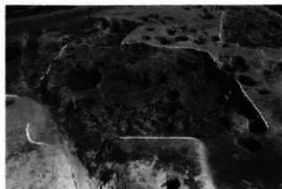
2区11号住居



2区11号住居遺物出土状態



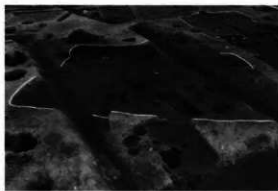
2区12号住居



2区12号住居堀形



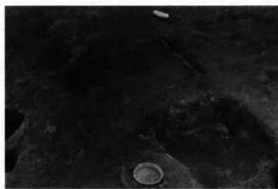
2区13号住居堀形



2区14号住居



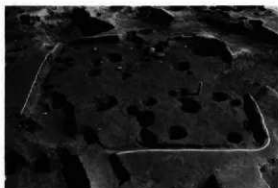
2区14号住居遺物出土狀態



2区14号住居遺物出土狀態



2区14号住居堀形



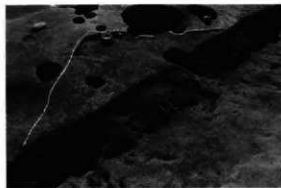
2区15号住居



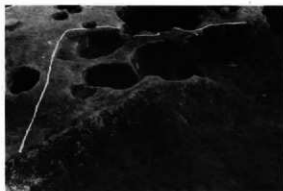
2区15号住居遺物出土狀態



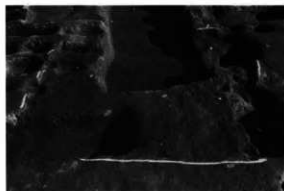
2区15号住居堀形



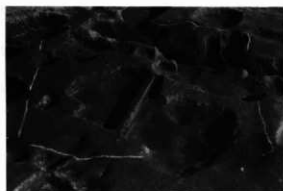
2区16号住居



2区16号住居雏形



2区17号住居



2区18号住居



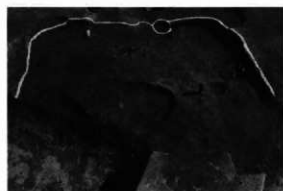
2区18号住居床面残存部分



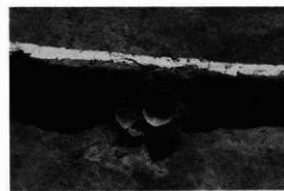
2区18号住居貯藏穴



2区19号住居



2区20号住居



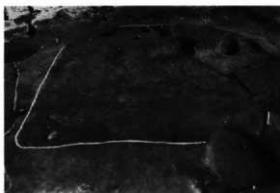
2区20号住居遺物出土状態



2区21号住居



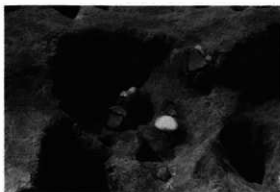
2区21号住居床面硬化部分



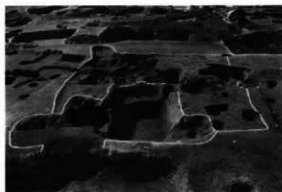
2区22号住居



2区23号住居



2区23号住居遺物出土状態



2区23号住居縄形



2区24号住居



2区25・32号住居



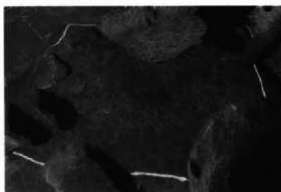
2区25・32号住居掘形



2区26号住居



2区26号住居掘形



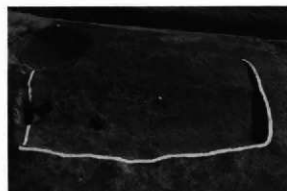
2区27号住居



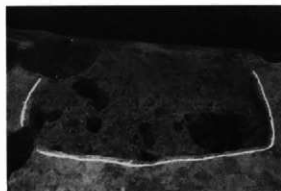
2区28号住居



2区28号住居遺物出土状態



2区29号住居



2区29号住居掘形



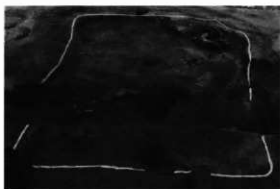
2区30号住居



2区30号住居カマド煙道



2区30号住居堀形



2区31号住居



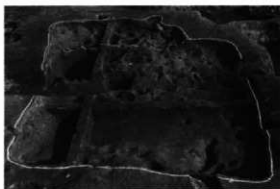
2区31号住居カマド付近遺物出土状態



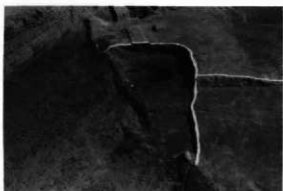
2区49号住居



2区49号住居遺物出土状態



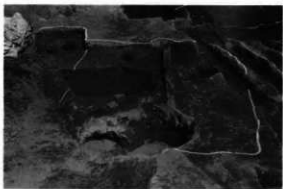
2区31・49号住居堀形



2区33号住居



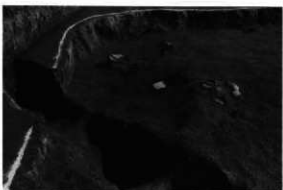
2区33・34号住居



2区33・34号住居堀形



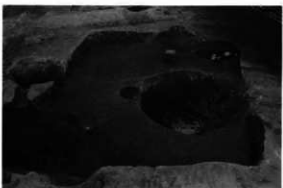
2区35号住居



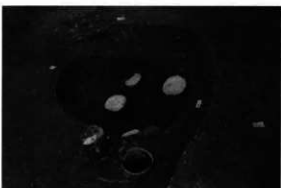
2区35号住居遺物出土状態



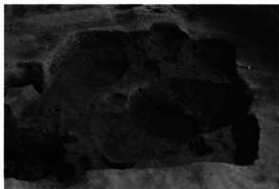
2区35号住居貯蔵穴?と周堤状施設



2区37号住居



2区37号住居貯蔵穴付近遺物出土状態



2区37号住居堀形



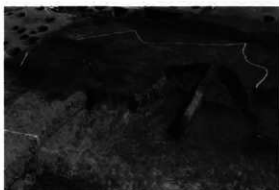
2区38号住居



2区39号住居



2区39号住居カマド付近遺物出土状態



2区40号住居



2区41号住居



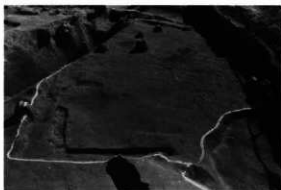
2区41号住居遺物出土状態



2区42号住居



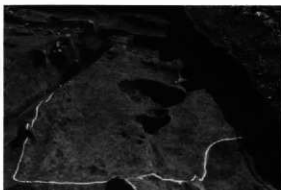
2区43号住居（カマドのみ遺存）



2区44号住居



2区44号住居遺物出土状態



2区44号住居縄形



2区45号住居



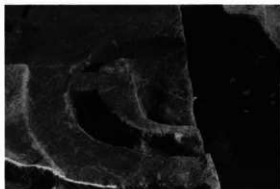
2区46号住居



2区53号住居



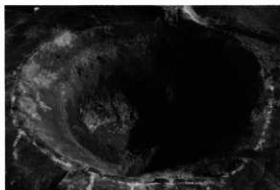
2区53号住居遺物出土状態



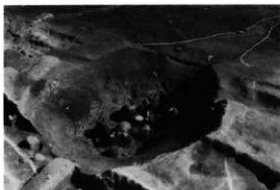
2区6号墓 (181号土坑)



2区6号墓遺物出土状態



2区9号井戸



2区12号井戸



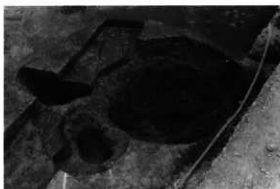
2区12号井戸底部 (石敷)



2区12号井戸流出部



12号井戸の流出溝 (81号溝)



2区40号井戸



3区As-B下水田全景（南西より）



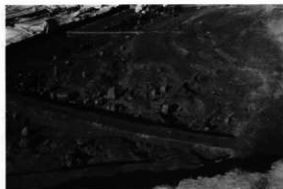
3区As-B下水田全景（西より）



3区15層全景（東より）



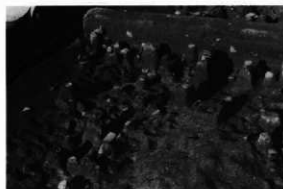
3区15層全景（南西より）



3区54~62号溝 (南西より)



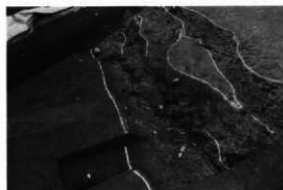
3区54~62号溝 (南西より)



3区54~56号溝近接 (南西より)



3区54~56号溝 (南西より)



3区54号溝北部分近接 (南西より)



3区54号溝北部分近接 (南西より)



3区54・55号溝近接 (南西より)



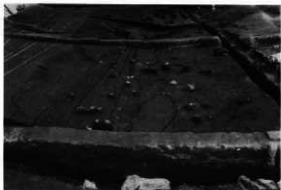
3区54・55号溝近接 (南西より)



3区57~59号溝 (南より)



3区60~62号溝 (南より)



3区15層遺物出土状態



3区15層遺物出土状態



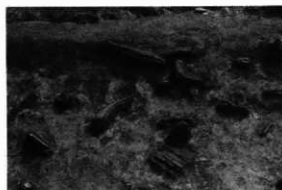
3区16層南半遺物出土状態 (南西より)



3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層F・G地点遺物出土状態



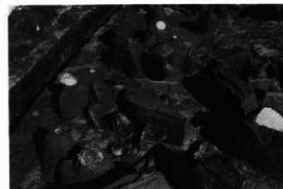
3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層鞍轡出土状態



3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層F・G地点遺物出土状態



3区16層鍬柄出土狀態



3区16層F・G地点遺物出土狀態



3区16層F・G地点遺物出土狀態



3区16層着柄鋤出土狀態



3区16層A・B地点遺物出土狀態



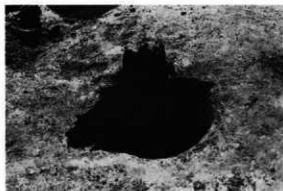
3区16層A・B地点遺物出土狀態



3区16層A・B地点遺物出土狀態



3区16層B地点杭出土狀態



3区16層B地点杭出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点鏃柄出土状態



3区16層C地点下駄、櫛状製品出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点遺物出土状態



3区16層C地点下駄出土状態



3区16層D地点横櫓出土状態



3区16層D地点遺物出土状態



3区16層D地点竪杵出土状態



3区16層D地点遺物出土状態



3区16層E地点遺物出土状態



3区16層G地点構築部材出土状態



3区16層J地点杭群出土状態



3区北半Hr-FA下遺物出土状態



3区F地点Hr-FA下遺物出土状態



3区Hr-FA下遺物出土状態



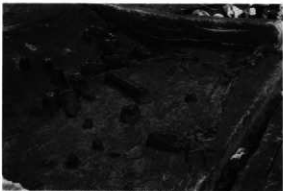
3区Hr-FA下F地点遺物出土状態



3区Hr-FA下F地点遺物出土状態



3区Hr-FA下C・D地点遺物出土状態



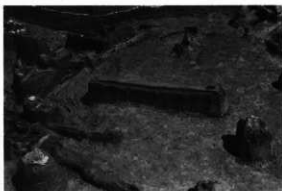
3区Hr-FA下C地点遺物出土状態



3区Hr-FA下D地点遺物出土状態



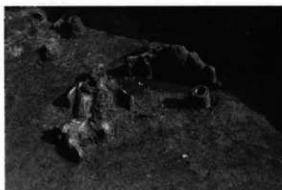
3区Hr-FA下C地点木製榑出土状態



3区Hr-FA下C地点遺物出土状態



3区Hr-FA下D地点横榑出土状態



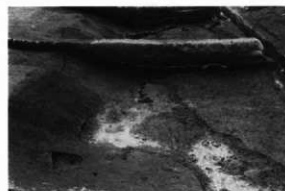
3区Hr-FA下E地点遺物出土状態



3区As-C上面C地点 (南西より)



3区As-C上面C地点 (東より)



3区As-C上面D地点 (南西より)



3区As-C上面D地点 (東より)



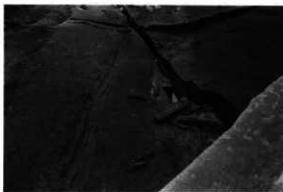
3区北半As-C下 (南西より)



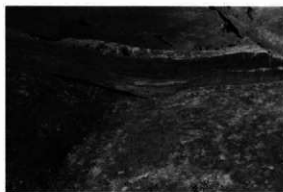
3区As-C下A・F地点 (南西より)



3区As-C下A・F地点近接 (南西より)



3区As-C下A・F地点近接 (北東より)



3区As-C下溝C地点近接 (南より)



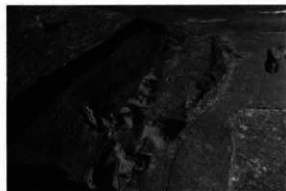
3区北半26層下(南西より)



3区26層下F地点遺物出土状態



3区26層下F地点遺物出土状態近接



3区26層下B地点遺物出土状態



3区26層下B地点遺物出土状態



5区第1 氾濫層下水田 (東より)



5区As-B下水田 (東より)



5区As-B下水田 (西より)



5区As-B下水田西側近接 (南より)



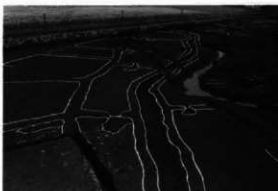
5区18~20号溝 (南西より)



5区21号溝 (南西より)



5区22号溝 (南西より)



5区23号溝 (南西より)



5区東端As-B下水田耕作土下溝群 (南西より)



5区東端As-B下水田耕作土下溝群（南西より）



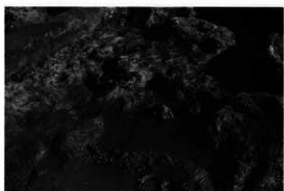
5区44号溝



5区44号溝灰胎陶器出土状態



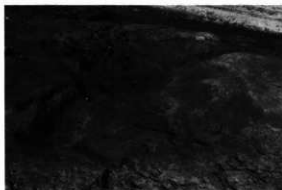
5区47号溝（南東より）



5区47・49号溝合流部（北西より）



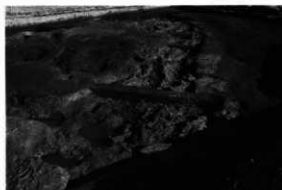
5区47・49号溝合流部 (北西より)



5区48号溝 (南東より)



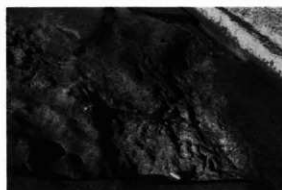
5区48号溝近接



5区49号溝 (南西より)



5区49号溝 (南西より)



5区50号溝 (東より)



5区51号溝 (南西より)



5区52号溝 (南より)



5区53号溝 (南西より)



5区1号河道 (南西より)



5区1号河道杭列 (南西より)



5区1号河道杭列近接 (南より)



5区第3祀蓋層下水田 (南より)



5区第3祀蓋層下水田足跡検出状態



5区第4祀蓋層下水田 (東より)



5区第4区氾濫層下水田（西より）



5区第4区氾濫層下水田（西より）



5区第4区氾濫層下水田足跡検出状態



5区第4区氾濫層下水田足跡近接



5区第5区氾濫層下水田足跡検出状態



5区第6区氾濫層下水田（東より）



5区第6区氾濫層下水田（西より）



5区第7区氾濫層下水田（東より）



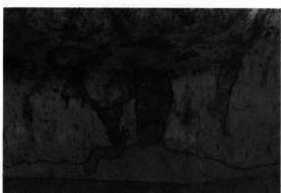
4区縄文土器出土状態（南より）



4区縄文土器出土状態（南東より）



4区縄文1号土坑（南西より）



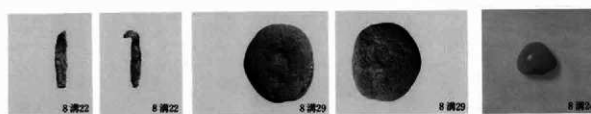
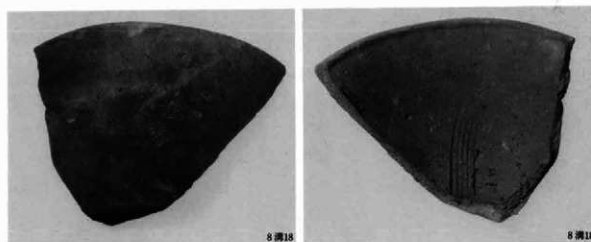
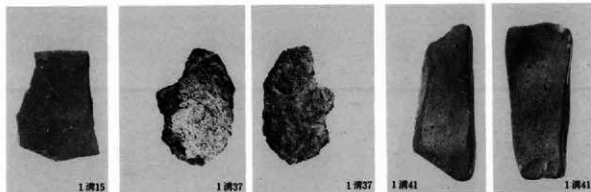
4区縄文1号土坑底部断面

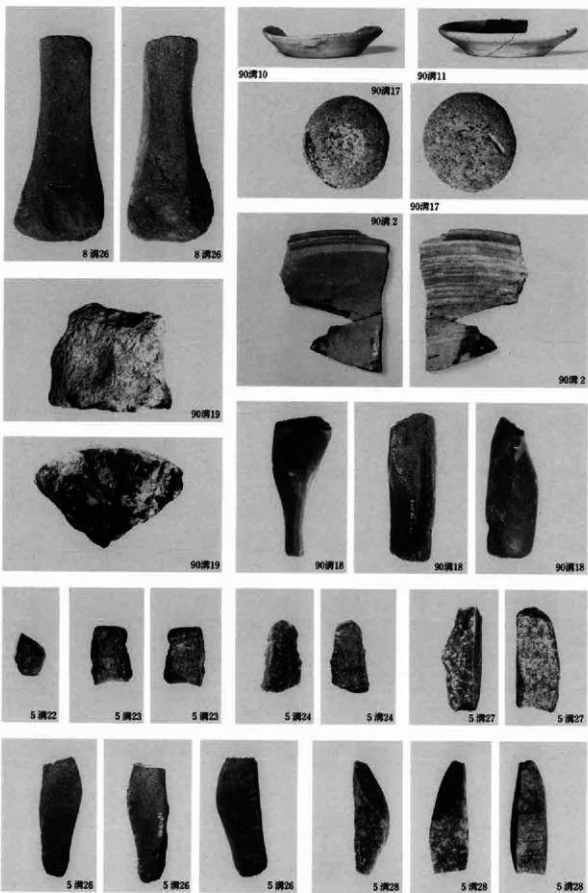


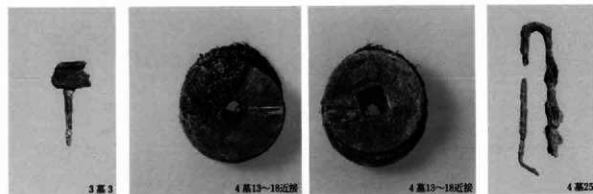
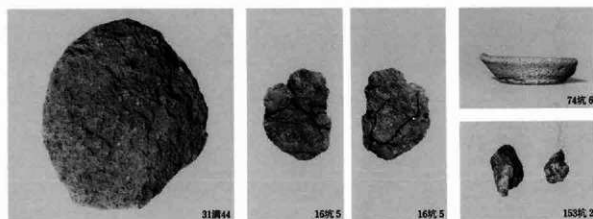
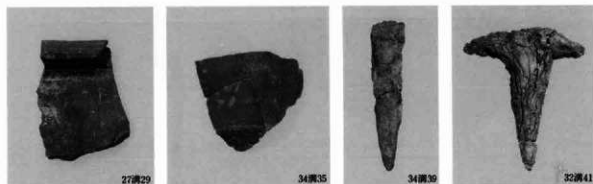
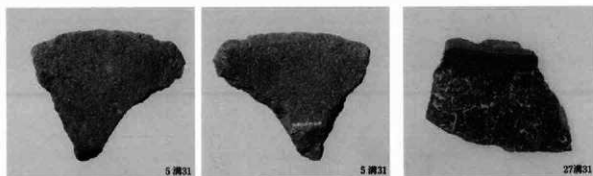
4区縄文1号土坑底部断面

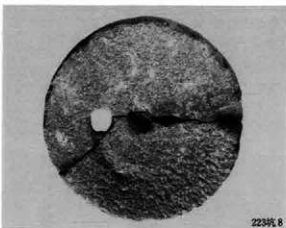
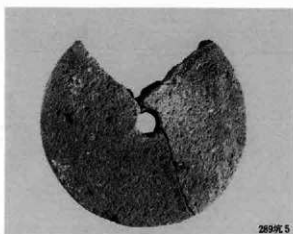
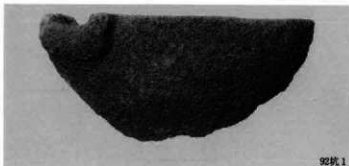


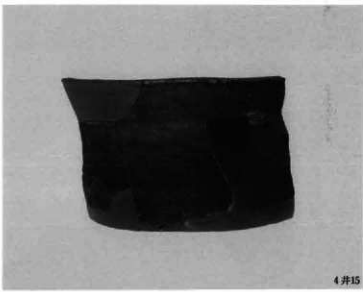
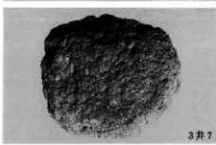
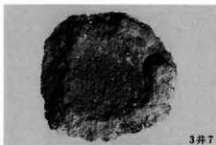
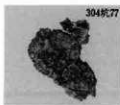
4区縄文2号土坑（南より）

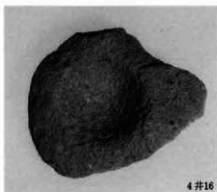














16井 1



21井 7



21井 8



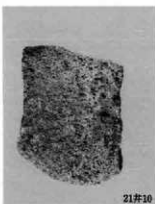
16井 1



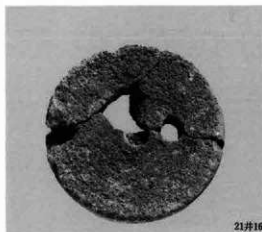
21井 9



21井 10



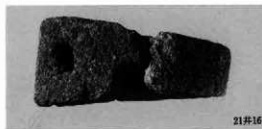
21井 10



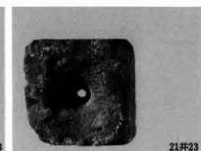
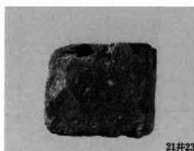
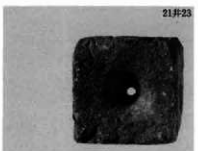
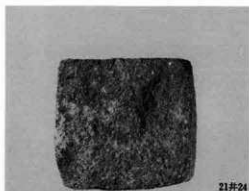
21井 16

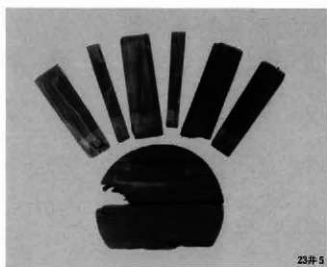
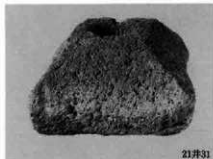
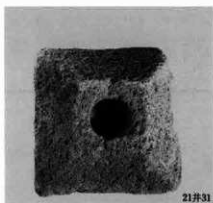
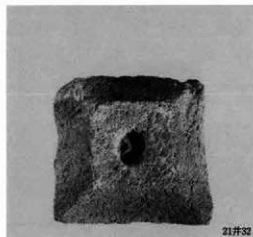
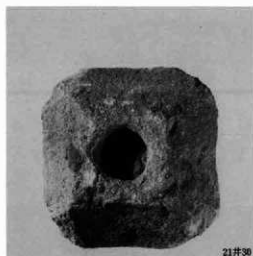


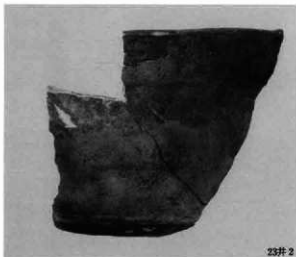
21井 22



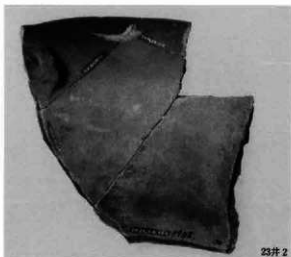
21井 16







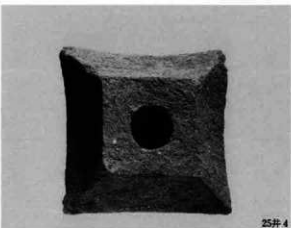
23井 2



23井 2



25井 3



25井 4



25井 3



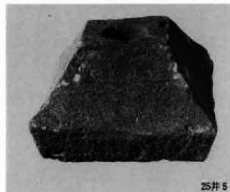
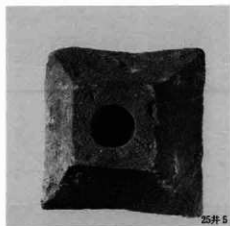
25井 4

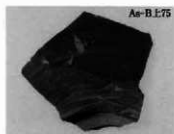
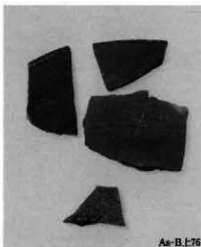
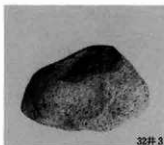


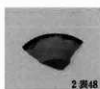
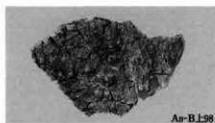
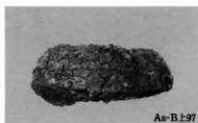
25井 6



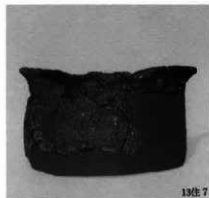
25井 7







PL-60





15住 1



15住 4



15住 6



18住 1



16住 1



18住 2



15住 3



20住 1



20住 3



22住 2



23住 3



23住 1



23住 2



25住 19



25住 3

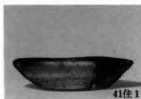


25住 1



25住 18







43住 1



44住 6



44住 10



44住 11



44住 11



52住 15



53住 1



50住 9



50住 10



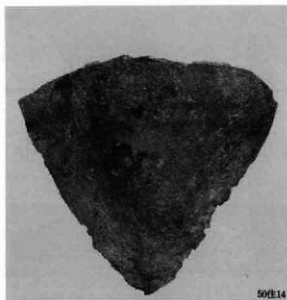
46住 6



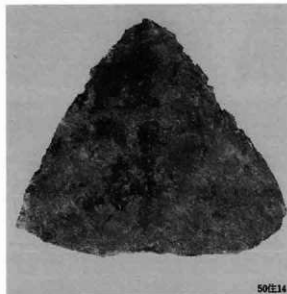
50住 140°底側割



50住 140°底側割断面近景



50住14



50住14



50住14



6基2



6基3



6基4



53住2



53住6



53住7



12井5



15層7



12井36近縁

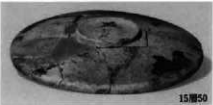


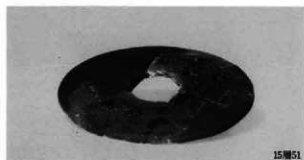
12井36近縁



12井36

12井36





15層51



15層87



15層85



15層87



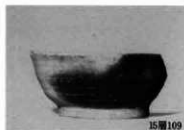
15層105



15層112



15層113



15層109



15層117



15層113



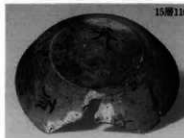
15層116



15層178



15層180



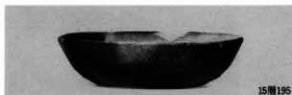
15層116



15層185



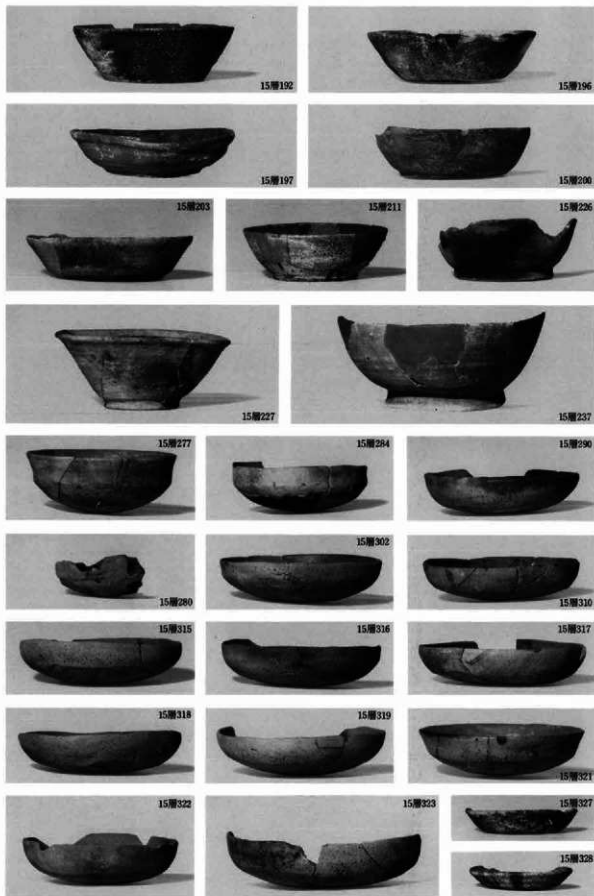
15層190

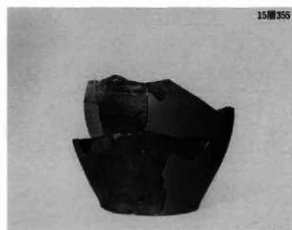


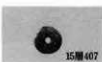
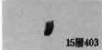
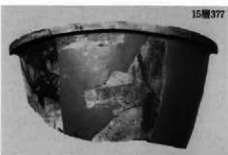
15層195

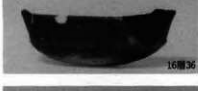
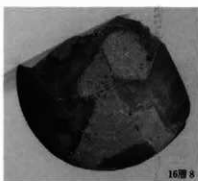
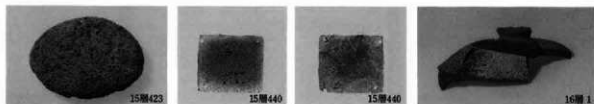
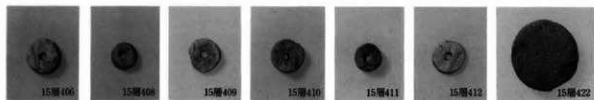


15層198









PL-72





16層145



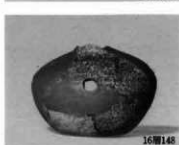
16層146



16層154



16層145



16層146



16層170



16層157



16層160



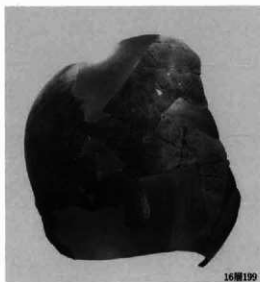
16層172

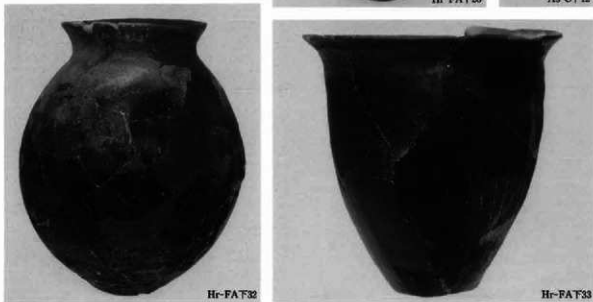
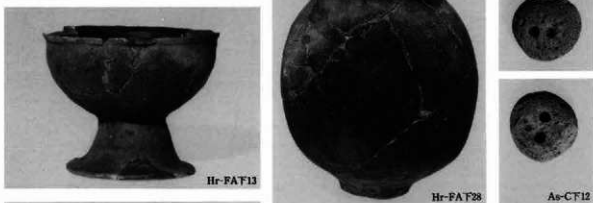
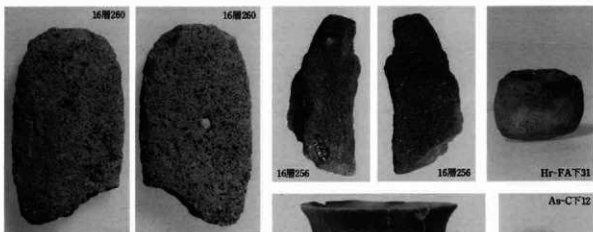
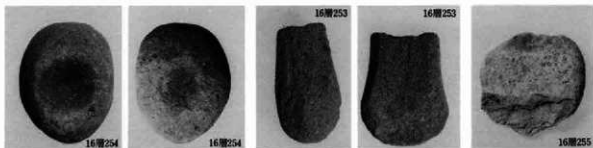


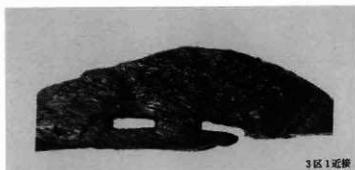
16層171



16層174







3区1近接



3区3



3区4



3区5



3区5



3区6



3区6



3区7近接



3区9



3区9



3区10



3区10



3区11



3区11



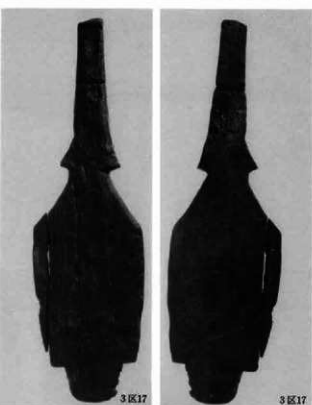
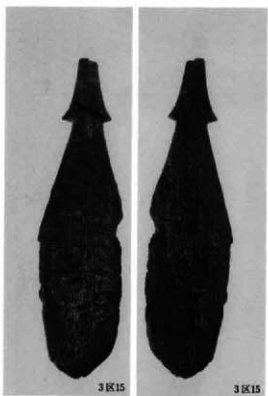
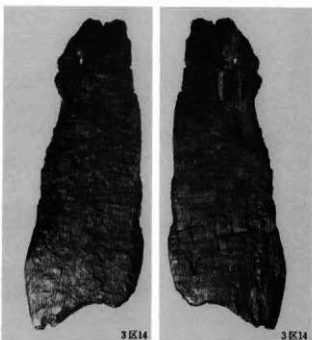
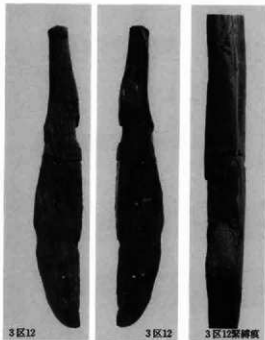
3区13

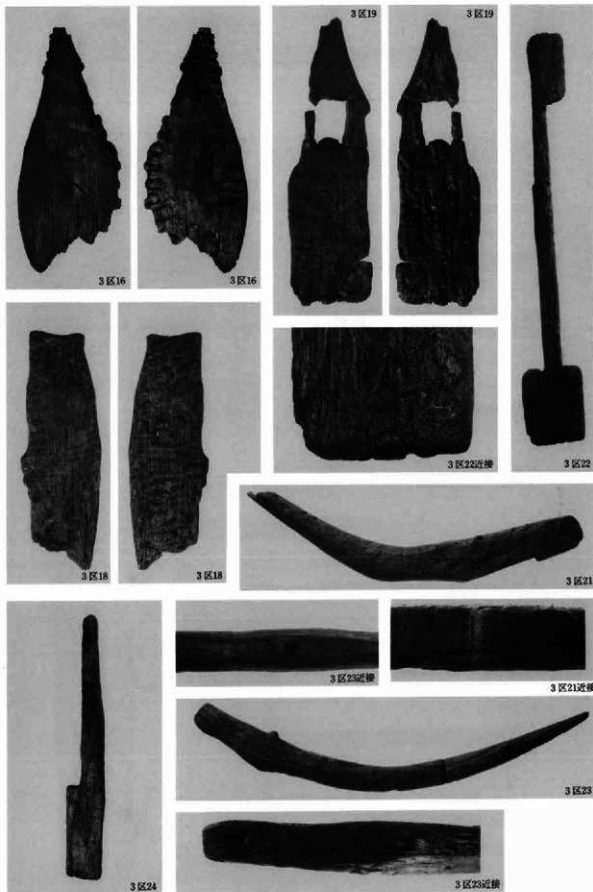


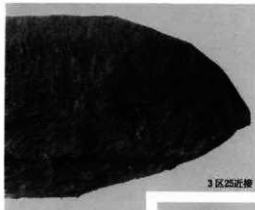
3区13

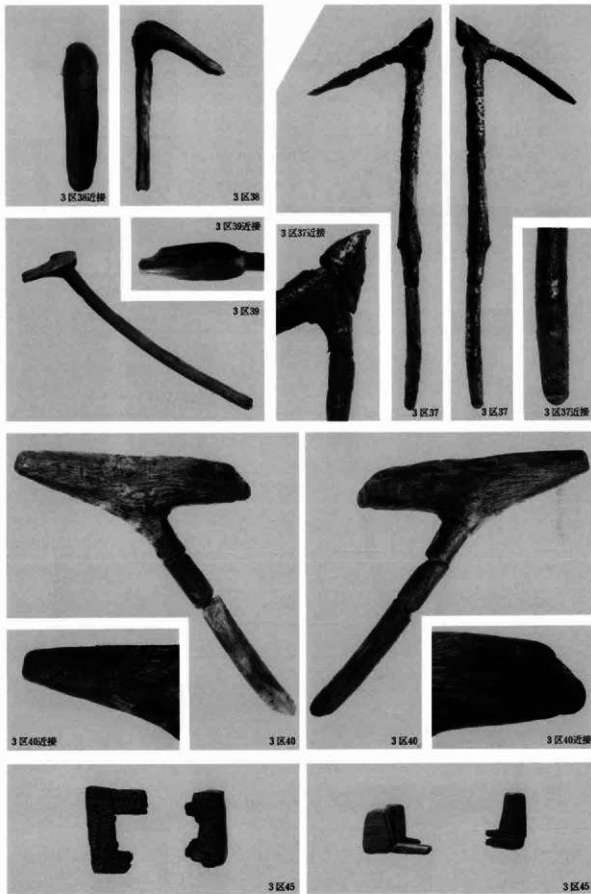


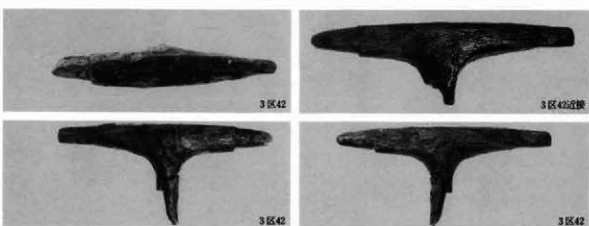
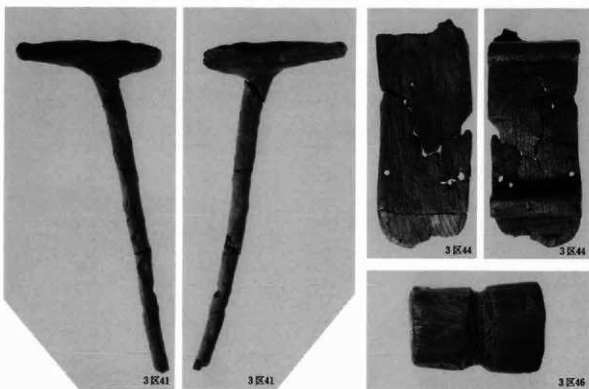
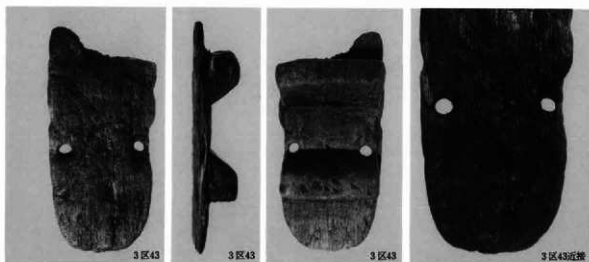
3区7近接

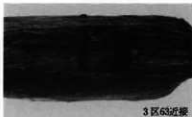








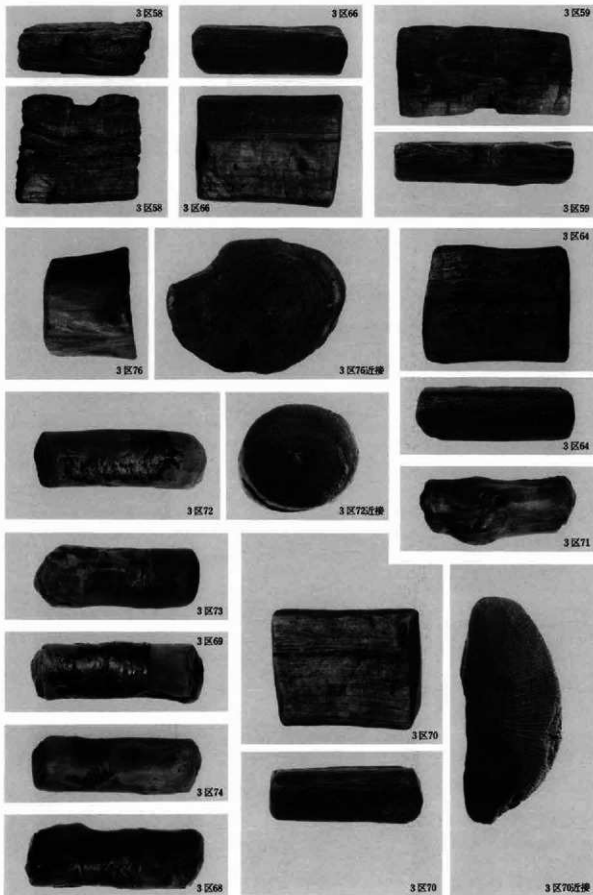




3区60近接

3区61

3区63近接





3区65



3区65



3区67



3区67



3区78



3区78近接



3区78近接



3区77



3区81



3区75



3区75



3区82



3区82



3区80



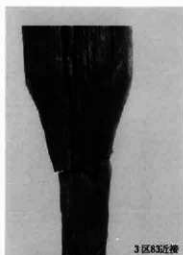
3区79

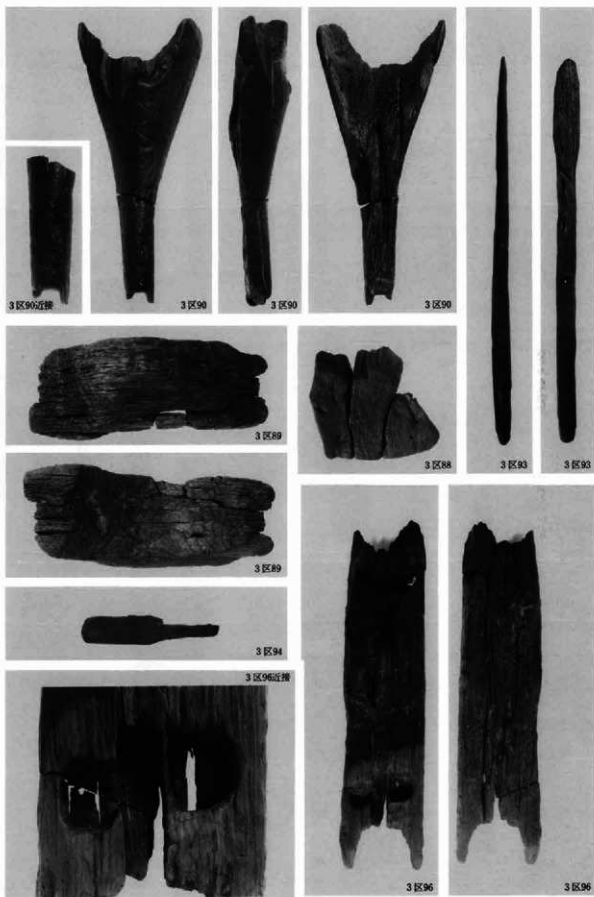


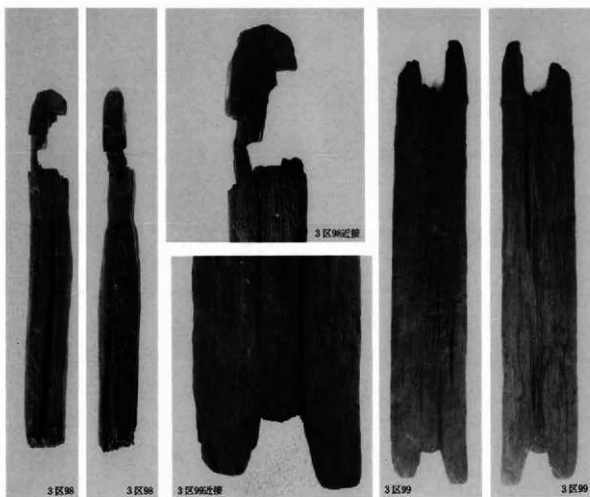
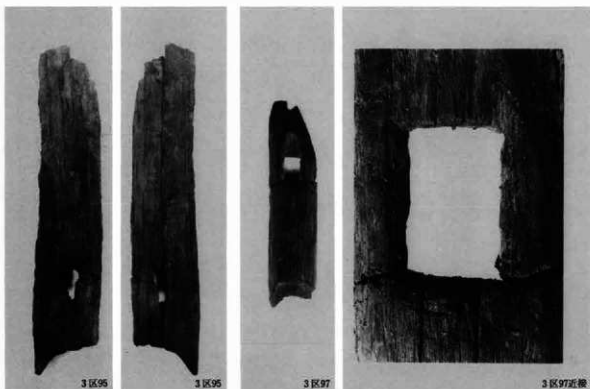
3区85

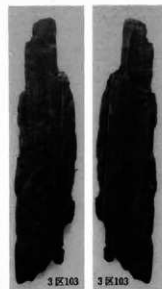
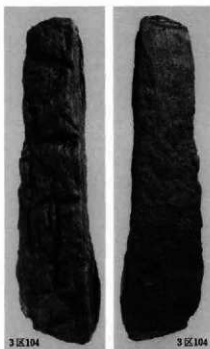
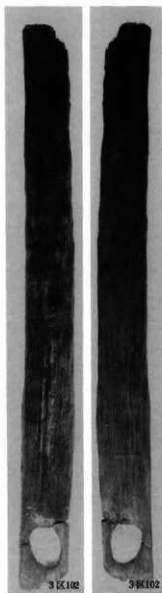
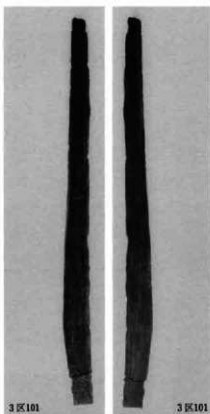
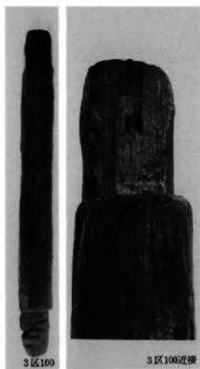


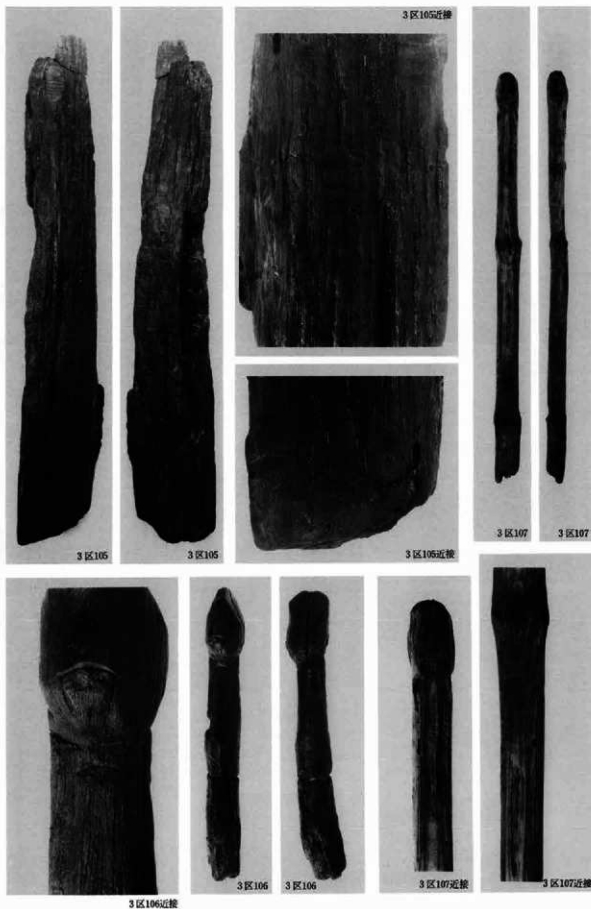
3区85

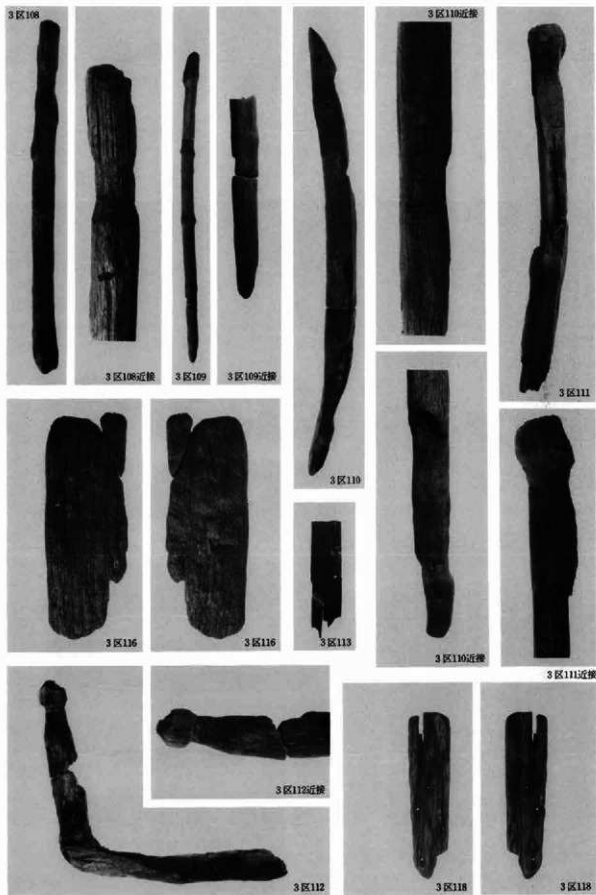








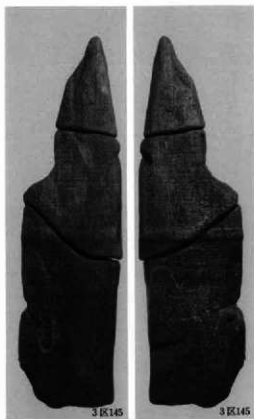


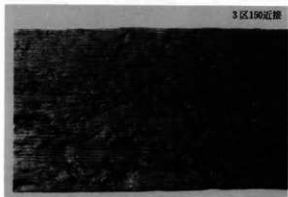
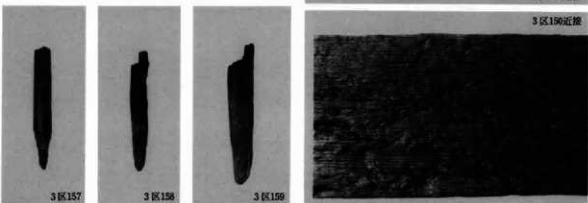
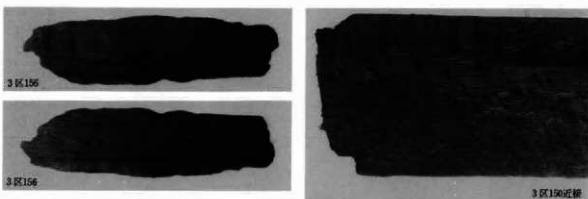
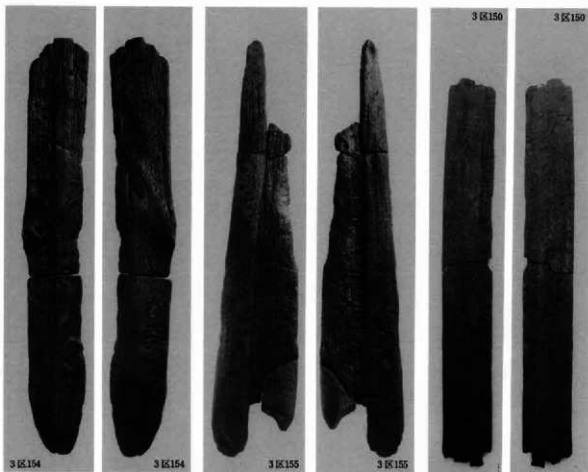


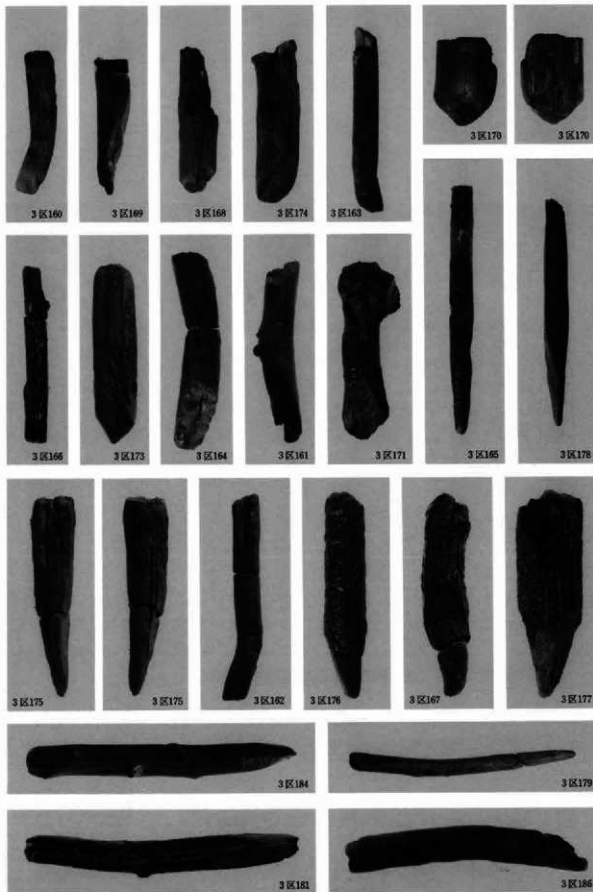


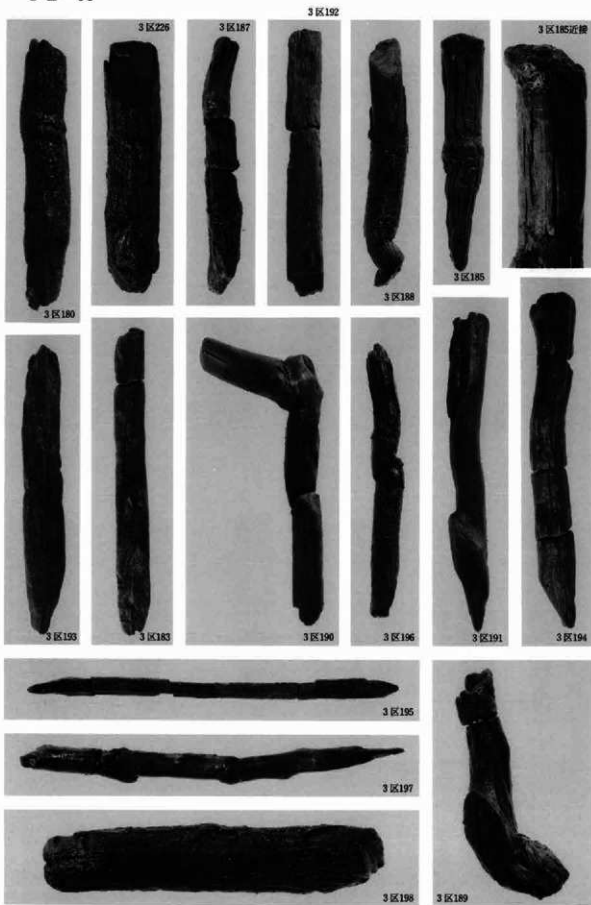


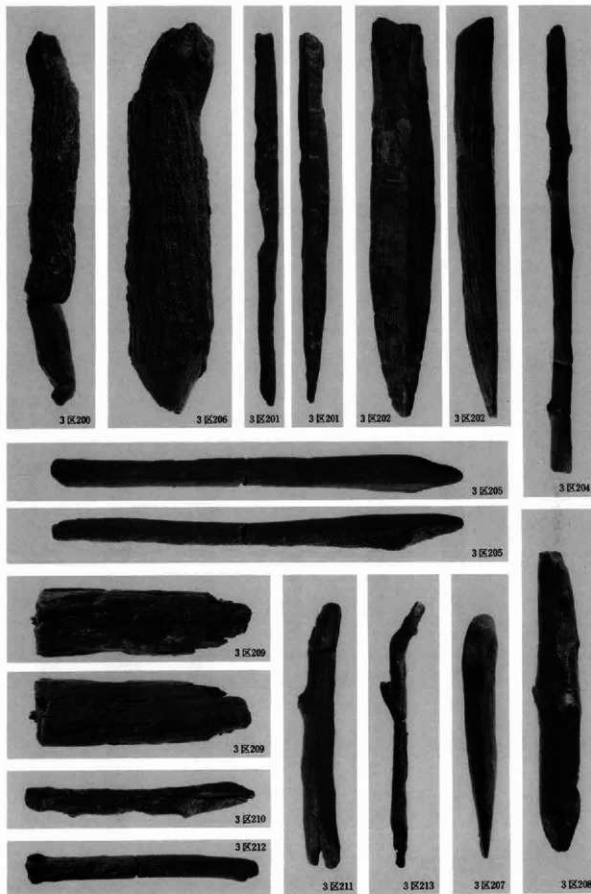


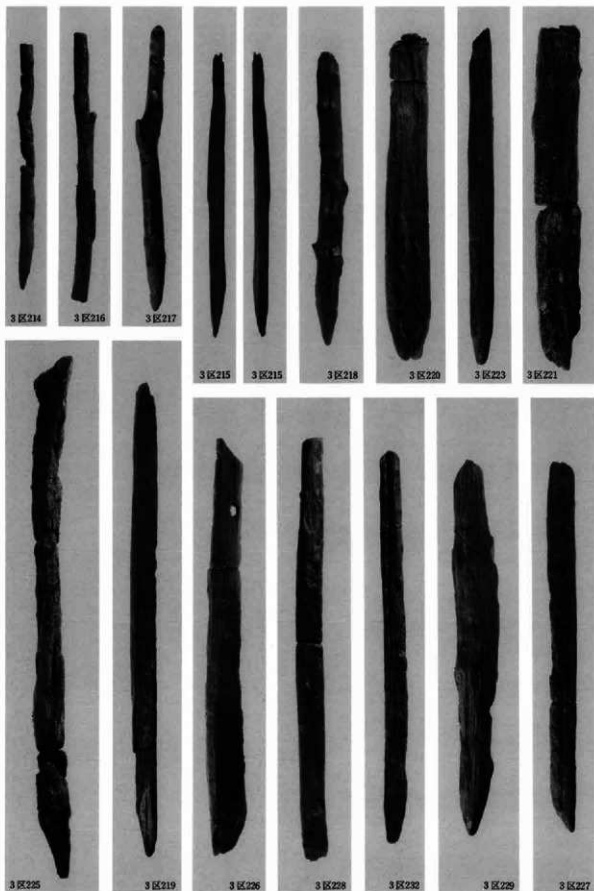












3区235近接



3区230



3区236



3区236



3区235



3区234



3区238



3区238



3区237



3区237



3区240



3区240



3区242



3区247



3区247



3区246



3区246近接



3区245



3区245近接



3区239



3区248



3区248



3区243



3区243



3区243近接



3区244



3区244近接



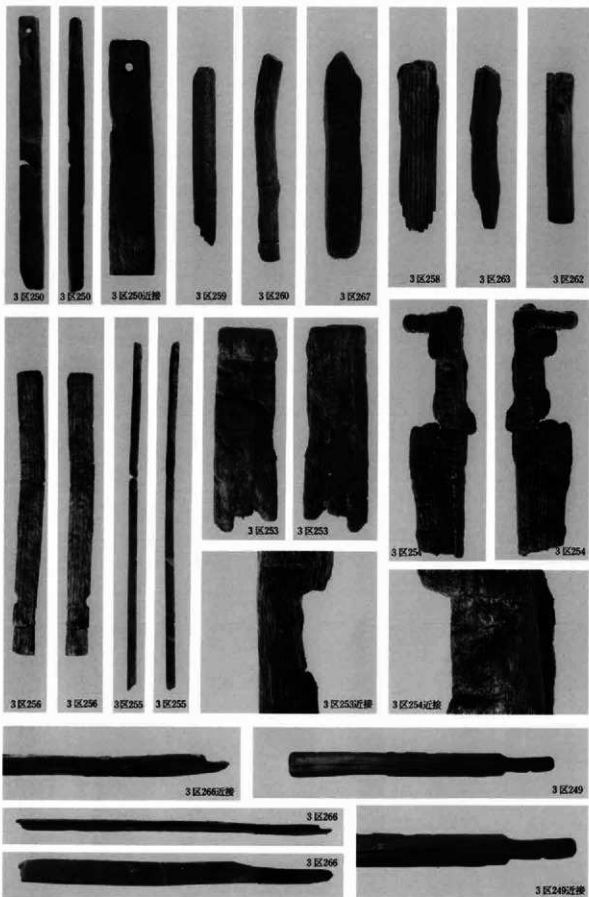
3区233

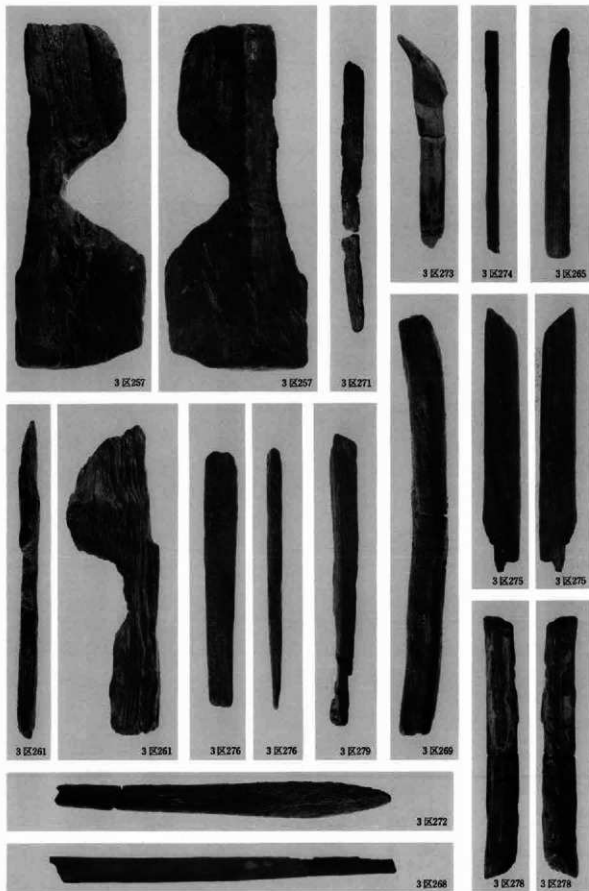


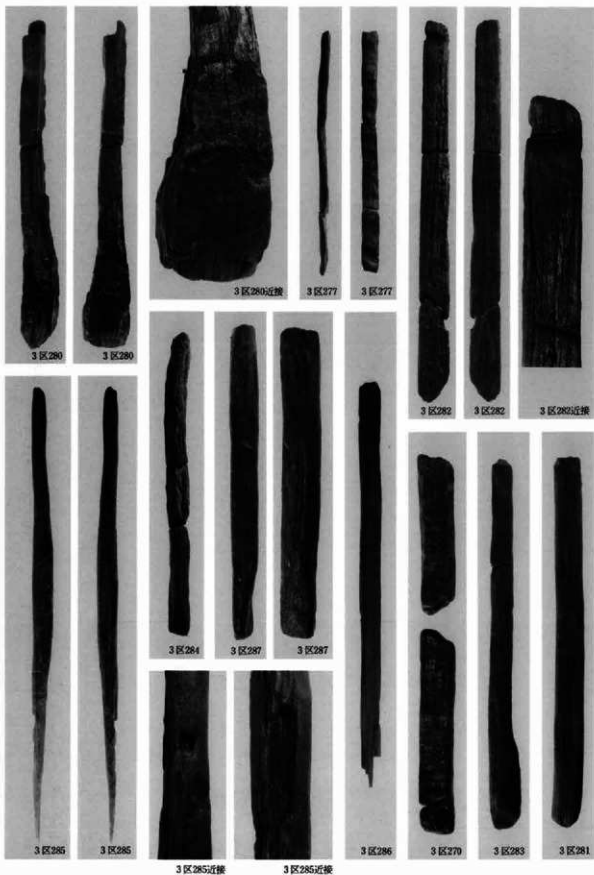
3区233近接

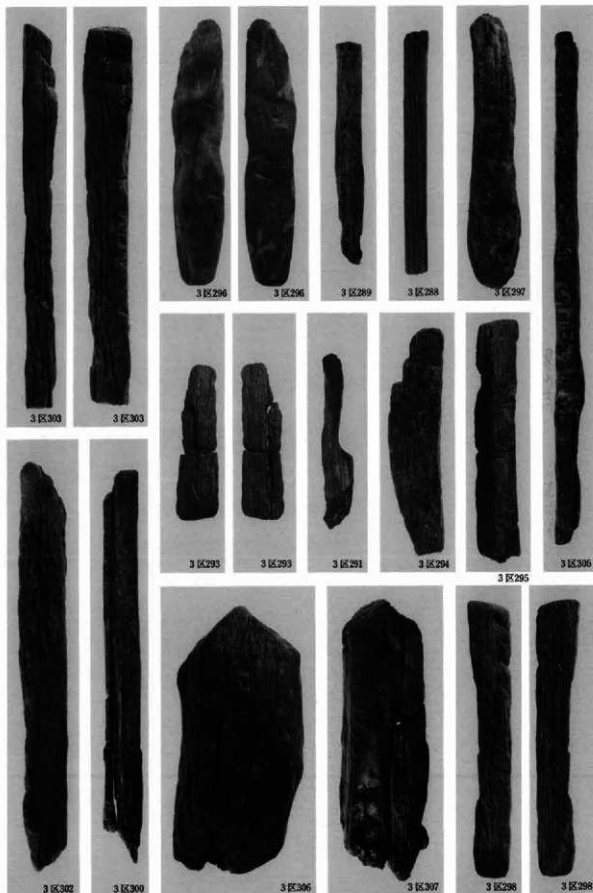


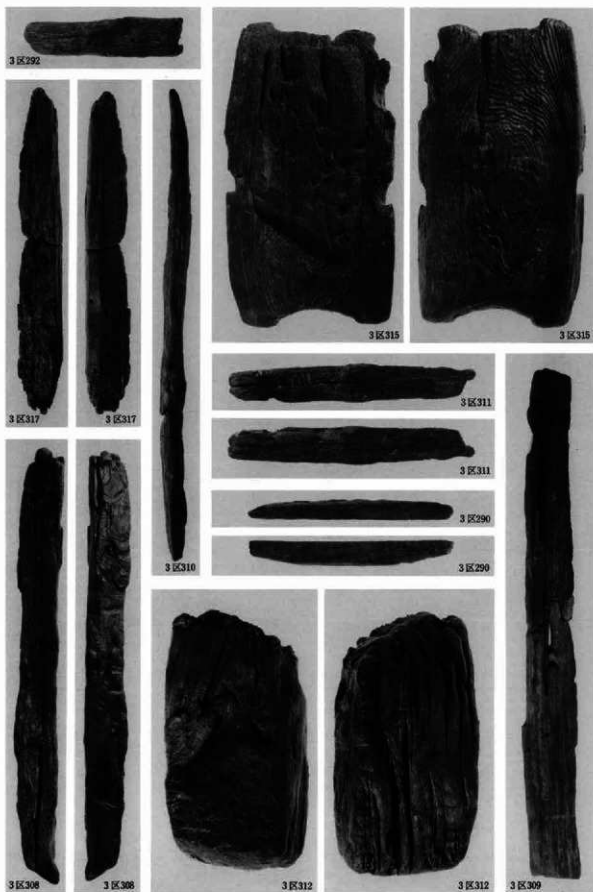
3区231













3 K319



3 K319



3 K321



3 K321



3 K320



3 K320



3 K318



3 K318



3 K322



3 K322



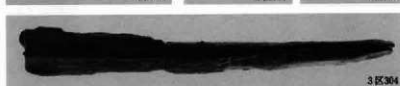
3 K316



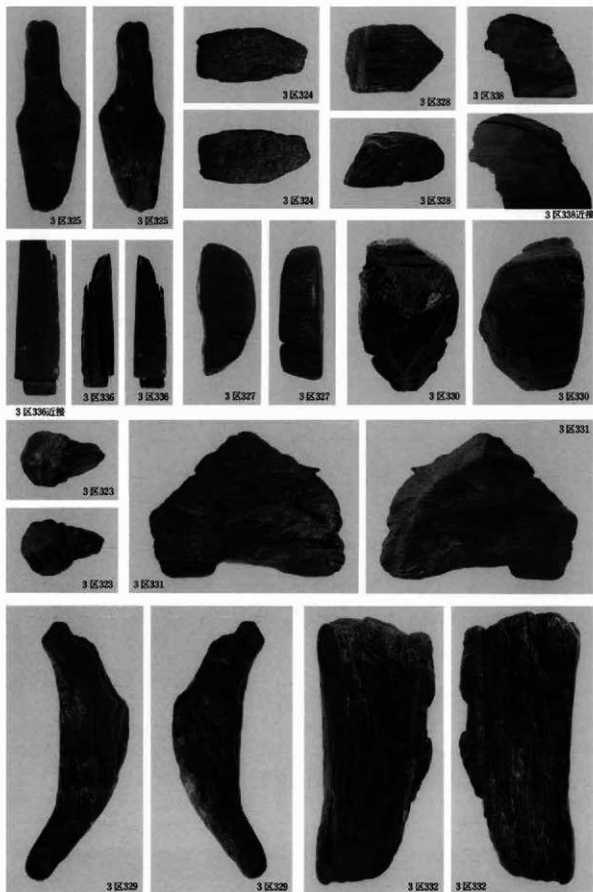
3 K316

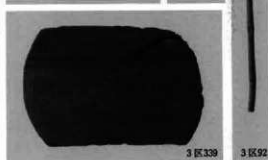
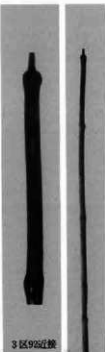
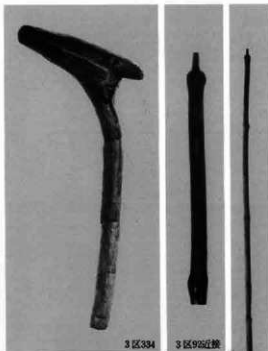
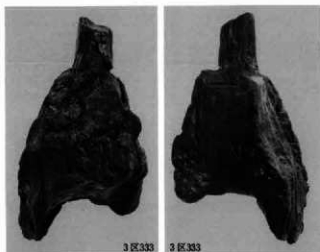


3 K325

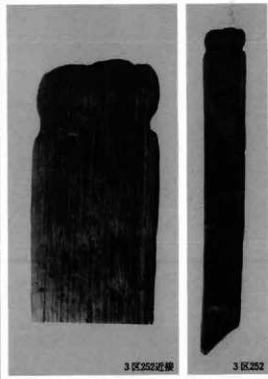
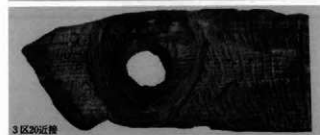
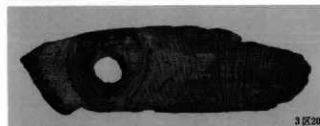


3 K304





3区92



3区252



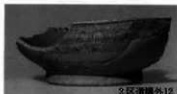
37溝17



37溝36



2区道溝外13



2区道溝外12



44溝46



44溝47



49溝43



旧河道17



49溝42



49溝38



50溝37



49溝44



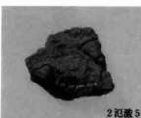
50溝40



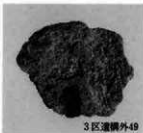
49溝39



2区溝5



2区溝5



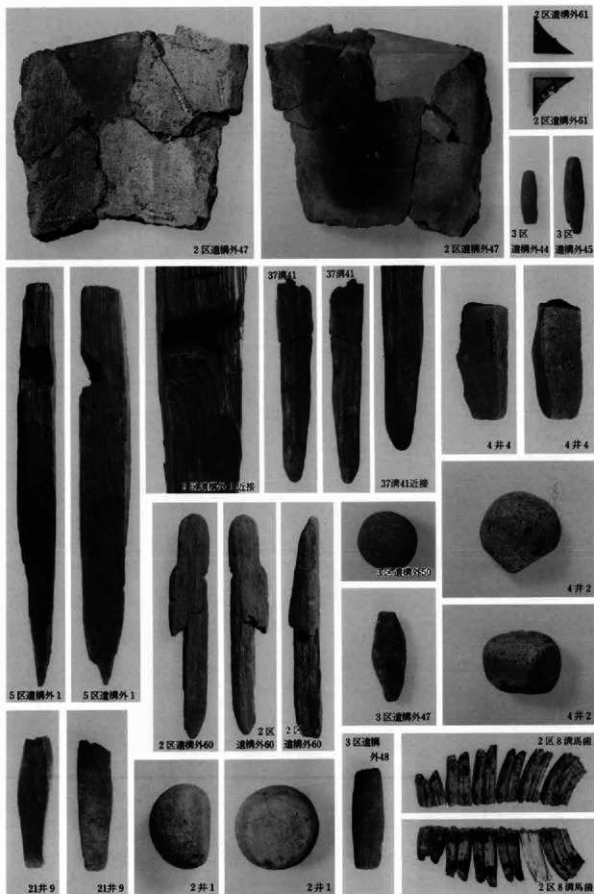
3区道溝外49

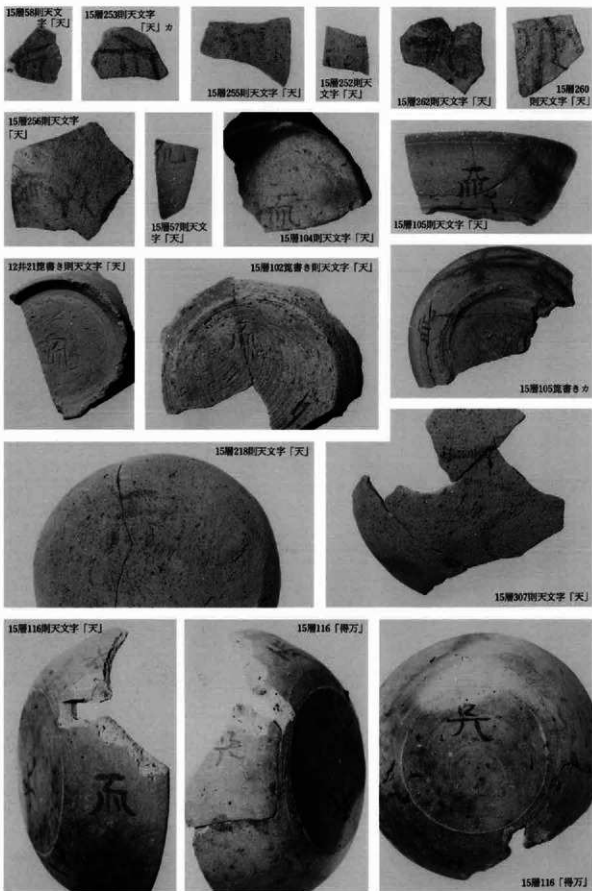


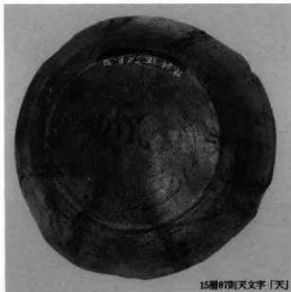
3区道溝外49



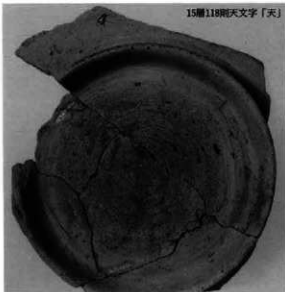
5区旧河道15







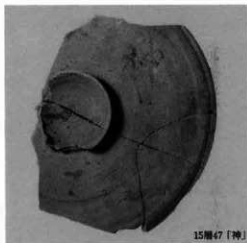
15層67[天文字「天」]



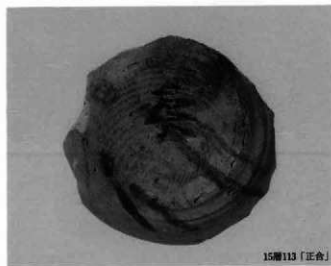
15層118[天文字「天」]



15層46[神]



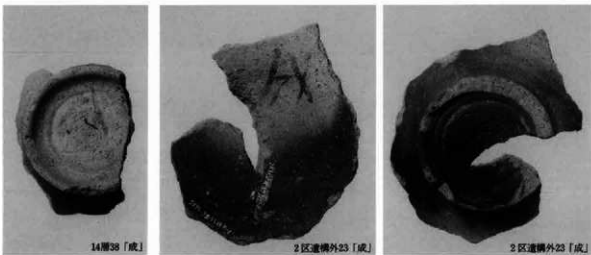
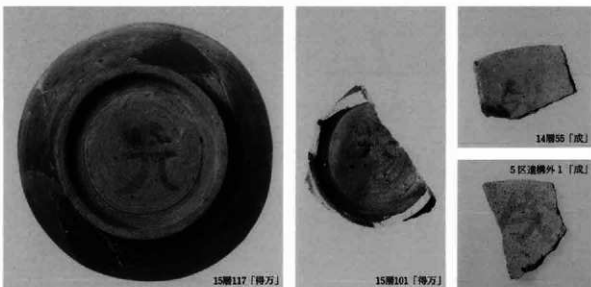
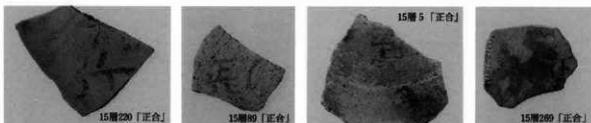
15層47[神]

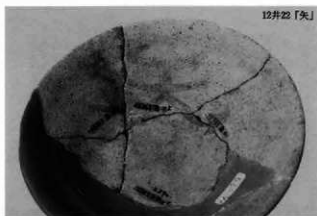


15層113[正合]



15層51[正合]





12井22「矢」



15層107「大」



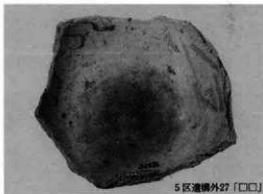
12井22「矢」



15層108「口」



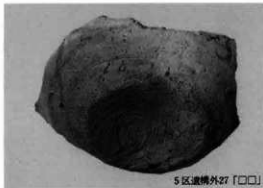
15層55「真里」方



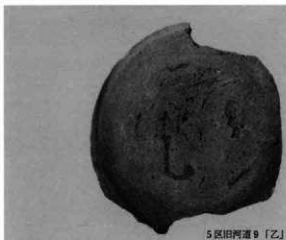
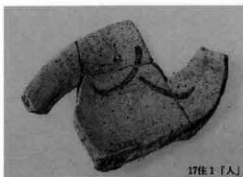
5区遺構外27「口」



2区遺構外27「皿」



5区遺構外27「口」



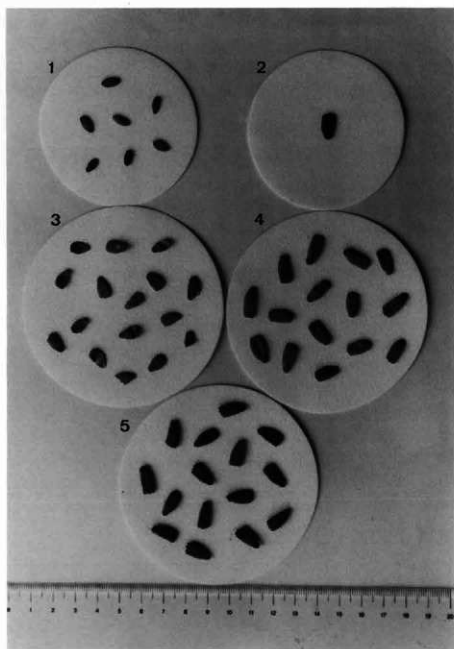


写真1 二之宮宮下東遺跡より出土したウリ科植物の種子
 1：メロン仲間、016-1、2～5：ヒョウタン仲間、2は016-1、
 3は015-2の'しいな'、4は015-2のやや未熟な種子で縫線不明、
 5は017の完形成熟種子で縫線（表面の縦の2本の線）明瞭

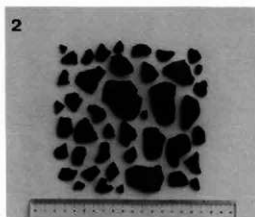
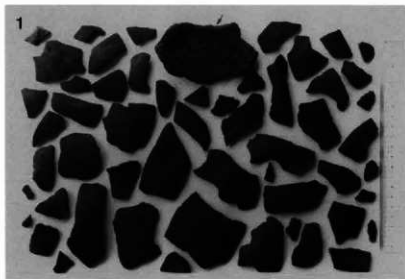


写真2 ヒョウタン仲間の果皮片 1:018,矢印ははなおちのついた果底の位置、この破片のみ裏面(内側)を写す。2:014-1,018と同倍、3:014-1の表皮のカサブタ様もりあがり(2の1部破片の拡大)



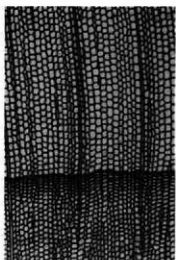
1a. カヤ(横断面) 実測1-53 bar:0.2mm



1b. 同(接線断面) bar:0.2mm



1c. 同(放射断面) bar:0.2mm



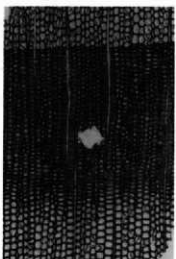
2a. モミ属(横断面) 実測1-23 bar:0.2mm



2b. 同(接線断面) bar:0.5mm



2c. 同(放射断面) bar:0.1mm



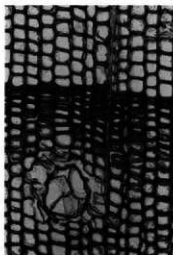
3a. アカマツ(横断面) 実測5-445
bar:0.5mm



3b. 同(接線断面) bar:0.2mm



3c. 同(放射断面) bar:0.1mm



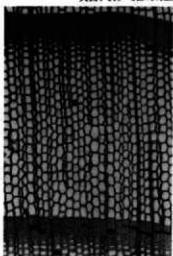
4a. マツ属単管束系属(横断面)
実測4-360 bar:0.5mm



4b. 同(縦線断面) bar:0.5mm



4c. 同(放射断面) bar:0.2mm



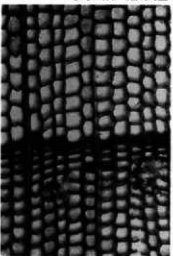
5a. スギ(横断面)
参考5-894 bar:0.5mm



5b. 同(縦線断面) bar:0.5mm



5c. 同(放射断面) bar:0.1mm



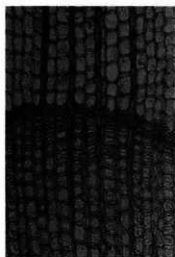
6a. ヒノキ属(横断面) 実測2-122 bar:0.2mm



6b. 同(縦線断面) bar:0.2mm



6c. 同(放射断面) bar:0.1mm



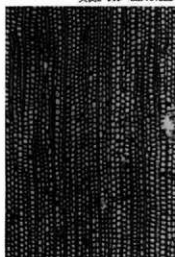
7a. アスナロ(横断面)
実測2-141 bar:0.2mm



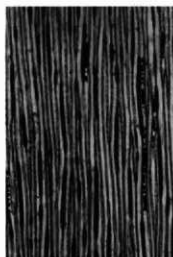
7b. 同(接線断面) bar:0.2mm



7c. 同(放射断面) bar:0.2mm



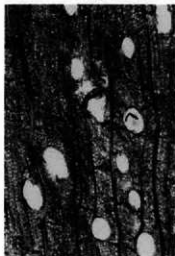
8a. ヤキ属(横断面)
実測2-137 bar:0.5mm



8b. 同(接線断面) bar:0.5mm



8c. 同(放射断面) bar:0.2mm



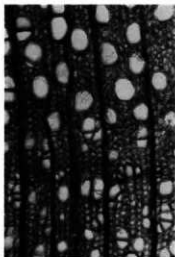
9a. オニグルミ(横断面)
参考10-1373 bar:0.5mm



9b. 同(接線断面) bar:0.5mm



9c. 同(放射断面) bar:0.2mm



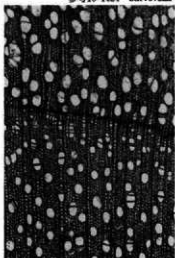
10a. ハコヤナギ属(横断面)
参考10-1424 bar:0.2mm



10b. 同(接線断面) bar:0.5mm



10c. 同(放射断面) bar:0.2mm



11a. ヤナギ属(横断面)
実測3-207 bar:0.5mm



11b. 同(接線断面) bar:0.2mm



11c. 同(放射断面) bar:0.2mm



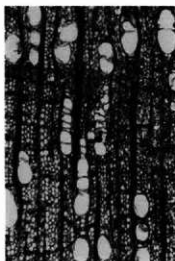
12a. ハンノキ類(横断面)
参考7-1081 bar:0.5mm



12b. 同(接線断面) bar:0.5mm



12c. 同(放射断面) bar:0.2mm



13a. アサダ(横断面)
実測2-130 bar:0.5mm



13b. 同(接線断面) bar:0.5mm



13c. 同(放射断面) bar:0.2mm



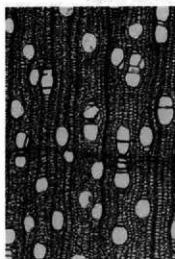
14a. イヌシダ節(横断面)
実測1-40 bar:0.5mm



14b. 同(接線断面) bar:0.2mm



14c. 同(放射断面) bar:0.2mm



15a. カバノキ属(横断面)
実測1-10 bar:0.5mm



15b. 同(接線断面) bar:0.5mm



15c. 同(放射断面) bar:0.5mm



16a. クリ(横断面) 実測1-29 bar:0.5mm



16b. 同(接線断面) bar:0.5mm



16c. 同(放射断面) bar:0.5mm



17a. クスギ属(横断面)
実測1-9 bar:0.5mm



17b. 同(接線断面) bar:0.5mm



17c. 同(放射断面) bar:0.5mm



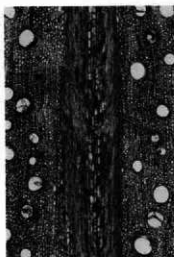
18a. コナラ属(横断面)
実測2-157 bar:0.5mm



18b. 同(接線断面) bar:0.5mm



18c. 同(放射断面) bar:0.5mm



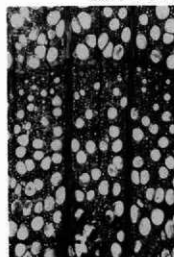
19a. アカガシ部属(横断面)
実例1-1 bar:0.5mm



19b. 同(接線断面) bar:0.5mm



19c. 同(放射断面) bar:0.5mm



20a. ブナ属(横断面)
実例5-2268 bar:0.5mm



20b. 同(接線断面) bar:0.5mm



20c. 同(放射断面) bar:0.2mm



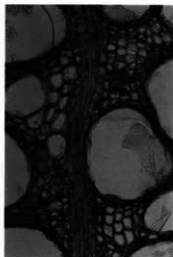
21a. ムクノキ(横断面)
実例1-6 bar:0.5mm



21b. 同(接線断面) bar:0.5mm



21c. 同(放射断面) bar:0.5mm



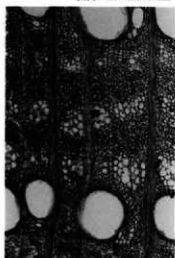
22a.エノキ属(横断面)
実測4-307 bar:0.2mm



22b.同(接線断面) bar:0.5mm



22c.同(放射断面) bar:0.5mm



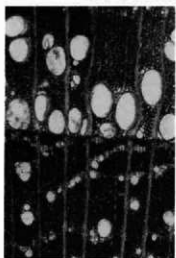
23a.ケヤキ(横断面)
実測1-35 bar:0.5mm



23b.同(接線断面) bar:0.2mm



23c.同(放射断面) bar:0.2mm



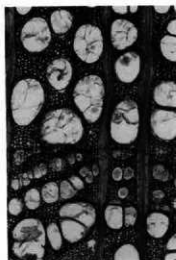
24a.アヤニレ(横断面)
参考13-1755 bar:0.5mm



24b.同(接線断面) bar:0.2mm



24c.同(放射断面) bar:0.2mm



25a. ニレ属(横断面)
実例4-319 bar:0.5mm



25b. 同(縦断面) bar:0.5mm



25c. 同(放射断面) bar:0.5mm



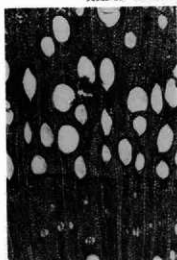
26a. ヤマダツ(横断面)
実例1-25 bar:0.5mm



26b. 同(縦断面) bar:0.2mm



26c. 同(放射断面) bar:0.2mm



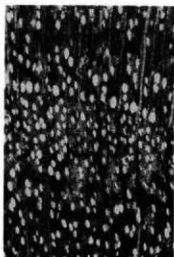
27a. ツワ属(横断面)
参考11-1492 bar:0.5mm



27b. 同(縦断面) bar:0.2mm



27c. 同(放射断面) bar:0.2mm



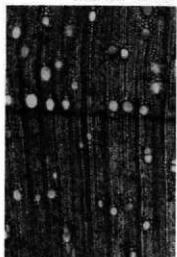
28a. モクレン属 (横断面)
参考16-2009 bar:0.5mm



28b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



28c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



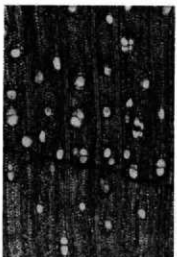
29a. クスノキ科 (横断面)
参考6-970 bar:0.5mm



29b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



29c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



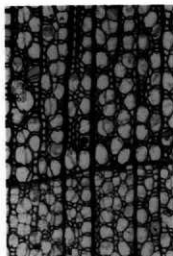
30a. フロモジ属 (横断面)
参考13-1712 bar:0.5mm



30b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



30c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



31a. カツラ(横断面)
参考6-1026 bar:0.5mm



31b. 同(接線断面) bar:0.5mm



31c. 同(放射断面) bar:0.2mm



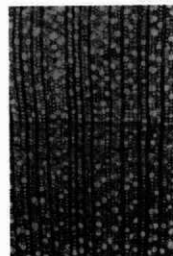
32a. ヤブツバキ(横断面) 実規2-177
bar:0.5mm



32b. 同(接線断面) bar:0.2mm



32c. 同(放射断面) bar:0.2mm



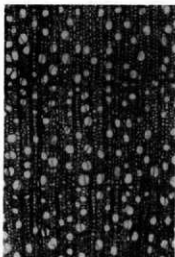
33a. サカキ(横断面) 参考17-2088
bar:0.5mm



33b. 同(接線断面) bar:0.2mm



33c. 同(放射断面) bar:0.1mm



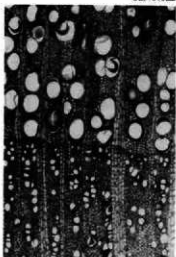
34a. ヒサカキ(横断面) 参考2-594
bar:0.5mm



34b. 同(接線断面) bar:0.5mm



34c. 同(放射断面) bar:0.2mm



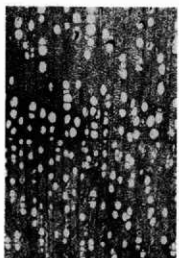
35a. モモ(横断面) 実測1-98 bar:0.5mm



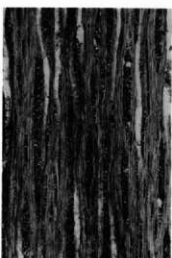
35b. 同(接線断面) bar:0.5mm



35c. 同(放射断面) bar:0.2mm



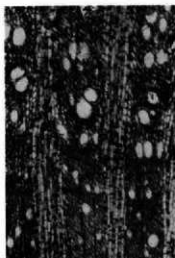
36a. ナクヤキ(横断面) 実測3-203
bar:0.5mm



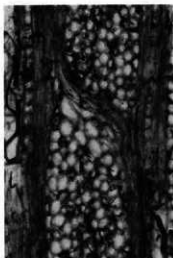
36b. 同(接線断面) bar:0.5mm



36c. 同(放射断面) bar:0.2mm



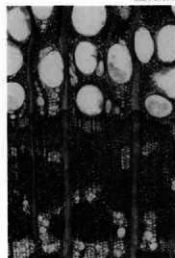
37a. バラ属 (横断面) 参考13-1719
bar:0.5mm



37b. 同 (接線断面) bar:0.2mm



37c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



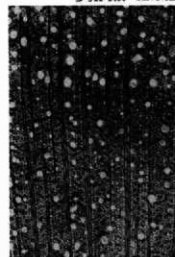
38a. イズエシジュ (横断面)
参考11-1498 bar:0.5mm



38b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



38c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



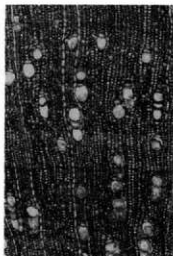
39a. カマツカ (横断面)
実測2-145 bar:0.5mm



39b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



39c. 同 (放射断面) bar:0.2mm



40a. アカメガシワ(横断面)
実測3-206 bar:0.5mm



40b. 同(縦線断面) bar:0.5mm



40c. 同(放射断面) bar:0.2mm



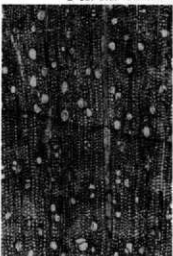
41a. コクサザギ(横断面)
参考10-1436 bar:0.5mm



41b. 同(縦線断面) bar:0.2mm



41c. 同(放射断面) bar:0.2mm



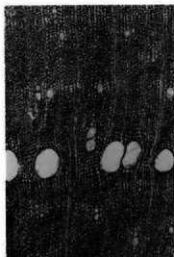
42a. カネダ(横断面)
実測1-93 bar:0.5mm



42b. 同(縦線断面) bar:0.2mm



42c. 同(放射断面) bar:0.2mm



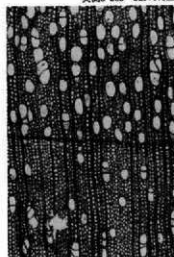
43a. ムクロジ(横断面)
実測3-253 bar:0.5mm



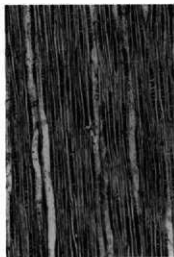
43b. 同(接線断面) bar:0.5mm



43c. 同(放射断面) bar:0.5mm



44a. トチノキ(横断面)
実測2-169 bar:0.5mm



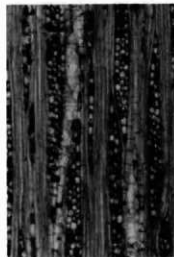
44b. 同(接線断面) bar:0.5mm



44c. 同(放射断面) bar:0.2mm



45a. アズブキ(横断面)
参考2-609 bar:0.5mm



45b. 同(接線断面) bar:0.5mm



45c. 同(放射断面) bar:0.2mm



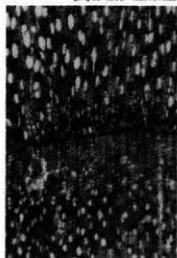
46a. モチノキ属 (横断面)
参考16-1992 bar:0.5mm



46b. 同(接線断面) bar:0.5mm



46c. 同(放射断面) bar:0.2mm



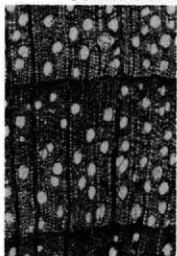
47a. ニシキギ属 (横断面)
参考16-2010 bar:0.5mm



47b. 同(接線断面) bar:0.2mm



47c. 同(放射断面) bar:0.2mm



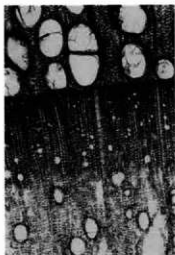
48a. ミツバウツギ (横断面)
参考9-1345 bar:0.5mm



48b. 同(接線断面) bar:0.5mm



48c. 同(放射断面) bar:0.2mm



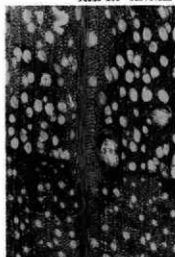
49a. ケンボシ属(横断面)
実測2-200 bar:0.5mm



49b. 同(接線断面) bar:0.5mm



49c. 同(放射断面) bar:0.5mm



50a. グミ属(横断面)
参考11-1465 bar:0.5mm



50b. 同(接線断面) bar:0.5mm



50c. 同(放射断面) bar:0.2mm



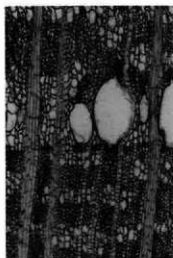
51a. ウコギ属(横断面)
参考2-487 bar:0.5mm



51b. 同(接線断面) bar:0.5mm



51c. 同(放射断面) bar:0.2mm



52a.ハリギリ(横断面)
実測4-396 bar:0.5mm



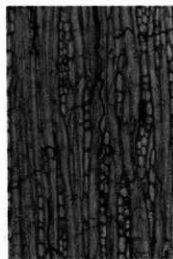
52b.同(接線断面) bar:0.5mm



52c.同(放射断面) bar:0.2mm



53a.エゴノキ属(横断面)
参考10-1360 bar:0.5mm



53b.同(接線断面) bar:0.2mm



53c.同(放射断面) bar:0.2mm



54a.トネリコ属(横断面)
実測5-441 bar:0.5mm



54b.同(接線断面) bar:0.2mm



54c.同(放射断面) bar:0.2mm



55a. ムラサキシキブ属(横断面)
実照1-54 bar:0.5mm



55b. 同(接線断面) bar:0.5mm



55c. 同(放射断面) bar:0.2mm



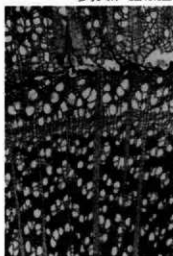
56a. キリ(横断面)
参考1-477 bar:0.5mm



56b. 同(接線断面) bar:0.2mm



56c. 同(放射断面) bar:0.2mm



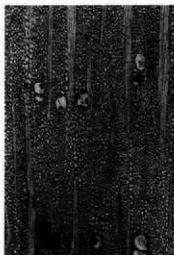
57a. ニフトコ(横断面)
参考13-1732 bar:0.5mm



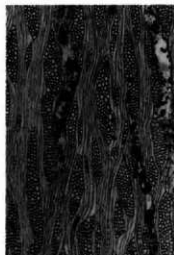
57b. 同(接線断面) bar:0.2mm



57c. 同(放射断面) bar:0.2mm



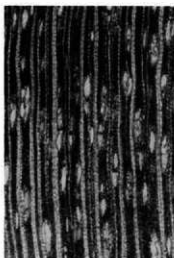
58a. 樹(横断面) 実測3-209 bar:0.5mm



58b. 同(接線断面) bar:0.5mm



58c. 同(放射断面) bar:0.5mm



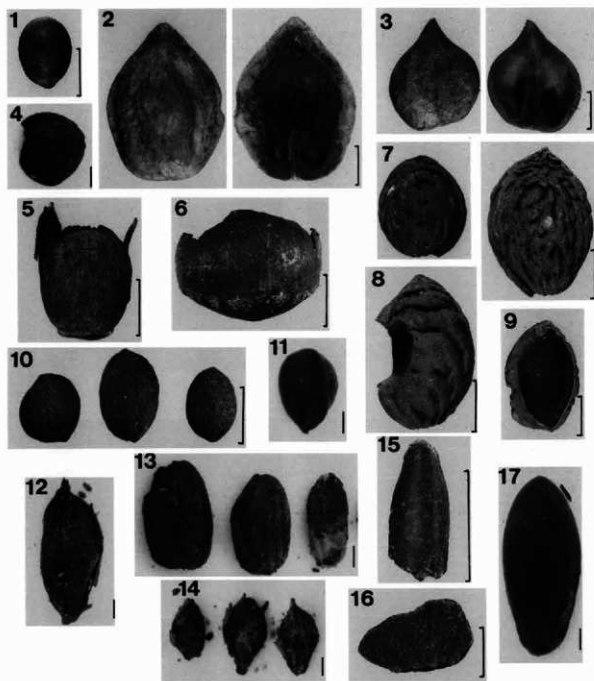
59a. 草本類(横断面)
参考8-1328 bar:0.5mm



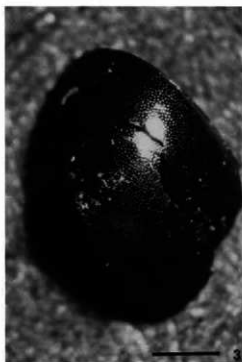
59b. 同(接線断面) bar:0.5mm



59c. 同(放射断面) bar:0.2mm

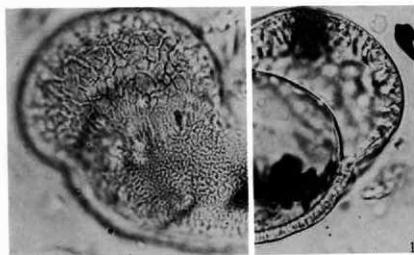


図版 二之宮宮下東遺跡の植物遺体 スケールは1cm、4、11、12、13、14、17は1mm
 1.イヌガヤ、種子(57) 2.オニグルミ、核(44) 3.ヒメグルミ、核(44) 4.カナムグラ、種子(22) 5.コナラ属、
 果実(28) 6.クリ、果実(29) 7-9.モモ、核(29,34,44) 10.サクラ属、核(27) 11.サンショウ、種子(28) 12.
 イネ、炭化種(65) 13.イネ、炭化胚乳(66) 14.アワ、炭化果実(65) 15.ヒョウタン、種子(27) 16.ヒョウタ
 ン、果皮(34) 17.ウリ属メロン仲間、種子(34)



図版 二之宮宮下東遺跡の甲虫の顕微鏡写真

- 1.セマルガムシ 左精進 scale bar 0.5mm 2.セマルガムシ 左精進 scale bar 1mm
3.セマルガムシ 左精進 scale bar 1mm 4.セマルガムシ 左精進 scale bar 0.25mm



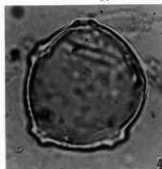
マツ属



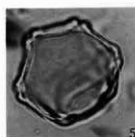
2
マツ属



イテアド科-イソガヤ科-ヒノキ科



クマシダ属-アサダ属



5
ヒノキ科



6
クリ属



7a
アカガシ属



7b
アカガシ属



8a
コナラ属



8b
コナラ属



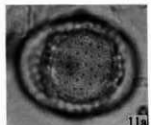
9a
タケニガサ属



9b
タケニガサ属



10
カヤツリグサ科

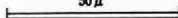


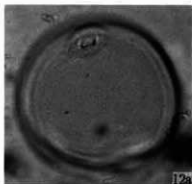
11a
オナモミ属



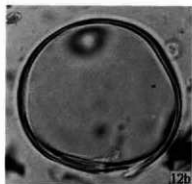
11b
オナモミ属

50 μ





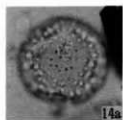
イネ科



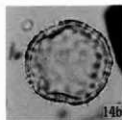
イネ科



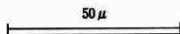
サジオモグカ属



オモグカ属

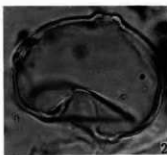


オモグカ属

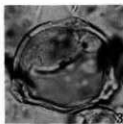




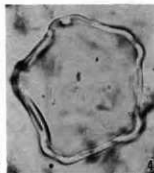
イチネウ科-イヌガヤ科-ヒノキ科



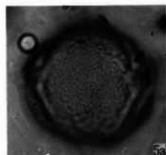
クマシダ属-アサダ属



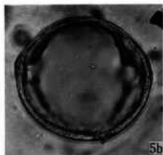
カバノキ属



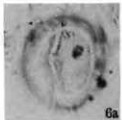
ハンノキ属



イヌブナ



イヌブナ



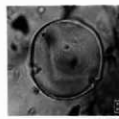
アカガシ亜属



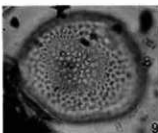
アカガシ亜属



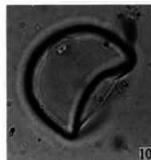
コナラ亜属



タワ科



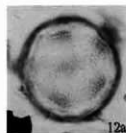
ガマ属



イネ科



カヤツリガサ科



12a
サジオモガカ属



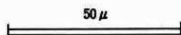
12b
サジオモガカ属



13
アカザ科

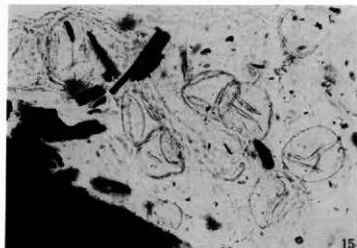


14
アブラナ科



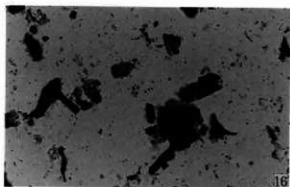
50 μ

PL-144



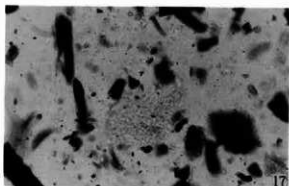
15

イネ科



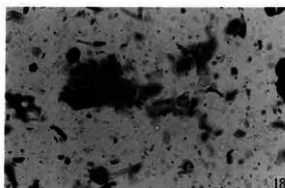
16

状況写真



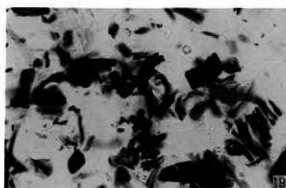
17

状況写真



18

状況写真



19

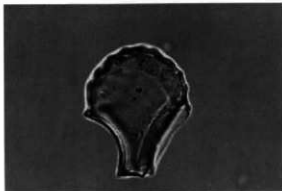
状況写真

100 μ





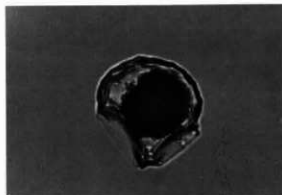
A地点 10B イネ



A地点 13 イネ



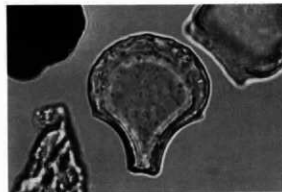
A地点 25 イネ



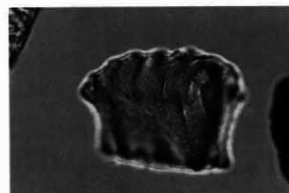
C地点 6 イネ



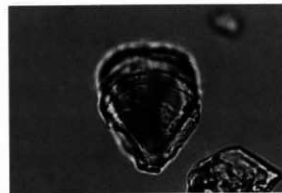
C地点 9 イネ



D地点 11 イネ



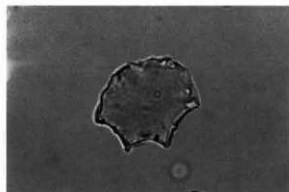
A地点 5 タケ亜科 (ネザツ節)



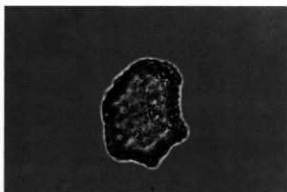
A地点 5 タケ亜科 (ネザツ節)



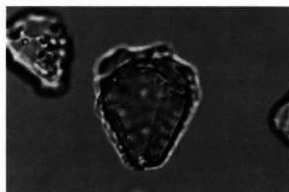
C地点 7 タケタニ科 (ネゾゾ類)



A地点 15 タケタニ科 (クマゾウ属)



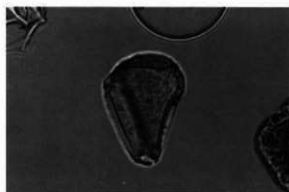
E地点 16-1 タケタニ科 (クマゾウ属)



E地点 23-2 タケタニ科



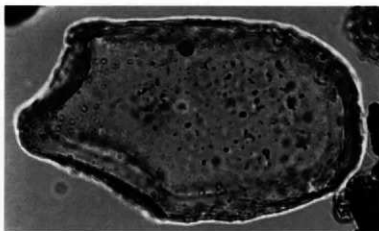
E地点 16-1 ウシクサ族



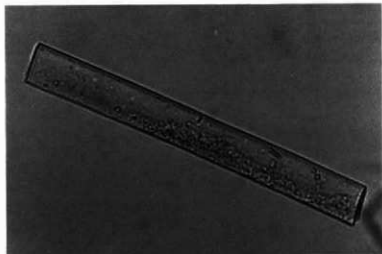
E地点 16-2 ウシクサ族



A地点 2 シバタ属



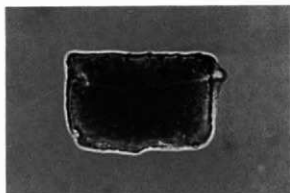
E地点 16-2 ヨシ属



A地点 27 不明 (棒状)



A地点 27 不明A



A地点 10B 不明C



E地点 18 不明C



E地点 23-2 不明 表皮毛起源

(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第163集

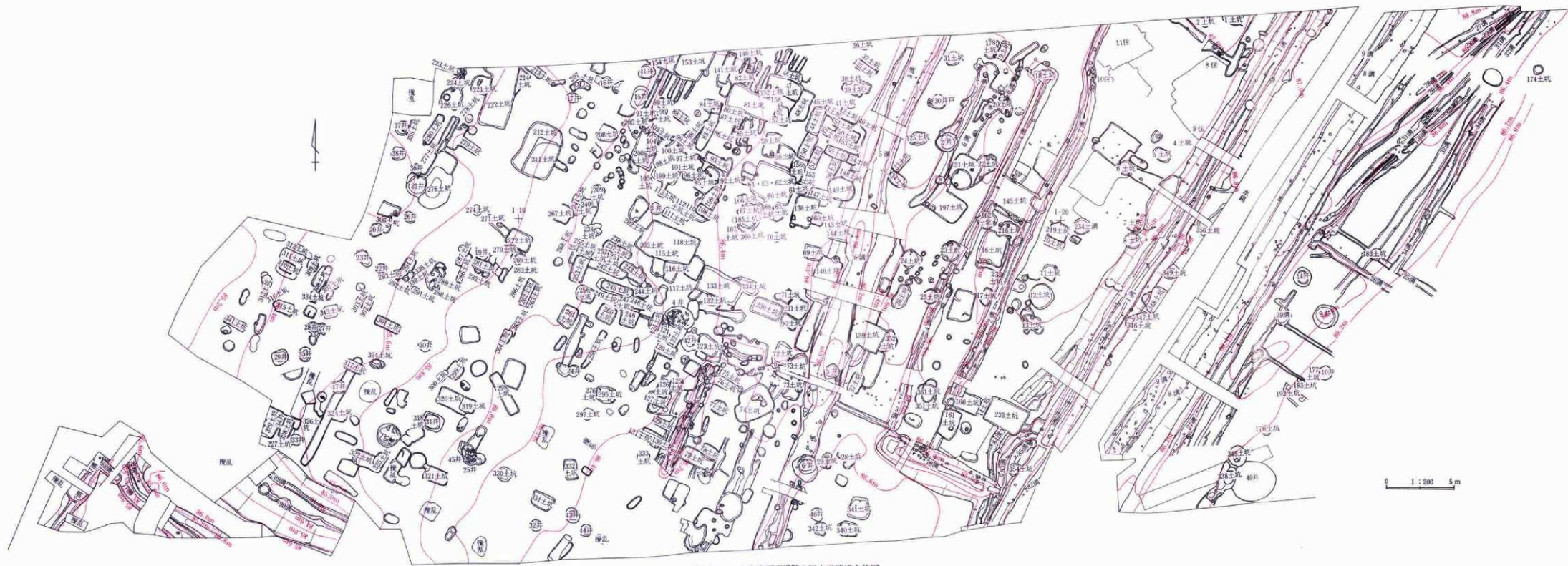
二之宮宮下東遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工
事に伴う埋蔵文化財調査報告書

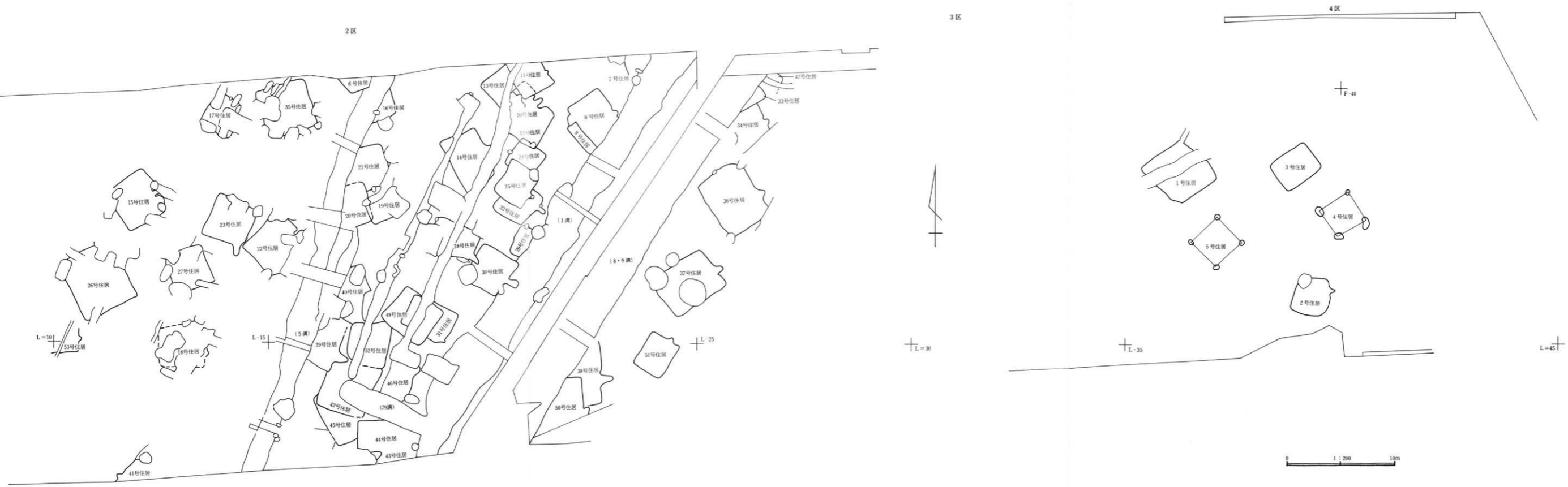
平成6年3月14日 印刷
平成6年3月23日 発行

編集・発行／(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0278)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



付图1 二之宮宮下東道路2区中世遺構全体図

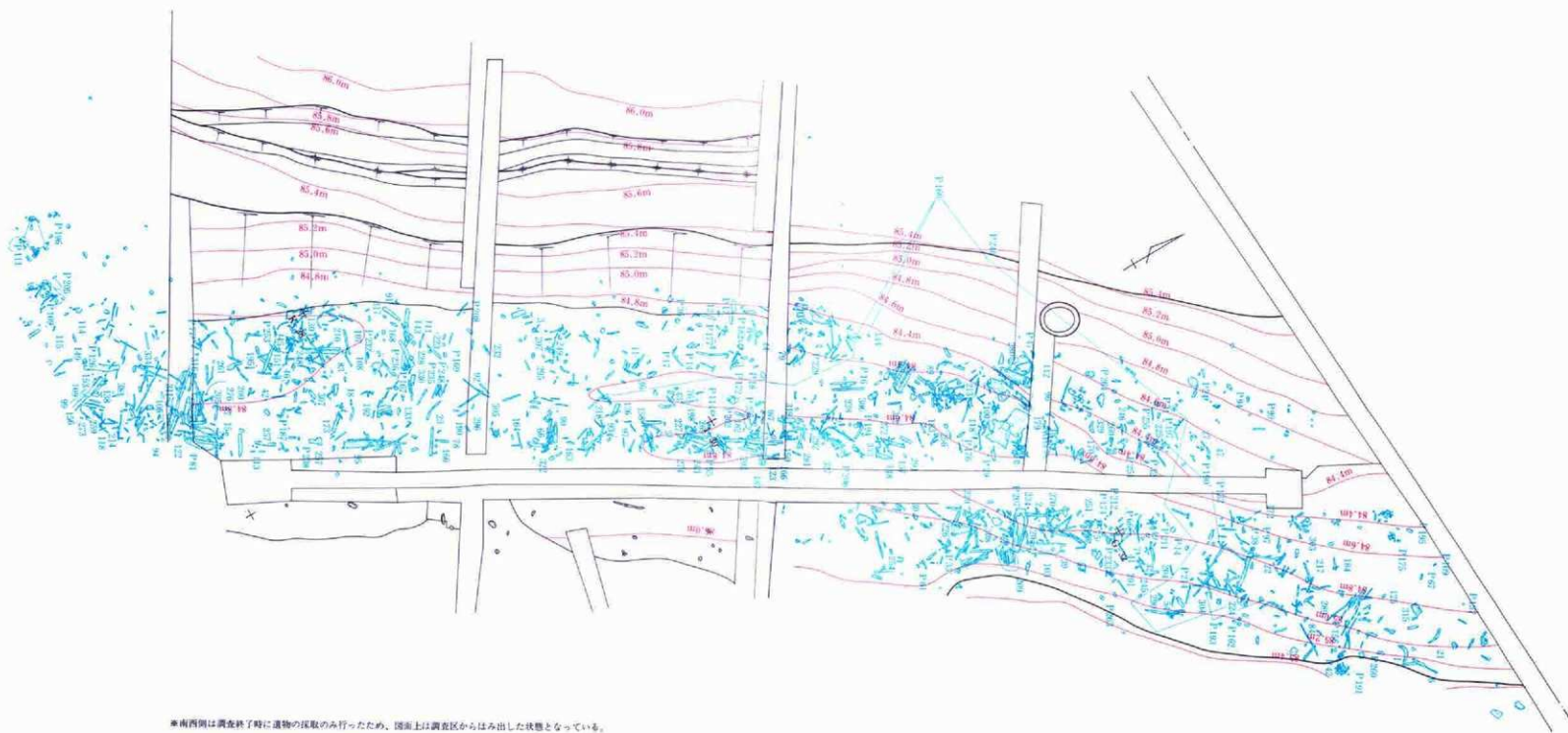


付图2 二之宮宮下東遺跡居住位置図



付図3 二之宮宮下東道跡3区15層全体図

0 1:100 3m



※南西側は調査終了時に遺物の採取のみ行ったため、図面上は調査区からはみ出した状態となっている。

0 1:100 3m

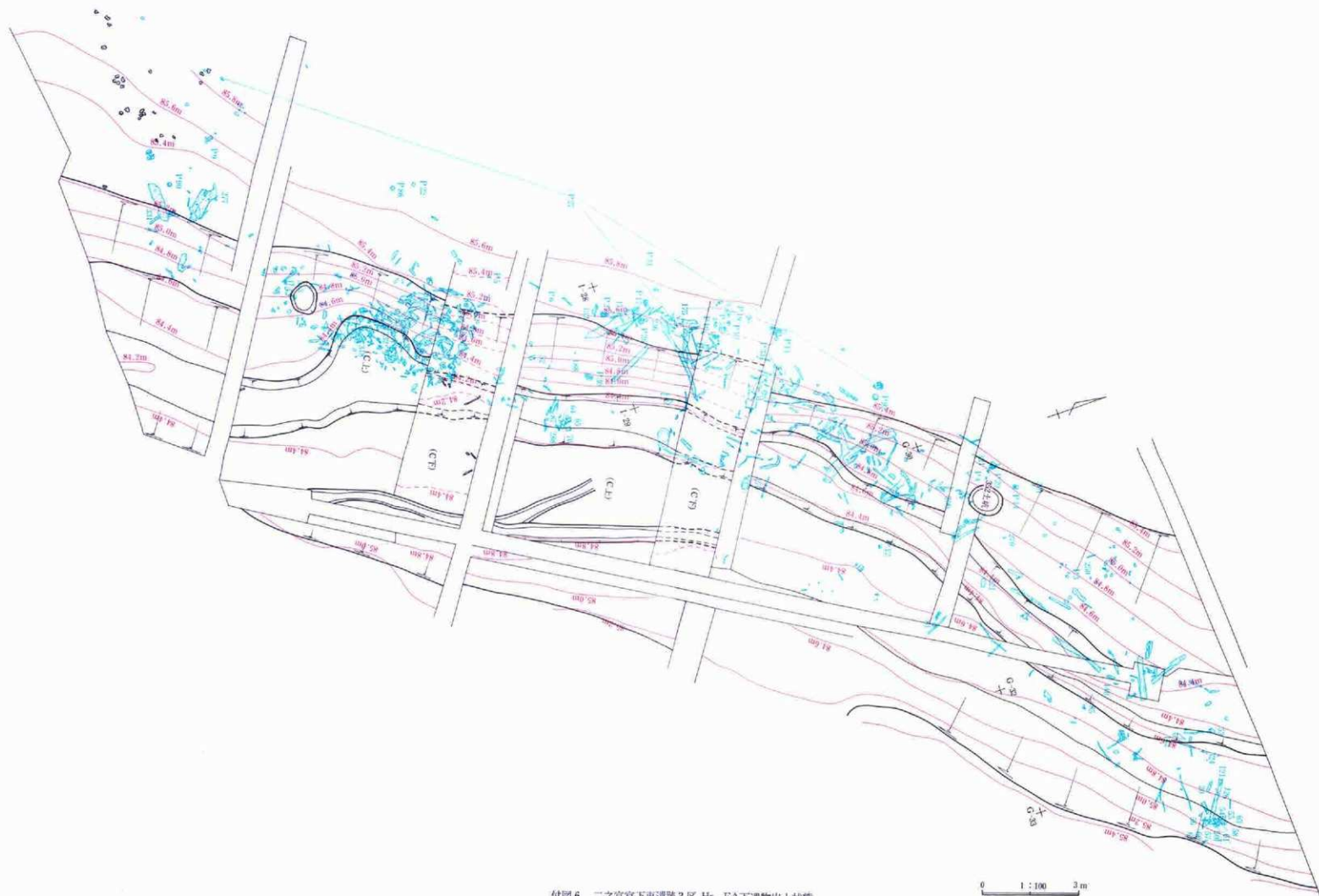
付図4 二之宮宮下東道跡3区16層遺物出土状態(1回目)



※南西側は調査終了時に遺物の採取のみ行ったため、図面上は調査区からはみ出した状態となっている。

0 1 100 3 m

付図5 二之宮宮下東道跡3区16層遺物出土状態（2回目）



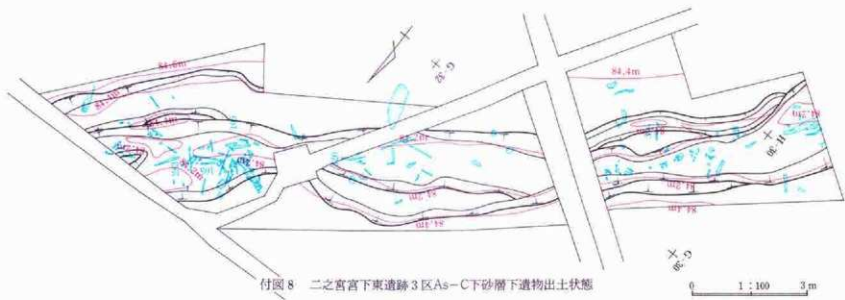
付図6 二之宮宮下東通路3区 H1-FA下遺物出土状態

0 1:100 3m

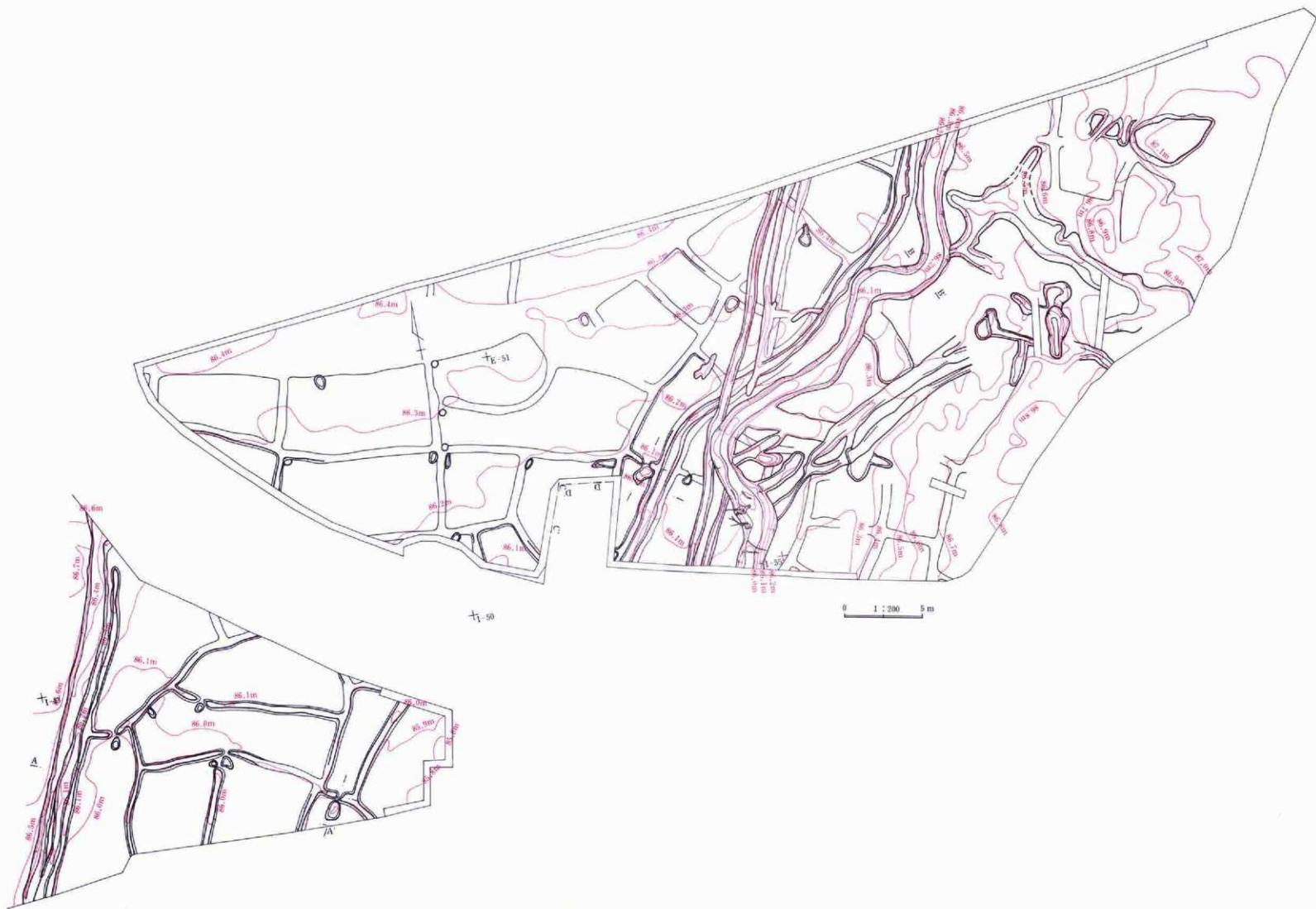


付圖7 二之宮宮下東遺跡3区As-C下遺物出土状態

0 1 : 100 3m



付図8 二之宮高下東遺跡3区A5-C下砂層下遺物出土状態



付図9 二之宮宮下東通跡5区As-B下水田



付图10 二之宮宮下東遺跡5区As-B下水田下溝群

0 1:200 5m